

東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VI

(佐原地区3)

大稲塚遺跡・棒木台遺跡・毛内遺跡・綱原遺跡
綱原屋敷跡遺跡・多田綱原遺跡・出口遺跡

1991

日本道路公団東京第一建設局
財団法人 千葉県文化財センター

東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VI

(佐原地区3)

おおいなづか^{おおいなづか}遺跡・ぼうぎだい^{ぼうぎだい}遺跡・もうち^{もうち}遺跡・つなはら^{つなはら}遺跡
つなはら^{つなはら}やしきあと^{やしきあと}遺跡・なだつなはら^{なだつなはら}遺跡・でぐち^{でぐち}遺跡

1991

日本道路公団東京第一建設局
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

下総台地北西部に位置する佐原市は、北方を東流する利根川に流れ込む幾つかの小河川によって複雑に開析された小台地が形成されています。この地域は、昔から自然環境に恵まれていて、河川沿いの台地上には旧石器時代から中世にいたる多くの遺跡が所在しています。

日本道路公団は、全国的な高速自動車国道網整備の一環として東関東自動車道（市川，潮来間）を計画し、既に市川，成田間は新東京国際空港関連区間として供用されているところですが、さらに成田，潮来間（30.2km）の延長工事計画が具体化されたため、千葉県教育委員会では、同事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、日本道路公団をはじめ関係諸機関と協議を重ねてまいりました。その結果路線の変更等でできるだけ現状保存を図る一方、路線内にかかる遺跡については、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置をとることで協議が整い、昭和53年4月から財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施してまいりました。

調査は昭和59年3月に終了し、計57か所の遺跡から多くの貴重な資料を得ることができました。現在はこれらの各遺跡の整理事業を実施しており、成田・大栄地区および佐原地区の一部については既に「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書」ⅠからⅤとして刊行しております。

この度、佐原市に所在する7遺跡の整理事業が終了し、「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書」Ⅵとして刊行する運びとなりました。本書に収載した遺跡のうち、毛内遺跡では縄文時代前期後半から中期初頭にかけての住居跡群と良好な土器群が検出されました。特に、多量に出土した土製耳飾りは当時の社会を解明するうえで非常に貴重な資料であります。また、綱原遺跡では古墳時代中期の古墳群とそれに伴う祭祀遺構が調査されており、この地域では数少ない調査例として注目されます。他に、大稲塚遺跡では縄文時代早期の炉穴群、綱原屋敷跡遺跡では香取神宮に関係すると思われる中世の牧、出口遺跡では旧石器時代の多量の石器等多くの良好な資料が検出されました。

本書が学術資料はもとより、歴史に対する理解を深める教育資料として広く活用されることを望む次第です。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまで種々御指導いただいた千葉県教育委員会をはじめ、日本道路公団東京第一建設局、佐原市教育委員会、地元関係諸機関の御指導、御協力にお礼申し上げますとともに、酷暑酷暑の中、調査に協力された多くの調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

平成3年3月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 岩瀬 良三

凡 例

1. 本書は、日本道路公団東京第一建設局による東関東自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、東関東自動車道建設に伴う調査として、日本道路公団東京第一建設局の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが行った。
3. 本書に収載した遺跡（市町村コード-遺跡コード）は、大稲塚遺跡（209-015）、棒木台遺跡（209-018）、毛内遺跡（209-020）、綱原遺跡（209-002）、綱原屋敷跡遺跡（209-023）、多田綱原遺跡（209-024）、出口遺跡（209-025）の7遺跡である。
4. 発掘調査に関わる各年度の担当職員および調査遺跡は、下記のとおりである。

昭和53年度 調査担当 調査部長 西野 元 班長 種田斉吾
調査研究員 高橋賢一 斎木 勝
調査遺跡 綱原古墳群（綱原遺跡）

昭和57年度 調査担当 調査部長 白石竹雄，部長補佐 岡川宏道，天野 努，班長 斎木
勝，調査研究員 池田大助，高橋博文，羽二生保，岡田光弘
調査遺跡 大稲塚遺跡（一次），棒木台遺跡，綱原屋敷跡遺跡，多田綱原遺跡

昭和58年度 調査担当 調査部長 白石竹雄，部長補佐 岡川宏道，根本 弘，班長 斎木
勝，主任調査研究員 池田大助，調査研究員 高橋博文，栗田則久，
沢野 弘，岡田光弘，矢野紀子
調査遺跡 大稲塚遺跡（二次），毛内遺跡，綱原遺跡（二次），綱原屋敷跡遺跡，
出口遺跡
6. 整理作業および報告書の作成作業に関わる各年度の担当職員および整理遺跡は、下記のとおりである。

昭和61年度 整理担当 調査部長 鈴木道之助，部長補佐 岡川宏道，班長 高橋賢一，主
任調査研究員 栗田則久，調査研究員 岡田光弘（4月1日～9月
30日），藤岡孝司（10月1日～3月31日）

昭和62年度 整理担当 調査部長 堀部昭夫，部長補佐 古内 茂，班長 矢戸三男，主任
調査研究員 栗田則久，調査研究員 石橋宏克

昭和63年度 整理担当 調査部長 堀部昭夫，部長補佐 古内 茂，班長 矢戸三男，主任
調査研究員 栗田則久
7. 本書の執筆は、縄文時代を岡田・石橋が担当し、古墳時代以降および編集を栗田が行った。

また、旧石器時代および縄文時代の石器については新田浩三・矢本節朗・落合章雄が担当し、縄文土器の一部について藤崎芳樹・上守秀明の協力を得た。なお、文責については本文目次に明記してある。

8. 発掘調査から本書の刊行にいたるまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課，日本道路公団東京第一建設局，同佐原工事事務所，同市原工事事務所，佐原市教育委員会の関係各位，並びに，原田享二氏はじめ多くの方々の御指導，御協力を賜りました。また，当センター職員有志，調査補助員の方々にも協力をいただきました。併せて深く謝意を表わす次第であります。

目 次

序 文

凡 例

序 章	(栗田)	1
第1節 立地と歴史的環境		1
第2節 各遺跡の調査概要		4
第3節 調査の方法		6
第1章 大稲塚遺跡 (No.38、38-1)・棒木台遺跡 (No.39)		8
第1節 縄文時代		8
1. 炉穴	(石橋・栗田)	8
2. 土坑	(矢本)	10
第2節 グリッド出土遺物	(石橋)	32
第2章 毛内遺跡 (No.40)	(岡田)	47
第1節 縄文時代		47
1. 竪穴住居		47
2. 土坑		67
3. 石器	(新田)	76
4. 土製品		90
第2節 グリッド出土土器		94
第3章 綱原遺跡 (No.41)		129
第1節 縄文時代		129
1. 炉穴	(石橋・栗田)	129
2. 竪穴状遺構	(石橋・栗田)	133
3. 土坑		133
4. グリッド出土遺物	(石橋・落合)	142
第2節 古墳時代	(栗田)	162
1. 古墳		162

2. 鉄製品	187
3. D4区祭祀遺構	198
4. 竪穴住居跡	200
5. グリッド出土土器	205
第3節 歴史時代	(栗田) 209
第4章 網原屋敷跡遺跡 (No.42)	211
第1節 縄文時代	(藤崎・上守) 211
1. 土坑	211
2. グリッド出土遺物	221
第2節 古墳時代	(栗田) 237
1. 竪穴住居跡	237
第3節 中世	(栗田) 241
1. 土手と溝	241
2. 掘立柱建物跡	244
3. 土坑	246
第5章 多田網原遺跡 (No.43)	255
第1節 旧石器時代	(新田) 255
第2節 縄文時代	(上守) 266
第3節 その他の遺構	(栗田) 270
第6章 出口遺跡 (No.44)	275
第1節 旧石器時代	(新田) 275
第2節 その他の遺構と遺物	(栗田) 322
終章 調査の成果	326
第1節 出口遺跡第1文化層出土の楔形石器について	(新田) 326
第2節 大稲塚遺跡の石鏃製作技術について	(矢本) 342
第3節 毛内遺跡の成果	(岡田) 343
1. 毛内遺跡における縄文土器の様相(前期後半から中期初頭を中心として)	344
2. 毛内遺跡の集落について(遺物分布を中心として)	351
第4節 網原遺跡の成果	(栗田) 356

1. 古墳群の年代	356
2. 古墳と祭祀	357
第5節 網原屋敷跡遺跡における中世牧について (栗田)	358

挿図目次

第 1 図 遺跡位置図	3
第 2 図 遺跡周辺地形図	5
第 3 図 グリッド分割と確認グリッド設定図	7
第 4 図 大稲塚遺跡地形図	9
第 5 図 大稲塚遺跡確認グリッド配置図	10
第 6 図 大稲塚遺跡遺構配置図	11
第 7 図 炉穴 (1)	12
第 8 図 炉穴 (2)	13
第 9 図 土坑	14
第 10 図 004号土坑遺物出土状況図	15
第 11 図 002号炉穴, 004号土坑出土土器	17
第 12 図 006号炉穴出土土器	18
第 13 図 009・010号炉穴出土土器	19
第 14 図 021号炉穴出土土器	20
第 15 図 022号炉穴出土土器	22
第 16 図 023・024号炉穴出土土器	23
第 17 図 033号炉穴出土土器 (1)	25
第 18 図 033号炉穴出土土器 (2)	26
第 19 図 025・030~032・035号炉穴, 042号溝出土土器	28
第 20 図 004号土坑碎片長・幅・厚・幅分布図	29
第 21 図 004号土坑出土石器	30
第 22 図 006・008・033号炉穴, 041号溝出土石器	31
第 23 図 グリッド出土土器 (1)	33
第 24 図 グリッド出土土器 (2)	34
第 25 図 グリッド出土土器 (3)	36
第 26 図 グリッド出土土器 (4)	37
第 27 図 グリッド出土土器 (5)	38

第 28 図	グリッド出土土器 (6)	39
第 29 図	グリッド出土土器 (7)	40
第 30 図	グリッド出土土器 (8)	41
第 31 図	グリッド出土石器 (1)	43
第 32 図	グリッド出土石器 (2)	44
第 33 図	グリッド出土石器 (3)	45
第 34 図	毛内遺跡地形図	46
第 35 図	毛内遺跡グリッド配置図	47
第 36 図	毛内遺跡遺構配置図	48
第 37 図	001～003号竪穴住居跡	50
第 38 図	004～008号竪穴住居跡	52
第 39 図	009～014号竪穴住居跡	55
第 40 図	001～003号竪穴住居跡出土土器	57
第 41 図	003号竪穴住居跡出土土器	58
第 42 図	003～005号竪穴住居跡出土土器	59
第 43 図	005・006号竪穴住居跡出土土器	61
第 44 図	006～008号竪穴住居跡出土土器	63
第 45 図	008～010・013・014号竪穴住居跡出土土器	65
第 46 図	014号竪穴住居跡出土土器	66
第 47 図	101～109号土坑	68
第 48 図	110～113・115～122号土坑	71
第 49 図	125～133・135・136号土坑	73
第 50 図	土坑出土土器 (1)	75
第 51 図	土坑出土土器 (2)	77
第 52 図	石鏃・チャート分布図	79
第 53 図	安山岩・礫分布図	80
第 54 図	石鏃の種類	81
第 55 図	出土石器 (1)	82
第 56 図	出土石器 (2)	83
第 57 図	出土石器 (3)	84
第 58 図	出土石器 (4)	86
第 59 図	出土石器 (5)	87
第 60 図	出土石器 (6)	88

第 61 図	土製品分布図	91
第 62 図	竪穴住居跡出土土製品	91
第 63 図	グリッド出土土製品 (1)	92
第 64 図	グリッド出土土製品 (2)	93
第 65 図	グリッド出土土器分布図 (全体)	94
第 66 図	グリッド出土土器分布図 (I~III群)	96
第 67 図	グリッド出土土器分布図 (IV~VII群)	97
第 68 図	グリッド出土土器 (1)	98
第 69 図	グリッド出土土器 (2)	99
第 70 図	グリッド出土土器 (3)	100
第 71 図	グリッド出土土器 (4)	102
第 72 図	グリッド出土土器 (5)	103
第 73 図	グリッド出土土器 (6)	105
第 74 図	グリッド出土土器 (7)	107
第 75 図	グリッド出土土器 (8)	110
第 76 図	グリッド出土土器 (9)	111
第 77 図	グリッド出土土器 (10)	113
第 78 図	グリッド出土土器 (11)	115
第 79 図	グリッド出土土器 (12)	116
第 80 図	グリッド出土土器 (13)	117
第 81 図	グリッド出土土器 (14)	119
第 82 図	グリッド出土土器 (15)	121
第 83 図	グリッド出土土器 (16)	122
第 84 図	グリッド出土土器 (17)	124
第 85 図	グリッド出土土器 (18)	125
第 86 図	グリッド出土土器 (19)	127
第 87 図	グリッド出土ミニチュア土器	128
第 88 図	網原遺跡周辺地形図	130
第 89 図	網原遺跡地形図	131
第 90 図	網原遺跡遺構配置図	132
第 91 図	炉穴・土坑	134
第 92 図	竪穴状遺構	135
第 93 図	F P 1・F P 2号炉穴出土土器	136

第 94 図	101号炉穴出土土器	138
第 95 図	101・103号炉穴，102号土坑出土土器	139
第 96 図	103号炉穴出土土器	140
第 97 図	104号炉穴出土土器	141
第 98 図	009号竪穴状遺構出土土器（1）	143
第 99 図	009号竪穴状遺構出土土器（2）	144
第 100 図	009号竪穴状遺構出土土器（3）	145
第 101 図	グリッド出土土器（1）	146
第 102 図	グリッド出土土器（2）	148
第 103 図	グリッド出土土器（3）	149
第 104 図	グリッド出土土器（4）	150
第 105 図	グリッド出土土器（5）	151
第 106 図	グリッド出土土器（6）	152
第 107 図	グリッド出土土器（7）	154
第 108 図	グリッド出土土器（8）	155
第 109 図	グリッド出土土器（9）	156
第 110 図	グリッド出土土器（10）	158
第 111 図	グリッド出土土器（11）	159
第 112 図	グリッド出土石器（1）	160
第 113 図	グリッド出土石器（2）	163
第 114 図	001・003号墳墳丘	164
第 115 図	001号墳墳丘断面図	166
第 116 図	002号墳墳丘・主体部	167
第 117 図	002号墳墳丘断面図	168
第 118 図	002号墳旧表土上面遺物出土状況	168
第 119 図	003号墳墳丘断面図	169
第 120 図	003号墳主体部	169
第 121 図	004号墳墳丘	170
第 122 図	004号墳墳丘断面図	171
第 123 図	005号墳旧表土面及び主体部位置図	172
第 124 図	005号墳墳丘断面図	173
第 125 図	005号墳主体部	173
第 126 図	005号墳旧表土上面遺物出土状況	174

第 127 図	001・002・004号墳出土土器	177
第 128 図	005号墳出土土器	178
第 129 図	005号墳旧表土上面出土土器（1）	180
第 130 図	005号墳旧表土上面出土土器（2）	181
第 131 図	005号墳旧表土上面出土土器（3）	183
第 132 図	005号墳旧表土上面出土土器（4）	185
第 133 図	005号墳旧表土上面出土土器（5）	186
第 134 図	古墳出土直刀	189
第 135 図	古墳出土鉄鏃	190
第 136 図	古墳出土刀子	192
第 137 図	002・005号墳旧表土上面出土石製模造品（1）	194
第 138 図	005号墳旧表土上面出土石製模造品（2）	195
第 139 図	白玉法量分布図	196
第 140 図	005号墳旧表土上面出土石製模造品（3）	197
第 141 図	D 4 区祭祀遺構	199
第 142 図	D 4 区祭祀遺構出土土器	200
第 143 図	007・008号竪穴住居跡	201
第 144 図	007・008号竪穴住居跡出土土器	204
第 145 図	008号竪穴住居跡出土土器	206
第 146 図	グリッド出土土器	208
第 147 図	火葬墓及び出土土器	210
第 148 図	網原屋敷跡遺跡・多田網原遺跡周辺地形図	212
第 149 図	網原屋敷跡遺跡遺構配置図	213
第 150 図	土坑	215
第 151 図	112号土坑出土土器	217
第 152 図	114号土坑出土遺物	218
第 153 図	122号土坑出土土器	220
第 154 図	122・123号土坑出土石器	221
第 155 図	グリッド出土土器（1）	223
第 156 図	グリッド出土土器（2）	224
第 157 図	グリッド出土土器（3）	225
第 158 図	グリッド出土土器（4）	227
第 159 図	グリッド出土土器（5）	229

第 160 図	グリッド出土土器 (6)	231
第 161 図	グリッド出土土器 (7)	233
第 162 図	グリッド出土土器 (8)	234
第 163 図	グリッド出土石器	236
第 164 図	グリッド出土石製品	237
第 165 図	002・003号竪穴住居跡	239
第 166 図	002・003号竪穴住居跡出土遺物	240
第 167 図	牧関係遺構配置図及び土手断面図	242
第 168 図	501～504号掘立柱建物跡	245
第 169 図	粘土敷土坑	247
第 170 図	その他の土坑	249
第 171 図	掘立柱建物跡・土坑出土遺物	250
第 172 図	溝出土土器	252
第 173 図	グリッド出土土器	253
第 174 図	多田綱原遺跡遺構配置図	254
第 175 図	基本層序	255
第 176 図	第 1 ブロック器種別分布図	256
第 177 図	第 1 ブロック出土石器	257
第 178 図	第 2 ブロック器種別分布図	260
第 179 図	第 2 ブロック母岩別分布図	261
第 180 図	第 2 ブロック出土石器 (1)	262
第 181 図	第 2 ブロック出土石器 (2)	263
第 182 図	第 2 ブロック出土石器 (3)	264
第 183 図	第 2 ブロック出土石器 (4)	265
第 184 図	グリッド出土土器 (1)	267
第 185 図	グリッド出土土器 (2)	269
第 186 図	表採資料	270
第 187 図	1・2号溝土層断面図, 101号土坑	271
第 188 図	出口遺跡地形図	273
第 189 図	出口遺跡遺構配置図	274
第 190 図	基本層序	275
第 191 図	第 1 文化層遺物出土状況 (全体図)	276
第 192 図	石器分類模式図	278

第193 図	第1文化層焼土跡	279
第194 図	第1ブロック(第1文化層)器種別分布図	280
第195 図	第1ブロック(第1文化層)石材別分布図	281
第196 図	第1文化層第1ブロック出土石器(1)	283
第197 図	第1文化層第1ブロック出土石器(2)	284
第198 図	第1文化層第1ブロック出土石器(3)	285
第199 図	第2ブロック(第1文化層)器種別分布図	287
第200 図	第2ブロック(第1文化層)石材別分布図	288
第201 図	第1文化層第2ブロック出土石器(1)	289
第202 図	第1文化層第2ブロック出土石器(2)	290
第203 図	第1文化層第2ブロック出土石器(3)	291
第204 図	第1文化層第2ブロック出土石器(4)	292
第205 図	第1文化層第2ブロック出土石器(5)	293
第206 図	第1文化層第2ブロック出土石器(6)	294
第207 図	第3ブロック(第1文化層)器種別分布図	297
第208 図	第3ブロック(第1文化層)石材別分布図	298
第209 図	第1文化層第3ブロック出土石器	299
第210 図	第4ブロック(第1文化層)器種別分布図	300
第211 図	第4ブロック(第1文化層)石材別分布図	301
第212 図	第1文化層第4ブロック出土石器(1)	302
第213 図	第1文化層第4ブロック出土石器(2)	303
第214 図	第5ブロック(第1文化層)器種別分布図	305
第215 図	第5ブロック(第1文化層)石材別分布図	307
第216 図	第1文化層第5ブロック出土石器(1)	309
第217 図	第1文化層第5ブロック出土石器(2)	310
第218 図	第1文化層第5ブロック出土石器(3)	311
第219 図	第1文化層第5ブロック出土石器(4)	312
第220 図	第1文化層第5ブロック出土石器(5)	313
第221 図	第1文化層第5ブロック出土石器(6)	314
第222 図	第1文化層第5ブロック出土石器(7)	315
第223 図	第1文化層ブロック外出石器	317
第224 図	第6ブロック(第2文化層)器種別分布図	319
第225 図	第2文化層第6ブロック出土石器	319

第226 図	表採資料	320
第227 図	鉱物組成を示すブロックダイアグラム	322
第228 図	トータルステーションを用いた整理過程	325
第229 図	第1文化層器種別長・幅・厚分布図	327
第230 図	第1文化層長・幅・厚平均値グラフ	328
第231 図	楔形石器製作過程A類	329
第232 図	楔形石器製作過程B類	331
第233 図	楔形石器製作過程C類	332
第234 図	楔形石器・小型石刃を多産する石器群の層序対比	333
第235 図	楔形石器を多産する石器群	335
第236 図	楔形石器・小型石刃を多産する石器群	337
第237 図	第III群土器文様要素別口縁断面	347
第238 図	第IV群土器文様要素別口縁断面	349
第239 図	網原牧関係地名位置図	359

表 目 次

第1表	遺構出土石器計測表	31
第2表	グリッド出土石器計測表	45
第3表	毛内遺跡縄文時代石器属性表	89
第4表	毛内遺跡縄文時代石器組成表	90
第5表	毛内遺跡縄文時代石器石材組成表	90
第6表	毛内遺跡縄文時代遺構別石器組成表	90
第7表	毛内遺跡縄文時代遺構別石器石材組成	90
第8表	剣形品計測表	195
第9表	有孔円板計測表	196
第10表	第1ブロック石器組成表	257
第11表	第1ブロック出土石器属性表	258
第12表	第2ブロック石器組成表	259
第13表	第2ブロック出土石器属性表	259
第14表	第1文化層石器組成	277
第15表	第1文化層ブロック別器種組成表	277
第16表	第1文化層ブロック別石材組成表	277

第17表	第1ブロック（第1文化層）石器組成表	282
第18表	第1ブロック（第1文化層）石器属性表	282
第19表	第2ブロック（第1文化層）石器組成表	286
第20表	第2ブロック（第1文化層）石器属性表	295
第21表	第3ブロック（第1文化層）石器組成表	296
第22表	第3ブロック（第1文化層）石器属性表	299
第23表	第4ブロック（第1文化層）石器組成表	299
第24表	第4ブロック（第1文化層）石器属性表	301
第25表	第5ブロック（第1文化層）石器組成表	304
第26表	第5ブロック（第1文化層）石器属性表	316
第27表	ブロック外（第1文化層）石器組成表	318
第28表	ブロック外（第1文化層）石器属性表	318
第29表	第6ブロック（第2文化層）石器組成表	318
第30表	第6ブロック（第2文化層）石器属性表	320
第31表	楔形石器・小型石刃を多産する石器群の石器組成	334
第32表	楔形石器を多産する石器群の出土状況表	334
第33表	第II群（黒浜式）土器の要素別推定存続期間と毛内遺跡における出土数	352

図版目次

図版 1	大稻塚遺跡・棒木台遺跡	炉穴出土土器
	大稻塚・棒木台遺跡調査前全景	図版 5 大稻塚遺跡
	大稻塚遺跡確認調査状況	002・004・009・010・021号炉穴出土
	棒木台遺跡確認調査状況	土器
図版 2	大稻塚遺跡	006号炉穴出土土器
	本調査区全景（一部）	図版 6 大稻塚遺跡
	002号炉穴・006号炉穴	022号炉穴出土土器
	005号炉穴・010号炉穴	023号炉穴出土土器
図版 3	大稻塚遺跡	図版 7 大稻塚遺跡
	007号炉穴・021号炉穴	033号炉穴出土土器
	022号炉穴・024号炉穴	025・030～032・035号炉穴，042号溝
	025号炉穴・004号土坑	出土土器
図版 4	大稻塚遺跡	図版 8 大稻塚遺跡

- | | | |
|------|-------------------------|-------------------|
| | グリッド出土土器 (1) | 011号竪穴住居跡 |
| | グリッド出土土器 (2) | 013号竪穴住居跡 |
| 図版9 | 大稻塚遺跡 | 図版18 毛内遺跡 |
| | グリッド出土土器 (3) | 014号竪穴住居跡 |
| | グリッド出土土器 (4) | 105号土坑 |
| 図版10 | 大稻塚遺跡 | 125号土坑 |
| | グリッド出土土器 (5) | 図版19 毛内遺跡 |
| | グリッド出土土器 (6) | 竪穴住居跡・土坑出土土器 |
| 図版11 | 大稻塚遺跡 | 図版20 毛内遺跡 |
| | グリッド出土土器 (7) | 001・002号竪穴住居跡出土土器 |
| | 004号土坑, 006・008・033号炉穴, | 003号竪穴住居跡出土土器 |
| | 041号溝出土石器 | 図版21 毛内遺跡 |
| 図版12 | 大稻塚遺跡 | 004・005号竪穴住居跡出土土器 |
| | グリッド出土石器 (1) | 006・007号竪穴住居跡出土土器 |
| | グリッド出土石器 (2) | 図版22 毛内遺跡 |
| 図版13 | 毛内遺跡 | 008～010号竪穴住居跡出土土器 |
| | 毛内遺跡全景 | 013・014号竪穴住居跡出土土器 |
| | 001号竪穴住居跡遺物出土状況 | 図版23 毛内遺跡 |
| | 001号竪穴住居跡 | 101～111号土坑出土土器 |
| 図版14 | 毛内遺跡 | 112～133号土坑出土土器 |
| | 002号竪穴住居跡遺物出土状況 | 図版24 毛内遺跡 |
| | 002号竪穴住居跡 | 石器 (1) |
| | 003号竪穴住居跡遺物出土状況 | 図版25 毛内遺跡 |
| 図版15 | 毛内遺跡 | 石器 (2) |
| | 004号竪穴住居跡 | 竪穴住居跡・グリッド出土土製品 |
| | 005号竪穴住居跡 | 図版26 毛内遺跡 |
| | 006号竪穴住居跡 | グリッド出土土製品 |
| 図版16 | 毛内遺跡 | グリッド出土ミニチュア土器 |
| | 007号竪穴住居跡 | 図版27 毛内遺跡 |
| | 008号竪穴住居跡 | グリッド出土土器 (1) |
| | 009号竪穴住居跡 | 図版28 毛内遺跡 |
| 図版17 | 毛内遺跡 | グリッド出土土器 (2) |
| | 010号竪穴住居跡 | 図版29 毛内遺跡 |

- グリッド出土土器 (3)
- グリッド出土土器 (4)
- 図版30 毛内遺跡
- グリッド出土土器 (5)
- グリッド出土土器 (6)
- 図版31 毛内遺跡
- グリッド出土土器 (7)
- グリッド出土土器 (8)
- 図版32 毛内遺跡
- グリッド出土土器 (9)
- グリッド出土土器 (10)
- 図版33 毛内遺跡
- グリッド出土土器 (11)
- グリッド出土土器 (12)
- 図版34 毛内遺跡
- グリッド出土土器 (13)
- グリッド出土土器 (14)
- 図版35 毛内遺跡
- グリッド出土土器 (15)
- グリッド出土土器 (16)
- 図版36 毛内遺跡
- グリッド出土土器 (17)
- グリッド出土土器 (18)
- 図版37 網原遺跡
- 網原遺跡遠景
- 網原遺跡調査後全景
- 001号竪穴状遺構・F P 1～3号炉穴
- 図版38 網原遺跡
- 103号炉穴
- 009号竪穴状遺構
- 102号土坑
- 図版39 網原遺跡
- 001号墳調査前全景
- 001号墳全景
- 001号墳墳丘断面
- 図版40 網原遺跡
- 002号墳調査前全景
- 002号墳全景
- 002号墳旧表土面状況
- 図版41 網原遺跡
- 002号墳墳丘断面
- 002号墳第1主体部
- 002号墳第2主体部遺物出土状況
- 図版42 網原遺跡
- 002号墳第2主体部遺物出土状況
- 002号墳旧表土上面遺物出土状況
- 003号墳全景
- 図版43 網原遺跡
- 003号墳主体部
- 002・004号墳近景
- 004号墳全景
- 図版44 網原遺跡
- 005号墳調査前全景
- 005号墳全景
- 005号墳旧表土面状況
- 図版45 網原遺跡
- 005号墳墳丘断面
- 005号墳主体部検出状況
- 005号墳第1主体部(上)・第2主体部(下)
- 図版46 網原遺跡
- 005号墳第2主体部遺物出土状況
- 005号墳旧表土上面遺物出土状況
- 005号墳旧表土上面遺物出土状況(拡大)
- 図版47 網原遺跡

- 005号墳旧表土上面遺物出土状況(拡大)
- 005号墳旧表土面土坑と遺物出土状況
- 005号墳旧表土面土坑
- 図版48 網原遺跡
- 007号竪穴住居跡
- 008号竪穴住居跡遺物出土状況
- 008号竪穴住居跡
- 図版49 網原遺跡
- D 4 区祭祀遺構遺物出土状況
- 1号火葬墓
- 2号火葬墓
- 図版50 網原遺跡
- 炉穴・竪穴状遺構・グリッド出土土器
- 図版51 網原遺跡
- 101・102号炉穴出土土器
- 103号炉穴出土土器
- 図版52 網原遺跡
- 104号炉穴出土土器
- 009号竪穴状遺構出土土器(1)
- 図版53 網原遺跡
- 009号竪穴状遺構出土土器(2)
- グリッド出土石器
- 図版54 網原遺跡
- グリッド出土土器(1)
- グリッド出土土器(2)
- 図版55 網原遺跡
- グリッド出土土器(3)
- グリッド出土土器(4)
- 図版56 網原遺跡
- グリッド出土土器(5)
- グリッド出土土器(6)
- 図版57 網原遺跡
- グリッド出土土器(7)
- グリッド出土土器(8)
- 図版58 網原遺跡
- グリッド出土土器(9)
- グリッド出土土器(10)
- 図版59 網原遺跡
- 001・002・005号墳出土土器
- 図版60 網原遺跡
- 005号墳旧表土上面出土土器(1)
- 図版61 網原遺跡
- 005号墳旧表土上面出土土器(2)
- 図版62 網原遺跡
- 005号墳旧表土上面出土土器(3)
- 図版63 網原遺跡
- 005号墳旧表土上面出土土器(4)
- 図版64 網原遺跡
- 005号墳旧表土上面出土土器(5)
- 図版65 網原遺跡
- 005号墳旧表土上面出土土器(6)
- 図版66 網原遺跡
- 005号墳旧表土上面出土土器(7)
- 図版67 網原遺跡
- 鉄鏃
- 鉄鏃・刀子
- 図版68 網原遺跡
- 002号墳旧表土上面出土石製模造品
- 005号墳旧表土上面出土石製模造品
- 図版69 網原遺跡
- D 4 区祭祀遺構出土土器
- 図版70 網原遺跡
- 007・008号竪穴住居跡出土土器
- 図版71 網原遺跡

- 008号竪穴住居跡出土土器・蔵骨器
- 図版72 網原遺跡
グリッド出土土器
- 図版73 網原屋敷跡遺跡
網原屋敷跡遺跡全景
網原屋敷跡遺跡調査後全景
112号土壇・114号土壇
- 図版74 網原屋敷跡遺跡
002号竪穴住居跡
003号竪穴住居跡
301号溝
- 図版75 網原屋敷跡遺跡
502号掘立柱建物跡
503号掘立柱建物跡
103号土坑・211号粘土敷土坑
- 図版76 網原屋敷跡遺跡
202号粘土敷土坑
204号粘土敷土坑・212号粘土敷土坑
001号土坑
- 図版77 網原屋敷跡遺跡
112・114・122号土壇出土遺物
- 図版78 網原屋敷跡遺跡
122号土坑出土土器
グリッド出土土器（1）
- 図版79 網原屋敷跡遺跡
グリッド出土土器（2）
グリッド出土土器（3）
- 図版80 網原屋敷跡遺跡
グリッド出土土器（4）
グリッド出土土器（5）
- 図版81 網原屋敷跡遺跡
グリッド出土土器（6）
グリッド出土土器（7）
- 図版82 網原屋敷跡遺跡
土坑・グリッド出土石製品・石器（1）
土坑・グリッド出土石器（2）
- 図版83 網原屋敷跡遺跡
竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・
溝出土土器
- 図版84 多田網原遺跡
多田網原遺跡調査前全景
101号土坑
第1ブロック・第2ブロック石器検
出状況
- 図版85 多田網原遺跡
第1ブロック出土石器・表採資料
第2ブロック出土石器（1）
- 図版86 多田網原遺跡
第2ブロック出土石器（2）
- 図版87 多田網原遺跡
グリッド出土土器（1）
グリッド出土土器（2）
- 図版88 出口遺跡
出口遺跡調査前全景
第1文化層石器出土状況（東から）
第1文化層焼土跡・第1文化層焼土
跡土層断面
- 図版89 出口遺跡
第1文化層第1・2・4ブロック石
器出土状況（東から）
第1文化層第2ブロック石器出土状
況（南から）
第1文化層第3・4・5ブロック石
器出土状況（西から）
- 図版90 出口遺跡
第2文化層石器出土状況（南から）

深掘り土層断面

図版91 出口遺跡

第1ブロック出土石器

図版92 出口遺跡

第2ブロック出土石器

図版93 出口遺跡

第2ブロック出土石器

第3ブロック・ブロック外出土石器

図版94 出口遺跡

第4ブロック出土石器

第5ブロック出土石器

図版95 出口遺跡

第5ブロック出土石器

図版96 出口遺跡

第5ブロック出土石器

図版97 出口遺跡

第6ブロック出土石器

表採資料

序 章

第1節 立地と歴史的環境

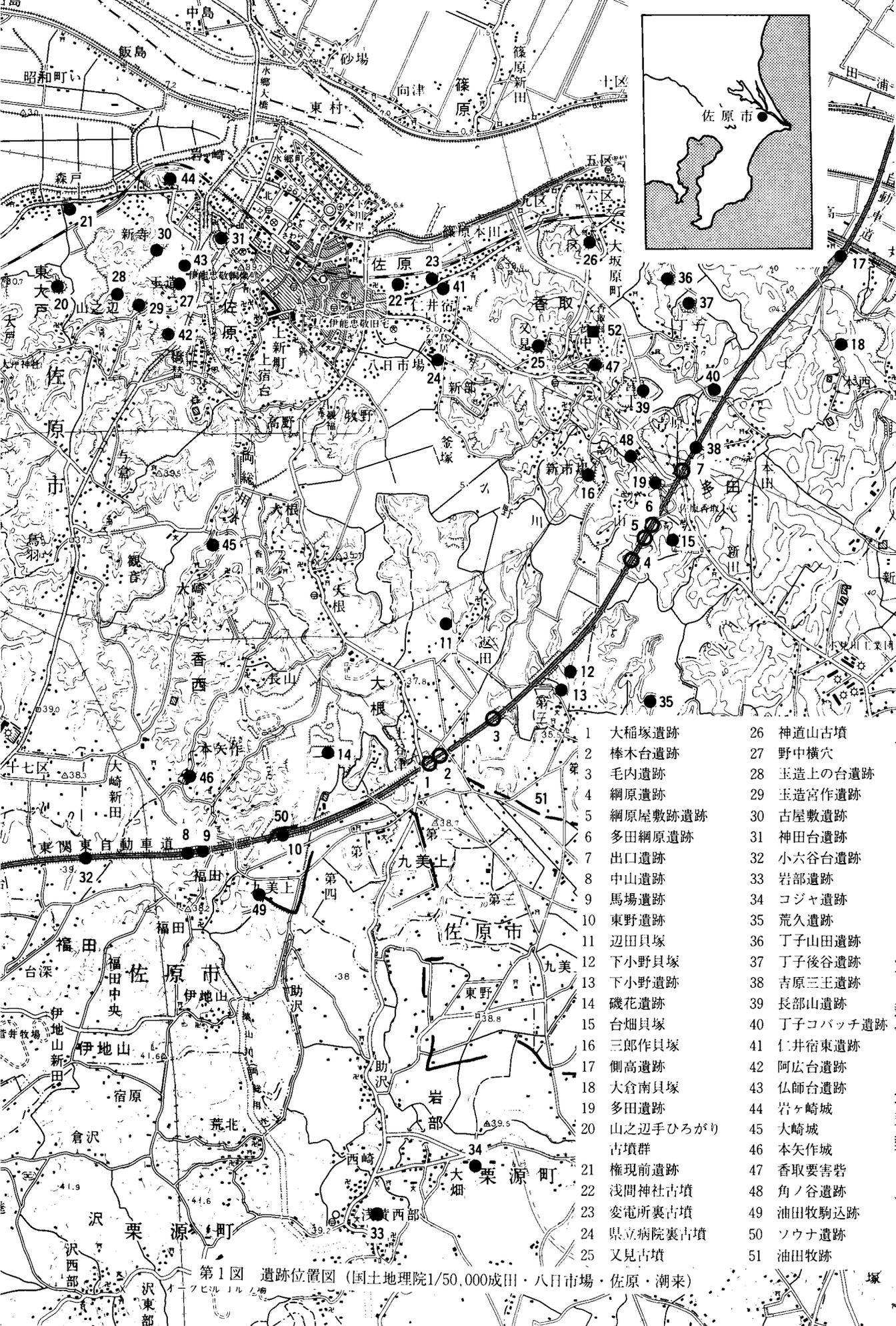
今回報告する大稲塚遺跡をはじめ7遺跡が所在する佐原市は、房総半島北側に展開する下総台地の北東側に位置する。台地北縁を利根川が東流し、銚子の河口まで約40kmほどにある。利根川を挟んだ対岸の茨城県側には風光明媚な水郷地帯で知られる潮来や霞ヶ浦、古代の大社である鹿島神宮などが所在している。一方、現在の利根川は、江戸時代の大規模な東遷工事によって流路を変えられており、古代においては、霞ヶ浦や北浦を含んだ一帯が、『常陸風土記』の香島郡に記される「流海」のような旧鬼怒川が流入する広大な入江を呈していたようである。

このような古代の景観を呈するこの地域は、「流海」（現利根川）に流入するいくつかの小河川によって樹枝状に開析され、複雑な台地を形成している。本書収載の大稲塚遺跡・棒木台遺跡は香西川最奥の東側台地上、毛内遺跡は、小野川に開析された小支谷の西側台地上にあり、太平洋に流入する栗山川との分水嶺に近い。綱原遺跡・綱原屋敷跡遺跡・多田綱原遺跡は、小野川によって開析された北側の舌状台地上に立地する。出口遺跡は、小野川と北側の小河川に挟まれた台地のほぼ中央に位置する。周辺の遺跡の多くもこの台地上に立地しているが、なかには、標高5m程の微高地上に集落や古墳が展開するものもみられる。以下、時代順に地域の様相を概説していく。

旧石器時代の遺跡は、本書の出口遺跡で比較的大規模な石器群が検出された以外は、調査例が少ないため具体的な様相は不明であるが、今後の調査により類例が増加する可能性は強いと思われる。縄文時代の遺跡は台地上を中心にかなり多く知られている。早期から前期にかけては、海進状態にあったため集落等の形成はあまりみられなかったようで、炉穴が集中する本書の大稲塚遺跡が目立つ程度である。ただ、土器の出土は比較的多く、側高遺跡や中山遺跡などの包含層中に多くの土器が出土している他、綱原遺跡などの古墳盛土中に含まれている例も多い。同時期の貝塚も少ないが、鶉崎貝塚や三郎作貝塚が知られている。前期後半から中期初頭にかけては、本書の毛内遺跡が良好な集落として存在している。支谷を挟んだ対岸には、下小野式土器で有名な県の指定史跡下小野貝塚が所在する。中期中葉から後期にかけては、その遺跡数がかかなり増大するようになる。集落としては大規模なものが目立ち、磯花遺跡や多田遺跡など、漁労活動を示す土錘が多量に出土する特徴が認められる。該期の貝塚としては、佐原市の指定史跡である大倉南貝塚、台畑貝塚などが所在する。縄文晩期から弥生時代にかけての遺跡はきわめて少なく、長部山遺跡で僅かにみられる程度であるが、今後の調査により検出される可能性は強いと思われる。

古墳時代になると、利根川を望む台地上及び低地に古墳が集中して形成されるようになる。佐原市域で古い段階に位置付けられる古墳は、西部の馬の背状を呈する狭小な台地上に所在する山之辺手ひろがり古墳群と本書の綱原古墳群である。前者は、正式な報告書が刊行されていないため詳細は不明であるが、長方墳4基、方墳2基、円墳1基などが検出されているようである。3号墳からは、滑石製の石枕・特異な形態の立花・多量の白玉などが出土しており、4世紀末まで遡る可能性が指摘されている。6世紀代になると、低地（自然堤防）上に森戸権現前古墳・浅間神社古墳・変電所裏古墳などの前方後円墳が出現してくる。これらの古墳にはすべて埴輪が伴っており、その様相から、森戸権現前古墳が6世紀初頭から前半、やや遅れて浅間神社古墳・変電所裏古墳が築造されているようである。この地域一帯の前方後円墳は、利根川に平行して前方部を西に向けているのに対し、5世紀前半から中葉にかけての築造とされる三之分目大塚山古墳に代表されるような小見川町一帯の前方後円墳は、やはり利根川に平行するものの、前方部を東側に向けるという対照的な様相を示している。支配勢力の違いによる規制が現れているのであろうか。香取神宮の北1kmには、市の指定史跡となっている前方後円墳1基と円墳11基から成る神道山古墳群が所在する。また、香取神宮の西0.5kmには特異な構造を持つ「箱式横穴式石室」と呼ばれる主体部を有する又見古墳が位置する。本古墳は香取神宮の元摂社である又見神社の境内に所在し、7世紀前半から中葉の構築と考えられている。香取神宮と関連して注目される古墳である。古墳時代の集落としては、玉造上の台・玉造谷津・牧野大荒久・荒久・側高遺跡等が鬼高段階になって成立してくる。上の台・谷津遺跡は同一台地上に位置し、古墳時代の大集落を形成している。特に上の台遺跡では、古墳時代の竪穴住居106軒と掘立柱建物群が検出されている。掘立柱建物の中には、豪族の館跡と考えられている四面廂付の大型のものが存在する。また、「玉造」の地名が物語るように、玉造の工房跡も確認されている。利根川を望む台地の先端に位置する側高遺跡は、7世紀代の竪穴住居13軒とともに2基の7世紀後半の方墳が検出されている。

奈良・平安時代になると、集落が増大・拡散するようになる。流域ごとに見ていくと、太平洋に流れる栗山川と、利根川に注ぐ小野川の支流葛西川の分水嶺に当たる地域では、中山・馬場・東野・磯花遺跡等が調査されている。いずれにも多くの墨書土器が検出されており、中山では「郡上」、馬場では「鹿郷長鹿成里成里□、小山□」、東野では「國玉」が主体をなし注目される。磯花遺跡では、掘立柱建物跡とともに「寺七日」の墨書土器が出土しており、集落内寺院の存在が予想される。根本川流域には、吉原三王遺跡・長部山遺跡・丁子コバッチ遺跡等がみられる。一方、小野川と大須賀川の間台地上に位置する遺跡としては、先にあげた玉造上の台の他に神田台遺跡・仏師台遺跡・阿広台遺跡がある。神田台遺跡は奈良時代を主体とする小規模な集落で、9世紀前半の2軒の竪穴住居から墨書土器が検出されている。このうち、008号住居跡出土の「神宮」・「毛神」は香取神宮との関係を想定させるものである。この住居跡



- | | |
|-------------|-------------|
| 1 大稲塚遺跡 | 26 神道山古墳 |
| 2 棒木台遺跡 | 27 野中横穴 |
| 3 毛内遺跡 | 28 玉造上の台遺跡 |
| 4 網原遺跡 | 29 玉造宮作遺跡 |
| 5 網原屋敷跡遺跡 | 30 古屋敷遺跡 |
| 6 多田網原遺跡 | 31 神田台遺跡 |
| 7 出口遺跡 | 32 小六谷台遺跡 |
| 8 中山遺跡 | 33 岩部遺跡 |
| 9 馬場遺跡 | 34 コジャ遺跡 |
| 10 東野遺跡 | 35 荒久遺跡 |
| 11 辺田貝塚 | 36 丁子山田遺跡 |
| 12 下小野貝塚 | 37 丁子後遺跡 |
| 13 下小野遺跡 | 38 吉原三王遺跡 |
| 14 磯花遺跡 | 39 長部山遺跡 |
| 15 台畑貝塚 | 40 丁子コバッチ遺跡 |
| 16 三郎作貝塚 | 41 仁井宿東遺跡 |
| 17 側高遺跡 | 42 阿広台遺跡 |
| 18 大倉南貝塚 | 43 仏師台遺跡 |
| 19 多田遺跡 | 44 岩ヶ崎城 |
| 20 山之辺手ひろがり | 45 大崎城 |
| 古墳群 | 46 本矢作城 |
| 21 権現前遺跡 | 47 香取要害岩 |
| 22 浅間神社古墳 | 48 角ノ谷遺跡 |
| 23 変電所裏古墳 | 49 油田牧駒込跡 |
| 24 県立病院裏古墳 | 50 ソウナ遺跡 |
| 25 又見古墳 | 51 油田牧跡 |

第1図 遺跡位置図 (国土地理院1/50,000成田・八日市場・佐原・潮来)

からは、須恵器甕の胴部片を利用した転用硯が1点確認され、墨と朱墨の両方が付着している。「神宮」の墨書土器が外面赤彩されていることと関連して興味深い資料である。また、阿広台遺跡では、小規模な集落ながら短冊形透かしを有する円面硯が出土している。

中世になると、香取神宮の権力の衰退とともに、千葉氏及び国分氏の香取社領に対する侵略が企てられ、それらの居城として、本矢作城・大崎城・山崎城・岩ヶ崎城が建立される。また、本書の綱原屋敷跡遺跡では中世の葛原牧に関連する土手及び掘立柱建物跡などが検出されている。一方、ひさご塚・丸塚・角ノ谷遺跡では塚が調査されている。いずれも方形に巡る周溝の1辺が部分的に途切れる共通の形態を有する。近世では、佐倉牧を構成する矢作牧・油田牧がみられる。

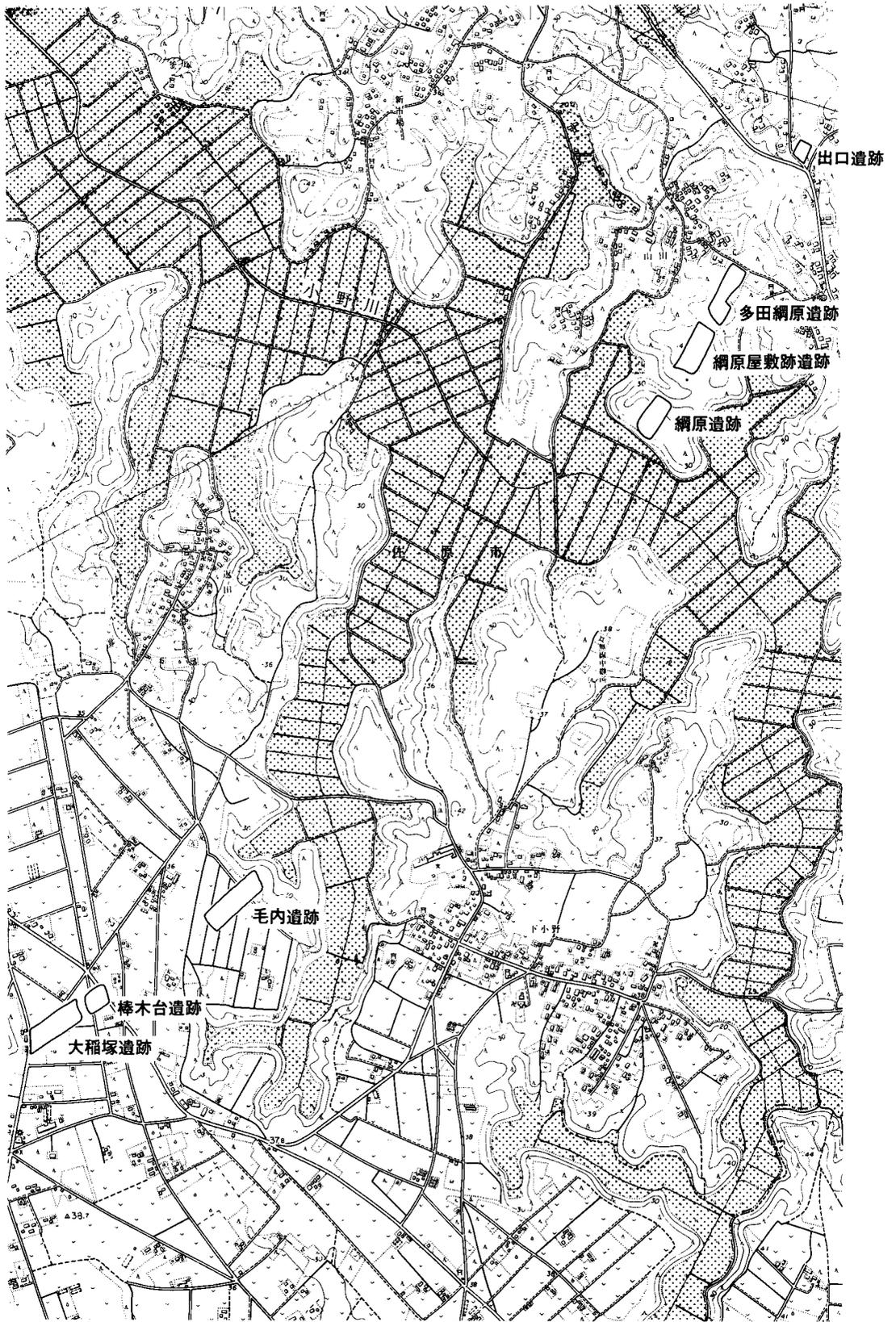
第2節 各遺跡の調査概要

大稻塚遺跡（以下事業番号No.38・No.38-1）は、昭和57年度と同58年度の2回にわたって発掘調査が実施された。昭和57年度（No.38）は、調査対象面積10,520㎡のうち10%にあたる1,052㎡の確認調査を、昭和57年11月1日～12月28日にかけて行なった。調査は確認のみで終了したが、縄文時代早期の炉穴7基と同時期と思われる石器製作跡1基を検出した。なお、この段階で、谷寄りの事業地内に遺跡の拡がり確認されたため、その部分については次年度に調査することとなった。昭和58年度（No.38-1）は、前年度の隣接地3,000㎡を調査対象とし、確認調査300㎡と本調査1,000㎡を行なった。調査期間は昭和58年4月1日～同年5月31日までである。調査の結果、前年度と同様縄文時代早期の炉穴28基等が確認された。さらに、縄文土器は早期を主体として5,000点以上出土しており、非常に良好な資料を呈示した。

樺木台遺跡（No.39）の調査は、昭和57年12月1日～同年12月28日にかけて実施した。調査対象4,010㎡に対して、10%（401㎡）の確認調査を行ったところ、遺構の検出はなく、出土した土器も縄文時代中期の加曾利E式土器の小片が7点のみであった。このため、調査は確認のみで終了した。

毛内遺跡（No.40）の調査は、昭和58年6月1日～同年11月22日まで実施した。調査対象10,660㎡に対して1,066㎡（10%）の確認調査と4,000㎡の本調査を行なった。その結果、縄文時代前期末の竪穴住居14軒と同時期と思われる土坑28基等が検出された。出土した土器は多量で、縄文時代前期末から中期初頭にかけてを主体とし、早期末から後期にまでわたっている。特に注目される遺物は、総数50点出土した土製耳飾りである。現在までのところ千葉県内では最も多い出土量であり、出土土器とともにかなり興味深い資料である。

綱原遺跡（No.41）の調査は、事業地内用地の買収の関係で、昭和53年度と昭和58年度の2回にわたって行われた。昭和53年度は、契約当初、調査対象が古墳2基のみであったが、古墳の



第2図 遺跡周辺地形図 (1/20,000)

排土地を事業地内に確保するため確認調査を実施したところ、古墳及び住居等の存在が予想されたため新たに古墳2基と包蔵地2,000㎡を調査対象として追加した。約5か月に及ぶ調査の結果、古墳時代の円墳4基と竪穴住居2軒が検出された。円墳4基の内2基は比較的大型で、古墳時代中期に比定され、ほぼ同時期と考えられる竪穴住居との関連が注目される。他には、縄文時代早期の炉穴や歴史時代の土師器を用いた蔵骨器が確認されている。調査期間は昭和53年11月1日から昭和54年3月20日までである。昭和58年度の調査は、前回未買地であった北側の円墳1基を対象に行なった。その結果、墳頂部に木棺直葬の主体部を2基有する大型の円墳であることが判明した。また、旧表土上面に土壌を伴う祭祀遺構が検出され、多量の石製模造品や土師器を出土した。古墳構築に伴う祭祀と思われる特殊な関連が想定される。調査期間は昭和58年6月1日から同年7月30日まで約2か月を要した。

綱原屋敷跡遺跡(No42)は、昭和57・58年度にまたがり、調査対象面積5,610㎡を全面本調査として、昭和57年度はその内3,000㎡、昭和58年度は残り2,610㎡を調査した。検出された遺構は、古墳時代後期の竪穴住居2軒と、中世の土手及びそれに伴う溝や掘立柱建物跡等である。調査時点では、遺跡名にあるように屋敷跡として考えられていたが、土手等の構造より中世の牧に関係する遺構として捉えられるようである。

多田綱原遺跡(No43)は、包蔵地5,830㎡を調査対象とし、昭和58年3月1日に確認調査を開始した。その結果、旧石器時代の石器ブロック2か所と縄文時代早期の陥穴1基、時期不明の溝3条を確認したにとどまった。部分的に拡張し、本調査を実施しないで昭和58年3月31日に調査を終了した。

出口遺跡(No44)の調査は、昭和58年7月1日から同年10月8日にかけて行った。包蔵地2,640㎡を調査対象として全面本調査した。その結果、時期不明の溝4条と土壌1基及び旧石器時代の石器集中地点3ヶ所が検出された。この中では、旧石器時代の石器群が注目される。VI層からVII層にかけてを主体として約3,000点出土し、剝片及びチップを主体とするものの、楔形石器を多く含む。製品が少なく、剝片類が多いのが特徴である。

第3節 調査方法

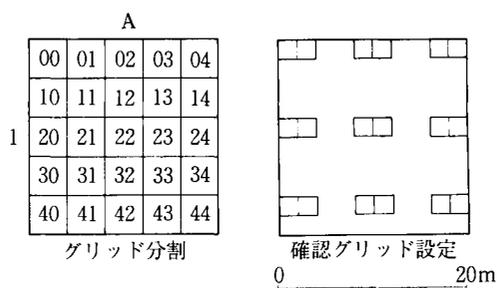
発掘調査は、対象となる調査区域をすべて包含できるように公共座標(第IX系)を基準とした20m方眼の発掘区を設定して実施した。この発掘区は、基本的に西から東に向けてA・B・C……、北から南に向けて0・1・2……とし、各々のグリッドは、北西隅の杭を基にして、A0・B1等と呼称した。また、20m方眼のグリッドを4mごとに分割して小グリッドを設け、北西隅を起点として、東に向けて00・01……04、南方向に00・10……40とし、南東隅が44となるようにした。

本調査に先行する確認調査は、上記の発掘区を利用し、第3図右のように上層遺構の確認については2×4mのグリッドを全体の10%、下層については2×2mのグリッドを4%行うことを基本とした。ただ、網原遺跡の一次調査分については、トレンチによる確認調査方法を採用している。確認した遺構は、竪穴住居跡・古墳については4分割、他の遺構はその性格により随時土層観察用のベルトを設定して調査を行なった。

遺物の取り上げは、竪穴住居跡の覆土中のものはベルトにより分割された4区を用い、北東から南西に分けて行なった。床面及び覆土中の完形に近いものは形状を記録し、個別に番号を付してレベル記入のうえ取り上げた。又、床面上の小破片はドットにより図面に記入した。カマドは、中軸線とそれに直行する袖を通るベルトを設定して4分割で調査した。古墳の盛土中の遺物についても土層観察用のベルトによって分けられた4つの区毎に一括して取り上げたが、旧表土面及び周溝内の遺物については詳細な図面をレベルとともに記録することに努めた。

遺構番号は、性格により3桁の番号を付したが、遺跡毎に異なっている部分もある。基本的には、竪穴住居跡を0番台、掘立柱建物跡及び土坑等を100番台以降とした。遺跡毎で番号が異なるため、不統一となってしまったが、後の遺構及び遺物等の照合を考え、本報告では敢えて番号を替えずに調査時の番号をそのまま使用した。

整理については、ほぼ通常の方法を取っているが、出口遺跡の旧石器時代の石器群に関しては、多量の石器の属性等合理的に整理するため、トータルステーションを利用した。これについては、出口遺跡の最終頁に整理過程の概要を記述しておいた。



第3図 グリッド分割と確認グリッド設定図

第1章 大稻塚遺跡・棒木台遺跡

大稻塚遺跡では、縄文時代早期の炉穴と石器製作跡が検出された。また、棒木台遺跡では、10%の確認調査の結果、遺構の検出はなく、縄文時代中期の土器片が僅かに出土したのみであるため、本章では、大稻塚遺跡について記述することとする。

第1節 縄文時代

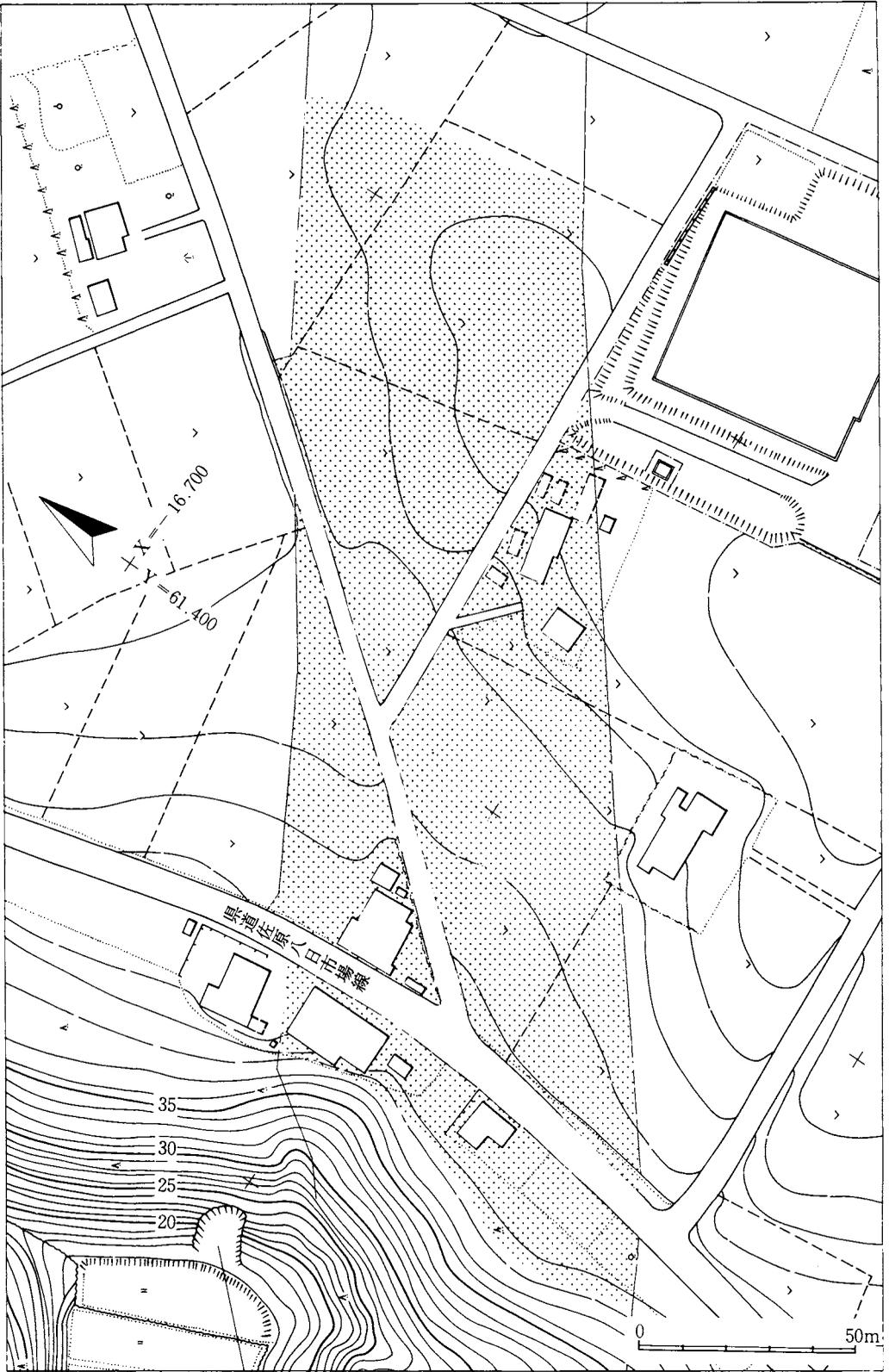
本遺跡における縄文時代の遺構は炉穴が主体であり、明確に竪穴住居として捉えられるものはなかった。他に、石器製作跡と思われる土坑が1基検出された。

1. 炉 穴 (第7・8図, 図版2・3)

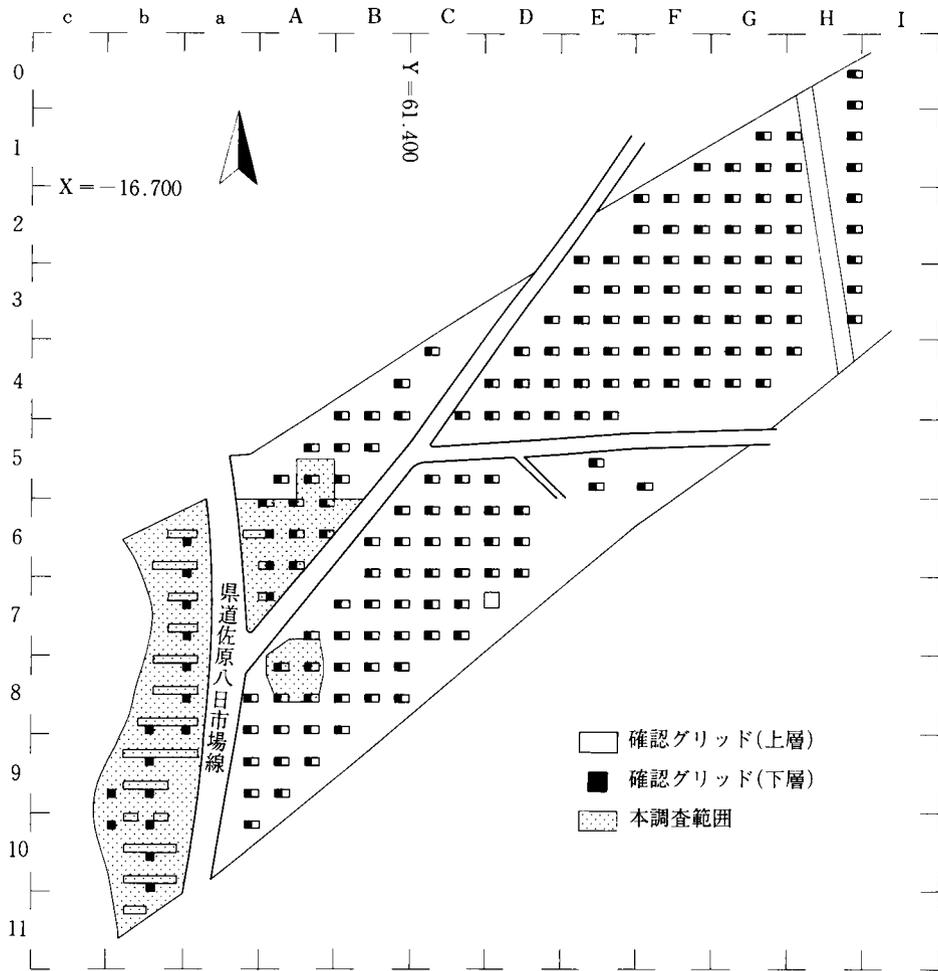
中央部分を県道佐原八日市場線が縦断しているため、調査前に消滅してしまったものも多かったと思われるが、本遺跡における縄文時代早期の炉穴は総数35基検出された。その分布は大まかにみると、西側から入り込む谷頭を囲むような環状の配置状況が観察され、中央部が空白空間となっている。さらに詳細にみると、およそ5つの群に分かれるようである。1群は調査区南西端b9区に存在する025号炉穴など5基で構成される。すべて小規模なものである。2群は1群の北側に展開する。022号炉穴など12基が含まれており、全体に環状を呈する。小規模なものは西側に集中する傾向がみられる。3群は県道をはさんでA8区に中心をおく。比較的大規模なもので構成され、2群同様環状を呈する。2群では中央が空白空間となっているが、本群では石器製作跡と考えられる004号土坑が存在している。炉穴群と石器製作跡の時期差はほとんどみられないことから、この状況は意図的なものと考えられる。4群は道路をはさんで6区に存在するが、散在的であり明確な傾向は認められない。2つに分けられる可能性もあり、013号炉穴などの9基が4群、038号炉穴などの3基が5群となろうか。1群同様小規模なものが主体を占める。

以上のような分布状況を示す炉穴には、個々の形態からおおまかに3種類のタイプに分けられるようである。Aタイプ：長楕円形プランを呈し、足場と火床部の存在が明瞭なもの。Bタイプ：足場の位置は変わらず、火床部が枝分かれするもの。Cタイプ：規模が小さく、火床部のみが確認されるもの。以下で各タイプ毎に説明を加える。

Aタイプには、001・002・006・007・010・013・014・021～025・028～033号炉穴の18基が相当する。火床部を一段低く掘り込むのがほとんどであるが、002号炉穴のように足場の方が低くなるものもみられる。また、火床部の方向は一定していない。Bタイプは005号炉穴1基のみで



第4図 大稲塚遺跡地形図

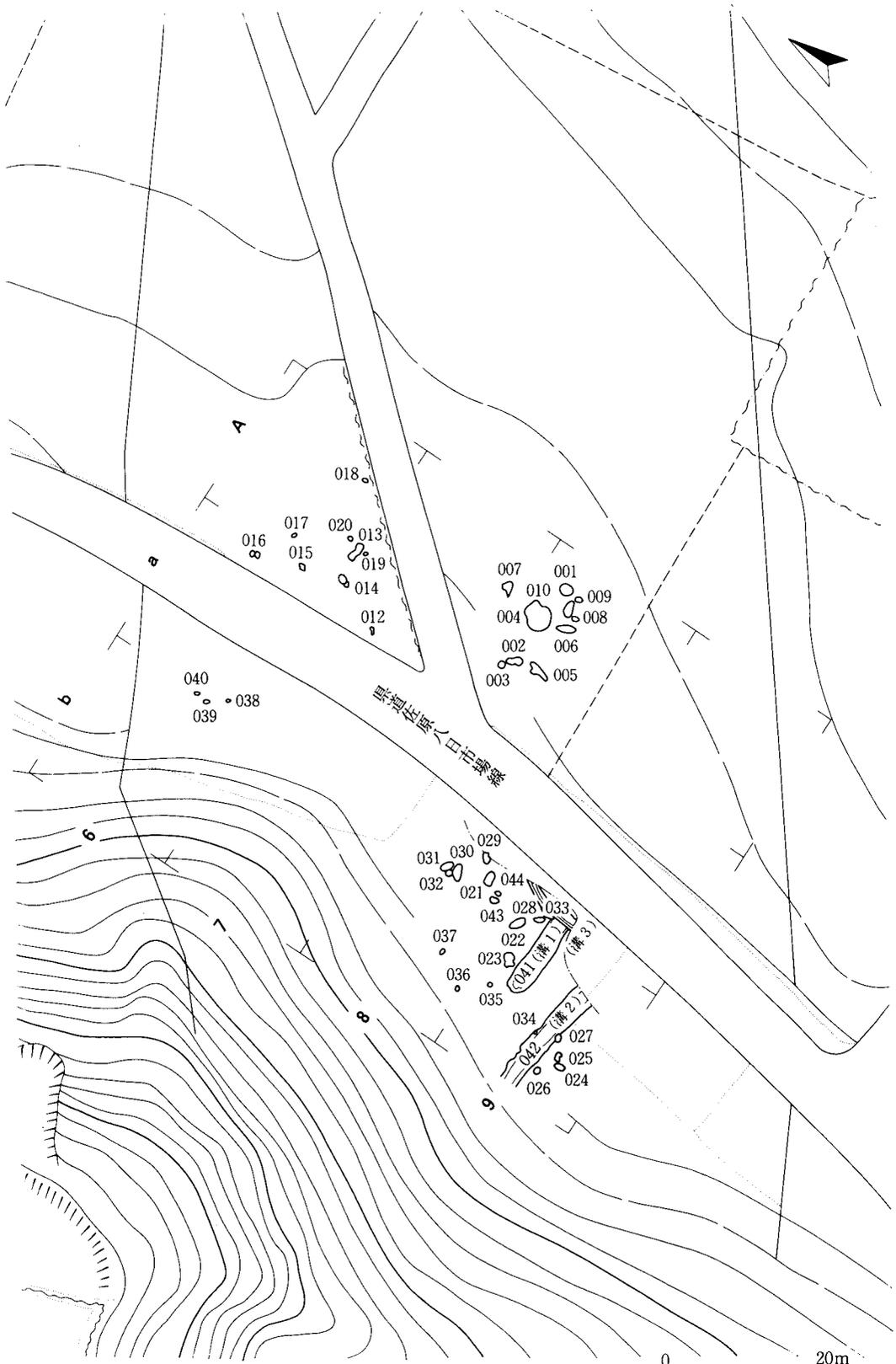


第5図 大稲塚遺跡確認グリッド配置図(1/2,000)

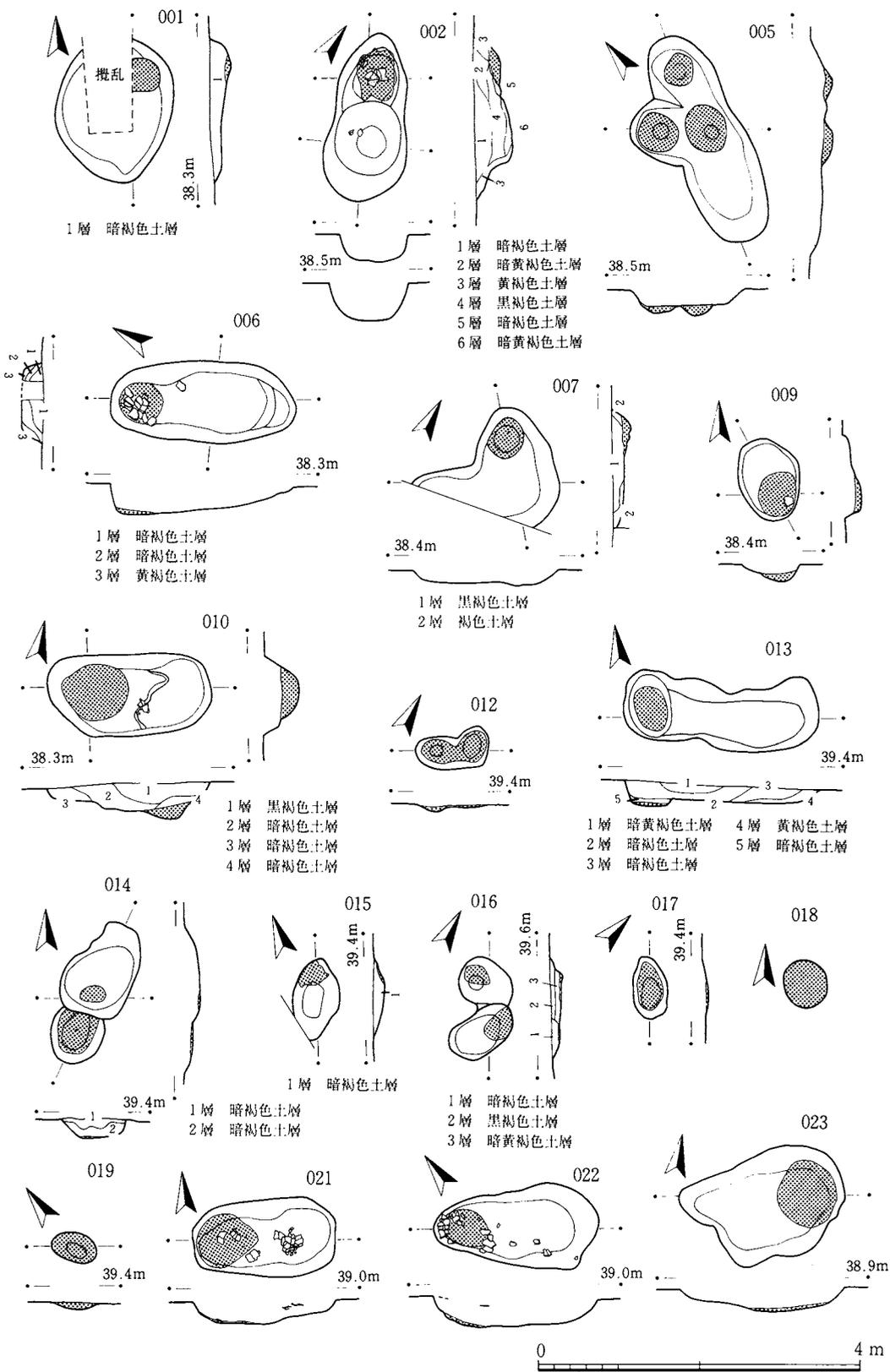
ある。南北方向に主軸を取り、北側に3ヶ所の焼土が認められる。足場は南側に固定し、火床部を移動させたものと思われるが、土層からはその新旧関係を明確にすることはできなかった。ただ、その位置関係からすると中央の火床が最も古く、それを埋めた後に北側及び西側に火床部を設けたものと想定されよう。Cタイプには009・012・015～019・026・027・034～040号炉穴の16基がある。これは火床部のみを検出したもので、遺構の確認面の問題もあり、中にはAタイプの残存となるものも多いと思われる。ただ、009・026号炉穴のように掘り込みが明瞭でとても遺構内に足場を取る面積がない例もあり、Aタイプとは明らかに構造が異なる一群として捉えることはできよう。規模としては、Aタイプが長軸1.4～2.2m、短軸0.6～1.4mの範囲に含まれ、小規模なものは1群に多い。Bタイプは、長軸2.7m、短軸0.9mと最も大形である。

2. 土 坑

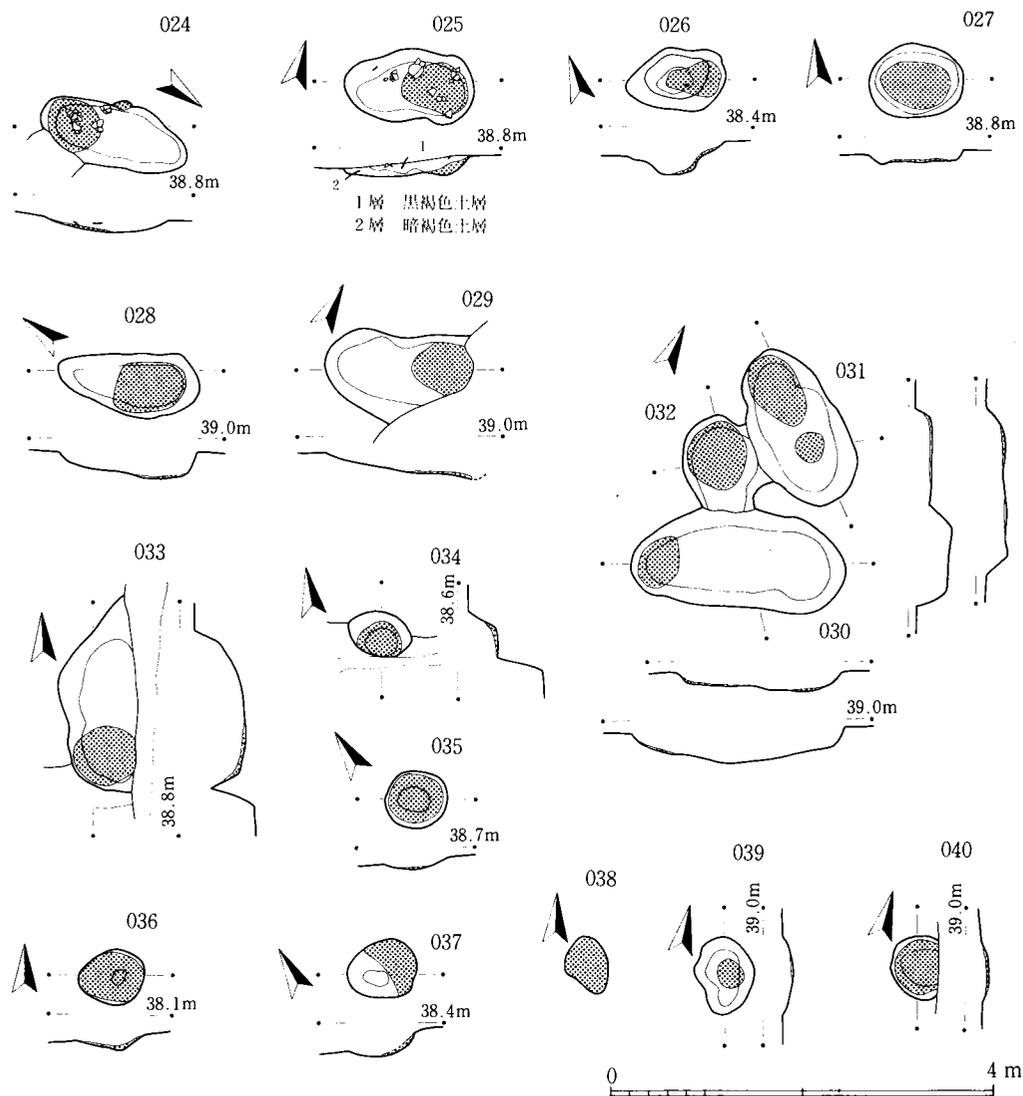
土坑については、第9図に示したように6基検出されているが、004号土坑以外は規模も小さ



第6図 大稻塚遺跡遺構配置図



第7圖 炉 穴(1)

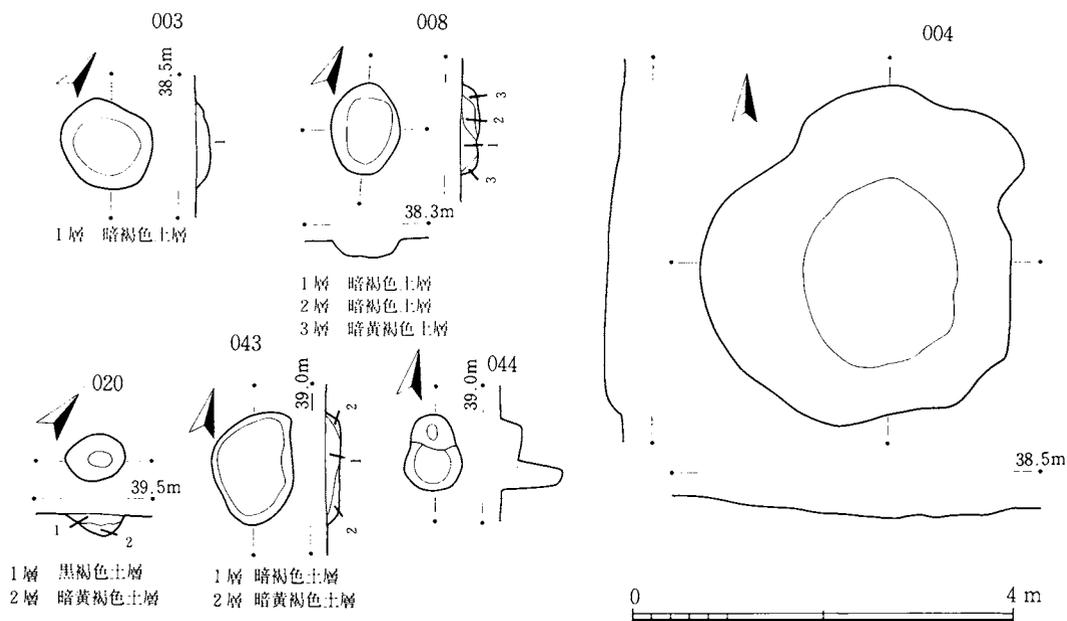


第8図 炉 穴(2)

く、若干の遺物が出土しているもののその性格についてはほとんど不明である。ここでは、性格の明らかな004号土坑についてのみ記述する。

004号土坑 (第9・10図, 図版3)

拡張a区の中央にあり、周囲に炉穴が巡るような位置関係にある。平面プランは長軸3.7m、短軸3.1mの不整形円形を呈する。確認面からの深さは0.2mを測る。壁はなだらかに立ち上がり、浅い皿状である。覆土はロームブロックを多量に含む暗褐色土の単層である。本遺構からは、流紋岩製の石鏃、石鏃未成品、楔形石器と共に多量の碎片が検出されている。遺物の出土状態は、平面分布では遺構の中央に集中するが、中心部にやや遺物の希薄な部分があり、その周囲に3か所の密集したところが看取される。垂直分布では、約0.2mの幅でまとまり、明確な分離



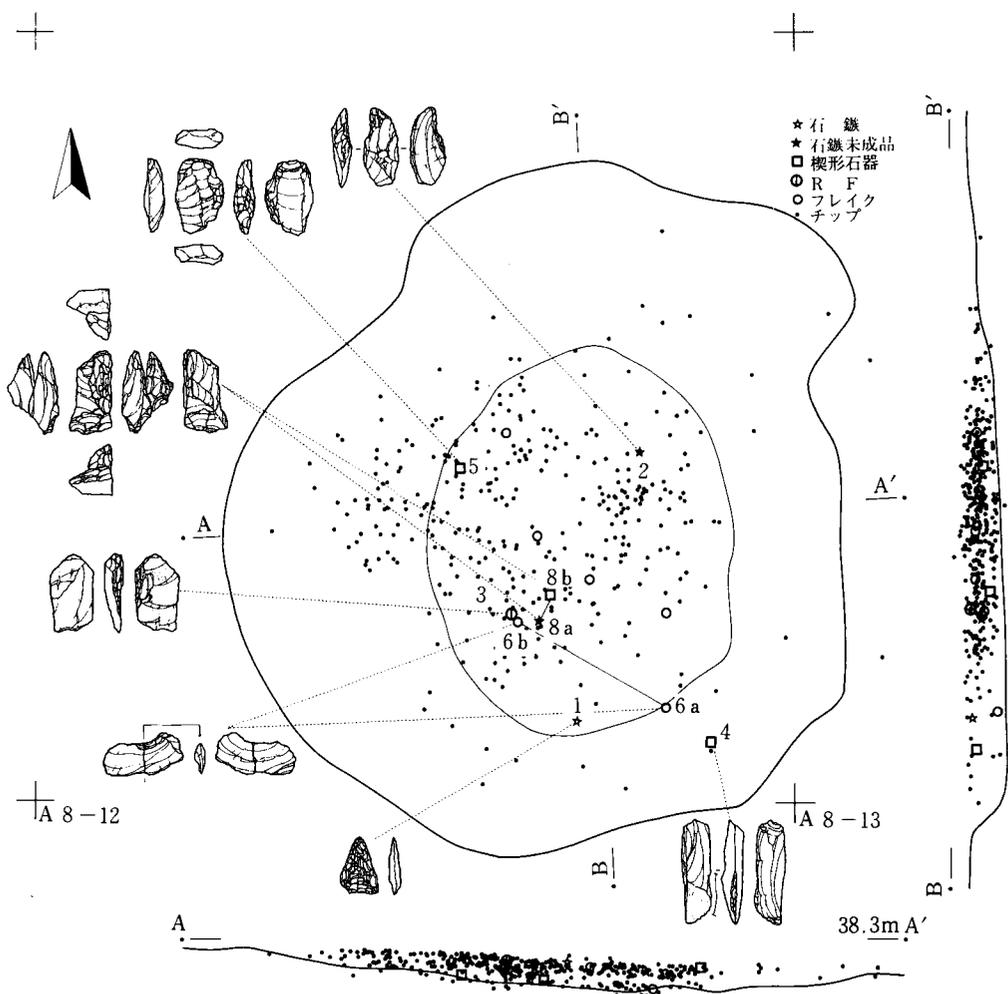
第9図 土 坑

はされない。遺構出土石器の項で詳述するが、これらの遺物は石鏃の製作に関わるものと推測され、本遺構は石鏃製作跡の性格を有する。またこの遺構が明確な壁を持たないことや、明確に覆土が分層されないことからみて、人為的な掘り込みによる遺構ではなく、浅い窪地状の落ち込みでの、石器製作作業場の痕跡の可能性が強い。

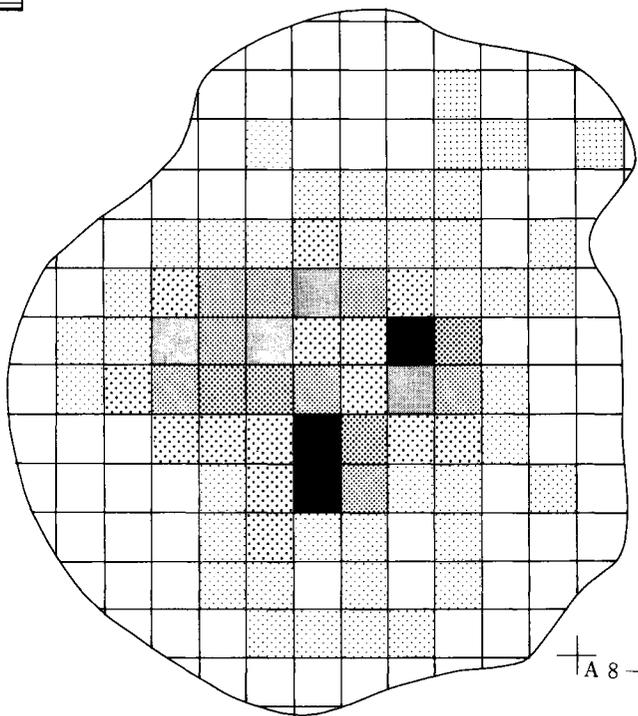
遺構出土土器 (第11～19図, 図版4～7)

002号炉穴 (1～3)

1は口縁部が小波状の突起を持ち、直行もしくは若干外反するもので、口縁部直下で顕著に屈曲しながら胴部に移行し、胴部で1段の稜を持つ深鉢形土器である。口唇部内外の側縁部に刻み目を有する。胎土にはやや多くの植物繊維を含む。小波状部は隆帯を用い、厚手となる。隆帯や稜部には刻み目が施される。文様は地文として横位の条痕文を施した後、微隆起線文を主文様とし、幾何学文を作出している。文様帯は2段に構成され、口縁部直下の文様帯には、小波状部で、微隆起線文が同心円状に、それ以外の部分で、横位の微隆起線文を基本とし、渦巻き状の文様や斜位の文様が観察できる。また、微隆起線文の接点等には竹管を用いた円形刺突文が施される。胴部の文様帯には縦位・横位の微隆起線文により文様帯を分帯し、分帯され



- 1 ~ 3 点
- 4 ~ 6 点
- 7 ~ 9 点
- 10 ~ 12 点
- 13 ~ 15 点
- 16 点 以上



第10図 004号土坑遺物出土状況図

た文様帯に斜位の微隆起線や曲線的な微隆起線により幾何学文が描出される。幾何学文の内部には半月状の刺突文を多用する部分が存在する。また、微隆起線文の接点などには竹管を用いた円形刺突文が施される。2は口縁部と胴部との屈曲が顕著ではなく、緩やかに屈曲しながら底部に至る深鉢形土器と考えられる。口唇部内外の側縁部に刻み目を有する。胎土にはやや多くの植物繊維を含む。稜部には刻み目が施される。文様は地文として横位の条痕文を施した後、微隆起線文を主文様とし、幾何学文を作出している。口縁部直下の文様帯には、縦位・横位の微隆起線文により文様帯を作出する。微隆起線文の接点等には貝殻を用いた貝殻背圧痕文が施される。鶺鴒ケ島台式土器であろう。3は胴部の幾何学文部の大形破片である。

004号土坑（4・5）

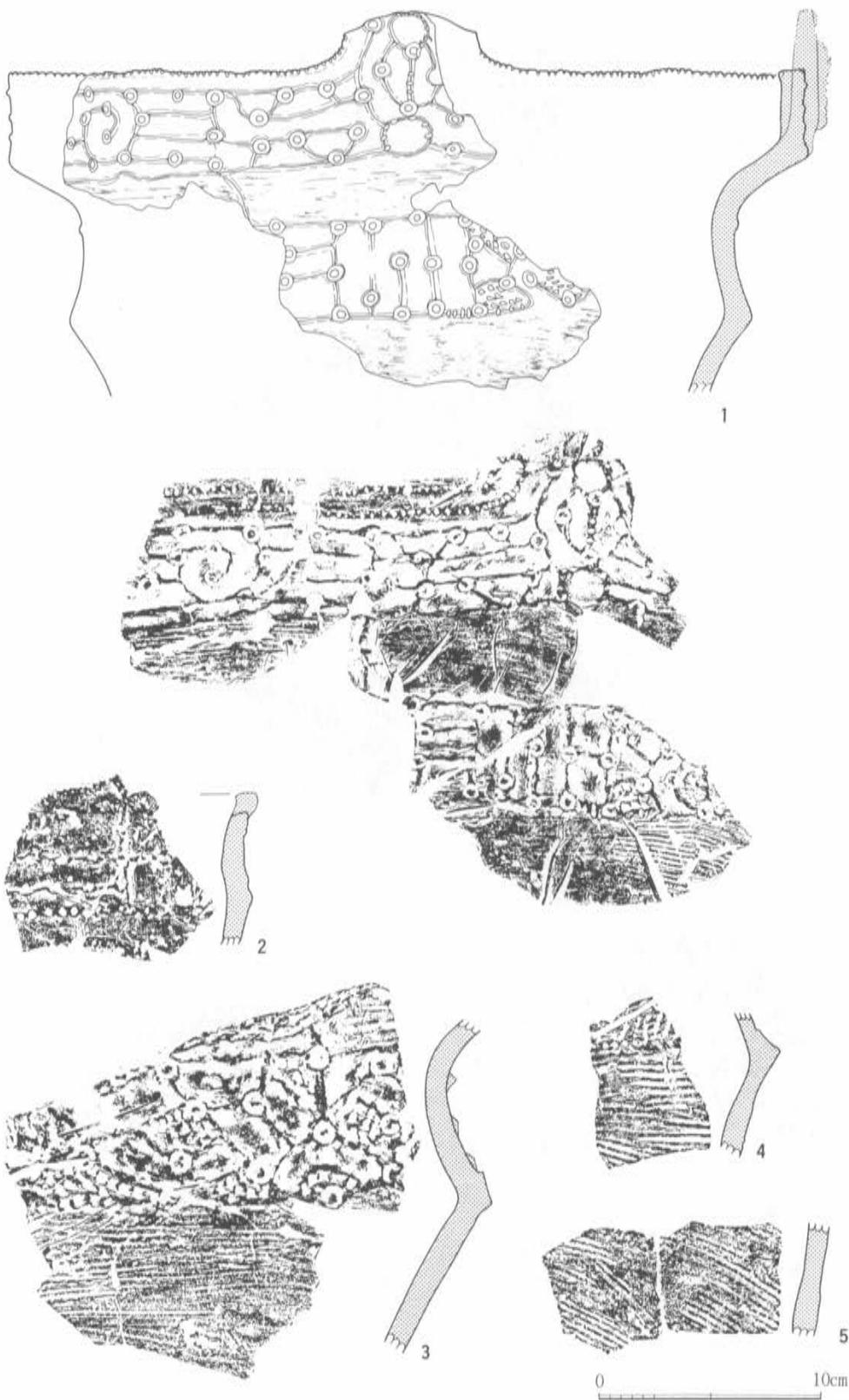
4は胴部の屈曲部の破片で、一部に胴部文様帯が見られる。地文として条痕文を横位に施した後、沈線により幾何学文を作出するもので、竹管による円形刺突文や幾何学文部を飾る刺突文等が認められる。胴下半部はすべて条痕文による調整がなされる。5は胴部の条痕文の破片と考えられる。斜位の条痕が認められる。鶺鴒ケ島台式土器であろう。

006号炉穴（6～12）

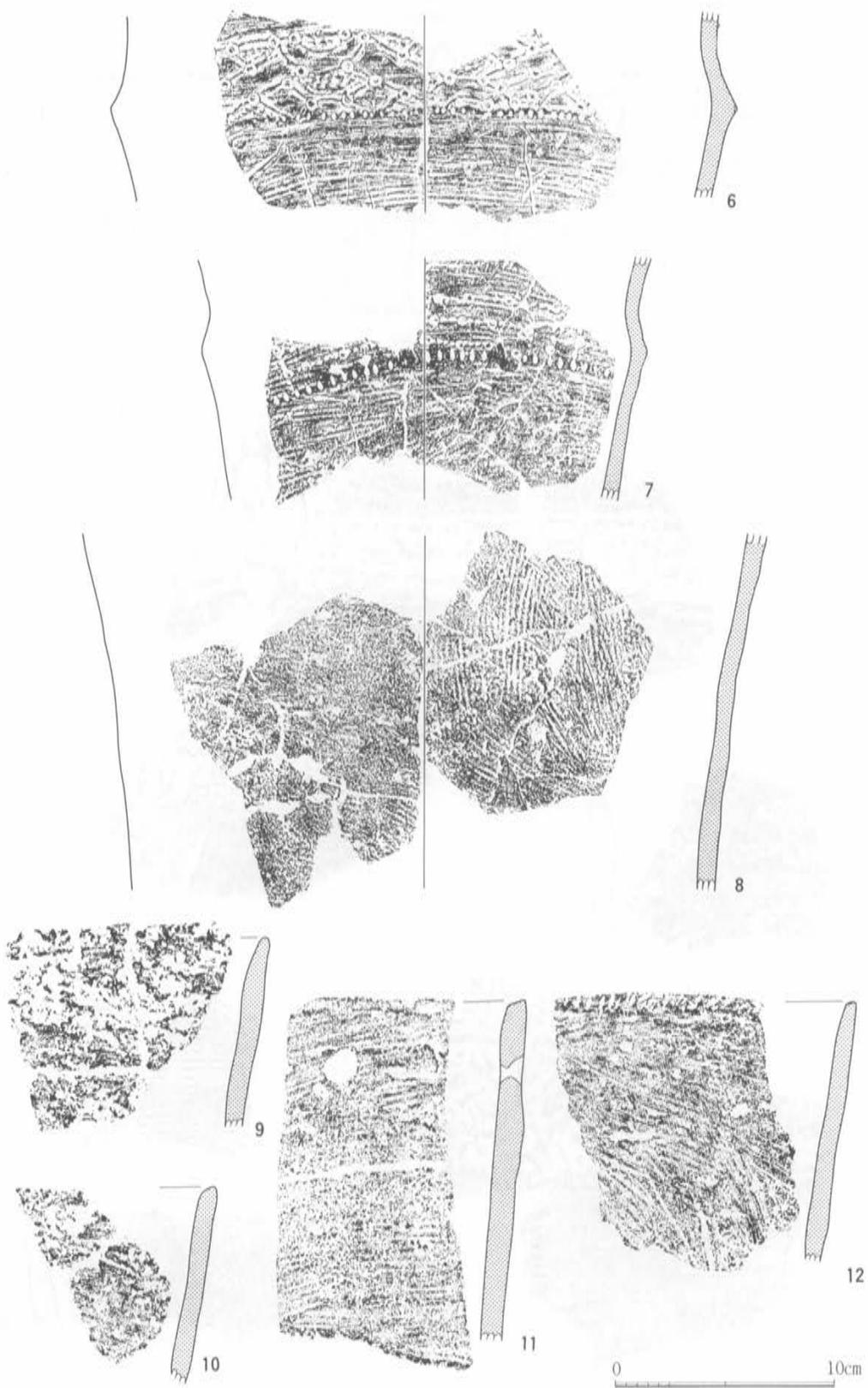
6は口縁部が存在しないため口縁部からの器形は判然としないが、口縁部から直行もしくは若干外反するもので、口縁部直下で屈曲しながら胴部に移行し、胴部で1段の稜を持つ深鉢形土器と考えられる。胎土にはやや多くの植物繊維を含む。稜部には刻み目が施される。文様は地文として横位の条痕文を施した後、微隆起線文を主文様とし、幾何学文を作出している。文様帯は2段に構成されると考えられ、この文様帯は胴部の文様帯である。胴部文様帯には鋸歯状のモチーフを基本とし、三角形内及び逆三角形内に曲線的・斜線的な微隆起線により文様を作出する。幾何学文の内部には半月状の刺突文を多用する部分が存在する。また、微隆起線文の接点等には竹管を用いた円形刺突文が施される。7も口縁部が存在しないため口縁部からの器形は判然としないが、6と同様の器形を呈すると考えられる。胎土にはやや多くの植物繊維を含み、稜部には刻み目が施される。文様は地文として横位の条痕文を施した後、刺突文を主文様とし、幾何学文を作出している。文様帯は2段に構成されると考えられ、この文様帯は胴部の文様帯である。胴部文様帯には半截竹管を用いた連続刺突文が横位・縦位に施される。刺突文の接点等には竹管を用いた円形刺突文が施される。8～12は条痕文のみを施すものである。器形は口縁部から胴部にかけて屈曲が見られず、そのまま底部に至ると考えられる深鉢形土器であろう。胎土にはやや多くの植物繊維を含む。口唇部の形態は尖頭状を呈するものが多いようで、11のような内削ぎ状のものも存在する。12の口唇部には刻み目が施される。器面には粗い条痕文が横位・縦位・斜位に施される。すべて鶺鴒ケ島台式土器であろう。

009号炉穴（13）

13は無文の土器である。胎土に植物繊維を僅かに含み、焼成が良好であるが、器面に凹凸が



第11图 002(1~3)号炉穴,004(4·5)号土坑出土土器

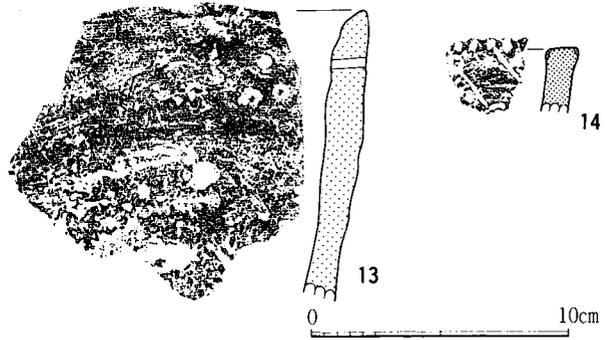


第12图 006(6~12)号炉穴出土土器

見られ、調整が粗雑である。また、一部分に焼成前の穿孔がなされる。口唇部形態が尖頭状を呈する。子母口式土器であろう。

010号炉穴 (14)

14は口唇部形態が内削ぎ状を呈し、口唇部内外の側縁部には刻み目が施される。胎土に植物繊維をやや多く含む。文様は沈線文を主文様とし、幾何学文を作出するも

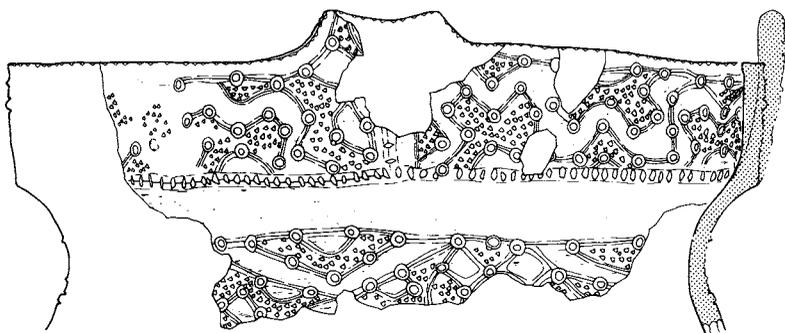


第13図 009(13)・010(14)号炉穴出土土器

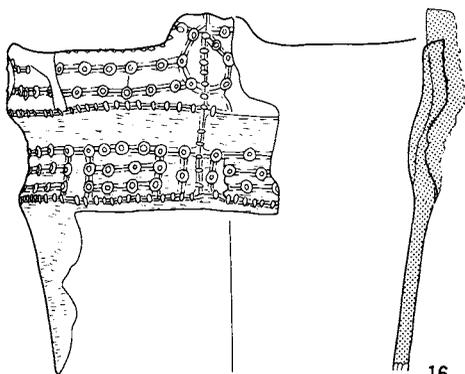
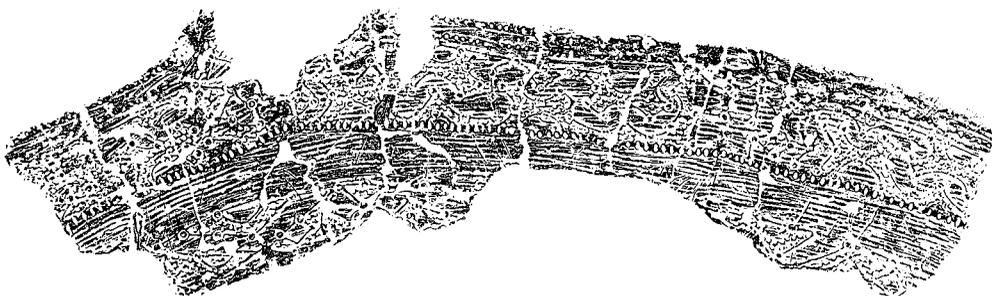
ので、斜位の沈線文及び、円形竹管文が観察できる。鶉ヶ島台式土器である。

021号炉穴 (15~18)

15は口縁部に小波状の突起を持ち、直行もしくは若干外反するもので、口縁部直下で顕著に屈曲しながら胴部に移行し、胴部で1段の稜を持つ深鉢形土器である。口唇部内外の側縁部に刻み目を有する。胎土にはやや多くの植物繊維を含む。小波状部は隆帯を用い、厚手となる。隆帯や稜部には刻み目が施される。文様は地文として横位の条痕文を施した後、微隆起線文を主文様とし、幾何学文を作出している。文様帯は2段に構成され、口縁部直下の文様帯には、小波状部で、微隆起線文が同心円状・直線状に、それ以外の部分で、曲線的な微隆起線文により幾何学文を作出する。幾何学文の一部には半月状の刺突文が多用され、また、微隆起線文の接点等には竹管を用いた円形刺突文が施される。胴部の文様帯には、鋸歯状の微隆起線文を主文様として曲線的な微隆起線文により文様を施す。幾何学文の内部には半月状の刺突文を多用する部分が存在する。また、微隆起線文の接点等には竹管を用いた円形刺突文が施される。16は口縁部が小波状の突起を持ち、直行もしくは若干外反するもので、口縁部直下で顕著に屈曲しながら胴部に移行し、胴部で1段の稜を持つ深鉢形土器である。口唇部内外の側縁部に刻み目を有する。胎土にはやや多くの植物繊維を含む。小波状部は隆帯を用い、厚手となる。隆帯や稜部には刻み目が施される。文様は地文として横位の条痕文を施した後、微隆起線文を主文様とし、幾何学文を作出している。文様帯は2段に構成され、口縁部直下の文様帯には、小波状部で、微隆起線文が同心円状に、それ以外の部分で、横位の微隆起線文を基本とし、平行線的な微隆起線文が観察できる。また、微隆起線文の接点等には竹管を用いた円形刺突文が施される。胴部の文様帯には縦位・横位の微隆起線文により文様帯を分帯し、分帯された文様帯に横位の微隆起線文を、数条、平行に施す。微隆起線文の接点等には竹管を用いた円形刺突文が施される。17は胴下半部の条痕文部の破片で、斜位の条痕文が観察できる。18は胴部の幾何学文部の破片である。これらはすべて、鶉ヶ島台式土器である。



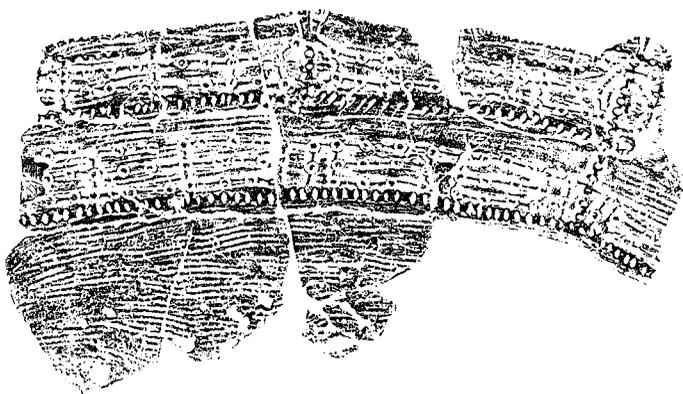
15



16



17



18

0 10cm

第14图 021(15~18)号炉穴出土土器

022号炉穴 (19~30)

19は小波状口縁部を呈し、口縁部が直行もしくは若干外反するもので、口縁部直下で顕著に屈曲しながら胴部に移行し、胴部で1段の稜を持つ深鉢形土器である。口唇部内外の側縁部に刻み目を有する。胎土にはやや多くの植物繊維を含む。隆帯や稜部には刻み目が施される。文様は地文として横位の条痕文を施した後、刺突文を主文様とし、幾何学文を作出している。文様帯は2段に構成され、口縁部直下の文様帯には、半截竹管を用いた連続刺突文が横位に施文され、部分的に斜位にも施される。胴部の文様帯も同様で、横位の連続刺突文を基本とし、部分的に斜位の刺突文が施される。21, 23~26も同様である。20は口縁部の破片で、口唇部形態が角頭状を呈し、口唇部の外側側縁部に刻み目が施される。文様は、沈線文を主文様とするもので、曲線的な沈線文により幾何学文が描出される。幾何学文部には角押状の刺突文が多用される部分が存在し、また、沈線文の接点等には円形刺突文が施される。22, 27~30は条痕文のみが施されるものである。条痕文は29がやや顕著に施されている他は、浅く擦痕的である。口唇部には刻み目が施され、22の口唇部の刻み目は縦位と斜位のものが見られる。これらはすべて、鶺鴒ヶ島台式土器であろう。

023号炉穴 (31~37)

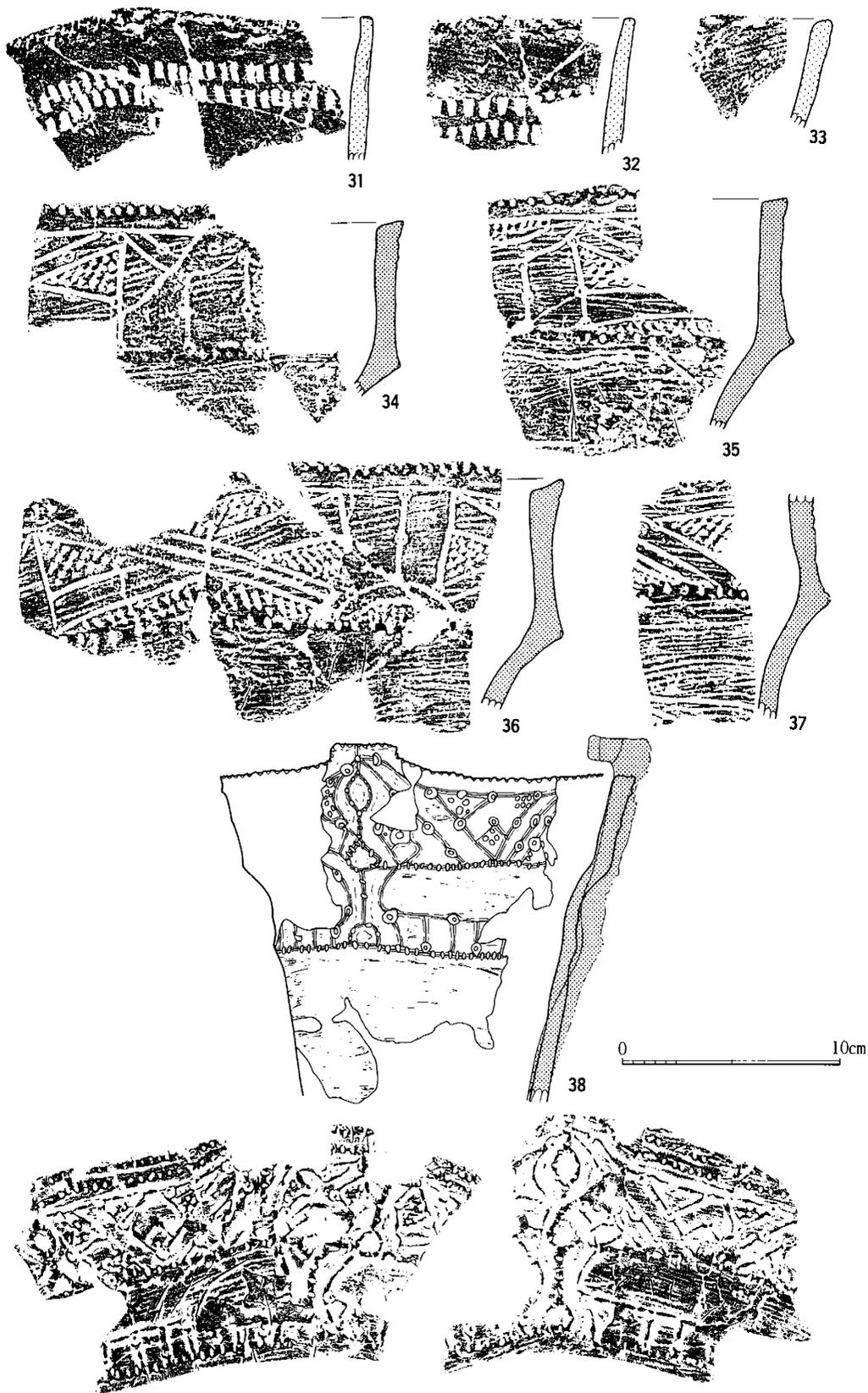
31~33は子母口式土器である。31・32は同一個体と考えられ、口縁部が小波状を呈し、口縁部から直行する深鉢形土器である。胎土には植物繊維を僅かに含み、焼成の良好な土器である。口唇部形態は角頭状を呈し、口唇部上に絡条体圧痕文が施される。器面には擦痕が見られ、文様は口縁部直下に集約される。口縁部直下に集約された文様は刺突文によるもので、口縁部に沿って、波状に刺突文が2条にわたって施文される。34~37は同一個体と考えられる鶺鴒ヶ島台式土器である。器形は、口縁部が直行もしくは若干外反するもので、口縁部直下で顕著に屈曲しながら胴部に移行し、胴部で1段の稜を持つ深鉢形土器である。口唇部内外の側縁部に刻み目を有する。胎土にはやや多くの植物繊維を含み、稜部には刻み目が施される。文様は、横位の条痕文を地文として、沈線文を主文様とし、幾何学文を描出する。文様帯は2段に構成されと考えられる。口縁部直下の文様帯には、縦位の沈線により文様帯を分帯し、分帯された文様帯に幾何学文が作出される。縦位沈線により分帯された部分には弧線状の沈線が見られ、また、部分的に円形竹管文が認められる。幾何学文はX字状文を基本とし、出来上がった三角形内に半月状の刺突文が多数施される。胴部の文様帯は不明であるが、37の一部に斜位沈線文が見られることから、口縁部文様帯と同様な幾何学文が施文されるものかもしれない。

024号炉穴 (38)

38は口縁部が小波状の突起を持ち、直行もしくは若干外反するもので、口縁部直下で屈曲しながら胴部に移行し、胴部で1段の稜を持つ深鉢形土器である。口唇部内外の側縁部に刻み目を有する。小波状部は隆帯が施され、厚手となる。胎土にはやや多くの植物繊維を含み、稜部



第15图 022(19~30)号炉穴出土土器



第16图 023(31~37)·024(38)号炉穴出土土器

には刻み目が施される。文様は地文として横位の条痕文を施した後、微隆起線文を主文様として、幾何学文を作出している。文様帯は2段に構成されと考えられる。口縁部直下の文様帯は、小波状部は隆帯を中心に同心円状の微隆起線文が施され、それ以外の部分に、鋸歯状のモチーフを基本とし、三角形及び逆三角形の文様を作出する。出来上がった三角形・逆三角形内には曲線的・斜線的な微隆起線により文様を施す。幾何学文の内部には半月状の刺突文を多用する部分が存在する。また、微隆起線文の接点等には竹管を用いた円形刺突文が施される。胴部の文様帯は横位の微隆起線文を基本として、そこから縦位の微隆起線文を施す。微隆起線文の接点には交互に円形竹管文が施文される。

0 2 5号炉穴 (65・66)

65・66は口縁部が直行もしくは若干外反するもので、口縁部直下で顕著に屈曲しながら胴部に移行し、胴部で1段の稜を持つ深鉢形土器である。口唇部内外の側縁部に刻み目を有する。胎土にはやや多くの植物繊維を含み、稜部には刻み目が施される。文様帯は2段に構成される。65が口縁部直下の文様帯部の破片、66が胴部の文様帯部の破片である。文様は地文として横位の条痕文を施した後、沈線文を主文様として幾何学文を作出するものである。幾何学文の内部には半月状の刺突文を多用する部分が存在し、また、沈線文の接点等には竹管を用いた円形刺突文が施される。

0 3 0号炉穴 (67・68)

67は口縁部に小突起を持つ破片で、口縁部から垂下する隆帯と、器面には擦痕的な条痕文が認められる。68は胴部の隆帯部の破片で、隆帯上に刻み目が施される。横位の条痕文が顕著に観察できる。これらは茅山下層式土器であろう。

0 3 1号炉穴 (69)

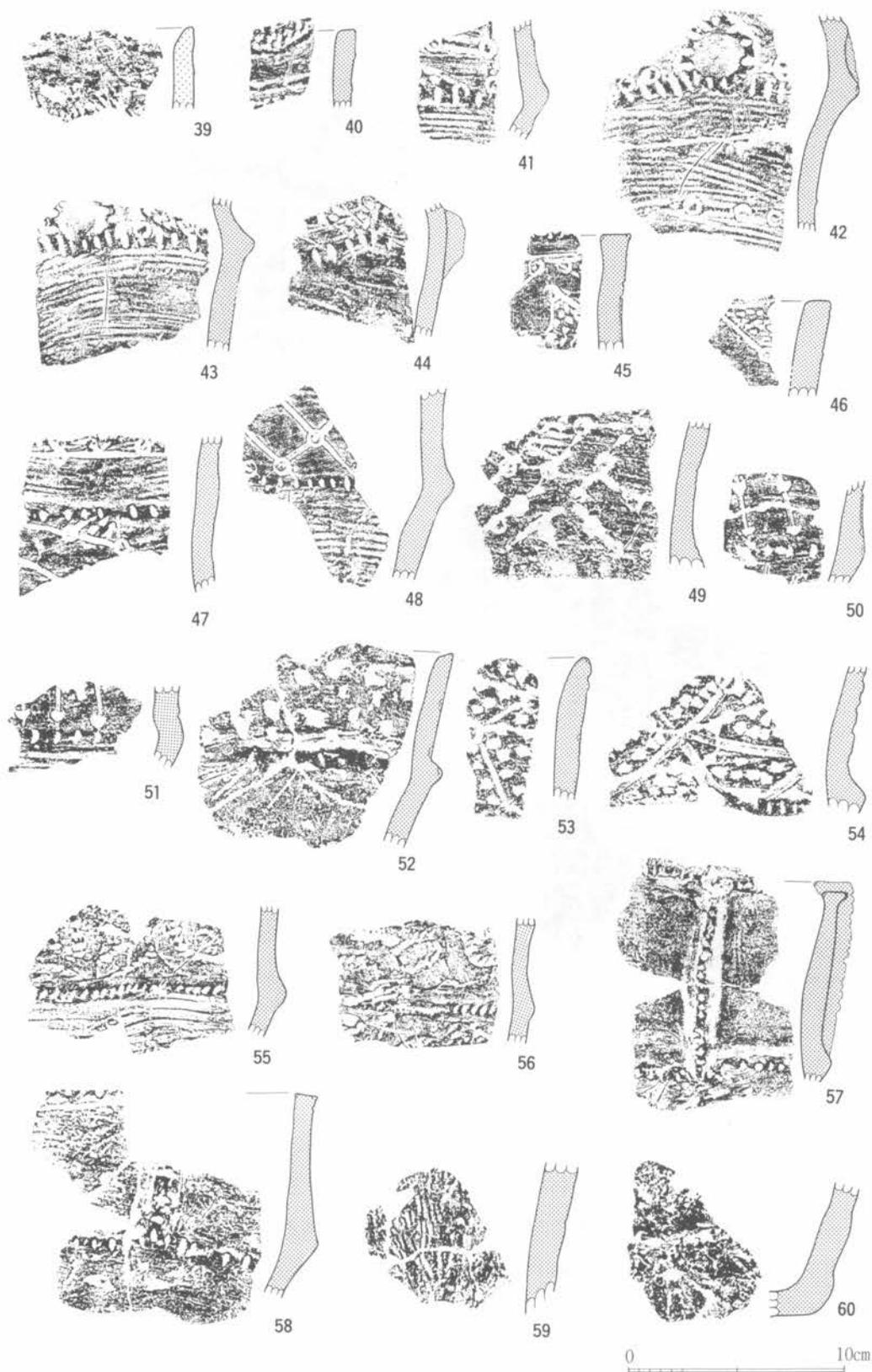
69は条痕文のみが施されるものである。口唇部形態が内削ぎ状を呈する。条痕文は横位に施され、顕著に観察できる。帰属時期は不明である。

0 3 2号炉穴 (70)

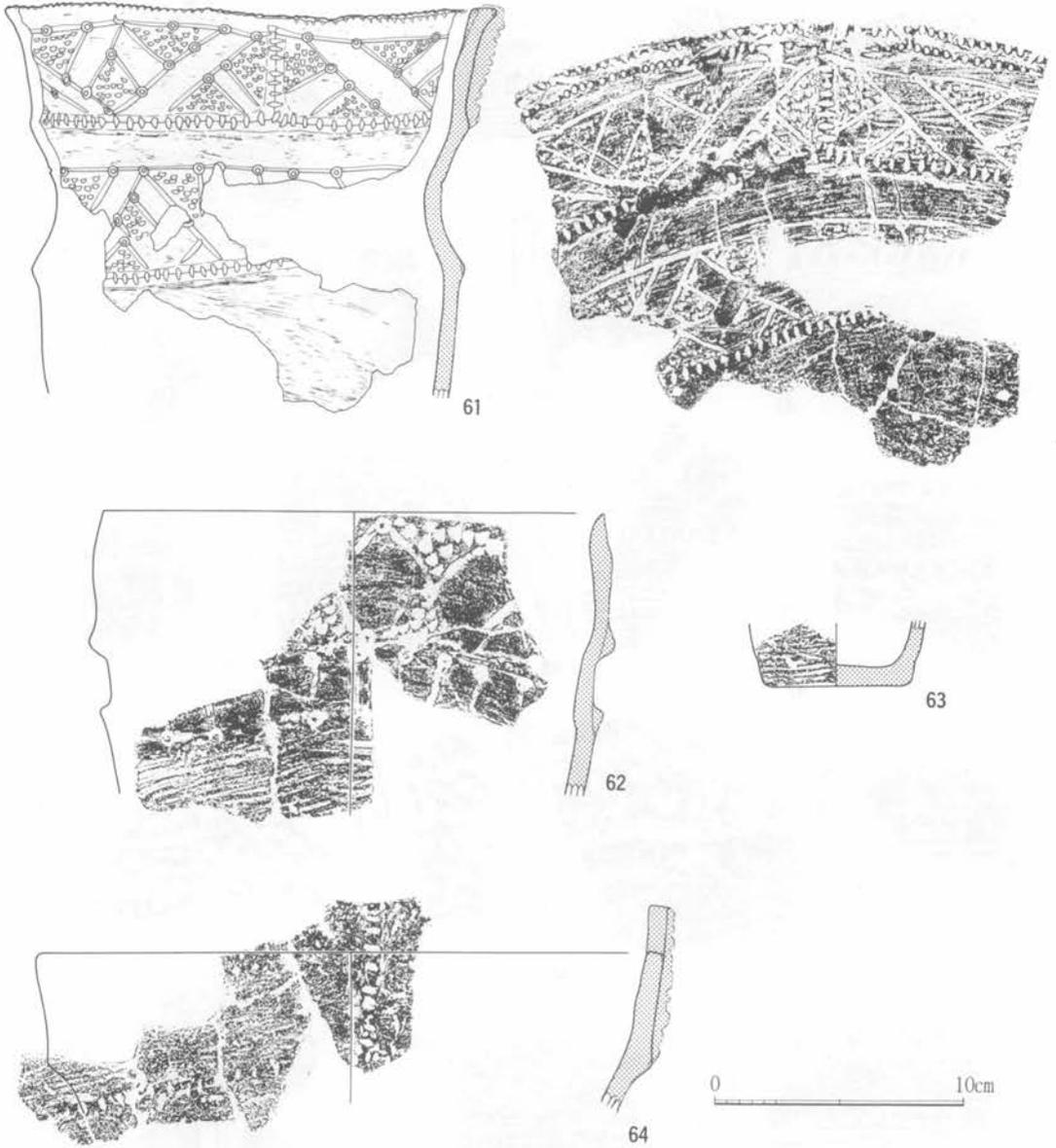
70は鶉ヶ島台式土器の口縁部文様帯部の破片である。胎土に植物繊維を多量に含み、二次的な焼成により、かなり脆くなっている。文様は微隆起線文を主文様とし、幾何学文を作出する。横位・斜位の微隆起線文の他、半月状の刺突文や円形刺突文等が見られる。

0 3 3号炉穴 (39～64)

39は子母口式土器である。胎土に植物繊維を僅かに含み焼成の良好な土器である。口唇部形態は尖頭状を呈し、器面に斜位の擦痕文が観察できる。40～56、61・62は鶉ヶ島台式土器である。40～44は微隆起線文を主文様とするものである。文様要素として、横位・縦位・斜位・曲線的な微隆起線文や円形刺突文等の他、幾何学文の一部に施される刺突文等が見られる。45～51、53・54、61・62は沈線文を主文様とするものである。45は直線的な沈線文と曲線的な沈線文に



第17图 033(39~60)号炉穴出土土器1)



第18図 033(61~64)号 炉穴出土土器2)

より幾何学文を作出する。いずれも円形刺突文や半月状の刺突文等が見られる。46は鋸歯状の幾何学文を作出するものである。48は格子状の文様を作出し、交差部に円形の刺突文が見られる。49~51, 53・54は沈線が粗雑である。49は斜位の沈線を基本とし、Y字状・逆Y字状の幾何学文を作出するものであろう。50・51は縦位の沈線文が基本となる。53・54は格子状の沈線文が基本となり、幾何学文部に空白をあけることなく刺突文が施文される。61は口縁部が平縁を呈し、若干外反する。口縁部直下で屈曲しながら胴部に移行し、胴部で1段の稜を持つ深鉢形土器である。口唇部内外の側縁部に刻み目を有し、胎土にはやや多くの植物繊維を含む。部

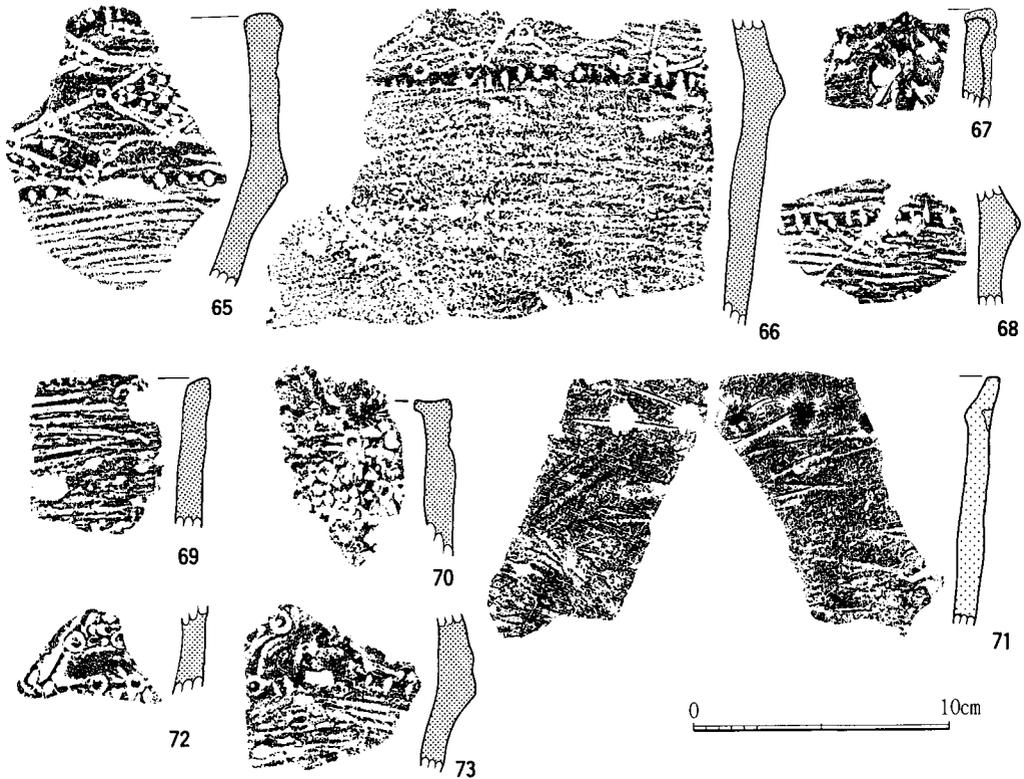
分的に隆帯を用い、厚手となる。隆帯や稜部には刻み目が施される。文様は地文として横位の条痕文を施した後、沈線文を主文様とし、幾何学文を作出している。文様帯は2段に構成され、口縁部直下の文様帯には、縦位の隆帯を起点とし、鋸歯状文が作出される。これにより出来上がった三角形や逆三角形内に斜位の沈線が施され、全体としてY字状文や逆Y字状文が描出される。幾何学文部には部分的に半月状の刺突文が施され、また、微隆起線文の接点等には竹管を用いた円形刺突文が施される。胴部の文様帯も同様な文様が施されるものと思われる。62は口縁部が平縁を呈し、直行もしくは若干外反する。口縁部直下で僅かに屈曲しながら胴部に移行し、胴部で1段の稜を持つ深鉢形土器である。胎土にはやや多くの植物繊維を含む。口縁部文様帯は沈線を菱形状に施文し、菱形の外側の三角形内に刺突文が施される。また、沈線文の交点には円形竹管文が施される。胴部文様帯は口縁部文様帯との間隔がなく、稜部と稜部を結ぶかのように縦位の沈線文が施文される。稜部と沈線文との交点には円形竹管文が施文される。胴下半部は横位の条痕文が顕著に観察できる。この土器は鶺鴒ヶ島台式土器でも後出のものと考えられる。52、55・56は刺突文を主文様とするものである。52は口縁部の破片で、口縁部文様帯に刺突文が不規則に施される。55・56は胴部文様帯の破片で、爪形状の刺突文が曲線的に描かれる。57・58、64は茅山下層式土器である。口縁部から垂下する隆帯と口縁部直下に施されたタガ状の隆帯を主文様とする。隆帯上には刻み目が施される。胎土に植物繊維をやや多く含む。器面には擦痕状の条痕文が観察できる。64は口縁部に小波状の突起を持ち、直行もしくは若干外反するもので、口縁部直下で顕著に屈曲しながら胴部に移行する深鉢形土器である。口唇部内外の側縁部に刻み目を有する。胎土にはやや多くの植物繊維を含む。小波状部は隆帯を用い、厚手となる。文様は擦痕的な条痕文を地文とし、小波状部から垂下する隆帯と口縁部直下に施されたタガ状の隆帯とにより構成される。隆帯上には刻み目が施される。59・60、63は条痕文のみが施される土器である。59は縦位の条痕文が見られる。60は底部の破片で、平底となる。63は横位の条痕文のみが施された底部破片で、平底となる。

035号炉穴(71)

71は子母口式土器である。口縁部が若干外反する深鉢形土器と考えられ、口唇部形態が角頭状を呈する。胎土に微量の植物繊維を含み、焼成の良好な土器である。器面には擦痕文が縦横無尽に観察される。文様は円孔文によるもので、口縁部直下に集約される。円孔文は貫通せず、内面が盛り上がった状態となっている。

042号溝(72・73)

72・73は微隆起線文を主文様とする鶺鴒ヶ島台式土器である。地文として横位の条痕文を持ち、曲線的・斜線的な微隆起線文により幾何学文が作出される。幾何学文の一部には半月状の刺突文が多用され、また、微隆起線文の接点などには円形竹管文が施される。



第19図 025(65・66)・030(67・68)・031(69)・032(70)・035(71)号炉穴,
042(72・73)号溝出土土器

遺構出土石器 (第20～22図, 図版11)

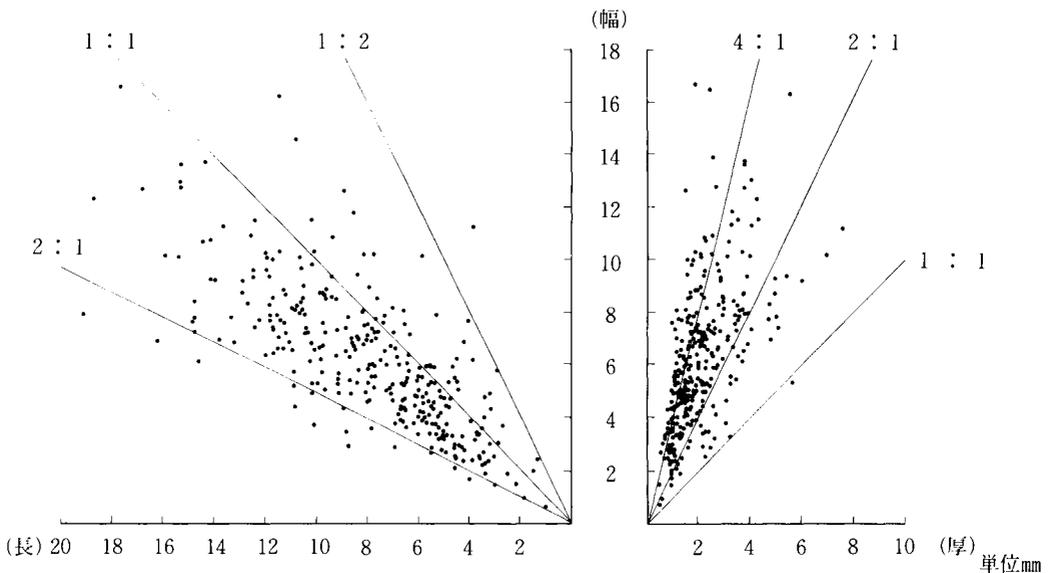
1～8 bは004号竪穴状遺構出土の石器である。本遺構からは総数342点の石器が検出されている。器種組成は石鏃1点, 石鏃未成品2点, 楔形石器3点, 剥片6点, 二次加工のある剥片1点, 碎片329点である。石材は, 黒曜石の碎片1点を除いてすべて石英班晶の入る白色の流紋岩であり, 同一の母岩で構成される。これらの石器類は石鏃の石器製作に関わる資料と予測され, 製作工程的な視点でこれらの資料を見ていくこととする。

1は石鏃である。平面形は二等辺三角形を基調とし側縁が直線的で基部が浅く抉入するものであり, 比較的小型であるが厚みはあり, 縦断面が凸レンズ状になることが注目される。2は石鏃未成品とした。幅広横長剥片の一端に微細な調整を加え尖端部を作出し, 右側縁にも厚みを取る調整が見られる。3は二次加工のある剥片である。背面に節理のある縦長剥片の右側縁に背面側から調整が施される。素材の打面部を尖るように除去する剥離も観察されることから, あるいは石鏃の未成品の可能性もある。4・5は楔形石器である。4は幅広横長剥片の尾部を切断して, 左右末端を打撃点とした両極技法が用いられる。長軸の上下端に階段状の剥離痕が看取され, また右側縁には細部加工が観察される。5の平面形は長方形に近く, 上下両端は平行する線状打面を呈する。右側縁の表裏が調整加工され, 丸味を帯びた側縁を形成し, 石鏃を

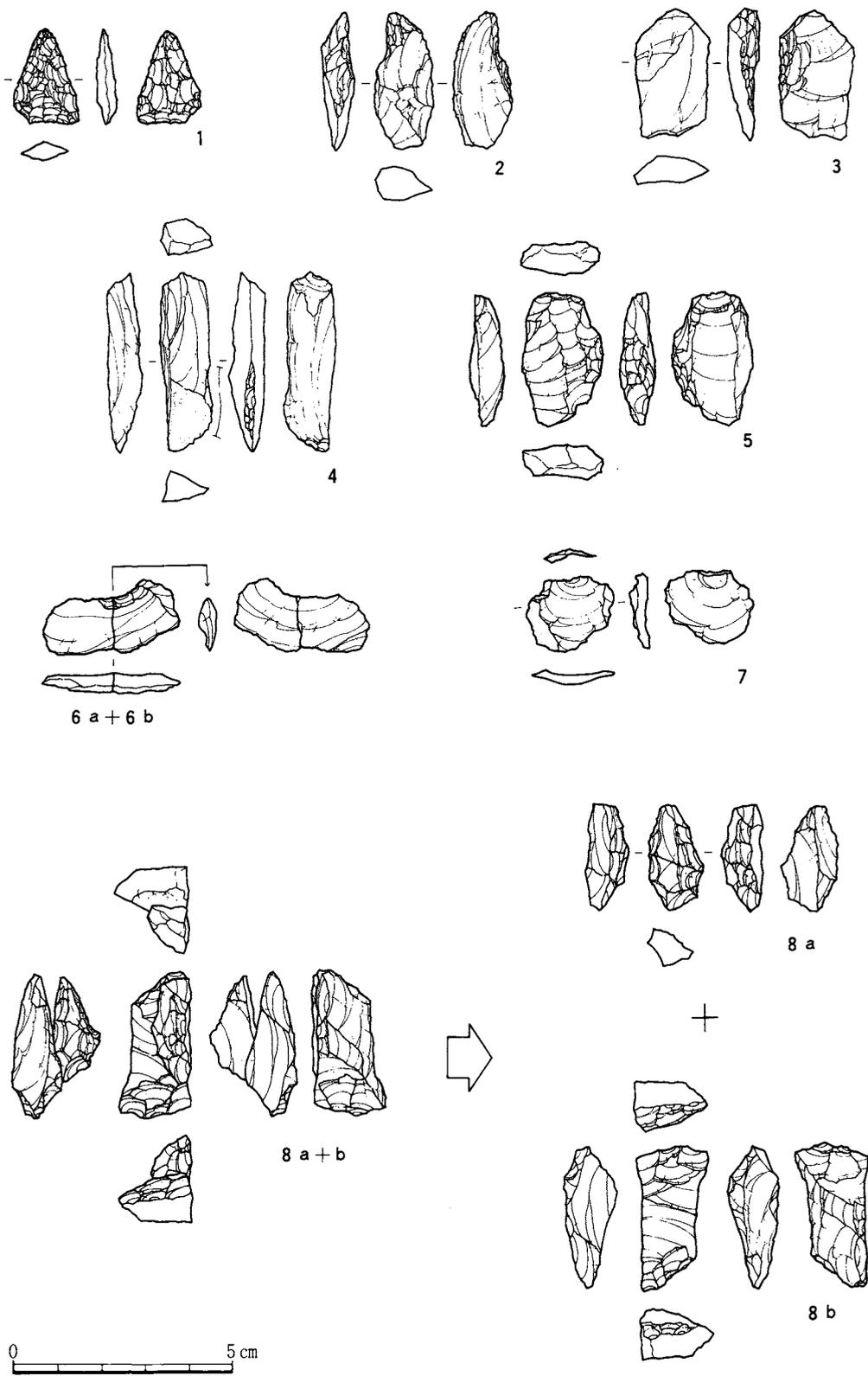
製作する意図が読み取れる資料である。6・7は剥片である。2点とも横長剥片であり、背面構成から同一方向の打面からの剥離作業が見られる。8 a・bは石鏃未成品（8 a）と楔形石器（8 b）の接合資料である。8 b裏面には素材の主要剥離面と思われる横方向からのポジティブな剥離面が残り、接合図右側面には平坦な剥離が対向して入り、素材を横位に折断していることが理解される。この素材切断は4の楔形石器における素材作出過程と同様のものである。またこのことから楔形石器の素材をある程度角柱状に仕上げることが推測される。この素材の長軸方向から両極技法により8 aと8 bに分割され、8 aはその後周縁に調整加工が加えられる。8 aは調整加工が進行しているため、楔形石器を素材としているかどうか判然としないが、この素材から石鏃を意図して調整を行ったものであろう。素材が小さすぎたためか、裏面の剥離が抉られるように入っているためか、途中で製作を放棄している。8 bは分割された後も数回の打撃により、上下端が平行する線状打面で縦断面が凸レンズ状の楔形石器を作出している。5の楔形石器の調整からみて、8 aの楔形石器もそれ自体が石鏃の素材となる性格（一種のツール・ブランク的性格）を保持すると解釈される。

第20図は本遺構出土の碎片の長・幅，厚・幅比分布図である。長幅ではやや長さが上回る比率にまとめ、厚幅では1：2から1：4の比の幅にまとまる。この碎片はほとんどが石鏃の調整加工の過程で作出された調整碎片と思われ、これらの調整碎片の存在からも本遺構での石鏃製作が傍証される。

9は006号炉穴出土の石鏃である。黒曜石製であり、脚部が尖るように弧状に抉れる。裏面に主要剥離面を残存する。10は008号炉穴出土の細部加工のある剥片である。左側縁に部分的に調

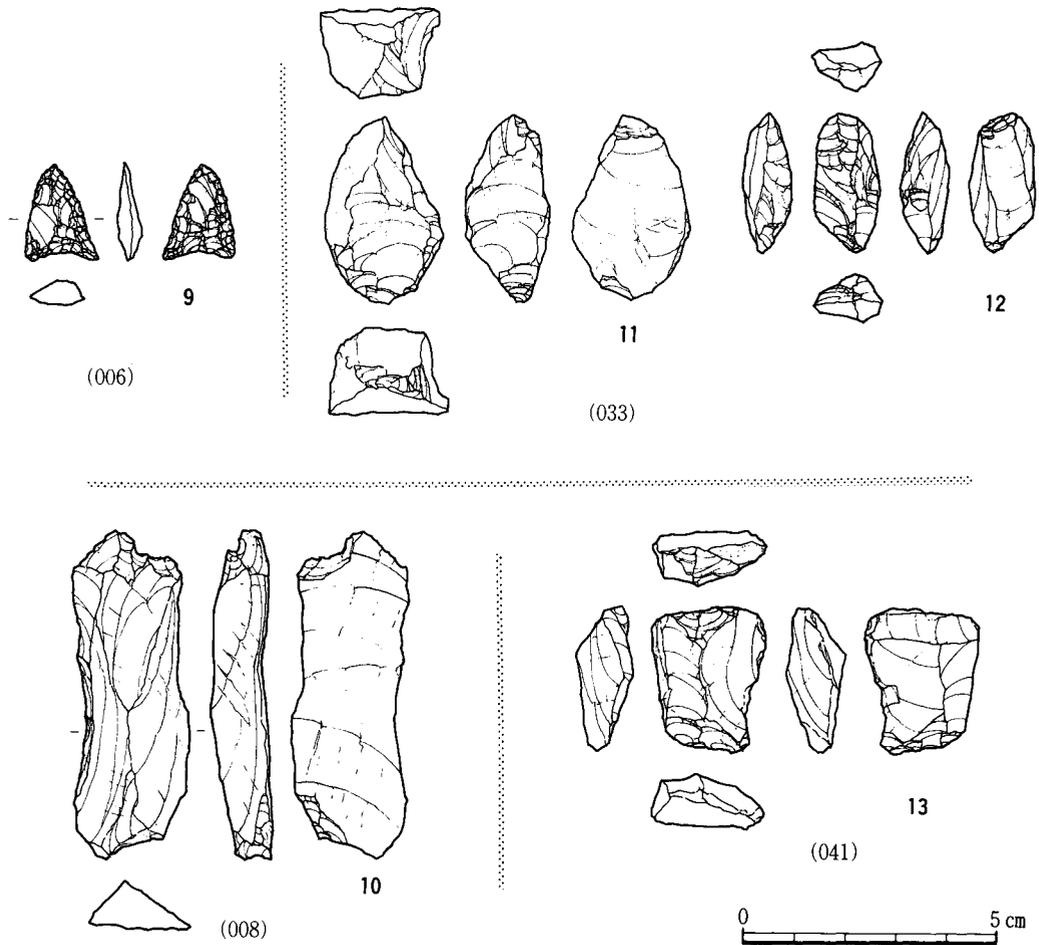


第20図 004号土坑 碎片長・幅，厚・幅分布図



第21图 004号土坑出土石器

整が入る。縦長剥片の上下端に弾けたように剥離痕が入るので、あるいは両極剥離による楔形石器の可能性もある。11・12は033号炉穴出土の楔形石器である。11は表面に自然面を持ち、小楕円礫を分割したもので、上下端に点状の打面と細かな階段状剥離を持つ。12は表裏に抜けるような長い剥離痕があるもので、上端は線状打面で、下端は点状打面となる。13は041号溝出土の楔形石器である。縦方向からの打撃により階段状剥離痕が看取される。その後に素材を横位に立て加撃が行われているようである。



第22図 006・008・033号炉穴，041号溝出土石器

第1表 遺構出土石器計測表

図版番号	器種	石材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号	図版番号	器種	石材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号
1	石	鉄	21.1×10.5×4.2	1.0	004-0118	8a	石 鉄未成品	流紋岩	23.3×13.0×9.6	4.6	004-0258
2	石 鉄未成品	流紋岩	30.7×13.2×7.1	2.3	004-0094	8b	楔形石器	流紋岩	32.1×16.1×11.3	4.6	004-0285
3	細部加工を有する剥片	流紋岩	29.3×17.3×6.8	2.8	004-0023	9	石	鉄	17.7×10.5×4.5	0.9	006-0015
4	楔形石器	流紋岩	39.8×10.6×7.7	3.6	004-0117	10	細部加工を有する剥片	流紋岩	63.2×19.4×11.1	13.9	008-0001
5	楔形石器	流紋岩	29.2×18.2×7.9	3.3	004-0335	11	楔形石器	流紋岩	35.8×23.6×16.1	9.4	033-0001
6a	剥片	流紋岩	16.2×16.0×3.9	0.8	004-0354	12	楔形石器	流紋岩	26.5×13.1×8.9	2.3	033-0009
6b	剥片	流紋岩	16.2×14.7×3.9	0.7	004-0261	13	楔形石器	流紋岩	27.8×22.1×10.8	5.4	041-0004
7	剥片	流紋岩	16.1×18.6×3.5	0.7	004-0226						

第2節 グリッド出土遺物

土器（第23～30図，図版8～11）

本遺跡より出土した土器はすべて縄文時代早期の土器である。撚糸文系土器を第I群，沈線文系土器を第II群，条痕文形土器を第III群とし，文様・胎土・器面調整等の諸特徴から分類し，説明を加える。

第I群土器（5）

5は口唇部形態が内側に肥厚する丸頭状を呈するもので，口縁部直下から縦位の単節縄文（LR）が施される。

第II群土器（6～16）

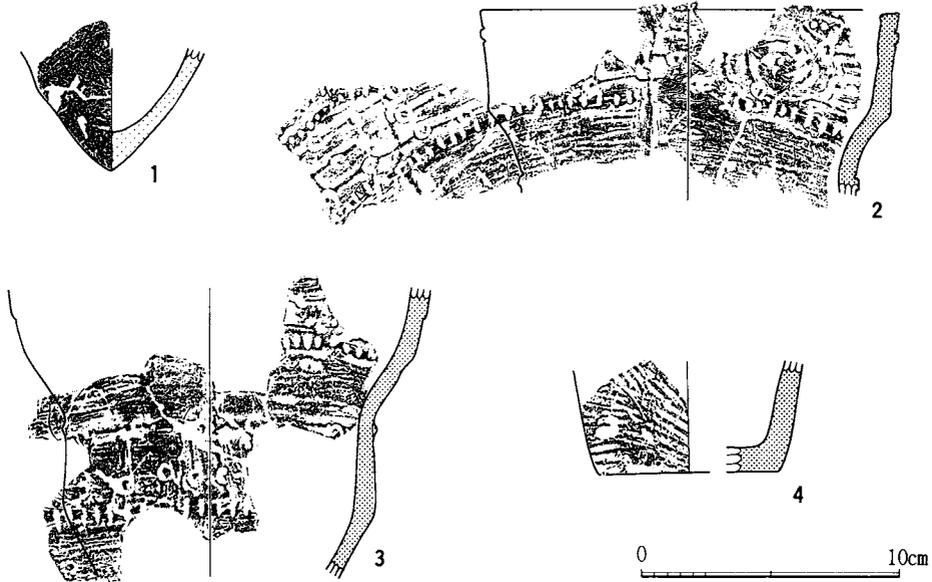
沈線文系土器である。本遺跡より出土した沈線文系土器は全て田戸下層式土器である。6は胴部の幾何学文部の破片である。細沈線により菱形状（あるいは平行四辺形）の文様を施し，部分的に貝殻腹縁文を施す。後述する太沈線を主文様とする土器群より古い要素を持っている。7～16は太沈線を主文様とするものである。7は口唇部形態が外削ぎ状を呈し，文様は太沈線文によるN字状文を施すものであろう。8～10は口唇部形態が外削ぎ状を呈し，口唇部に縦位の短沈線を施す。口縁部に平行して，太沈線文を横位に施す。太沈線文の下には細沈線が同様にめぐらされる。この細沈線は太沈線を装飾する意味での付属的な要素の文様である。11～16は胴部の破片である。11～13は胴部の幾何学文部の破片で，太沈線文を主文様として付属的な細沈線文が見られる。太沈線文内には短沈線が施され，ハシゴ状を呈する。14は太沈線文を主文様として細沈線文が施される幾何学文部の破片である。15・16は文様帯を区画する部分の破片と考えられ，太沈線による平行線文が見られる。太沈線間は弧線状の沈線が施される。

第III群土器（1～4，17～214）

条痕文系土器を一括する。大きくは子母口式土器・鶺鴒島台式土器・条痕文のみのものに分けられる。子母口式土器を第1類，鶺鴒島台式土器を第2類，条痕文のみのものを第3類として以下説明を加える。

第1類（1・17～48）

胎土に微量の植物繊維を含み，内外面が繊維束などで調整され，擦痕が残る土器である。器形を窺うことのできる資料はないが，口縁部が平縁あるいは波状を呈し，口縁部から胴部にかけて若干開き，そのまま底部に至ると考えられる砲弾型の尖底土器である。口唇部形態は角頭状や尖頭状を呈するものが多く，口唇部に刻み目や刺突文等の装飾が見られるものが大部分である。文様は口縁部直下に集約されるものが主体で，若干胴部にも認められるものがある。文様要素としては，沈線文・刺突文・絡条体圧痕文等がある。17～24は沈線文を主文様とするものである。17～21は口縁部直下にハシゴ状の沈線文を幾何学状に施すものである。22・23は胴

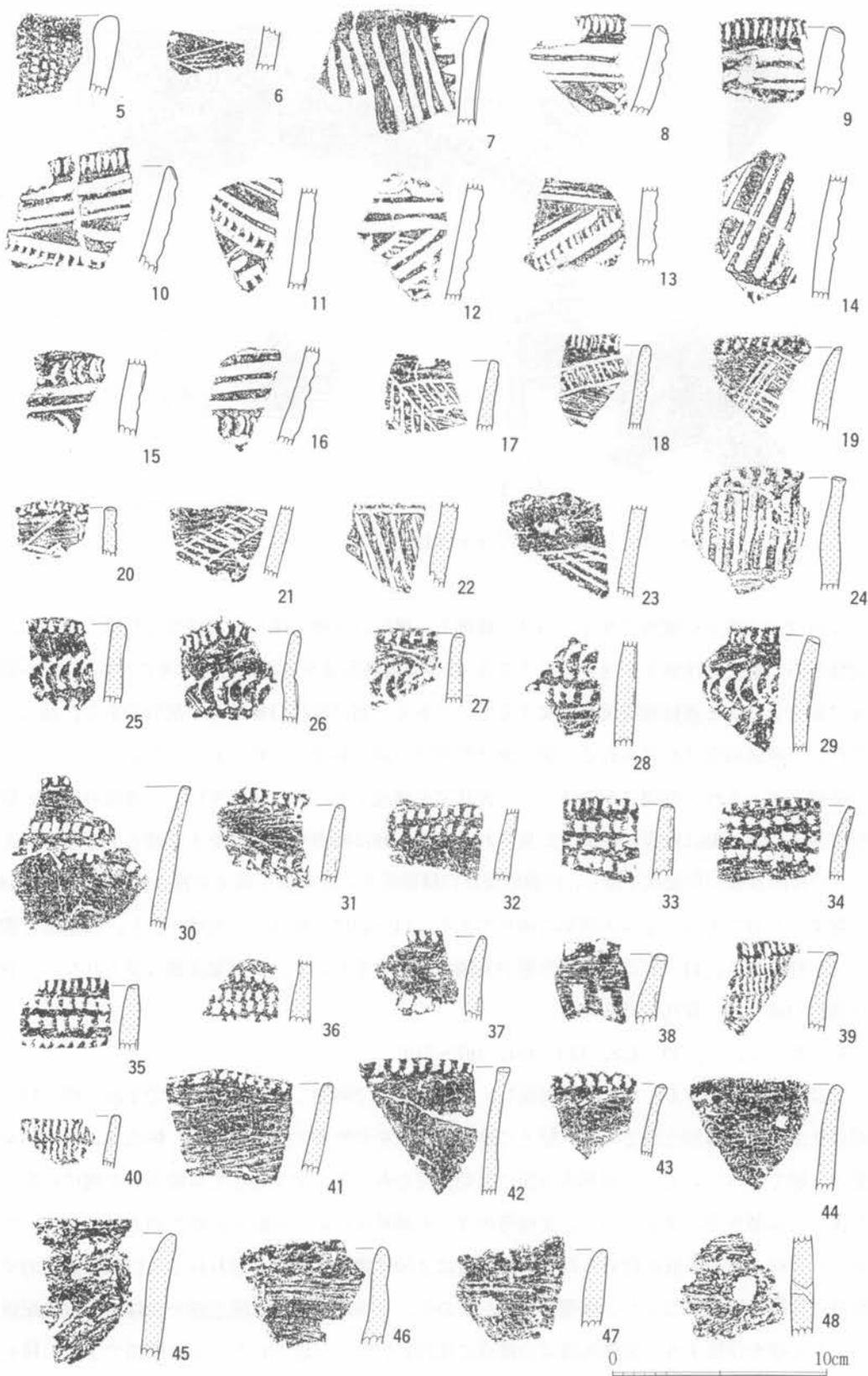


第23図 グリッド出土土器(1) (1～4)

部に斜位の沈線文が観察できる。24は口縁部下に横位の沈線を施して文様帯を作出したのち、文様帯内に縦位の沈線文を施すものである。25～38は刺突文を主文様とするものである。25～29は半截竹管による連続刺突文を施文するものである。26は波状口縁部の一部分である。28には角押状の連続刺突文が見られる。30～38は角押状の連続刺突文を施すものである。30～32は同一個体と考えられ、刺突文が全体として波状文を構成する。33～36は平行する連続刺突文が観察できる。37・38は縦長の刺突文が見られる。39・40は絡条体圧痕文を主文様とするものである。口唇部形態が角頭状を呈し、口唇部及び口縁部直下に絡条体圧痕文が施される。1・41～48は無文のものである。1は尖底部の破片である。41～43は口縁部が小波状を呈し、口唇部に刺突文が施される。44～47は口唇部形態が丸頭状を呈するもので、口唇部装飾は見られない。48は胴部の破片で、穿孔が見られる。

第2類 (2, 3, 49～128, 133～161, 167～210)

2は口縁部が直行もしくは若干外反し、口縁部直下で湾曲しながら、胴部で1段の稜を持つ器形を呈する深鉢形土器である。胎土には植物繊維をやや多く含んでおり、焼成後にやや熱を受け、脆くなっている。口唇部内外面には刻み目を有する。地文として貝殻条痕を横位に施した後に文様帯を作出するもので、文様帯内はナデ調整等により条痕文が磨り消されている。内面にも同様の貝殻条痕が認められる。文様帯は2段に構成されると思われる。口縁部直下の文様帯には微隆起線文により文様帯を分帯したのち、分帯内に平行微隆起線や曲線的な微隆起線により文様を作出する。微隆起線文の接点には円形竹管文が施される。3は胴部で1段の稜を持つ器形を呈する深鉢形土器である。胎土には植物繊維をやや多く含んでおり、焼成後にやや



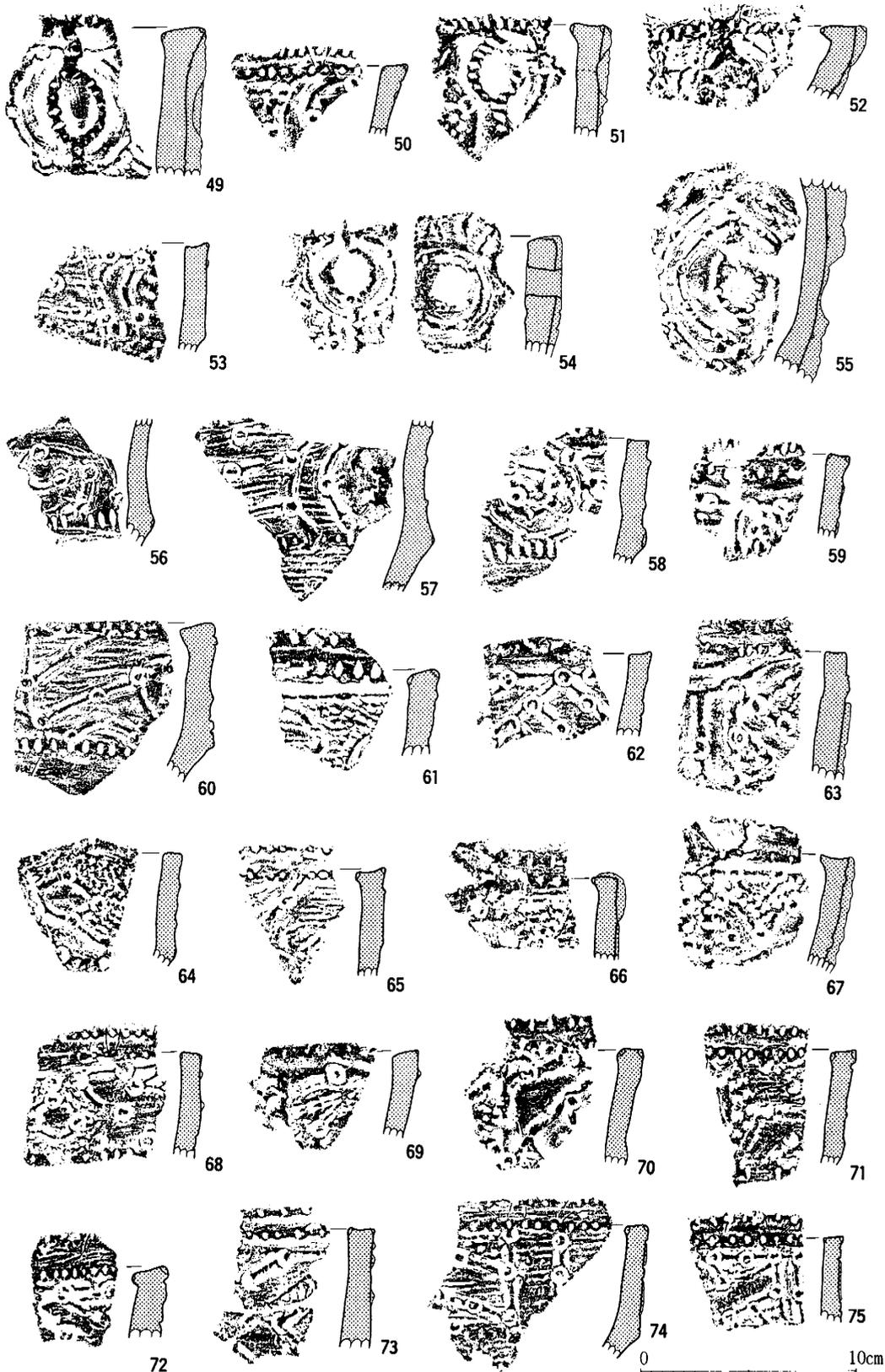
第24図 グリッド出土土器(2) (5~48)

熱を受け、脆くなっている。地文として貝殻条痕を横位に施文した後に文様帯を作出するもので、文様帯内はナデ調整などにより条痕文が磨り消されている。内面にも同様の貝殻条痕が認められる。文様帯は2段に構成されると思われる。胴部の文様帯は微隆起線文により文様帯を分帯するものである。微隆起線の接点には円形刺突文が施される。稜部の隆帯状には刻み目が施される。49～59は波頂部や把手部の破片と考えられるものである。条痕文を地文とし、縦位の隆帯を施し、それを取り巻くように微隆起線により曲線的な文様が施される。微隆起線文の接点等には円形竹管による刺突文が観察できる。また口唇部に刻み目が施されるものが多い。60～81は口縁部直下の文様帯部の破片で、直線・曲線的な微隆起線文により幾何学文を作出するものである。部分的に刺突文が多用され、微隆起線文の接点などには円形刺突文が施される。82～94は口縁部直下文様帯や胴部文様帯の破片で、直線・曲線的な微隆起線文により幾何学文を作出するものである。95～99は口縁部の破片であり、直線的な微隆起線文を主文様とするものである。微隆起線文の接点には円形刺突文が観察できる。100～104は口縁部直下文様帯や胴部文様帯の破片である。直線的な微隆起線文を主文様とし、微隆起線文の接点等に円形刺突文を施す。105～124は微隆起線文により幾何学的な文様・曲線的な文様・直線的な文様等を作成し、微隆起線文の接点に貝殻背圧痕を用いるものである。125～128は微隆起線文により幾何学的な文様を施すものであるが、微隆起線の接点に刺突文等が施されない。133～161, 167～200は沈線文を主文様とするものである。133～153, 167～185は斜位の直線的な沈線により幾何学文を作成し、沈線の接点等に円形竹管文が施される。部分的に刺突文が多用される。154・155は曲線的な沈線が施されるものである。157～160は斜位の沈線を施し、幾何学文を作成するものである。167～173は同一個体と考えられ、地文の条痕文が顕著に観察できる。161, 186～191は縦位の沈線と横位の沈線により幾何学文を構成するものである。192～199は斜位の沈線を相互に施し、格子状の文様を作成するものである。197～199は沈線の接点に刺突文等が施されていない。199は胴部に連続刺突文によるタガ状の文様が観察できる。200は沈線による波状の文様を施すもので、相互に刺突文が観察できる。201～210は刺突文を主文様とするものである。203・204は同一個体で、口縁部に沿った連続刺突文と曲線的な連続刺突文が観察できる。205・206は連続刺突文により幾何学文を作成する。207～209は数条の連続刺突文を一単位として斜位の文様を施す。210は縦位・横位の方向に連続刺突文を施し、直線的な文様を構成する。

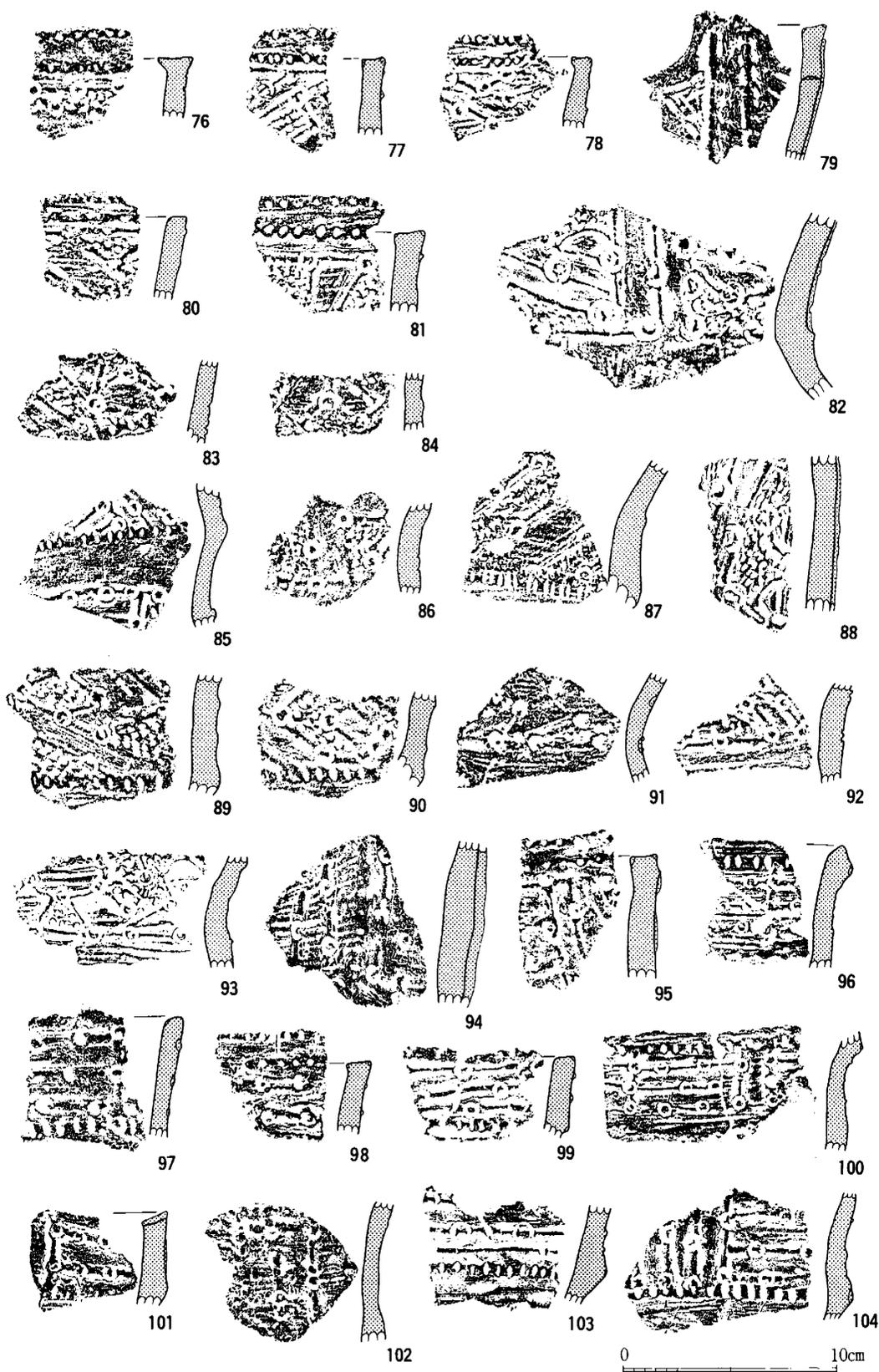
第3類 (129～132, 162, 164～166)

茅山下層式土器に比定できるものである。地文として条痕文を持ち、横位・縦位の隆帯を用いて文様を構成する。口縁部直下のタガ状の隆帯と口縁部から垂下する隆帯により文様を作成している。隆帯上には刻み目が施される。131は口縁部とタガ状の隆帯間が狭い。164には隆帯との接点に棒状工具で施文したと考えられる円形の刺突文が見られる。

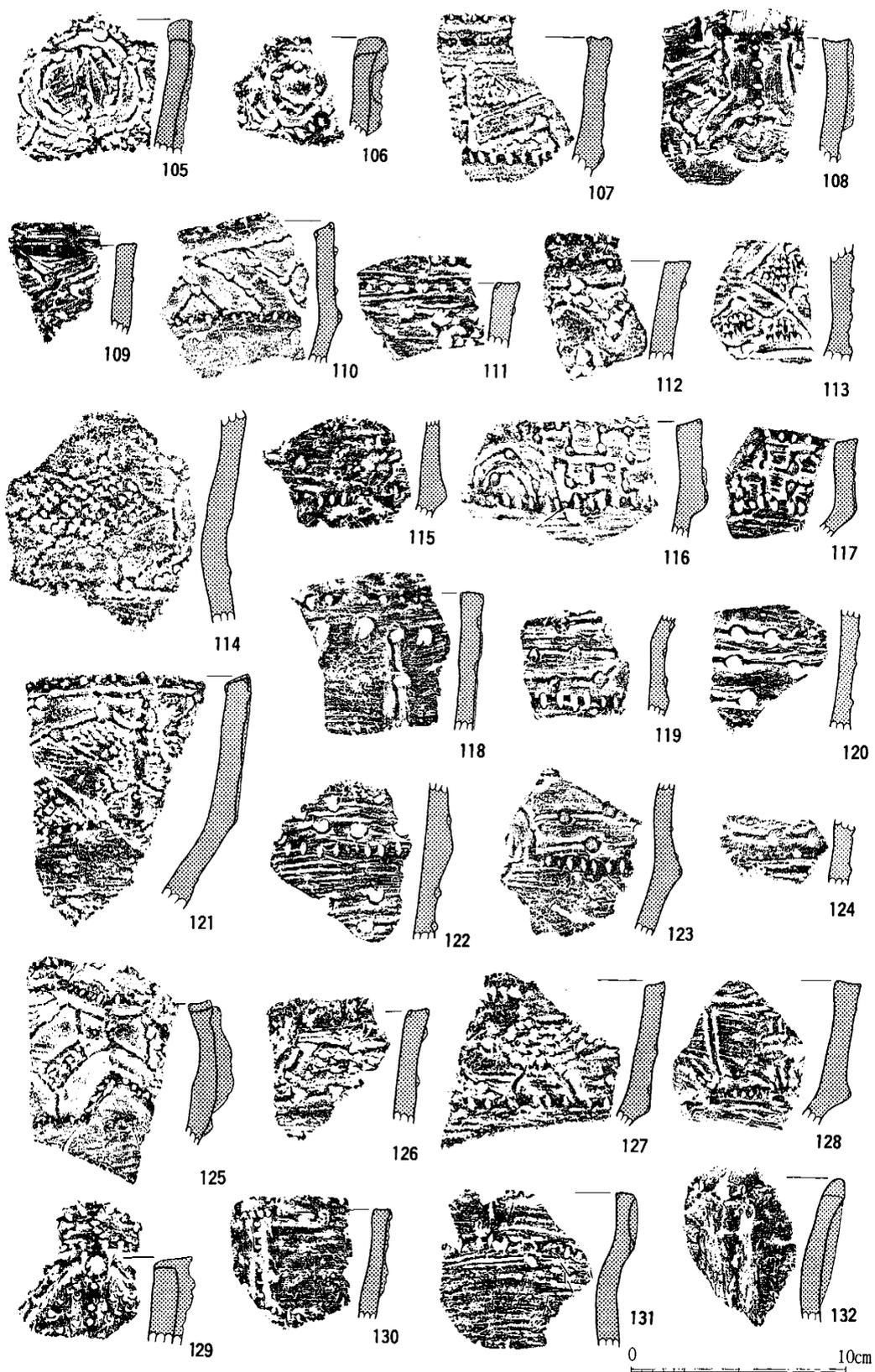
第4類 (4, 163, 211～214)



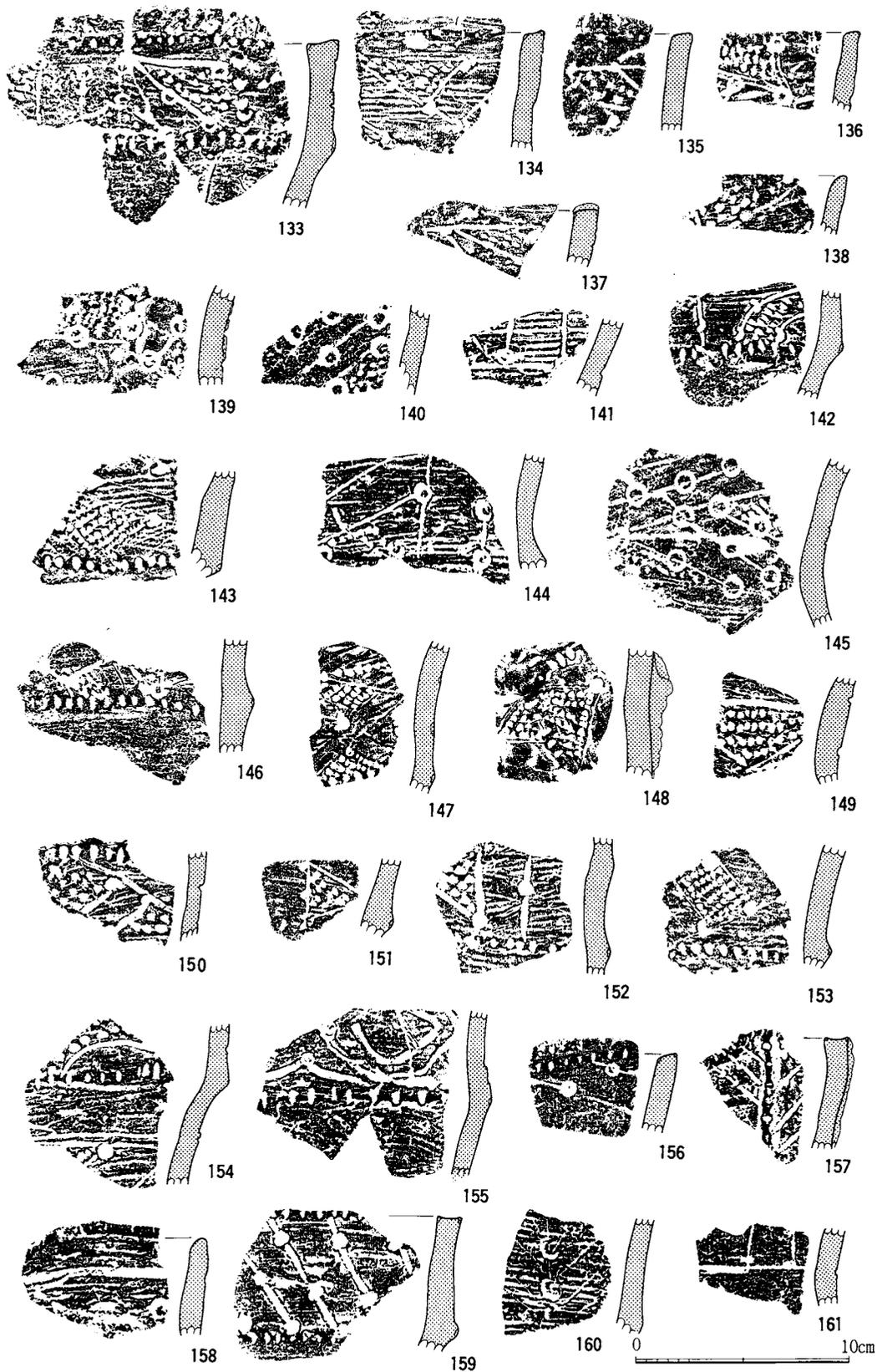
第25図 グリッド出土土器3 (49~75)



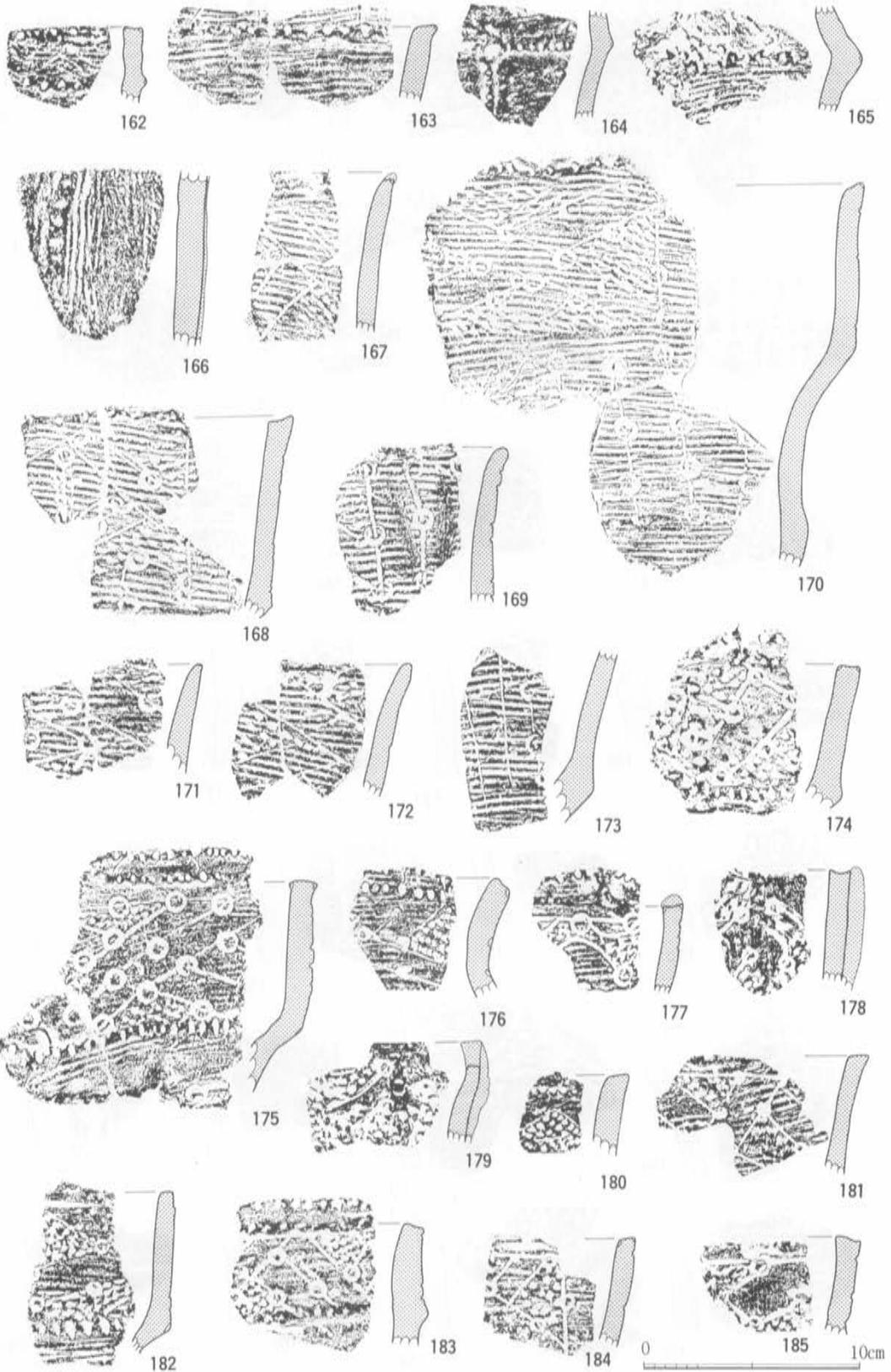
第26図 グリッド出土土器(4) (76~104)



第27図 グリッド出土土器(5) (105~132)



第28図 グリッド出土土器(6) (133~161)



第29図 グリッド出土土器7 (162~185)



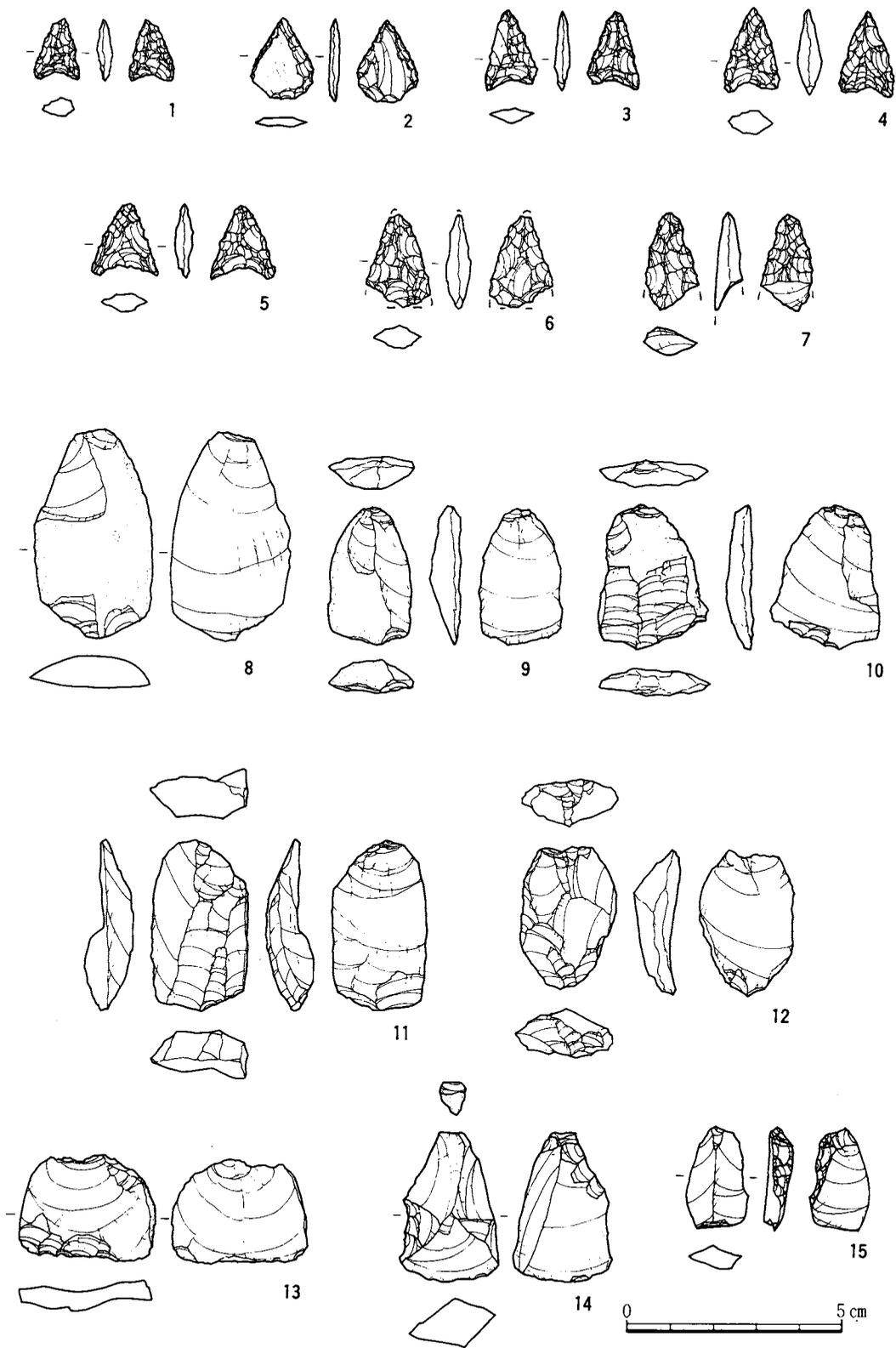
第30図 グリッド出土土器(8) (186~214)

条痕文のみにより文様が作出されるものである。163, 212は口唇部形態が内削ぎ状を呈し、口唇部に刻み目を有する。211, 213・214も同様に内削ぎ状であるが、口唇部の刻み目はない。条痕文は斜位のものが多く、横位のものも観察できる。4は底部の破片である。平底を呈し、内外面に条痕文が顕著に観察できる。外面には底部直上で横位に、それより上半部で斜位の条痕文が施されると考えられる。第2類、第3類土器に伴出する条痕文土器である。

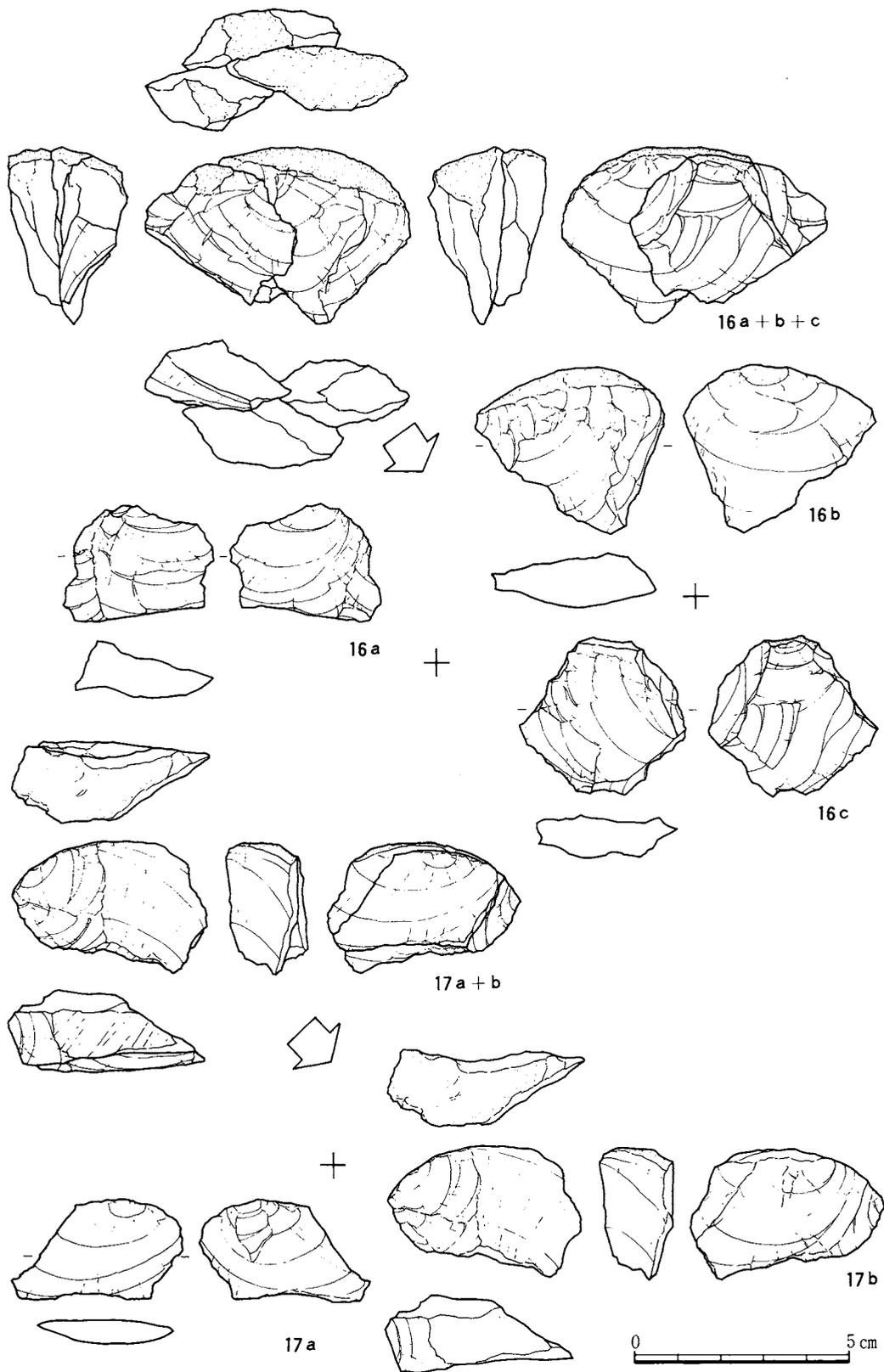
石器 (第31～33図, 図版12)

グリッド出土の主要な器種は石鏃、楔形石器、細部加工のある剥片である。石材は流紋岩、黒曜石、珪質頁岩等で、流紋岩が多数を占める。

1～7は石鏃である。概して平面形が二等辺三角形を基調として、基部が弧状に抉入する形態を持つものが多い。1は本遺跡最小のもので、調整が精緻である。2は横長剥片の周縁を調整するもので、基部が膨らむ。3は剥片素材のものと思われ、尖った脚部を持つ。4はやや厚味のあるもので、側縁は丸味を持つ。5・6は流紋岩を石材とするもので、縦断面形が表裏バランスのとれた凸レンズ状を呈する。5は脚部が尖り、6は脚部が欠損するが、平基に近いものであろう。7は珪質頁岩製の大型のものと思われるが下半部を欠損する。8～13は楔形石器である。8～10は表面に自然面を残し、素材のカーブを利用しているものである。小楕円礫を半載する素材の打面方向軸に両極技法を用いる。上下端に微細な潰れと階段状剥離痕が看取される。剥離工程初期的なものか。11・12はやや剥離の進行した形態を呈する。8～10と同様に縦長剥片を素材とするが、表面には自然面を残さず上下端からの抜けるような長い剥離が加わる。また、11の側面は切断されている。13の楔形石器は側面に自然面を残し、小楕円礫を截断した横長剥片を素材とするもので、打撃面の潰れと、下端に階段状剥離が入る。14・15は二次加工のある剥片である。14は表面左側面及び、裏面右上半部に調整が加えられている。石鏃素材としても十分な形態を有している。15は石刃状剥片の裏面と側縁に調整が加えられる。16a・b・c, 17a・bは流紋岩製の剥片の接合資料である。16a・b・cから、原石は握り拳大ほどの円礫であることが推定される。この原石から、自然面を打面として打点を左右に移動させ剥片を生産するようである。従って打点はジグザグに後退することとなる。16c裏面にはネガティブな剥離面があり、盤状剥片を石核素材とし、これを分断するように剥片剥離がなされるものであろう。生産された剥片は分厚い横長剥片である。この分厚い横長剥片は、遺構出土の楔形石器の素材作出過程を考え併せると、この剥片を横位に切断して、あるいはそのまま縦位に置きパイポーラ・テクニックを用いることにより楔形石器を作出していることが想定できる。17a・bも同種の剥離工程を踏むものであるが、盤状剥片石核の主要剥離面を作業面とし背面がポジ面となる横長剥片を生産している。18～24も石材が流紋岩の剥片である。すべて自然面を打面とする剥片のパラエティーとして把握される。18は側面に自然面が巡り、原石を輪切状に剥離している。20も同様の手法で剥離される。19の剥片は、16の接合資料の製作工程から作

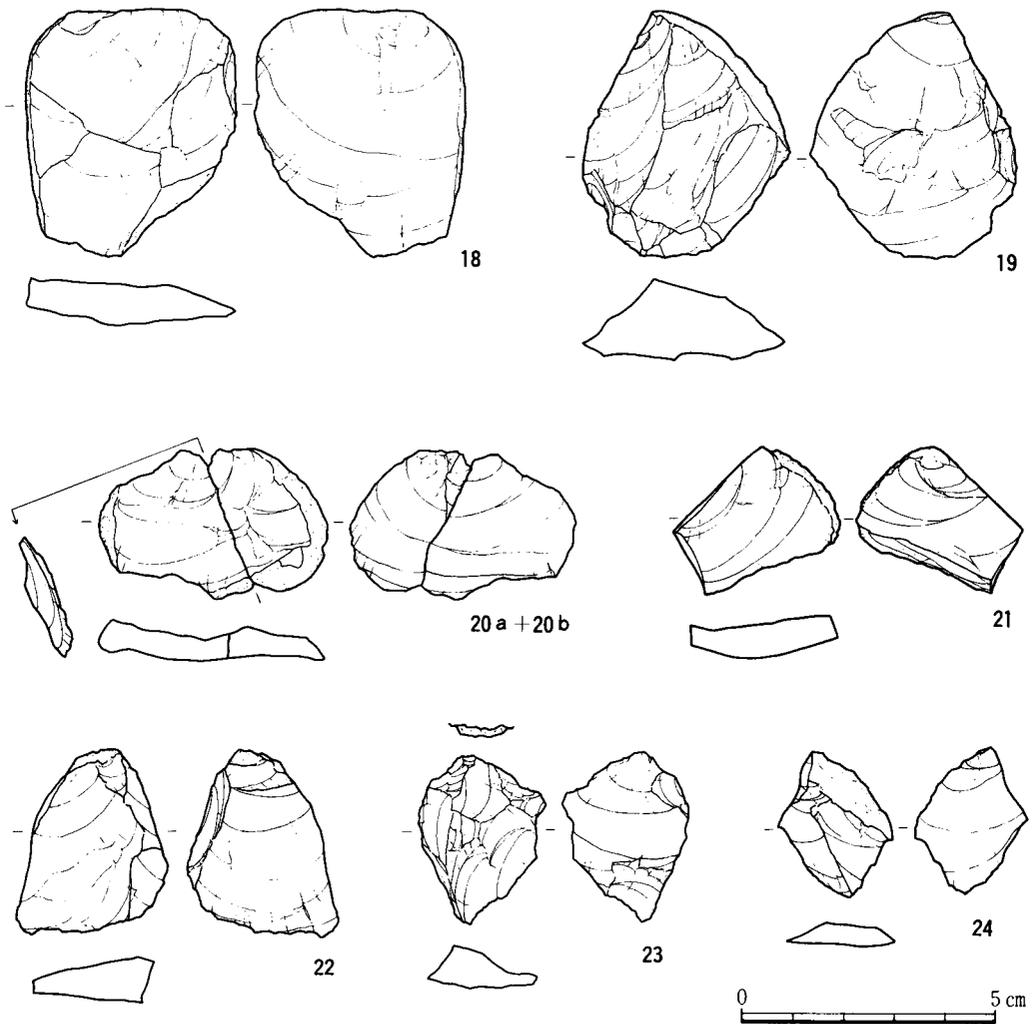


第31図 グリッド出土石器1)



第32図 グリッド出土石器(2)

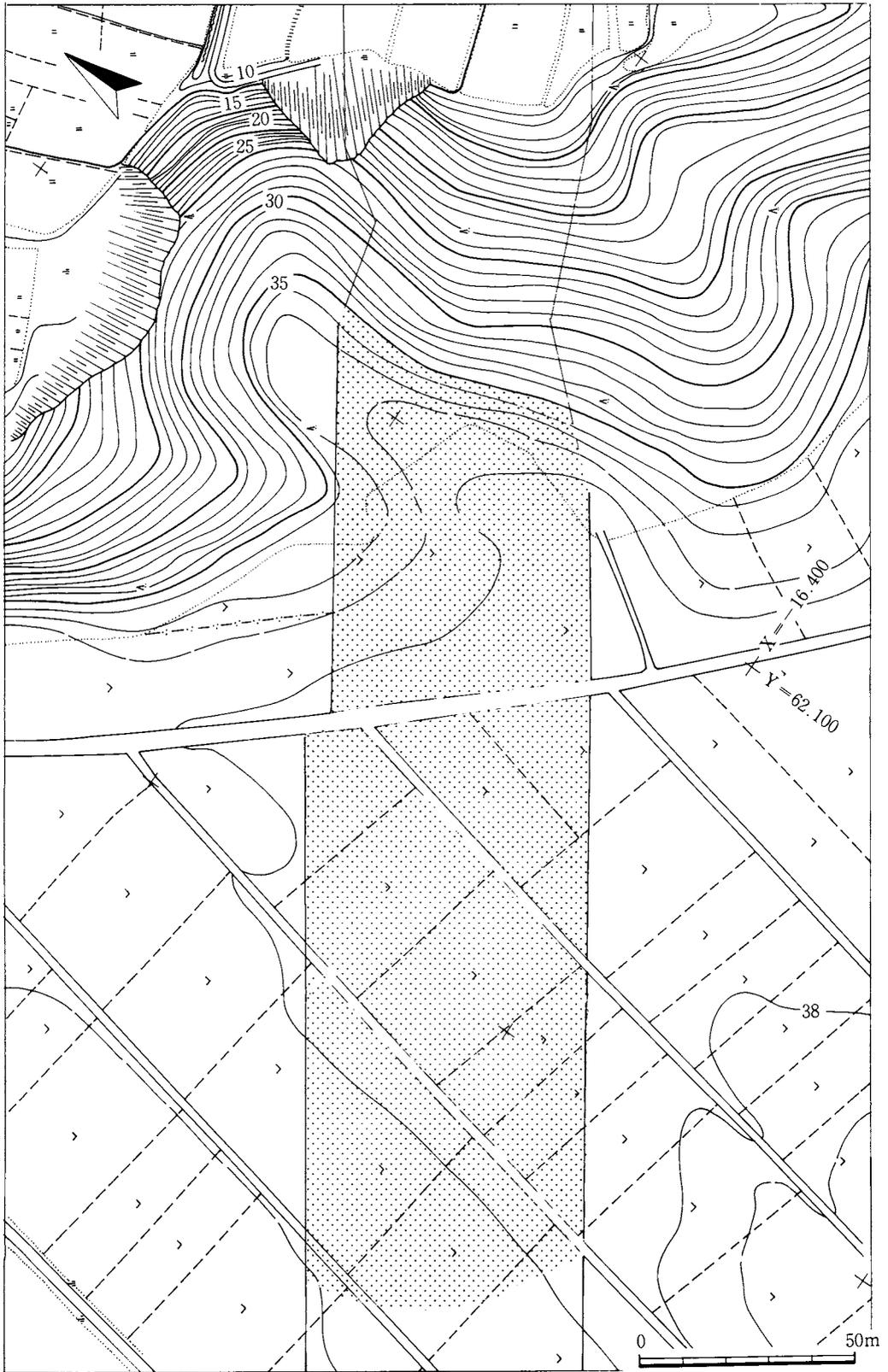
出された剥片と類似する。20 a・bは縦方向に切断した剥片が接合している。22～24は厚味のある縦長剥片で、楔形石器の素材あるいは石鏃素材の capacity を備えている資料である。



第33図 グリッド出土石器(3)

第2表 グリッド出土石器計測表

図版番号	器種	石材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号	図版番号	器種	石材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号
1	石	鉄黒曜石	14.0×6.9×3.7	0.4	0001	15	細部加工を有する剥片	珩質頁岩	23.2×11.9×6.1	1.8	G4-030001
2	石	鉄安山岩	18.5×11.1×2.1	0.7	F区-0002	16a	剥片	流紋岩	26.7×31.6×12.7	9.3	第2坩張c
3	石	鉄頁岩	17.9×9.4×3.3	0.5	3B44-0002	16b	剥片	流紋岩	37.5×37.4×13.7	17.2	第2坩張B区
4	石	鉄黒曜石	19.1×10.1×5.4	0.9	97-14-0011	16c	剥片	流紋岩	36.1×33.6×11.7	14.3	第2坩張A区
5	石	鉄流紋岩	16.7×10.3×3.9	0.6	第2坩張	17a	剥片	流紋岩	23.2×31.0×4.7	3.9	第2坩C
6	石	鉄流紋岩	21.1×10.8×5.4	1.2	第2坩張A区	17b	剥片	流紋岩	29.5×45.4×18.7	18.4	第2坩C
7	石	鉄珩質頁岩	22.1×12.0×5.4	1.1	第2坩張A区-0002	18	剥片	流紋岩	48.2×41.0×9.0	17.9	第2坩C
8	楔形石器	流紋岩	47.3×27.4×8.0	12.2	第2坩張A区	19	剥片	流紋岩	48.7×39.4×15.7	27.5	第2坩C
9	楔形石器	流紋岩	31.3×19.6×6.9	3.4	第2坩張A区	20a	剥片	流紋岩	29.1×20.4×4.2	4.0	第2坩C
10	楔形石器	流紋岩	32.5×25.2×5.9	3.6	第2坩張b	20b	剥片	流紋岩	29.1×23.3×6.2	3.4	第2坩張
11	楔形石器	流紋岩	38.8×22.2×10.5	6.1	第2坩張b	21	剥片	流紋岩	28.8×28.8×7.0	5.6	第2坩C
12	楔形石器	流紋岩	33.0×21.9×10.2	5.2	第2坩張c	22	剥片	流紋岩	35.7×24.1×8.5	7.4	第2坩張A区
13	楔形石器	流紋岩	23.7×30.8×5.6	4.0	第2坩張c	23	剥片	流紋岩	32.4×21.7×8.6	4.8	第2坩張A区
14	細部加工を有する剥片	流紋岩	33.6×19.9×10.3	6.8	第2坩張c	24	剥片	流紋岩	28.3×21.0×8.0	3.1	第2坩C



第34図 毛内遺跡地形図

第2章 毛内遺跡

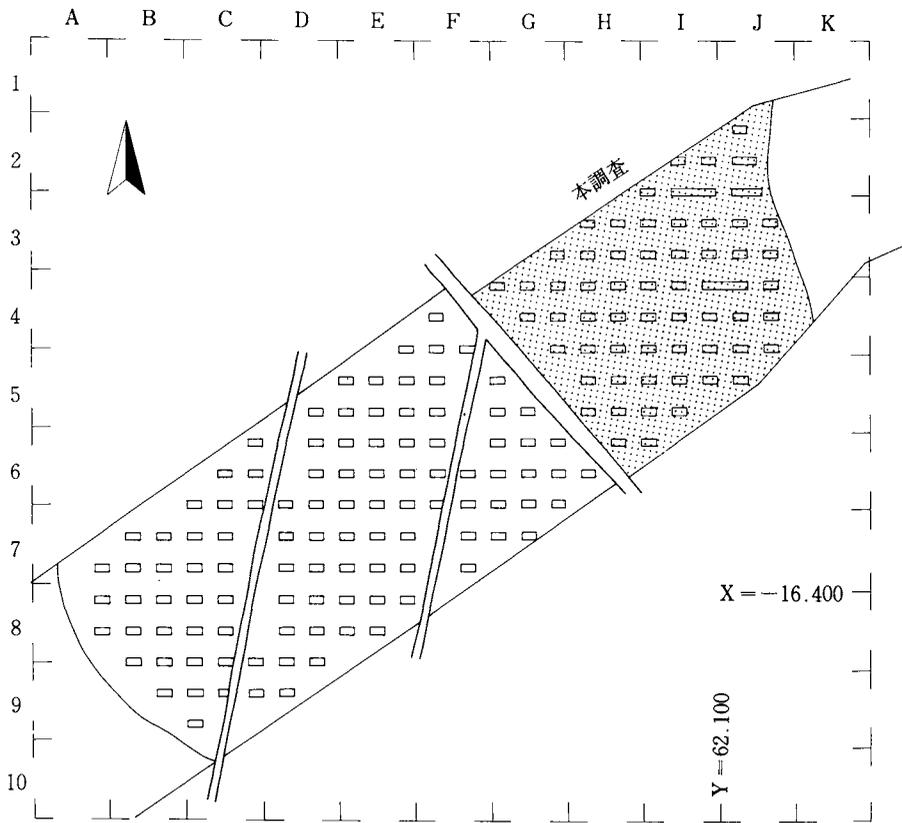
第1節 縄文時代

1. 竪穴住居跡

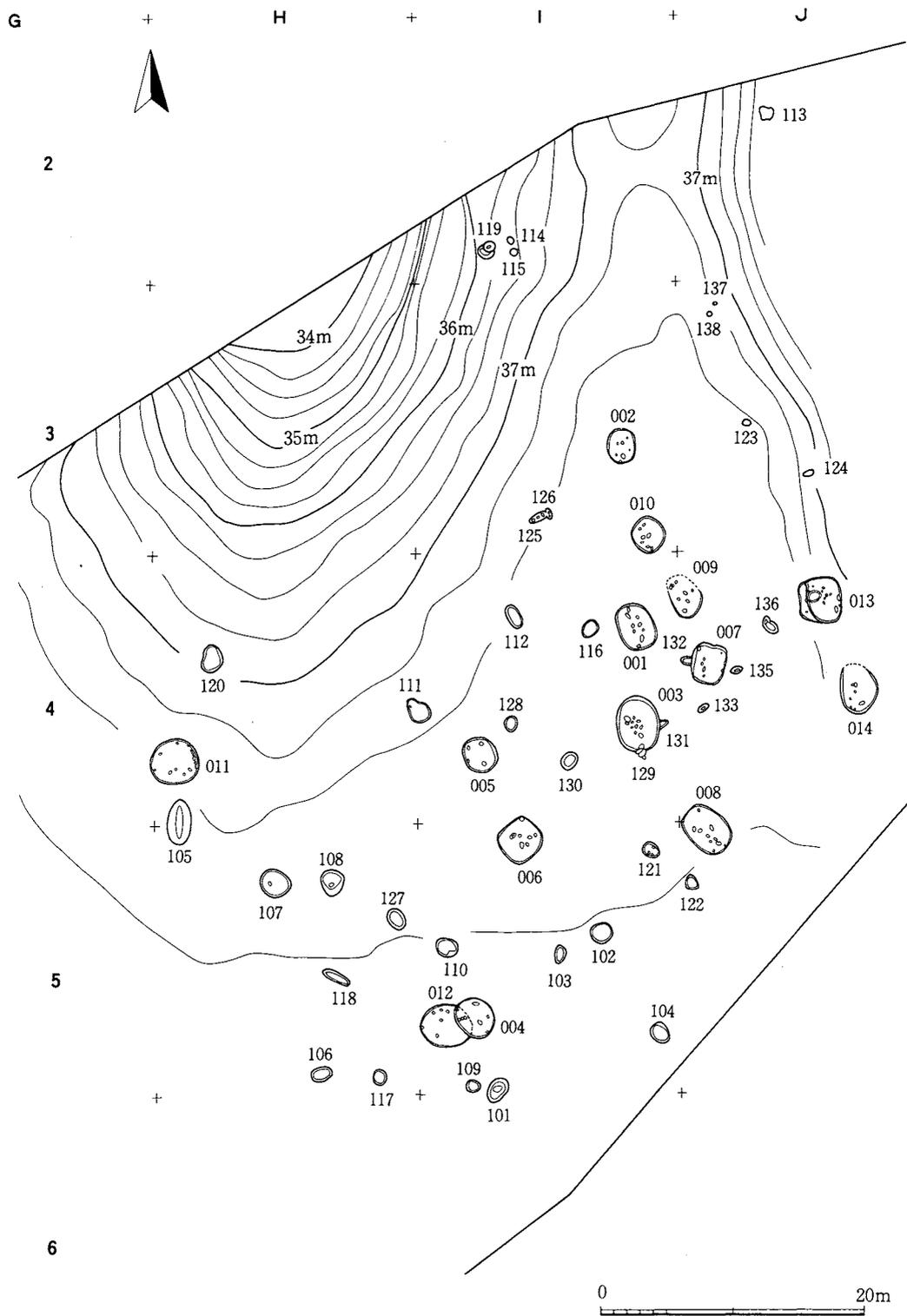
毛内遺跡から検出された住居跡は14軒を数える。時期的には、縄文時代前期後半から中期初頭にかけての土器を主体的に出土しており、003号住居や008号住居のように覆土中から多量の石片等が検出されたものも存在する。住居跡群の分布は、南から北に延びる尾根状台地の基部付近という比較的限られた範囲に集中しており、石片等の出土分布の在り方からは、当集落の構成員が、石器製作と強く関わっていたものと推測できる。

001号住居跡（第37図，図版13）

調査区の東側で、尾根状を呈する台地中央部に近いI4区に位置する。形状は楕円形を呈し、長軸3.5m、短軸2.7mを測る規模を有する。遺構検出面からの掘り込みは約30cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。床面は固く踏み締められており、住居跡の長軸上付近の壁際と、中央部



第35図 毛内遺跡グリッド配置図（1/2000）



第36図 毛内遺跡遺構配置図 (1/500)

に集中して合計7本のピットが検出された。床面からの深さは、P1が約30cm、P2～P5が各々約50cm、P6が約10cmを測る。炉は住居跡の長軸上で2か所検出された。いずれも床面を浅く掘り窪めただけのもので、火床部の焼成は激しく、長期にわたり使用されたものと思われる。

遺物は覆土中から多く出土し、床面付近からの出土が少ないことから、ほとんどの遺物は廃棄されたものであろう。時期的には浮島期後半から興津期に該当する。

002号住居跡（第37図，図版14）

調査区の北東で、尾根状台地の先端に近いI3区に位置する。形状は楕円形に近く、長軸2.4m、短軸2.1mを測る比較的小型の住居である。検出面からの掘り込みは約10cmと浅い。床面は特に踏み締められた様子もないが、軟質ではない。ピットは6本検出されたが、配列は不規則である。深さはP1のみ45cmと深いが、他はすべて20～30cmである。炉は住居跡の南壁近くに位置しており、床面をわずかに掘り窪めたものである。火床部の焼成は激しい。

遺物は少なく、浮島期後半に属する土器片と石斧等が出土している。

003号住居跡（第37図，図版14）

001号住居の南に約4mの距離を測るI4区に位置する。形状は楕円形を呈し、長軸4.0m、短軸3.3mを測る規模を有する。検出面からの掘り込みは約25cmを測り、壁の立ち上がりは緩やかであるが、しっかりとしている。床面も固く踏み締められ、堅緻である。ピットは床面の中央付近を主体に10本が検出された。南壁際に位置するものだけ深さ10cmと浅いが、他は深さ40cm以上の深いものが多い。炉は住居跡の長軸上でやや南に偏在する。床面への掘り込みはわずやかであるが、焼成は激しくよく使い込まれた様子である。

遺物は覆土の上層から下層まで多量に出土しているが、土器片の接合は床面出土同士とは限らず、ほとんどの遺物は廃棄されたものと思われる。時期的には浮島期後半のものが主体を占めている。また、石鏃4点の他、礫及びチャート質の剝片等も多く出土している。

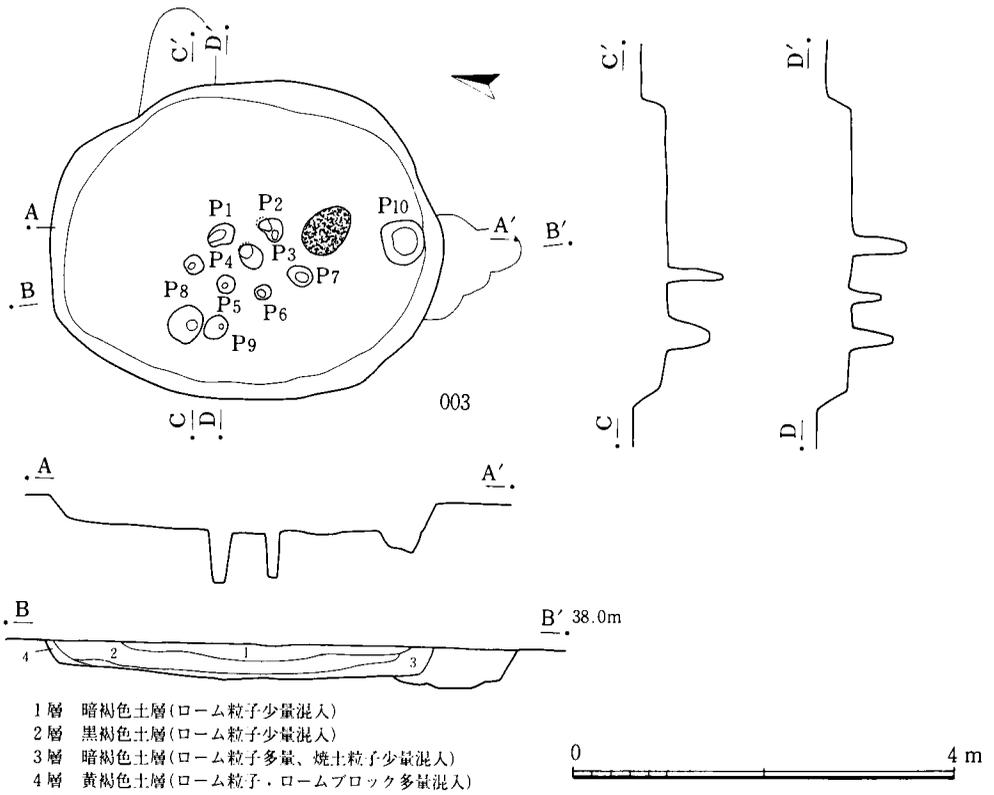
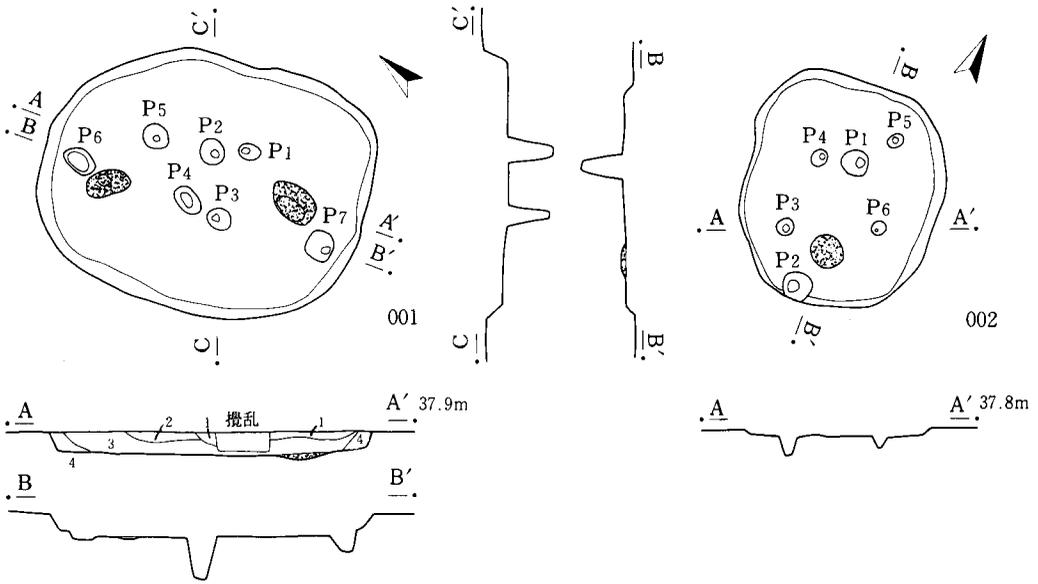
004号住居跡（第38図，図版15）

調査区の南部で、台地平坦面上のI5区に位置する。住居の西側は012号住居と重複する。わずかに本跡の方が012号住居を掘り込んでおり、本跡が新しい。形状は楕円形を呈し、3.2×2.8mの規模を測る。検出面からの掘り込みは約15cmと浅く、壁は緩やかに立ち上がる。床面は軟質で、西側部分がわずかに窪む。ピットは西側を除く3方の壁に沿って4本が検出されたが、どれも深さは20cm前後の浅いものである。炉は床面の中央よりやや南東に偏在する。床面をわずかに掘り込んでいるが、焼土の堆積は薄く、強く熱を受けた様子は認められない。

出土遺物は少量であるが、浮島期後半から興津期、また下小野式と思われるものまで含まれている。

005号住居跡（第38図，図版15）

調査区北西部の谷に面するI4区に位置する。形状は楕円形を呈し、規模は長軸2.7m、短軸



第37図 001~003号竖穴住居跡

2.4mを測る。検出面からの掘り込みは約20cmと浅い。床面は比較的平坦であるが、軟弱である。ピットは4か所に検出され、30cm～50cmの深さを有する。炉は検出されなかった。

出土遺物は少なく、浮島式、下小野式等が混在している。

006号住居跡（第38図，図版15）

005号住居の南で、尾根状台地の基部付近I5区に位置する。形状は隅円の方形に近く、3.3×3.0mの規模を測る。検出面からの掘り込みは約20cmと浅い。床面は比較的平坦であるが、やや軟質である。ピットは床面の中央付近に6本と、北側コーナーに1本が検出されている。深度的にはP1、P2、P4、P7の10～20cmを測る浅いものと、P3、P5、P6の30～40cmを測る深いものとに分けられるが、配列に規則性は認められない。炉は床面中央よりやや南に位置する。床面を浅く掘り窪めただけのものであるが、火床部の焼成は激しく、よく使い込まれた様子である。

遺物は覆土の上層から多くの出土を認めたが、下層での出土量は少なかった。時期的には浮島期後半から興津期のものが主体を占めている。

007号住居跡（第38図，図版16）

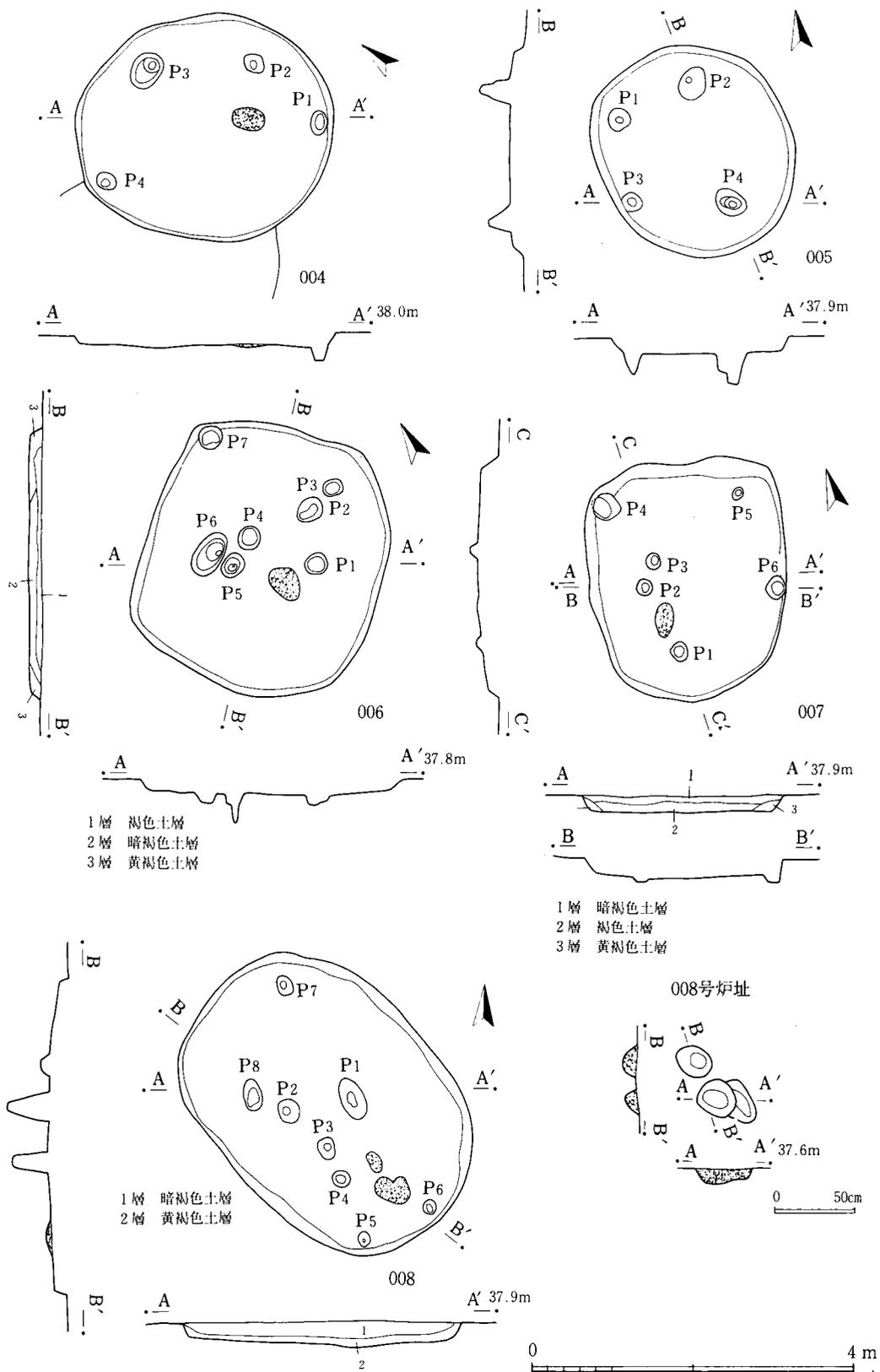
調査区の東側で、尾根状台地の基部付近J4区に位置する。住居跡が集中する中心部付近でもある。形状は不正楕円形を呈するが、北側は角張る。規模は2.9×2.5mを測り、検出面からの掘り込みは約20cmである。壁は緩やかに立ち上がり、覆土は自然な堆積状況を呈していた。床面は平坦だが、やや軟質である。ピットは6か所に検出されたが、P5のみ深さ約40cmを測る他はどれも20cm以下の浅いものである。炉は住居跡の長軸上で、南に偏在するが、床面への掘り込みは認められず、わずかに焼土が堆積しただけのものであった。

遺物は浮島式土器片が少量出土した。

008号住居跡（第38図，図版16）

007号住居の南西で、やはり尾根状台地の基部付近J4・J5区に位置する。形状は楕円形を呈し、長軸3.9m、短軸2.8mの規模を有する。検出面からの掘り込みは約25cmを測り、壁の立ち上がりは他の住居に比べるとやや急である。覆土は2層に分けられ、自然な堆積の状況である。床面は固く踏み締められており、中央部がわずかに低い。ピットは8本検出されたが、深度的には中央部に位置するP1～P3が各々85cm、45cm、40cmと深く、P4、P8がいずれも10cmの深さで対応する。また、壁際のP5、P7もそれぞれ35cmの深さで対応する。炉は住居跡の長軸上、かなり南東側に偏在する。2か所に焼土の堆積を認めた。いずれも床面への掘り込みは浅く、焼成は激しくないが、炉内からはチャート製を主体とする碎片が多量に検出されている。

遺物は主として覆土の上層から多く検出されている。土器は時期的に、浮島式、興津式が主体を占め、五領ヶ台式もわずかに認められた。また、覆土中からもチャートの剝片及び安山岩剝片等が多量に検出されており、本跡は石器製作跡として捉えられよう。



第38图 004~008号竖穴住居跡

009号住居跡（第39図，図版16）

尾根状台地の中央部付近 I 4・J 4 区に位置する。形状は不整楕円形を呈し、検出面への掘り込みは南壁下で約10cmを測るが、北側はさらに浅く、壁の立ち上がりは検出できなかった。規模は3.2×2.4mを測る。床面は平坦で、浅い住居のわりには堅緻な状況を呈していた。ピットは9か所に検出され、深さはP4が約40cm、P2、P5、P6～P8が各々約30cm、他はいずれも10cm前後と浅い。炉は南壁近くに検出されたが、床面へは掘り込まれておらず、わずかな焼土の堆積を認めただけである。炉内からは石鏃1点と碎片等が出土した。

遺物は少量で、興津式土器片等が出土している。

010号住居跡（第39図，図版17）

009号住居の北で、やはり尾根状台地上の I 3 区に位置する。形状は隅丸方形状を呈し、2.5×2.5mの規模を有する。検出面からの掘り込みは約10cmと浅いが、壁はしっかりとしていた。床面は凹凸を多く認めた。ピットは不規則な配置だが6本を検出している。深さは中央に位置するP4が約60cmと深く、P3とP6がそれぞれ約30cm、他は約15cmである。炉は南壁付近に検出され、床面を浅く掘り窪めただけのものである。燃焼はそれほど激しくなく、暗赤褐色を呈する焼土が少量認められただけである。

遺物は少なく、住居中央付近に散在して認められた。時期的には浮島式と興津式が混在している。

011号住居跡（第39図，図版17）

尾根状台地の西に入り込む浅い谷に面する緩斜面上の H 4 区に位置する。形状は楕円形に近く、3.6×3.2mの規模を測る。検出面への掘り込みは約20cmである。床面は凹凸を多く認め、比較的軟質である。東壁下には床面からの深さ5cmの浅く短い壁溝を検出している。ピットは壁付近で合計10か所検出されたが、全体に浅いものが多く、深さはP2～P6、P9が20～25cm、他はすべて約15cmを測る。ピットの掘り込みはしっかりとしたものが多かったが、炉は検出されなかった。

遺物はほとんど出土していない。

012号住居跡（第39図）

調査区の南端に近い I 5 区に位置し、東側は004号住居と重複する。形状は楕円形を呈し、4.0×3.0mの規模を測る。検出面からの掘り込みは約15cmと浅い。床面は平坦だが軟質で、判然としない。本跡に伴うものと思われるピットは9本検出されている。深さはP2、P3がいずれも10cm以下と浅く、他はすべて約30cmを測る。炉は検出されなかった。

遺物の出土はなかった。

013 A・B号住居跡（第39図，図版17）

調査区の東側の谷に面する台地縁辺部 J 4 区に位置する。炉Aが炉Bを有する住居により切

られていることと、床面のレベル差の違いにより、重複する2軒の住居跡として理解できる。新旧関係の新しい炉Bを有するB号住居は、隅丸台形状を呈し、長軸3.3m、北壁2.4m、南壁1.3mを測る。斜面に位置するため東壁の立ち上がりはほとんどなく、西壁の立ち上がりは約25cmを測る。床面は両跡ともに凹凸が激しいが、固く締まっている。ピットはB号住居では中央付近の大きなものも含めて12か所検出された。深さはP11が約40cmを測る他はどれも20cm以下の浅いものであるが、A号住居に属するものも含まれていると思われる。A号住居内からは床面からの深さ約55cmを測るピットが1か所と、深さ約10cmを測る壁溝が検出されている。炉は、Aの床面への掘り込みはほとんど認められず、わずかな焼土ブロックが検出されただけである。Bも掘り込みはほとんど認められなかったが、多くの焼土ブロックに加えて炭化物等も検出されており、使用頻度はBの方が高いと思われる。なお、B号住居の床面に掘り込まれる大きなピットは後世のものである。

遺物は覆土中から土器片が散在的に出土した。時期的には興津式と下小野式的なものが含まれる。

014号住居跡（第39図，図版18）

013号住居の南に隣接するJ4区に位置する。北側は立木のため一部未発掘である。形状は楕円形を呈し、長軸約3.6m、短軸2.8mの規模を測る。検出面からの掘り込みは西側で約20cmを測るが、東側では斜面にかかり僅かである。床面は凹凸が多い。ピットは5か所に検出され、深さはP1、P2が40cm以上、P3、P5が各々30cm、25cmを測る。炉は住居の南に偏在し、床面をわずかに掘り窪めただけのものである。

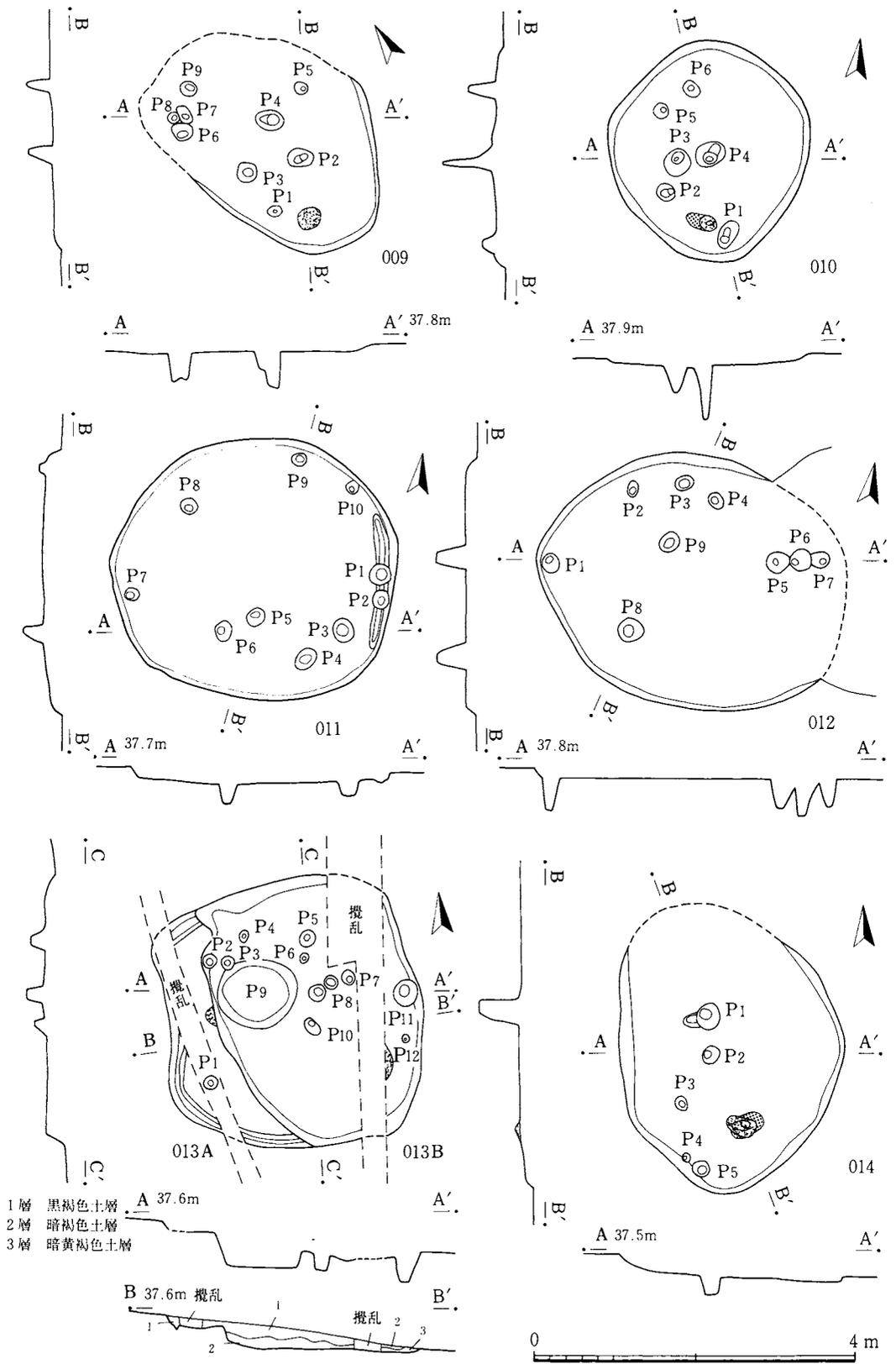
遺物は浮島期後半から興津期、下小野期までのものが混在する。

住居跡出土土器（第40～46図，図版19～22）

毛内遺跡において検出された住居跡は14軒であるが、遺構中から検出された土器数は、遺構外から検出されたそれと比べると、著しく少ないものとなっている。なお、土器の分類は第2節のグリッド出土土器の項を参照していただきたい。

001号住居跡（1～12）

図示した土器は、11を除いて第Ⅲ群とした浮島式系土器である。1は口径11.8cm、器高12.5cmを測る小型の深鉢形土器である。器面全体にサルボウ等の貝殻による腹縁圧痕を密に施し、口唇部には斜めに刻み目を加える。内面は丁寧な研磨調整がなされている。2も同様の貝による貝殻波状文が施される。3はいわゆる三角文が施されたもので、胴下部付近の破片のためであろうか、下位は無文となる。4、5はそれぞれ多載竹管ないし棒状工具を器面に斜めから強く押し当て器面を盛り上げた、いわゆる凹凸文の土器である。6、7は貝殻文を地文とした上に、竹管文等が加えられる興津式土器である。8～12は櫛歯状工具による条線文が施されたものである。このうち12は、口縁部が折り返し状となり、条線は垂下する流水文状となる。また、



11の条線は平行沈線を密に集合させて施したもので、他とは異なり、胎土中に小礫等を多く含む点からも諸磯式系土器の可能性が高い。

002号住居跡 (13~19)

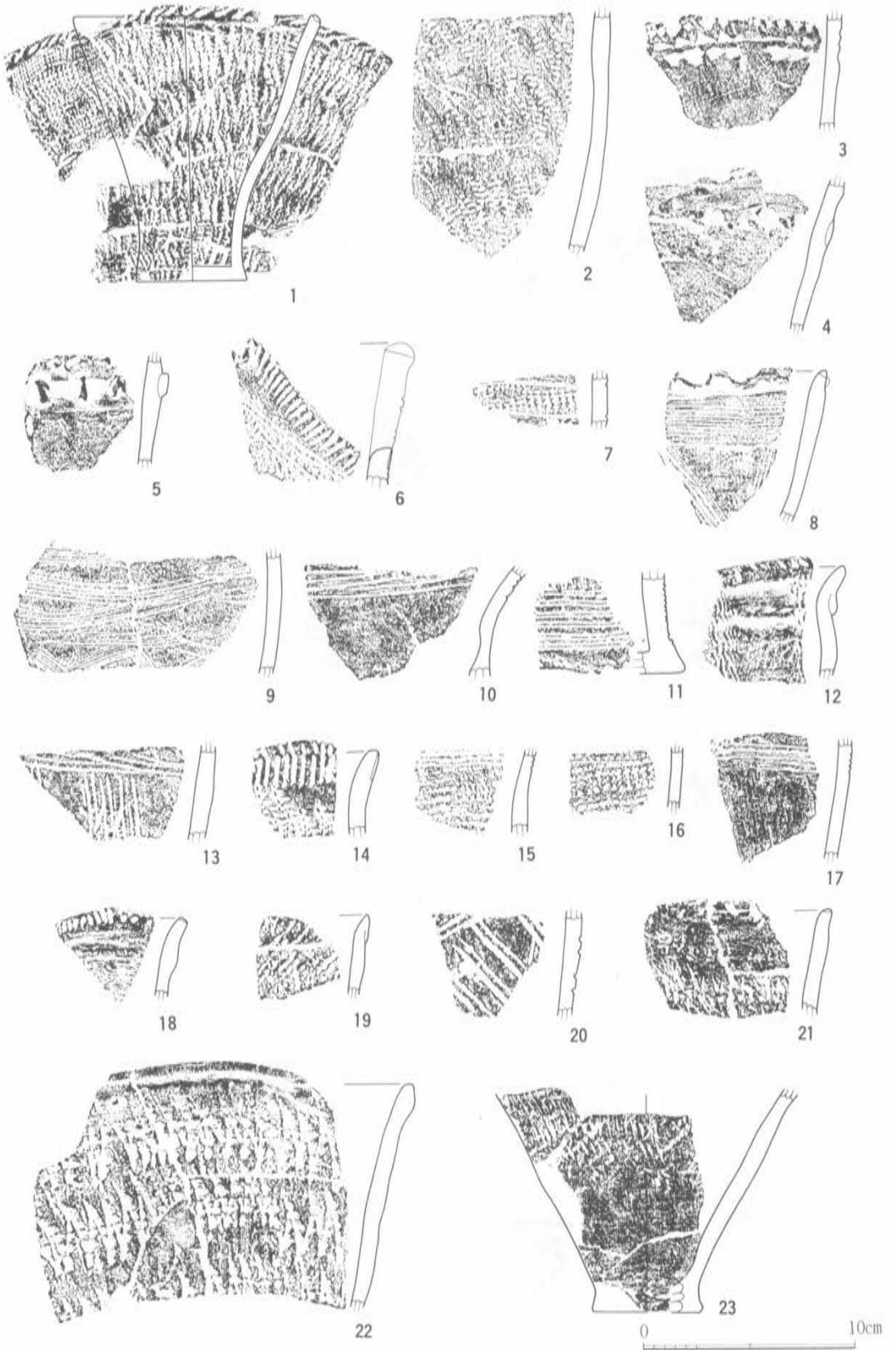
13~18が第Ⅲ群土器、19のみ第Ⅳ群土器である。13は半截竹管による平行沈線が施されているが、全体の構成は不明である。14は口唇下に縦位の刻み目状沈線を有し、以下胴部には貝殻波状文が施される。15、16は押し引き状に密に施した地文の貝殻文上に、比較的細い沈線が加えられたものである。17は条線文を横位に施した胴下部付近の破片。18は緩い波状口縁を呈するもので、口唇部に刻み目を有し、器面には横位の擦痕を認める。19は無節L縄文の施された折り返し口縁の土器である。

003号住居跡 (20~53)

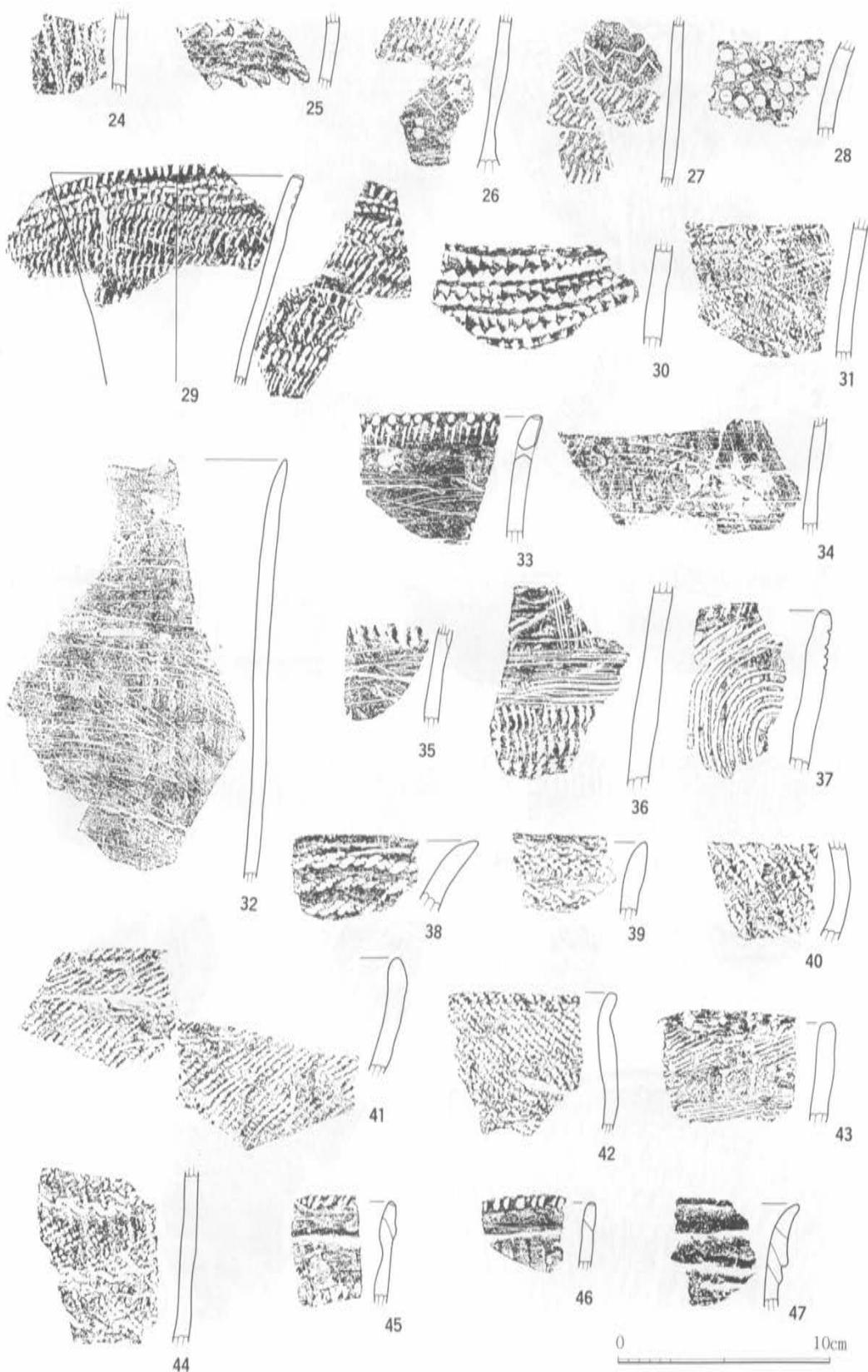
20~37が第Ⅲ群土器、38~48が第Ⅳ群土器である。20は斜位に施された平行沈線により文様を構成するが、地文は持たない。21~25は貝殻波状文が施されるものである。23以外の貝殻文は、比較的整った波状を呈している。23は底部付近で、下部は無文である。26、27は同一個体である。26は底部付近の破片と思われ、文様は刻み目状の貝殻刺突文と、ジグザグ状の沈線が施されている。ジグザグ状沈線のモチーフは、大栄町の庚塚遺跡から出土した粟島台式土器(貝殻刺突ではなく縄文が施されている)にも見られることから、ここに図示した2点も前期末葉のものと考えられよう。28は円形の刺突文が施されるものである。29は推定口径12.2cmを測る小型の深鉢形土器である。口唇部に刻み目を有し、口縁部には2列ないし3列の細い竹管状工具による円形刺突文列を加える。胴部は刻み目状の刺突文が密に施されている。30は三角文が横位に整然と施される。31は、ずらしながら施した貝殻文が細い沈線により区画される第9類土器である。32~35は比較的細い条線文が横位を主体に施される。32の口唇下部外面は部分的に剝離してしまっているが、縦位の刻み目状沈線を伴ったものと思われる。33には補修孔が穿たれる。37は条線を曲線状に配し、口唇部にはやはり刻み目を有する。36は胴下半までを縦、横の条線による文様構成とし、以下は貝殻文が横位に施されている。38は外反する口縁部片で、縄文原体が3段にわたり押圧されている。39~44は、結び目縄文を回転させた、いわゆる綾絡文を有する土器である。45~47は輪積痕を折り返し口縁状に残す口縁部片である。48以下は、胴部片または底部で、復元実測し得たものを図示した。このうち、53は高台状を呈し、復元底径の大きさから浅鉢等の器種が考えられるが、“高台”部分は全周せずに開口するものであり、その他の特殊な土製品の可能性もある。なお、胎土中には砂粒等に加え、雲母の混入が認められる。

004号住居跡 (54~59)

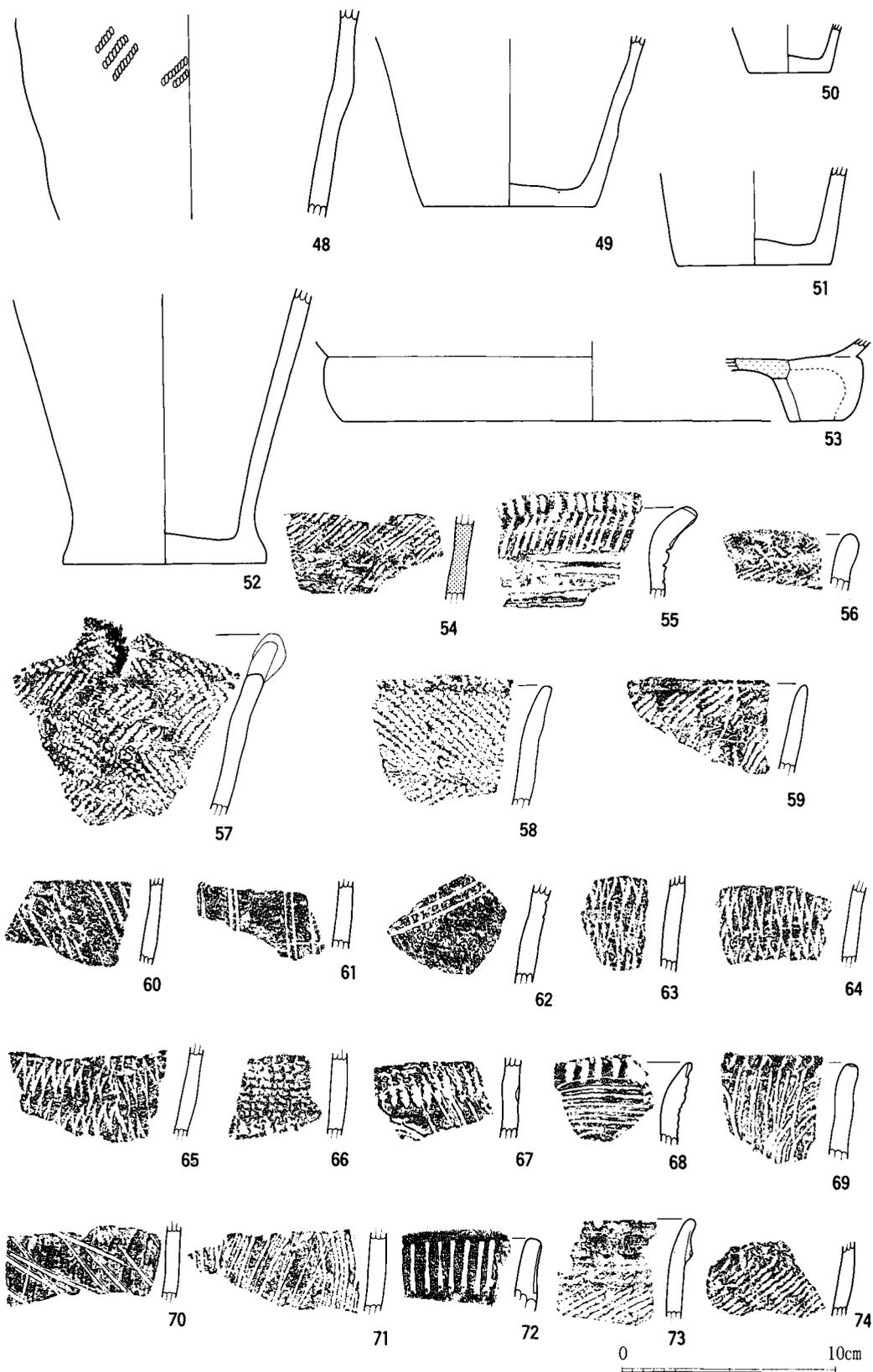
54は無節L縄文の施される黒浜式土器胴部片である。55は外反する口縁部片で、口唇上に刻み目と、口唇下に刻み目状の沈線を特徴的に施している。文様は貝殻文を地文とし、沈線文が



第40图 001(1~12)·002(13~19)·003(20~23)号竖穴住居跡出土土器



第41图 003号竖穴住居跡出土土器



第42图 003(48~52)·004(54~59)·005(60~74)号竖穴住居跡出土土器

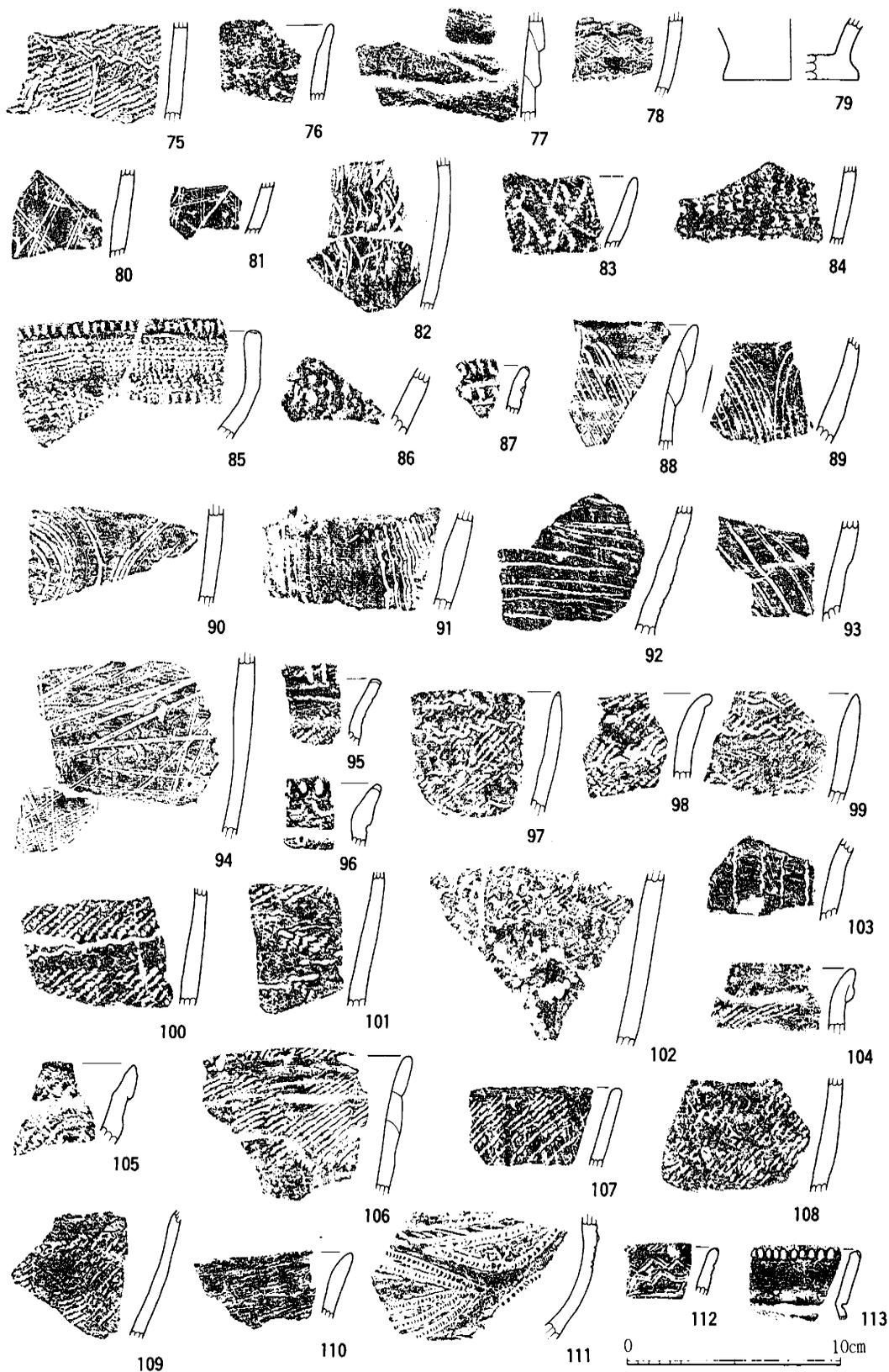
加えられる。56～59は縄文のみ施されている口縁部片である。56の口唇下には綾絡文を施し、57と58は口唇上にも縄文が施されている。

0 0 5号住居跡 (60～79)

60～72は第Ⅲ群土器である。60、61は、いずれも地文を持たず、縦位を主とした平行沈線が施されるものである。62も地文は認められず、斜位の平行沈線が施される。63～65はハマグリ等の放射肋のない貝殻による波状文を施す。66はサルボウ等の貝殻をずらしながら施したもの。67は貝殻文に沈線文が加えられており、興津式に比定できよう。68は断面形がやや尖がりぎみとなる口縁部片で、口唇下の刻み目状沈線以下は横位の条線文が施される。69～71は条線文の施されるもので、70を除き、条線文はやや曲線状に施文されている。72は口唇下に刻み目状の沈線を巡らせるもので、口縁部は折り返し状になるものと思われる。73～77は第Ⅳ群土器である。73は折り返し口縁を呈するもので、折り返された口縁部は無文であるが、口縁の接合部に刻み目状の刺突を加え、以下には綾絡文を伴う無節L縄文が施される。胎土には小礫等を多く含む。74も綾絡文を伴うもので、縄文は単節LRである。76は無文の口縁部片で、わずかに輪積痕を残す。77は輪積痕を段状に残す口縁部付近の破片である。78は細沈線により鋸歯状の文様が施されるもので、五領ヶ台式土器である。79は底径6.5cmを測る底部である。

0 0 6号住居跡 (80～118)

本跡からは、第Ⅲ群から第Ⅳ群に至る土器が出土している。80、81、94は、いずれも比較的間隔の狭い平行沈線が斜位を主体に、交差させるように施される。平行沈線を用いながらも、条線文的な粗雑な印象を受ける。82～85は貝殻文が施されるものである。このうち、85は内湾する口縁部片で、貝殻文はずらしながら施されており、より後出的である。86はいわゆる三角文が施されている。87は口縁部の小破片で、口唇部に刻み目を有し、横位2条の平行沈線間に多截竹管による刺突文を施す。88～93は条線文の施されるもので、方向は92のみ横位、他は斜位ないし縦位を主体とする。95は口縁部に縄文原体の圧痕文を施すもので、口唇上にも刻み目状に原体圧痕を有する。96～103はいわゆる綾絡文を伴うものである。綾絡文の方向は、103のみ縦位、他はすべて横位である。また、断面形では97と99が尖がりぎみの口唇部を有し、98は口唇部付近で外屈する。104～109は縄文のみ施されているものである。104、105は折り返し口縁となり、106も輪積痕を残すことにより、折り返し口縁的な印象を与える。縄文原体は、104、105がLR、他は無節Lであるが、いずれも細めの原体を用いる点が特徴的である。110は無文の口縁部片である。口唇断面は尖がりぎみとなり、第Ⅳ群土器中の無文口縁土器とした。111は隆帯上に刻み目を有する、いわゆる浮線文と、半截竹管を押し引き状に施文した連続爪形文とにより文様が構成される諸磯b式土器である。112～117は五領ヶ台式土器である。112は細沈線による鋸歯状文を施す口縁部片。113は口唇端部の刻み目と、口縁部から胴部に移行する器形の屈曲が特徴的なもの。114は無節L縄文を地文とし、棒状工具による円形の刺突文を列状に施す。



第43图 005(75~79)·006(80~113)号竖穴住居跡出土土器

115, 116は沈線文に沿って刺突文が施される。117は口縁下部が三角形状に切り取られる、いわゆる彫刻的手法が採られている。118は底径9.2cmを測る底部である。胎土中には、砂粒および石英粒等を含む。

007号住居跡 (119～123)

119, 120は胎土中に微量ながら繊維を混入するものである。いずれも早期後半の条痕文系土器の範疇に含まれよう。121は口唇下にやや斜位の刻み目状短沈線を有する浮島式土器。122は、ずらしながら施した貝殻文上に細い沈線が加えられている。123は口唇下に短沈線を有し、櫛歯状工具による条線文が施されるものである。

008号住居跡 (124～147)

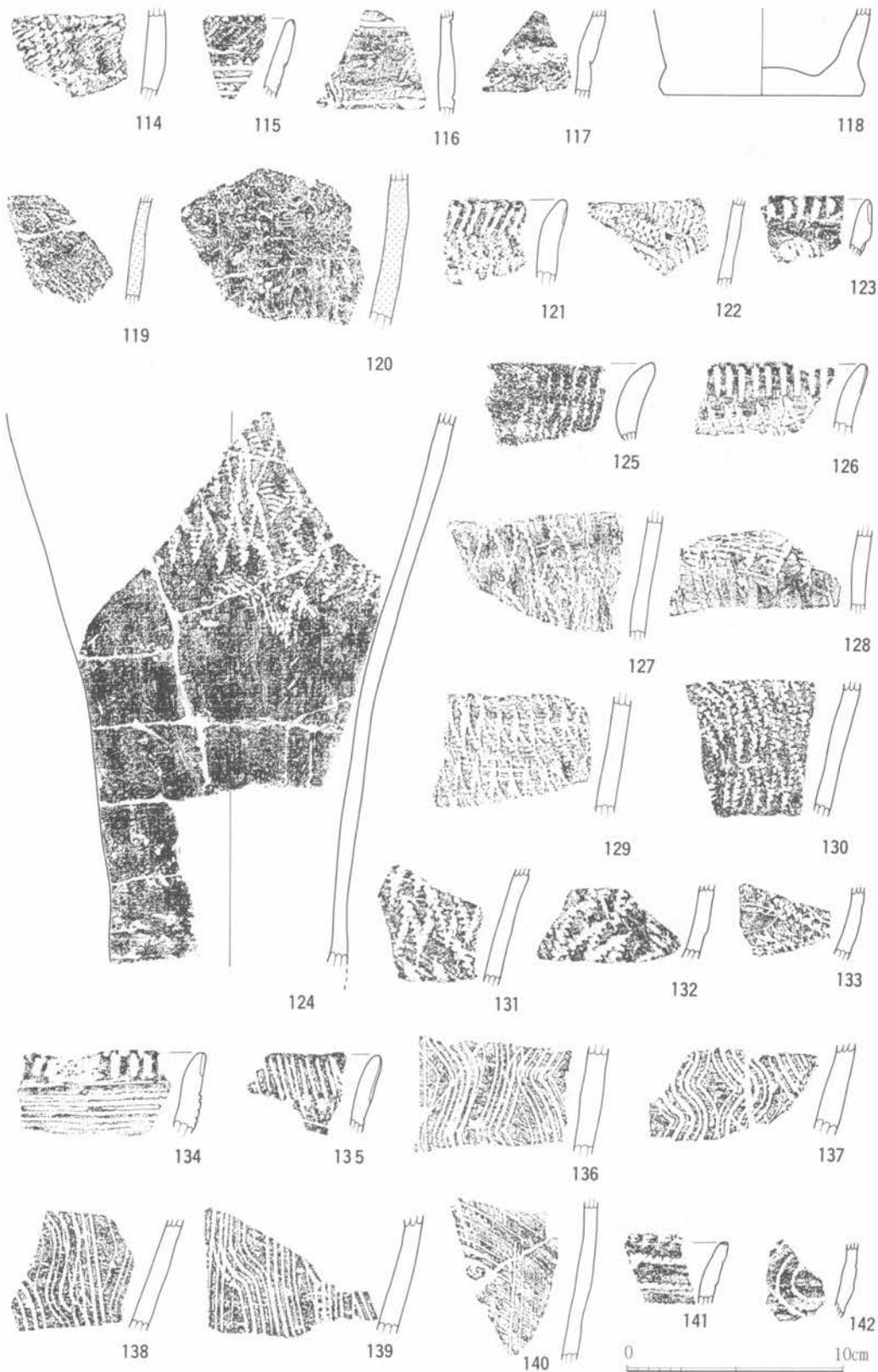
本跡からは第Ⅲ群および、第Ⅳ群土器が出土している。124は口縁部に向かって直線的に開く器形の深鉢形土器である。文様は、胴上半にサルボウ等の貝による貝殻波状文を施し、底部に至る胴下半部は無文であるが、ヘラ等による縦位の整形がなされている。125～132も貝殻波状文の施される土器である。すべてサルボウ等の放射肋のある貝殻が用いられている。125, 126はいずれも口縁部片だが、125は口唇直下から貝殻文が施され、126は口唇下に刻み目状の短沈線を巡らせる。133は細い沈線により、貝殻文施文部と無文部を区画するもので、興津式の中に含まれよう。134～140は条線文を主体に文様が構成されるもので、134, 135の口縁部片には、口唇下に刻み目状沈線が施されている。また条線文は140を除き曲線的で、5～6本1単位の櫛歯状工具が用いられている。141～145は前期末から中期初頭に位置づけられる縄文土器である。141, 142には縄文原体の圧痕文が認められ、143, 145にはいわゆる綾絡文が見られる。143の口唇部は指頭状工具による圧痕文が施され、144では縄文が口唇部から全面に回転施文されている。146, 147はそれぞれ無文の胴部片および底部である。いずれも縦位の整形痕が認められる。

009号住居跡 (148～152)

148は貝殻波状文の施される小破片。149は、沈線により貝殻文施文部と無文部を区画する興津式土器である。150は平坦な口唇部を有するもので、口唇下に細い沈線を横位に施し、以下は櫛歯状工具による条線文が波状に垂下するものようである。151, 152はやはり櫛歯状工具による条線文を直線的に施すものである。

010号住居跡 (153～165)

153は緩い波状口縁を有するもので、斜位の平行沈線を波頂部から右傾、左傾に施される。154も平行沈線により文様が作出されるもので、平行沈線をジグザグ状に組み合わせるように構成している。155, 156はいずれも貝殻腹縁の端部の押圧による三角文が施されている。157は折り返し状に整形された口縁部で、口唇下に縦位の刻み目状沈線を施すほか、三角文と思われる文様の一部が認められる。158～161は条線文が施されているものである。このうち159は、横位に巡る条線文と、やはり横位に蛇行しながら曲線的に巡る条線文とを組み合わせるものであろう。



第44图 006(114~118)·007(119~123)·008(124~142)号
竖穴住居跡出土土器

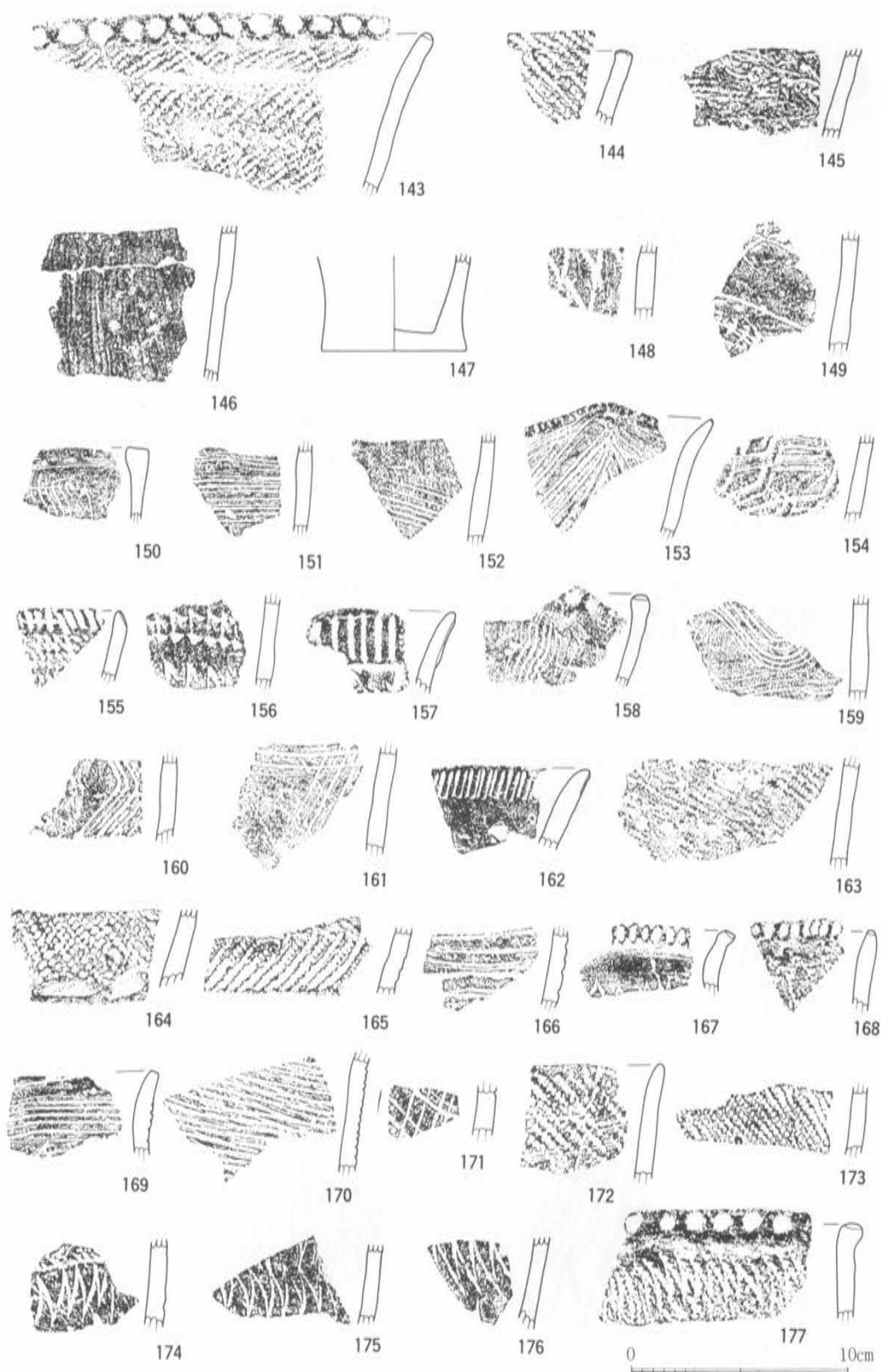
162は口唇下にやや斜位の刻み目状沈線のみ施される口縁部片である。刻み目状沈線は半截竹管等を用い、2条づつ施されているようである。163～165は縄文のみ施されている胴部片である。縄文はいずれも単節縄文である。

0 1 3 号住居跡 (166～173)

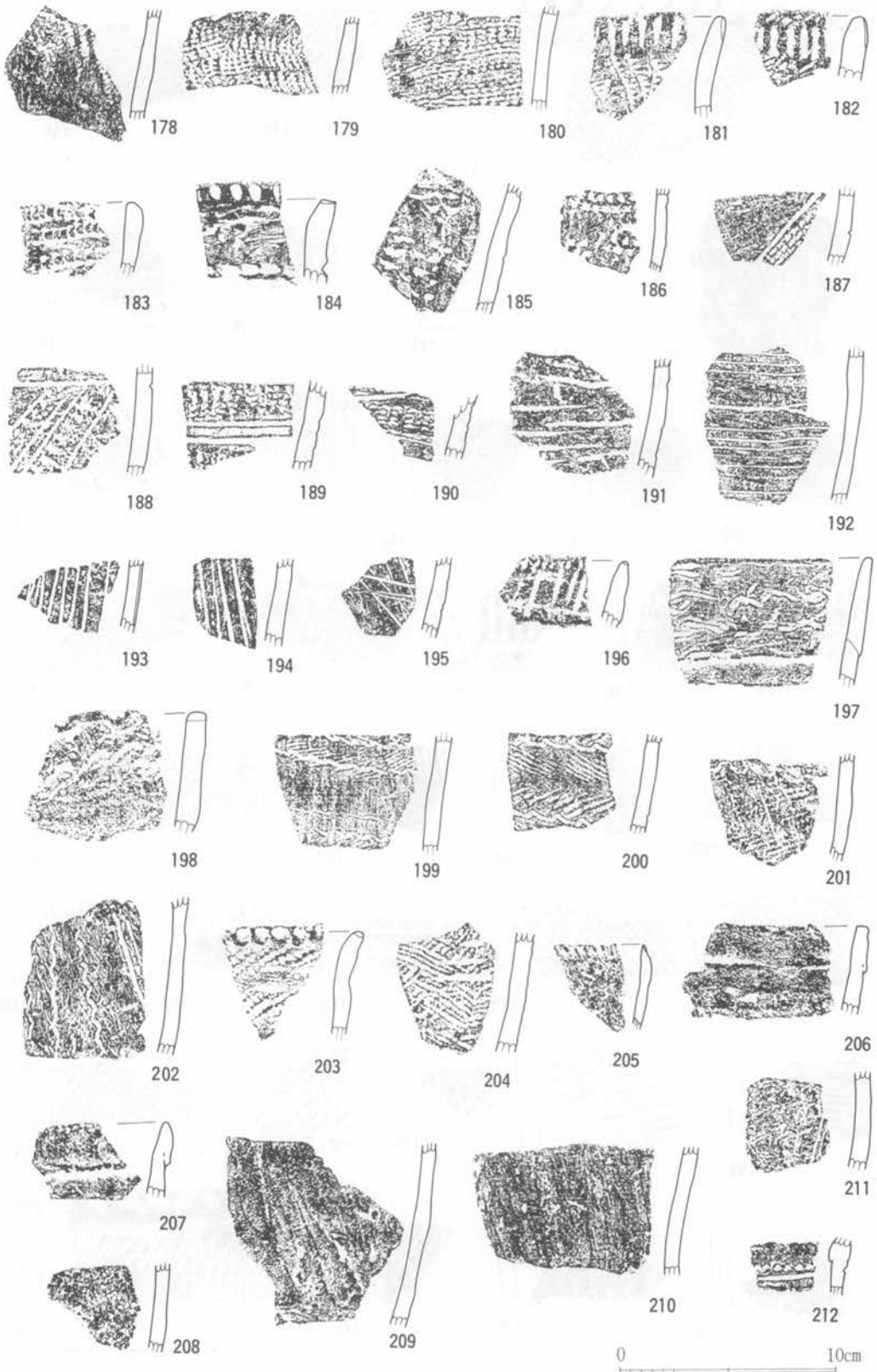
166は平行沈線が横位に施された胴部片。167, 168はいずれも口唇部に刻み目を有し、文様は貝殻波状文が施されているが、167では外屈する口唇下を無文部として残している。169, 170は横位の条線文を施すものである。いずれも櫛歯状工具により施文され、170の条線はより密集する。171は斜位の条線が交差するように施されている。172, 173は縄文のみ施されるもので、原体はいずれも単節RLである。

0 1 4 号住居跡 (174～212)

本跡からは、第Ⅲ群および第Ⅳ群土器が主体的に出土している。174は、貝殻波状文と変形爪形文が併用されて施されるものである。浮島Ⅱ式に比定されよう。175, 176は、174と同様に貝殻腹縁に放射肋のないハマグリ等の貝を用いた貝殻波状文が施されている。177は比較的平坦な口唇上に、指頭状工具による圧痕を有するものである。器面にはサルボウ等の貝による波状文を施す。179, 180も同様の貝によるが、180は、ずらしながら施すもので、後出的となる。181, 182は、貝殻文に加え、口唇下に刻み目状の短沈線が施されている。181の器形はわずかに外反する。183～186は刺突文の施されるものである。刺突文の工具は、183, 184がそれぞれ半截竹管および多截竹管、185, 186が貝殻腹縁の端部によるもので、後者はいわゆる三角文の土器である。187～190は、沈線文により貝殻文施文部と無文部または無文帯を区画する興津式土器である。191も貝殻文に沈線を加えた興津式と思われるが、沈線文は区画文とならない。192～195は条線文が施されるものだが、いずれも条間が広く、櫛歯状工具により作出されたものとは思われない。196は、口唇部に細かな刻み目と、口唇下に刻み目状の短沈線を有するものである。197～202はいわゆる綾絡文を伴う縄文が施文されているものである。縄文の施文方向は、202のみ縦位、他はすべて横位である。203はわずかに外反する口縁部片で、器面にはLR縄文のみ施される。204は無節L縄文を主体とするが、一部異方向も見られ、全体としては羽状縄文を呈するものかもしれない。205～207は無文の口縁部片である。205の口唇部は尖がり、口唇下に細い刻み目状沈線を巡らせる。206, 207は折り返し口縁を呈する。208～210は無文の胴部片である。209, 210は縦位方向の整形痕が認められる。211は綾絡文と平行沈線文を有するもので、五領ヶ台式土器であろう。212は沈線に沿って細かな刺突文が施されており、やはり五領ヶ台式土器である。



第45图 008(143~147)·009(148~152)·010(153~165)·013
(166~173)·014(174~177)号竖穴住居迹出土土器



第46图 014号竖穴住居迹出土土器

2. 土 坑

土坑は調査区内で36基検出されている。うち1基が、いわゆるTピットと呼ばれる陥し穴状土坑である。また、土坑内に焼土の堆積を認めるものが6基を数える。これらの付近には縄文早期の条痕文系土器群の分布が見られるものの、土坑内から検出される遺物も少なく、明瞭に縄文早期の炉穴として捉えられるものは少ない。

101号土坑（第47図）

調査区の南側で、台地平坦面にあたるI5区に位置する。平面形は、南側が張り出す不整形を呈す。南壁部分はテラス状の段となり、1.8×1.4mの規模を有する。ロームへの掘り込みは、テラス部までが約30cm、坑底までが50cmを測り、坑底は固く平坦である。遺物は、縄文土器片がわずかに出土したのみである。

102号土坑（第47図）

調査区南側のI5区に位置する。平面形は円形に近く、径約1.6mを測る。北東壁際に坑底からの深さ40cmを測るピットを有する。坑底中央部には浅い皿状の窪みを認める。遺物は、覆土中から浮島式土器片が少量出土している。

103号土坑（第47図）

102号土坑の西に隣接するI5区に位置する。平面形は楕円形を呈し、1.3×0.9mの規模を測る。ロームへの掘り込みは約20cmと浅く、壁は傾斜して立ち上がる。坑底は比較的軟質である。遺物は検出されなかった。

104号土坑（第47図）

I5区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.6m、短軸1.3mを測る規模を有する。検出面からの掘り込みは25cmで、坑底は固く平坦である。出土遺物はない。

105号土坑（第47図、図版18）

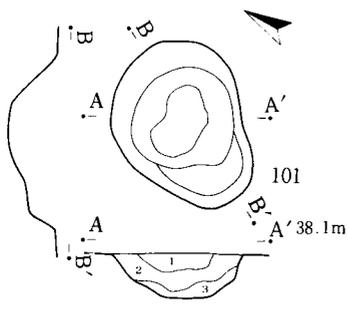
調査区の西で、北側から入り込む谷に面するH4・H5区に位置する。平面形は南北に長い楕円形を呈し、長軸3.5m、短軸1.9mの規模を測る。検出面からの掘り込みは2.5mと深い。断面形は、短軸方向では開口部が広いが、検出面からの深さ0.4m以下で急にすぼまり、いわゆるT字状を呈する。また、長軸方向では南北両壁の中位がやや袋状に掘り込まれている。本跡は、その形状等から陥し穴と考えられる。遺物の出土はなかった。

106号土坑（第47図）

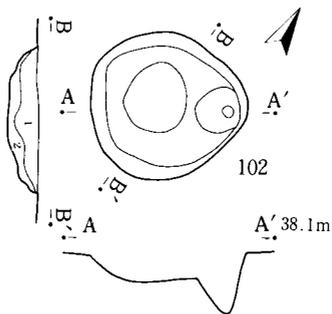
H5区に位置する。平面形は楕円形を呈し、1.5×1.1mを測る規模を有する。ロームへの掘り込みは約30cmを測り、坑底は平坦だが、やや軟質であった。遺物は、黒浜式土器小片が出土している。

107号土坑（第47図）

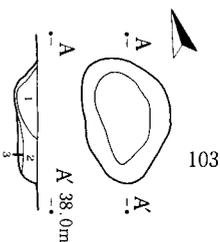
H5区に位置する。平面形は円形に近い。径約2.2mを測り、ロームへの掘り込みは20cmと浅



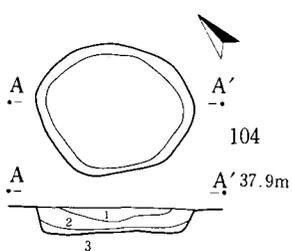
- 1層 褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 2層 暗褐色土層(ローム粒子少量混入)
- 3層 黄褐色土層(ロームブロック・ローム粒子主体)



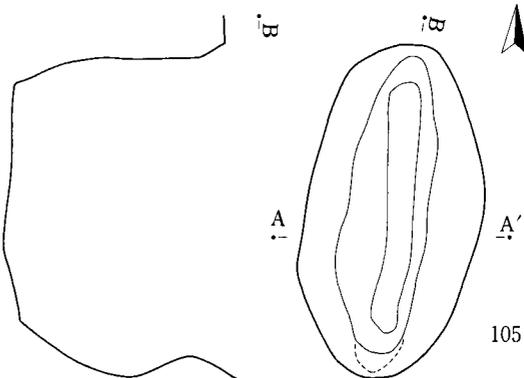
- 1層 暗褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 2層 黄褐色土層(ローム粒子多量混入)



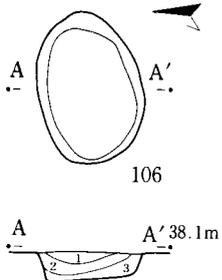
- 1層 暗褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 2層 褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 3層 黄褐色土層(ローム粒子多量混入)



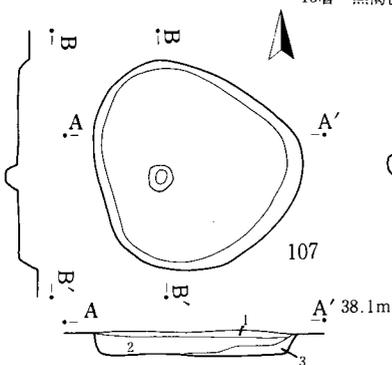
- 1層 暗褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 2層 黒褐色土層(ローム粒子少量混入)
- 3層 黄褐色土層(ローム粒子多量混入)



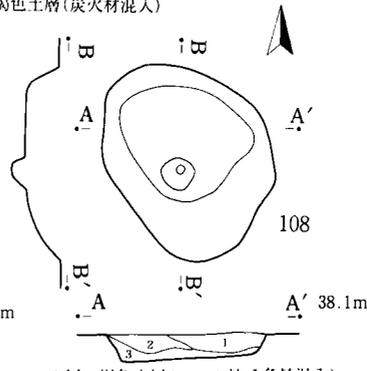
- 1層 暗褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 2層 黒褐色土層(ローム粒子混入)
- 3層 暗褐色土層(ローム粒子多量混入・ロームブロック少量混入)
- 4層 黄褐色土層(ロームブロック主体)
- 5層 暗褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 6層 暗褐色土層(ロームブロック多量混入)
- 7層 黒色土層
- 8層 ロームブロック粒
- 9層 暗褐色土層(ローム粒子・ロームブロック混入)
- 10層 ロームブロック層
- 11層 黄褐色層
- 12層 ロームブロック層
- 13層 暗黄褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 14層 暗褐色土層
- 15層 黒褐色土層(炭火材混入)



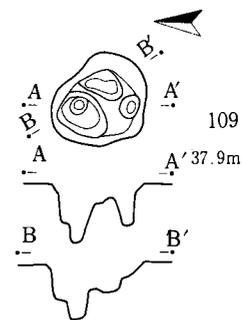
- 1層 暗黄褐色土層
- 2層 暗褐色土層
- 3層 暗黄褐色土層



- 1層 暗褐色土層(ローム粒子・焼土粒子やや多く混入)
- 2層 褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 3層 黄茶褐色土層(ローム粒子多量混入)



- 1層 褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 2層 暗褐色土層
- 3層 黄褐色土層(ローム粒子多量混入)



第47図 101~109号土坑

い。坑底は平坦で固く、中央よりやや西に深さ10cmほどの浅いピットを有している。

108号土坑（第47図）

107号土坑の東に隣接するH5区に位置する。平面形は不整形で、径1.8～2.0mを測る。ロームへの掘り込みは約30cmで、坑底は平坦で固い。南壁に近い位置に坑底からの深さ15cmを測るピットを有する。出土遺物はない。

109号土坑（第47図）

調査区の南端で、101号土坑に隣接するI5区に位置する。平面形は不整形を呈し、1.1×0.9mの規模を有する。坑底には3か所にピットを有しており、坑底の平坦面はわずかなものとなっている。ピットの深さは、最も深いもので坑底から約40cmを測る。出土遺物はない。

110号土坑（第48図）

調査区の南端に近いI5区に位置する。平面形は不整形を呈し、1.7×1.3mの規模を有する。ロームへの掘り込みは20～25cmを測り、坑底に凹凸はないものの、緩く傾斜する。遺物は、黒浜式土器が少量出土している。

111号土坑（第48図）

調査区の中央付近で、北側から入り込む谷に面するH4・I4区に位置する。平面形は不整形を呈し、2.1×1.5mを測る規模を有する。ロームへの掘り込みは10cmと浅く、坑底は平坦で固い。北西壁近くに、断面摺鉢状を呈する小ピットを有する。覆土中からは、浮島式土器が出土している。本跡は、その形状、規模から小竪穴として捉えられよう。

112号土坑（第48図）

調査区中央に北側から入り込む谷の東側にあたるI4区に位置する。平面形は楕円形を呈し、1.8×1.0mを測る規模を有する。ロームへの掘り込みは約20cmで、坑底は比較的平坦で固い。遺物は、中期初頭と考えられる土器片を主体に、少量出土している。

113号土坑（第48図）

調査区の最北端で、東側の谷に面する台地縁辺部にあたるJ2区に位置する。平面形は不整形を呈し、径約1.0mの規模を測る。掘り込みの深さは65cmを測り、西側の壁は緩く立ち上がる。坑底は平坦で固い。遺物は、土器片がわずかに出土したにすぎない。

114号土坑（第48図）

調査区の北部、I2区に位置する。平面形は径0.6mを測る小型の円形を呈する。掘り込みの深さは10cmと浅いが、覆土中には多量の焼土が認められた。付近の包含層中からは縄文早期の条痕文系土器が出土しているが、本跡からの遺物の出土はない。

115号土坑（第48図）

I2区に位置し、114号土坑のすぐ南にある。規模、形状ともに114号土坑と類似し、覆土中にも同様の焼土が見られることから、両者は同時に存在した可能性が高い。

116号土坑（第48図）

001号住居の西に隣接するI4区に位置する。平面形は不整形を呈し、径約1.3mの規模を有する。ロームへの掘り込みは約10cmと浅い。坑底はやや凹凸があるが、全体によく踏み締められている。遺物は、前期末のものと思われる土器片が少量出土している。

117号土坑（第48図）

調査区南部のH5区に位置する。平面形は円形に近く、1.3×1.1mの規模を測る。ロームへの掘り込みは約30cmで、壁は緩く傾斜する。坑底は中央がやや窪むが、比較的平坦で固い。遺物の出土はなかった。

118号土坑（第48図）

H5区に位置する。平面形は長楕円形で、2.2×0.7mの規模を測る。掘り込みの深さは10～20cmで、坑底の西側がやや窪み、全体に軟質である。遺物の出土はなかった。

119号土坑（第48図）

114号及び115号土坑の西に隣接するI2区に位置する。本跡の西には北から入り込む谷が存在する。平面形は楕円形を呈し、北側に見られる円形状のものは後に掘り込まれたものである。規模は1.2×0.7mを測り、焼土が東側に偏った位置で、5cmほど堆積している。坑底は平坦で、焼土の下部はよく熱を受けた痕跡が残っていた。出土遺物はない。

120号土坑（第48図）

調査区中央に入り込む谷の谷頭部付近にあたるH4区に位置する。平面形は楕円形を呈し、2.0×1.5mを測る規模を有する。掘り込みの深さは10～15cmと浅く、坑底は平坦で固い。遺物は、胎土中に繊維を含む縄文早期の土器片がまとまって出土している。

121号土坑（第48図）

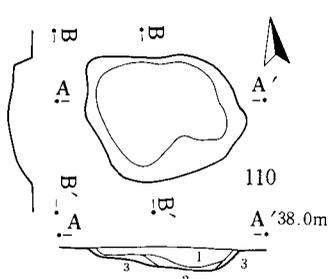
008号住居の西に隣接するI5区に位置する。平面形は楕円形を呈し、1.4×1.2mの規模を有する。ロームへの掘り込みは15cmで、坑底は固く平坦だが、3か所に径30cmほどのピットを有している。出土遺物はない。

122号土坑（第48図）

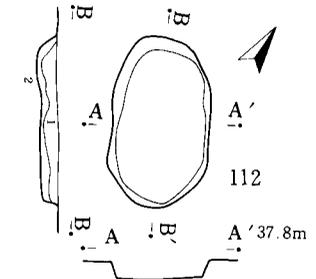
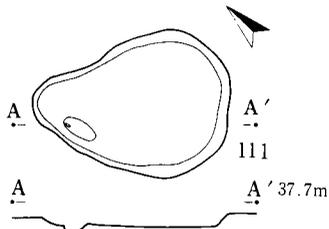
008号住居の南に隣接するJ5区に位置する。平面形は楕円形を呈し、1.3×0.9mの規模を有する。坑底までの掘り込みの深さは約10cmで、2か所にピットを有する。坑底は平坦で、比較的固い状況である。遺物の出土はなかった。

125号土坑（第49図、図版18）

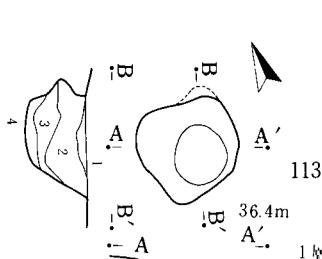
I3区に位置する。平面形は長楕円形を呈し、1.9×0.5mの規模を有する。ロームへの掘り込みは25cmを測り、壁は緩く傾斜する。坑底から浮いた位置で、波状貝殻文を有する浮島式の鉢形土器が、倒置されたと思われる状況で出土している。



- 1層 暗褐色土層(ローム粒子混入)
- 2層 暗黄褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 3層 黄褐色土層(ローム粒子多量混入)

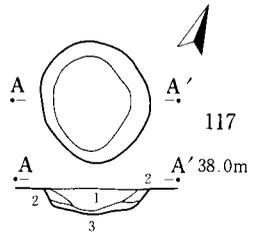
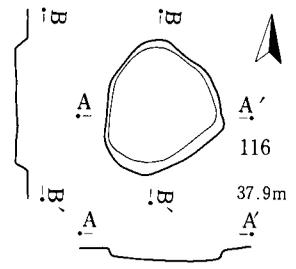
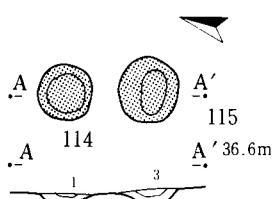


- 1層 暗褐色土層(ローム粒子混入)
- 2層 黄褐色土層(ローム粒子多量混入)

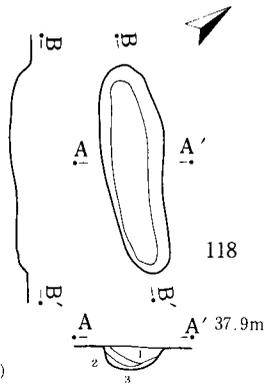


- 1層 赤褐色土層(焼土粒子多量混入)
- 2層 暗赤褐色土層(焼土粒子・ローム粒子混入)
- 3層 赤褐色土層(焼土粒子多量混入)
- 4層 暗黄褐色土層(ローム粒子・焼土粒子多量混入)

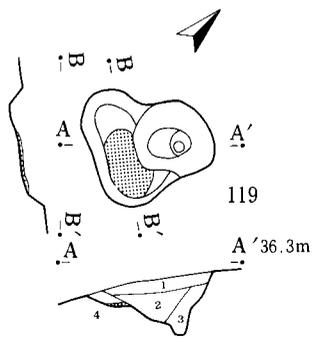
- 1層 茶褐色土層(ローム粒子・焼土粒子混入)
- 2層 褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 3層 茶褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 4層 黄褐色土層(ロームブロック混入)



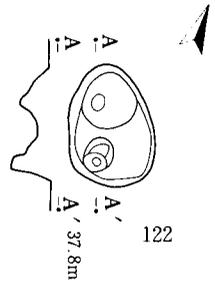
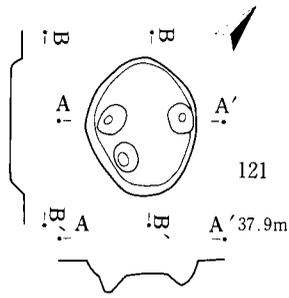
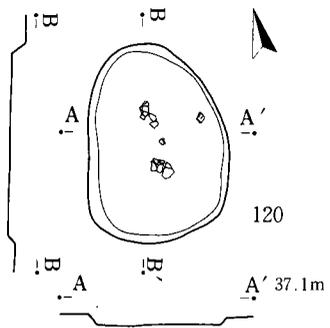
- 1層 暗褐色土層(ローム粒子・焼土粒子少量混入)
- 2層 褐色土層(ローム粒子やや多く混入)
- 3層 黄褐色土層(ローム粒子多量混入)



- 1層 暗褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 2層 黒褐色土層
- 3層 黄褐色土層



- 1層 暗褐色土層
- 2層 褐色土層
- 3層 暗黄褐色土層
- 4層 暗赤褐色土層



第48図 110~122号土坑

1 2 6号土坑 (第49図)

125号土坑に接して検出されている。平面形は二つの円形が複合したような形状を呈し、中央付近に薄い焼土の堆積が見られた。焼土下には、被熱したロームブロックを含む土層が認められた。遺物は検出されていない。

1 2 7号土坑 (第49図)

H 5区に位置する。平面形は楕円形を呈し、1.8×1.4mを測る規模を有する。掘り込みの深さは約30cmを測り、比較的深いものに属するが、坑底はやや軟弱であった。遺物は、中期初頭と思われる土器小片が出土しているが、図示し得るものはない。

1 2 8号土坑 (第49図)

005号住居の北東に約2mの距離を測るI 4区に位置する。平面形は円形に近く、径約1.0mの規模を有する。掘り込みの深さは20cmで、坑底は固く平坦である。北側の壁直下から、浮島式の小型の深鉢が完形で出土している。

1 2 9号土坑 (第49図)

003号住居の南壁に重複するI 4区に位置する。3つの楕円形を呈する土坑(A～C)が重複しながら003号住居の壁を掘り込んでいるため、住居跡よりは後に掘り込まれたものである。3基ともに遺物の出土は僅少で、坑底はそれぞれ平坦で固い状況を呈していた。

1 3 0号土坑 (第49図)

I 4区に位置する。平面形は楕円形を呈し、1.5×1.1mの規模を有する。坑底までの深さは約50cmと深く、南西側の壁中位にテラス状の段を有する。坑底は固く平坦で、覆土にはロームブロックが多く含まれ、埋め戻された状況を呈していた。遺物は、前期末から中期初頭に属する縄文土器が少量出土している。

1 3 1号土坑 (第49図)

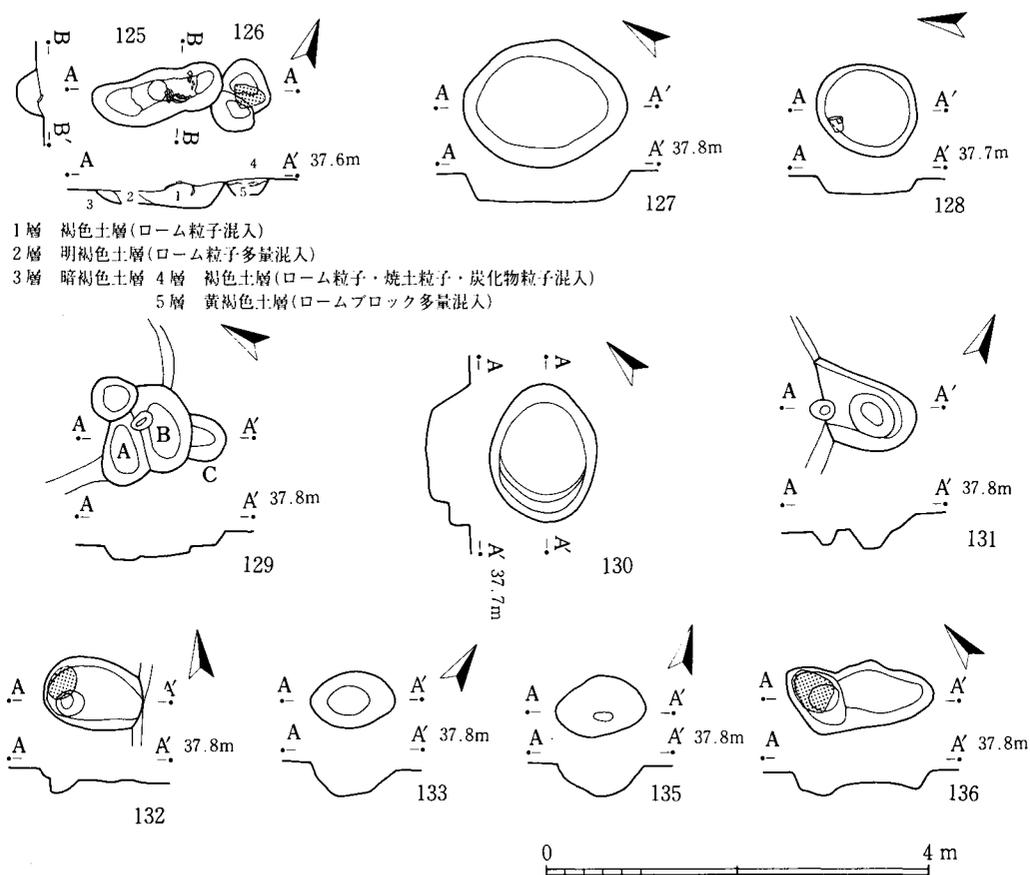
003号住居の東壁に重複するI 4区に位置する。本跡の西側半分は003号住居により切られており、本跡の方が古い。平面形は楕円形を呈するもので、短軸の長さ約0.8mを測る。坑底の2か所にピットを有し、東側の壁は非常になだらかに立ち上がる。出土遺物はない。

1 3 2号土坑 (第49図)

007号住居の西壁に重複するJ 4区に位置する。東側の一部が007号住居により切られており、本跡のほうが古い。平面形は楕円形を呈し、1.1×0.8mを測る規模を有する。坑底は平坦で固く、西側に寄った位置に、浅いピットと薄い焼土の堆積を認めている。出土遺物はない。

1 3 3号土坑 (第49図)

J 4区に位置する。平面形は楕円形を呈し、0.9×0.6mの規模を有する小型のものである。搦鉢状に30cmほど掘り込まれており、坑底はやや軟質であった。遺物は、中期初頭と思われる土器片が出土している。



第49図 125～133・135・136号土坑

135号土坑 (第49図)

J 4区に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模0.9×0.6mを測り、133号土坑と同様に播鉢状に掘り込まれている。坑底はやはり軟質で、出土遺物はない。

136号土坑 (第49図)

調査区の東側で、013号住居に近いJ 4区に位置する。平面形は長楕円形で、1.5×0.7mの規模を有する。北西側は南東側より一段低く掘り込まれ、焼土が堆積していた。南西側はそれよりも10cmほど高く、テラス状に掘り込まれている。構造的に、炉床と足場を併せもっており典型的なファイアーピットとして捉えることができよう。遺物は検出されなかった。

土坑出土土器 (第50・51図, 図版19・23)

101号土坑 (1, 2)

1は胎土に繊維を含み、器面には単節LR縄文が施される黒浜式土器である。2は繊維を含まず、無文で縦位の整形痕が観察できる。

102号土坑 (3~11)

本跡からは、浮島式から中期の初頭にかかる土器が検出されている。3~5は貝殻文が施されるもの。貝殻文はいずれも整った波状を呈するが、5のみわずかにずらしぎみに施文される。6は綾絡文を伴う単節LR縄文が施されている。7~10は無文の胴部片である。8に縦位の整形痕が見られる他は目だった特徴がないが、9の胎土には石英、小石粒等を含んでおり、搬入土器の可能性もある。11は4本1単位の櫛歯状工具により、条線文を曲線的に施したものである。

106号土坑 (12~18)

本跡からは黒浜式土器が主体的に出土している。12は、節の粗いLR縄文が施される口縁部片で、胎土に多量の繊維を含む。13は斜位に施された集合沈線が交錯するものである。14~18は縄文のみ施されている胴部片である。原体は18を除き、すべて単節RLである。

107号土坑 (19~24)

19~22はいずれも細い原体による無節縄文が施されるものである。このうち22は、胴下部付近の破片と思われ、縦位の整形痕が認められる。23はやはり細い原体の単節LR縄文が施される。24は無文の小破片。

110号土坑 (25~28)

25は半截竹管による連続爪形状文が施される黒浜式土器である。26~28は縄文等の地文のみ施される黒浜式土器である。26は羽状縄文、28は付加条文が施文されている。

111号土坑 (29, 30)

29は底部付近の破片で、表裏面にナデ整形によるものと思われる横位の擦痕を有する。30は、意識的に残した輪積痕上に貝殻文を加えたもので、浮島II式に比定できよう。

112号土坑 (31~36)

31は櫛歯状工具による条線文が縦位に施されたもの。32は小片だが、非常に細い原体の縄文がまばらに施文されている。33は単節LR縄文が施される胴部片である。胎土には雲母を含んでいる。35は単節RL縄文が施され、内面は横位に研磨調整されている。36は底部片で、胎土の粒子は非常に細かい。34は内側に折り返された口縁を有するもので、口縁部外面に沈線を2条巡らせ、それに沿って一部に刺突文が加えられる。五領ヶ台式に比定される土器である。

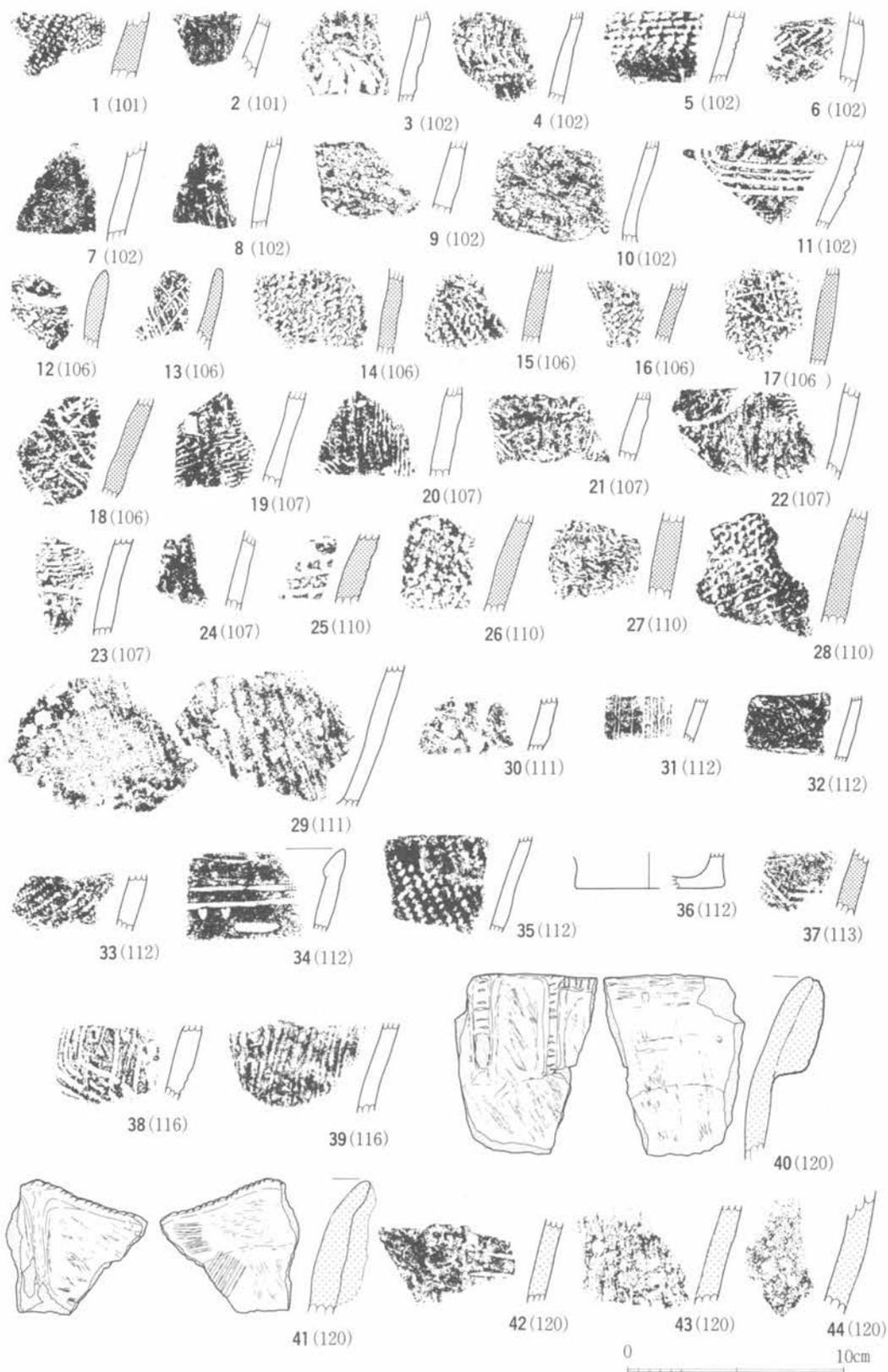
113号土坑 (37)

37は胎土中に少量ながら繊維が含まれ、表裏に条痕文を認める。早期の土器片である。

116号土坑 (38, 39)

38は櫛歯状工具による曲線的な条線文に加えて、やや粗雑な感じを受ける直線的な条線を重ねる。39は底部付近の破片と思われるが、縦位にミガキ状の整形がなされている。

120号土坑 (40~45)



第50图 土坑出土土器1)

本跡からは、縄文早期の条痕文系土器が主体的に出土している。40は外反ぎみに開く口縁部片で、刻み目を施した隆帯を縦位に貼り付けている。内外面ともに擦痕を残すが、内面には指頭状工具によるものと思われる凹凸が見られるため、擦痕はナデ等の整形の際に生じたものである。胎土中には少量の繊維のほかに、石英粒等を含んでいる。41も40とよく似た焼成であるが、胎土中には石英は見られず、砂粒が混入される。また、口唇上には刻み目を有するものの、隆帯上には刻み目を持たない。45は推定口径23.8cmを測り、直線的に立ち上がる器形を持つ。表裏面ともに整形の際の擦痕を残すが、その方向は表面が縦位、裏面が横位となる。裏面の下部付近には、一部条痕が残る。胎土中には少量の繊維に加えて、砂粒を混入する。42～44はやはり擦痕が認められる小破片である。これらの土器はすべて早期末葉のものと思われる。

1 2 5号土坑 (46～52)

46は尖がりぎみの口唇部断面を有する無文の口縁部片である。器面には整形の際の凹凸と擦痕を残す。胎土等から第II群土器に含まれるものと思われる。47は口径28.2cmを測る鉢形土器である。口縁部と底部付近を無文として、胴部には4列の貝殻波状文が施されている。内面上位には整形の際の擦痕が横位に残される。49、50は、46と同様に無文ながら外面縦位に擦痕を残す。48は貝殻波状文の施される小破片。51はLR縄文の施される中期初頭の土器。52は縦位に施されたLR縄文が縦位の沈線により区画される加曾利E式土器である。

1 2 8号土坑 (53)

53は口径12.8cm、器高14.8cmを測る比較的小型の深鉢形土器である。口縁部に2段の輪積痕を残し胴部と輪積痕上に貝殻波状文が施される。胎土中には砂粒を多く含む。

1 2 9号土坑 (54, 55)

54はLR縄文の施される小破片。胎土中に繊維を含む黒浜式土器である。55はいわゆる綾絡文が施される中期初頭の土器である。

1 3 0号土坑 (56～58)

56はサルボウ等による貝殻文が沈線により区画される。興津式土器である。57は綾絡文を伴う無節縄文上に、縦位ヘラケズリ状の整形がなされる。58はLR縄文のみ施される。

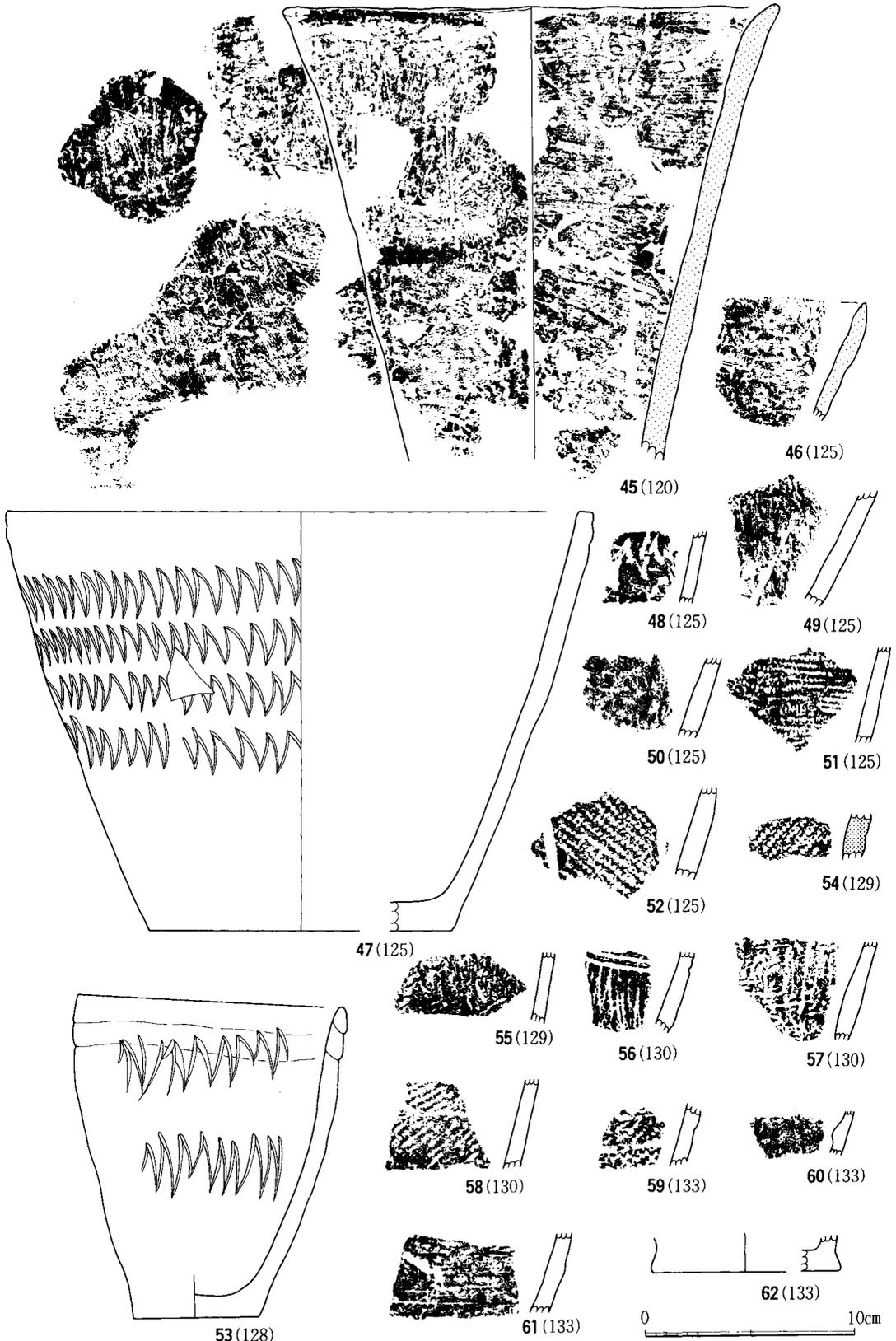
1 3 3号土坑 (59～62)

59は口唇部を欠くが、折り返し口縁の土器と思われる。60は内面に段を有する無文の土器片で、五領ヶ台式と思われる。61はやはり無文の胴部片で、横位の擦痕を認める。62は推定底径9.0cmを測る底部片である。底面及び側面ともに、ヘラによる整形痕が残る。

3. 石器

a. 概要

石器の出土総点数は1,448点である。遺構から出土した石器は361点で、出土総点数の24%を



第51图 土坑出土土器(2)

占め、大半はグリッド出土遺物である。出土点数の多い遺構は、003号住居跡の100点と008号住居跡の114点である。また、出土点数が1点以下の遺構は、004・010・011・012号住居跡である。なお、遺構から出土した石器は、図版番号横の()中に遺構番号を記載してある。石器組成・石材組成は全資料・遺構別組成表のとおりである。また、主要器種である石鏃・礫と主要石材であるチャート・安山岩の分布状況は第52・53図に記載してある。石器組成は、剝片・礫が大半を占める。製品は、石鏃の占める割合がきわめて高く、スクレイパー・磨製石斧が次に多い。なお、礫の石材は、大半が砂岩・石英ハン岩である。ここでは礫の石材分類を行なっていないので、石材組成の中に礫を含めた。石材組成は、安山岩・チャート・礫の占める割合がきわめて高く、次に、黒曜石が多い。

b. 石器の分布 (第52・53図)

石鏃の分布 (第52図) は、001・003・008号住居跡内及びその周辺に多く分布している。これは、全出土石器を石材別に見るとチャートと安山岩の分布と重なる傾向がある。石鏃の石材にはチャートと安山岩が多用されていることから、先述の区域は、石鏃の石器製作に関連する場所であった可能性がある。これに対して、礫 (第53図) の分布は、001・003・008号住居跡内及びその周辺とH3グリッド付近との2つの集中部分がある。前者は石鏃・チャート・安山岩の分布と重なるが、後者の礫の集中部分については、石鏃・チャート・安山岩がそれほど分布しておらず、分布域を異にする。H3グリッド付近は、谷の傾斜にかかる部分であり、遺構が検出されていない場所であるので、礫の廃棄的な場所が想定されよう。

c. 出土石器分類 (第54図)

石鏃

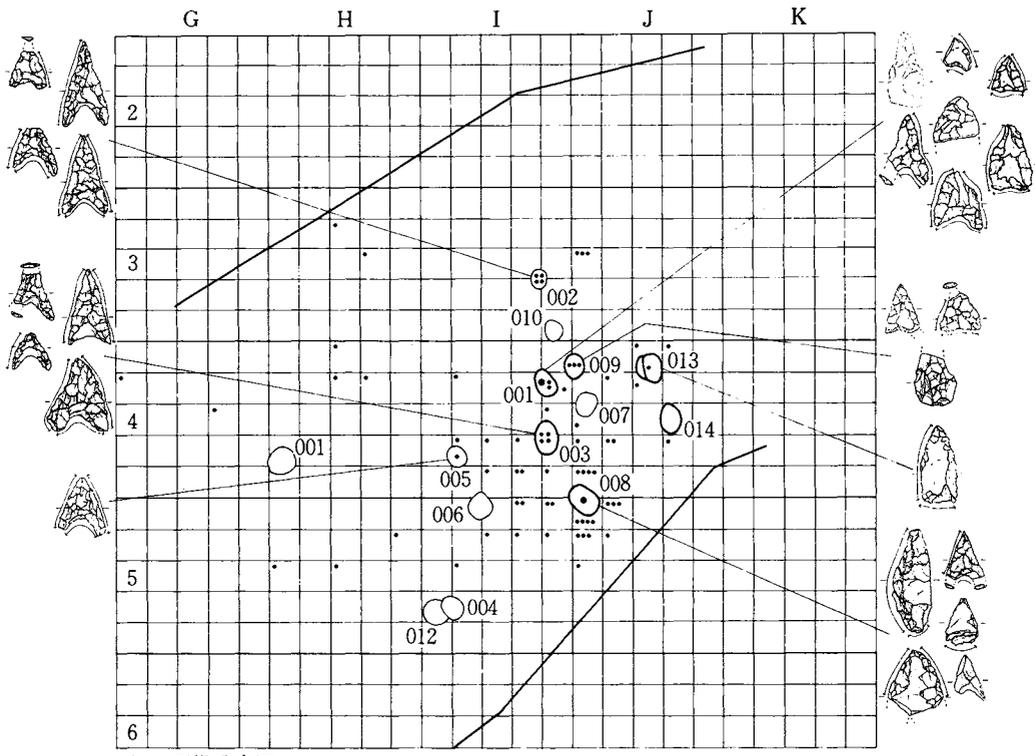
石鏃の類型は第54図のとおりに6類に分類した。分類の基準は、平面形状 (I・II類) と基部の挟りの形状 (a～c類) に基づく。I類は平面形状が二等辺三角形をしているもので、II類は平面形状が正三角形をしているものである。a類は基部の挟りのないもの。b類は基部が少し挟られているもの。c類は基部が大きく挟られているものである。また、調整加工の最終加工面 (「仕上げ痕」と呼ぶことにする) を矢印で示し、それぞれの調整加工の進行形態と背面と腹面の切り合い関係を示した。

磨製石斧

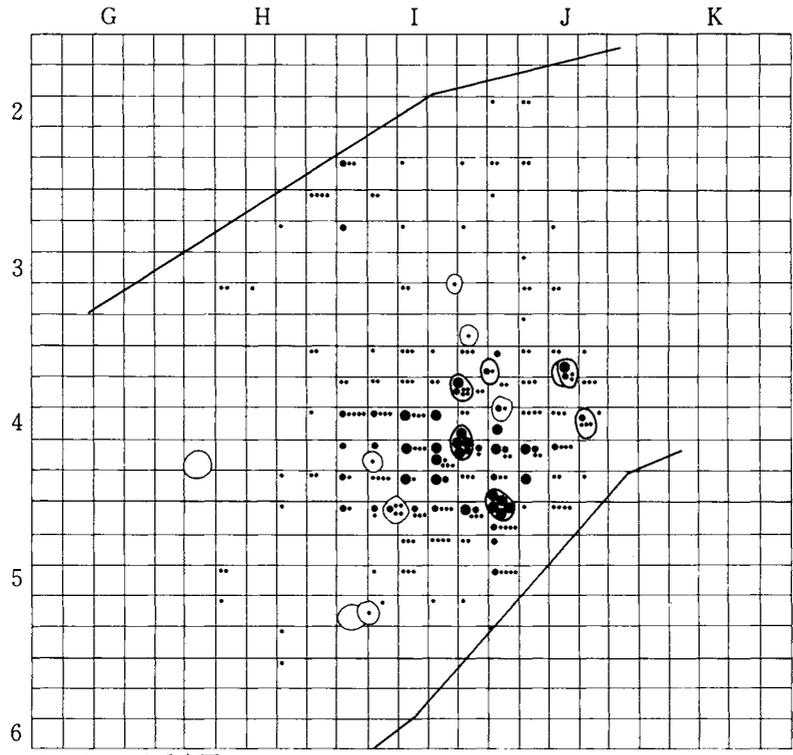
磨製石斧を3類に分類した。乳棒状石斧・断面長方形の方角石斧・断面楕円形の石斧の3類である。

d. 遺構出土石器

001号住居跡から出土した石器は総計42点であるが、石鏃7点で石鏃の占める割合が高い。石鏃は中間部から先端部にかけて細まっているもの (5・32・61) と石鏃の破損品 (68・72) とがある。前者は先端部を再加工したものと想定されるため、001号住居跡は石器をかなり使用し



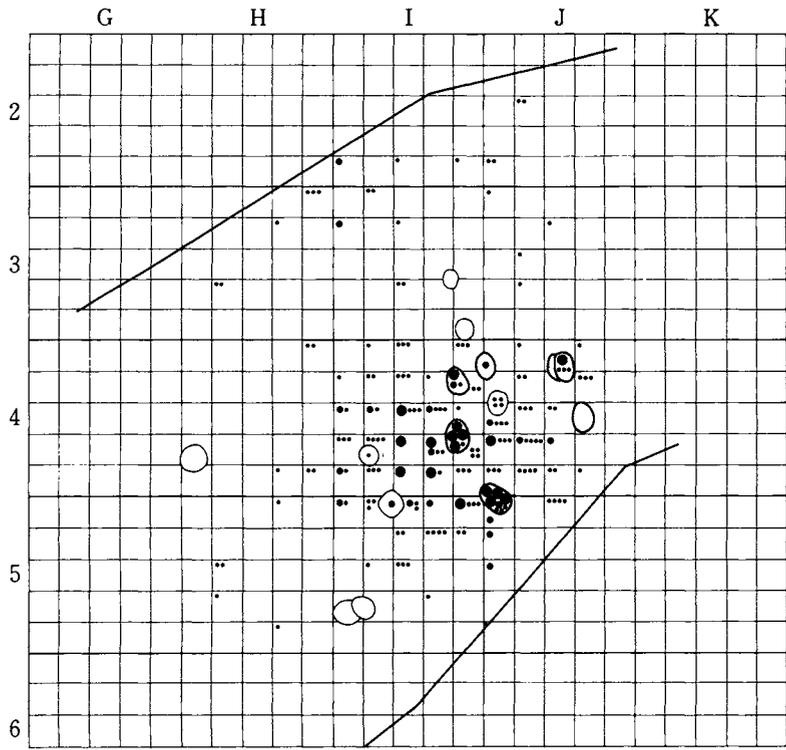
1. 石鑑分布図



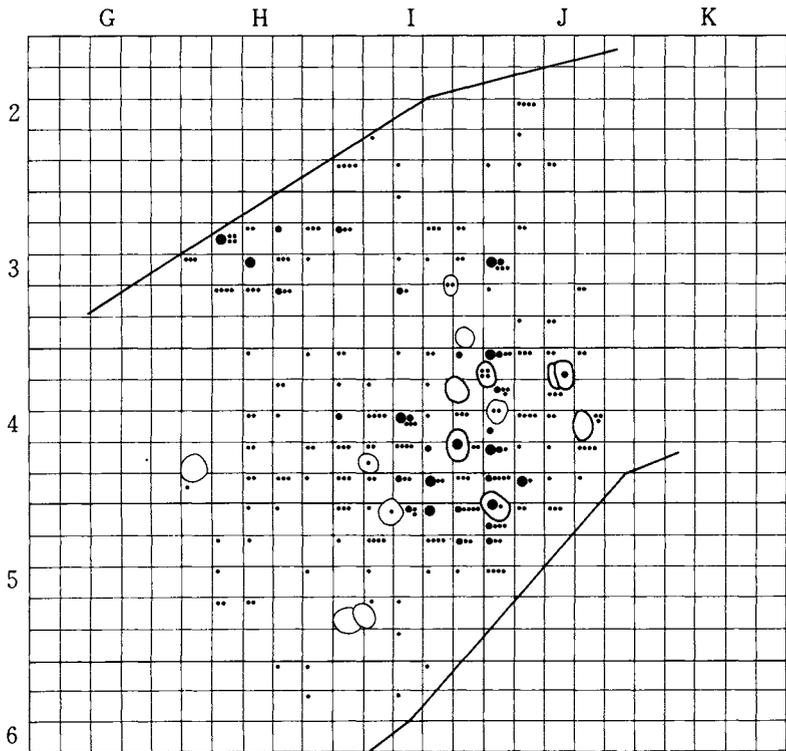
2. チャート分布図

● 10 点
● 5 点
● 1 点

第52図 石鑑・チャート分布図

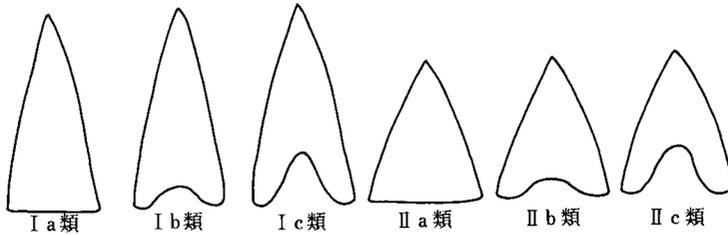


1. 安山岩分布图



2. 礫分布图

第53图 安山岩·礫分布图



第54図 石鏃の類型

た後に石器が残されているようすがうかがえる。002号住居跡から出土した石器は総計7点と少ないが、石鏃4点、磨製石斧1点であり、製品の占める割合がきわめて高い。石鏃は、I c類が2点(13・14)、II c類が1点出土しており、c類が多い。97は磨製石斧の破損品を再加工している。003号住居跡から出土した石器の点数は100点である。石器組成は、石鏃4点(11・47・51・56)、剥片86点、礫10点である。製品の点数は、出土点数の少ない001・002・009号住居跡とそれほどかわらない。008号住居跡から出土した石器は114点である。石器組成は、石鏃5点(58・60・66・73・77)、剥片98点、礫11点である。003号住居跡と同様に、石器の点数の多い割には、製品点数が少ない。

このように、石器の出土点数の多い住居跡も出土点数の少ない住居跡も製品の点数が2～6点とそれほど多くないという傾向がある。

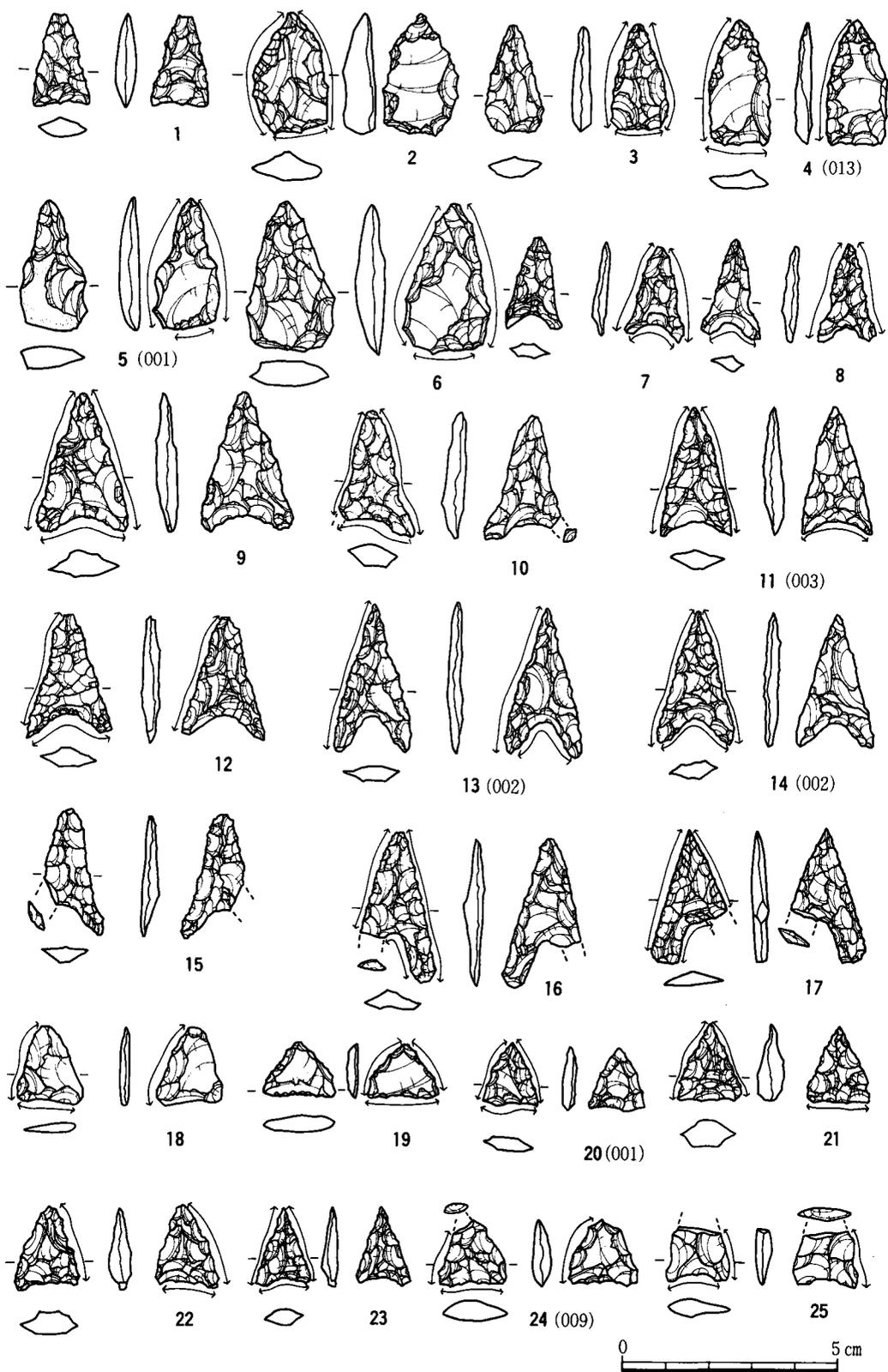
e. 出土石器の特徴 (第55～60図, 図版24・25)

ここでは、遺構出土石器とグリッド出土石器をまとめて、毛内遺跡の出土石器の特徴を器種別にみていくことにする。

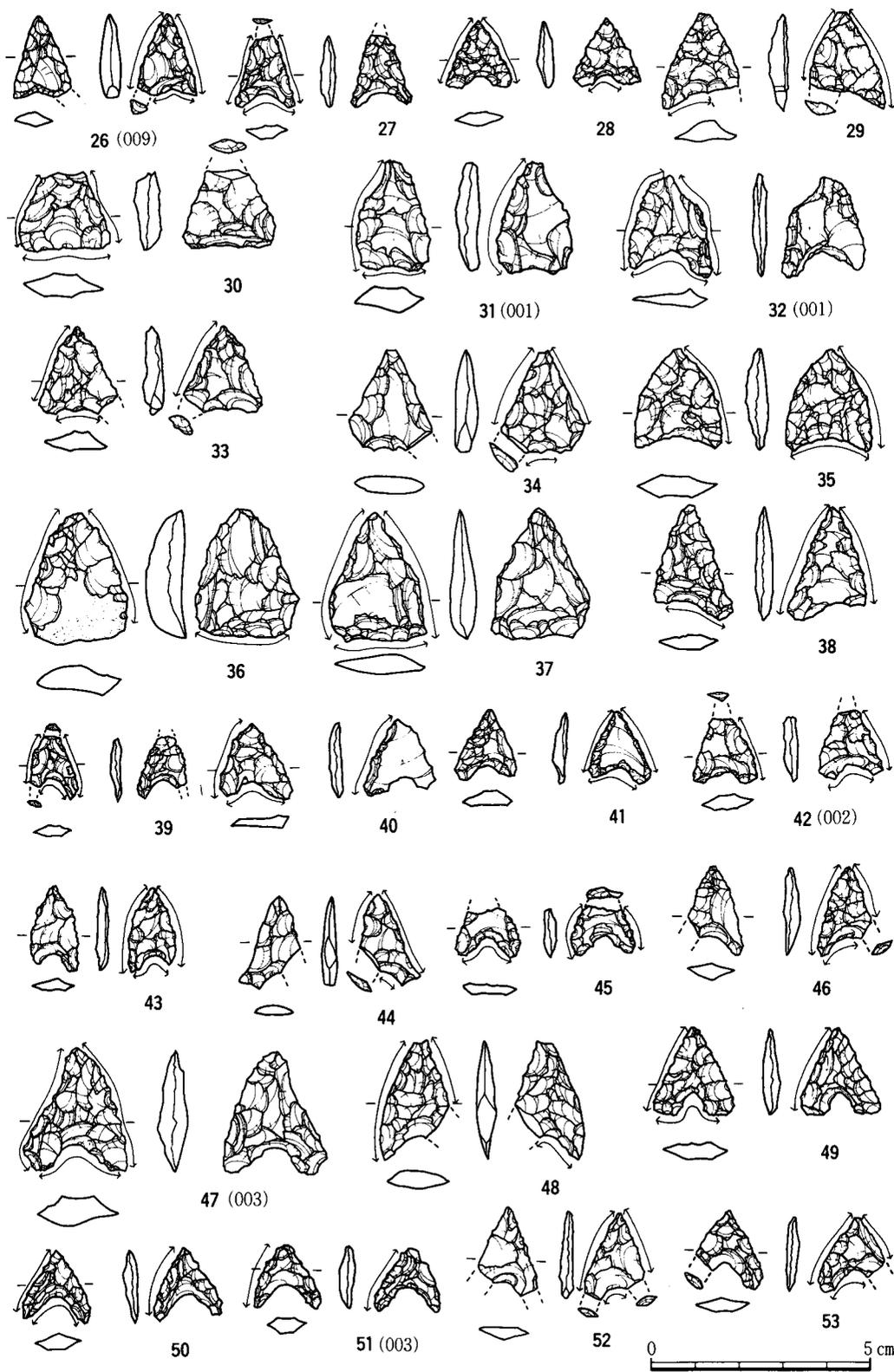
石鏃 (1～81)

1～6はI a類である。2・3・4・6は中間部が丸みを持ち、比較的薄手の剥片を素材として、周縁部に細かい調整加工を施し、奥まで入る調整加工は施されていない。7～11はI b類である。7・8・10は中間部がやや細まり、平面形状はロケット状を呈する。12～17はI c類である。13・14・17は先端部がかなり尖っており、他の類型のものに比べて、I c類のものは先端部が尖る傾向がある。また、脚の先端が尖るもの(12～15)と角張るもの(16・17)がある。18～25・36・37はII a類である。II a類はサイズがバラエティーに富んでいる。18～25は小形のもの、36・37は大形のものである。26～35・38～46はII b類である。31・32は先端部が少し傾いているが、おそらく先端部の折れたものを再加工したものと思われる。47～65はII c類である。II c類はI c類と同様に、脚の先端が尖るもの(48～50・54・55・59・62・65)と、角張るもの(47・49・53)がある。66～81は石鏃の破損品あるいは未製品である。66・68・69・70・76～78は基部が破損しているもの。73・79～81は未製品であると思われる。

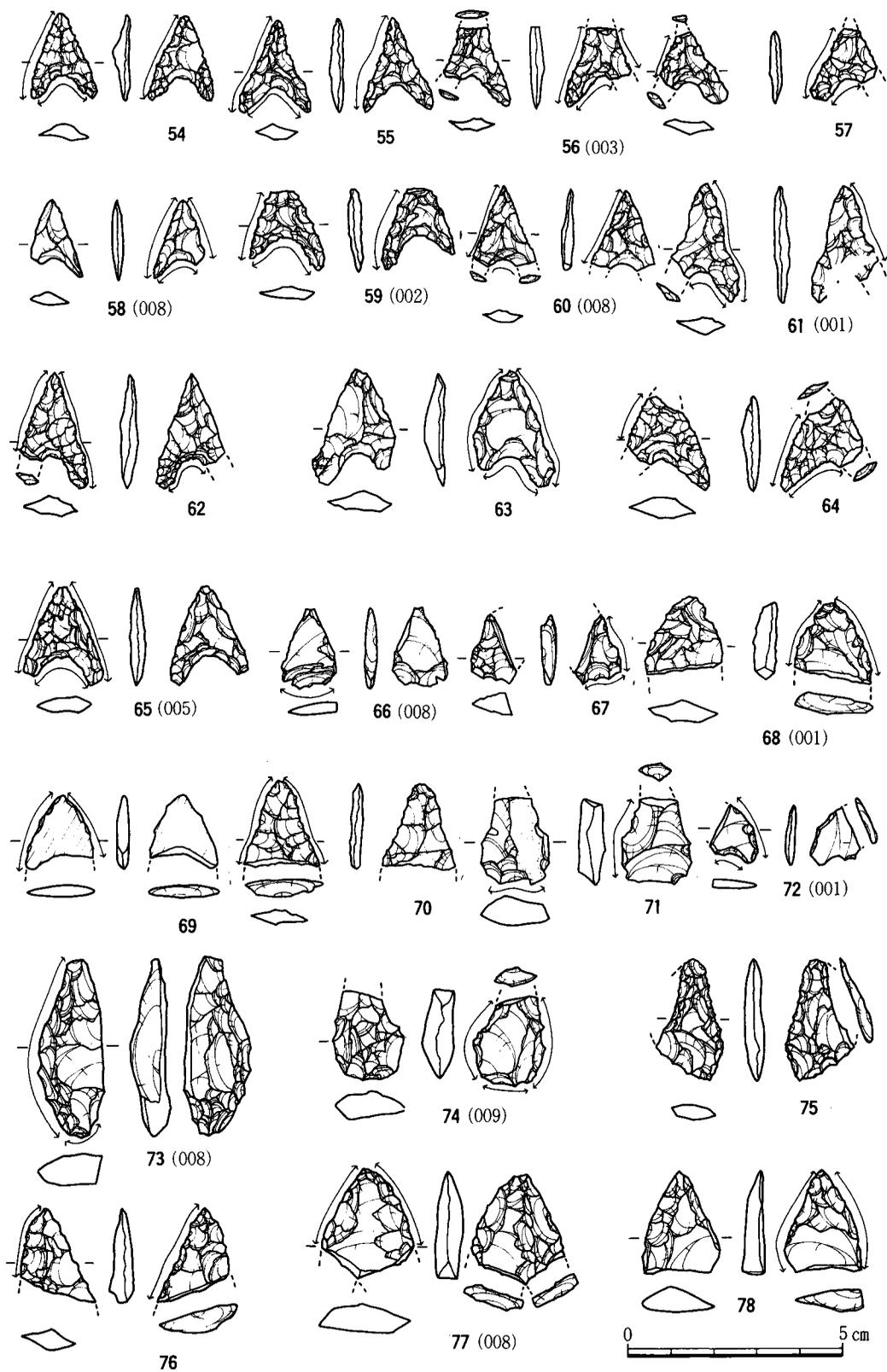
つぎに、石鏃の再加工について少し触れてみよう。中間部から先端部にかけて細まっている



第55图 出土石器(1)



第56图 出土石器(2)



第57图 出土石器(3)

もの（5・7・8・10・44・47・55・61・70）が各類型に数点ずつある。これらの特徴は、中間部から先端部にかけて仕上げ痕が観察される。また、31・32のように先端部が少し傾いているものがある。これらのことから、中間部から先端部にかけて細まっているものも、先端部が折れたものを中間部から先端部にかけて再加工したものであると推定したい。おそらく、先端の折れた部分が大きいもの（25・30・45・56・64・71・74）は、先端部の再加工が不可能であったと思われる。また、脚の再加工については、脚の大きさの異なるもの（40・43・59・63・65）のうち、小さい脚の方が再加工された可能性がある。

スクレイパー（82～90）

82・83・85は厚手の素材を利用している。これらは、石鏃の素材剥片を剥離した石核である可能性がある。84・86は剥片の先端部に微細剥離が施されている。87・89・90は平坦剥離が器面の内側まで施されている。88は器種認定の困難な石器であったのでとりあえずスクレイパーとしておいた。折れている部分はない。剥片を素材として、主要剥離面を大きく残している。背面の下部に2つの抉りと右上部に1つの抉りがある。脚と呼べるようなものが両下端部にあり角張っている。類例はあまりないようである。

石核（91・101）

91は片面に自然面を大きく残し、周縁を打面転移しながら剥片を剥離している。これから剥離されたものは横長の不定形の剥片であり、おそらく石鏃の素材となったものと思われる。101は円礫を素材として、断ち割るように片面から剥片を剥離している。

磨製石斧（92～99）

92は大形の乳棒状石斧である。三分割されているが、これは中間部の折れの際に同時に折れたものと思われる。93・94は断面長方形の方角石斧である。いずれも基部が残存している。95～99は断面楕円形の石斧である。いずれも中間部の残存品であるが、再加工が施されている。このように、磨製石斧の破損品を再利用しているものが多いことから、磨製石斧の使用価値がかなり高かったことが推察される。99は下端部に少しだけ磨製面が残っている。

楔形石器（100）

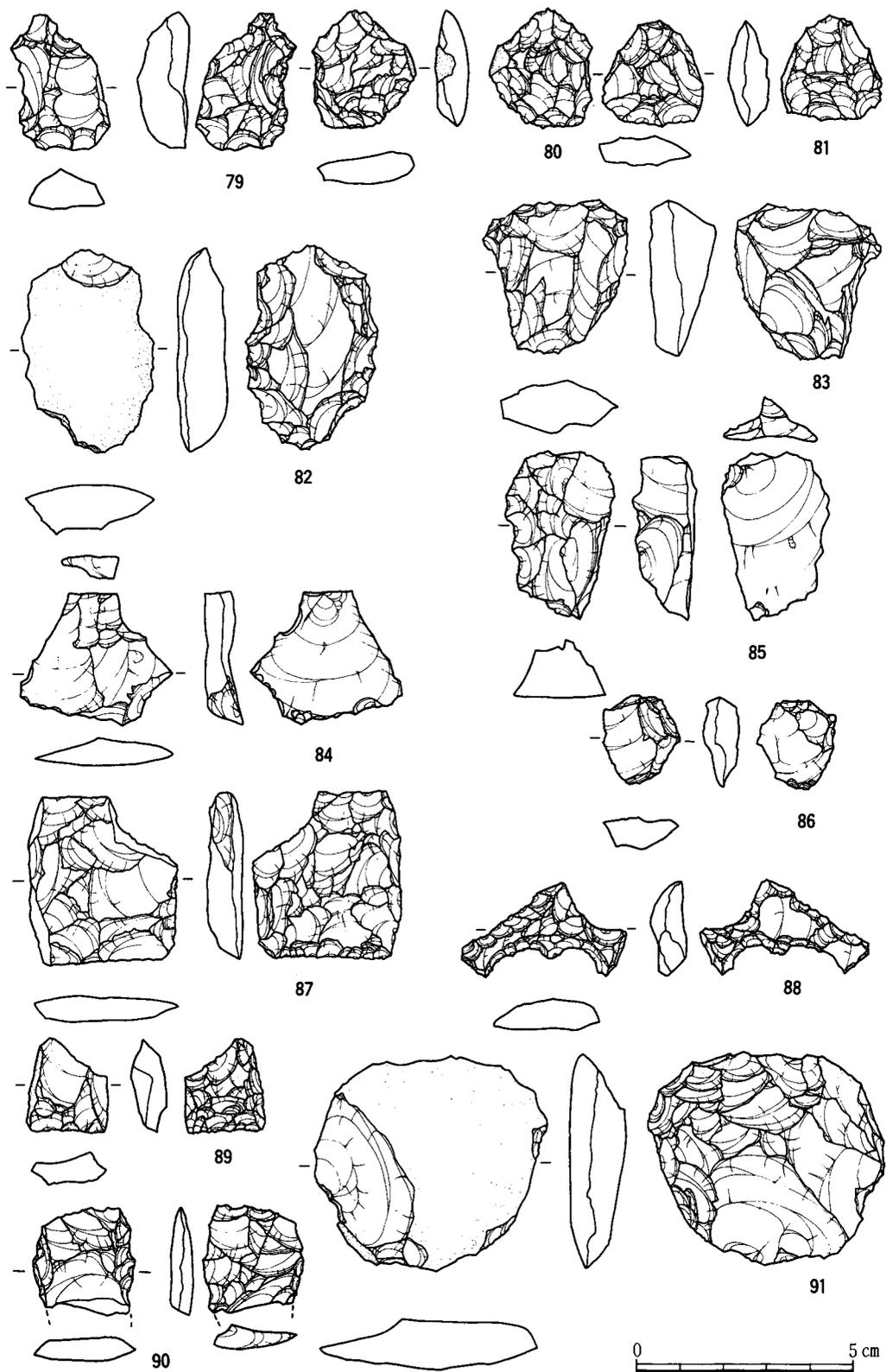
100は円礫を素材として両極剥離が行なわれている。

砥石（102・103）

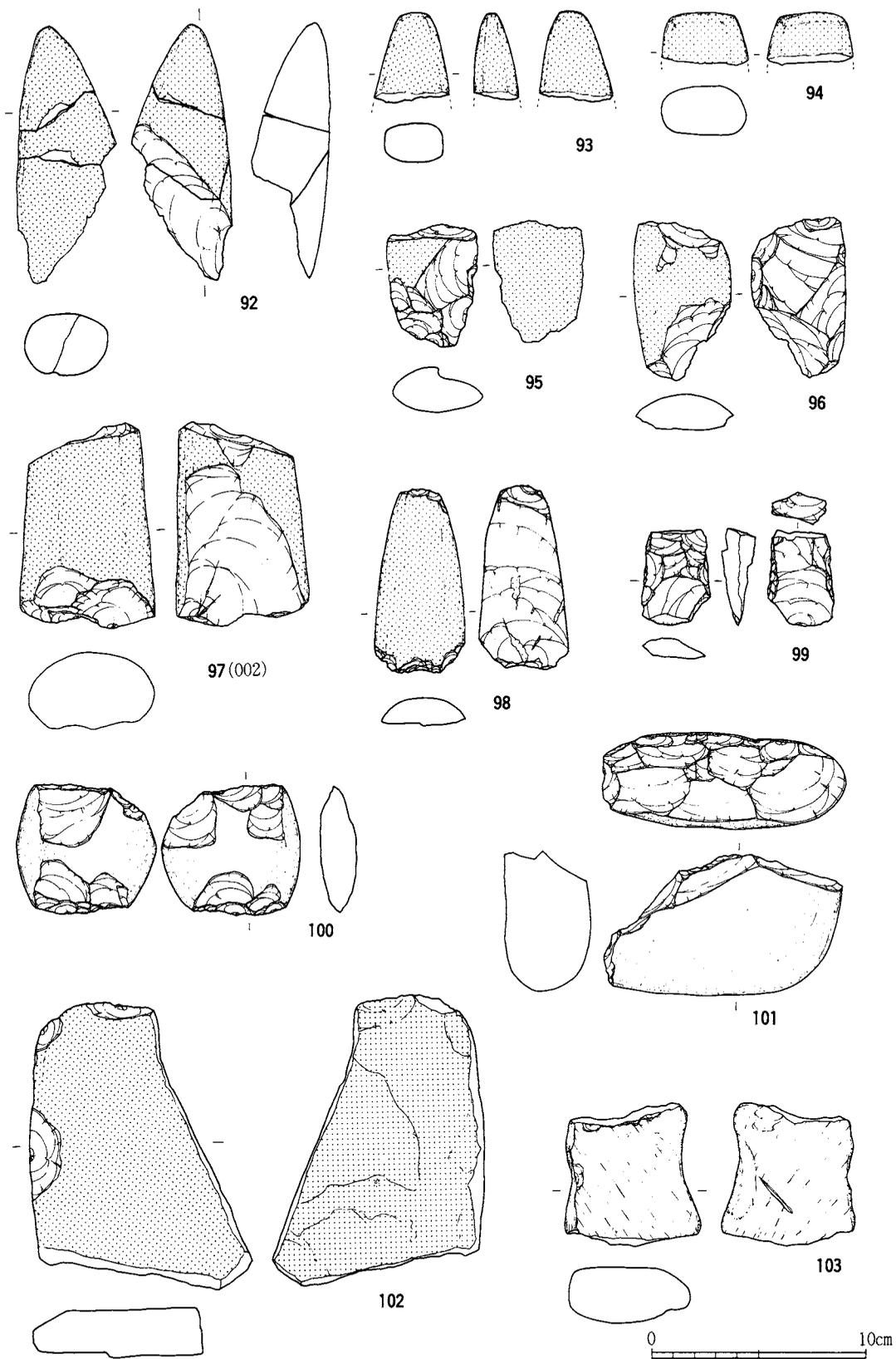
102は板状の砂岩を利用して平坦な面を磨っている。裏面に剥離面が少し残っていることから、裏面を平坦にするように加工をした後に磨っていることが観察される。103はきめの細かい砂岩質の石材を利用して、擦痕が斜め方向に残る砥石である。側面にも擦痕がある。

磨石（104～107）

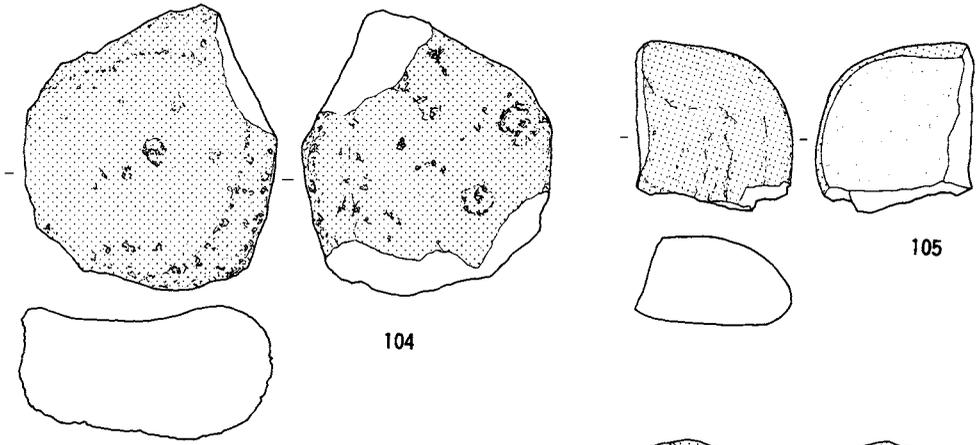
104は表面が凸凹した安山岩を利用しており、中央部が皿状になっている。石皿の可能性もある。101・106は円礫を素材として全面が磨られている。107は側面が磨製されており、平坦部の



第58图 出土石器(4)

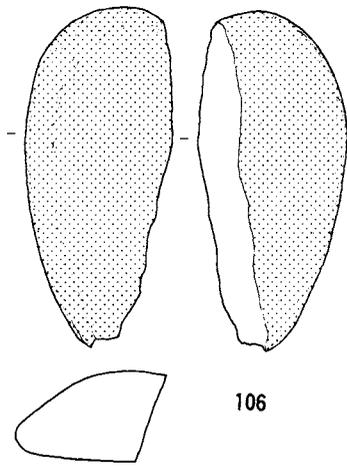


第59图 出土石器(5)

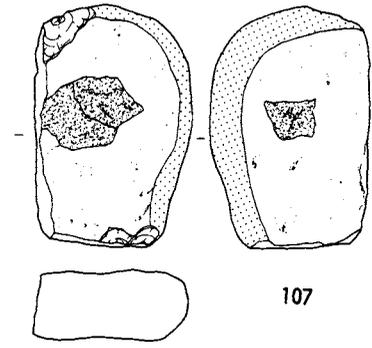


104

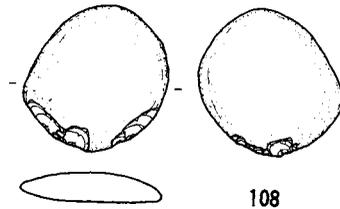
105



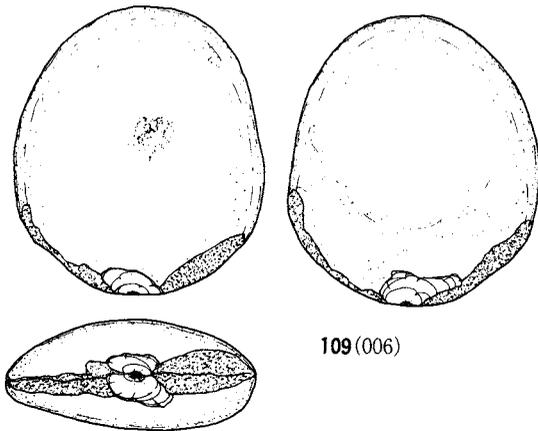
106



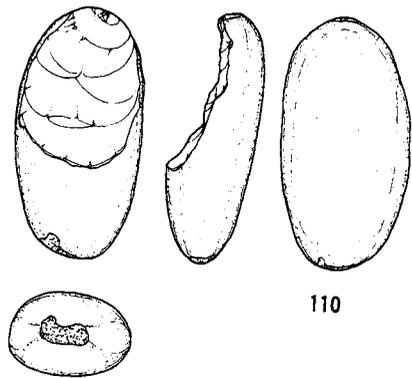
107



108

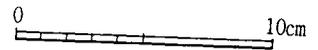


109(006)



110

第60图 出土石器(6)



第3表 毛内遺跡縄文時代石器属性表

図版 番号	器 種	石 材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号	図版 番号	器 種	石 材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号		
1	石	鉄	安山岩	22.0×13.5×5.0	0.9	J5-00-17	56	石	鉄	安山岩	18.0×16.0×4.0	0.5	003-150
2	"	"	黒曜石	28.0×18.0×7.0	3.6	J4-03-1	57	"	"	"	17.0×16.5×4.0	0.5	I4-43-55
3	"	"	安山岩	25.0×14.0×5.0	1.5	H4-12-1	58	"	凝灰山質岩	18.0×12.0×3.0	0.3	008-3	
4	"	"	"	29.0×14.0×4.0	1.9	013-23	59	"	安山岩	18.5×18.0×3.0	0.6	002-29	
5	"	"	"	30.0×15.0×5.0	2.5	001-29	60	"	"	19.0×15.0×3.0	0.6	008-20	
6	"	"	"	34.0×20.0×6.0	3.7	J6-40-17	61	"	安山岩	28.0×16.0×4.0	0.9	001-7	
7	"	"	"	21.2×13.5×3.5	0.6	I4-32-18	62	"	黒曜石	26.5×16.0×5.0	0.8	I5-14-23	
8	"	"	チャート	23.0×14.0×3.5	0.6	H5-22-3	63	"	安山岩	26.5×19.5×5.0	1.5	ピット-5	
9	"	"	安山岩	31.0×21.5×6.5	2.5	I5-13-56	64	"	チャート	21.0×19.0×5.0	1.1	201(溝)-2	
10	"	"	"	28.0×18.0×5.5	1.7	J4-40-27	65	"	安山岩	22.5×18.0×4.0	1.0	005-4	
11	"	"	"	29.0×16.5×4.5	1.4	003-115	66	"	"	18.5×13.0×3.0	0.6	008-10	
12	"	"	頁岩	28.0×19.5×4.5	1.2	H4-13-1	67	"	黒曜石	16.0×11.0×5.0	0.5	I5-12-34	
13	"	"	安山岩	34.0×18.0×3.5	1.5	002-13	68	"	安山岩	18.0×18.0×5.0	1.8	001-72	
14	"	"	"	30.5×18.0×4.0	1.2	002-30	69	"	凝灰山質岩	17.0×16.0×3.0	0.7	J5-01-80	
15	"	"	"	28.5×14.5×4.0	0.9	I4-42-61	70	"	チャート	19.5×17.0×4.0	0.8	I4-33-67	
16	"	"	"	34.0×18.0×4.5	1.4	J4-12-6	71	"	黒曜石	20.0×16.0×7.0	2.0	E6-42-2	
17	"	"	"	31.0×18.0×3.5	1.0	J4-11-4	72	"	チャート	13.5×11.5×2.0	0.3	001-70	
18	"	"	"	18.0×15.0×2.5	0.6	I5-03	73	"	安山岩	40.5×15.5×7.5	5.3	008-26	
19	"	"	黒曜石	12.5×17.0×4.0	0.5	C7-12-1	74	"	"	20.5×17.0×6.5	2.4	009-9	
20	"	"	安山岩	19.5×13.0×3.5	0.5	001-183	75	"	"	27.5×16.0×3.5	1.6	J5-01-9	
21	"	"	黒曜石	18.0×15.0×6.5	1.1	H3-23-1	76	"	"	21.0×17.0×5.0	1.2	I4-31-47	
22	"	"	安山岩	18.5×15.0×5.5	1.0	J4-02-2	77	"	"	25.0×22.0×6.5	3.7	008-67	
23	"	"	"	18.0×13.0×3.5	0.5	I5-04	78	"	"	23.5×18.0×6.0	2.2	I4-43-85	
24	"	"	"	15.0×16.0×4.5	1.0	009-1	79	"	黒曜石	31.0×23.0×9.0	6.1	表採	
25	"	"	凝灰山質岩	13.0×15.0×4.5	0.6	J4-33-127	80	"	安山岩	27.0×24.5×7.5	5.6	J5-01-82	
26	"	"	安山岩	19.0×13.5×3.5	0.9	009-9	81	"	"	25.0×24.0×7.0	4.9	J5-10-55	
27	"	"	"	12.0×14.0×3.5	0.5	I5-04-32	82	スクレイパー	"	46.0×31.0×11.0	18.2	I4-13	
28	"	"	黒曜石	15.5×16.0×3.5	0.6	H5-20-2	83	"	チャート	35.0×34.0×12.0	15.3	H3-12-1	
29	"	"	"	22.0×17.5×5.0	1.2	J5-00-122	84	"	黒曜石	30.0×35.0×6.5	5.5	J4-31-5	
30	"	"	安山岩	18.0×21.0×5.5	2.2	201(溝)-9	85	"	"	38.0×25.5×13.0	10.7	I5-03-53	
31	"	"	"	25.5×17.5×6.0	2.2	001-84	86	"	"	20.0×18.0×7.0	2.4	C9-14-2	
32	"	"	"	23.0×19.0×4.0	1.5	001-36	87	"	安山岩	38.0×34.0×6.0	11.6	I12-2	
33	"	"	"	20.0×18.5×4.5	1.3	H5-144	88	"	黒曜石	21.5×38.5×7.0	3.1	J5-03-93	
34	"	"	"	23.0×19.0×4.0	1.8	I4-44-15	89	"	安山岩	21.0×21.0×7.5	3.1	I4-14-28	
35	"	"	黒曜石	23.0×20.0×5.0	1.7	G4-23-5	90	"	"	24.0×23.5×5.5	3.8	O13-9	
36	"	"	頁岩	29.0×24.0×7.0	5.6	表採	91	石核	チャート	54.5×48.5×11.5	34.6	H4-02-4	
37	"	"	安山岩	29.5×23.0×4.0	3.1	J4-31-34	92	磨製石斧	緑泥片岩	128.6×43.0×35.5	221.0	G4-34-4	
38	"	"	"	26.0×18.0×4.0	1.4	I4-24-4	93	"	"	41.5×35.5×21.0	50.1	H3-33-3	
39	"	"	"	14.0×11.0×2.5	0.3	J4-40-32	94	"	凝灰岩	23.5×40.0×24.5	42.4	I4-01-12	
40	"	"	"	17.0×17.0×3.0	0.6	表採	95	"	安山岩	55.5×42.5×21.5	56.4	I2-4	
41	"	"	"	15.5×14.5×4.0	0.5	J4-30-69	96	"	緑泥片岩	71.5×45.0×18.0	74.4	H4-43-2	
42	"	"	"	15.5×15.0×4.0	0.5	002-33	97	"	凝灰岩	94.5×63.0×43.0	374.0	002-12	
43	"	"	"	19.0×11.0×3.0	0.5	J4-20-7	98	"	"	84.0×43.0×14.5	77.5	I4-21-31	
44	"	"	"	21.0×14.0×2.0	0.6	J5-00-156	99	"	安山岩	44.0×31.0×15.5	20.2	I5-04-129	
45	"	"	チャート	11.5×15.0×3.0	0.4	J5-10-34	100	楔形石器	"	64.5×59.0×18.5	97.8	J4-8	
46	"	"	安山岩	20.0×12.5×4.0	0.6	J5-10-47	101	石核	"	104.5×65.0×47.0	476.0	J5-00-121	
47	"	"	頁岩	38.0×24.0×7.0	2.6	003-152	102	砥石	砂岩	127.5×98.0×21.5	435.0	H3-12-1	
48	"	"	"	27.0×16.0×4.0	1.5	J3-11-2	103	"	"	62.5×61.0×25.5	118.8	H4-02-19	
49	"	"	チャート	20.0×18.5×4.0	1.0	H3-4	104	磨石	安山岩	112.0×101.5×51.5	684.5	H4-22-7	
50	"	"	安山岩	16.5×16.0×4.0	0.4	J5-20-27	105	"	砂岩	59.0×58.0×33.0	219.0	I4-44-2	
51	"	"	"	14.5×15.5×3.5	0.4	003-162	106	"	安山岩	130.5×58.5×39.0	354.0	H3-12-1	
52	"	"	"	19.5×14.0×3.0	0.7	201(溝)-2	107	"	砂岩	90.0×66.0×28.5	276.0	H3-13-2	
53	"	"	"	17.5×15.0×3.0	0.5	G4-10-2	108	敲石	"	56.5×56.0×13.5	53.2	I4-40-2	
54	"	"	"	19.5×15.5×4.0	0.6	H3-3	109	"	"	108.5×97.0×36.0	628.5	006-28	
55	"	"	"	21.5×17.0×4.0	0.6	J4-40-34	110	"	"	94.5×48.0×34.5	191.0	I3-5	

中央部分が両面とも敲打により窪んでいる。

敲石 (108~110)

108・109は扁平な円礫を素材として敲打したもので、剝離面も形成されている。110は楕円形の円礫を素材として、上端部と下端部に敲打痕がある。上端部の敲打が強かったために大きな剝離面が形成されている。

第4表 毛内遺跡縄文時代石器組成表

	石鏃	スクレイパー	磨製石斧	楔形石器	石核	砥石	磨石	敲石	剝片	礫	計
点数	81	9	8	1	2	2	4	3	914	424	1,448

第5表 毛内遺跡縄文時代石器石材組成表

	安山岩	チャート	黒曜石	頁岩	メノウ	凝灰質安山岩	緑泥片岩	凝灰岩	礫	計
点数	401	550	53	6	1	7	3	3	424	1,448

第6表 毛内遺跡縄文時代遺構別石器組成表

	石鏃	スクレイパー	磨製石斧	敲石	剝片	礫	計
001	7				35		42
002	4		1			2	7
003	4				86	10	100
004					1		1
005	1				2	1	4
006				1	14	1	16
007					10	2	12
008	5				98	11	114
009	3				11	4	18
010					1		1
011							0
012							0
013	1	1			30	5	37
014					9		9
計	25	1	1	1	297	36	361

第7表 毛内遺跡縄文時代遺構別石器石材組成表

	安山岩	チャート	頁岩	凝灰質安山岩	凝灰岩	礫	計
001	22	20					42
002	4				1	2	7
003	44	45	1			10	100
004		1					1
005	2	1				1	4
006	5	9				2	16
007	4	6				2	12
008	52	50		1		11	114
009	8	6				4	18
010		1					1
011							0
012							0
013	15	17				5	37
014		9					9
計	156	165	1	1	1	37	361

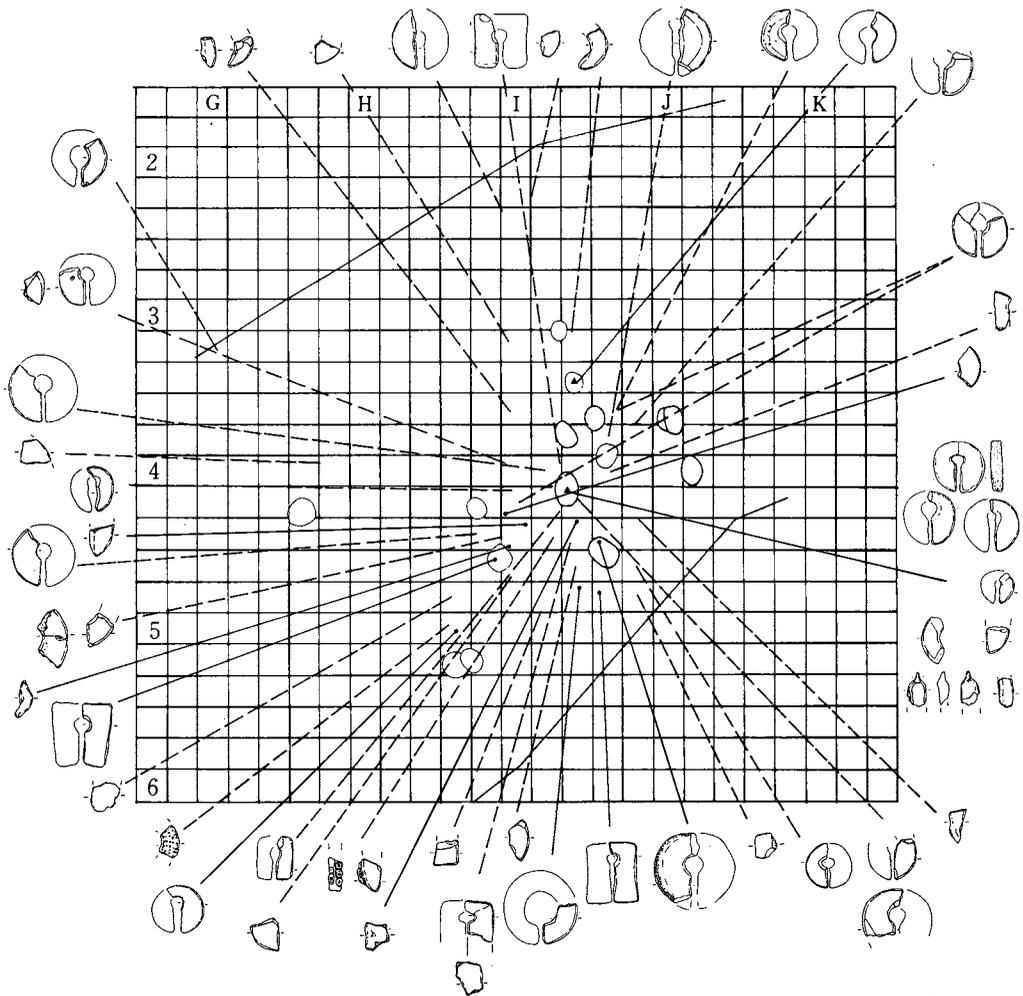
4. 土製品 (第61~64図, 図版25・26)

本遺跡から出土した土製品は、球状耳飾がほとんどである。

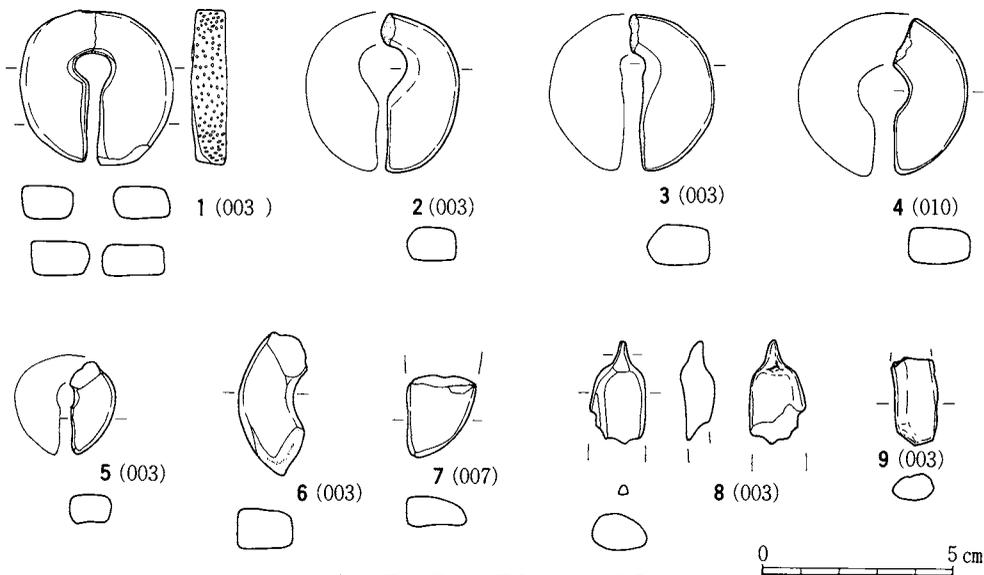
耳飾 (1~7, 10~52)

第61図の分布図で明らかなように、003・008号住居跡を中心として分布しており、しかも遺構外から出土する傾向が強い。この意味については終章で後述する。

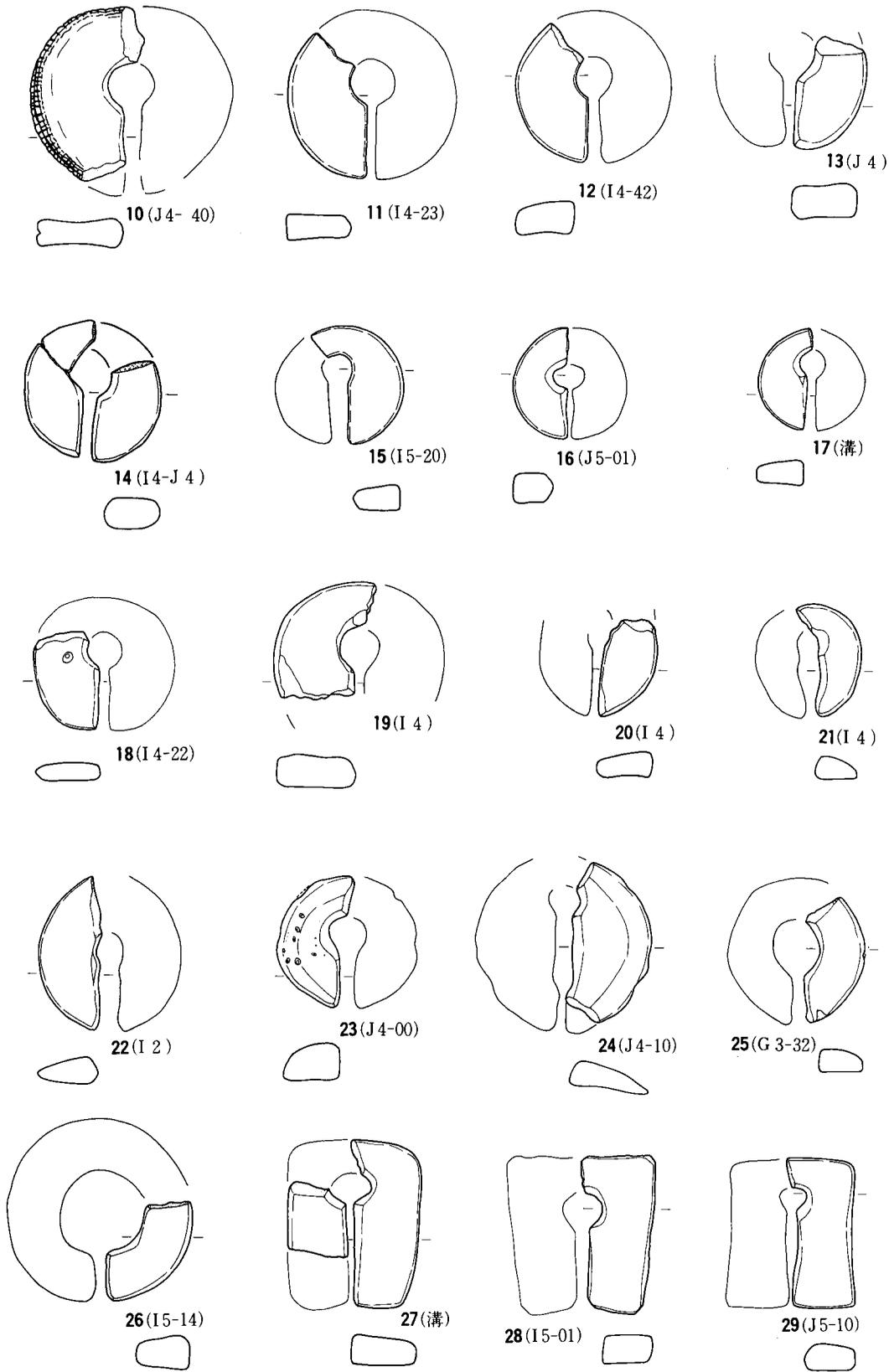
1~3, 5~7は003号住居跡, 4は010号住居跡出土で、他は遺構外出土である。本遺跡出土の耳飾は破片が多く、形態復元できる資料が少ないため詳細な分類は不可能であるが、形態から大きく丸形と角形に分けられる。丸形には、孔径より切れ目が長く、全体に鍵穴状を呈するもの(1~3, 5, 10~24)と、孔径が切れ目より長くなり環状に近くなるもの(4, 25, 26)の2タイプが存在するが、前者が圧倒的に多い。角形には、肩が張るタイプ(28~31, 33)と、肩が比較的丸味を帯びるタイプ(27, 32)がみられる。文様が施される例は少ない。1は非常に細かい刺突が側面全体に加えられる。10は、側面全体に対してやや斜位の刻み目を施した後、側面中央に断面三角形の深い沈線を1条加えている。35は小片であるが、蛸の吸盤状



第61图 土製品分布图



第62图 竖穴住居跡出土土製品

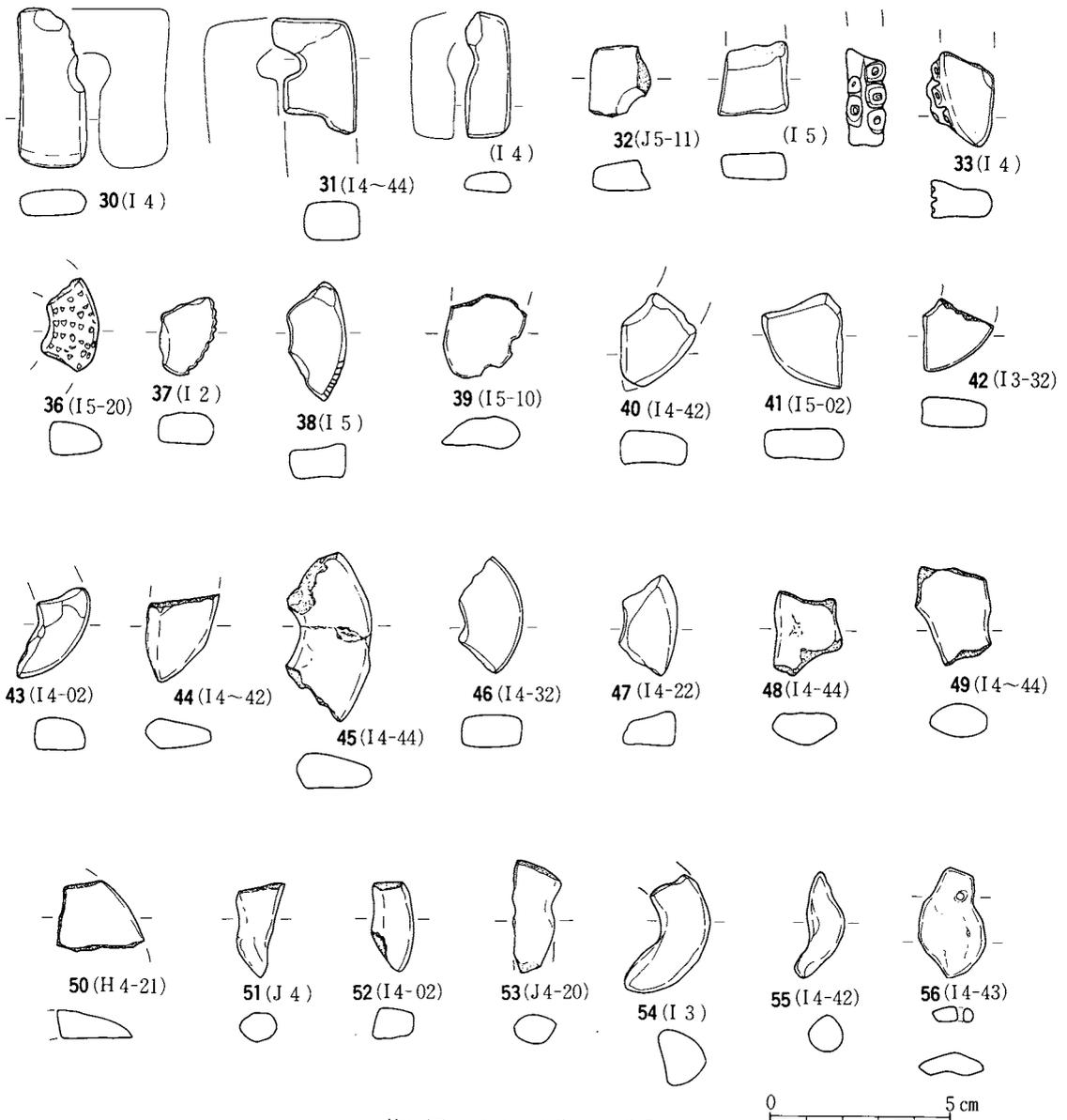


第63図 グリッド出土土製品(1)

の文様を側面に2列貼り付けている。36は唯一表面に文様が施されるものである。細かい半截竹管状工具による刺突が全面に加えられる。37・38は側面に刻み目が施されるが、38は一部のみである。調整はほとんどケズリのままであるが、10や29は丁寧なナデが加えられている。胎土は比較的緻密で、小砂粒を含むが、雲母の混入が認められる。

その他の土製品 (8, 9, 53~56)

8・9は003号住居跡, 他は遺構外からの出土である。8は下半部を欠くため全体は不明であるが, 上部を三角形に突出させている。用途は不明である。54は土製の勾玉となろうか。56は扁平で, 上部に焼成前の小孔が穿たれている。垂飾品として使用したようである。

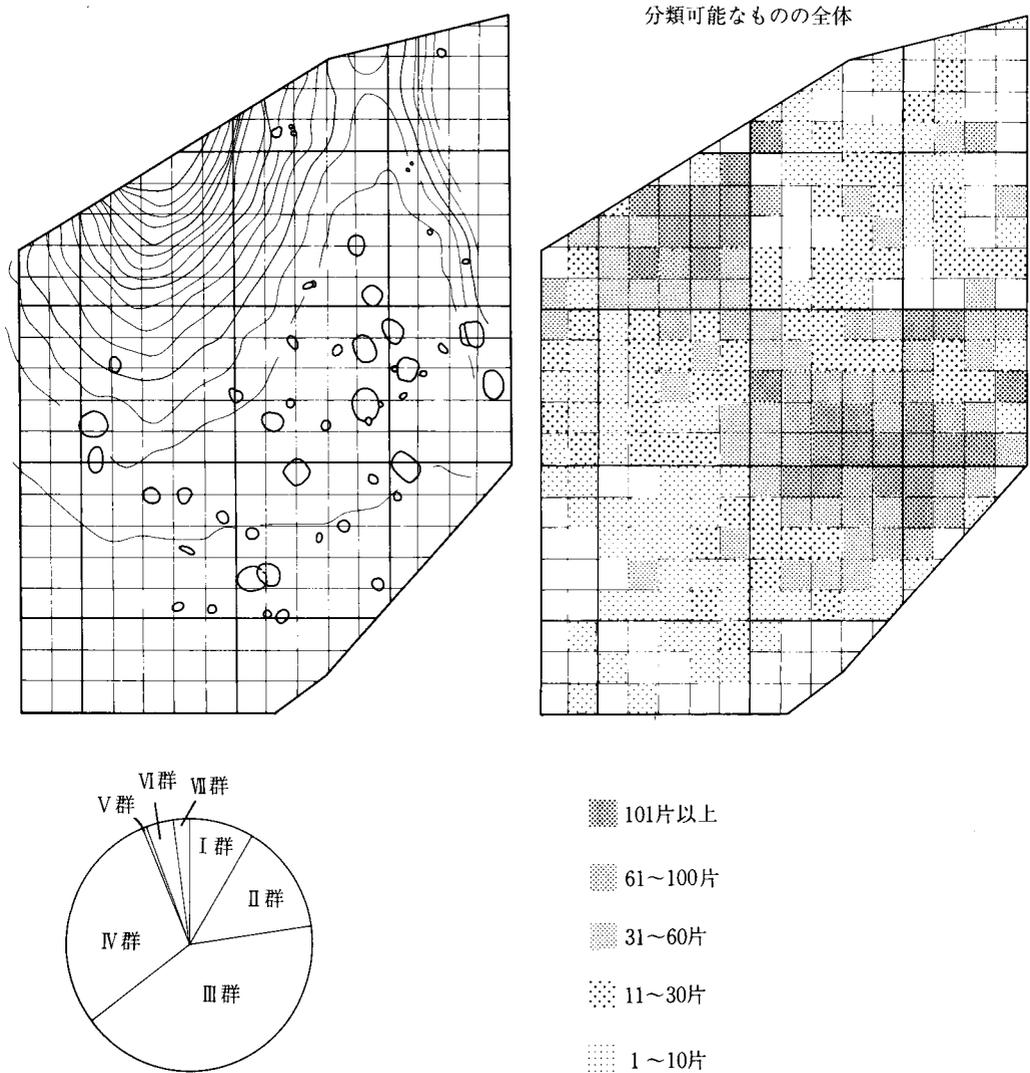


第64図 グリッド出土土製品(2)

第2節 グリッド出土土器

土器（第65～86図，図版27～36）

本遺跡において検出された縄文土器のうち，時期別に分類可能なものの総数は12,600点余を数える。これらは早期中葉の沈線文系土器から，後期中葉の加曾利B式土器までの各型式を含んでいる。中でも前期の土器は，前半から後半まで多量に出土しており，本遺跡出土の縄文土器の主体を占めている。



第65図 グリッド出土土器分布図（全体）

以下にそれらの概要を説明するが、分類大別の基準は次のとおりである。

- 第Ⅰ群土器 早期の土器群
- 第Ⅱ群土器 前期前半の土器群
- 第Ⅲ群土器 前期後半の浮島式系土器群
- 第Ⅳ群土器 前期末から中期初頭の土器群
- 第Ⅴ群土器 前期後半の諸磯式系土器群
- 第Ⅵ群土器 中期の土器群
- 第Ⅶ群土器 後期の土器群

第Ⅰ群土器

縄文時代早期の土器を一括する。本群土器の主体は、早期後半の条痕文系土器であり、全体に薄い密度で散在している。わずかに、調査区北西に入り込む浅い谷部に至る南側および、西側の斜面部にまとまる傾向が見られる。

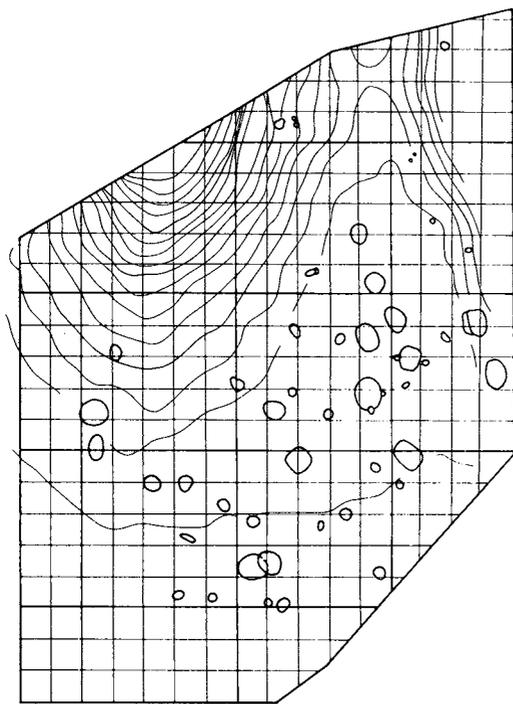
第1類(20) 縄文時代早期中葉の沈線文系土器群を本類とした。20は、横位の太沈線が尖底の最下部付近まで施される田戸下層式土器である。

第2類(1, 21~35) 胎土に繊維を含む無文の土器であるが、条痕を磨消した際に生じた擦痕を残すものが多い。また、胎土中には繊維に加え、砂粒等の混入が顕著に認められる。1は唯一復元できたもので径10.8cmを測る小型の尖底深鉢である。口縁部は波状を呈し、器表には主に横方向の擦痕を残す。21~24はいずれも口唇部に刻み目を施す口縁部片で、24はいわゆる隆帯文土器である。25~31は擦痕のみ認められる無文の口縁部片である。擦痕の方向は全て横位で、器厚1cm以上を測る比較的厚手のものが多い。このうち27のみ波状口縁を呈し、27と25には補修孔が穿たれている。32~34は条痕を磨消せずに残すものである。32は器表面の斜位、33, 34は内面の縦位にそれぞれ条痕が施される。35は尖底部の小破片である。本類は早期後半条痕文系土器群の子母口式に比定される土器である。

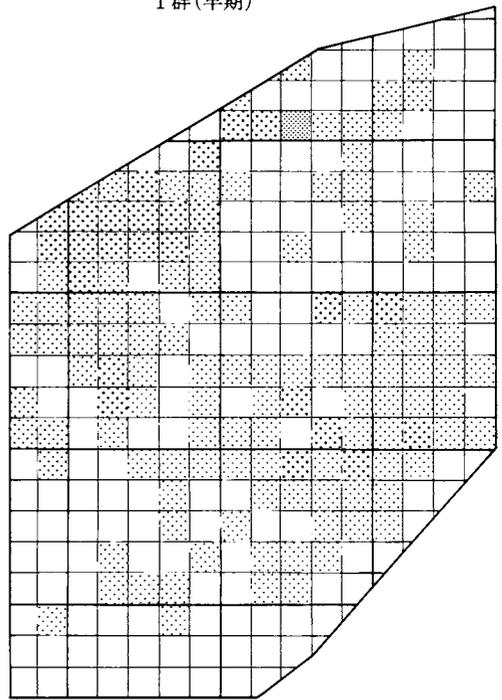
第3類(36) 絡条体圧痕を有するものである。36は口唇部及び口縁部に絡条体圧痕が認められる。

第4類(37~42) 多截竹管状工具により、連続して刺突文を施すものである。胎土にはやはり繊維が含まれるが、その含有量は少ない。37は条痕上に、斜位の多截竹管状工具による連続刺突文が施される。38~42は口縁部に横位の刺突文列を施す。いずれも地文は無文であるが、内面を主体に横位の擦痕が認められる。また、口縁部片であるものはすべて口唇部に刻み目を有している。本類も子母口式に比定できる土器である。

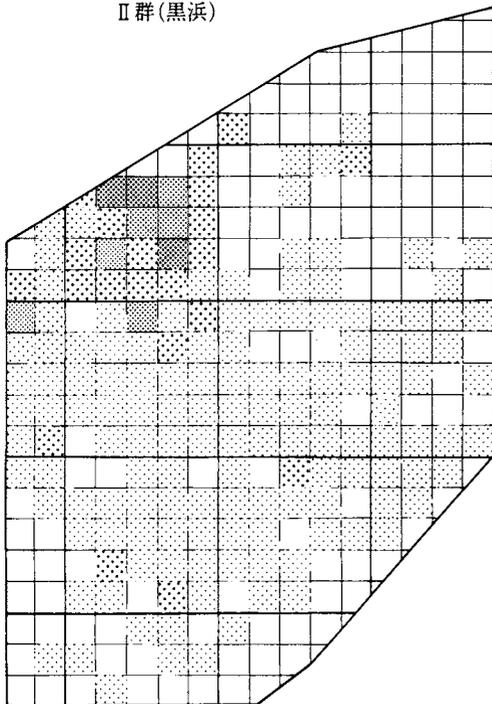
第5類(43~48) 胎土に多量の繊維を含むものである。43は口唇部に刻み目を有し、表裏ともに磨消しきれない条痕及び擦痕を残す。44~47はいずれも胴部破片で、表裏ともに顕著な



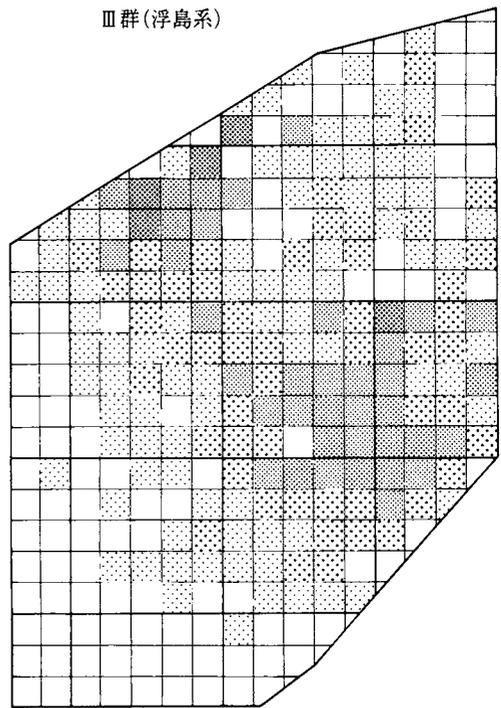
I 群(早期)



II 群(黒浜)

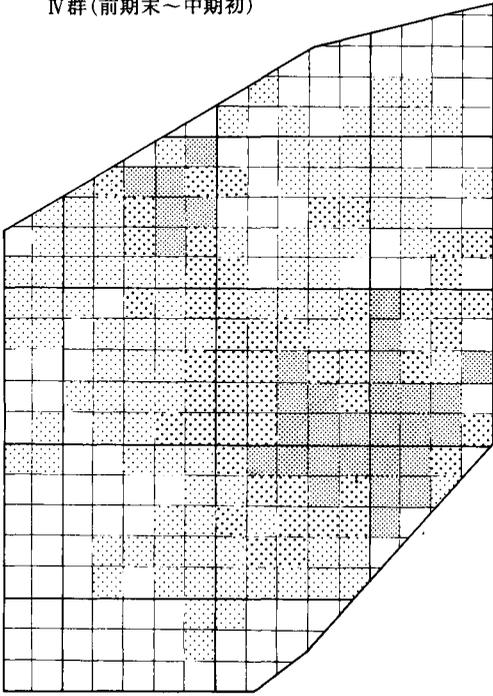


III 群(浮島系)

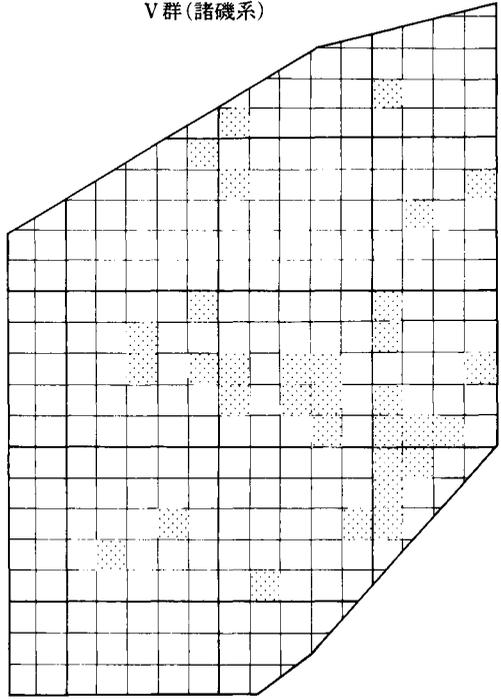


第66図 グリッド出土土器分布図 (I~III群)

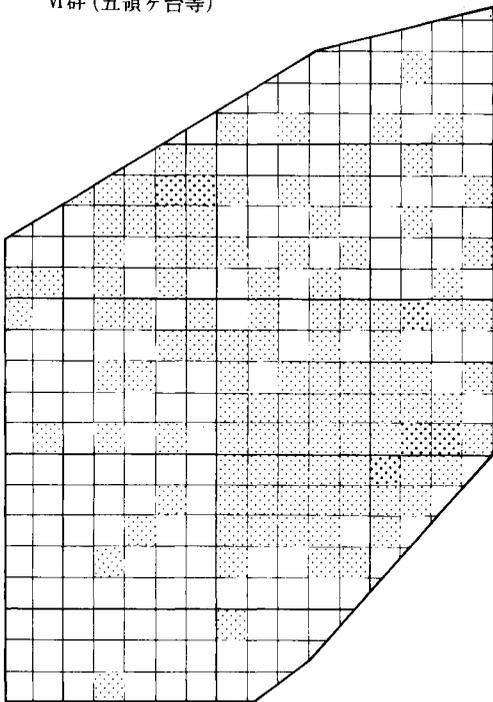
IV群(前期末~中期中)



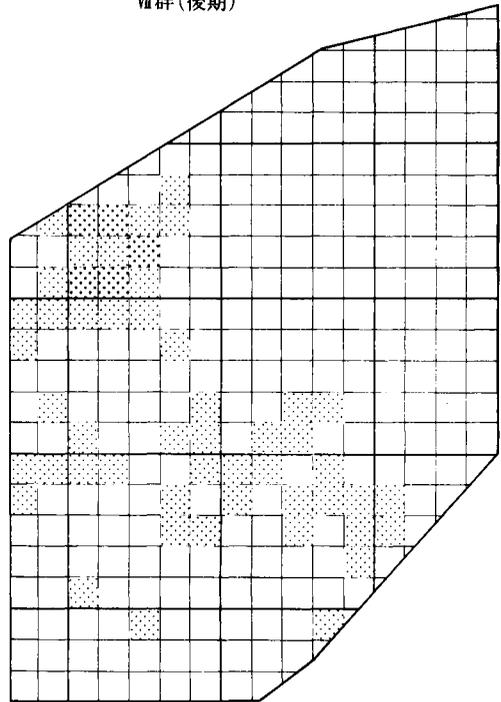
V群(諸磯系)



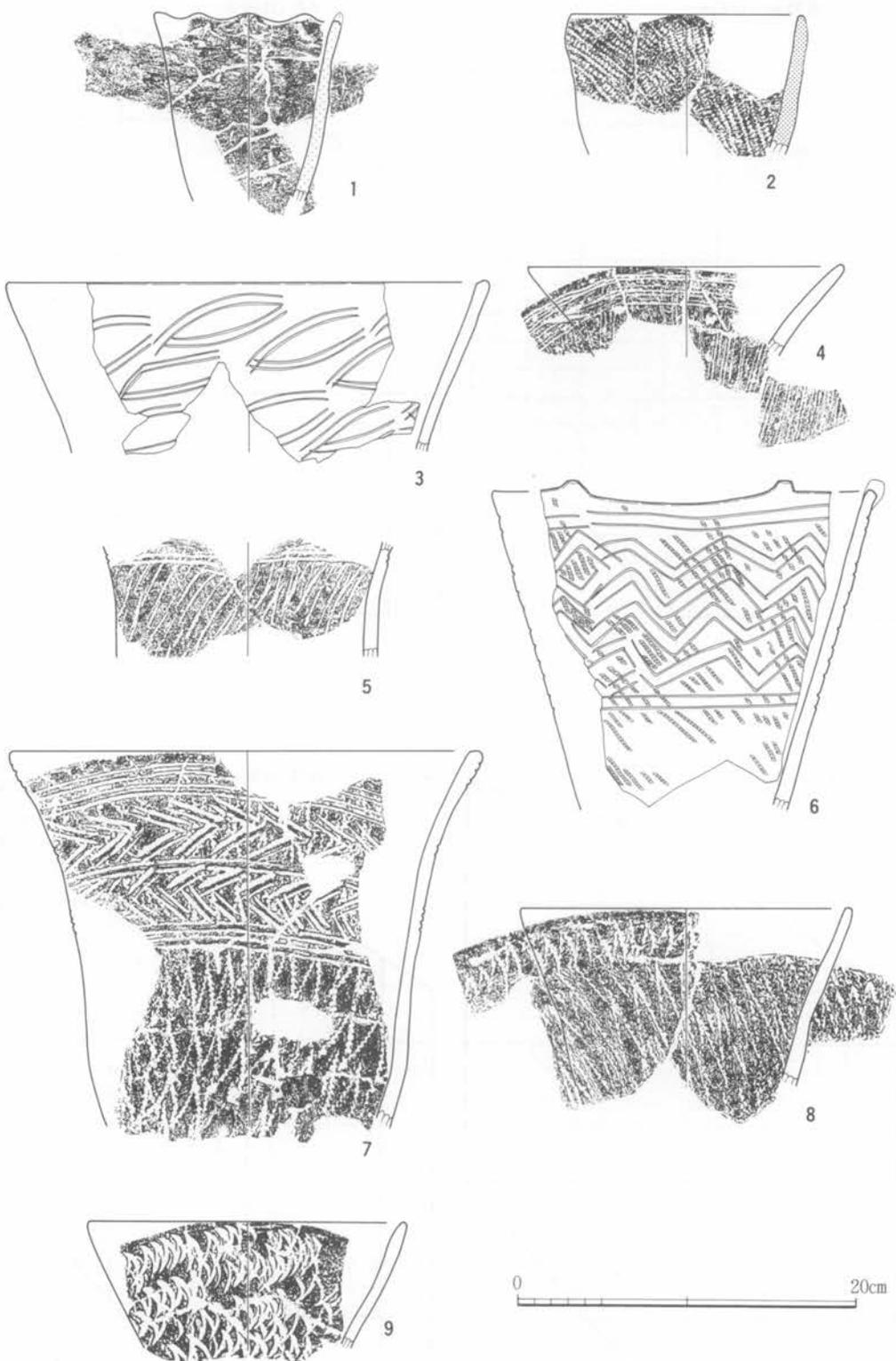
VI群(五領ヶ台等)



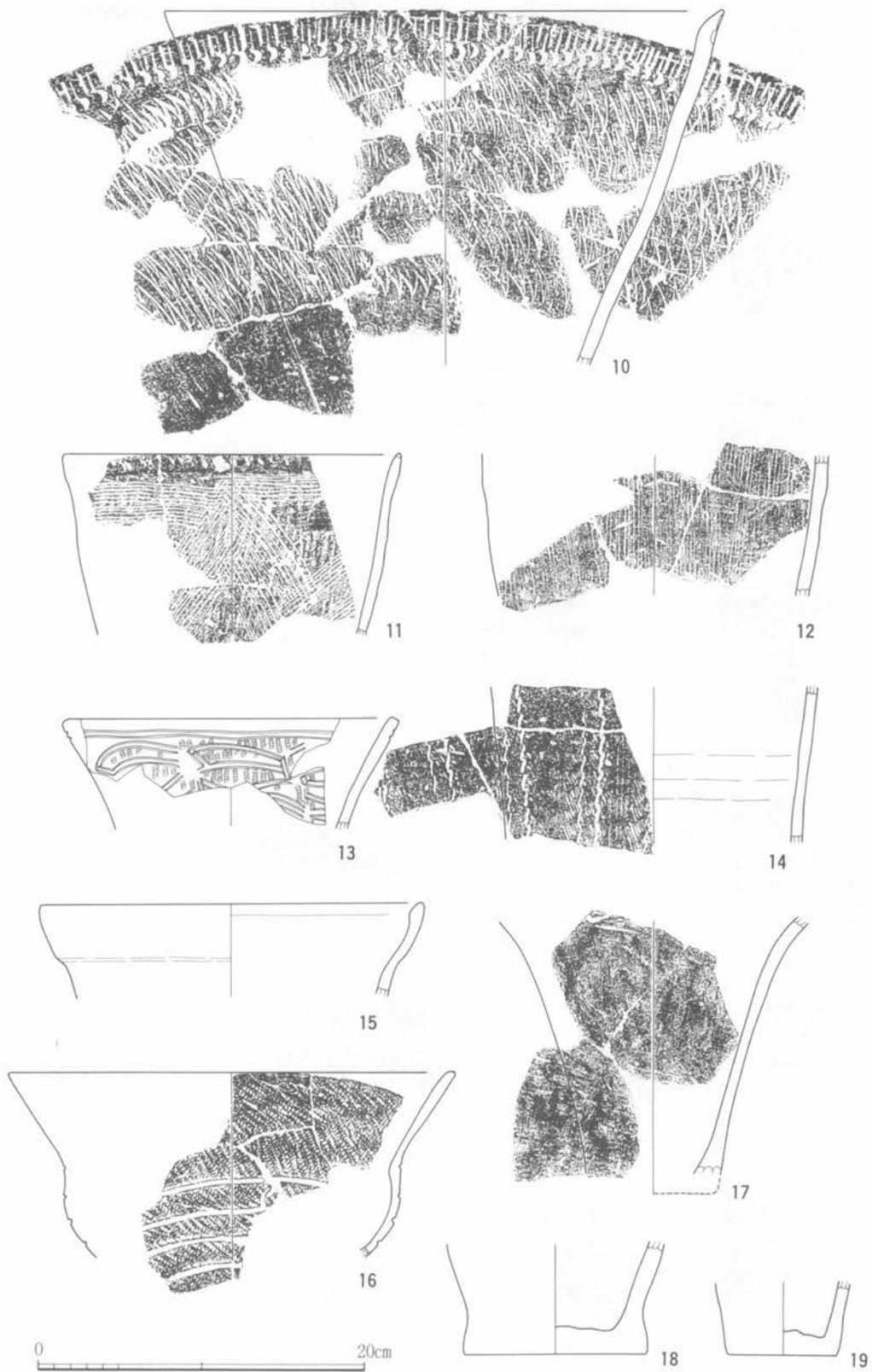
VII群(後期)



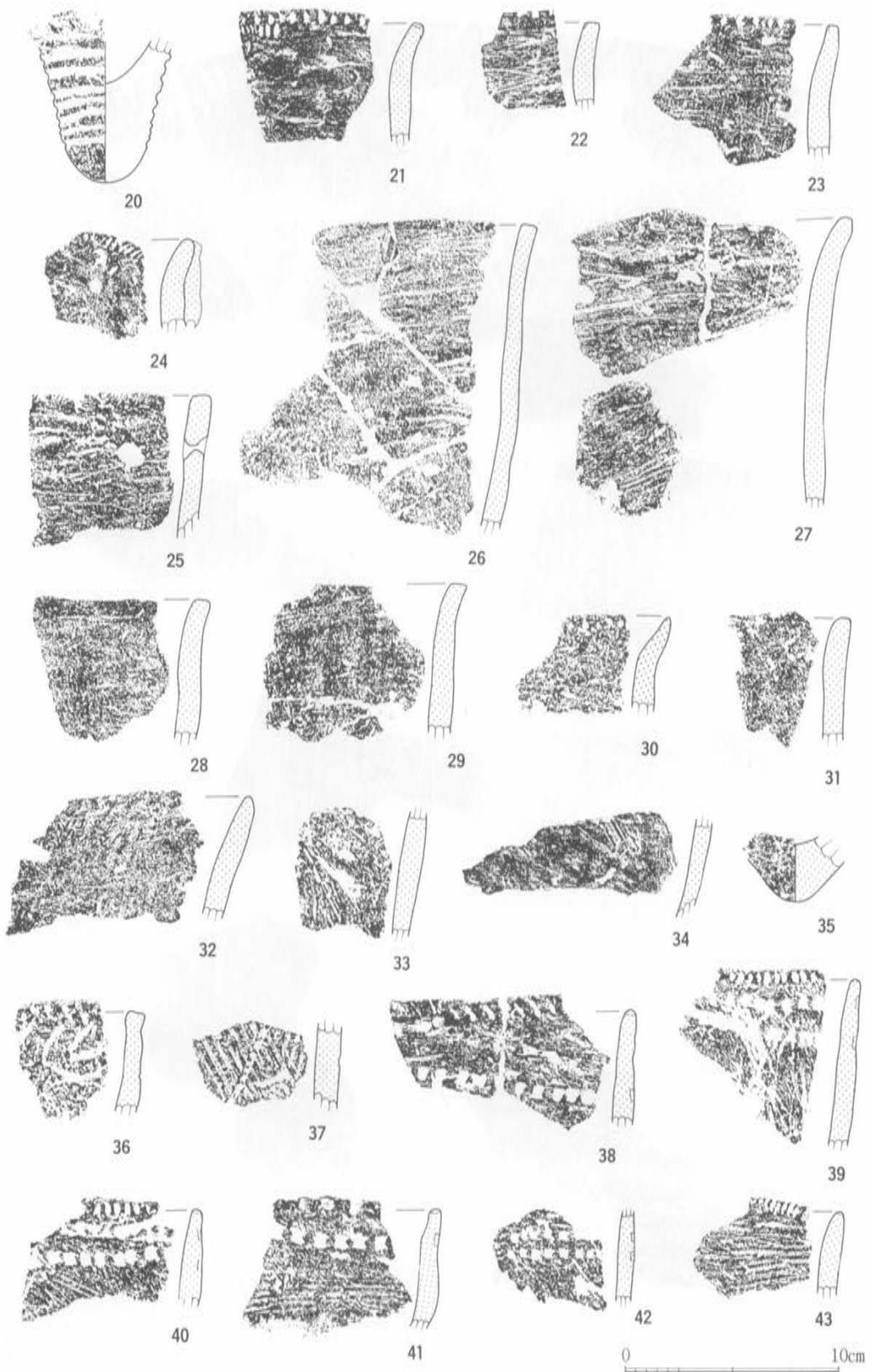
第67図 グリッド出土土器分布図 (IV~VII群)



第68図 グリッド出土土器1) (1~9)



第69図 グリッド出土土器(2) (10~19)



第70図 グリッド出土土器3) (20~43)

条痕を有する。条痕の方向は特に一定性を持たない。48は多量に繊維を含む尖底部である。

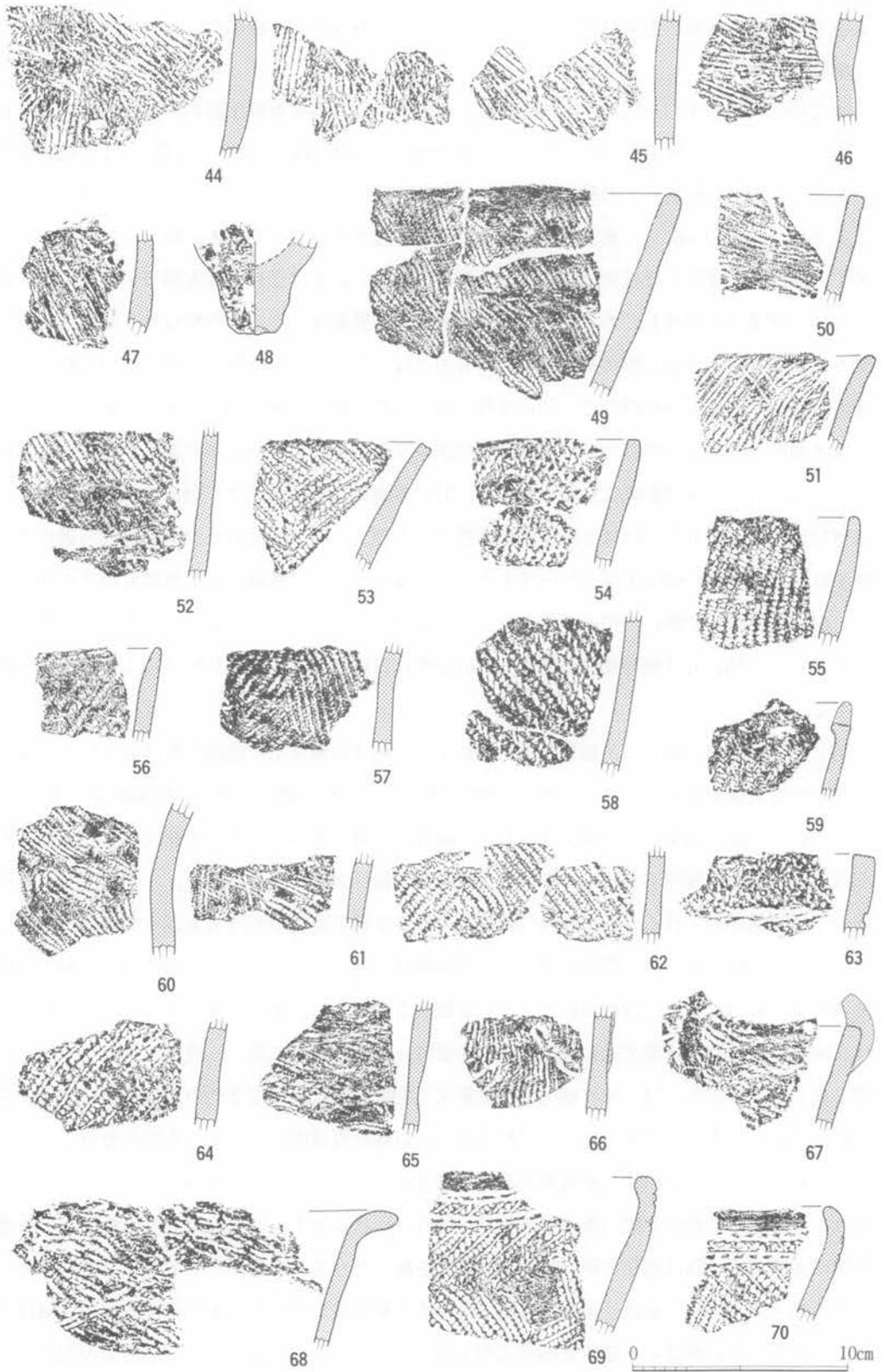
第II群土器

縄文時代前期前半の土器群を本群とする。調査区内における本群土器の平面分布は、浅い谷が入り込むH3区に集中して検出されたほか、台地上の平坦部にほぼ均一に見られ、調査区東側にあたる台地縁辺付近からの検出は少ない。本群土器はすべて黒浜式に比定される土器である。

第1類（2, 49～67） 器面に縄文等の地文のみ施されるものである。縄文は単節のものが多く、器形は口縁部が比較的直線的に開く深鉢形が多い。2は径13.6cmを測る平口縁の深鉢形土器で、縄文は単節RLである。49も原体はRL、口唇部は平坦で、内面は良く研磨される。50もRL縄文であるが、原体はより細かいものとなっている。51は無節L縄文が施され、口唇部の断面形はやや丸みを帯びる。52は原体の細かなRL縄文を施す胴下半部片である。53は外反する器形を有する口縁部片で、器面には付加条文を施す。54, 56は無節縄文が施される口縁部片。55, 57, 58は単節縄文が施されるが、57のみ縄文は羽状を呈す。59は波状口縁を有し、口唇部が内傾するもの。61は2条1単位の撚糸文を施す。62は胴部のくびれ部付近の破片で、縄文は羽状を呈す。63は平坦な口唇部を有する口縁部片で、口唇直下まで無節L縄文が施される。64は縄文原体を軸に、撚糸を巻き付けた付加条文が用いられる。65は2条1単位の撚糸のみ施される。66, 67は無節縄文が施され、67の波状口縁の波頂部は貼り付けにより隆帯状に肥厚する。

第2類（68～78, 92） 半截竹管状工具により、地文の縄文上に連続爪形状文ないし、連続刺突文状に文様を描出するものである。本類土器に用いられる縄文原体も単節斜縄文が多いが、69, 70のように、地文に付加条文を有し、口縁部が内湾する器形のものも存在する。68は口唇部直下で口縁部が外屈する器形のもので、口縁部に横位2列の平行沈線と、一部垂下する点列状の平行沈線が見られる。69, 70は口縁部にやはり2列の連続爪形状文を巡らす。口唇直下はナデにより幅の狭い無文帯を形成する。73は波状口縁を有するものの、69, 70と同様の文様要素を持つものである。71は節の大きなLR縄文を地文とし、細い竹管状工具により連続爪形状文が施される。72は地文上に連続爪形状文を横位、縦位、斜位に施し、幾何学文的な文様の展開を見るものである。74, 92は地文の付加条文を羽状に施し、斜位2列の連続爪形状文間は地文が磨消されている。76は胴上部のくびれ部から、口縁が直線的に立ち上がる器形を有し、口唇直下と胴のくびれ部に横位の連続刺突文列が施される。75は76と同一個体と思われる。77の地文は、縄文原体を軸に0段の条を巻き付け、それを羽状に施す。結果的に0段の条の部分は菱形に展開する。78は地文に節の粗いLR縄文を施したものである。

第3類（79～85） やはり半截竹管状工具により刺突文が施されるものである。79～84はすべて口縁部付近に横位の半截竹管刺突文列を施すものである。刺突はすべて斜め右方向から行われており、C字状を呈している。また、地文もすべて付加条文で、口唇は平坦である。85の



第71図 グリッド出土土器4) (44~70)



第72図 グリッド出土土器5 (71~99)

み細い半截竹管状工具を用い、口唇下は無文帯となる。

第4類(86~91, 93~97) 半截竹管による平行沈線で文様を描出するもので、地文には縄文が施される。86~88はいずれも緩い波状口縁を呈する深鉢形土器口縁部片である。86は、口縁部に沿った横位の平行沈線が崩れたコンパス文状を呈するもので、縦位に刺突文が加えられている。87, 88は横位2列の平行沈線と、垂下する平行沈線が施されるもので、地文の縄文はともに口縁部LR, 胴部RLの羽状を呈し、両者は同一個体と思われる。89は口縁部に2列の押し引き状平行沈線を巡らせ、口唇部から斜位に平行沈線を加えるものである。90, 91はいずれも横位の平行沈線がやや雑に施されるもので、縄文は90がRL, 91がLRである。93は縦位の平行沈線の両側に接して斜位の平行沈線を加え、矢羽根状の文様を構成するものである。94は半截竹管の内面施文により、鋸歯状の文様が描出される。95, 96はそれぞれ波状の沈線を有するもので、コンパス文が崩れたような様相を呈する。97は外傾する口縁部を持つもので、RL縄文上に点列的な平行沈線が施される。

第5類(98~100) 本類も第4類土器と同じように、半截竹管による平行沈線で文様を描出するものであるが、地文を持たない。98, 100は直線的に開く器形の口縁部片で、いわゆる肋骨文をモチーフとする。99は横位の平行沈線と、斜位の集合沈線により文様が構成される。

第6類(101~103) 口縁部に隆帯を巡らせるものである。隆帯を境に、上位には連続刺突文を2条施し、胴部の縄文施文部と口縁部を明瞭に隔てる。器形は直線的に開く深鉢形を呈し、3点ともに波状口縁を有する土器のようである。

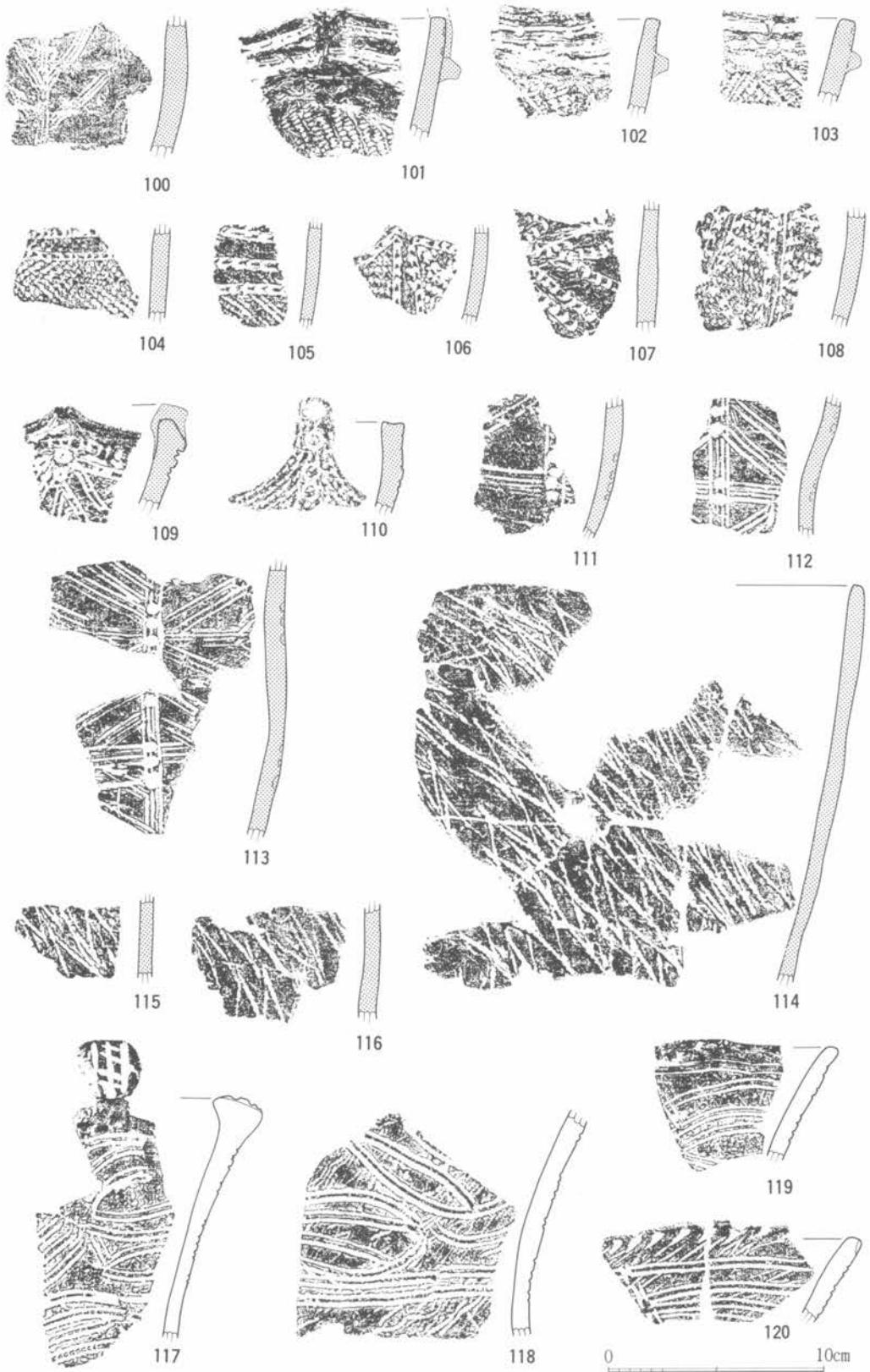
第7類(104~108) 地文の縄文上に半截竹管による複数の連続爪形文を区画的に施し、連続爪形文間は縄文が磨消されているものである。連続爪形文の施文方向は、104, 105が横位、106~108が縦位である。

第8類(109~113) 半截竹管状工具により施文された平行沈線の要所に、円形竹管文ないしは棒状工具による刺突文を施すものである。平行沈線は、横位、縦位、斜位を組み合わせ、幾何学文的に構成し、刺突文は縦位に施される。文様要素的に第7類と同様、後続する諸磯式の特徴を既に備えたものと言える。

第9類(114~116) 貝殻文の施されるものである。貝殻文は全て貝殻腹縁圧痕による。胎土に含まれる繊維の量は、特に減少する様子はないが、貝殻文のみによる文様施文は黒浜式のもう一方の後続型式である浮島式の特徴であり、本類土器も後続型式の土器の特徴を既に備えたものと言える。

第Ⅲ群土器

前期後半の浮島式系土器群である。本遺跡において、本群土器の出土は最も多く、出土総数の約40%を占めている。出土土器の平面的な分布は、調査区北西部の浅い谷部に流れ込んだ、あるいは投げ込まれた廃棄的な土器と、調査区南東部の居住区域付近にまとまって検出された



第73図 グリッド出土土器(6) (100~120)

土器とに大別することができる。

第1類（5，6，117～135） 半截竹管による平行沈線を主体に文様が施文されるものである。施文の種類により次の3種に細分される。

1種 撚糸文を地文とするもの。（3～7，117～124，128，129，132，135）

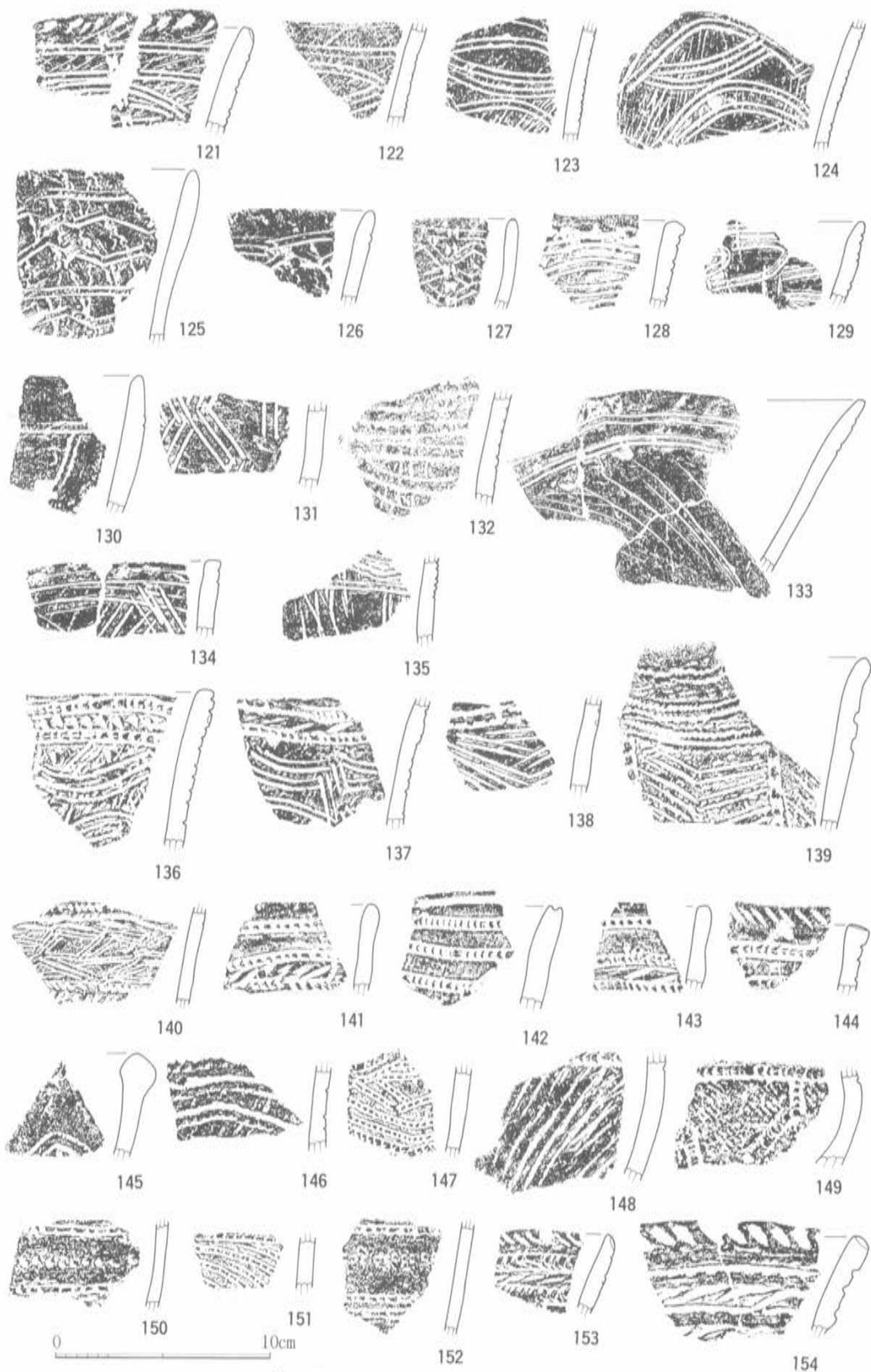
5は胴のくびれ部付近の破片で、くびれ部の推定外径15.5cmを測る。地文として全体に条間隔の広い撚糸を施文し、くびれ部の上位に横位の平行沈線文を施している。6も地文は条間隔の広い撚糸が施される。平行沈線文は、口縁部と胴中位に横位のものを施し、それらに挟まれる胴上位に鋸歯状の平行沈線を配す。これにより、胴上位全体を幅広の文様帯として認識させる。口唇上には2対の突起を有するものと思われ、口径は推定で約23.0cmを測る。117は波状口縁の波頂部に、切り込みを施した突起を有する口縁部片である。平行沈線文は、弧状を主体に構成されている。118は胴上部の破片であろう。横位2条の平行沈線を押し引き状に施文し、それより上位は、やはり同様の平行沈線により弧状を主とする文様が構成される。119も弧状の文様を主体に施文するが、平行沈線は押し引き状にならない。120，121はいずれも口唇部に斜位の刻み目を有し、横位を主とする平行沈線に加えて、縦位の点列状平行沈線が施されるものである。122～124はやはり弧状の平行沈線を主文様とする胴部片である。128，129，135は、地文に撚りの加えられない0段の条原体が使用され、地文上に施される平行沈線が器面に強く引かれるものである。132も同様の地文を有し、横位の平行沈線は押し引き状に施され、結節平行沈線となる。

2種 貝殻文を地文とするもの。（7，125～127，134）

7は推定口径28.0cmを測る深鉢形土器である。器形は、口縁部が緩く外反し、胴部が僅かに膨らむ。地文にサルボウ等の放射肋のある貝殻腹縁を押圧し、整然とした波状文を構成する。半截竹管による文様は、横位の平行沈線を区画的に用い、横位の沈線文間に綾杉状の平行沈線を充填するように配している。125，126も地文に貝殻文を有し、鋸歯状の平行沈線文を主体とする文様が構成されるものである。撚糸文を地文とするものの多くが弧状の曲線的な平行沈線を加えていたのに対し、地文が貝殻文のものは、鋸歯状の直線的とも言える平行沈線を加え、両者は好対照となっている。127は、さらに縦位の点線状の平行線を加えたものである。134は口縁部に横位の平行沈線を施し、以下はやはり鋸歯状の文様を配すものと思われる。

3種 地文のないもの。（3，130，131，133）

3は推定口径28.5cmを測る比較的大型の深鉢形土器口縁部である。器面には、弧線文の内側を組み合わせた文様の構成がとられる。器外面はナデ、内面はヘラ磨きによる調整がなされる。130は口縁部に横位の平行沈線を巡らせ、以下に斜位等の平行沈線により文様が構成されるものと思われる。131は胴部片で、施文具を上位から下位に移動し、縦位の鋸歯状文を構成するものと思われる。133は口縁部に横位2条の平行沈線を巡らせ、それより以下には比較的大きい間隔で



第74図 グリッド出土土器(7) (121~154)

斜沈線が施される。内外面ともに焼成は良く、特に内面は横方向にヘラによる研磨調整がなされる。

第2類（136～154） 半截竹管を押し引き状に用いて、連続爪形状文ないし結節平行沈線を施しているものである。136、137はいずれも、横位2条の連続爪形状文に加え、平行沈線文を曲線的に構成するもので、地文には撚糸文が施される。138は横位の結節平行沈線と斜位の平行沈線とにより文様が構成されるものである。地文は持たない。139は口縁部に3条の連続爪形状文を巡らせ、縦位の区画状の押し引き沈線間に斜位の平行沈線を数条施し、肋骨文に近いモチーフを意識させるものである。地文には、不明瞭ながら貝殻圧痕文が認められる。140は横位の連続爪形状文間に狭い平行沈線による菱形状の文様を配し、横位の文様帯を構成するものと思われる。141～144はいずれも口縁部片で、無文地に横位の連続爪形状文が主体的に施される。このうち、141、143は連続爪形状文に挟まれる部分に、刻み目を有する浮線文状の低隆帯が施されている。145は波頂部の肥厚する波状口縁で、波頂部の形に沿うように結節平行沈線が施されている。147は小破片のため全体の構成が不明であるが、連続爪形状文を菱形状に配すものと思われる。148は地文に撚糸を有するもの。149は半截竹管の内面を器面に強く当てているため、連続爪形状文はミミズ状を呈している。地文には単節RL縄文が施され、胎土には他のものより砂粒等を多く含んでいる。150、152はいずれも横位の連続爪形状文間の無文部に、同一工具による連続刺突文を施す。153は口唇部外側に斜めの刻み目を有する口縁部片で、2条の連続爪形状文間にも刻み目状の斜めの短沈線を連続して加える。154はやや大型土器の口縁部片と思われるが、文様施文の要素は153と同様である。

第3類（155～165） 比較的幅の広い、いわゆる変形爪形状文が施される土器である。変形爪形状文の施文具は、太目の多截竹管によるものと、貝殻腹縁によると思われるものがある。連続爪形状文との違いは、施文具の幅の違いだけでなく、前者が平行線上ないし平行線内に施された爪形状文であるのに対し、後者は施文具の性質的にも、平行線が伴わない爪形状文であると言える。155は口唇部の外側に刻み目を有し、器面には横位の変形爪形状文と、短沈線状の刻み目が交互に施される。155の変形爪形状文は貝殻により施文されていると思われる。163と同一個体である。156の文様構成は変形爪形状文と平行沈線が併用される。157、158、160、161も同様に、変形爪形状文と平行沈線文の併用が見られる。164は小破片のため変形爪形状文の施文部位が見られないが、変形爪形状文間に施される斜めの刻み目状短沈線を認めるほか、刺突文を伴う平行沈線が併用される。165は貝殻使用による変形爪形状文の下位に、やはり貝殻腹縁圧痕による波状文を施す。

第4類（8、9、166～198） 貝殻波状文を主文様とする土器である。施文具として使用する貝の違いにより、次の2種に分けて説明する。

1種 ハマグリ等の放射肋のない貝殻を用いた貝殻文が施されるもの。（9、166～176）

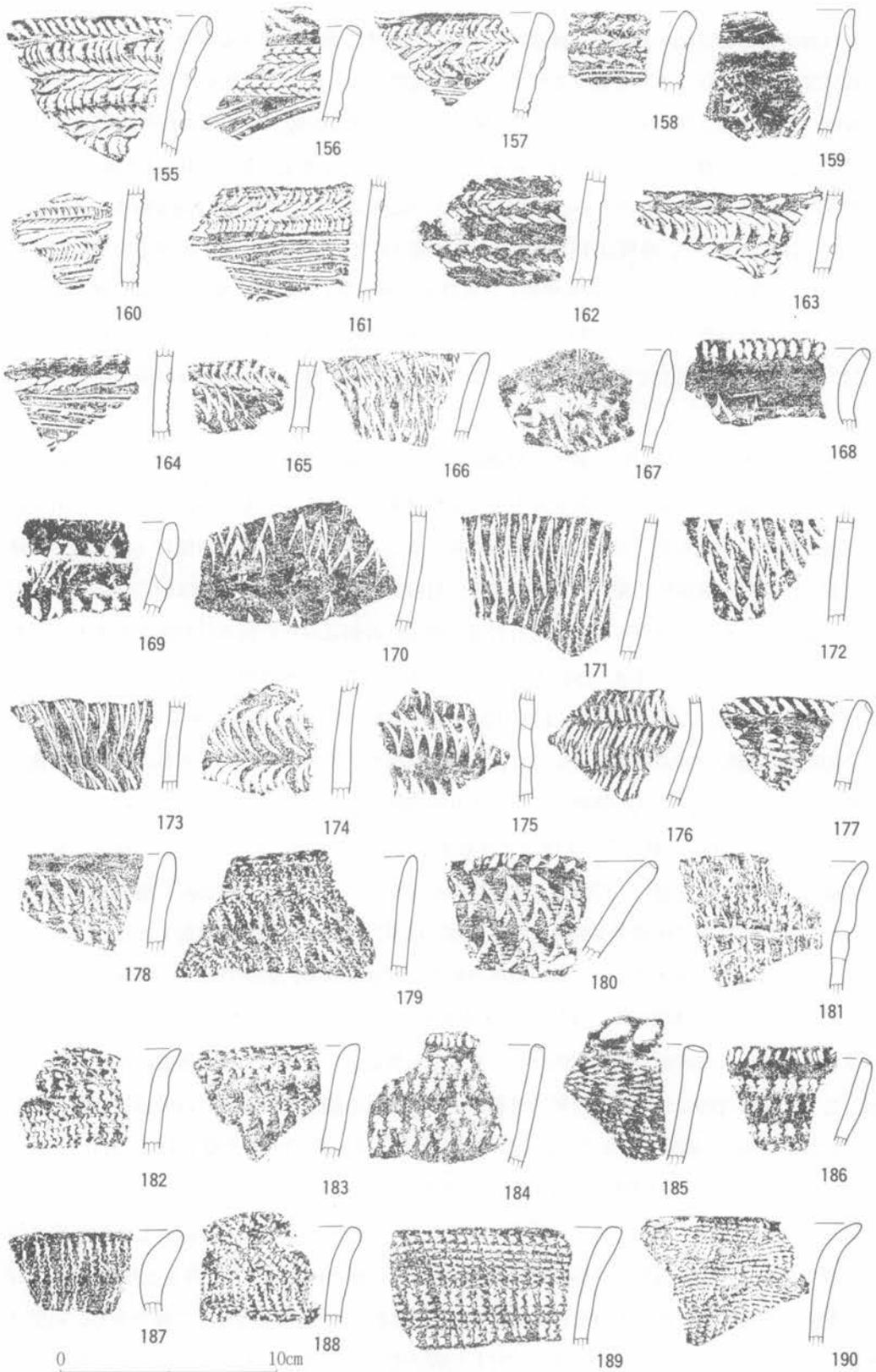
9は推定口径18.8cmを測り、口縁部がわずかに内湾する器形を呈する深鉢形土器である。貝殻波状文が全体にはっきりと施文されているが、波状文の列は一部で重なり合っている。166は比較的小型の土器と思われる口縁部片で、横位の貝殻波状文が隙間なく施される。167は波状口縁を呈し、やはり横位の貝殻文が施されるが、波頂部付近は無文となる。168は平縁の口縁部。口唇部に刻み目を施し、口唇下から貝殻文までの間は無文帯として残す。169は輪積痕を残す口縁部で、貝殻波状文は、輪積痕上に重ねるように施されている。170は上下の貝殻文間に隙間があるもの。171はやや大型の貝殻を使用し、貝殻文は隙間なく密に施される。174、176は横位に整然とならんだ貝殻文が、第3類土器に見られた変形爪形文的様相を呈している。175は169と同様、輪積痕上に貝殻文を施すもので、やはり上下の貝殻文間にはわずかな隙間を持たせている。

2種 サルボウ等の放射肋のある貝殻腹縁により、貝殻文を施すもの。(8, 177~198)

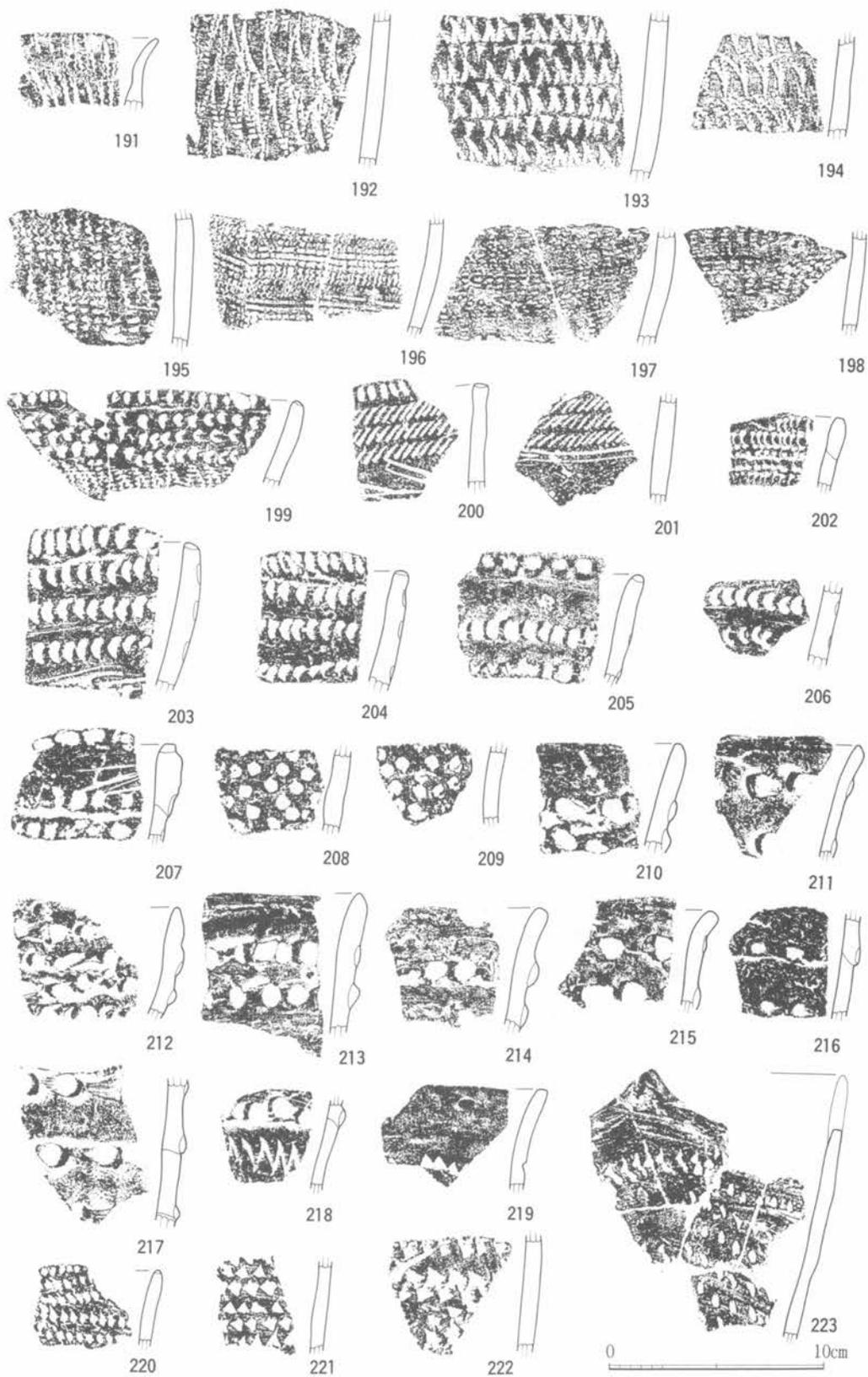
この種も貝殻により施される波状文を主な文様要素とするものであるが、波状文は次第に崩れ、貝殻腹縁のかたちをとどめずに連続点列状となってゆく。8は推定口径19.6cmを測る深鉢形土器で、比較的直線的に開く器形を呈する。貝殻文の施文は、口縁部では幅の狭いもの、胴部では幅の広いものが用いられている。177は口唇部の外側に斜めの刻み目が施されるものである。177をはじめとして、178~181、183、184、192、194等は比較的整った貝殻波状文としての様相を保っている。これに対して、189、190、195~198等はかなり崩れた施文がなされている。器形的には、189、190の口縁部のように、口唇部付近で外反するものが見られ、崩れた貝殻文の施文法とともに、浮島式の範疇の中ではより後出的と言えよう。

第5類(199~218) 刺突文を主体に文様が施されているものである。199は口縁部に横3列の半截竹管刺突文列を施し、口縁部を文様帯状に見せている。200、201は同一個体で、口縁部にやはり3列の刻み目状刺突文列を施し、胴部には平行沈線による文様が加えられるものである。203、204も同一個体で、やはり口縁部の刺突文列は3列で、胴部には平行沈線が加えられるものである。205の刺突文は、斜めから器面を持ち上げるように施され、凹凸文となる。207は輪積痕を残し、口縁部の刺突文列だけでなく、口唇部の刻み目も同様の施文法により凹凸文風となる。208、209はいずれも円形竹管刺突文が施される胴部片である。210~218は施文具を器面に斜めに当て、器面を抉るように刺突を施したいわゆる凹凸文の土器である。211以外の全てに輪積痕が残り、218の下位には貝殻波状文の併用が見られる。

第6類(219~228, 277~281) 刺突文の中でも、いわゆる三角文と呼ばれるものが施される土器である。219は器面が三角形に切り取られるように施された三角文を有するもの。220~222は典型的な三角文と言えるもので、横位に整然と施されている。223は波状口縁を有し、刺突は多截竹管によるものと思われる。224~227も比較的整った三角文が施されており、三角文の形状がやや大きいものである。228は横位の三角文列をやや押し引き状に施す。277~279は、口縁



第75図 グリッド出土土器(8) (155~190)



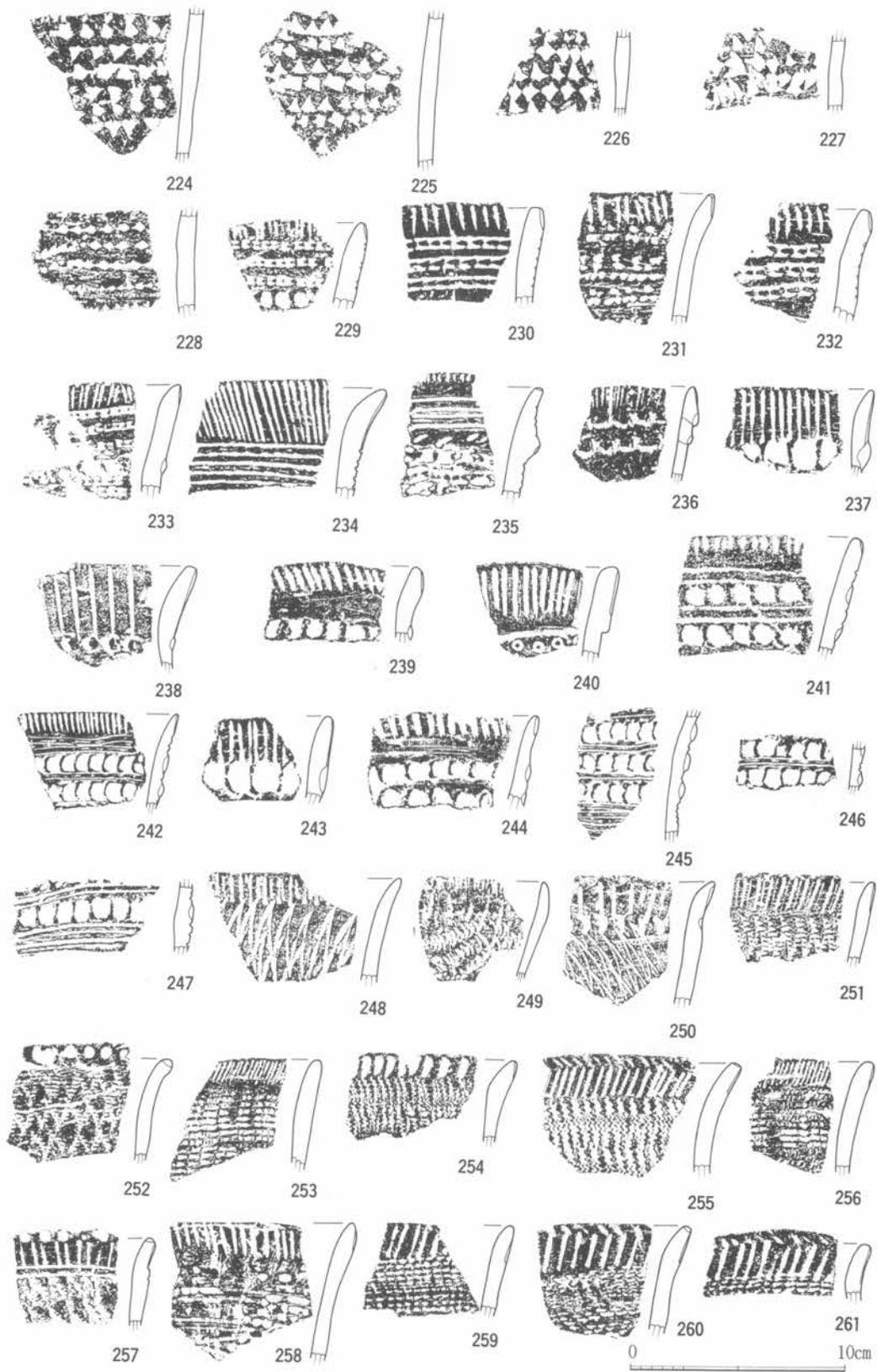
第76図 グリッド出土土器9) (191~223)

部に施される貝殻文が、三角文状を呈するものである。280は地文がRL縄文で、他のものとは異なるが、口唇下の刻み目状沈線と、ヘラ状工具により切り取られるように施された三角文が整然と横位に並ぶ。281は貝殻により施文された三角文が、やはり横位に施されるもので、補修孔を有している。

第7類 (229～247) 口唇下部に特徴的な刻み目状の短沈線を施すほか、口縁部に横位の竹管文等を比較的細かく整然と施すものである。229, 230, 232は、口縁部に半截竹管を連続刺突状に用いて、点列状の平行沈線を数条施す。231はわずかに外反する口縁部片で、施文具を引きずるように施された三角文を有する。233は点列状の平行沈線に加えて、凹凸文を施す。234は口唇下の刻み目状沈線がやや長く施されるもの。235は口唇部に刻み目を有し、口縁部は斜めの刻み目状文を有する低隆帯を境として、上位に平行沈線、下位には凹凸文風となる竹管刺突文が施されている。236は輪積痕を残し、輪積痕上に斜めから刺突を施し凹凸文風とする。237の刺突は、器面を大きく抉るように施される凹凸文である。238は口唇下の刻み目状沈線の下位に刺突文が施される。抉りは深い、それを押し上げていないため、凹凸文とはならない。239の口唇下刻み目状沈線と凹凸文の間は無文となる。240は折り返し状の口縁部を有し、刺突は円形竹管による。241は口縁部に横位平行沈線と凹凸文を交互に施している。242, 245, 246は同一個体で、凹凸文間ないし、凹凸文に沿うように幅の狭い平行沈線が施されている。

第8類 (10, 248～261) 第7類と同じように口唇下に刻み目状の短沈線を特徴的に施し、さらに貝殻による文様が主体的に施されているものである。口縁部の断面形は、やはり第7類と同じように湾曲しながら外反するか、外屈ぎみに開くものが多い。10は推定口径34.5cmを測る大型の深鉢形土器である。直線的に開く器形を呈し、口唇部の外側がやや尖がる。口唇下には刻み目状の短沈線を巡らせ、それに沿って半截竹管による刺突を逆C字状に施す。胴部には貝殻波状文が施されているが、胴下部から底部にかけては無文となる。248, 249はいずれもハマグリ等の貝による波状貝殻文の土器であるが、249の波形は小さく、口唇下の刻み目状沈線も他のものより短い。250は口縁部に横位の刺突文列を施し、刻み目状短沈線と胴部の波状文を区画する。251～256はサルボウ等の貝殻腹縁による貝殻波状文が施されるが、波状文はややずらしながら施文されている。260は、やはりずらしぎみに施文された貝殻波状文と口唇下の刻み目状沈線との間に横位の平行沈線を加えている。258～261はサルボウ等の貝殻腹縁を刺突するように施している。

第9類 (262～276, 282～307) 貝殻文をずらしながら施文したものを地文とし、地文上に竹管を主たる施文具として、平行沈線や刺突文を加えるものである。胴部片の中には、沈線を区画文として貝殻文を磨消するものも多く見られる。262～281は口縁部片である。262～264はいずれも口唇部付近がやや肥厚ぎみに外反するもので、貝殻文はずらしぎみに施されて地文風となり、その地文上に平行沈線文が加えられるものである。265は貝殻文地文部と無文部を、弧

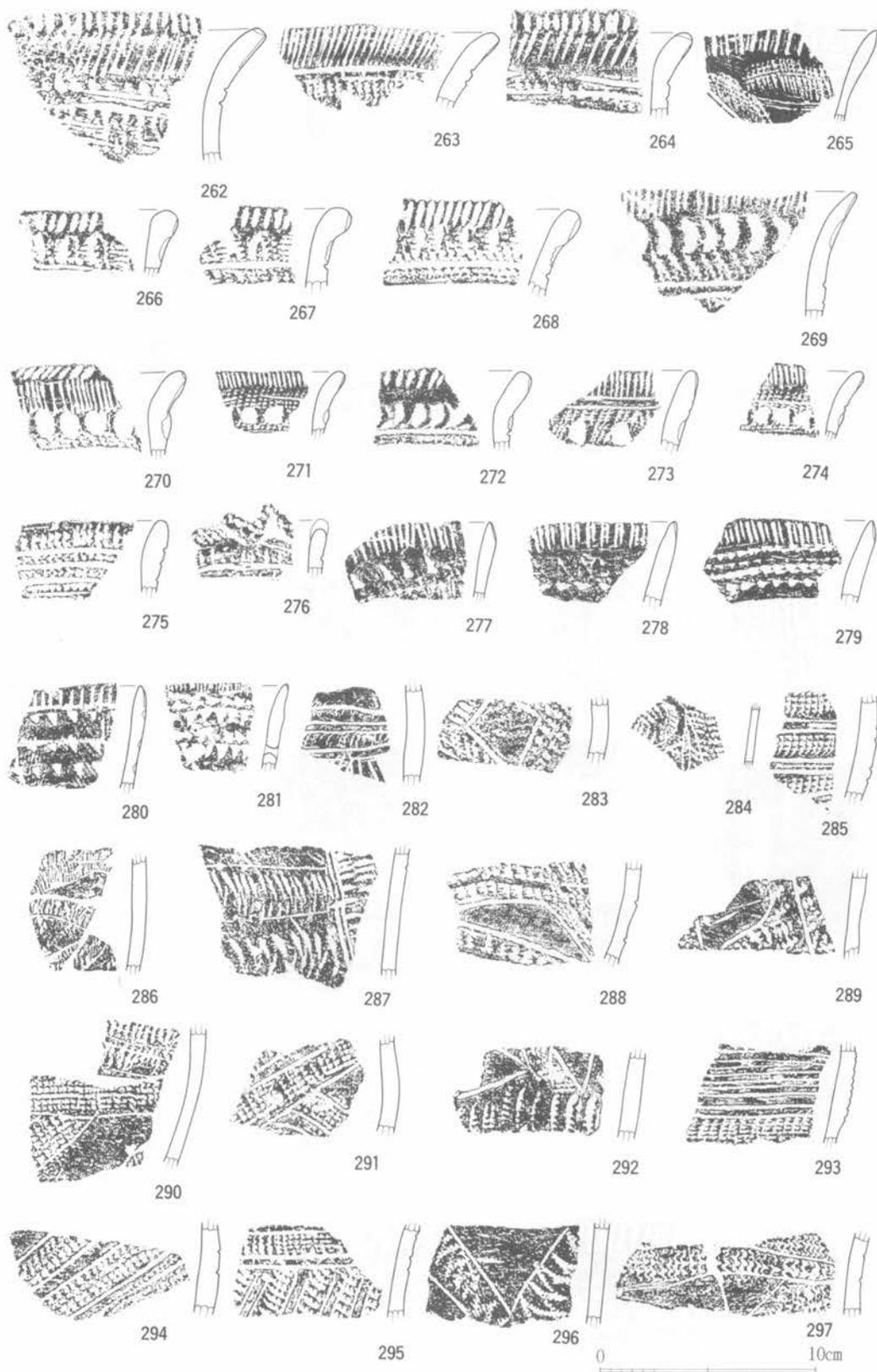


第77図 グリッド出土土器(10) (224~261)

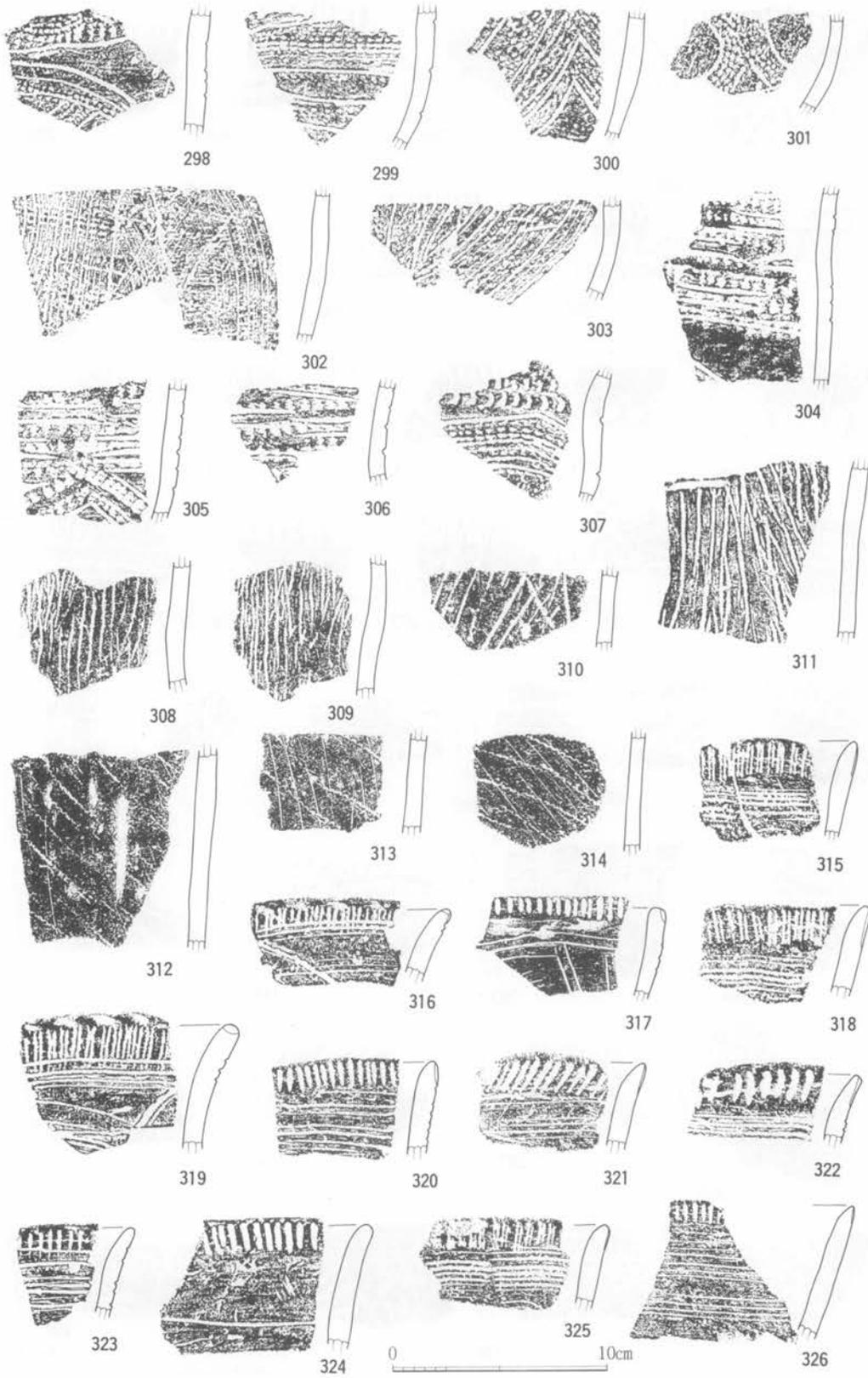
状の平行沈線により区画している。266～274は、いずれも口縁部が口唇部付近で外半、あるいは外屈する器形を有する。文様はすべて口唇下に刻み目状沈線を有し、貝殻地文上に凹凸文風の刺突と沈線文が横位を基調として施されている。275は貝殻地文上に平行沈線が施される。276も同様だが、口唇上に粘土紐をS字状に貼り付け、粘土紐上と口唇部にも地文と同様の貝殻文を押圧する。282以下は胴部片である。282の貝殻文は、地文状に施したものではないが、貝殻文間あるいは貝殻文上に竹管文を加えたものである。283は沈線により菱形状の区画文を作出し、区画内は貝殻文が磨消される。284は区画文を曲線状に作出するもの。285は貝殻文上に横位の平行沈線を加え、区画文状とする。286の区画文は整ったものではないが、用いられる沈線は非常に細い。287は横位の単沈線と縦位の平行沈線により、変形爪形文的な貝殻文を区画する。縦位の区画文に沿って、貝殻文もやはり縦位に施されている。288、289は区画文を施した後、区画内に貝殻文を充填する手法が採られている。290、291では逆に、区画文を施した後、貝殻文を磨消する手法が採られる。293～295は半截竹管による平行沈線を貝殻文上加えるが、295に見られるように、平行沈線の方向を予め意識して貝殻文の施文方向が設定されているようである。292、296、297は、沈線区画により三角形ないし菱形状に無文部を設定し、区画内に貝殻文を充填する。298～301、303は区画文が弧状に描出されているものである。302は地文の貝殻文上に、櫛歯状工具による条線文を施すが、条線間に無文部を作出しないため、区画文とはならない。304～306は沈線区画により無文部と貝殻文充填部とを分けるが、さらに貝殻文上に平行沈線が加えられる。307は逆に無文部上に、半截竹管の連続刺突状文が加えられている。

第10類 (308～314) 地文のみ施される胴部片である。308～311は撚糸文の施されるものである。撚糸の原体はいずれもしが用いられている。312～314はサルボウ等の貝殻腹縁圧痕文の施されるもので、比較的広い間隔を持って施されている。

第11類 (11, 12, 315～377) 半截竹管による平行沈線ないし、単沈線を何条も施した集合沈線(条線)、あるいは櫛歯状工具による条線文により主体的な文様構成がなされるものである。11は推定口径20.8cmを測る深鉢形土器である。口唇部に浅い刻み目を有し、胴部は櫛歯状工具による条線で大きな鋸歯状文を構成するようである。12は集合沈線を縦位に施す胴部片である。315～318、321、322、325、326はいずれも口唇下に縦位の刻み目状短沈線を有し、口縁部付近には櫛歯状工具による横位の条線文が施される。316、317、319、320、323、324は施文具として櫛歯状工具が用いられず、平行沈線ないし単沈線を集合させて文様を作出するが、整った感じではなく、粗雑な印象を受ける。327～329は条線文が櫛歯状工具によるもので、曲線的な構成がとられるが、口縁部付近では327に見られるように、口唇下の刻み目状沈線と横位の条線文を併せ持つ。330は口唇部に多載竹管による刻み目を有し、沈線文は口縁部横位、胴部縦位に施される。口縁部には凹凸文風の刺突も加えられる。331～334は口唇部に刻み目を有し、口唇下に横位の集合沈線を巡らせるものである。332の集合沈線は一部押し引き状に施文されている。



第78図 グリッド出土土器II (262~297)



第79図 グリッド出土土器12 (298~326)



第80図 グリッド出土土器(13) (327~356)

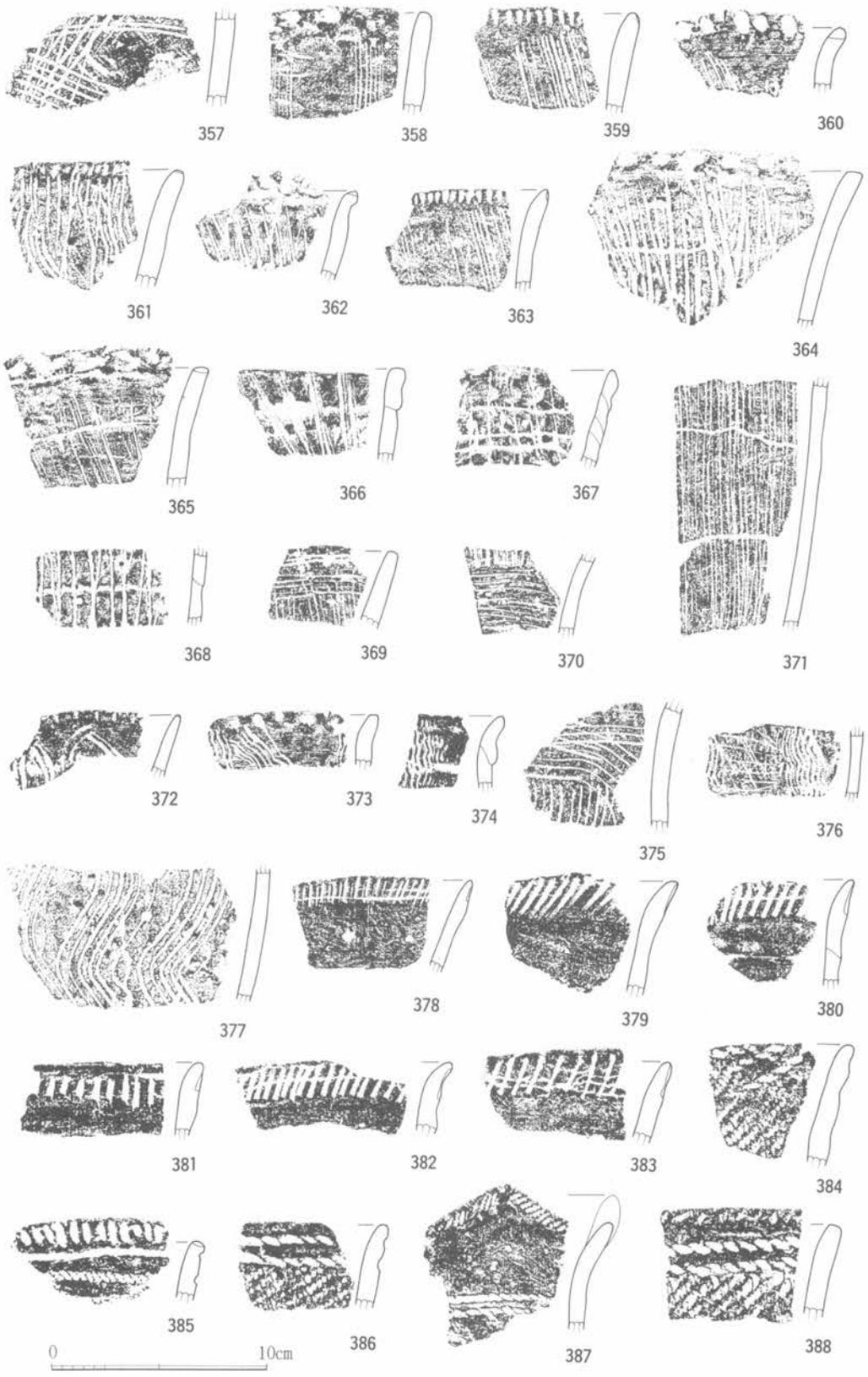
335, 336は口唇部に凹凸があるが、刻み目とはならない。施文される沈線も斜沈線等が加わり方向は整然としない。337は胴部片であるが、やはり条線の方向は整然としない。339は縦位に集合沈線文を施す胴部片。340～344は主として横位に集合沈線を施す胴部片である。346は主に斜位の集合沈線が施される。345, 348は口唇部に指頭状工具による圧痕文を有し、平行沈線により鋸歯状の文様が作出されるものであろう。347, 349, 354, は同様のモチーフを櫛歯状工具により施文するものである。354の口唇部には刻み目が施され、口縁部は外側に折り返し状となる。350～352は斜めの集合沈線が施されるもので、口唇部にはやはり刻み目ないし指頭状工具圧痕を有する。355は縦位の集合沈線をヘラにより磨消した後、横位の平行沈線が加えられている。356は櫛歯状工具によりジグザグ状の文様構成がとられる。357は条線文を横位と斜位に重ねて施しているもの。358～360, 363はいずれも口唇部に指頭状工具圧痕ないし刻み目を有する口縁部片で、櫛歯状工具による条線文は主として縦位に施されている。361は口唇上に刻み目を有し、口唇下から条線文が縦位の曲線状に施されている。362, 364は縦位の集合沈線を持つもの。365～368はいずれも輪積痕を残し、縦位の集合沈線が重なるように施されている。369は口縁部に横位、以下に縦位の集合沈線を施す。370は口唇部を欠いた口縁部片で、口唇下の刻み目状沈線が見られる。集合沈線文は横位である。371は櫛歯状工具による条線文が縦位に施される胴部片である。373～377は櫛歯状工具による条線文が曲線状に施されるもの。このうち373, 374, 376, 377等は、条線文が縦位で文様が流水文状を呈す。

第12類 (378～383) 口唇下に刻み目状の短沈線が施されるものの、口縁部付近が無文のものである。本類は、胴部に至る全面が無文のものとは考えにくく、本来第10類土器の中に含まれるものかもしれないが、ここでは一応便宜的に分けるものとする。

第IV群土器

縄文時代前期末から中期初頭に位置づけられる土器群である。施文要素的には、それまでの貝殻文や竹管文を主体とするものに代わって、再び縄文が主体的に施文されるようになる。形式的には、前期末に比定される粟島台式土器および中期初頭に比定される下小野式土器が本群土器に当たるが、両者の間に明瞭な一線を画することは現時点で困難なため、前期から中期という二時期にまたがりながらも、時間的にまとまりを持つものとして理解したい。また、本群土器の占める割合は本遺跡出土土器全体の約29%で、第III群土器と併せると全体の70%以上にも及び、本遺跡が前期後半から中期初頭にかけてを主体として存続したことがわかる。

第1類 (384～393) 口縁部付近を主体に縄文原体の圧痕文が施されているものである。384は口縁部に斜めの縄文原体圧痕を施し、胴部は同じ原体が回転施文される。原体はLRである。385は口唇部に刻み目を有し、口唇下には横位2条の原体圧痕文を施す。原体はやはりLR。386もLR原体により圧痕および回転施文がなされる。387は波状口縁を呈するもので、口唇上に細かい原体LRが回転施文されている。388は無節L縄文を用い、口唇上にも回転施文がなされる。



第81図 グリッド出土土器14 (357~388)

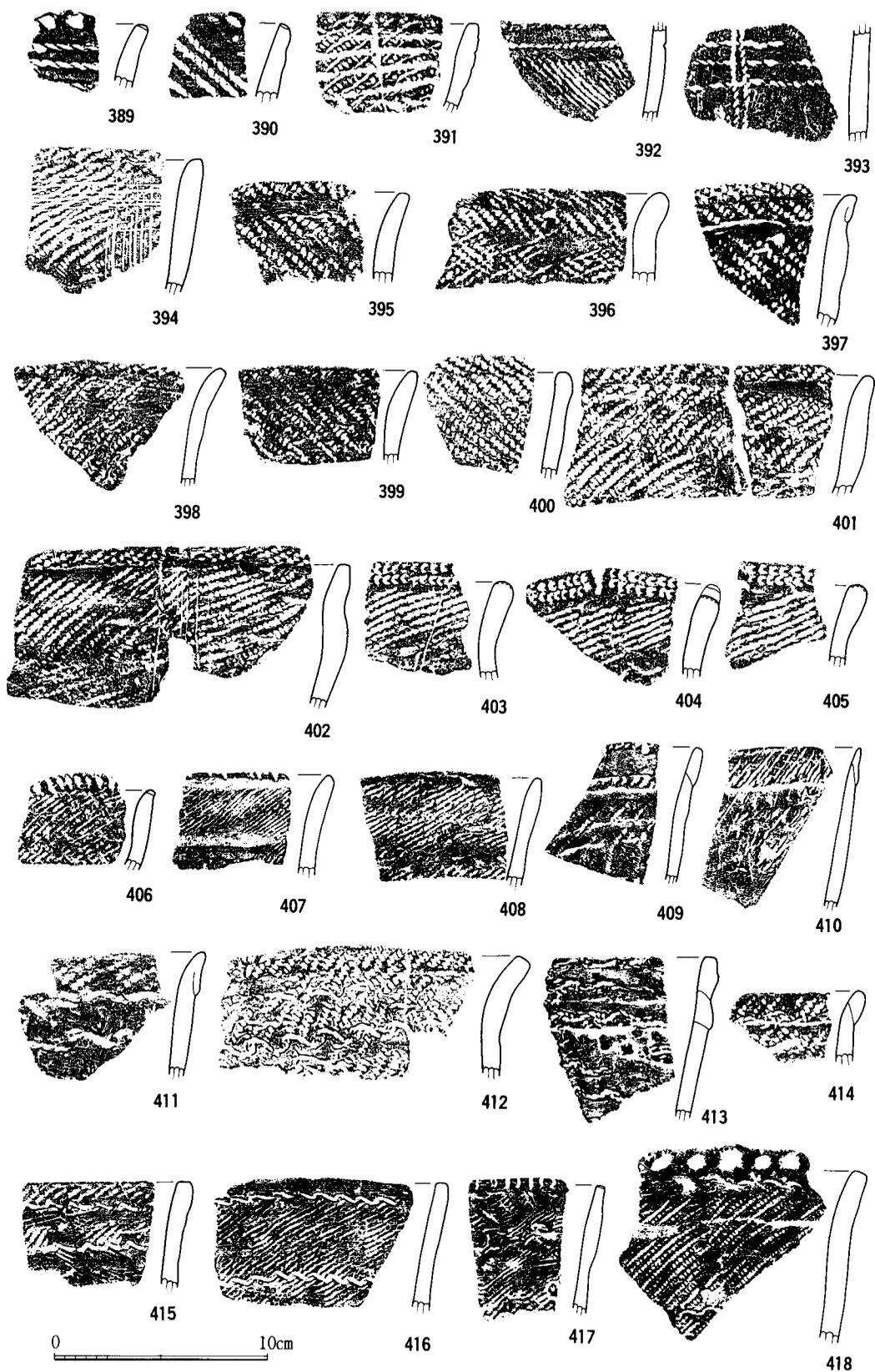
389は口唇部に刻み目を有し、口縁部はL R縄文原体が圧痕される。390はやはりL R縄文原体を口縁部に斜めに押圧する。391は地文に付加条文を施し、さらにL R原体を横位に押圧する。392は無節R縄文の地文を有するが、原体の押圧施文は無文部に施されている。393は地文がなく、無節L縄文原体を押圧施文している。

第2類(14, 394~433) ほとんど縄文のみ施されると言ってもよいほどの文様的には単調な土器である。しかし、これらの中にも僅かではあるが、条線文を加えたり(394)、連続して竹管による刺突を施したりするもの(403~405)が含まれる。395~397はいずれも単節R L縄文の施される口縁部片である。器形的には395, 396が口縁上部で外反して開き、397の口縁部は折り返される。398~402はすべて平縁の口縁部である。縄文原体はいずれも単節で、400~402は口唇上にも縄文を回転施文する。403~405は同一個体で、縄文はL Rが用いられる。口唇上には細い半截竹管による連続刺突が2列施されている。406は口唇部に刻み目を有し、縄文原体は節の細かいL Rである。407, 408はいずれも無節L縄文が施される口縁部片である。407の口唇部には同一の原体が刻み目状に押圧施文される。409, 410は無節縄文が施され、折り返し状の口縁部を有するものである。14および411以下は、結節縄文の回転施文によるいわゆる綾絡文の施される土器である。綾絡文は折り返し口縁とともに、東関東の中期初頭に見られる下小野式土器の特徴となっている。綾絡文の方向は、通常斜縄文の回転施文方向と同一のため、口縁部付近では横位、胴部片は図示したものが少ないが、14のように縦位方向が一般的となる。例外的に、432は二股の波状口縁を有する口縁部片で、文様は綾絡文だけが縦位に施されている。口縁部の断面形態も411, 427, 429, 430に見られる折り返し口縁をはじめ、輪積痕を残すもの(413, 414, 426, 428)や口縁上部で外反するもの(412, 418, 420)などが見られる。胎土では、ほとんどのものにわずかな砂粒が含まれるが、419と425は径1mm程度の小石粒を多く含み、明らかに他とは異なる。この2点は口縁部の器形的な特徴からも、五領ヶ台式土器の様相を強く持った土器である。

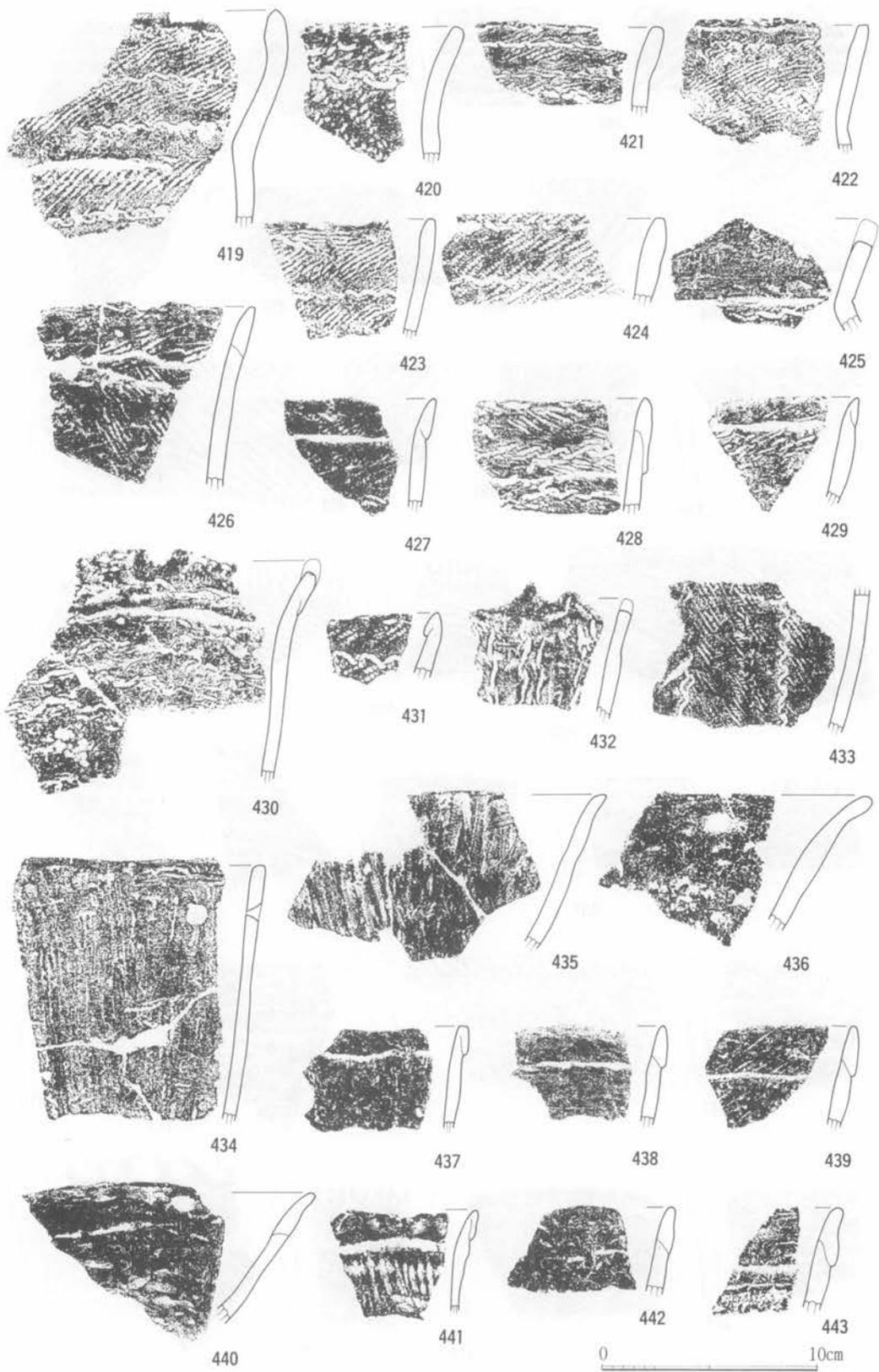
第3類(434~450) 無文の口縁部片を一括する。第2類土器中に見られた折り返し口縁を有する土器も多く存在し、下小野式および五領ヶ台式を一部含むものと思われる。434は直立してわずかに開く器形を呈し、補修孔を有する。外面は縦位のヘラケズリ、内面は横位のナデにより整形されている。435, 436, 440は鉢形を呈すると思われるものである。断面形は口唇部付近が外側にやや屈曲させられる。437~439, 441~443は折り返し口縁または輪積により、外見上折り返し口縁に類似するものである。このうち443のみ、胎土中には小石粒および雲母等を多く含む。444~446は口縁部に輪積痕を2段以上残すものである。448~450は口縁部が内側に折り返されている。

第V群土器

縄文時代前期後半の諸磯式系土器群である。本遺跡においては、同じく前期後半の浮島式系



第82図 グリッド出土土器(15) (389~418)



第83図 グリッド出土土器16 (419~443)

土器群が主体を占めており、本群土器はいわば客体的存在である。また、その出土量は全体の0.5%にも満たないほど僅少である。

第1類(13) 半截竹管による平行沈線を主として文様が作出されるものである。地文には縄文が施されている。13は平行沈線を主に弧状に配列する文様の構成がとられる諸磯a式土器である。

第2類(451, 455) 刻み目を施した隆帯が貼り付けられた、いわゆる浮線文を有する土器である。451は大きく内湾する口縁部片で、浮線文の下位には連続爪形文が加えられる。本類は諸磯b式土器である。

第3類(452~454, 456) 諸磯c式土器である。452~454は円形状の貼り付け文が付される土器で、いずれも口縁部は内湾する。地文として、452, 453(同一個体)では半截竹管の連続刺突文が、454ではやはり半截竹管による集合沈線が施されている。

第4類(457~463) 十三菩提式土器である。457, 461は集合沈線により綾杉状の文様が施されている。461は波状口縁を呈し、口唇部の外側は三角形に削られた刻み目が施される。文様は集合沈線により作出されるが、集合沈線の空白部が凸レンズ状や三角形状を呈し、いわゆる陰刻文となる。458~460, 462, 463は、貼り付けられた細隆線上に半截竹管を押し引きすることによりミミズ状の隆線を形成するものである。

第VI群土器

縄文時代中期の土器である。中期初頭に位置づけられる下小野式土器については前述のように第IV群土器中に収めてあり、ここでは五領ヶ台式以降に位置づけられる土器を扱う。

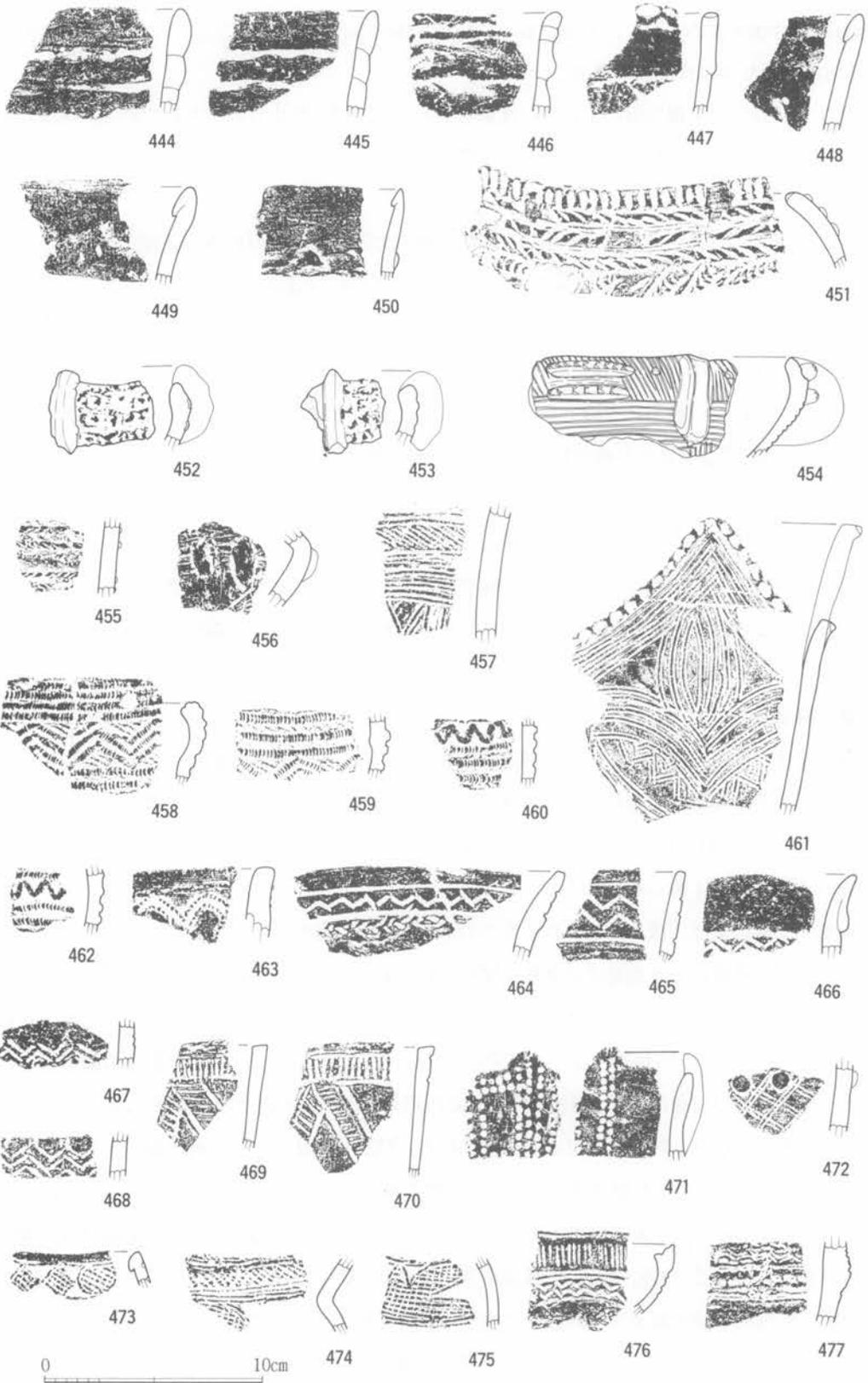
第1類(15, 464~493) 五領ヶ台式土器である。文様は主に竹管により施されるが、施文の違いにより次の4種に細分する。

1種 沈線により文様が作出されるものである。(464~479)

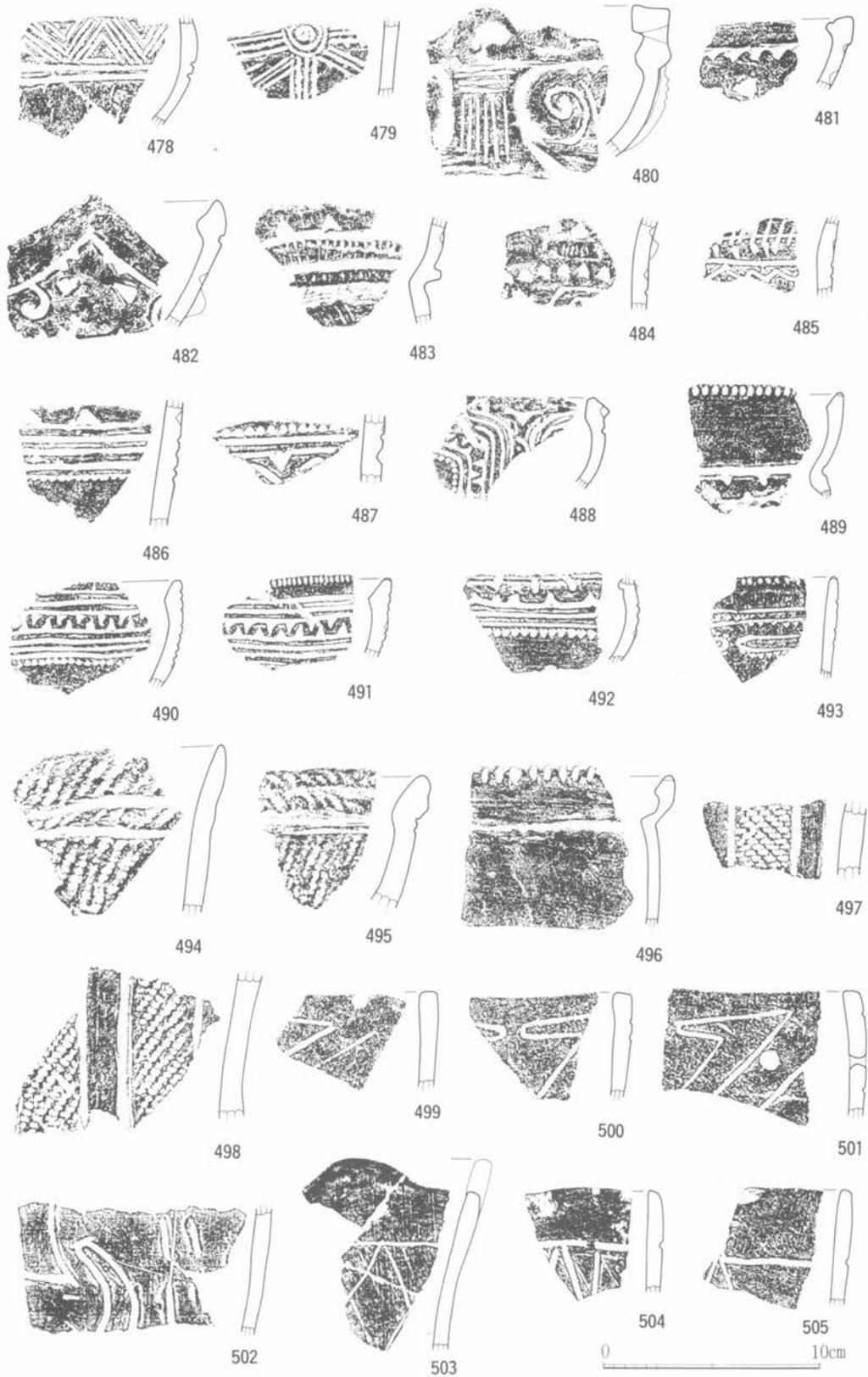
464~468は沈線により鋸歯状の文様が構成されるものである。口縁部は464のみ折り返し状を呈している。469, 470は同一個体で、沈線により区画された帯状の文様帯をおそらく鋸歯状に配するものと思われ、文様帯内はさらに刻み目状の沈線が充填される。471は縦位の隆帯状に付された突起を持つ口縁部片で、器内外面ともに円形竹管刺突文が施される。472は地文に格子目状沈線を有し、ボタン状の貼り付け文が付される。473~475はいわゆる細沈線により細かな格子目状文が施され、三角形陰刻文とにより文様帯を構成している。476は口唇部の内側に段を有するもので、口唇下には刻み目状短沈線を巡らせる。477は細い半截竹管により鋸歯状文、刺突文等が施されている。478, 479の文様は集合沈線により構成される。

2種 彫刻的手法で器面を三角形状に削り、陰刻文を施すものである。(480~493)

480は橋状の把手を有するものである。把手は口縁部の文様帯上に架かり、文様帯内には渦巻き状の沈線文と三角形状の陰刻文が施されている。481, 482はいずれも口縁部に三角形の陰刻



第84図 グリッド出土土器17 (444~477)



第85図 グリッド出土土器18 (478~505)

文が施される。483、484は刻み目を有する隆帯が付される。485～487は沈線文および陰刻文が施されるもの。488～492は沈線文と交互刺突文、連続刺突文等が施されているものである。489の口縁部は内湾し無文帯となっている。493は沈線文に沿って小さな刺突文が連続的に施されている。

3種 縄文を地文とするもの。(494, 495)

494は地文に撚りの弱い単節LR縄文を施し、横位2条の沈線を巡らせる口縁部片である。495は口縁上部に厚みのあるもので、口縁部横位、胴部縦位のRL縄文が施される。胎土中には小石粒等を多く含んでいる。

4種 無文のもの。(15, 496)

15は推定口径23.4cmを測る深鉢形土器である。口縁部は折り返し口縁を整形したものと思われる、やや肥厚している。内外面ともに整形は横ナデによる。496は口縁上部付近が湾曲する器形を有するものである。口唇上には刻み目が施される。

第2類(497, 498) 加曾利EII式土器である。497, 498はいずれも沈線により区画された磨消縄文帯が垂下するものである。縄文は縦位に回転施文され、497がLR, 498がRLを施す。

第VII群土器

縄文時代後期の土器である。既設の型式設定に基づき、次の3類に分類する。

第1類(499～508) 後期初頭に位置づけられる称名寺式土器である。図示したものすべてに地文がなく、無文地に沈線による文様が作出されている。499～501は、沈線文が7字状に向かい合う構成を採るものである。502の沈線はやや曲線的となり、一部短沈線を列点文状に施している。503～508は、斜位の沈線を用いて斜格子状の文様構成がなされている。

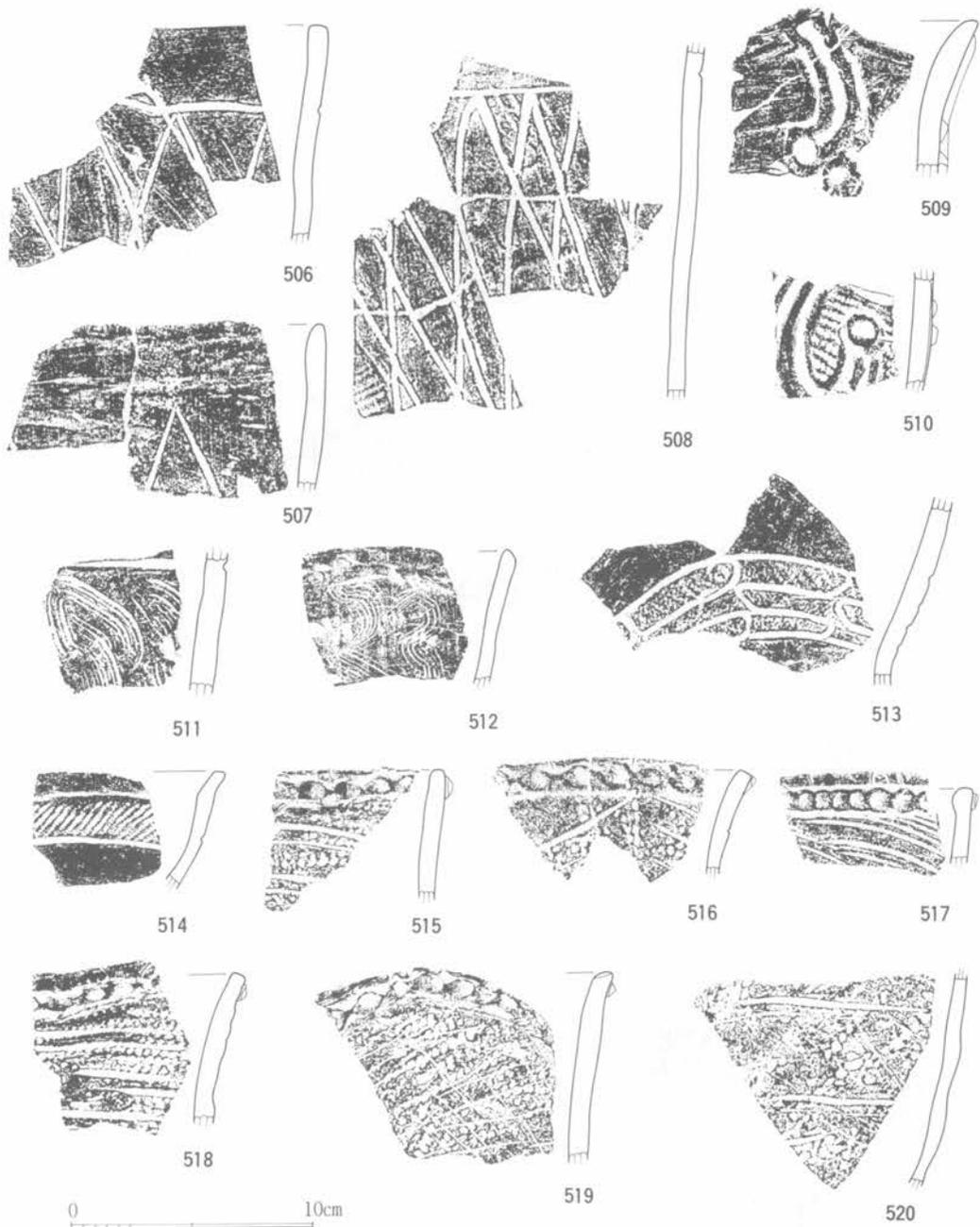
第2類(509～512) 堀之内式土器である。509は波状口縁の波頂部から貼り付けによる隆帯を曲線状に垂らす。隆帯上は沈線によりなぞられ、端部に円形の刺突が加えられる。510は地文にRL縄文を有する。511, 512は櫛歯状工具により曲線的な文様が作出されている。

第3類(16, 513～520) 加曾利B式土器である。16および513, 514は精製土器で、いずれも鉢形土器であろう。文様は横位の沈線文を伴う縄文帯が主体となり、加曾利B1式に比定できる土器である。515～519はいわゆる紐線文が貼り付けられた粗製土器である。文様は地文に単節縄文を施し、沈線文が加えられている。

ミニチュア土器(第87図, 図版26)

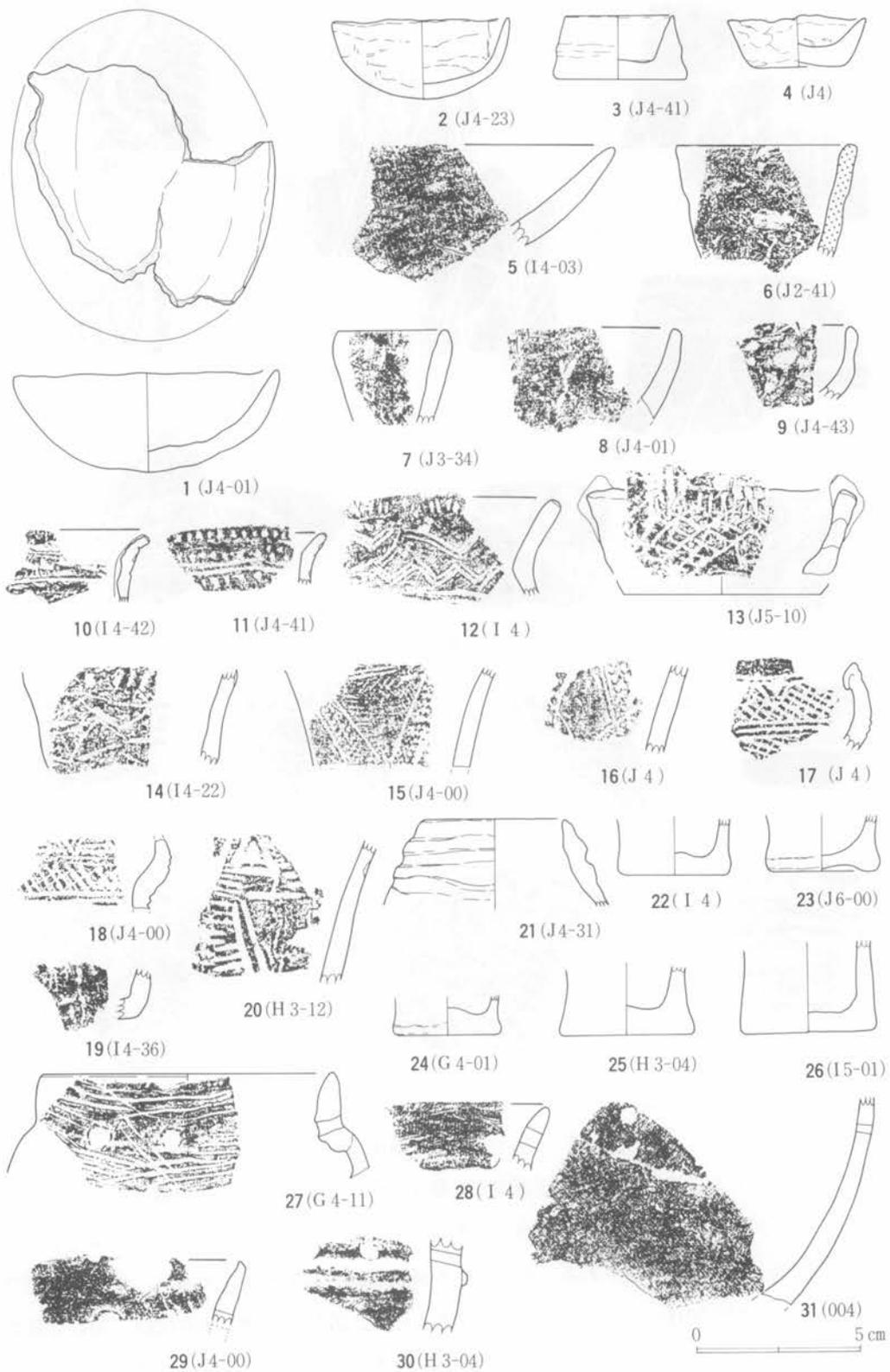
本遺跡から出土したミニチュア土器はすべて破片状態であり、遺構外から検出されるものがほとんどである。また、図示しなかったが、I4・J4区に中心を置いており、第61図に示した土製品と同様の分布状況を呈している。土製耳飾りとの関連で興味深い現象である。

1～9は無文である。1・2は皿状を呈し、1は平面楕円形で、指頭整形による凸凹が認められる。10～16は第III群浮島式系土器である。10・11は三角形文、12・14は鋸歯状の沈線、13



第86図 グリッド出土土器19 (506~520)

は格子文が施される。15・16は沈線区画内に文様を充填するもので、15は貝殻文、16は刺突文となる。17~20は第VI群第1類五領ヶ台式土器である。17・18は細沈線による細かな格子目文と三角形陰刻文とにより構成される。20は三角形带状文帯内に短沈線を充填し、やはり陰刻文が認められる。27~30はいわゆる円孔文を呈するもので、27には粗雑な集合沈線、30には隆帯が加えられる。31は無文の胴部片である。焼成後の丁寧な穿孔と三角形の状態から、再利用した垂飾品の可能性も考えられる。



第87図 グリッド出土ミニチュア土器

第3章 綱原遺跡

第1節 縄文時代

本遺跡からは、縄文時代早期の竪穴状遺構及び炉穴等が計9基検出されている。

1. 炉 穴

F P 1号炉穴 (第91図, 図版37)

D 3区, 005号墳の墳丘下に位置し, 001号竪穴状遺構内に掘り込まれる。西端でF P 3号炉穴と接する。長軸1.7m, 短軸0.9mを測る楕円形を呈し, 確認面からの深さは0.2mである。底面は東側に向けて徐々に深くなり, 円形の焼土が東端に遺存する。

茅山式土器の破片がほぼ中央部分に多くみられる。

F P 2号炉穴 (第91図, 図版37)

F P 1号炉穴の北側に接して, 直交するように所在する。長軸1.8m, 短軸0.8mを測り, 北側がやや尖る楕円形を呈する。南側は東に若干屈曲する。確認面からの深さ0.2mを測り, 底面はほぼ平坦であるが, 南端が僅かに深くなる。焼土は中央部分に遺存している。

茅山式土器片が, 焼土上面及び南端に検出された。

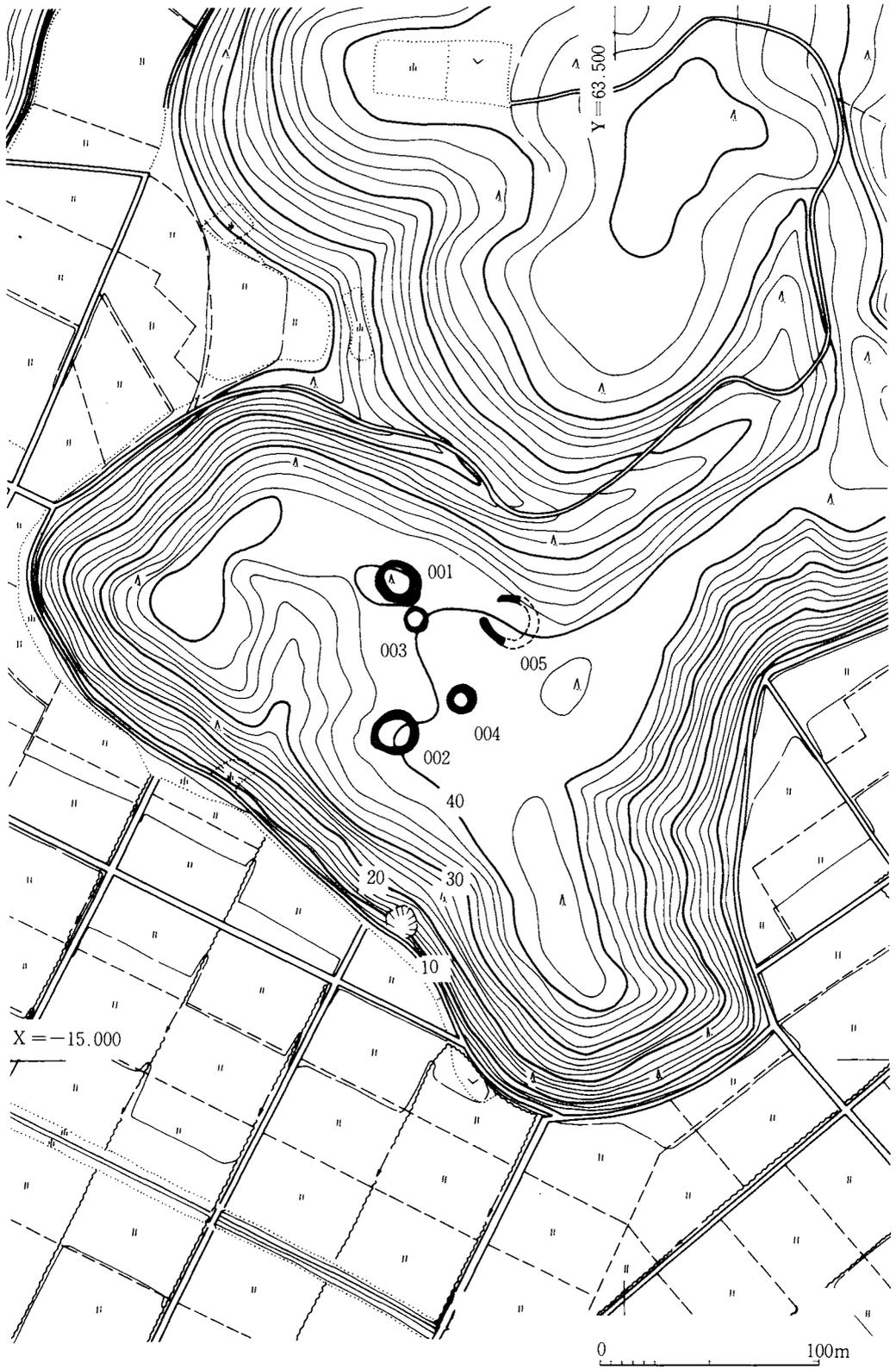
F P 3号炉穴 (第91図, 図版37)

F P 1号炉穴の西側に接して, 主軸方向を同一にして構築される。遺構の切り合いから, 本炉穴の方が古い時期の所産と考えられる。長軸1.8m, 短軸1.0mの楕円形を呈し, 足場となる西側がやや広がっている。確認面からの深さ15cm前後で, 東側に向けて徐々に深くなる。焼土は東側半分程に遺存している。

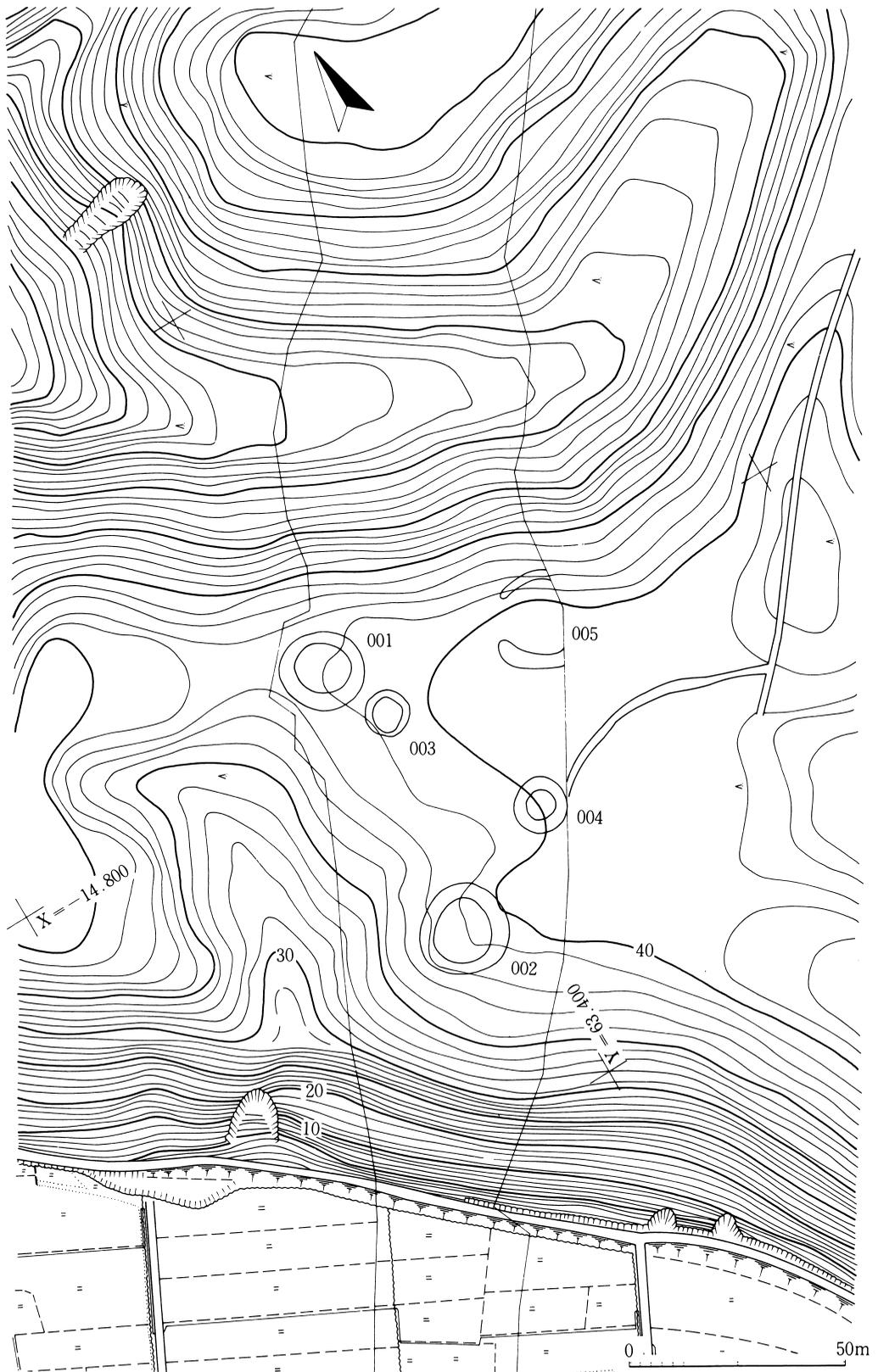
遺物の出土はなかった。

1 0 1号炉穴 (第91図)

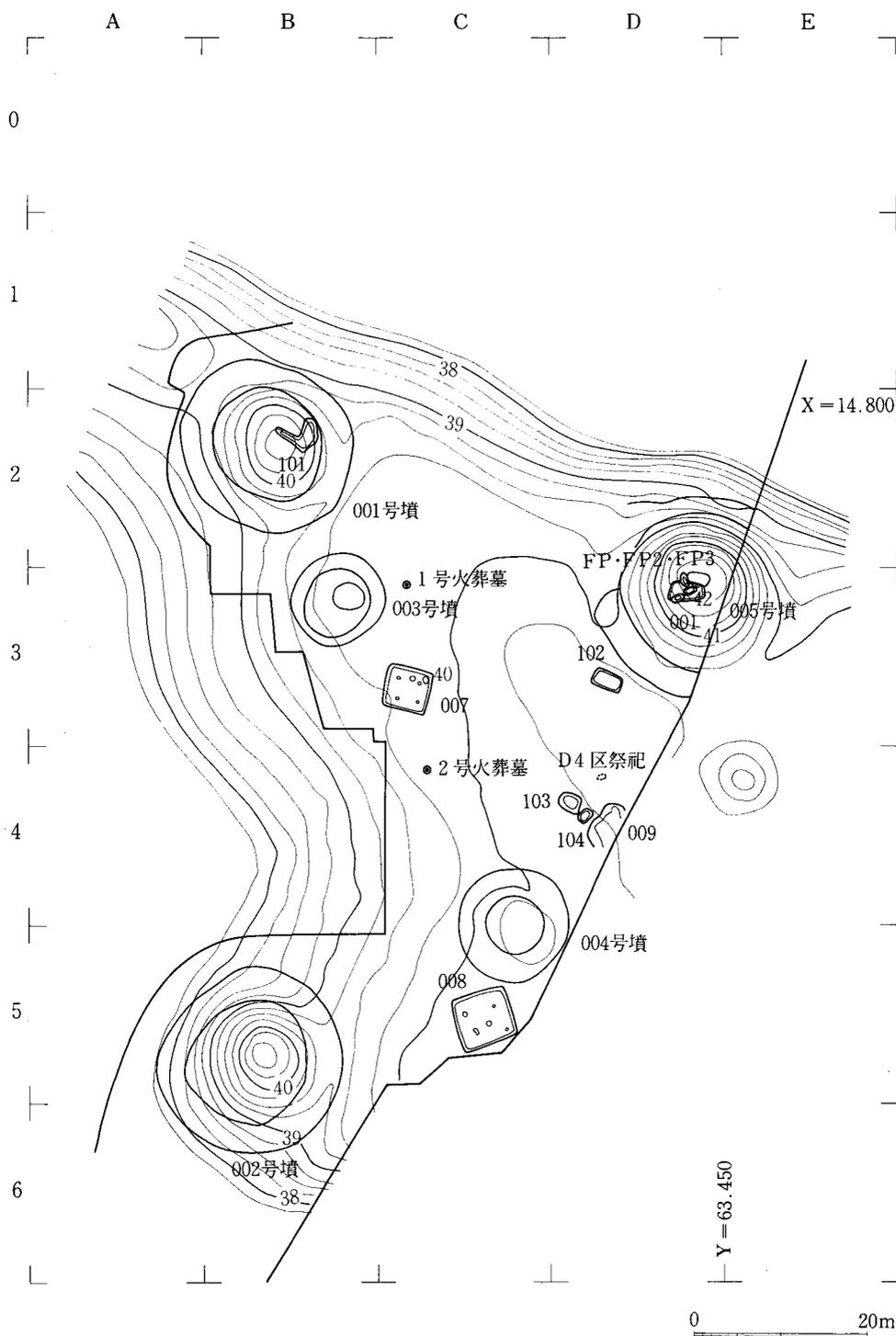
B 2区, 001号墳の墳丘下に位置する。単独で構築されており, 全体に不整形を呈する。二股状で, ほぼ直行する2基の掘り方を有している。東西方向は, 長軸4.2m, 短軸0.8mを測り, 長方形プランを呈する。南北方向は, 長軸4.1m, 短軸1.9mを測る楕円形プランを呈する。火床が3か所検出されていることより, 2回の移動が考えられる。当初は, 東側のA・B火床が利用されていたようである。この前後関係は不明であるが, 同時期に存在することはその位置より考えられない。なお, Aに対する足場は北側, Bに対する足場は南側となろう。各々の足場に存在する焼土は底面より浮いており火床となるものではない。また, A～Cを通る土層断面を観察すると, A・Bの火床上面にはロームブロック及び焼土を含む土が堆積している。おそらく人為的な埋め戻しであり, 最後にCの火床を形成する段階で行われたものと考えられる。



第88図 網原遺跡周辺地形図(1/3,000)



第89図 網原遺跡地形図 (1/1,500)



第90図 網原遺跡遺構配置図

土器は、A・B火床の北側に比較的多く遺存する。

103号炉穴（第91図，図版38）

D4区北側に所在する。平面形は不整形を呈し、規模は、南北方向で推定2.7m、東西方向で2.3mを測る。確認面からの掘り込みは深く、南側で45～55cmを測る。焼土は底面上で3か所検出された。南側の2か所は底面より10～15cm程掘り込まれており、焼土も15cm前後堆積しているが、北側は掘り込みがほとんどなく、焼土の堆積もきわめて薄い。この状況から、南側の焼土は火床に伴うもの、北側は足場に当たり、焼土は掻き出されたものと考えられる。覆土からは埋め戻された状況を認めることはできない。

縄文時代早期の茅山式土器が底面上より比較的多く出土している。特に南側の2か所の焼土中に集中する傾向がみられる。

104号炉穴（第91図）

D4区，103号炉穴の南東に隣接して所在する。平面形は楕円形を呈し、規模は、長軸2.0m、短軸1.2mを測る。確認面からの掘り込みは北側の最も深い部分で0.8mである。壁・底面とも良好な状態で、底面は足場から火床に向けて徐々に低くなり、火床部分の明瞭な掘り方はない。焼土は北側に厚さ15cm程堆積している。覆土は自然堆積と考えられる。

焼土中より縄文時代早期茅山式土器の小片が検出されたが、図示できるものはなかった。

2. 竪穴状遺構

001号竪穴状遺構（第92図，図版37）

D3区，005号墳の墳丘下に所在する。FP1～3号炉穴と重複しているが、本遺構の掘り込みが浅いため新旧関係は不明である。ただ、出土する遺物からはほとんど時期差は考えられず、あるいは同時期の所産とすることも可能である。平面形は不整形長方形を呈し、規模は、長軸3.7m、短軸2.3mを測る。確認面からの掘り込みは10cm前後と浅く、底面は比較的軟質である。

出土した土器は少ないが、重複する炉穴の土器とはほとんど時期差が認められない。

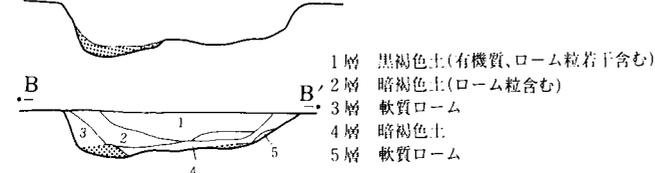
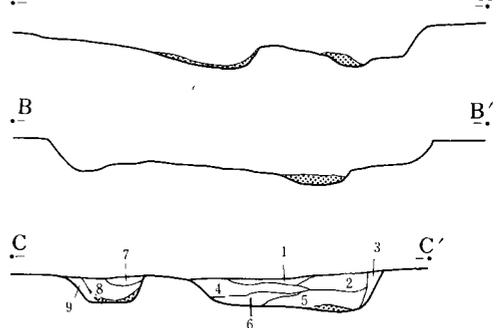
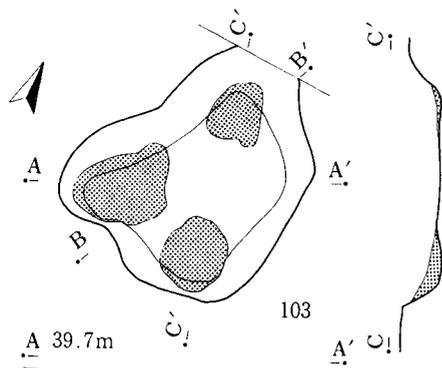
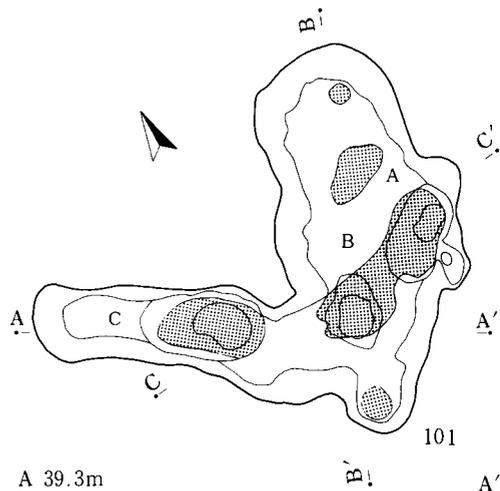
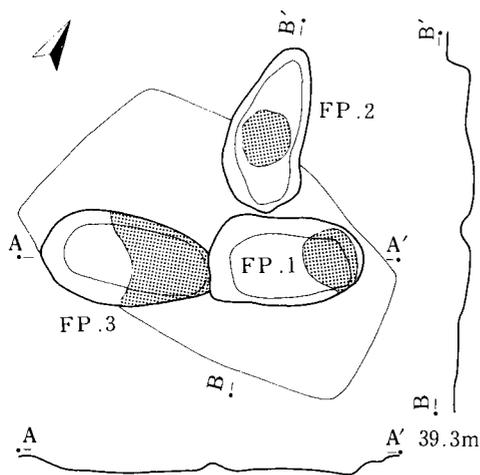
009号竪穴状遺構（第92図，図版38）

D4区に所在し、南東側が調査区域外に延びるため、詳細は不明である。平面形は不整形円形を呈し、規模は、推定で径6～7mを測ると思われる。確認面からの掘り込みは、中央部の最も深い部分で0.6mを測る。全体に浅い掘り鉢状の掘り方を呈し、壁・底面とも比較的軟質である。底面中央には深さ0.1m程の不整形を呈するピットが掘り込まれる。

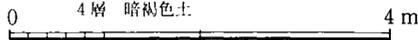
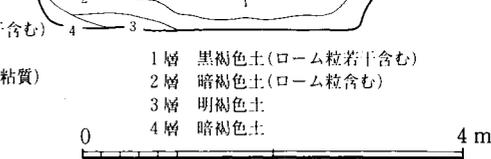
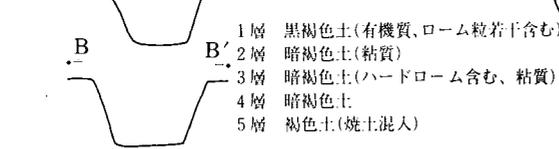
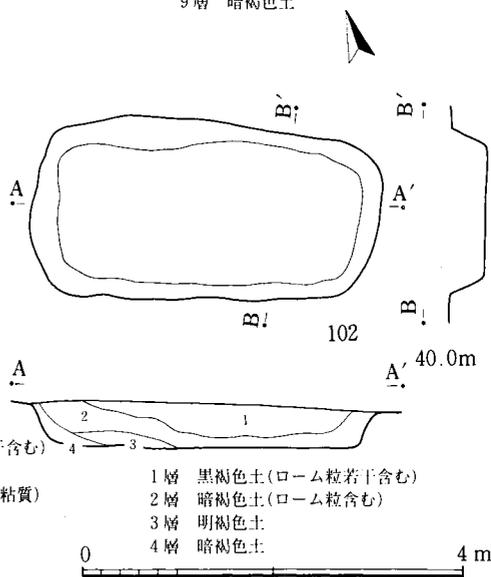
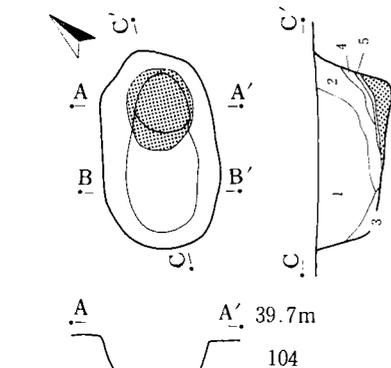
縄文時代早期の茅山式土器を多量に出土するが、その多くは1層の黒色土中に含まれる。

3. 土坑

102号土坑（第91図，図版38）



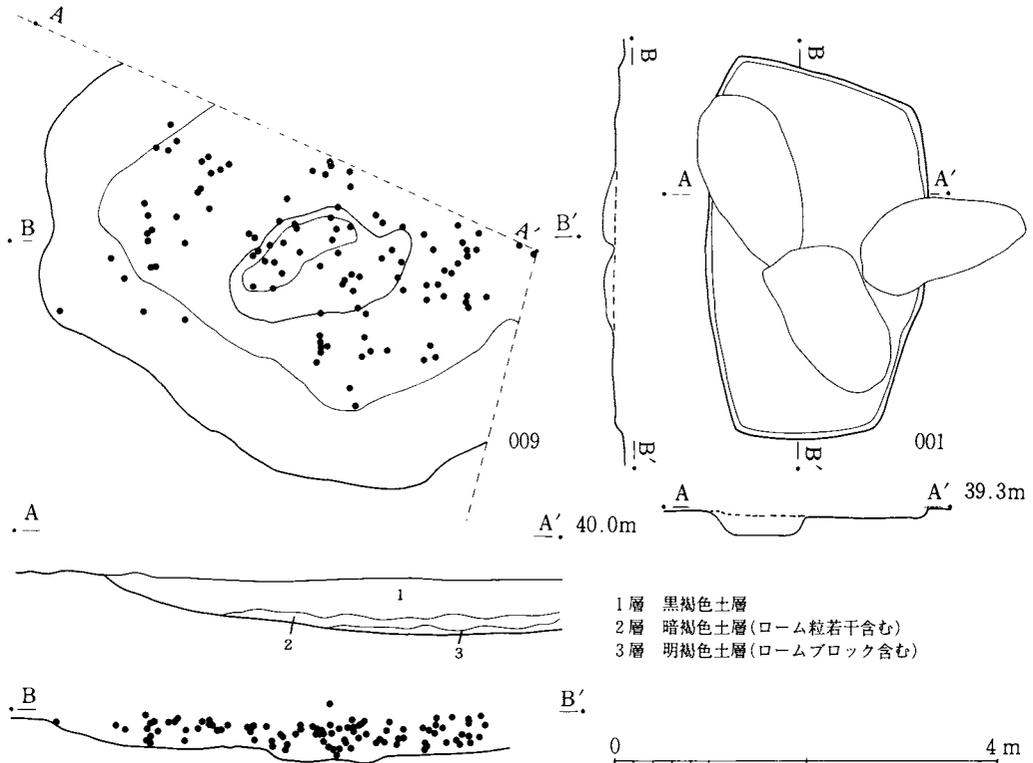
- 1層 暗褐色土(焼土、ローム粒若干含む)
- 2層 暗褐色土(焼土、ローム粒含む)
- 3層 明褐色土(軟質)
- 4層 褐色土(ローブロック含む)
- 5層 黒褐色土(ローム含む)
- 6層 暗褐色土
- 7層 暗褐色土
- 8層 黒褐色土
- 9層 暗褐色土



第91図 炉穴・土坑

D 3区, 005号墳の南西2 m程に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は、長軸3.7m、短軸1.8mを測る。壁はやや斜位に立ち上がり、確認面からの深さは0.5m程である。底面はハードルーム中に形成され、凹凸がみられる。

覆土中より縄文土器・土師器片が僅かに出土しているが、本土坑の形成時期は不明である。ただ、形態から古墳時代の遺構となる可能性もある。



第92図 竪穴状遺構

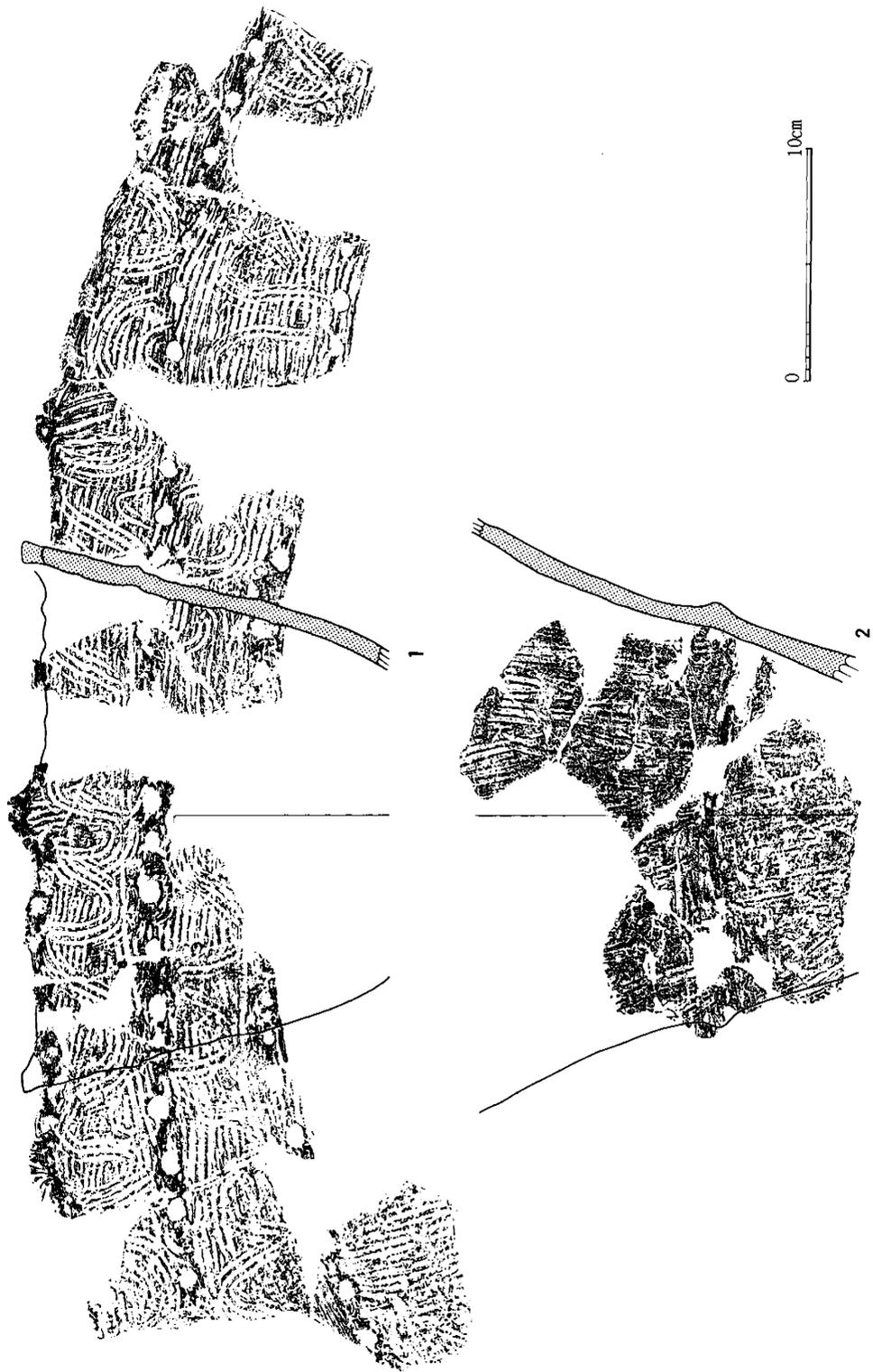
遺構出土土器 (第93~100図, 図版50~53)

F P 1号炉穴出土土器 (1)

1は口縁部に小波状の突起を4単位持つ深鉢形土器と考えられる。胴部に2条の隆帯を持ち2段の文様帯を構成している。文様は、アナガラ属系の貝殻を用いた条痕文と同様な貝殻を用いた貝殻背圧痕文が見られる。2段の文様帯には、横位の条痕文を地文として、波状の条痕文が施される。それ以下の胴部から底部にかけては縦位の条痕文が施文されるようである。2つの隆帯上には貝殻背圧痕文が施される。また、口唇部上にも貝殻背圧痕文が認められる。胎土には多量の植物繊維を含み、脆い土器である。

F P 2号炉穴出土土器 (2)

2は胴下半部にタガ状の隆帯が施される深鉢形土器である。口縁部が欠損するため胴上半部



第 93 图 FP1(1)·FP2(2)号炉穴出土土器

の文様は不明であるが、おそらく、条痕文のみが施されるものであろう。条痕文は比較的浅く、縦位に施文される。タガ状の隆帯上には刻み目は施されていない。胎土には植物繊維を多量に含んでいる。

101号炉穴出土土器（3～19）

3, 5～9は口縁部直下にタガ状の隆帯を施すもので、部分的に縦位の隆帯がみられる。隆帯上には刻み目が施され、口唇部内外面に及ぶものも見られる。8はタガ状の隆帯間に半截竹管による楕円状の沈線が施文されるが、その他は横位・斜位の条痕文のみが施文される。10は口縁部直下の文様帯部の破片と考えられ、横位の条痕文を地文とし、沈線による格子状文を作成するものである。4, 11～19は、胴部に1条のタガ状の隆帯を持ち、条痕文のみによる文様が施文されるものと考えられる。4に代表されるように、胴部に1段の稜を持つ深鉢形土器と考えられ、口唇部及びタガ状の隆帯上には刻み目等が施文されるものが多く見られるようである。条痕文は横位・斜位のもものが主体である。すべての土器の内面には貝殻条痕文が見られる。

102号土坑出土土器（20・21）

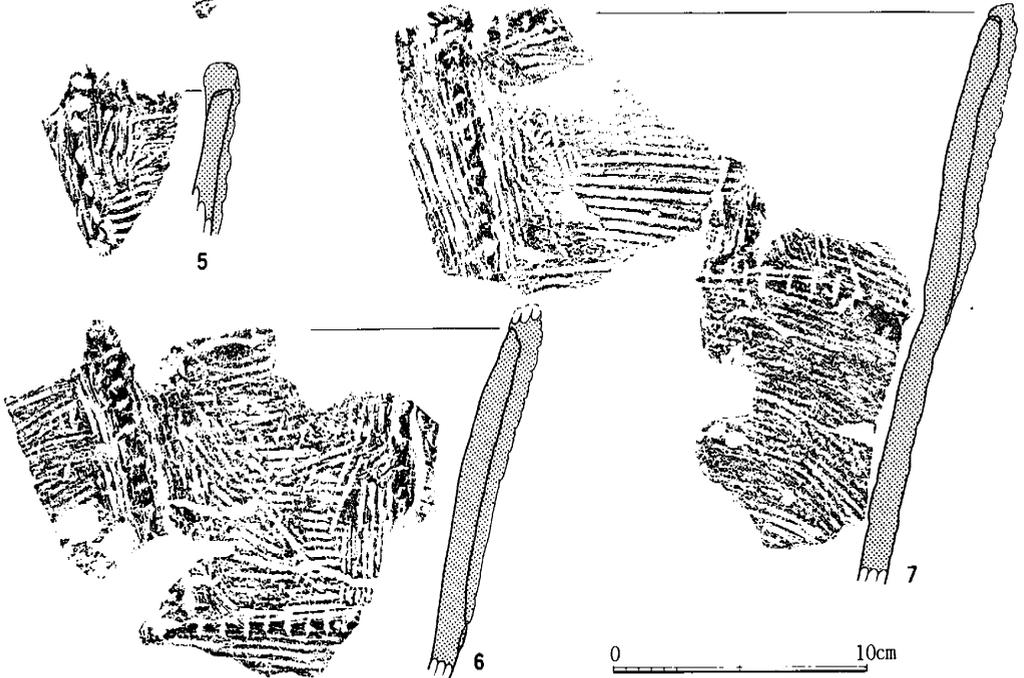
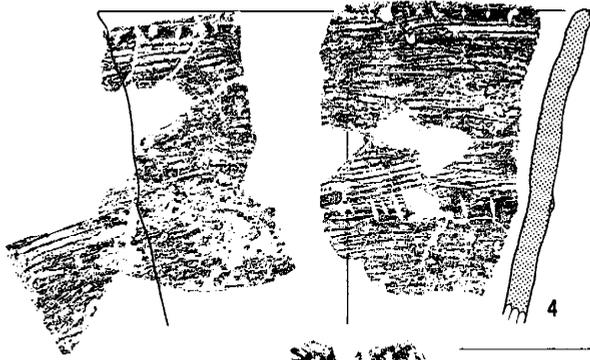
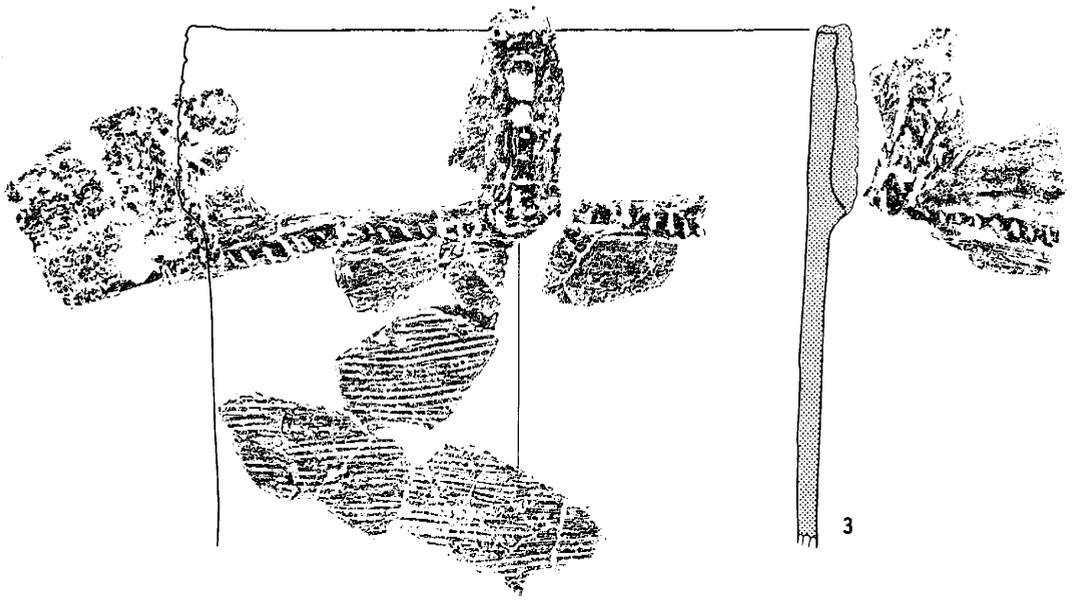
20は口縁部の破片で、口縁部に小突起が見られる。21は胴部の破片で、タガ状の隆帯が見られる。文様は内外面ともに条痕文が施される。胎土には植物繊維が多量に含まれ、脆い土器である。

103号炉穴出土土器（22～31）

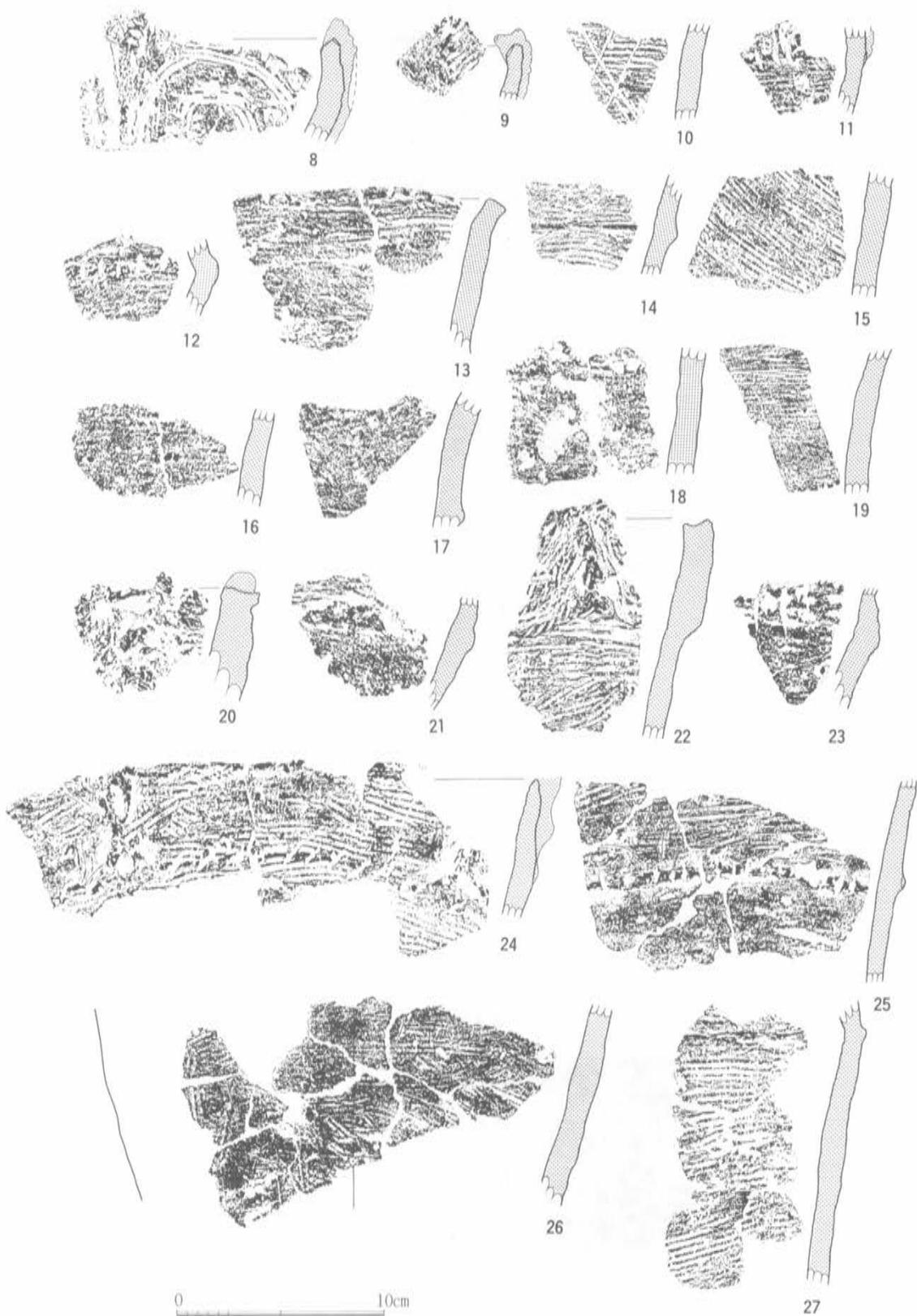
31は口縁部が小波状の波状口縁となり、口縁部直下及び胴上半部で稜を持ちながら屈曲する深鉢形土器と考えられる。稜部にはタガ状の隆帯を持ち、波頂部に縦位の隆帯が見られる。口縁部直下のタガ状の隆帯内には指頭による器面調整の後、相接する三日月状の沈線が施文される。くびれ部から胴上半部にかけては横位の貝殻条痕文が施文される。胎土中に含まれる植物繊維が他の土器に比べ少なく、焼成の良好な土器である。23は胴部のくびれ部の破片と考えられ、縦位の細沈線と刺突文が認められる。22, 24, 28, 29は胴部に1段の稜を持つ深鉢形土器と考えられ、波頂部及び小突起部には縦位の隆帯が施文される。口唇部及びタガ状の隆帯上には刻み目・刺突文等が施文される。条痕文は横位・斜位のもものが多く、部分的に縦位の貝殻条痕文が観察できる。30は胴部にタガ状の隆帯を巡らすもので、条痕文の他に文様が施文されないものである。外面はヘラ調整によるもので、条痕文は認められないが、内面には斜位の条痕文が観察できる。タガ状の隆帯上には刻み目が見られる。25～27はこれらの胴部破片と考えられる。25にはタガ状の隆帯とその上に施文される刻み目が見られる。

104号炉穴出土土器（32～37）

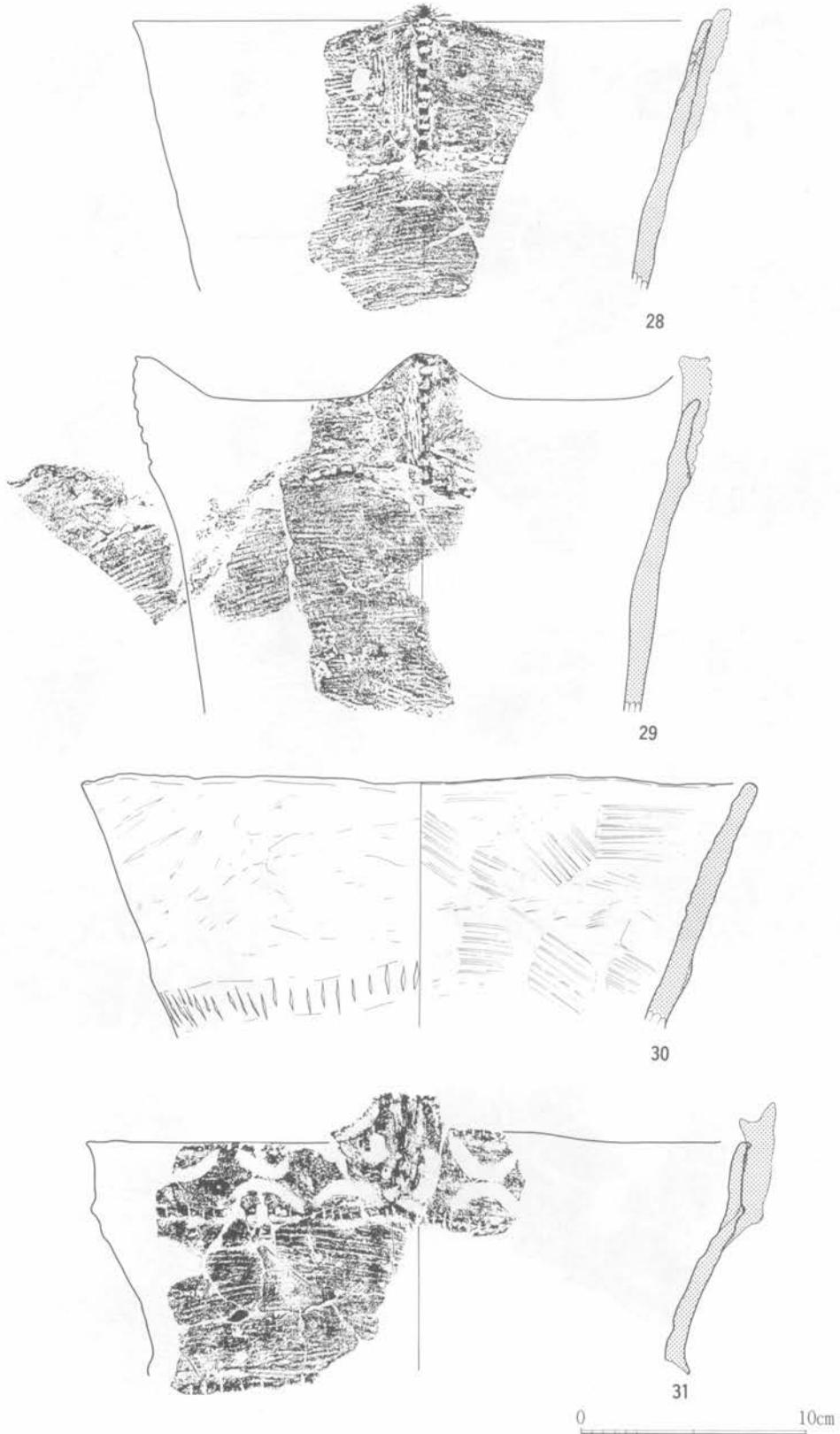
32は口縁部に小波状の突起を持ち、口縁部直下にタガ状の隆帯が施される深鉢形土器である。文様施文具としては、アナガラ属系の貝殻と半截竹管が用いられる。口縁部直下からタガ状の隆帯間が文様帯となり、横位の条痕文を地文として、格子状の沈線が施文される。タガ状の隆



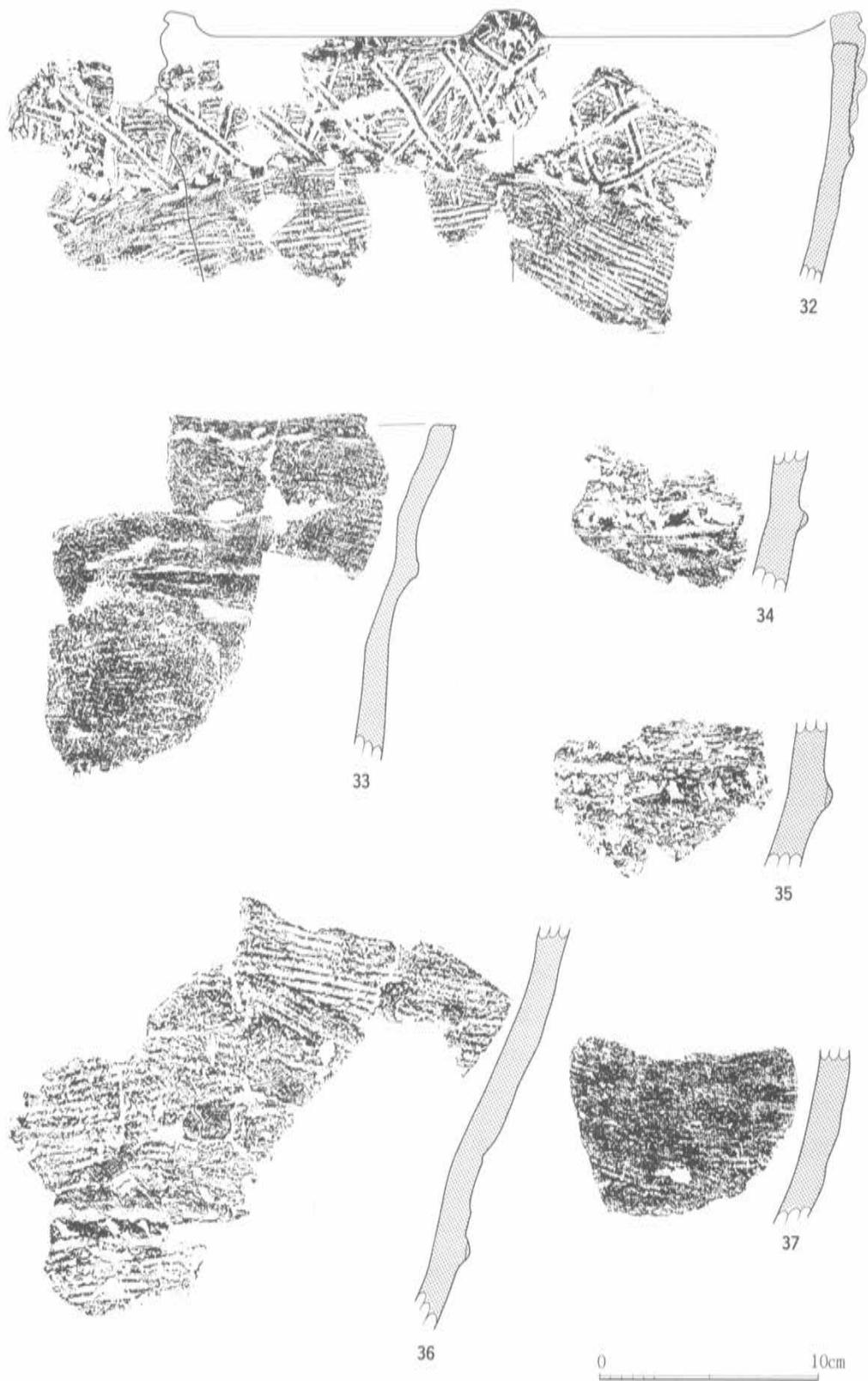
第94图 101号炉穴(3~7)出土土器



第95图 101号炉穴(8~19)·103号炉穴(22~27)·102号土坑(20·21)出土土器



第96图 103号炉穴(28~31)出土土器



第97图 104号炉穴(32~37)出土土器

帯上は刻み目が施される。胴部から底部にかけては横位・斜位の条痕文が施文される。胎土には植物繊維が多量に含まれ、脆い土器である。33～36は胴部にタガ状の隆帯が巡らされるものである。34～36のタガ状の隆帯上には刻み目が観察できる。文様としては横位・斜位の条痕文のみが見られる。37は胴部の破片で、浅い横位の条痕文が施文される。

009号竪穴状遺構出土土器（38～82）

38～43は条痕文やタガ状の隆帯の他に沈線による文様が施されるものである。38は波状口縁部を呈し、口縁部直下の隆帯下で屈曲する鉢形土器の器形を呈するものと考えられる。口唇部内外面には刻み目が施される。文様は口縁部とタガ状の隆帯間に浅い横位の条痕文を地文として、集合する細沈線により鋸歯状の沈線文を施す。タガ状の隆帯上には刻み目が施される。胴部から底部にかけては横位・斜位の条痕文が施されると考えられる。39・40は同一個体であろう。41～43は、口縁部とタガ状の隆帯間に条痕文を地文とし、細沈線による格子状文を施すものである。42の一部には、太い沈線による渦巻き状の文様が見られる。44～60はタガ状の隆帯や縦位の隆帯が見られるものである。49を除き、隆帯上は刻み目や刺突文が施される。文様は条痕文のみが見られ、その他の文様は観察できない。条痕文の施文方向は、横位・斜位のもものが大部分を占める。61～77は条痕文のみが施文されるものである。61～69は口縁部の破片で、口唇部内外面に刻み目が施されるものが若干見られる。条痕文の施文方向は全て横位である。70～77は胴部の破片である。横位・斜位・縦位の条痕文が見られる。78～81は擦痕文及び無文の土器である。78は波状口縁部の破片で、表面に擦痕文が見られる。79～81は無文の土器である。80の口唇部内外面には刻み目が観察できる。82は底部の破片である。僅かに上げ底風となる平底である。内面が若干盛り上がっている。

4. グリッド出土遺物

土器（第101～111図，図版54～58）

本遺跡からは縄文早期・中期・後期・晩期の土器がそれぞれ出土している。文様・胎土・施文技法等の諸特徴から分類し、説明を加える。

第I群土器（1～90）

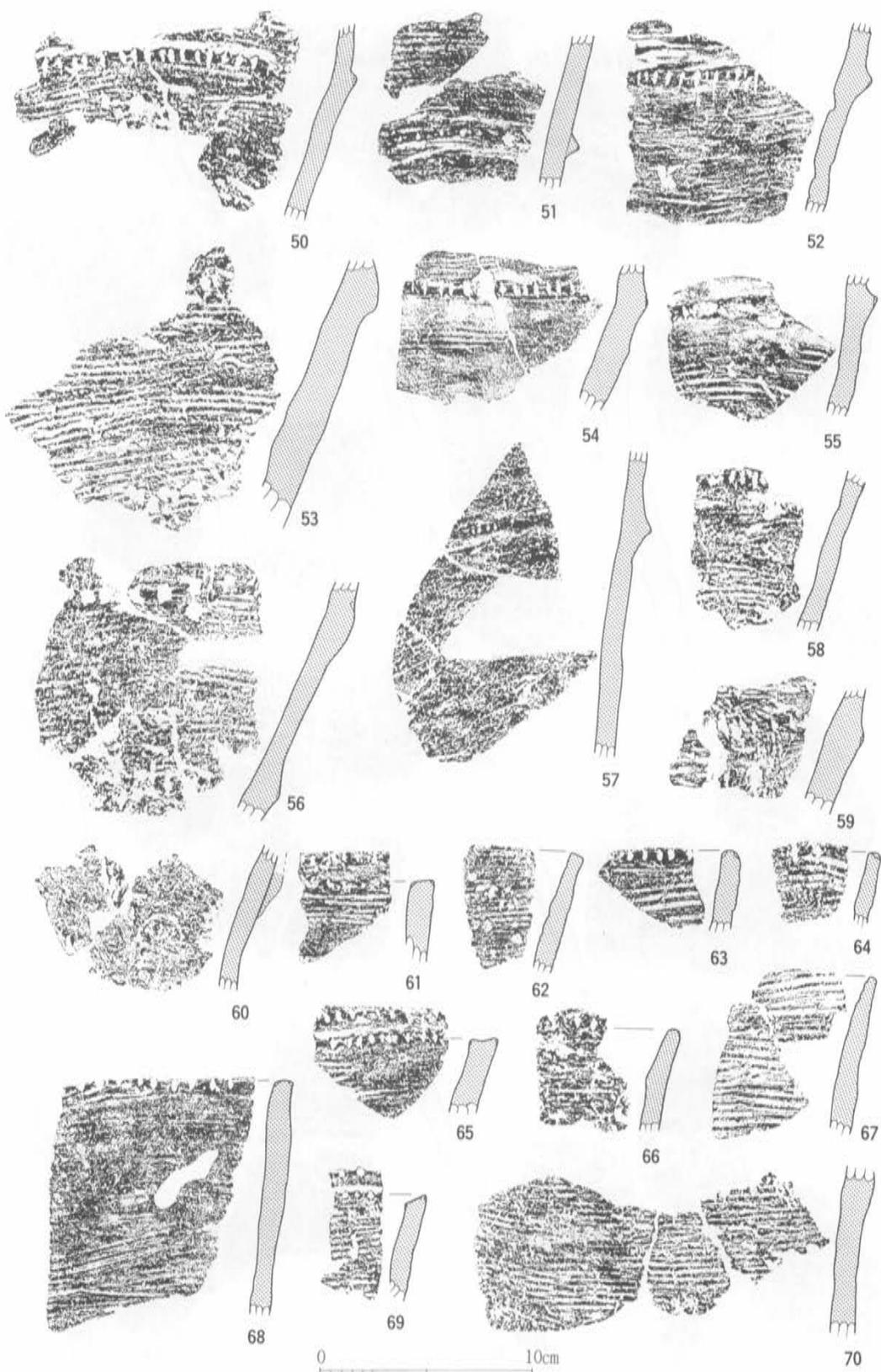
早期の土器を一括する。擦糸文系土器を第1類・沈線文系土器を第2類・条痕文系土器を第3類とし、以下説明を加える。

第1類（1～17）

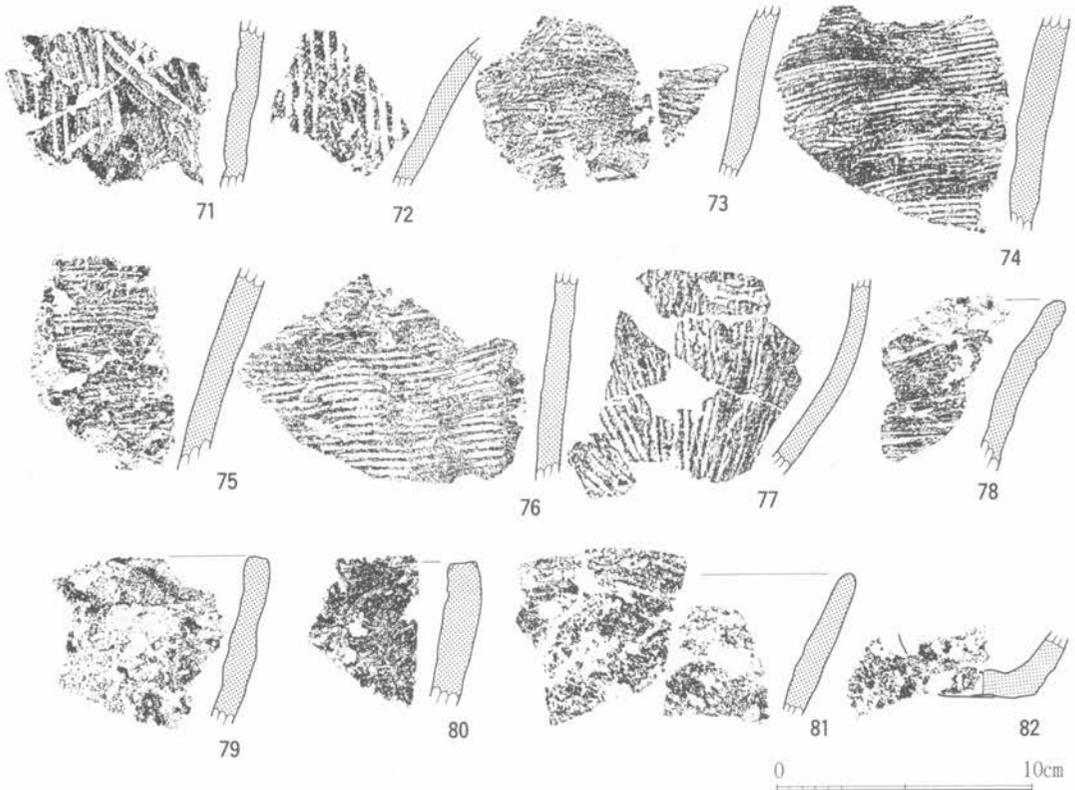
擦糸文系土器である。1～7は同一個体と考えられ、口縁部直下から縦位の縄文を施すものである。口唇部形態はやや内肥する丸頭状を呈し、器形は胴部でやや膨らみを持つ深鉢形土器となろう。原体は単節縄文（LR）である。8～17は擦糸文を施すものである。8～10は口縁部の破片で、口唇部形態は丸頭状を呈する。文様施文技法は口縁部直下に擦糸の原体を圧痕し、



第98图 009号竖穴状遺構(38~49)出土土器1)



第99图 009号竖穴状遺構(50~70)出土土器(2)



第100図 009号竪穴状遺構(71~82)出土土器3)

それ以下に縦位・斜位の捺糸文を施文する。11~17は胴部の破片で、縦位・斜位の捺糸文が観察できる。これらは夏島式土器と考えられる。

第2類 (18)

沈線文系土器である。18は田戸下層式土器の胴部破片と考えられ、横位の太沈線文が観察できる。

第3類 (19~90)

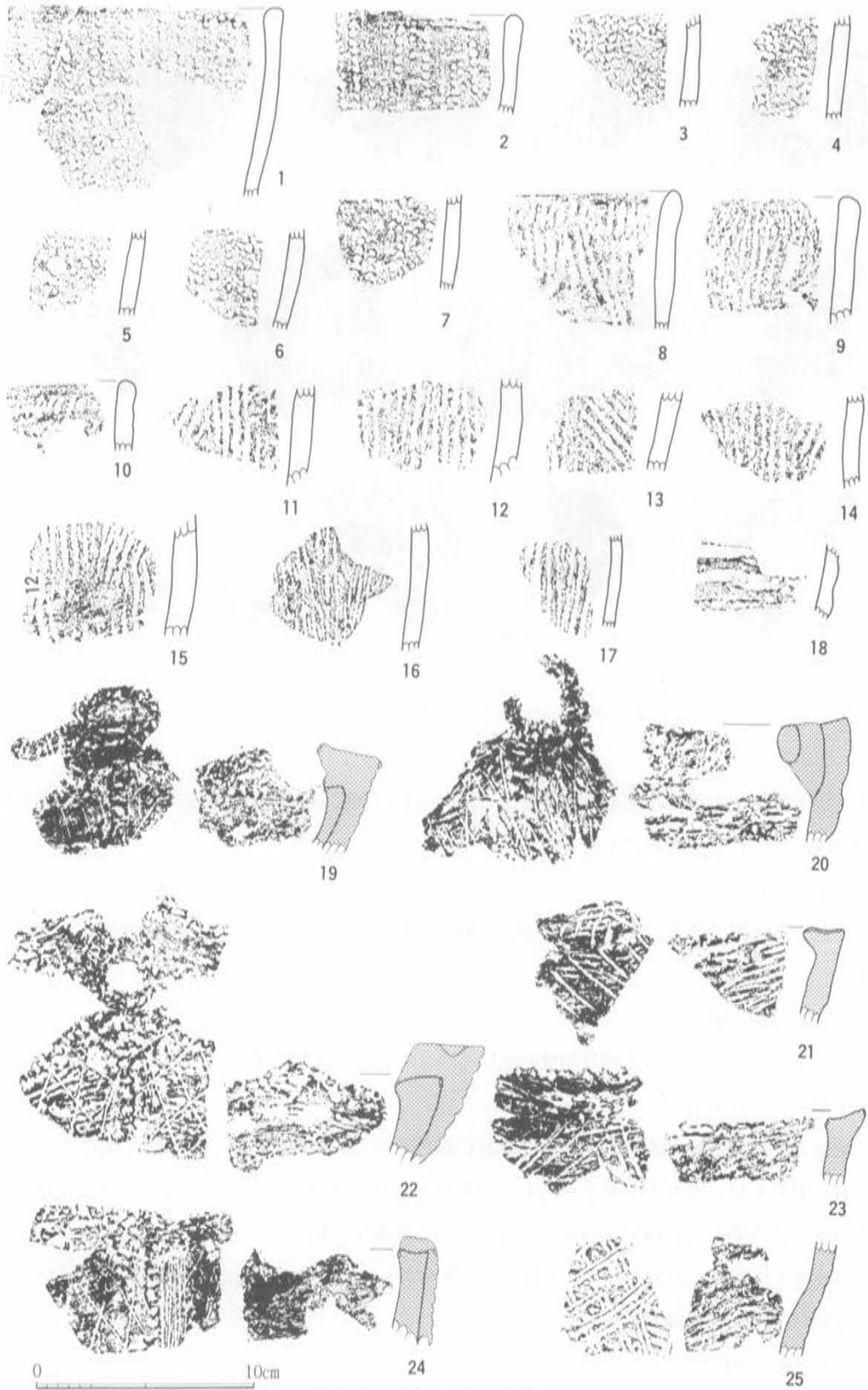
条痕文系土器である。文様等の諸特徴からいくつかに分類できる。

1種 (19~32・41)

沈線文を主文様とするものである。波状口縁部を呈し、口縁部直下の隆帯下で屈曲する鉢形土器の器形を呈するものと考えられる。口唇部内外面には刻み目が施される。文様は口縁部とタガ状の隆帯間に浅い横位の条痕文を地文として沈線文が施されるものである。沈線文には斜位の沈線・格子のもの・蛇行する沈線のもの等がある。25・26の沈線は半截竹管を用いている。31は蛇行する太い沈線文が施される。

2種 (33~36)

刺突文を主文様とするものである。器形を窺うことのできるものはない。胎土には植物繊維



第101図 グリッド出土土器1)

を多量に含み、脆い土器である。33は口縁部直下に結節させた刺突文を巡らし、それ以下に幾何学文を作出するものと考えられる。34・35は口縁部直下に2条の連続刺突文が見られる。36は刺突文を多用し幾何学的な文様を作出するものである。

3種 (37～40, 42～69)

口縁部から垂下する隆帯及び、口縁部下に施されるタガ状の隆帯を主文様とするものである。37～40, 43～53は口縁部から垂下する隆帯及びタガ状の隆帯が施されるものである。隆帯上には、刻み目や刺突文を施すものと何も施されないものがある。42の隆帯は口縁部に部分的につけられるものであろう。45の隆帯は「し」の字状となる。54～69はタガ状の隆帯が施されるものである。隆帯上は刻み目や刺突文が施されるものが大部分である。68は半截竹管を押しつけた刻み目である。

4種 (70～74)

本来的には3種や5種の中に分類すべきものと考えられるが、施文具が貝殻ということで独立させて説明をする。70・71は口唇部に貝殻側面圧痕文を施すものである。72・73は口縁部直下に貝殻側面圧痕文による文様を施すものである。74は胴部のタガ状の隆帯上に貝殻背圧痕文を施す。

5種 (75～90)

条痕文のみによる文様が施されるものである。75～83は口縁部の破片で、口唇部形態が角頭状のものが多く見られる。条痕の施文方向は横位・斜位である。84～87は胴部の破片で、表裏面に横位・斜位・縦位の条痕文が観察できる。88～90は底部の破片である。底部は平底となるものが大部分で、条痕文が底面にまで及ぶものもある。

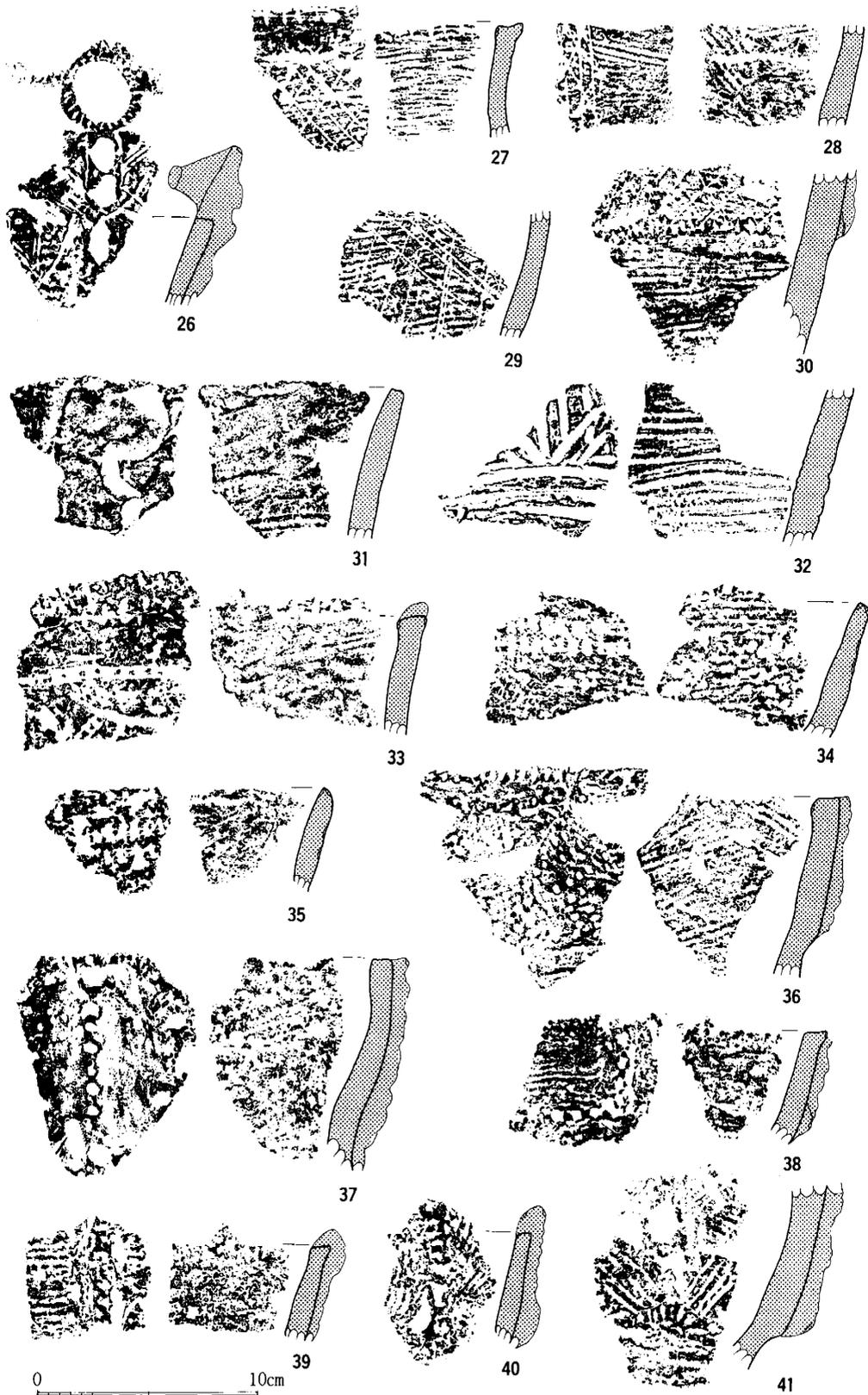
第II群土器 (91～107)

中期の土器を一括する。91～100は阿玉台式土器である。91は沈線文と角押文による渦巻き状の文様が施文される。92は隆帯による杵状文が施される。93～99は隆帯に沿って連続爪形文が施される。100は無文の浅鉢形土器と考えられ、胎土に多量の雲母を混入している。101～107は加曾利E II式土器と考えられる。101・102は口縁部がキャリパー状を呈し、口縁部直下に隆帯による渦巻き文を施す。103～107は連弧文を持つ土器である。地文として撚糸文を用い、横位の沈線で区画された文様帯に連弧文が施される。口縁部直下には刺突文が施される。

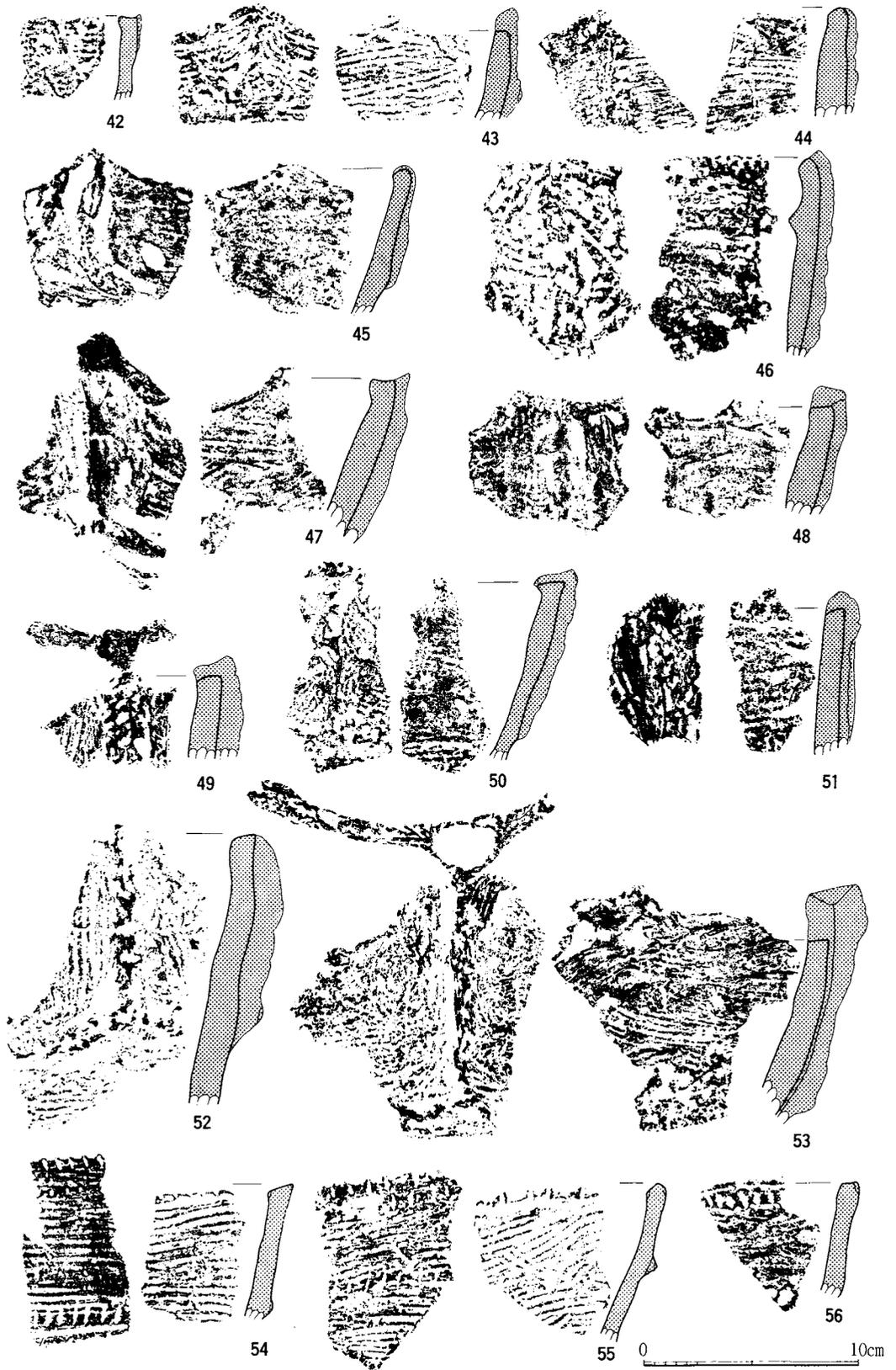
第III群土器 (108～182)

第1類 (108～111)

後期初頭の堀之内式土器である。108は口縁部直下に紐線文を巡らすものである。内面には沈線が施される。109・111は口縁部直下に紐線文、それ以下に沈線による幾何学文が施文される。110は口縁部直下に紐線文、それ以下に縄文を地文として無数の条線文が観察できる。これらはすべて、堀之内II式土器と考えられる。



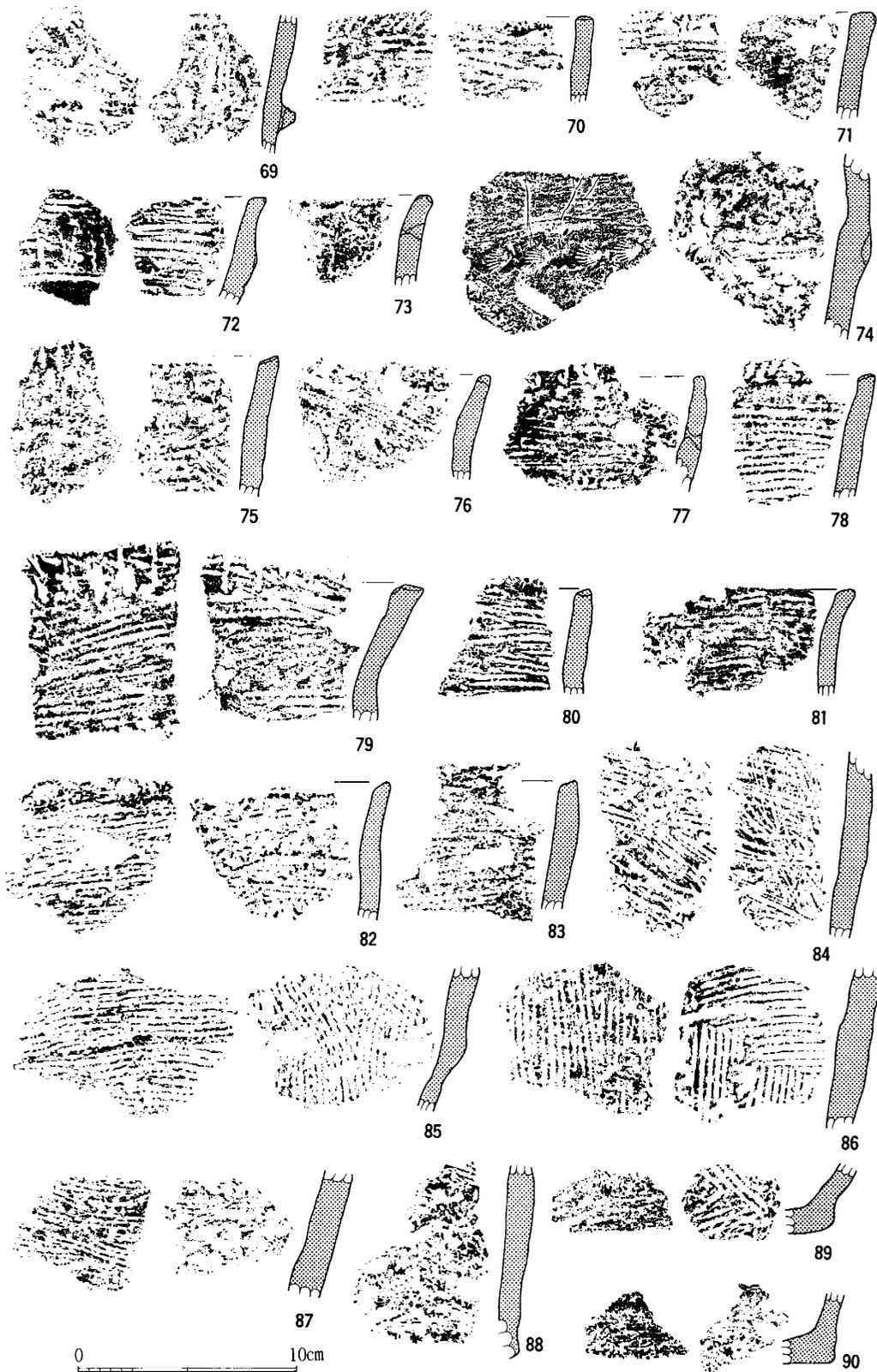
第102図 グリッド出土土器(2)



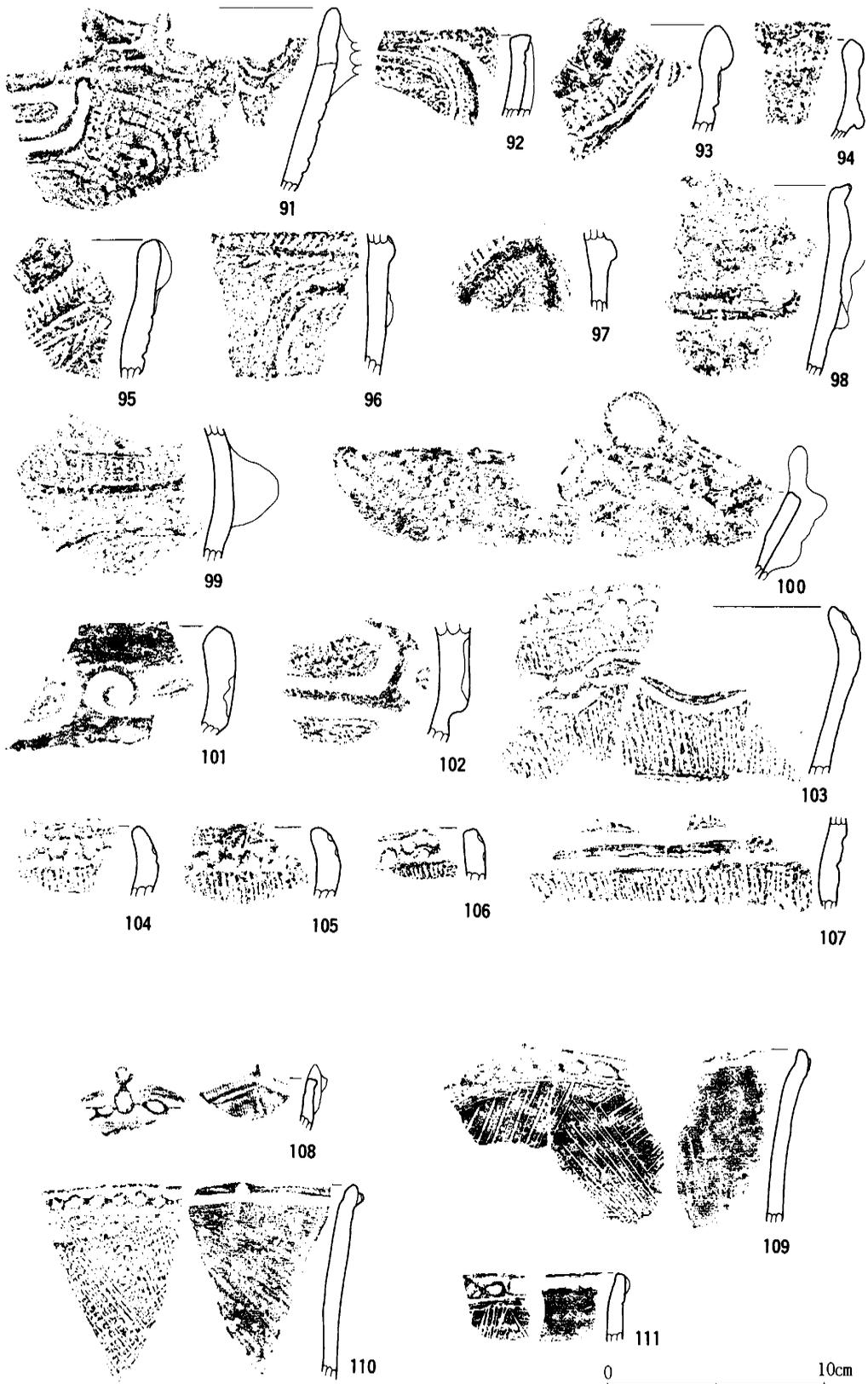
第103図 グリッド出土土器③



第104図 グリッド出土土器(4)



第105図 グリッド出土土器(5)



第106図 グリッド出土土器(6)

第2類 (112～159)

加曾利B式土器と考えられるものを一括する。

1種 (112～119)

112～118は鉢形土器と考えられるものである。口唇部形態が外削ぎ状を呈する。口縁部直下に数条の帯縄文を持つ土器群である。部分的に沈線が鍵の手状を呈する。115・116の内面には刺突文が観察できる。119は無文の浅鉢形土器と考えられる。内面に沈線文や刺突文を持つ。加曾利B1式土器の特徴を表す土器群である。

2種 (120～123, 135)

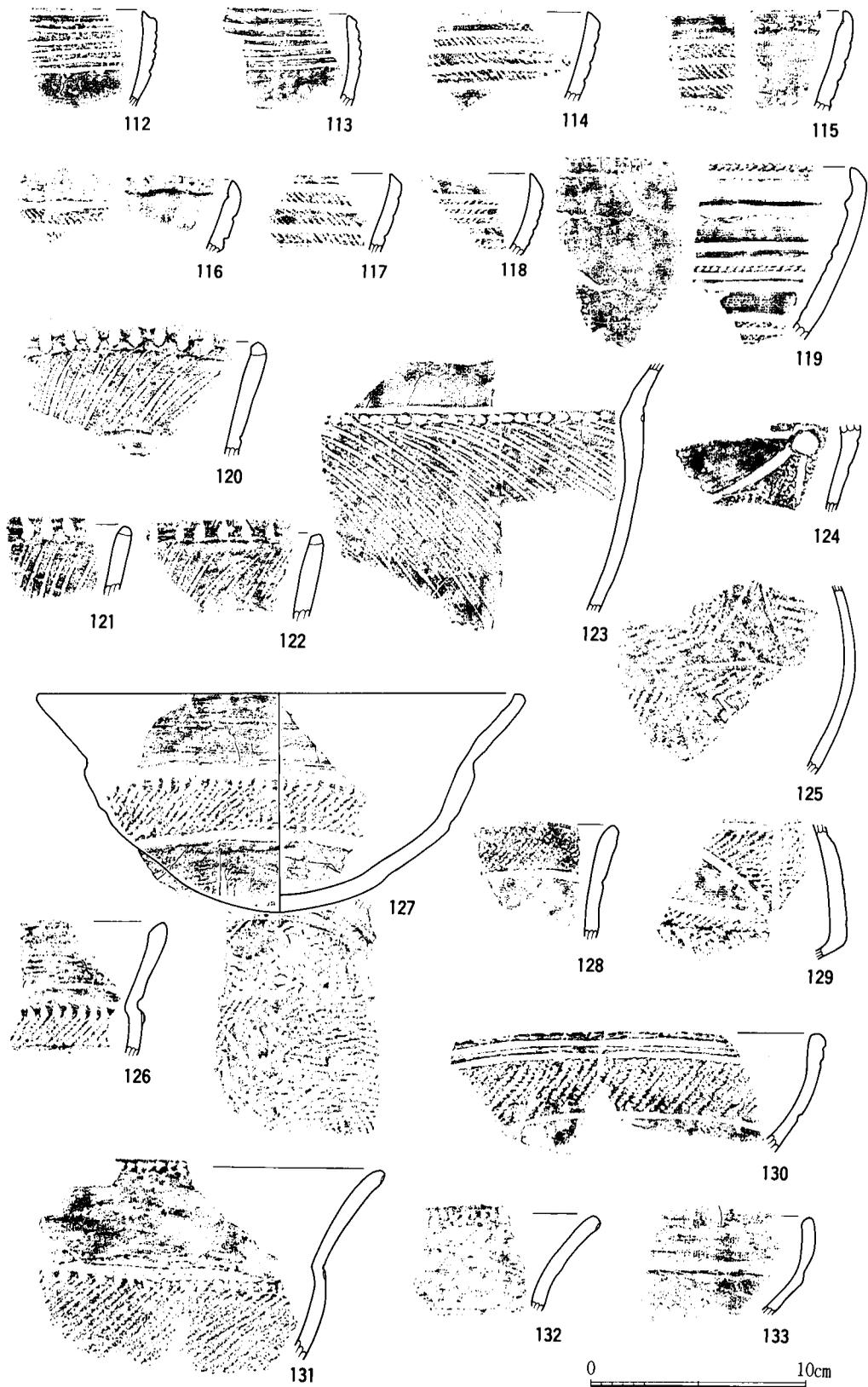
135は4単位の波状口縁部を呈し、胴部に帯縄文を持つ深鉢形土器である。帯縄文内は「い」字文により分帯される。120～123は同一個体と考えられる。口縁部が若干開き、頸部でくの字状に屈曲し、胴部で僅かな膨らみを持ちながら底部に至ると考えられる深鉢形土器である。口縁部直下には横位沈線で区画された文様帯が存在し、斜位の沈線文が施される。頸部の屈曲部には三角形の刺突文が巡らされ、それ以下の胴部には口縁部と逆方向の斜位沈線文が施される。これらは加曾利B2式土器と考えられよう。

3種 (124～134, 136)

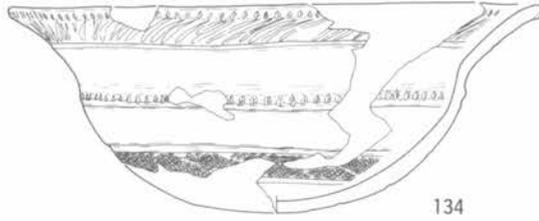
124・125は深鉢形土器と考えられ、沈線で区画された文様内に縄文が施され、それ以外の部分は磨消縄文が発達している。126・127, 134は口縁部が外反し、頸部でくの字状に屈曲する。胴部は、膨らみを持ち、胴部と底部との境がない丸底風の浅鉢形土器である。前者は口縁部直下が無文となり、屈曲部に刺突が見られる。文様は沈線が円形に巡らされ、その中に縄文が施されるものである。134は口唇部に刻み目を有し、口縁部直下の沈線で区画された文様帯内に斜位の沈線が施される。また、屈曲部にも刻み目が施される。胴部から底部にかけては同心円状の沈線を4条巡らし、2条の縄文帯を作出している。128・129は算盤玉状の器形を呈するもので、縦位に分帯された文様帯内に弧線文が施される。弧線文内は磨消縄文となる。130, 136は口縁部が内湾する鉢形土器である。130は口縁部直下に沈線で区画された縄文帯が巡らされる。136は口縁部から胴部にかけてすべて縄文が施され、底部には木葉痕が観察できる。131・132は同一個体と考えられる。口縁部が外反し、胴部で膨らみを持つ深鉢形土器あるいは台付土器となるものと思われる。口縁部直下は無文となり、胴部は縄文が施される。口唇部には刻み目が施され、胴部の屈曲部には刺突文が観察できる。133は無文の浅鉢形土器と考えられる。口縁部直下に稜を持つ。これらはすべて加曾利B3式土器と考えられる。

4種 (137～159)

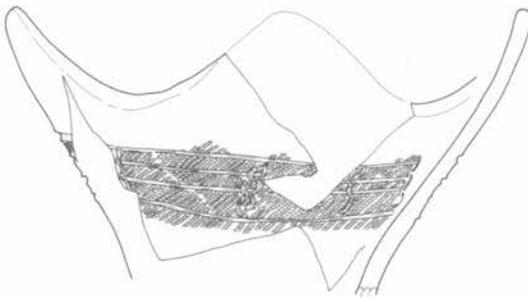
加曾利B式土器の粗製土器を一括する。137～143は、口縁部直下および胴部に紐線文が施され、胴部には縄文が施文されるものである。141は唯一器形の窺える資料である。口縁部が若干外反し、胴部で緩やかな膨らみを持ちながら底部に至ると考えられる深鉢形土器である。137は



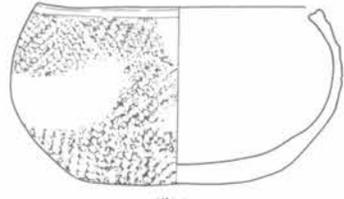
第107図 グリッド出土土器7)



134



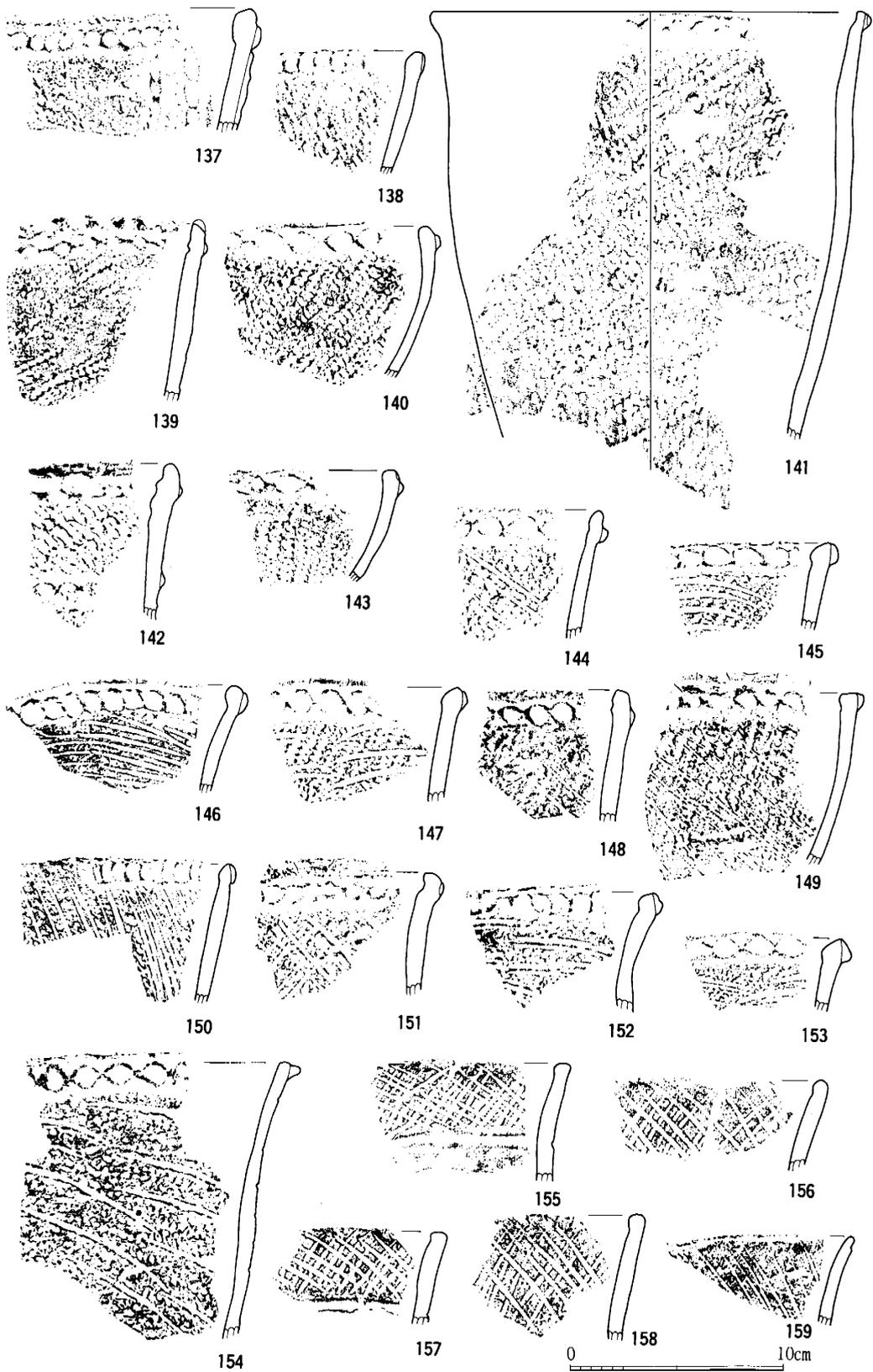
135



136



第108図 グリッド出土土器(8)



第109図 グリッド出土土器(9)

口縁部から垂下する2条の紐線文が認められる。144～154は口縁部直下に紐線文、それ以下の胴部に縄文を地文として斜位の沈線や条線を施すものである。151は沈線が交差し、格子状となる。155～159は格子状の沈線及び斜位沈線によるものである。155～157は口縁部直下の横位沈線で区画された文様帯内に格子状の沈線文を施すものである。

第3類 (160～182)

後期後半の安行系の土器を一括する。

1種 (160～168)

160～168は帯縄文系の土器である。沈線により区画された縄文帯と磨消縄文がなされた無文帯とが交互に文様として作出されるものである。160, 167の口縁部には瘤状の貼り付けがなされる。安行1式土器と考えられる。

2種 (169～174)

170・171, 173・174は口縁部が波状を呈し、胴部で膨らみを持つ深鉢形土器と考えられる。波頂部には瘤状の突起が付けられ、また波状口縁部に沿って帯縄文が施される。部分的に双指押瘤が付けられる。169, 172は口縁部が内湾し、胴部で膨らみを持つダルマ形の器形を呈する深鉢形土器である。口縁部に沿って帯縄文が巡らされ、部分的に双指押瘤が付けられる。安行2式土器と考えられる。

3種 (175～182)

175～177は口唇部形態が丸頭状を呈し、口縁部直下にハシゴ状の沈線が施される。胴部は地文に燃が粗く浅い縄文を施し、その上に蛇行する沈線文を描くものである。178は沈線と刺突文を交互に施文する。179～182は口唇部形態がやや内肥する丸頭状を呈する。口縁部直下に三角形の刺突文と1条の沈線文を巡らす。胴部は斜位の条線文が施される。これらは安行1式土器の粗製土器と考えられる。

第IV群土器 (183～197)

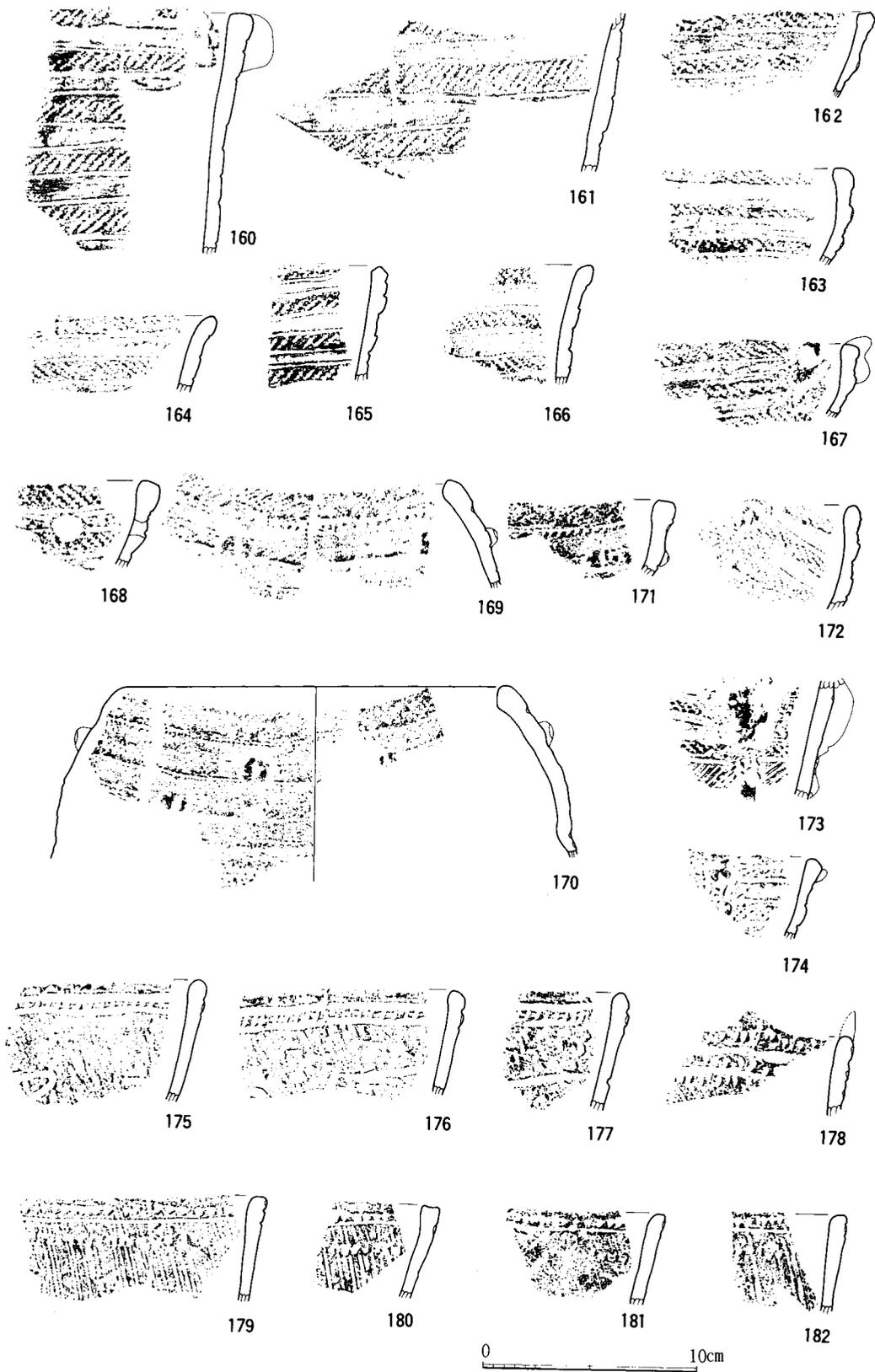
晩期の土器を一括する。

第1類 (183～190)

183～186は安行3 a式土器の深鉢形土器と考えられる。特徴として、瘤状の貼り付け部に沈線を数条施したり、双指押瘤が発達している。また、隆帯による三角形上には縄文が施される。187・188は沈線による三叉文が認められる。189・190は安行3 a式土器の粗製土器である。口縁部が内湾し、胴上半部で膨らみを持つ深鉢形土器で、口縁部直下には紐線文が巡らされる。胴部は縦位の沈線により区画され、斜位の条線文が施される。

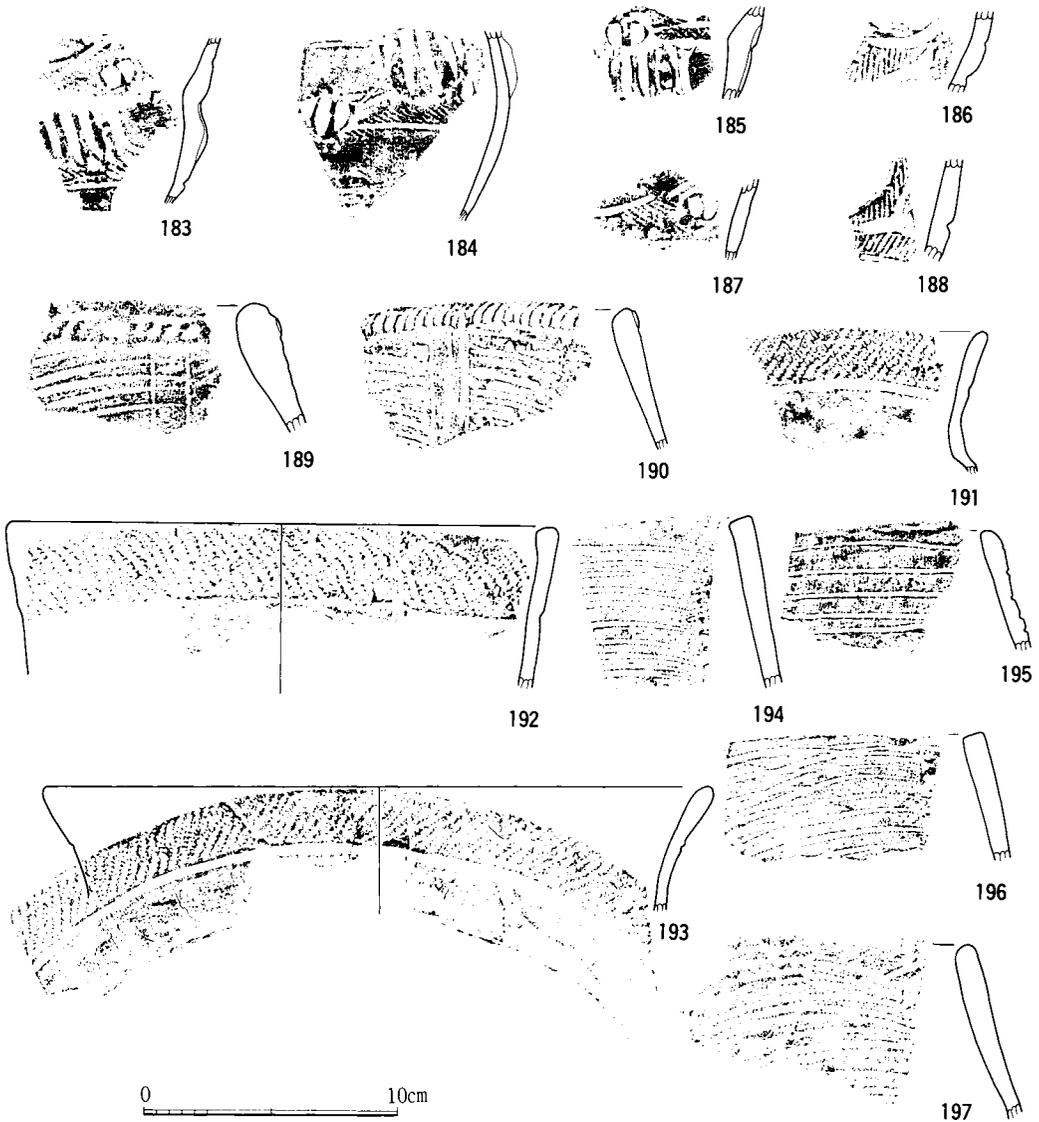
第2類 (191～197)

191～193は、口縁部に沈線により区画された縄文帯を持つ土器である。192は口縁部が直行するが、その他は外反する深鉢形土器と考えられる。194～197は口縁部が内湾し、胴上半部で膨



第110図 グリッド出土土器10

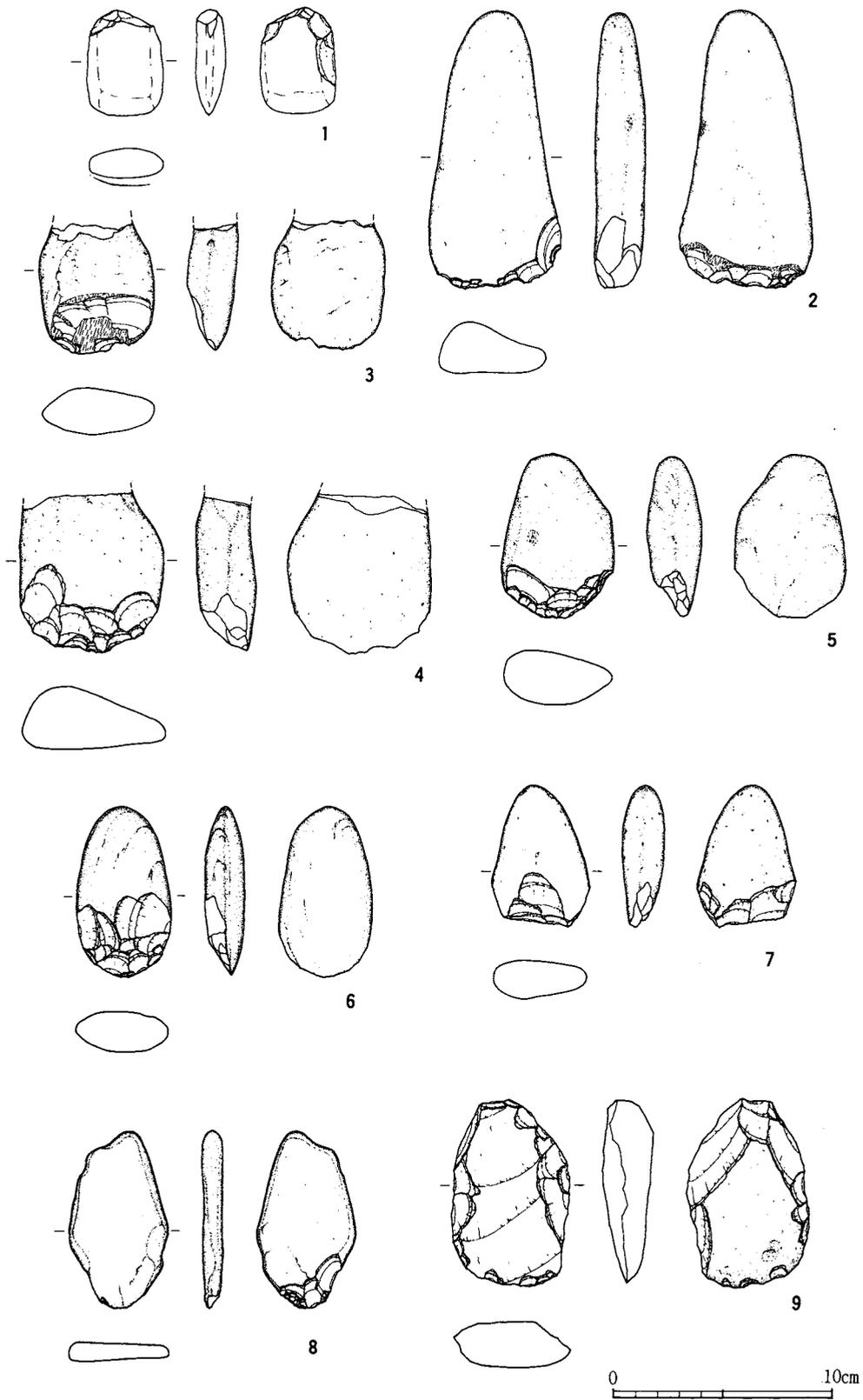
らむ器形を呈する深鉢形土器と思われる。文様は口縁部直下から弧線化する条線文を施すものである。195は横位の条線文が見られる。これらはまとまった資料とはいえないが、姥山II式土器と考えられるものであろう。



第111図 グリッド出土土器(1)

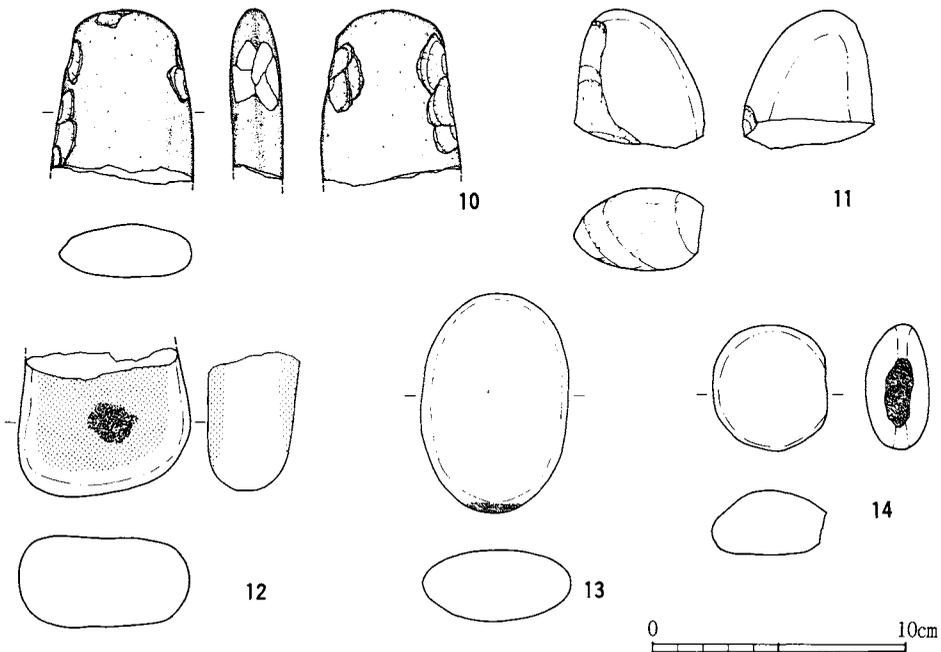
石器 (第112・113図, 図版53)

後世の時期の遺構覆土中に二次的に包含されていたものを含め、グリッド出土の縄文時代石器について説明する。これら石器の帰属時期は、その特徴から本遺跡の主体的な時期である早期後半条痕文系土器群の時期に比定されるものの他は、断定を差し控えたい。



第112図 グリッド出土石器(1)

1～3は磨製石斧に分類されるものである。1はホルンフェルス製のもので、表裏とも刃部が作出される。基部には形状を整える際の剝離がそのまま残る。長さ4.9cm、幅3.4cm、厚さ1.4cm、重量34.3gを測る。2・3は刃部片側のみ磨かれており、ともに磨く前の刃部形状を整える剝離が残る。2は緑泥片岩製のもので、扁平礫を素材としている。刃部の剝離は両面にみられるが、磨かれる刃部は片側のみである。刃部以外には特に調整はみられない。長さ12.7cm、幅6.1cm、厚さ2.3cm、重量225.0gを測る。3も2と同様に刃部形状を整えた後に片側のみを磨き製品にしているものである。やはり磨かれた刃部には剝離痕がみられる。蛇紋岩製で長さ5.8cm、幅6.1cm、厚さ2.3cm、重量98.0gを測る。これらは早期後半に比定される可能性が高いであろう。4～10は打製石斧に分類されるものである。4は砂岩製、5～7、9はホルンフェルス製、8は頁岩製、10は安山岩製のもので、9を除いてすべて礫素材のものである。4～9の刃部の調整はいずれも片面のみにとどまり、刃部縦断面の形状も急角度のものが多い。5は長さ7.3cm、幅5.2cm、厚さ2.4cm、重量117.0gを測る。6は長さ7.6cm、幅4.3cm、厚さ1.8cm、重量77.0gを測る。7は長さ6.3cm、幅4.5cm、厚さ1.7cm、重量64.0gを測る。8は長さ7.9cm、幅4.6cm、厚さ0.9cm、重量49.8gを測る。9は長さ8.4cm、幅5.5cm、厚さ2.1cm、重量110.8gを測る。4～8は1～3と同時期に比定されようが、9・10は4～8と比較して、やや時期的に異なる可能性がある。11は砂岩製のスタンプ形石器で、棒状礫を切断したものである。特に切断面には擦痕や敲打痕はみられない。側縁にみられる剝離は、切断後に加えられたものである。長さ5.4cm、幅5.2cm、厚さ3.2cm、重量90.3gを測る。早期後半以前に帰属すると思われる。12～14は



第113図 グリッド出土石器(2)

磨石・凹石・敲石の類である。12は花崗岩製の磨石・凹石・敲石で、両面に擦痕、敲打痕がみられる。また片面には敲打による浅い凹みが認められる。13・14は砂岩製の敲石で、平面形は13が楕円形、14が円形を呈する。13は上下両端に顕著な敲打痕が認められる他に、使用痕はみられない。14は敲打痕は顕著ではないが、側縁全周に浅い敲打痕が認められ、図示した部分に敲打時の剝落痕が認められる。13は長さ8.5cm、幅5.9cm、厚さ2.75cm、重量208.1gを測る。14は長さ4.9cm、幅(4.5)cm、厚さ2.5cm、重量91.0gを測る。

第2節 古墳時代

1. 古墳

本遺跡の立地する鯨尾状に張り出した幅250m、奥行き100m程の台地状には10数基の円墳群が所在している。前方後円墳は含まれず、しかも付近の台地上には現在までのところ古墳の存在が認められていない。今回の調査では路線内にかかる5基の円墳を調査した。

001号墳（第114・115図、図版39）

調査区北東端、B2区に所在する。北東側と北西側が傾斜面となるため、細い尾根上に位置するような感を受ける。調査前の見かけの墳丘は、東西15m、南北14m、高さ1.3m程を測り、遺存良好であるが、墳丘がやや低くなっている。墳頂部の最高点は標高40.7mを示す。

墳丘 墳丘は、径10.5m、厚さ0.1m程の旧表土上に盛土を積んで形成される。ただ、旧表土自体攪乱が激しく、均一ではない。基本的な積み方は、成形した旧表土の周縁に堤状に黒色土を主体とした土を盛り、内側にローム粒及びロームブロックを含んだ盛土を内傾気味に積み、さらに同様の土で封土を形成する手法を採っているようである。

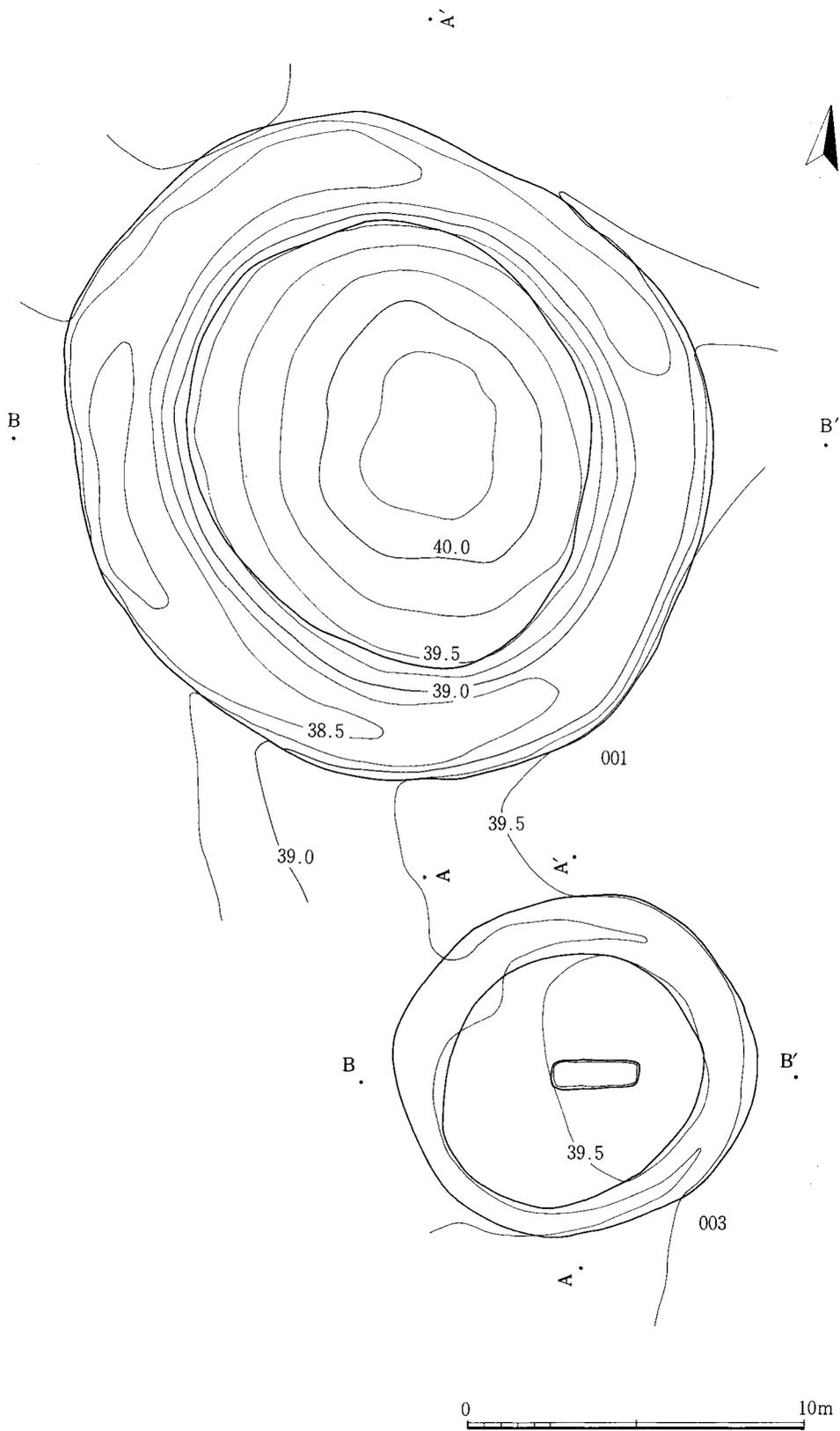
周溝 南北方向にやや長い円形を呈し、内径の規模は、長径13.3m、短径11.7mを測る。周溝幅は北側が最も狭く2.4mを測り、他は3.5mとほぼ一定である。北西方向にやや傾斜する面に位置するため、周溝の確認面は南東側が50cm程高くなっている。深さは確認面から60cm前後と平均しているが、溝底面は西に向けて低くなり、比高差は最大70cm程となる。断面は浅いU字形を呈し、北側は急斜面に面するため外側の上場が不明瞭となっている。周溝の覆土はローム粒を含む暗褐色土1層である。

主体部 検出されなかったが、鉄鏃が盛土内から出土していることより、本来存在していた可能性が強い。

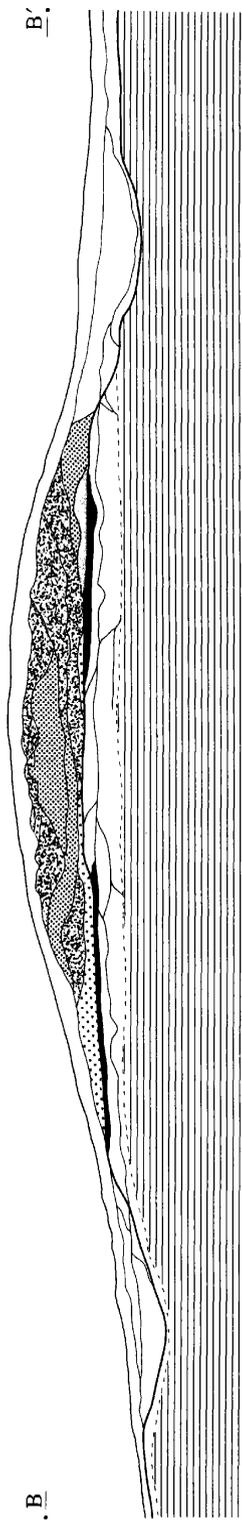
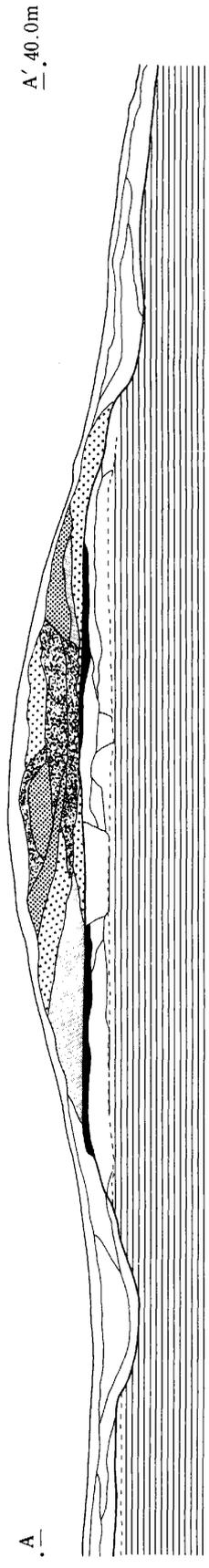
002号墳（第116～118図、図版40～42）

A5・A6・B5・B6区にまたがって所在し、調査区南東端の台地縁辺部（緩斜面）に立地する。比較的遺存の良好な円墳で、調査前の見かけの墳丘規模は、南北16m、東西14m、高さ1.8mを測る。墳頂部の最高点は標高40.6mを示す。

墳丘 墳丘は、旧表土を径11～12mの円形に整形した上に構築される。本墳の立地が傾斜面に



第114图 001·003号墳 墳丘



- 明褐色土
- ロームブロック土
- 暗褐色土
- 黒褐色土
- 旧表土

第115図 001号墳 墳丘断面図

当たるため、旧表土自体も東から西に傾斜しており、東端と西端では70cm程の標高差が存在する。盛土の積み方は001号墳とやや異なり、周縁部が若干高くなるもののほぼ水平積みに近い手法を採っている。最下層はローム粒を多く含む黄褐色土で、旧表土の整形の際に掘削された新时期テフラを含む土を利用した可能性が強い。さらに上層に移行するに従いロームブロックの混入が多くなることから、掘削が深く及んだことが窺える。おそらく周溝掘削時のものであろう。主体部はロームブロック土中に掘り込まれる。

周溝 台地の傾斜方向である西側に向かってやや突出する略円形を呈するが、周溝の内径は南北・東西とも14mを測る。幅は西側に向けて徐々に狭くなり、東側で最大4.1m、北西側で最小2.8m程である。深さも同様に西側に向けて深くなっており、旧表土面からの深さは南側で0.8m、西側で1.3m程を測る。さらに、周溝の確認面が東と西では2m程の比高差があるため、西側の周溝外場が不明瞭である。断面は基本的にU字形を呈する。覆土はほぼ黒色土1層である。

主体部 主体部は周溝のプランからするとやや東寄りであるが、墳丘のほぼ中央に2基検出された。2層の黄褐色土中に掘り込まれ、旧表土からの高さは、北側の第1主体部が0.7m、南側の第2主体部が0.8mである。第1主体部は明瞭な掘り込みが確認されず、遺物が検出された段階でその存在を想定した。ロームブロックをほとんど含まない褐色土の範囲により、長軸2.5m、短軸0.8mを測る隅丸長方形のプランを推定した。その他の詳細な状況は不明であるが、おそらく木棺直葬となろう。本主体部内からの出土遺物は鉄鏃のみで、東壁から0.7m程離れた位置に纏まって検出された。第2主体部も第1主体部同様、遺物の存在より想定された主体部である。幅0.8m前後となろう。遺物の出土は少ないが、ほぼ中央の南側寄りに直刀が1振り検出された。鋒を西側、刃部を南側に向けた状態であり、東側に頭を向けた埋葬状況が考えられる。また、直刀の南側に鉄鏃が認められるが、その出土状況より移動した可能性が強い。

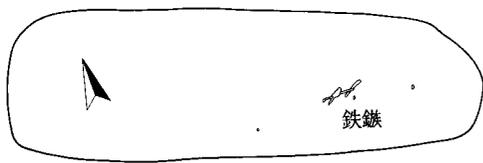
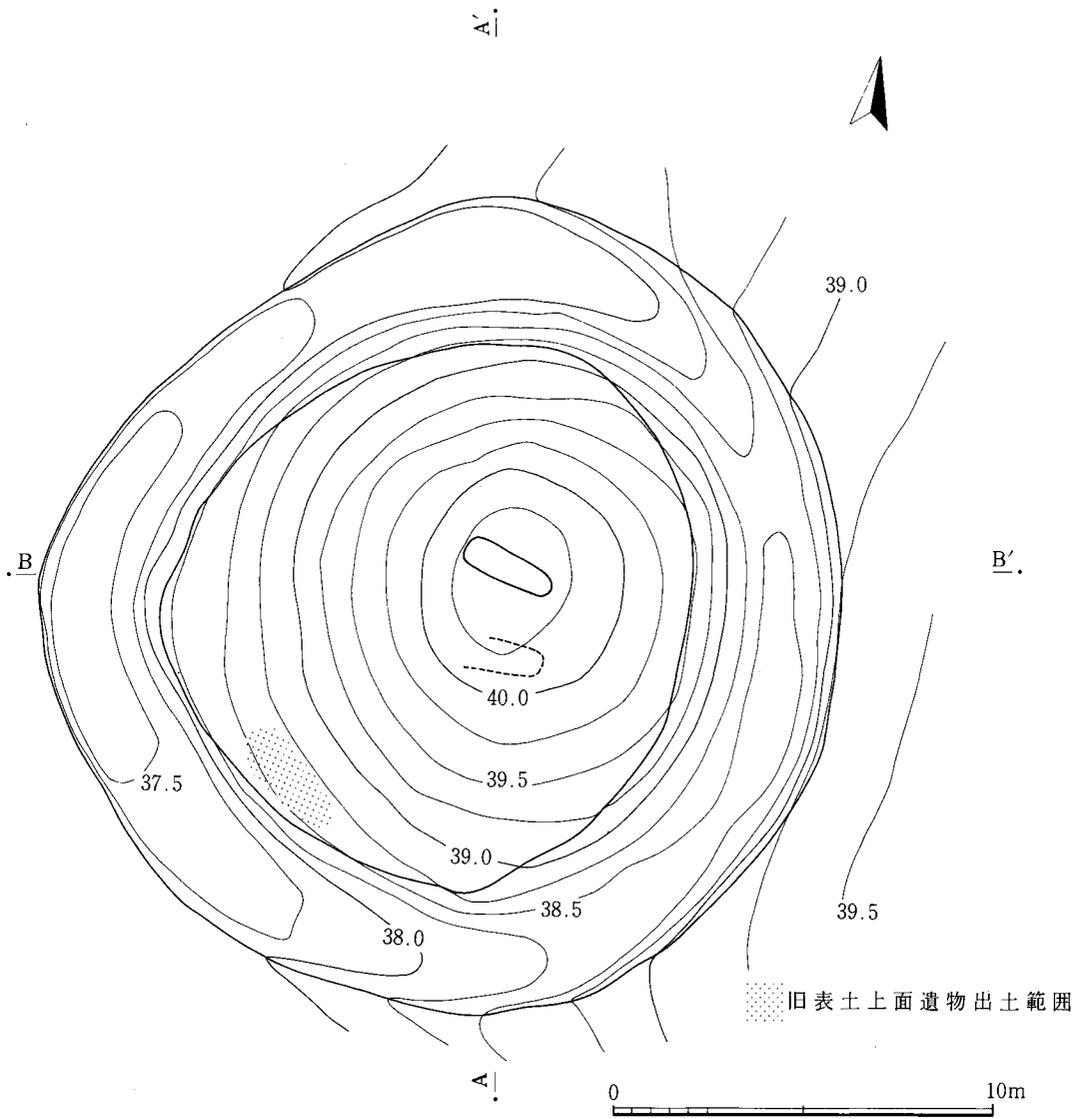
旧表土上面の遺物 南西側周溝の若干内側で、石製模造品（剣形・有孔円板）、土師器等の遺物が一括して検出された。量的にはあまり多くないが、本古墳築造にともなう祭祀的な遺物として考えられよう。

003号墳（第114・119・120図、図版42・43）

B2・B3区にまたがって所在する。東側で斜面に面し、001号墳の南東4m程に位置する。墳丘の遺存は不良で、僅かな高まりを確認したにすぎず、旧表土の存在も認められなかった。

墳丘 明確な盛土は存在せず、新时期テフラの上にあるべき旧表土も認められない。後世の削平を受けたものと思われるが、他の古墳の遺存状況を考えると、当初の盛土自体もそれほど高くなかったようである。

周溝 小規模な周溝で、南西方向にやや突出するため楕円形状を呈する。内側の長径8.0m、短径6.9mを測る。周溝の幅は南西側で急激に狭くなり、最大1.8m、最小0.8m程で、深さは30cm前後である。覆土は黒褐色土1層で、ローム粒をほとんど含まない。



第1主体部



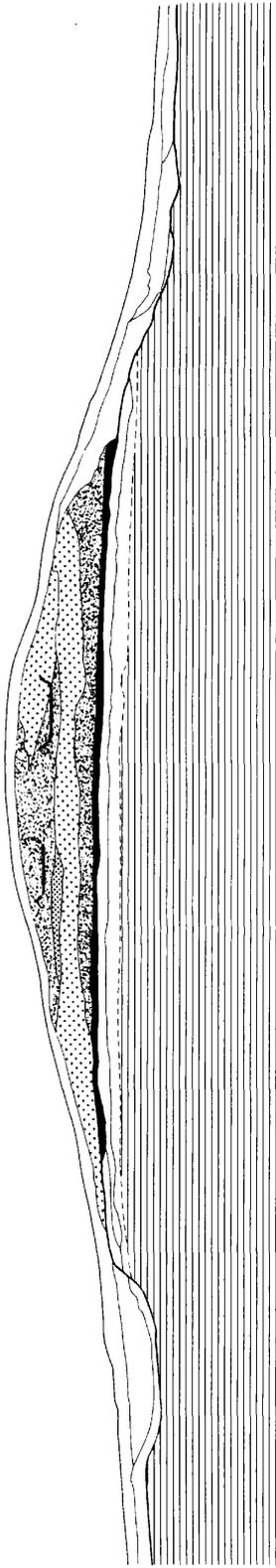
第2主体部



第116图 002号墳 墳丘・主体部

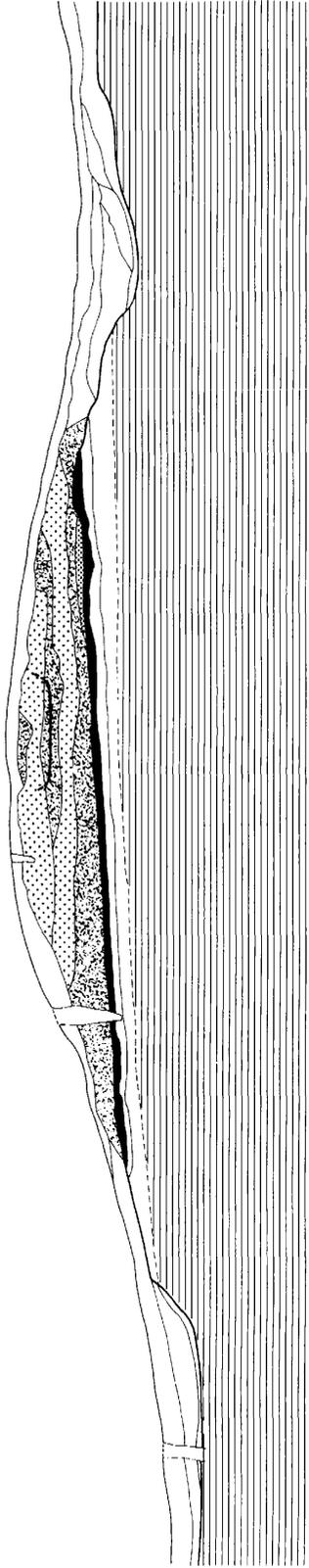
A.

A' 41.0m



B.

B'.



明褐色土

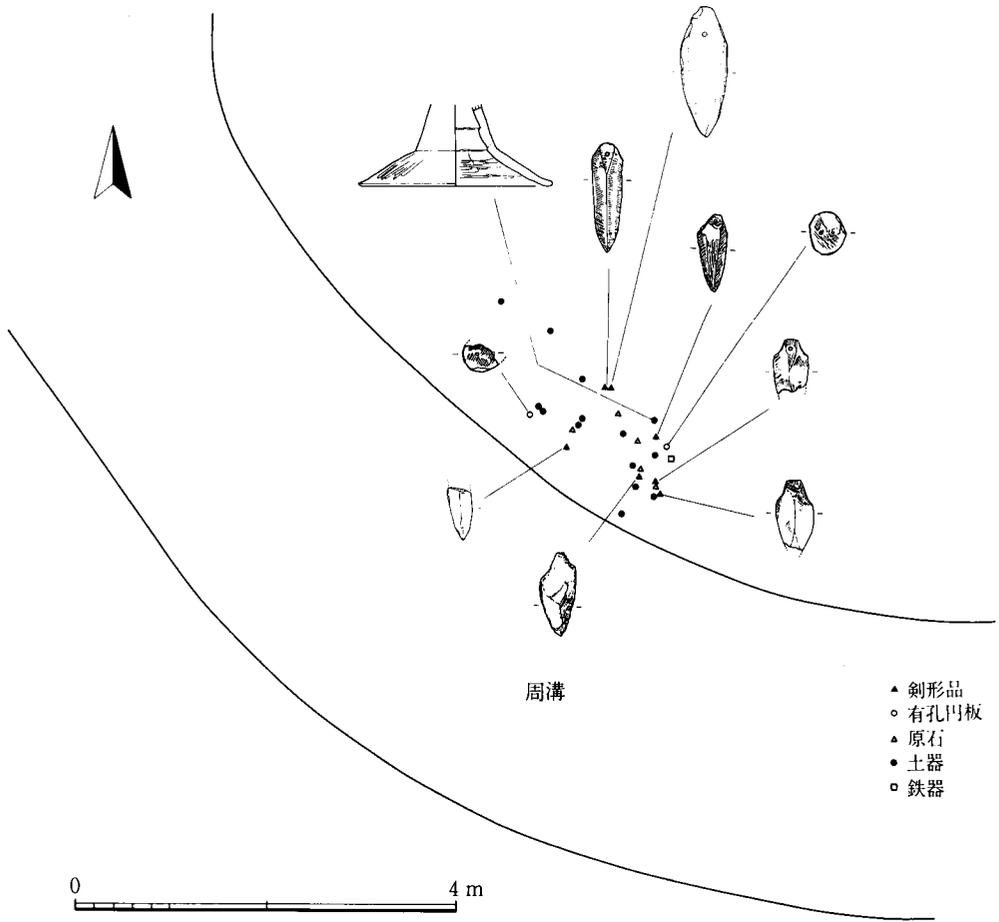
黄褐色土(ローム粒・
ロームアブロック主体)

暗褐色土

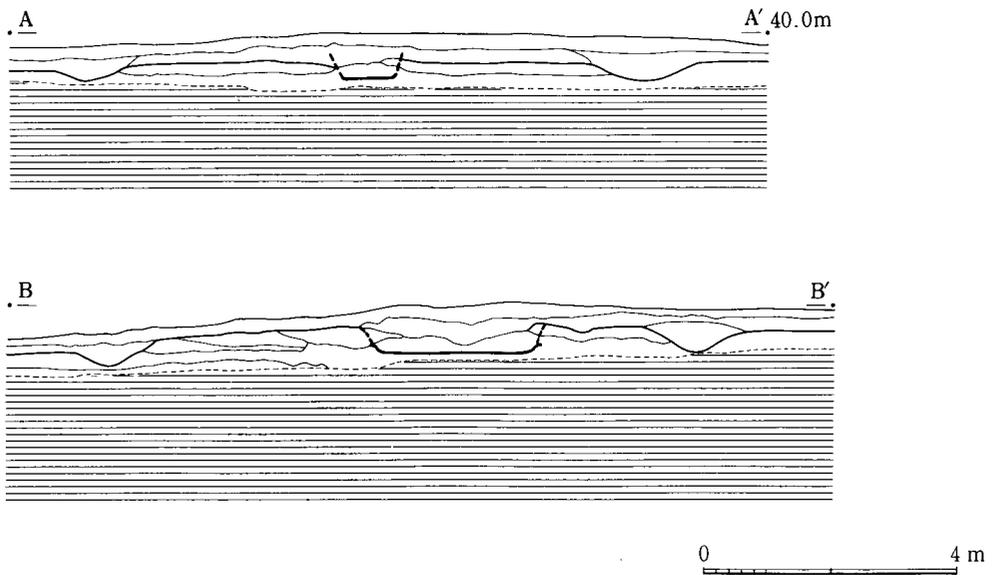
旧表土



第117図 002号墳 墳丘断面図

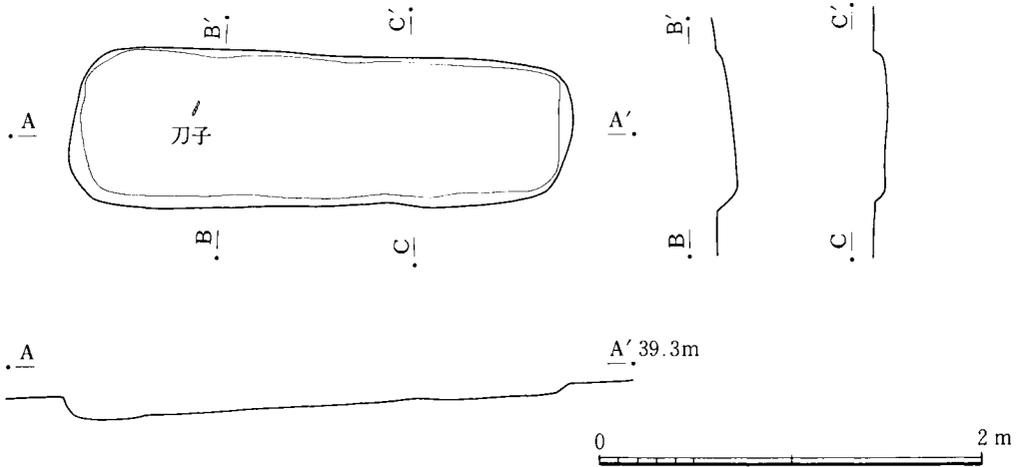


第118图 002号墳旧表土上面遺物出土状況



第119图 003号墳 墳丘断面図

主体部 中央やや東側に位置する。掘り込み面は確定できなかったが、遺存状況より旧表土上面、あるいは若干上部からの掘り込みと考えられる。検出面での規模は、長軸2.7m、短軸は、西側で83cm、東側で67cmと西側がやや狭くなる。確認面からの深さは5～10cmで西側が若干深い。木棺直葬と思われる。遺物の出土は少なく、西側で刀子片を1点検出したのみである。



第120図 003号墳主体部

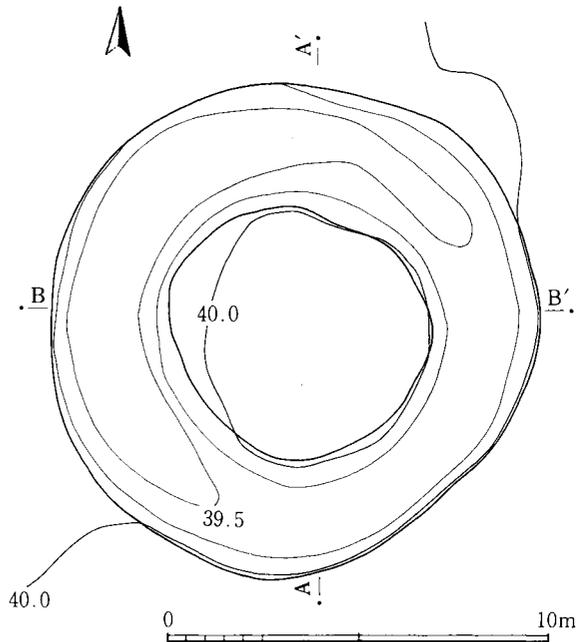
004号墳 (第121・122図, 図版43)

C4・C5区, 008号住居跡の北東コーナーに隣接する。003号古墳同様小規模で、僅かな高まりを確認したにすぎない。

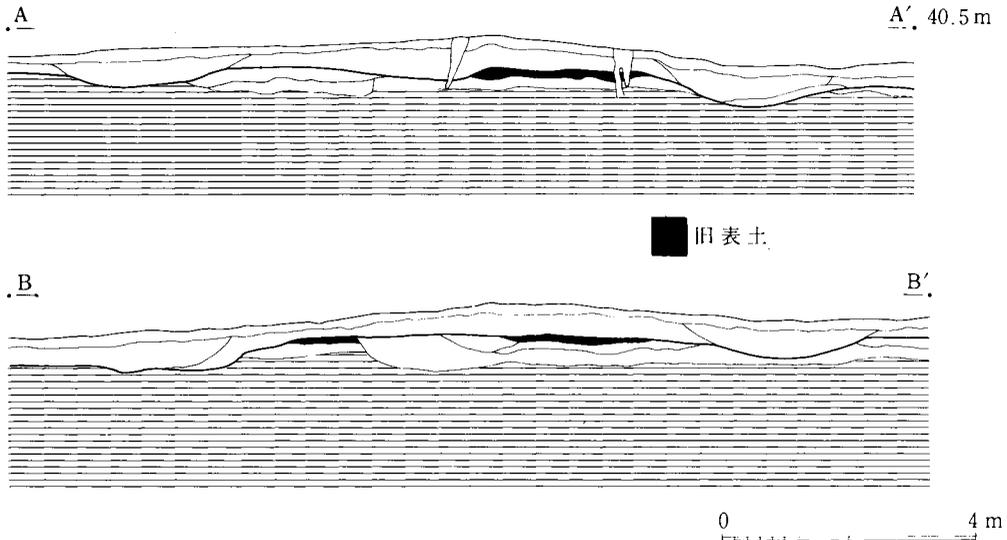
墳丘 墳丘自体の遺存は不良で、明確に盛土として捉えられるものはなかったが、旧表土は確認できた。径6.5m程の円形を呈し、厚さ10cm程を測る。部分的に攪乱が認められる。

周溝 南東側がやや直線的になるが、ほぼ正円形を呈する。内径の規模は直径6.5m前後を測る。周溝の幅は南東方向に向かって狭くなり、北西側で最大3.5m、南東側で最小2.4mを測る。深さは0.2～0.4m程で、北東方向に向けて徐々に深くなる。覆土は黒褐色土1層である。

主体部 確認されなかった。



第121図 004号墳 墳丘



第122図 004号墳 墳丘断面図

005号墳 (第123～126図, 図版44～47)

調査区北東端, D2・D3・E2・E3区にまたがって所在する。東側 $\frac{1}{3}$ 程が調査区域外となるが, 墳丘の遺存は比較的良好で, 調査前の見かけの墳丘規模は, 東西・南北とも径20m, 高さ2.1mを測る。墳頂部の最高点は標高42.1mである。第90図の墳丘実測図で明らかのように, 墳頂部の平坦面はほとんどなく, 周溝の落ち込みも観察された。さらに, 周溝は南西側で途切れ, ブリッジ状のテラスの存在も確認された。

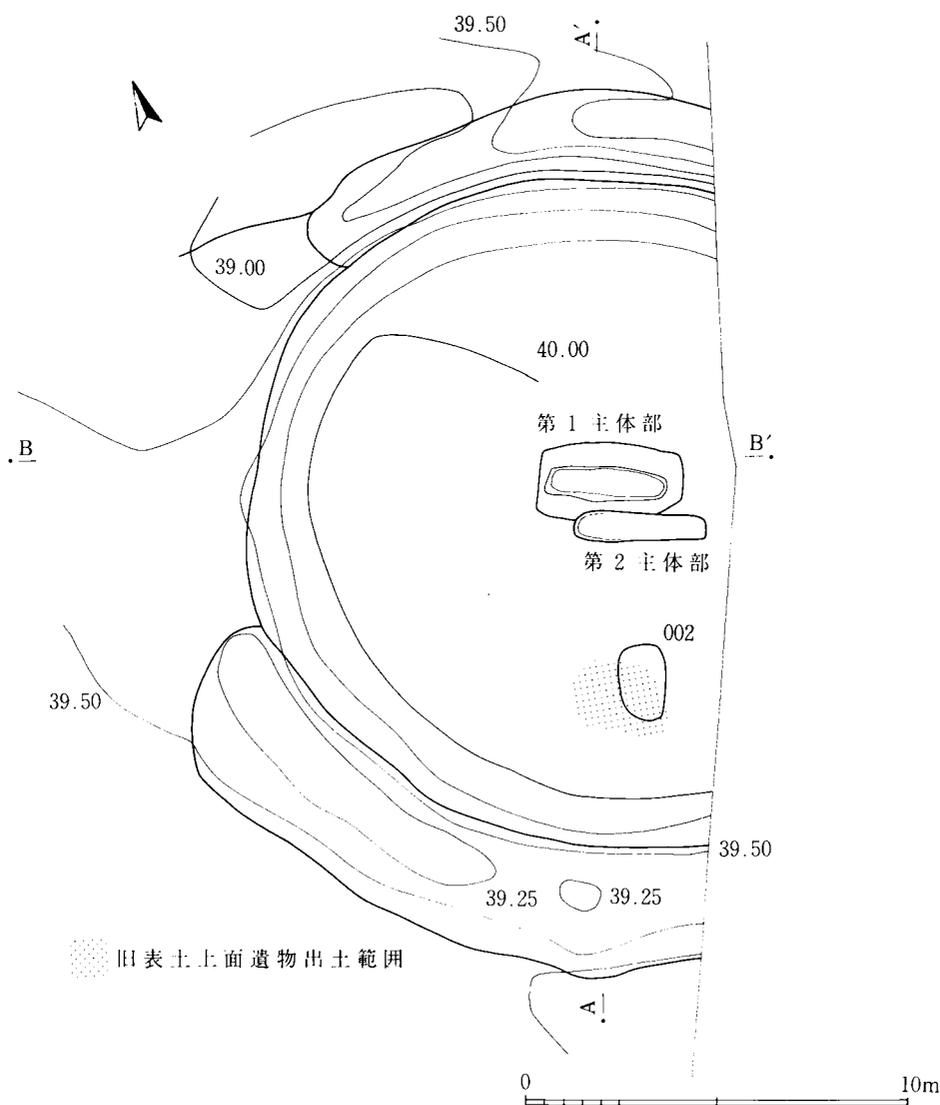
墳丘 墳丘は, 旧表土を径12.3m程に整形した上に形成される。旧表土は厚さ7cm前後と薄く, ほぼ平坦であるが, 北側の斜面側ではやや低くなる。盛土は, まず旧表土上面に馬蹄形状を呈する高さ0.5～0.7m程の土堤が積まれる。この部分の層にはローム粒子がほとんど含まれていないことより, 旧表土整形の際に出た土を利用したことが窺える。また, 北西側の周溝が途切れる部分には土堤が築かれていないようであり, あるいは盛土の搬入口として残していたのかもしれない。次の段階には土堤内への充填が加えられる。この層も基本的には土堤と同様の土質であるが, 上面をロームブロックを主体とした層で覆い平坦面を形成する。この面は旧表土から0.9m程の高さで, 2基の主体部の設置面となる。主体部埋置後の封土は水平積みに近い状況である。ロームブロックを多く含む暗褐色土で封じ, その上に粘性の強い明褐色土が積まれ墳頂部が形成されるようである。

以上のように, 本古墳の墳丘構築は基本的に3段階に分けて行われたようであり, その行程は地山の整地及び周溝の掘削作業と並行するものであろう。

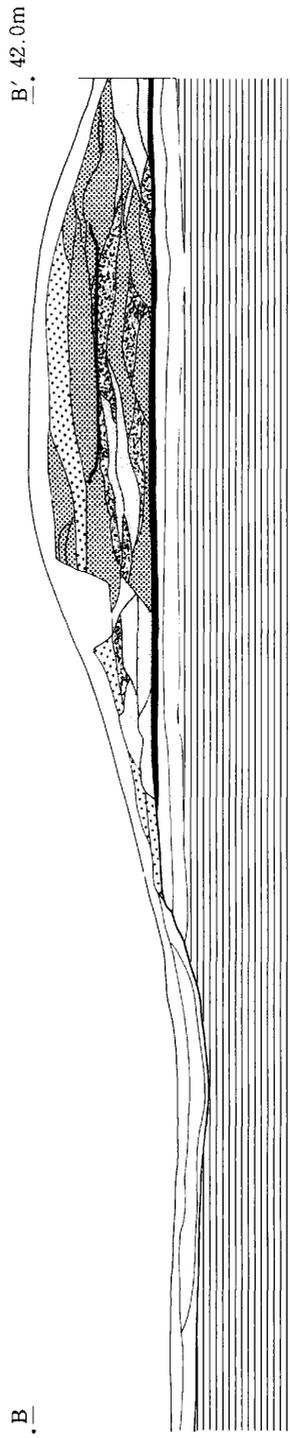
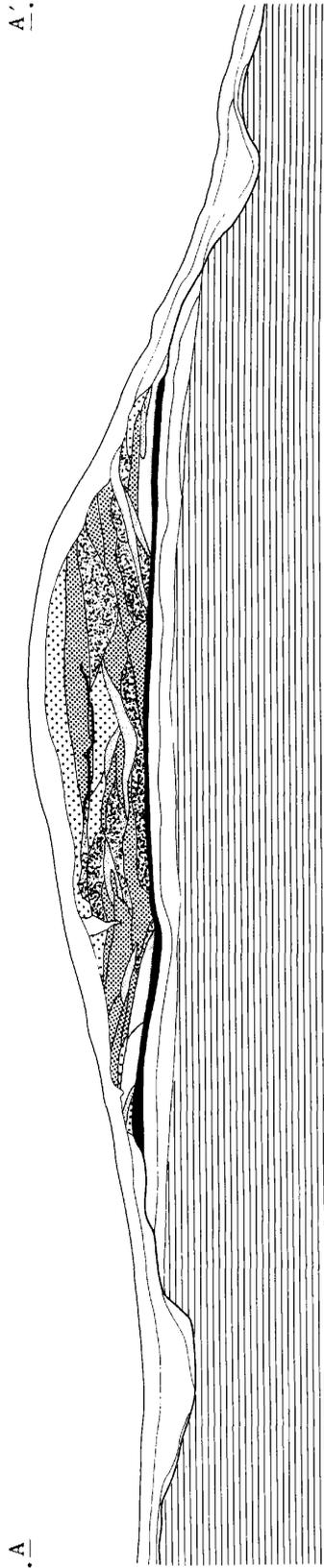
周溝 東側 $\frac{1}{3}$ 程が調査区域外となるため明確ではないが, 北西側が長さ10m程にわたって途切れる形態を呈するもので, いわゆるブリッジを有する周溝となろう。周溝の内径は, 確認され

た南北長で17.2mを測る。確認面の幅は、南側で3.2mを測るのに対し、北側では2.0m前後と狭くなる。北側が傾斜面にあるため、周溝の形状を明確に残すためには狭くならざるを得なかったのであろう。深さは東側に向けて徐々に深くなるが、特に北側で顕著である。また、北側と南側の底面には1m程の比高差が生じている。覆土は黒褐色土を主体とするが、底面近くにはローム粒を多く含む黄褐色土が薄く堆積する。

主体部 墳丘のほぼ中央に2基検出された。墳丘の項で述べたように旧表土から0.9m程上位の平坦面に設置される。第1主体部の南端で重複しており、明確な新旧関係を捉えることはできないが、南側の第2主体部の方が後出となる可能性が強い。北側の第1主体部は2段に掘り込まれ、木棺を埋葬施設とするものと思われる。主軸方向はN-67.5°-Wを指す。外側の掘り



第123図 005号墳旧表土面及び主体部位置図

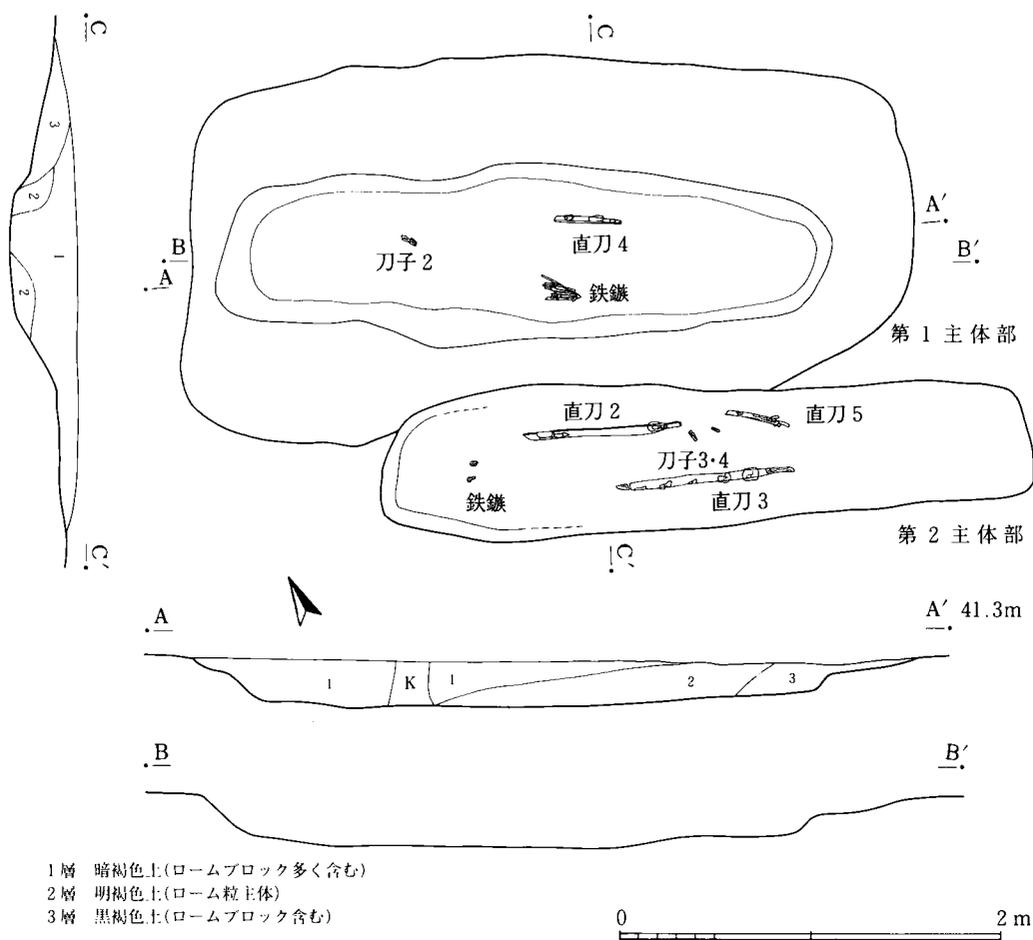


- 明褐色土
- ロームブロック土
- 暗褐色土
- 褐色土
- 黒色土
- 旧表土

第124図 005号墳 墳丘断面図

方は、長軸長3.8m、短軸長1.9mを測るやや不整な隅丸長方形を呈する。壁は斜位に立ち上がり、確認面からの掘り込みは10cm弱と浅い。内側の掘り込みは、長軸長3.2m、短軸長0.9mを測り、外側の掘り方底面より最深18cm掘り込まれる。中央部に向けて徐々に深くなる断面形を呈する。粘土等の使用痕跡は認められなかったが、主体部内の流入土が封土の陥没と考えられることから、木棺を使用したものと思われる。また、掘り方の形状から、丁寧に掘り込まれたのではなく、木棺据置に際して安定させるために若干掘り窪めた程度と考えられる。本主体部からは、直刀1振り、刀子1点と鉄鏃がまとまって検出されたが、いずれも底面からやや浮いた状態である。直刀は、北側壁際の中央より若干東側から、鋒を西側、刃を壁側に向けた状態で検出された。鉄鏃は、中軸線を挟んで、直刀と反対側の位置で、茎を西側に向けた状態である。直刀の出土状況より、頭位は東枕となる可能性が高い。

南側の第2主体部は、第1主体部の掘り方南側上面を切るようにして埋置されており、底面が第1主体部の底面より30cm程上位にある。遺構の確認面で遺物が検出されており、掘り込み自体ほとんどなかったものと思われる。ただ、周囲の平坦面と若干異なる土質と、5cm前後の



第125図 005号墳主体部

掘り込みが確認されることから、木棺の規模はほぼ想定できた。長軸長3.4m、短軸長0.6~0.8mを測り、東側に向けて徐々に幅が狭くなる。平面形は隅丸長方形状を呈し、主軸方位は第1主体部とほぼ同様である。粘土等は検出されなかった。本主体部からは直刀2振り・短刀1振り、刀子2点と若干の鉄鏃が検出された。直刀は南北の両側壁に沿って置かれていた。北側には直刀と短刀が2振り鋒を西に向けた状態で遺存するが、刃部の向きは、直刀が内側、短刀が外側となる。南側の直刀も、鋒を西、刃部を外側に向けた状態である。第1主体部同様頭位を東枕としたものであろう。

旧表土上面の遺構（002号土坑）（第126図、図版46・47）

005号墳の墳丘下、旧表土上面から土坑とともに多量の土師器と石製模造品が検出された。土坑は、旧表土南端から2m程内側に位置し、旧表土上面から掘り込まれている。長軸方向はN-18.5°-Eを指し、南側周溝と直交する。長軸長2.0m、短軸長1.2mを測り、不整な隅丸長方形を呈する。壁は斜位に立ち上がり、確認面からの深さは10~20cmである。底面はほぼ平坦で、北側が若干高くなる。遺物は、第126図で明らかなように土坑及びその周辺に集中して遺存している。土師器と石製模造品で構成され、両者は混在した状況である。また、土師器は完形で遺存するものは少なく、ほとんどが破碎された状態である。器種による分布の限定は認められない。



第126図 005号墳旧表土上面遺物出土状況

古墳群出土遺物

土器（第127～133図，図版59～66）

001号墳出土土器（1～8）

1・2は丸底を呈する杯である。1はほぼ完形で，口径14.7cm，器高6.0cmを測る。口縁部は弱い稜を有して内湾する。体部外面はヘラケズリ後弱いミガキ，内面はナデ後粗いミガキが加えられるが，剝離が顕著で詳細は不明である。胎土は緻密で小砂粒の混入は少ない。二次的に火を受けており，外面に煤の付着が認められる。また，底部内外面付近を除き赤彩が施される。2はやや小形となり，平底状を呈する。体部外面ヘラケズリ，口縁部から体部内面はナデ調整で，内外面とも赤彩が施される。胎土はやや粗く，砂粒を多く含むためザラついた器面を呈する。3は小形の鉢で，推定口径10.4cmを測る。全体にナデ調整される。胎土中に砂粒を多く含み，二次的な被熱が著しい。4は壺の口縁部片である。器肉が厚く，直線的に開く。内外面ともミガキが加えられ，赤彩される。胎土はやや粗く，砂粒を多く含む。5は壺の口縁部片で，推定口径17.4cmを測る。複合口縁で，端部が平坦になる。口縁部上端は横ナデ，以外はヘラミガキが施される。胎土は緻密で砂粒を多く含み，二次的に被熱している。6は広口壺で口縁部を欠損する。胴部上半に最大径を有し，下半で急激にすぼまる。底部は小さく若干上げ底状を呈する。胴部外面下半はヘラケズリ，上半から内面には丁寧なナデが加えられる。胎土は緻密で小砂粒を含み，黄褐色の色調を呈する。被熱により，内面は赤変，外面には煤の付着が認められる。7は壺片で，外面に赤彩が観察される。胎土はやや粗く，被熱による器壁の剝離が顕著である。8は須恵器の甕の底部片である。混入品であろう。

002号墳出土土器（9～27）

10のみ旧表土上面の祭祀に関連する土器で，他はすべて周溝内からの出土である。9～12は高杯の脚部で，いずれも杯部を欠損する。9は裾径17.0cmを測り，ハの字状に大きく広がる。外面刷毛目調整，内面は横ナデで，粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残る。二次的被熱による赤変が部分的に認められる。胎土は緻密で，小砂粒を多く含む。10は円筒状の脚柱部から裾が大きく外屈するタイプである。内外面とも弱いミガキが加えられ，赤彩が施される。9同様内面に粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残る。胎土は9と類似する。11は裾径12.6cmとやや小さくなる。調整は，外面ミガキ，内面ヘラナデで，裾には横ナデが加えられる。胎土は緻密で小砂粒の混入も少なく，橙褐色の色調を呈する。12は他の高杯とは形態の異なるもので，裾が大きく開き，端部が平坦になる。外面は丁寧なミガキ，内面は横ナデ調整で，巻き上げ痕は認められない。下方に円形の透かしが施される。1/3程の遺存のため全容は不明であるが，残存部分から，6か所穿孔されたようである。胎土はきわめて緻密で雲母粒を若干含み，橙褐色の色調を呈する。14は下半部を欠くが，小形の鉢となろう。全体に歪みがみられる。口径11.2cmを測り，口縁部が大きく外傾する。調整は内外面とも刷毛目であるが，部分的に指頭によるナデが加えられる。

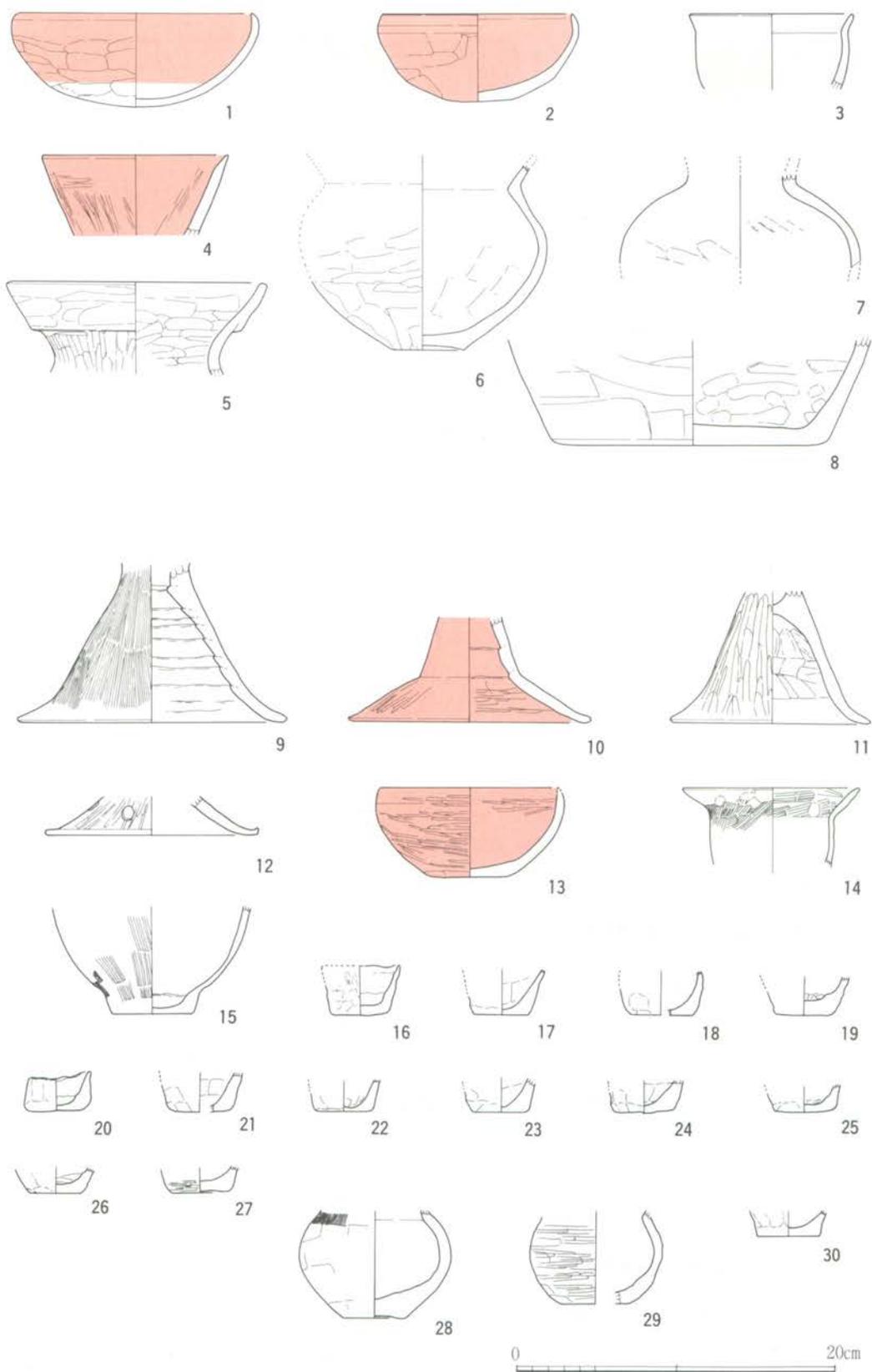
胎土は緻密で小砂粒を多く含む。15は小形甕の下半部であろうか。胴部の器肉は薄く、底部は径5.1cmで突出する。全体にナデ調整されるが、胴部外面には刷毛目痕が残る。胎土は緻密で小砂粒を多く含む、色調は内面暗褐色、外面赤褐色を呈する。16～27は手捏ね土器である。

004号墳出土土器 (28～30)

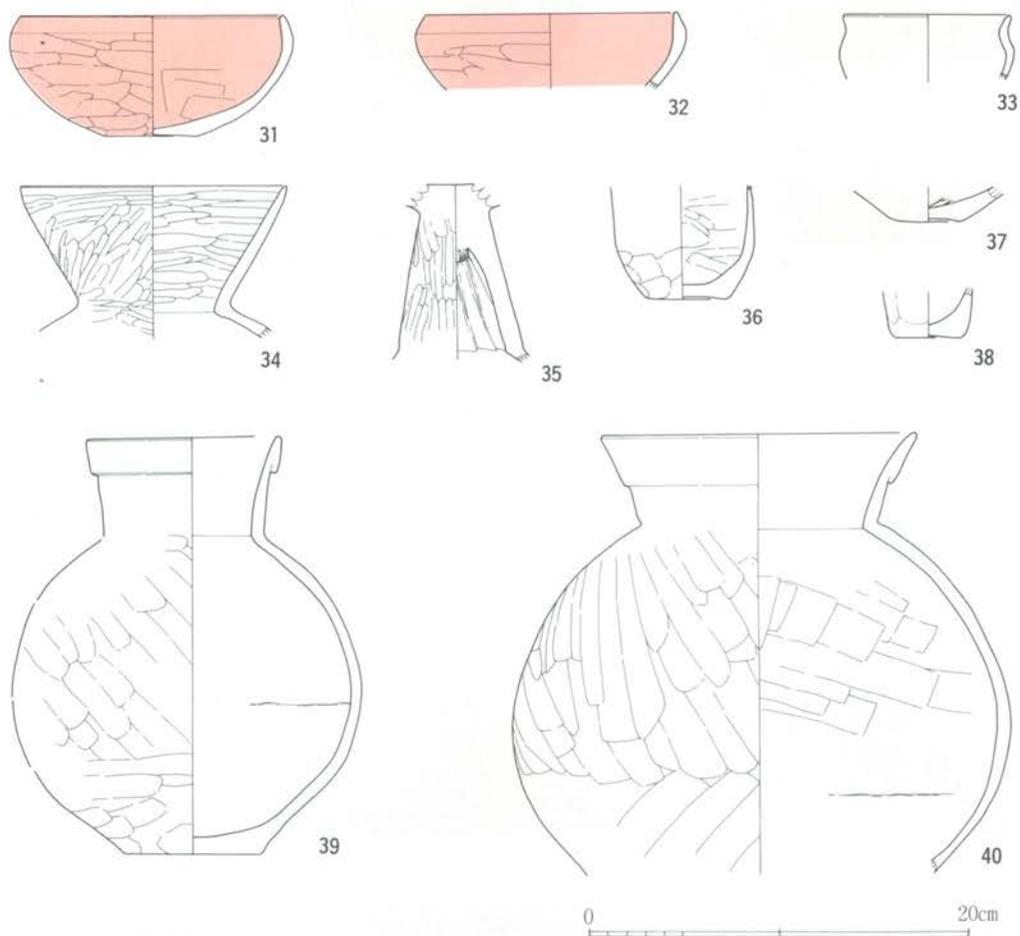
28・29は4区周溝内、30は2区周溝内からの出土である。28・29は小形の壺となろうか。28は底径3.8cmを測り、全体に厚手の造りである。胴部上半に最大径を有し、底部は中央がやや窪む。内外面ともナデ調整が施されるが、上端には非常に細かい刷毛目が観察される。内面は指ナデによる凸凹が顕著である。胎土は緻密で長石粒を僅かに含む、暗黄褐色の色調を呈する。29はほぼ中位に最大径を有し、外面がヘラケズリ後ミガキ調整される。胎土中に小砂粒を多く含む、赤褐色の色調を呈する。部分的に焼成時の黒斑が認められる。30は手捏ね土器の底部片である。内面刷毛ナデ、外面指ナデ調整される。

005号墳出土土器 (31～40)

33が周溝内から出土している以外はすべて墳丘内の検出である。なお、39・40は南側墳丘のトレンチ内下層からの出土であり、次に説明する旧表土上面の土器群と関連する可能性が高い。31・32は内外面赤彩の杯である。31は推定口径14.0cm、器高6.4cmを測る。口縁部は短く内傾し、底部が若干上げ底となる。口縁部内外面とも丁寧な横ナデ、体部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ調整である。胎土はやや粗く、比較的大粒の砂粒を含む。赤彩は刷毛塗りの痕跡が明瞭である。32は小片であるが、31より器高が浅いものであろう。胎土・調整等は同様である。33は口縁部が短く外反する小形の鉢となろう。器表面の摩耗が激しいため詳細な調整は不明である。胎土は砂質を帯び、黄灰色の色調を呈する。34は壺の口縁部で、丁寧な造りである。口縁部は直線的に開き、端部が尖頭状を呈する。内外面とも丁寧なヘラミガキが施され、光沢を有する。二次的に被熱したようで、煤の付着及び器面の剝離が部分的にみられる。胎土は緻密で砂粒の混入も少ない。35は高杯の脚部で、杯との接合は臍による。外面ヘラケズリ、内面には絞り込みの痕跡が顕著である。36は小形の鉢であろうか。外面下端にヘラケズリが加えられ、砂粒を多く含む。外面の一部に黒斑が観察される。37は壺、38は手捏ね土器の底部片である。39・40は広口壺である。39は $\frac{2}{3}$ 程の遺存であるが、推定口径11.4cm、器高21.5cmを測る。口縁部は直立気味で、複合口縁を呈する。胴部はやや下方に最大径を有し、底部付近で急激にすぼまり、突出気味の底部に移行する。口縁部内外面横ナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ調整で、巻き上げ痕が1条残る。外面には黒斑が明瞭に観察される。胎土は緻密で小砂粒を僅かに含む、淡褐色の色調を呈する。40は口径16.8cmを測る。口縁部はくの字状に外傾し、複合口縁となる。胴部は球形を呈し、ほぼ中位に最大径を有する。胎土・調整は39とほぼ同様に、黄褐色の色調を呈する。下半に黒斑がみられる。



第127图 001(1~8)·002(9~27)·004(28~30)号墳出土土器

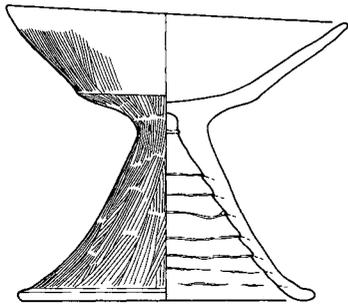


第128図 005(31~40)号墳出土土器

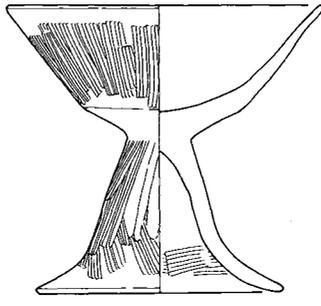
005号墳旧表土上面出土土器 (41~109)

41~56は高杯である。41は完形で、口径18.1cm、器高15.0cmを測る。杯部は下半に明瞭な稜を有し、口縁部が直線的に大きく開く。脚はハの字状に開き、端部で短く外反する。外面は刷毛目調整で、口縁部及び脚端部にはナデが加えられる。杯部内面及び脚内面は横ナデで、脚部には粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残る。胎土は緻密で、長石・石英の小粒子を多く含み、明褐色の色調を呈する。42は口径17.1cm、器高15.2cmを測り、杯部が深くなる。杯部は明瞭な稜を有して直線的に開き、口縁部で若干外反する。脚部はやや膨らみを有する脚柱部から滑らかに裾が広がる。杯部外面は刷毛目調整で、口縁下に爪先の当たりのような浅い沈線が1条巡る。脚は内外面とも刷毛目調整であるが、外面にはヘラケズリ、内面上端には強い絞りが観察される。胎土は41と同様で、部分的に黒斑がみられる。43~49は裾が明瞭な稜を有して大きく外屈する脚部を呈する一群で、斜位に開くもの(43・46・47・49)とほぼ水平に延びるもの(44・45・48)に分けられる。また、杯部は椀状を呈し、口縁部で若干外反するタイプ(43・44・48)

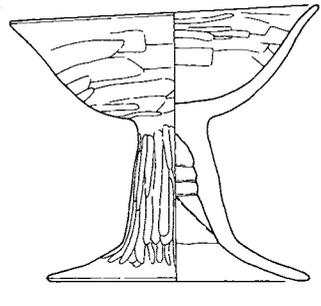
と明瞭な稜を有し直線的に体部が開くタイプ（45～47・49）に大別できるが、杯部と脚部を組み合わせた分類は困難で、各々異なった形状を呈する。調整は杯部がヘラケズリ及びナデを基本とするが、脚部外面はヘラケズリ（45・46・48・49）とミガキ（43・44・47）の両者が認められる。胎土はいずれも41・42と同様で、明褐色の色調を呈する。47には赤色粒子の混入が目立つ。44の杯部と脚部の接合は臍によるものである。50は口径18.4cmを測る大形の高杯で、脚部を欠損する。口縁部から体部内面にはナデ、外面にはミガキが施されるが、器面の荒れが激しく詳細は不明である。胎土はやや砂質を帯び、黄褐色の色調を呈する。51も大形の杯部を有し、体部が直線的に開く。中央でやや肥厚し、端部が尖頭状を呈する。器面の荒れが激しいが、内外面ともミガキ調整されるようである。52は小片であるが、特徴的な器形を呈する。体部下端の稜が下方に大きく突出し、口縁部で若干内湾する。口縁部内外面横ナデ、以下は内面横位のミガキ、外面縦位のミガキが施される。胎土はやや粗く、小粒子を多く含む。53～56は脚部片である。53は外面ヘラケズリ、内面ミガキ、54は内外面ミガキが施される。56は内面横ナデ、外面丁寧なミガキで、内面は黒色を呈している。この黒色が意図的なものかどうかは不明である。57～89は坩である。ほとんどが復元できたが、57を除き破碎された状態である。57～59は胴部が球形を呈し、口縁部が他に比べて短いタイプである。口縁部は内湾気味に開き、胴部中央に最大径を有する。底部は小さい平底となる。いずれも調整は同様で、口縁部上半横ナデ、下半外面縦位ミガキ、内面横位ミガキ、胴部外面横位ミガキ、内面ナデである。底部にもミガキが及ぶ。胎土は、57がかなり洗練された良質なものであるのに対し、58・59は小粒子を多く含み、砂質を帯びるようになる。60～64は胴部に比して口縁部が長くなる一群である。60は口縁部が内湾気味に開き、胴部下半に最大径を有する。61～63は口縁部が直線的に開き、胴部が算盤玉状に張る形態を呈する。底部は小さい平底で、63は若干窪む。調整は外面ヘラケズリ、内面ナデを基本とし、62・63の口縁部外面及び胴部上半には弱いミガキが加えられる。胎土は緻密で小砂粒を多く含み、61には赤色粒子の混入が目立つ。色調は赤褐色を呈し、部分的に黒斑が観察される。64は口径16.5cm、器高14.2cmを測り、口縁部と胴部の高さがほぼ同様になる。胴部は扁平で中央が大きく張り、底部はやや上げ底となる。口縁部内外面から胴部外面上半はミガキ、外面下半はヘラケズリ、内面は丁寧なナデ調整される。胎土は緻密で小砂粒を多く含み、黄褐色の色調を呈する。65は口径13.5cm、器高14.7cmを測り、須恵器の瞭状の形態を呈する。口縁部ほぼ中央に段を有し、胴部は算盤玉状で中央から若干下方に最大径を持つ。口縁部から胴部内面は丁寧な横ナデ、胴部外面上半ミガキ、下半ヘラケズリ調整される。底部もヘラケズリにより形成される。胎土は緻密で白色小砂粒を多く含み、橙褐色の色調を呈する。66は63とほぼ同様の器形であるが、底部が丸底となる。内面ナデ、外面ミガキ調整されるようであるが、胎土が砂質を帯びるため摩擦が激しく詳細は不明である。黄褐色の色調を呈する。口径11.6cm、器高13.8cmを測る。67・68は胴部が算盤玉状を呈し、底部が若干大きくなるタイプで



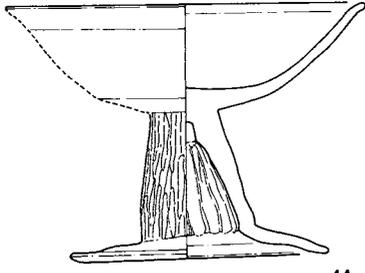
41



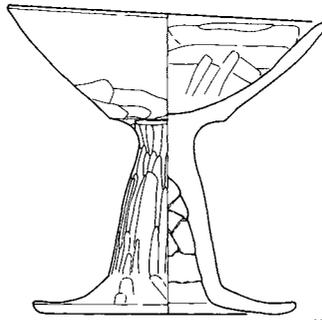
42



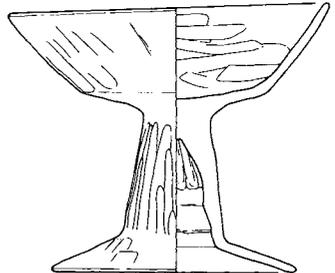
43



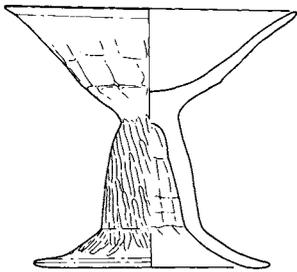
44



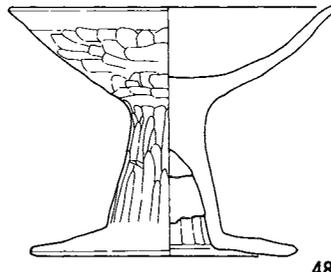
45



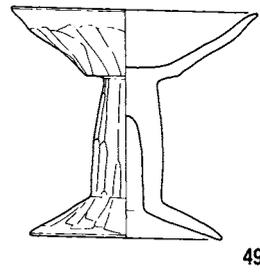
46



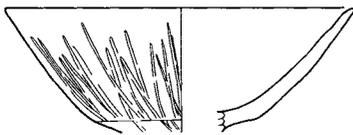
47



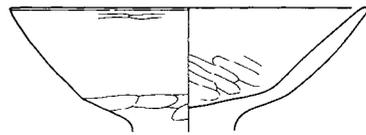
48



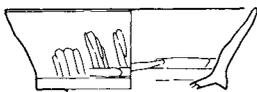
49



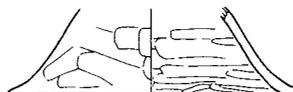
50



51



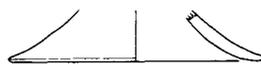
52



53



54



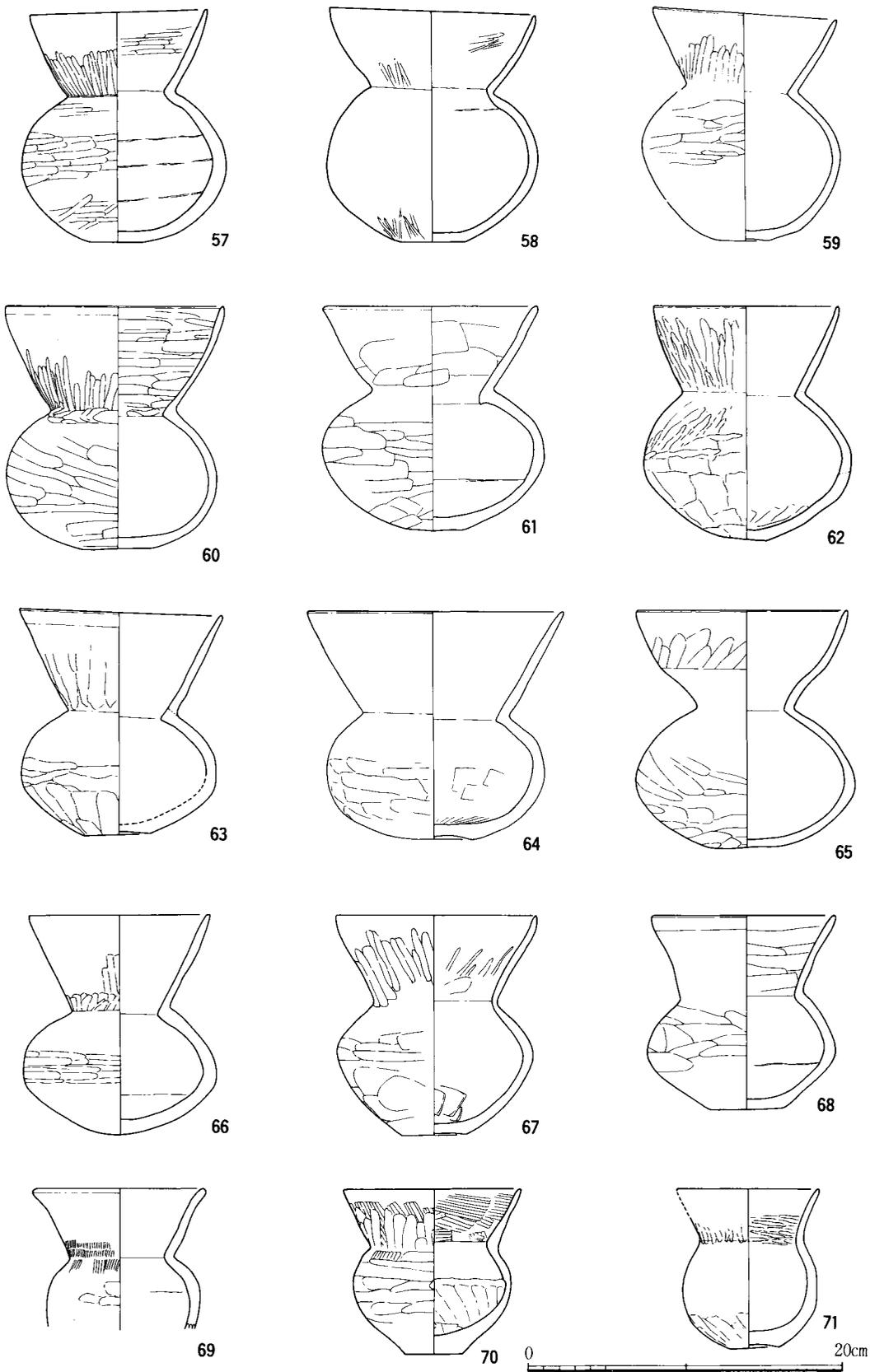
55



56

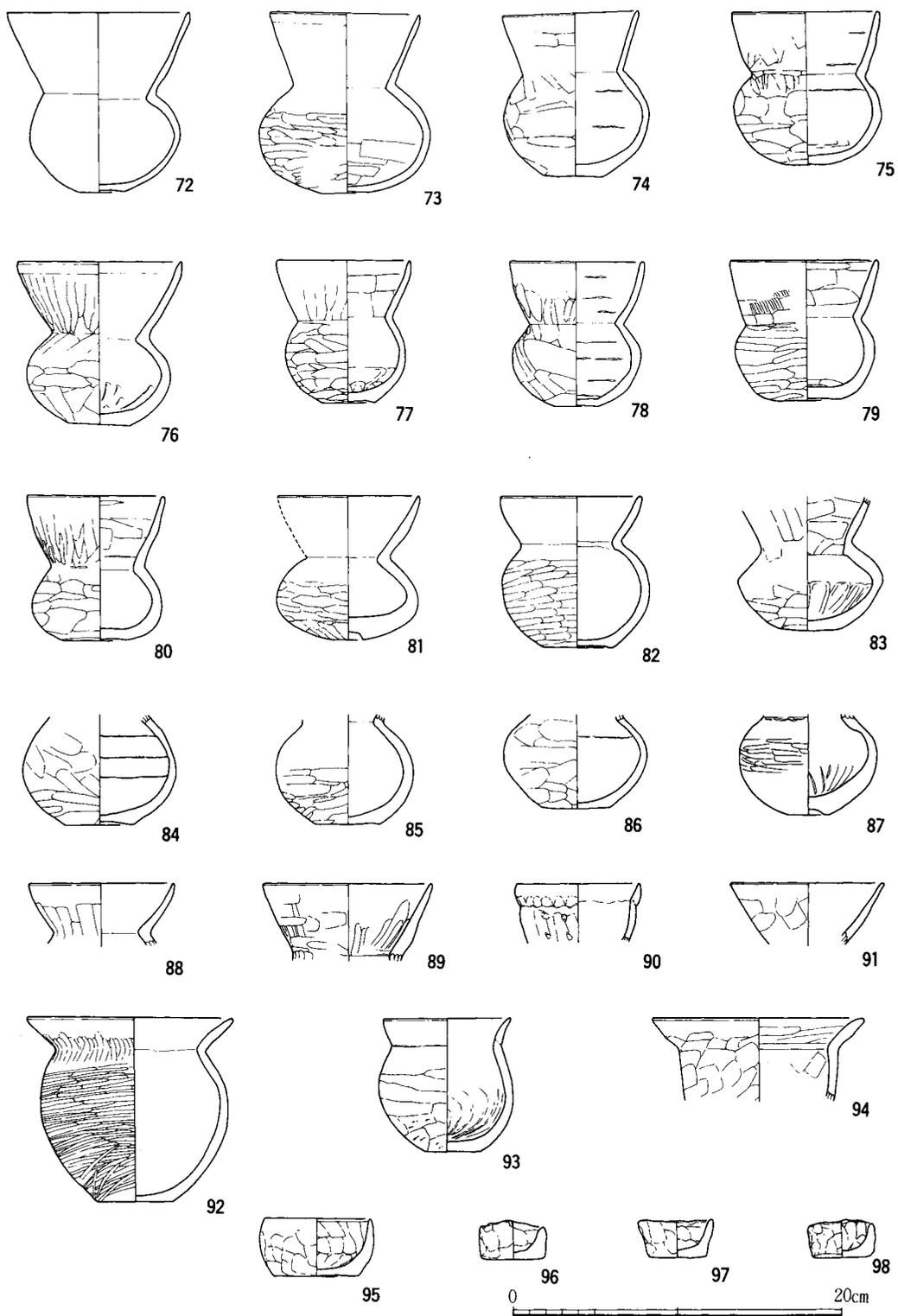


第129图 005号墳旧表土上面出土土器(1)



第130图 005号埴旧表土上面出土土器(2)

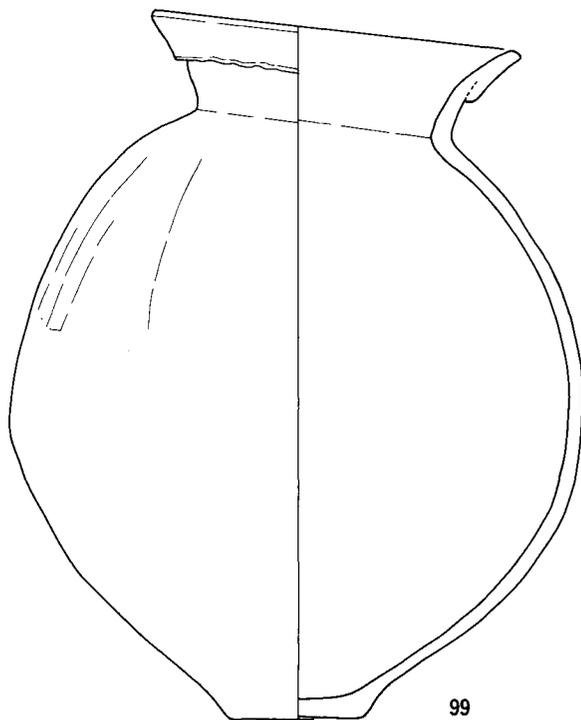
ある。67は口径13.0cm，器高13.8cmを測り，口唇部が直立する。口縁部内外面ミガキ，胴部外面ヘラケズリ後ミガキ，内面ナデ調整である。胎土は緻密で小砂粒を多く含み，黄褐色の色調を呈する。68は口径11.7cm，器高12.1cmを測る。器面の摩耗が激しく詳細な調整は不明であるが，口縁部横ナデ，胴部ヘラケズリが観察される。胎土はやや粗く砂質を帯び，赤色粒子の混入が目立つ。69・70は同一形態となろう。70は口径11.4cm，器高10.2cmを測り，底部が厚く突出する。口縁部内外面刷毛目調整で，外面には縦位の細かいヘラケズリが加えられる。胴部内外面はヘラナデが施される。黄褐色の色調を呈し，底部に焼成時の黒斑が認められる。71は口径9.1cm，器高10.0cmを測る小形品で，ミニチュア的である。口縁部の開きは少なく，胴部の膨らみも弱い。底部中央が若干窪む。器面の摩耗が激しく詳細な調整は不明であるが，口縁部内外面から胴部外面にかけてミガキが施され，胴部下端にはヘラケズリが加えられるようである。胎土はやや砂質を帯び，黄褐色の色調を呈する。72～75は胴部が球形を呈し，底部が小さい一群である。72は口径11.2cm，器高11.0cmを測り，口縁部に最大径を有する。口縁部外面から胴部外面弱いミガキ，内面は丁寧なナデで，口唇部には横ナデが加えられる。胎土は緻密で小砂粒の混入も少なく，黄褐色の色調を呈する。73は胴部中央に最大径を持つ。口縁部内外面丁寧なナデ，胴部外面横位のミガキが施される。胎土は緻密で雲母小粒子を含む。74は口縁部の開きが小さく，全体に造りが雑である。外面ヘラケズリ調整されるようである。胎土は粗く，長石・雲母の比較的大きな粒子を多く含む。全体に被熱しており，特に内面の剝離が顕著である。75は完形品で，口径9.1cm，器高9.2cmを測る。口縁部は内湾気味に開き，端部が平坦に近くなる。外面ヘラケズリ後ミガキ，口縁部内面丁寧なミガキ，胴部内面ナデ調整が施される。胎土は緻密で砂粒の混入も少なく，橙褐色の色調を呈する。胴部外面下半に焼成時の黒斑が認められる。76～78は小形で，前者に比べて器高に対する胴部の高さが小さくなる。76は口縁部に最大径を有し，口縁下の括れが強い。口縁部から胴部外面は丁寧なミガキ，胴部内面はヘラによるナデツケがみられる。胎土は緻密で雲母粒等の小砂粒を多く含み，黄褐色の色調を呈する。口径10.1cm，器高9.6cmを測る。77・78は口径8.3cm，器高8.5cmを測る。ほぼ同様の器形を呈するが，78の胴部が若干偏平である。底部はやや上げ底である。調整も同様で，口縁部から胴部内面ヘラケズリ後ミガキ，内面丁寧なナデが加えられる。78の内面には7条の粘土紐巻き上げ痕が残る。胎土中に小砂粒を多く含み，部分的に焼成時の黒斑が観察される。79は口縁部の開きが少なく，胴部の膨らみも弱い。また，底部と胴部の区別も曖昧である。口縁部から胴部内面は丁寧な横ナデ，胴部外面から底部にかけてはミガキが加えられる。なお，内面見込みには指によるナデツケが認められる。胎土中に小砂粒を多く含み，赤褐色の色調を呈する。80は口縁部と胴部の高さがほぼ同様になる。胴部の最大径を下半に持ち，偏平な形態を示す。口縁部から胴部外面にはミガキが加えられ，内面は雑なナデが残る。赤色粒子の混入が目立ち，赤褐色の色調を呈する。81は胴部が算盤玉状に強く張り出し，底部が大きく窪む。口縁部内面は丁



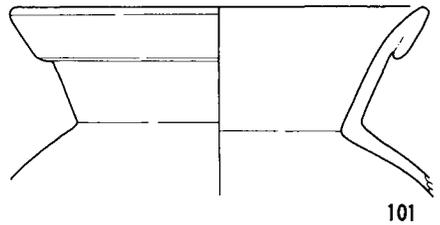
第131图 005号墳旧表土上面出土土器(3)

寧な横ナデ，口縁部外面から胴部外面にかけてはヘラケズリ後ミガキが加えられる。胎土はやや粗く小砂粒を多く含み，黄褐色の色調を呈する。黒斑が認められる。82は口径8.7cm，器高9.0cmを測り，球形の胴部に短く外反する口縁部が付く。小形の広口壺の形態を示し，調整は81と同様である。胎土中に雲母粒子を多く含み，橙褐色の色調を呈する。やはり黒斑が観察される。83は胴部中央に明瞭な稜を有し，算盤玉形になる。外面にはヘラケズリ後弱いミガキが施される。胴部内面下半は指によるナデツケが顕著で器面に凹凸がみられる。胎土はやや粗く小砂粒を多く含み，黄褐色の色調を呈する。84～87は口縁部を欠く。胴部は球形を呈し，84・87の底部は窪む。調整は，外面ミガキ，内面ナデを基本とする。88・89は口縁部片である。91も口縁部片となろう。90は鉢のミニチュアとなろう。折り返し口縁で，推定口径7.6cmを測る。口縁下端の折り返し部には指頭によるオサエが施され，胴部外面は縦位の細かいヘラケズリ後竹管状工具による押し引きが加えられる。胎土中に小砂粒を多く含む。92は小形の甕で，口径12.6cm，器高11.0cmを測る。頸部は縦位のミガキ，胴部外面は横位の細かいミガキが施される。胎土は緻密で小砂粒を含み，黄褐色の色調を呈する。93は折り返し口縁の小形甕で，口径8.1cm，器高8.0cmを測る。口縁部横ナデ，胴部外面ヘラケズリ，内面ヘラナデ調整である。胎土中に小砂粒を多く含み，黒斑が認められる。94は小形甕の口縁部片であろうか。口縁部は肥厚して大きく開き，胴部の膨らみは少ない。外面ヘラケズリ，内面ヘラナデ調整される。赤褐色を呈し，胎土中の赤色粒子の存在が目立つ。95～98は手捏ね土器である。胎土は砂質を帯び，黄白色の色調を呈する。95は比較的大形で調整も丁寧であり，底部には黒斑がみられる。99～101は大形の壺で，複合口縁を呈する。99は口径19.6cm，器高35.8cmを測り，口縁部が外湾気味に外反する。胴部は中央より若干下に最大径を有し，底部が小さく突出気味となる。調整は，内面ナデ，口縁部外面ミガキ，胴部外面ヘラケズリ後弱いミガキである。胎土はやや粗く，長石・石英の砂粒を多く含む。なお，内面全体に器面の荒れがみられ，外面には焼成時の黒斑が残る。100は口縁部が直立気味に開き，複合部で肥厚する。胴部は球形を呈し，下半部を欠損する。口縁部外面ヘラケズリ後ナデ，胴部外面ヘラケズリ後ミガキが施される。胎土は緻密で小砂粒を多く含み，黄褐色の色調を呈する。内外面とも器面の荒れが著しい。101は口径22.1cmを測る大形品の口縁部である。口唇部が平坦になる。102～104は複合口縁を呈する壺で，前者より小形となる。102は口径13.1cm，器高20.1cmを測る。口縁部はくの字状に外反し，胴部ほぼ中央に最大径を有する。口縁部外面横ナデ，内面丁寧なナデ，胴部外面ヘラケズリ後粗いミガキが施される。ミガキは底部外面にまで及ぶ。胎土は緻密で，雲母を主体とする小粒子を多く含む。二次的な被熱による黒変及び器壁の荒れがみられる。103は胴部下半に最大径を持ち，底部が突出気味となる。胴部外面ヘラケズリ後弱いミガキで，部分的に粗い刷毛目が残る。下端に焼成時の黒斑が観察される。胎土は緻密で小粒子を多く含み，黄褐色の色調を呈する。104はほぼ完形で，口径17.4cm，器高28.2cmを測る。口縁部は直線的に開き，ほぼ中央に最大径を有する球形胴を呈す

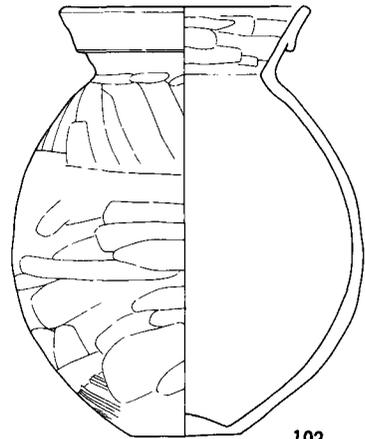
る。底部は大きく突出する。口縁部上半内外面横ナデ、内面下半から胴部内面は丁寧なナデ調整が施される。外面は、口縁から肩にかけて縦位のミガキ、以下には横位及び斜位の粗いミガキが加えられる。胎土は緻密で小砂粒の混入も少なく良質である。色調は赤褐色を呈し、部分



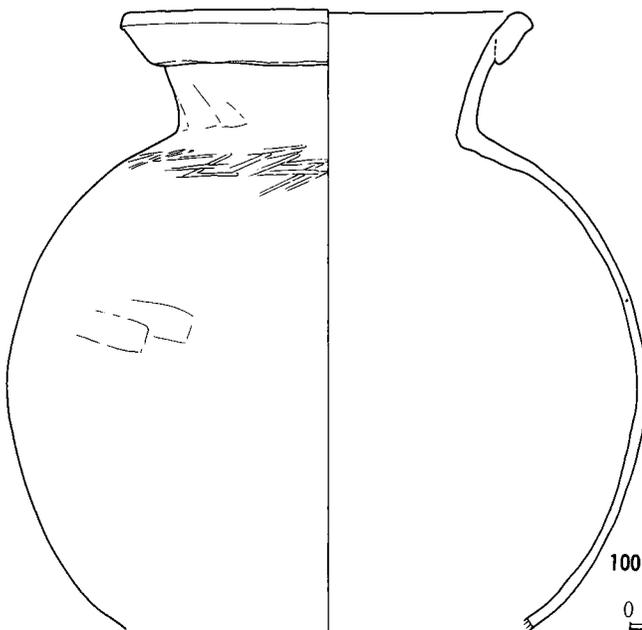
99



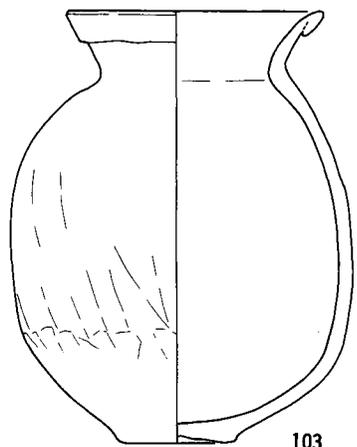
101



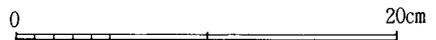
102



100

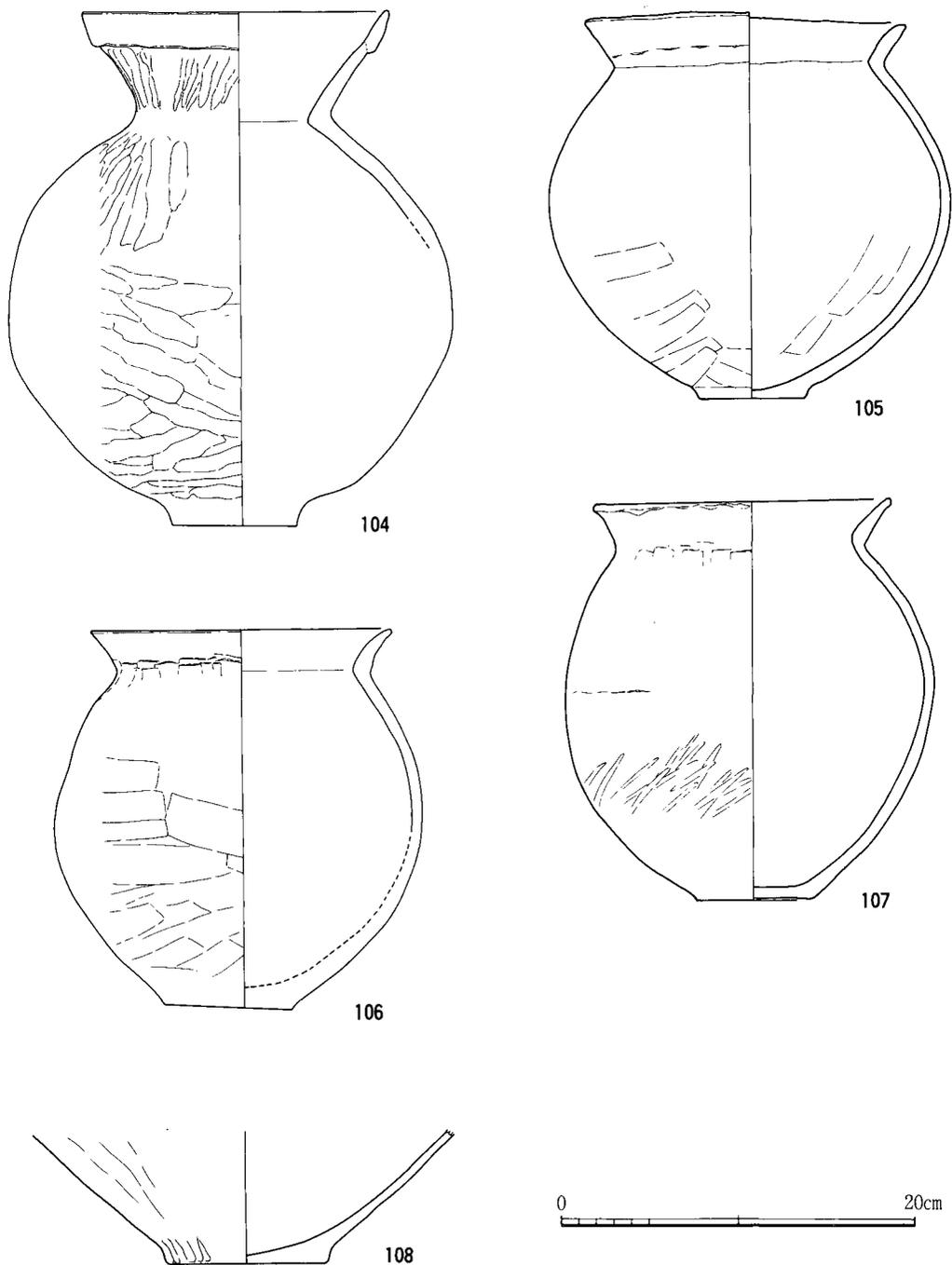


103



第132図 005号墳旧表土上面出土土器(4)

的に黒斑がみられる。105～107はくの字状に外反する短い素口縁の甕である。105は胴部が球形に近く、広口壺の様相を示す。口縁部内外面横ナデ、胴部内外面ヘラケズリ後ナデ調整される。口縁部外面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。黄褐色の色調を呈し、部分的に黒斑がみられる。また、器面の剝離が顕著に認められる。106・107は同様の器形・調整・胎土を示す。口径17.1



第133図 005号墳旧表土上面出土土器(5)

cm, 器高は106が20.7cm, 107が22.0cmを測る。口縁部から胴部内面は丁寧なナデ, 胴部外面はヘラケズリ後弱いミガキが施される。胎土中に長石・石英の小砂粒を多く含み, 黄褐色の色調を呈する。部分的に焼成時の火襷及び黒斑が観察される。108は外面にミガキを施す壺の底部片である。

2. 鉄製品

直刀 (第134図)

002号墳 (1)

第2主体部出土でほぼ完形である。全長82.1cmを測り, 平棟・平造りとなる。身部は, 刀身長65.2cm, 刃部幅2.5cm, 棟厚0.6cmを測る。全長に比べて細身となる。鋒はややふくらを有し, 反りはほとんど認められない。関部は片関で, 斜位に0.7cm程切り込まれる。茎は, 全長16.9cm, 幅2.0cm, 厚さ0.4cmを測る。茎尻は丸味をもって収められる。茎尻から2.6cmと関から3.7cmの位置に, 心心間で10.5cmを測る目釘孔が穿たれる。茎尻側の目釘孔には現存長0.9cmの目釘が遺存している。木質は茎に若干みられるのみである。

005号墳 (2~6)

2・3・5は第2主体部, 4は第1主体部, 6は盛土中からの出土であるが, 6は第1主体部出土の茎片と接合しており, 本来第1主体部にあったものと思われる。

2はほぼ完形で, 全長85.1cmを測る。平棟・平造りとなる。身部は, 刀身長68.1cm, 刃部幅3.0cm, 棟厚0.8cmを測る。刃部幅はほぼ一定であるが, 先端部側がやや細くなる。鋒はややふくらを有し, 中央部が鋒側に若干反っている。刀身の関に近い部分に鏽の痕跡が観察される。関部は片関で, 斜位に0.5cm程切り込んでいる。茎は, 全長17.0cm, 幅2.3cm, 厚さ0.6cmを測り, 茎尻は丸く収められる。茎尻から3.4cmと関から3.0cmの位置に, 心心間で10.5cmを測る目釘孔が設けられるが, 目釘の遺存は認められなかった。木質は刀身の棟側に遺存する。3もほぼ完形である。2同様平棟・平造りで, 全長93.5cmを測る。身部は, 刀身長75.9cm, 最大刃部幅3.6cm, 最大棟幅1.0cmを測る。鋒に向けて徐々に幅を減じ, 棟厚は中央が最大となる。鋒はややふくらを有し, 刀身は刃部側に若干反っている。関部は片関で, 斜位に1.0cm程切り込まれる。茎は, 全長17.6cm, 最大幅2.5cm, 最大棟厚0.7cmを測り, 尻に向けて徐々に幅・厚さとも減じる。茎尻は隅を斜位に抉る形態を呈する。茎尻から3.2cmと関から4.0cmの位置に, 心心間で10.4cmを測る目釘孔が設けられる。目釘の遺存は認められないが, 関側の孔内全体に木質が観察される。あるいは, 木製の目釘を利用したのかもしれない。木質は茎尻と刀身中央に僅かに遺存するにすぎない。4は鋒を若干欠損するが, ほぼ完形である。平棟・平造りで, 現存長35.2cmを測る短刀となろう。現存する身部は, 刀身長28.2cm, 刃部幅2.1cm, 棟厚0.5cmを測る。鋒はややふくらを有し, 刀身は鋒付近で棟側に反っている。関部は両関となり, 棟側は直角, 刃側は

斜位に0.3cm程切り込まれる。茎は、全長7.0cm、最大幅1.7cm、厚さ0.4cmを測り、尻に向けて徐々に幅を減じる。茎尻は丸く収められる。木質は鋒に近い棟側に若干遺存する。5はほぼ完形で、刃部を僅かに欠く。全長34.0cmを測り、平棟・平造りとなる。4同様短刀であろう。身部は、刀身長26.9cm、刃部幅2.2cm、棟厚0.5cmを測る。鋒はややふくらを有し、刀身は鋒に向けて徐々に幅・厚さとも減じる。関部は両関で、棟側・刃側とも斜位に切り込まれるが、刃側の関はきわめて小さい。茎は、全長7.1cm、幅1.4cm、厚さ0.2cmを測り、尻に向けて徐々に幅を減じる。茎尻は丸く収められ、尻より3.0cmの位置に目釘孔が穿たれる。木質が茎と刀身に若干遺存する。6も鋒を若干欠くが、ほぼ完形で、短刀となろう。現存長27.8cmを測り、平棟・平造りとなる。身部は、現存長21.2cm、刃部幅1.8cm、棟幅0.5cmを測る。鋒はややふくらを有し、棟側が若干外反している。関部は両関と思われ、棟側はほぼ直角に切り込まれる。茎は、全長6.6cm、幅1.2cm、厚さ0.4cmを測る。茎尻は棟側に向けて斜位に切られ、尻から1.0cmの位置に目釘孔が穿たれる。木質は目釘孔付近に僅かに遺存するにすぎない。

鉄鏃 (第135図, 図版67)

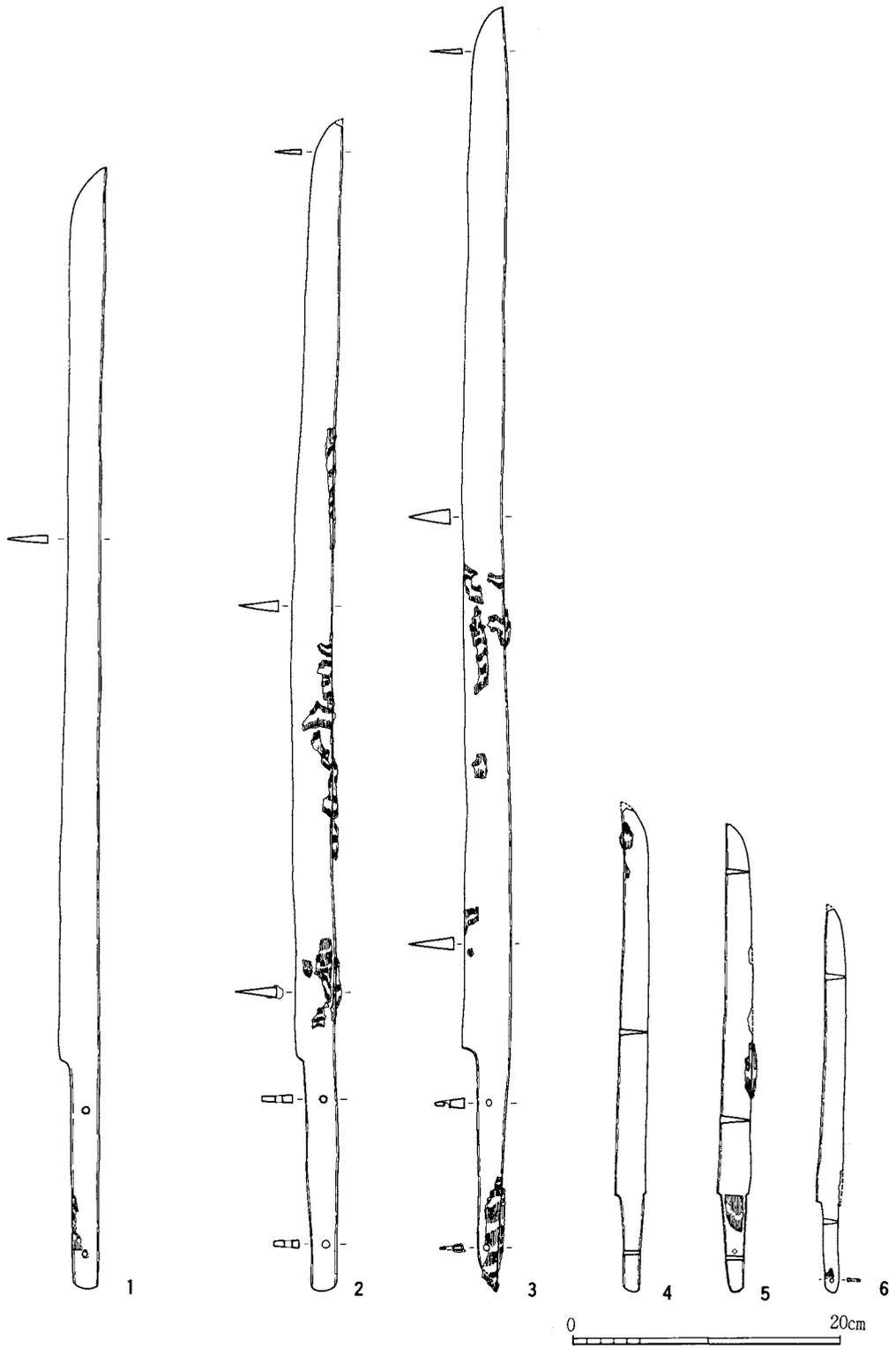
001号墳 (1~4)

1は有茎の腸袂柳葉式と呼ばれるものである。鏃身上部を欠損するが、腸袂(逆刺)はかなり深い。ただ、腸袂部外縁の外側への開きは少なく、全体的に長三角形に近くなる。中央部が錆化により膨れているが、かなり薄手の片丸造りとなろう。篋被ぎは1.9cmと短く、断面長方形を呈する。棘状突起部の形状は明瞭でない。茎はほぼ完形で、現存長6.8cmを測る。矢柄材が良好に遺存しているため詳細は不明であるが、このタイプの鉄鏃としてはかなり長い茎を有するものであろう。2は両関の長三角形鏃身を有するタイプである。篋被ぎ下半以下を欠く。鏃身は、長さ2.0cm、幅0.9cmを測り、明瞭な片丸造りとなるが、断面形は三角形に近くなる。3は小形の鏃身を有する。関部は明瞭ではないが、両関となろう。篋被ぎも小形となるため、断面形は正方形を呈する。4は茎片であろう。断面方形で、木質が良好に遺存する。

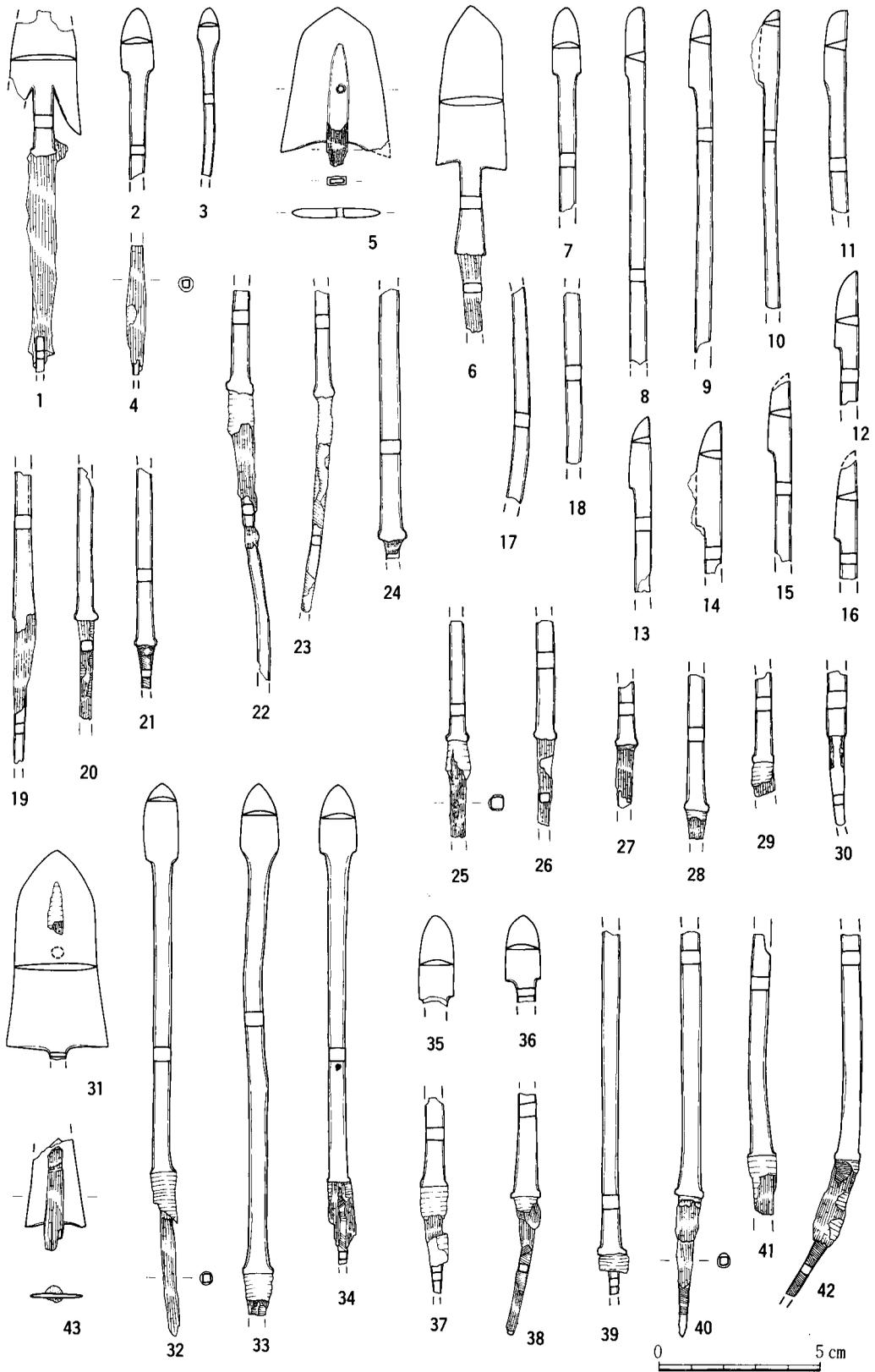
002号墳 (5~30)

6・7・19・24が第1主体部、以外は第2主体部出土である。

5は有茎の大形五角形鏃で、浅い腸袂が観察される。身部は、全長4.5cm、幅3.6cmを測る。薄手の両丸造りで、ほぼ中央に径2.6mmの穿孔が施される。茎はほぼ完形と思われ、関を有して長くなるものではなかろう。木質及び矢柄の痕跡が残っており、鏃身を挟み込む装着法と考えられる。6は有茎の長五角形鏃で、茎尻を欠損する。身部は、全長5.0cm、幅2.3cmを測る。両丸造りで、浅い腸袂が認められる。篋被ぎは、全長2.7cm、幅0.8cm、厚さ0.3cmを測る。茎に向けて徐々に幅を増し、棘状突起部はスカート状を呈すると思われる。茎は断面方形を呈し、木質の遺存が認められる。また、木質の内側には木皮による巻き付けが残る。7は片丸造りの長三角形式である。鏃身長2.1cm、幅0.8cm、厚さ0.2cmを測る。関は平坦で、腸袂は認められない。



第134图 古墳出土直刀(2号墳第2主体部:1,5号墳第1主体部:4,5号墳第2主体部:2・3・5・6)



第135图 古墳出土鉄鎌 [1号墳：1~4. 2号墳（第1主体部：5~7・19・24. 第2主体部：8~18・20~23・25~30）, 5号墳（第1主体部：31~42. 第2主体部：43）]

篋被ぎは断面正方形を呈する。8～16は片関片刃箭式の鏃身を有する。すべて第2主体部出土であり、第1主体部にはこのタイプが認められない。身部は断面三角形を呈し、切先にややふくらを有している。身部長は14が最も長く3.2cmを測り、他は2.1～2.5cmの間に含まれる。関部は錆により不明瞭となるものもあるが、ほぼ直角に切り込まれるタイプであろう。17・18は断面正方形の篋被ぎ片である。19～30は篋被ぎから茎にかけての断片である。22・23は茎がきわめて長くなる。また、矢柄表面に木皮による巻き付けが残るものが多くみられる。

005号墳 (31～43)

43のみ第2主体部出土で、他はすべて第1主体部出土である。

31は有茎の柳葉式鏃身を有する。腸扶は認められない。身部は全長5.8cm、幅3.1cmを測り、両丸造りとなる。鏃身中央やや先端側に径0.2cmの孔が1個穿たれている。矢柄は、鏃身を挟み込むタイプのもので、先端から1cmの位置まで達している状況が窺える。32～36は片丸造りの長三角形式である。鏃身は、長さ2.0～2.4cmで、幅は1.1～1.2cmを測る。関はほぼ直角に切れ込むようである。篋被ぎは比較的長く、32・34が各々9.5cm、9.8cmを測る。33は12.4cmと長くなる。断面方形を呈する。棘状突起は方形を呈すると思われる。茎は断面正方形で、木質が良好に遺存する。表面には木皮による巻き付けが明瞭に観察される。37～42は篋被ぎから茎にかけての断片である。篋被ぎは比較的長く、茎はほぼ完形と思われる38・40で4.2cm程である。矢柄の木質が遺存し、表面には木皮の巻き付けが観察される。43は上半を欠くが、有茎の柳葉式となろう。同形の31に比してかなり小形となる。挟み込みの矢柄が良好に遺存している。上部には矢柄により覆われているが、1個の孔が穿たれ、その部分の矢柄表面には横方向の繊維痕が認められる。挟み込んだ矢柄の表裏を縛ったものであろう。

刀子 (第136図, 図版67)

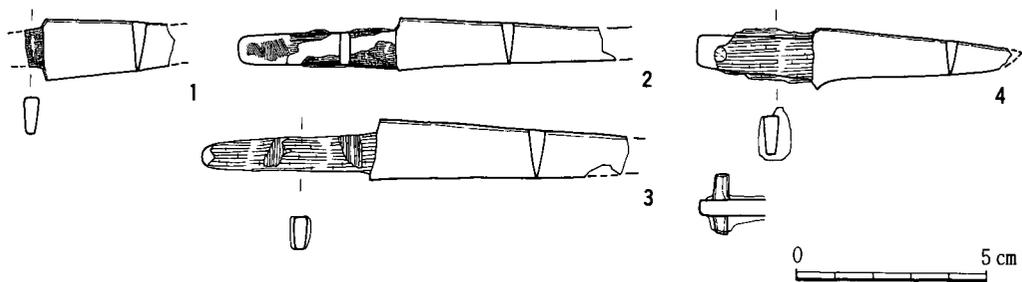
003号墳 (1)

主体部からの出土である。茎及び鋒部を欠き、現存長3.9cmを測る。身部は平棟で、最大刃部幅1.6cm、棟厚0.3cmを測り、鋒に向けて徐々に幅を減じる。関部は両関となる。両側ともほぼ直角に0.3cm程切り込まれる。茎はほとんど欠損しているが、木質が薄く遺存している。

005号墳 (2～4)

2は第1主体部、3・4は第2主体部出土である。2は鋒部を欠損し、現存長10.0cmを測る。身部は細身で、現存長5.8cm、刃部幅1.1cm、棟厚0.3cmを測り、鋒に向けて徐々に幅を減じる。関部は両関でやや斜位に切り込まれるが、刃部側はきわめて小さくなる。茎は完形で、全長4.2cm、幅0.8cm、厚さ0.2cmを測る。茎尻は丸味をもって収められる。茎のほぼ全体に木質の付着が認められるが、尻側には茎と直行する方向に繊維痕が観察される。木質の内側に位置することより、茎本体に巻き付けたものと思われる。3も鋒部を欠損する。現存長11.3cmを測る。身部は、現存長6.4cm、刃部幅1.2cm、棟幅0.4cmで、鋒に向けて徐々に幅・厚さを減じる。関は両

関となり、棟側・刃側とも斜めに切り込まれる。茎は全長4.9cm、幅0.8cm、厚さ0.3cmを測り、尻が丸く収められる。茎全体に木質が良好に遺存する。2同様、木質の内側に本体に巻き付けたと思われる繊維痕が観察される。4はほぼ完形で、全長8.6cmを測る。身部は、全長5.5cm、刃部幅0.9cm、棟幅0.3cmを測り、鋒側が急激に細くなる。刃側の関の形状も考慮すると、何度か研ぎ返された結果小さくなったのであろう。関部は両関で、刃側は斜位、棟側はほぼ直角に切り込まれる。茎は、全長3.1cm、幅1.0cm、厚さ0.4cmを測る。2・3とは異なり、棟側に反った形状を呈する。茎尻はほぼ平坦である。尻から0.5cmの位置に鉄製の目釘が良好に遺存している。ほぼ完形と思われ、長さ1.6cm、厚さ0.4cmである。木質は茎に比較的良好に遺存する。



第136図 古墳出土刀子(3号墳主体部：1、5号墳第1主体部：2、第2主体部：3・4)

石製模造品

002号墳旧表土上面 (第137図, 図版68)

一括出土で、剣形品8点、剣形品の未製品1点、有孔円板2点で構成される。他に、滑石の剥片が6点検出された。白玉は含まれていないようである。

剣形品 (1～9)

9以外は上部に穿孔が施される。1は造りがきわめて丁寧である。菱形に近い形態を示し、表裏両面とも鑄を表すと思われる稜が明瞭に形成される。2は本遺跡のなかで最も大形である。偏平な形を呈し、中央に明瞭な稜は認められないが、両側縁は刃部を意識したような整形が窺える。研磨は丁寧である。石材は鐵石質で、灰青色の色調を示す。3はかなり細身となる。表面中央には明瞭な稜を有し、裏面は平坦に成形される。研磨は全体に丁寧で、擦痕が顕著に観察される。4はやや不整形を呈し、部分的に剝離がみられる。2同様刃部を意識した造りである。最終調整はきわめて丁寧で、平滑な器面を有し、光沢が認められる。5・6は破損品である。いずれも表面中央に明瞭な稜を有し、5は断面三角形を呈する。6は細身となろうか。5の石材は鐵石質で、黄色味がかかった青灰色を示す。7・8も破損品であるが、上端部が剣の茎を意識したかのように突出している。薄手の造りで、断面三角形に近い。8の石材は2に近く、縞状の節理がみられる。9は未製品で、上半部の形状からすると7・8のようなタイプを造る

うとしたようである。

有孔円板 (10・11)

10は双孔となる。側縁部の面取りはやや雑で、多角形状を呈するが、仕上げ研磨は比較的丁寧である。11は破損品であるが、10同様双孔となろう。石材は軟らかい鐵石質で、灰白色を呈する。

005号墳旧表土上面 (第137～140図, 図版68)

剣形品17点、刀子1点、有孔円板13点、白玉318点で構成される。他に、未製品や剥片類が35点検出されている。

剣形品 (12～28)

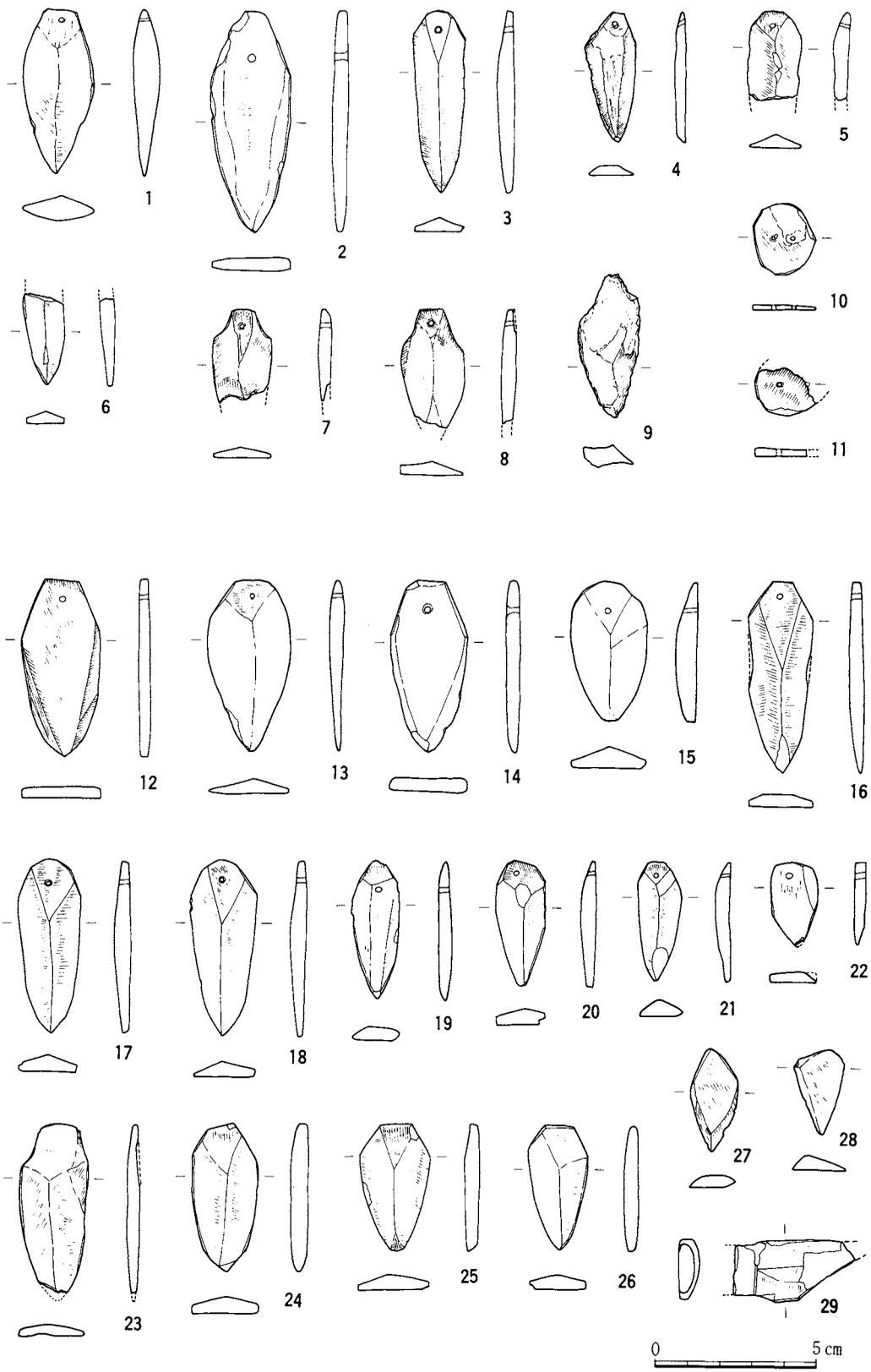
12～15は大形品で、全体に幅広である。12は偏平で、中央の稜は形成されないが、縁辺には刃部を意識した弱い稜が形成される。13は鐵石質の石材を使っているため、剝離が顕著であるが、中央に稜を有するタイプである。仕上げは丁寧で、断面三角形を呈する。14も鐵石質で、灰白色を呈する。12と同様の形状を示す。15は断面三角形形状を呈し、中央の稜が明瞭である。穿孔は両側から行われる。石材は鐵石質で、非常に軟らかく、銀色の微砂粒を多く含む。16～18は細身の大型品である。16は両側縁及び先端部を若干欠損する。全体的に直線状を呈し、丁寧な仕上げが加えられる。石材は軟質の滑石で、縞状の節理が多条みられる。17・18は同様の形態を示す。断面三角形で、硬質の滑石を利用している。19～21は細身の小形品である。19は中央に明瞭な稜を有さず、上端部が尖頭状となる。孔の位置も他とは異なる。20・21は断面三角形形状を呈する。21の石材は硬質の滑石で、黄色味がかかった灰色を呈する。22は偏平な小形品で、簡略化した造りである。刃部を表す鑄も形成されない。軟質の滑石を使っている。23～28は上端に孔が施されていない一群である。23は、002号墳7・8のように茎を意識した方形の突出部が形成される。24～26は断面三角形形状を呈し、上縁部が平坦に形成される。25・26は下半部が三角形に近くなる。27は平面菱形、28は平面三角形を呈する。全体の研磨状況から、未製品ではなく、完成品と考えられる。

刀子 (29)

29は破損品である。身部には丁寧な仕上げ研磨が加えられる。茎部は製作途中で折れてしまったようであり、破損面に再研磨を加えた痕跡が認められる。

有孔円板 (30～42)

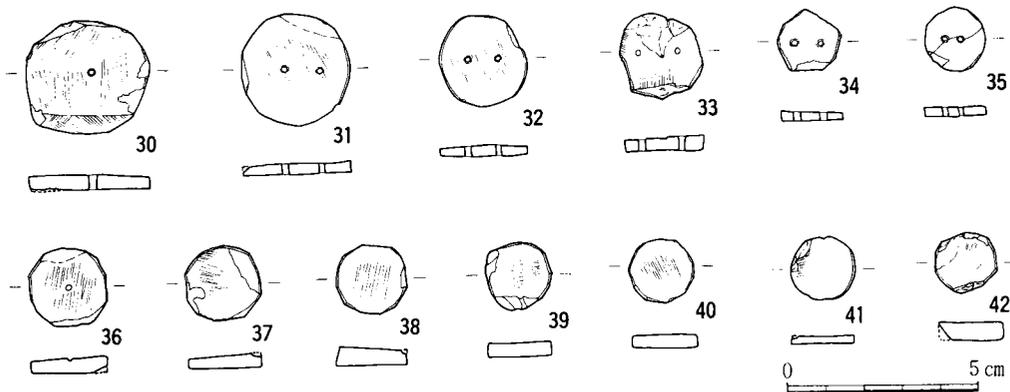
30はほぼ中央に単孔が加えられ、形態的に不整円形を呈する。図下端部は稜を有して斜位に造られている。全体に研磨されるが、特に下端部は丁寧に調整され、光沢がみられる。31～35は双孔が施される。33・34は部分的に破損しており、基本的にはすべて平面円形状を呈している。36は図中央に単孔を加えようとした痕跡が観察される。37～42には孔が穿たれていない。形態は円形を意識しているが、側面は多角形状を呈し、角を丸くする研磨は加えられていない。



第137图 002(1~11)·005(12~29)号墳旧表土上面出土石製模造品(1)

第8表 剣形品計測表

番号	長さmm	巾mm	厚さmm	重さg	孔	遺物番号
1	51.40	22.40	7.30	8.12	1	0144
2	67.85	25.00	4.80	13.05	1	0113
3	56.10	16.55	5.30	6.15	1	0112
4	40.05	16.00	3.20	2.86	1	0114
5	(28.00)	16.85	5.00	(3.27)	—	0114
6	(27.65)	12.70	4.60	(2.05)	—	0115
7	(27.55)	18.55	4.00	(2.73)	1	0116
8	(36.10)	19.70	4.20	(4.10)	1	0117
9	43.80	19.45	8.10	5.45	—	0121
12	54.00	24.70	3.75	9.10	1	0167
13	52.00	26.25	4.45	7.52	1	0055
14	52.30	24.00	4.30	9.25	1	0184
15	42.35	24.00	6.90	8.59	1	0190
16	58.10	20.10	4.75	7.46	1	0192
17	52.60	19.70	5.00	6.72	1	0170
18	53.75	21.00	5.00	6.55	1	0006
19	41.55	14.70	4.00	3.37	1	0005
20	38.25	15.75	5.00	3.58	1	0149
21	36.20	13.35	5.00	2.81	1	0006
22	25.00	14.75	3.90	2.35	1	0169
23	51.55	20.65	3.90	5.85	—	0173
24	44.90	20.40	5.25	7.80	—	0171
25	39.70	22.15	4.80	5.77	—	0007
26	38.75	19.25	4.50	4.45	—	0061
27	31.70	15.00	3.85	2.75	—	0224
28	(25.60)	16.00	4.85	(1.78)	1	0070



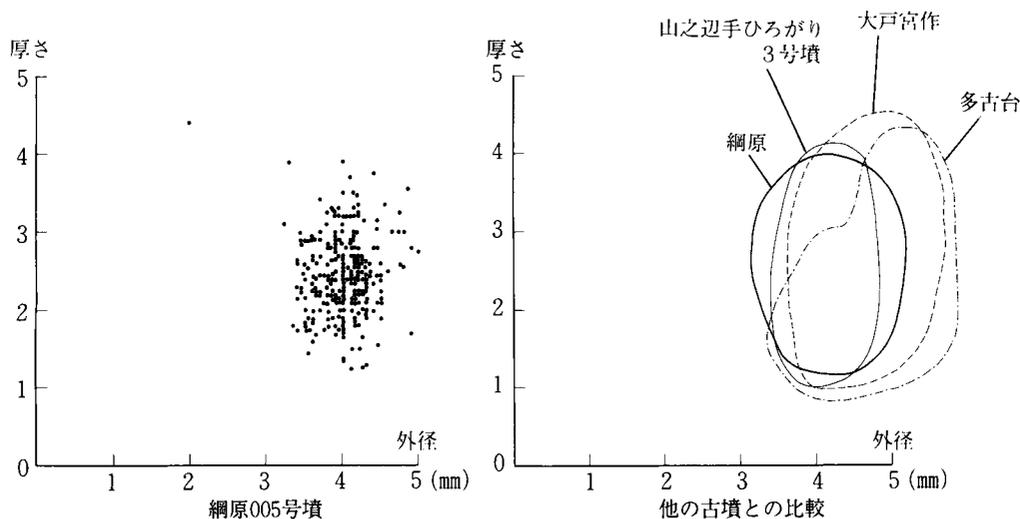
第138図 005号墳旧表土上面出土石製模造品(2)

第9表 有孔円板計測表

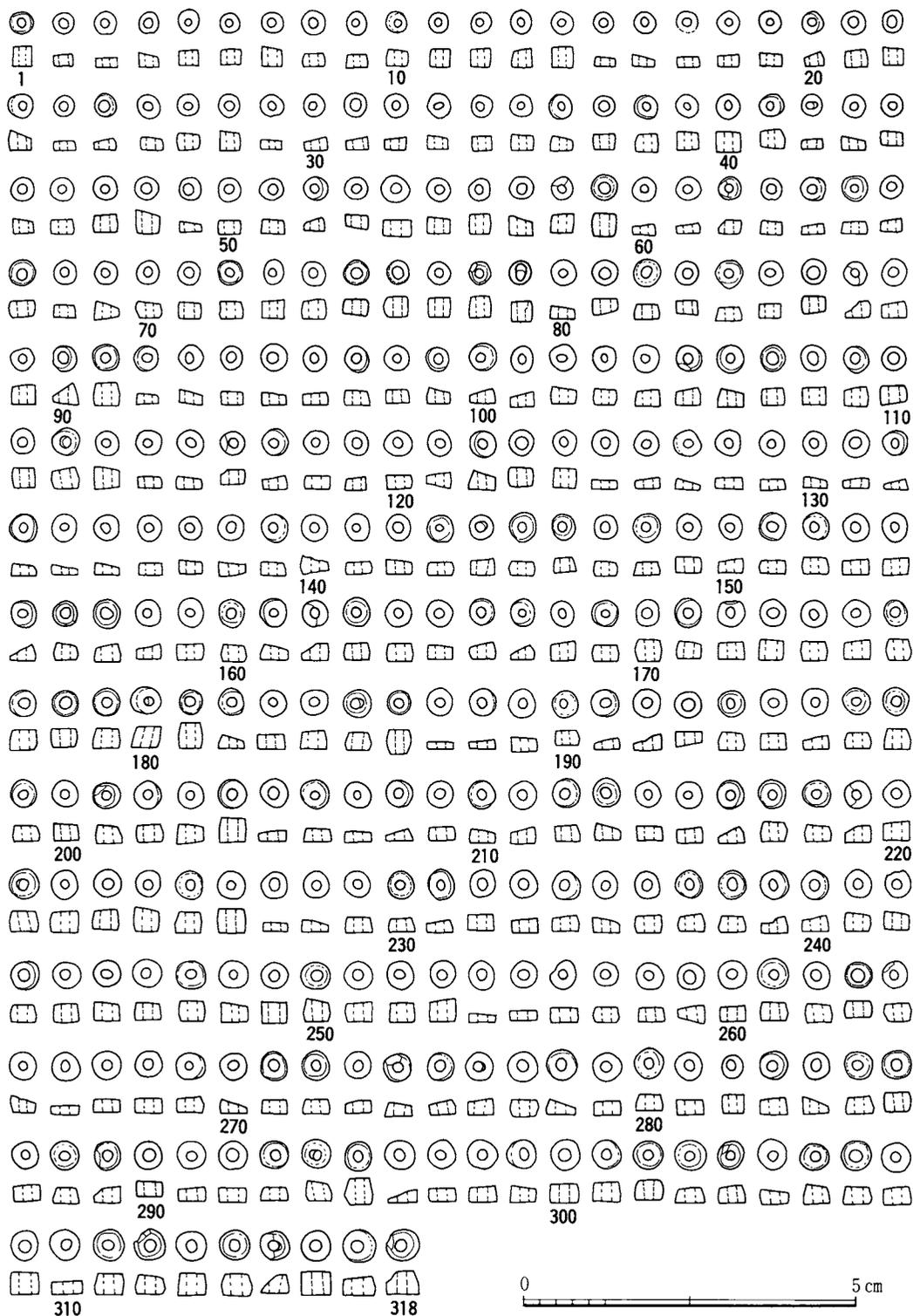
番号	長さmm (最長径)	巾mm	厚さmm	重さg	孔	遺物番号
10	22.20	18.70	2.30	1.86	2	0118
11	(20.00)	(14.40)	3.50	(1.50)	2	0135
30	32.45	28.70	4.15	6.87	1	0153
31	28.80	28.20	3.00	2.45	2	0168
32	23.55	22.15	2.75	2.63	2	0086
33	22.00	20.55	3.90	2.60	2	0098
34	16.80	15.55	2.30	0.95	2	0001
35	15.75	15.80	2.40	1.11	2	0003,0004 (接合)
36	21.60	20.75	4.15	3.14	1	0002
37	20.00	19.70	3.45	2.38	—	0054
38	18.15	12.90	4.15	2.48	—	0071
39	17.30	16.50	4.00	2.21	—	0072
40	17.20	16.40	3.35	1.71	—	0165
41	16.40	15.70	1.80	0.90	—	0129
42	16.75	14.40	4.40	2.07	—	0129

白玉 (第139・140図)

白玉は総数318点検出された。すべて滑石製である。計測値は、径が最大4.9mm、最小2.0mm、厚さは最大4.4mm、最小1.25mmを測るが、第140図で明らかのように、径4mm前後、厚さ2.5mm前後に集中する傾向がみられる。形態的にはかなりバラエティーが存在するようであるが、厚さ約2mm以上のものにはほとんど側面の稜が観察される。薄いものについては稜を形成するほどの余裕がなかったためであり、意識の中にはすべてに対して稜を造ろうとしたのであろう。白玉では古い段階の成形技法である。他の遺跡と比較すると、大戸宮作古墳・多古台古墳よりは



第139図 白玉法量分布図



第140图 005号墳旧表土上面出土石製模造品(3)

径が小さく、山之辺手ひろがり3号墳と類似する法量分布を示している。大戸宮作古墳・多古台古墳が5世紀後半、山之辺手ひろがり3号墳が5世紀初頭に位置づけられていることから、本古墳出土の白玉についても5世紀初頭段階の所産と考えることができよう。

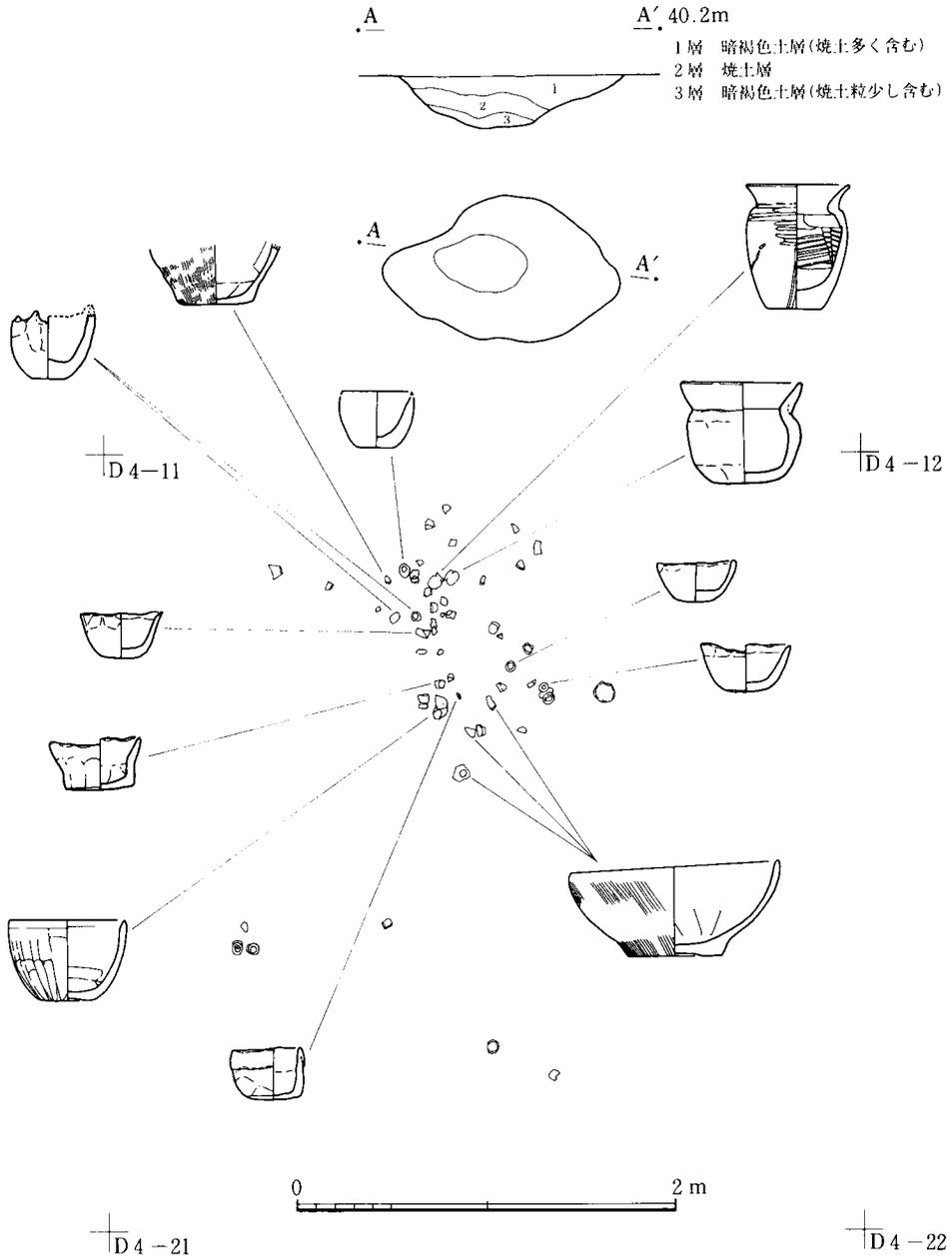
2. D4区祭祀遺構（第141図，図版49）

D4区北側，005号墳の南12m程に所在する。新期テフラ上に堆積している明褐色土中で検出され，径2m程の範囲に手捏ね土器を主体とする土器群が集中している。また，集中地点の北側1.5m程に不整楕円形を呈する土坑が1基確認された。確認層位は土器群と同様である。長径1.3m，短径0.8m，確認面からの深さ0.3mを測り，掘り鉢状の断面形を示す。覆土全体に焼土を多く含むが，伴出する遺物は認められなかった。

出土した土器群はほとんど手捏ね土器で構成されるが，他にミニチュア土器が僅かに含まれる。ただ，19の甕のミニチュアは器形的に新しい時期の可能性もある。また，出土状況からは人為的に破砕した行為は窺えないようである。

出土土器（第142図，図版69）

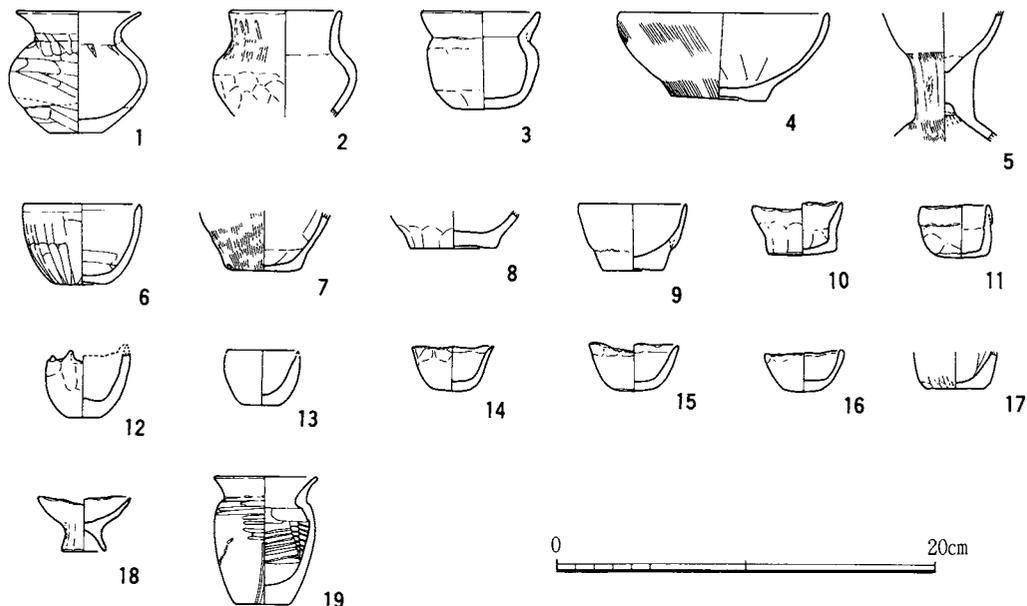
1・2は壺のミニチュアである。1はほぼ完形で，口径6.6cm，器高6.3cmを測る。口縁部は大きく外反し，胴部上半が外側に強く張り出している。底部は小さい平底である。口縁部外面上半から胴部内面はナデ調整，外面にはヘラケズリ後弱いミガキが施される。胴部と口縁部の接合部内面には強い絞りが認められる。胎土は緻密で小砂粒を多く含み，橙褐色の色調を呈する。2は部分的な遺存である。ほぼ直立する口縁部を有し，胴部は1同様強く張り出している。口縁部から胴部内面横ナデ，外面ヘラケズリで，胴部上半から口縁部にかけてやや粗い刷毛目調整が加えられる。部分的に黒斑が残る。3は鉢のミニチュアである。ほぼ完形で，口径6.4cm，器高5.2cmを測る。器肉が全体に厚い。口縁部は受け口状に外傾し，胴部の膨らみは小さい。全体にナデ調整が施され，口縁部下端には接合痕が明瞭に残る。強いナデが加えられたためか，胴部外面に粘土の割れが認められる。胎土中に小砂粒を多く含み，茶褐色の色調を呈する。4は椀となろうか。口径11.0cm，器高4.9cmを測る。体部は内湾気味に開き，底部が若干突出する。口縁部から体部内面は丁寧なナデ調整で，下端部にヘラの当たりが認められる。外面は刷毛目調整後弱いナデが加えられる。底部は未調整である。胎土は緻密で，橙褐色の色調を呈し，部分的に黒斑がみられる。5は高杯のミニチュアである。破損しているが，杯部は椀状を呈し，筒形の脚部から脚下端部が大きく外屈する形態を示すものであろう。脚部外面には刷毛目調整後ヘラケズリが加えられる。6は平底の椀のミニチュアである。内面横ナデ，外面ヘラケズリ調整で，胎土中に雲母粒を多く含む。内外面の黒斑が顕著にみられる。7・8はミニチュア土器の底部片である。9～17は手捏ね土器である。9は比較的大形で，体部中央に巻き上げ痕がみられる。10・11は箱形に近い形態を呈し，11の口縁部は折り返しとなる。12は器高が高く，



第141図 D4区祭祀遺構

底部が小さくなる。丁寧なナデ調整が加えられ、不規則ながら口唇部が把手状に摘み上げられる。13は分厚い造りであるが、調整はやはり丁寧である。14～16は器肉が薄く、小さな底部から体部が内湾気味に開く形態を呈する。14・15の口縁部は、内面に稜を有して断面三角形を示す。17は箱形となる底部片であろう。18は高杯のミニチュアであろう。全体に歪みが認められるが、薄く仕上げられ、ナデ調整も比較的丁寧である。19は完形の甕のミニチュアで、口径

5.5cm, 器高6.5cmを測る。長胴となり、口縁部が大きく外反する。口縁部内外面横ナデ、胴部外面から底部はヘラケズリ後弱いミガキが加えられる。胴部内面には小口状工具による横ナデ痕が顕著に残る。胎土中に小砂粒を多く含み、橙褐色の色調を呈する。外面には黒斑が認められる。



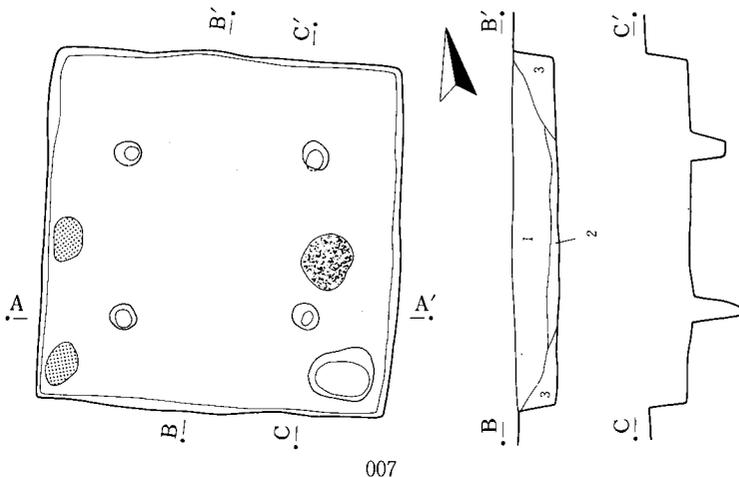
第142図 D4区祭祀遺構出土土器

4. 竪穴住居跡

調査区内から2軒の竪穴住居跡が検出されたが、いずれも西側の緩斜面に面する位置に構築される。

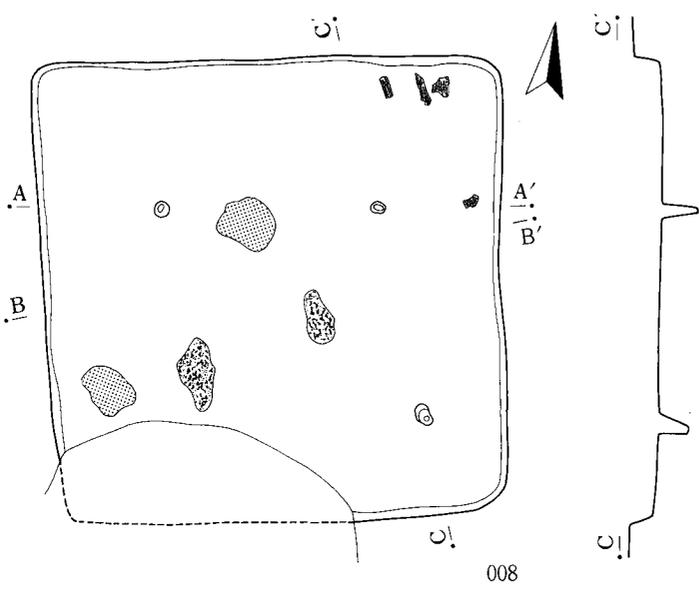
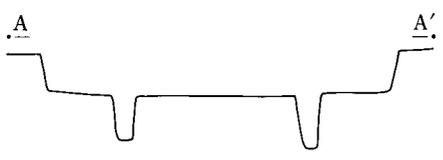
007号住居跡 (第143図, 図版48)

C3区, 003号墳の南東側4m程に位置する。新期テフラ上面で確認され、遺存は比較的良好である。平面形は正方形を呈し、東西長・南北長とも4.6mを測る。炉を通る主軸はN-101°-Eを指す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、軟質である。壁高は現存する部分で0.5m程を測るが、調査段階でソフトローム上面まで確認面を下げているため、確認された新期テフラ上面からの深さは0.9m程となろう。床面はハードローム上面に形成されるが、やや凹凸がみられ、それほど堅緻ではない。床面積は20.2㎡を測る。柱穴は対角線上に4本検出された。柱間は、東西2.5m, 南北2.1m間隔で、床面より0.5~0.7mの深さである。南東コーナーには85×70cm, 深さ20cmを測る不整長方形の貯蔵穴が掘り込まれる。炉は東側の柱穴間やや南寄りに位置する。60×70cmの略円形プランを呈し、深さ5cm程の皿状となる。底面に焼土が薄く遺存し、その上に焼



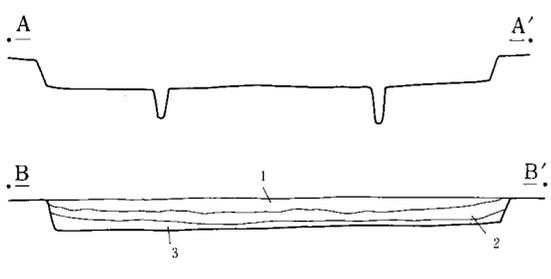
007

- 1層 黒褐色土層
- 2層 暗褐色土層(ロームブロック少し含む)
- 3層 褐色土層



008

- 1層 黒色土層
- 2層 黄褐色土層
- 3層 明褐色土層



第143図 007・008号竪穴住居跡

土を含む褐色土が堆積する。覆土は自然堆積の様相を示す。

遺物の出土は少なく、しかも覆土中となるものが多いが、4～6は床面中央付近からの検出である。

008号住居跡（第143図，図版48）

C5区，004号墳の南側に隣接する。南側が大きく攪乱されるが，遺存は比較的良好で，平面形は1辺6.0mの正方形を呈する。炉を通る主軸はN-80°-Eを指す。壁はほぼ垂直に立ち上がり，確認面からの壁高は30～35cmを測る。床面はソフトローム中に形成され，きわめて軟弱である。床面積は33.7㎡を測る。柱穴はやや中央に寄った位置に3本検出された。南西側は攪乱により削平されたものと思われる。いずれも径20cmと小規模な円形を呈し，深さは40～50cm程である。貯蔵穴は検出されなかった。炉は2か所認められる。東側は長軸75cm，短軸35cmを測る不整形を呈し，底面が著しく被熱している。西側は長軸90cm，短軸50cmのやはり不整形を呈し，底面に焼土ブロックが多く遺存している。両者の新旧関係は不明瞭であるが，炉の位置と東側がかなり使用された様相を示していることを考えると，主たる炉は東側で，後に西側に作り替えられたことが想定される。覆土中層にローム粒を多く含む黄褐色土が堆積していることから，本住居はある程度埋め戻された可能性が高い。

遺物の出土はきわめて多いが，27の甕が床面上に正位で遺存するのみであり，他は床面から5～10cm程上位に一括して検出された。ほぼ同一レベルに高杯・壺・甕が遺存しており，北東側に集中する傾向が強い。この出土状況から，これらの土器群は本住居はある程度埋め戻した後一括して廃棄されたことが予想される。

出土遺物（第144・145図，図版70・71）

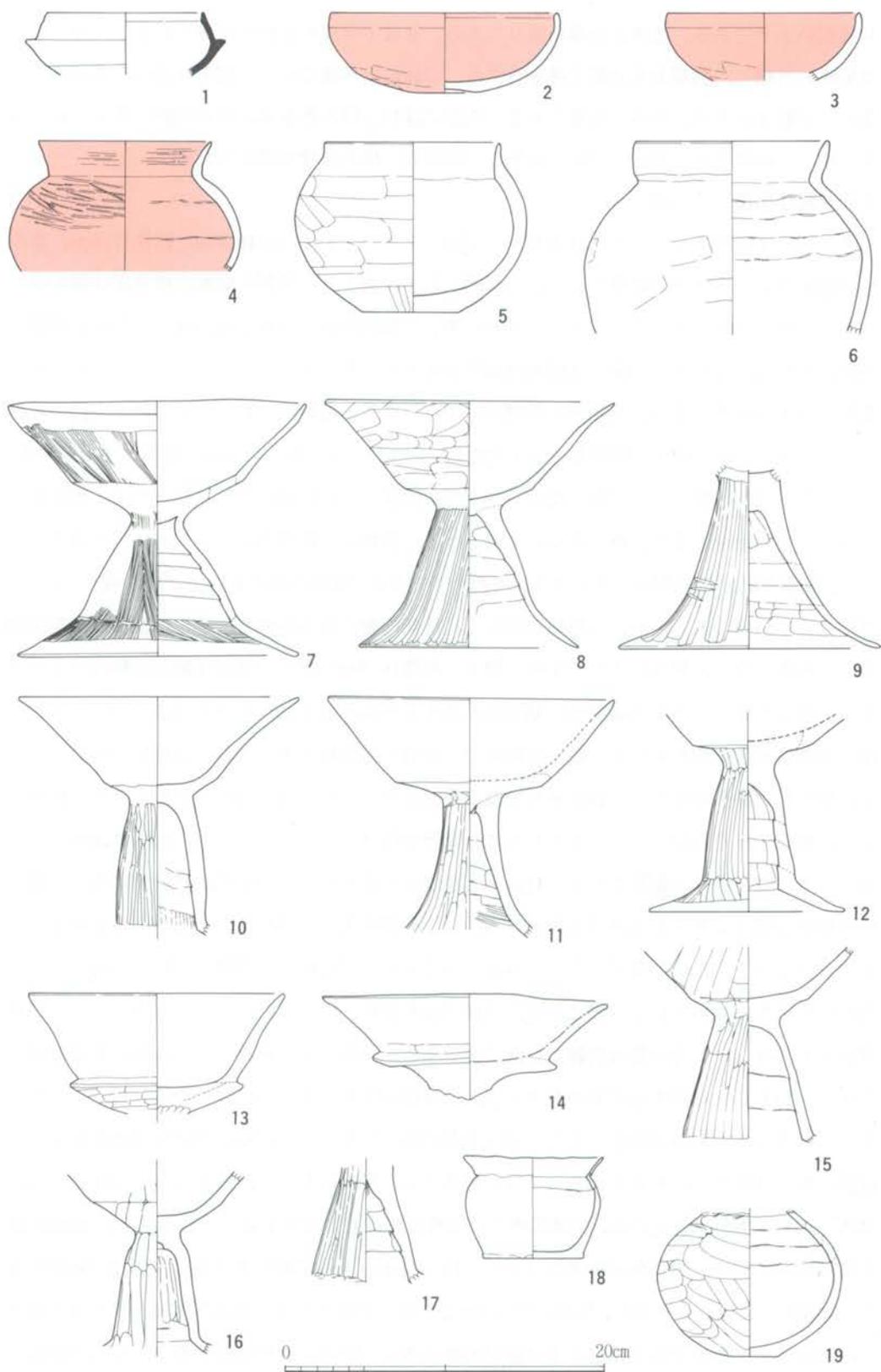
007号住居跡（1～6）

1は全体の $\frac{1}{3}$ 程遺存する須恵器の杯身である。推定口径9.9cm，立ち上がり高1.7cmを測る。立ち上がり及び受部端部は全体にややあまくなり，体部下半には時計回りの回転ヘラケズリが加えられる。胎土は緻密で，白色粒子及び黒色吹き出し物を含む。色調は暗青灰色を呈する。田辺編年のTK47段階の所産と考えられる。2・3は内外面赤彩の土師器杯である。2は推定口径14.4cm，器高5.0cmを測り，口縁部が緩く内湾する。底部は小さい平底で，若干窪み，外面にまで赤彩が及んでいる。全体に丁寧なナデ調整が加えられるが，体部外面下半にヘラケズリが残る。胎土はやや粗く，小砂粒を多く含む。3も2と同様の形態・調整であるが，全体に小さくなる。4・5は広口の壺となろうか。4は口縁部が外側に屈曲し，胴部の膨らみが強い。口縁部から胴部外面には丁寧なミガキ，胴部内面にはナデが加えられる。また，胴部内面には粘土紐の巻き上げ痕が2条残る。胎土は緻密で小砂粒を多く含み，胴部外面から口縁部内面にかけて赤彩が認められる。5はほぼ完形で，口径11.2cm，器高7.5cmを測る。口縁部は短く直立し，胴部中央に最大径を有する。調整は，口縁部内外面横ナデ，胴部内面ナデ，外面ヘラケズ

り後弱いナデである。全体に分厚い造りである。6は下半部を欠損する甕である。口縁部は内湾気味に外傾し、胴部上半に最大径を有する。口縁部内外面横ナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ調整されるが、全体に粗雑である。内面には粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残る。胎土はやや粗く、砂粒を多く含む。全体に被熱し、部分的に煤の付着が認められる。

008号住居跡(7~30)

7~17は高杯である。7~9は脚が大きく開くタイプ、7は口径18.6cm、裾径17.6cm、器高15.5cmを測る。杯部下方に稜を有し、口縁部が若干内湾する。杯部と脚部の接合部は強く絞り込まれ、脚は中膨らみを呈して大きく外側に開く。脚部内面には粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残る。外面及び裾内面の一部には刷毛目調整が施され、部分的にナデが加えられる。胎土中に長石・石英粒を多く含み、赤褐色の色調を呈する。全体に被熱しており、特に杯部内面の荒れが顕著である。8は杯部と脚裾部を若干欠損し、口径18.4cm、裾径14.0cm、器高15.0cmを測る。7とはやや形態が異なり、杯部の稜がやや下方に位置し、口縁部が外反気味となる。脚部も7に比してやや細身となり、裾の広がりも弱くなる。調整は、杯部外面ヘラケズリ、内面丁寧なナデ、脚部外面縦位の弱いヘラミガキ、内面ナデである。脚部内面に巻き上げ痕が残り、胎土・色調は7と同様である。やはり被熱が激しく、杯部内面の剝落が顕著である。9は杯部を欠損する。長脚となり、滑らかにハの字状に開く。裾径16.3cmを測る。外面は縦位の粗いヘラミガキ、内面は丁寧なヘラナデ調整で、粘土紐の巻き上げ痕が残る。外面中央には部分的に線状の深い研磨痕が数条認められる。胎土は緻密で、雲母・赤色粒を多く含み、淡褐色の色調を呈する。10・11は脚裾部を欠く。10は8と同様の杯部を有するが、脚部はやや中膨らみの円柱状を呈し、裾が大きく外屈するものと思われる。脚部外面は丁寧なヘラミガキ、内面には巻き上げ痕とともに強い絞りが観察される。11は9と類似する脚を有し、口縁部が直線的に開く。脚と杯の接合は臍による差し込み式と思われる。12は杯部を欠く。円柱状の筒部から裾が大きく外屈するタイプで、10と同様であろう。外面ヘラミガキ、内面横ナデ調整で、杯との接合部には強い絞り込みが認められる。13は推定口径16.0cmを測り、杯部が口径に比して深くなる。口縁部は若干外反し、下方の稜は明瞭に外側に突出する。全体にナデ調整され、内面の剝離が顕著である。14も13と類似する杯部を有するが、口縁部の外反が大きく、浅くなる。以上の高杯はすべて杯部内面の剝離が顕著である。18は小形の鉢で、推定口径8.8cm、器高6.2cmを測る。口縁部は短く外傾し、折り返し状を呈する。胴部上半に最大径を有し、底部は突出気味となる。全体に指ナデ調整が加えられ、口縁部直下に明瞭な巻き上げ痕が1条みられる。胎土は緻密で、小砂粒を多く含み、暗褐色の色調を呈する。19~21は造りの丁寧な壺である。19は口縁部を欠く。胴部中央に最大径を有し、底部は径3.3cmと小さな平底となる。胴部外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ調整で上半に巻き上げ痕が明瞭に残る。胎土はやや砂質を帯び、長石小砂粒を多く含む。全体に被熱し、外面下半には煤の付着が認められる。20・21はほぼ完形で、形態・



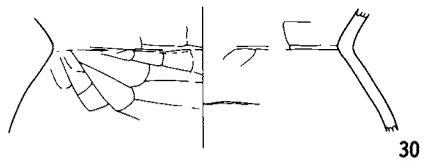
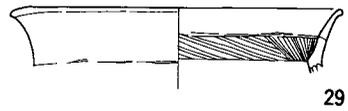
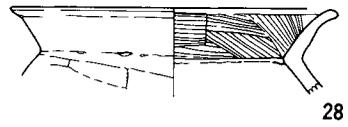
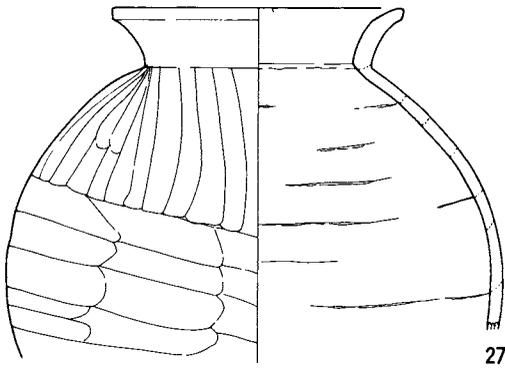
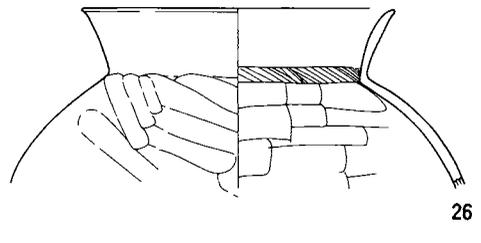
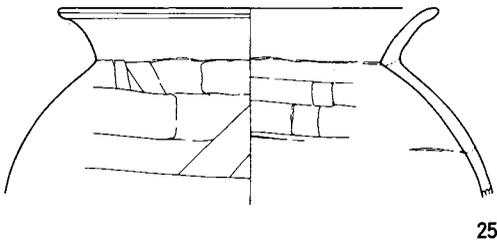
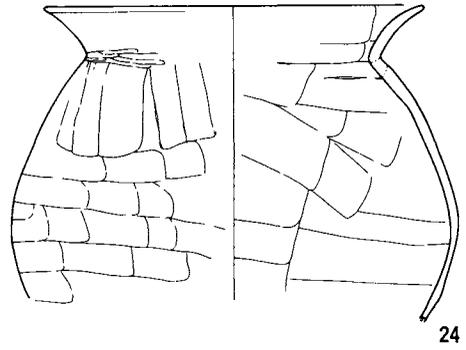
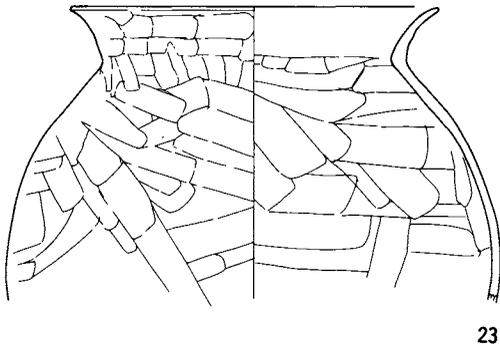
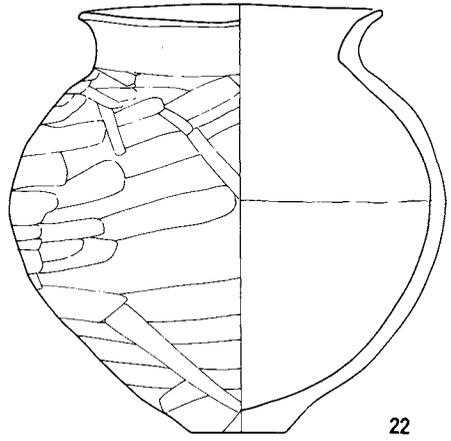
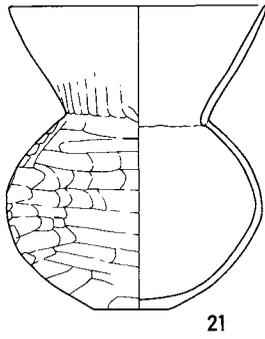
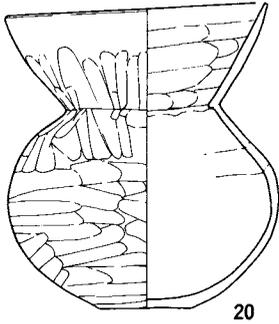
第144图 007(1~6)·008(7~19)号竖穴住居跡出土土器

調整・法量等同様である。口径13.8cm，器高16.0cmを測る。口縁部はくの字状に開き，若干内湾する。胴部は球形を呈し，ほぼ中位に最大径を有する。底部は平底となる。外面はヘラケズリ後ナデ，内面は丁寧なナデが加えられる。胎土中に長石・石英の小粒子を多く含むが，20は砂質を帯びる。色調は20が淡褐色，21が赤褐色を呈する。22～30は甕である。22は比較的厚手の造りである。ほぼ完形で，口径17.0cm，器高22.0cmを測る。口縁部は短く立ち上がり，口唇部で大きく外反する。胴部は上半に最大径を有し，下半部が急激にすぼまる。底部はやや突出気味となる。口縁部内外面横ナデ，胴部内面ヘラナデ，外面ヘラケズリ調整を施す。胎土は緻密で小砂粒を多く含み，黄褐色の色調を呈する。二次的に火を受けたようで，部分的に煤の付着が認められる。23・24は全体に薄手の造りである。口縁部は大きく外反し，胴部中位に最大径を有する。調整は，口縁部内外面横ナデ，胴部内外面ヘラケズリ後ナデである。胎土は緻密であるが，小砂粒を多く含むため砂質を帯びる。23の内外面には煤の付着が激しい。25は口縁部の屈曲が大きくなり，胴部が球形状を呈する。胴部内面ヘラナデ，外面ヘラケズリ調整で，胎土はきわめて良好である。黄褐色の色調を呈する。26は24と同様の胎土で，口径に比して胴部が大きくなる。27は厚手の造りで，口径15.4cmを測る。他の甕に比べて口縁部が小さく，壺形に近くなる。口縁部は肥厚し，端部が平坦となり，胴部中央に最大径を置く。口縁部横ナデ，胴部外面ヘラケズリ，内面ヘラナデ調整で，内面には粘土紐の巻き上げ痕が残る。外面下半には焼成時の黒斑が認められ，内面は器壁の剝落が顕著である。

5. グリッド出土土器（第146図，図版72）

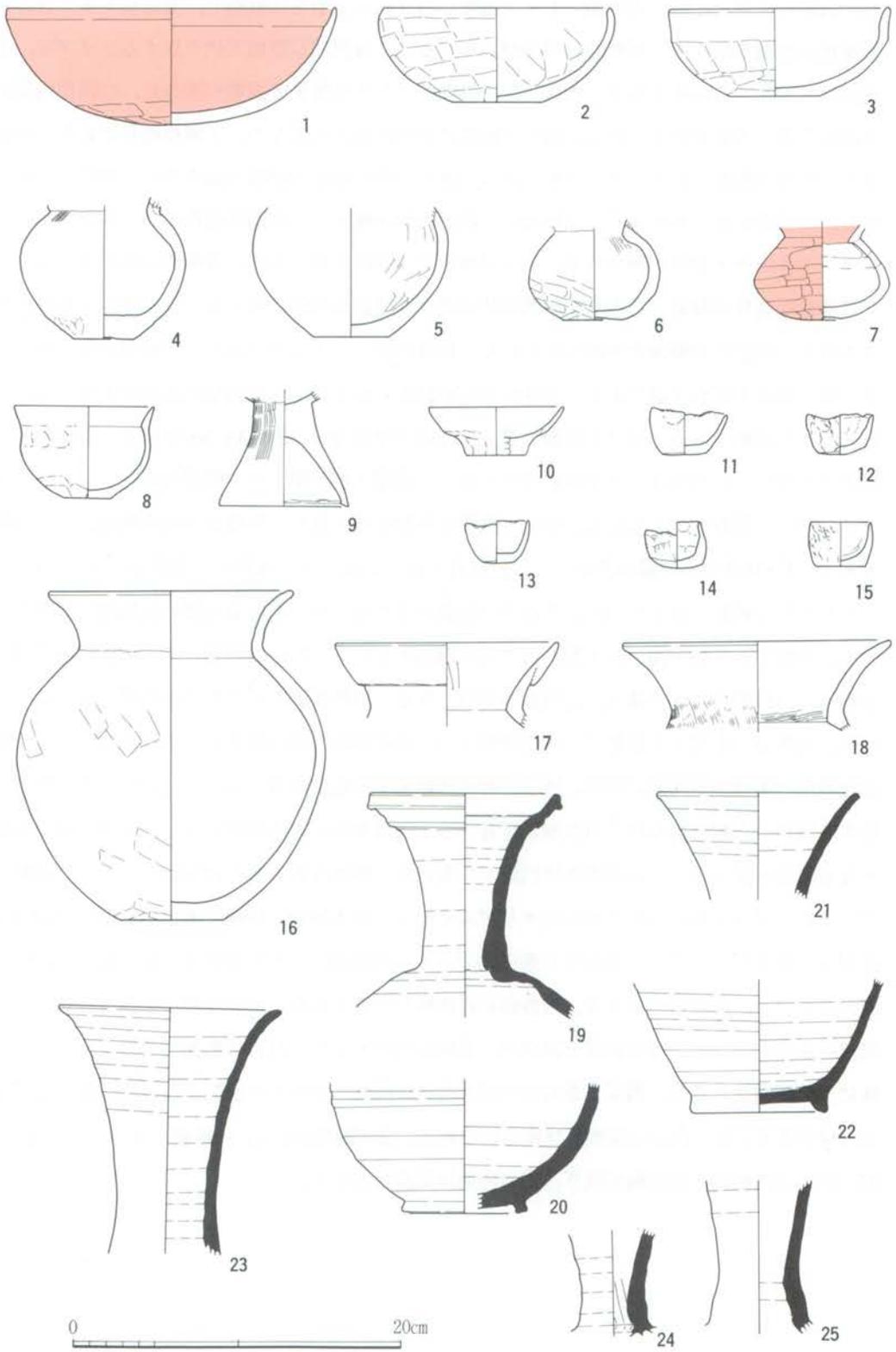
ここでは，古墳時代以降のグリッド出土土器を一括して説明する。

1～3は土師器の杯である。1は推定口径20.1cm，器高7.1cmを測る大形品で，丸底となる。体部は球形を呈し，口縁部内面には明瞭な稜が形成され，受け口状を示す。内外面とも丁寧なナデ調整が加えられ，赤彩が施される。胎土は緻密で，雲母粒を多く含み，外面は被熱による器壁の荒れが認められる。2は口径14.0cm，器高5.8cmを測る。体部は球形を示し，底部は平底となる。口縁部は丁寧なナデ，体部内面はヘラケズリ後ナデ，外面はヘラケズリが施される。小砂粒を多く含み，黄褐色の色調を呈する。3は全体に分厚く，造りが粗くなる。口縁部は直線的に立ち上がり，口縁下の稜は弱い。体部はやや丸味を有し，底部は小さく造られる。胎土は粗く，小砂粒を多く含み。黄褐色の色調を呈する。4・5は小形壺で，口縁部を欠く。4は分厚い造りで，胴部上半に最大径を有する。底部中央が一段窪んでいる。内外面ともナデ調整で，外面上端に細かい刷毛目痕が残る。胴部下端には指によるナデが加えられるが，粘土が乾いてから行ったようで，割れが顕著に認められる。胎土は緻密で小砂粒の混入も少なく，黄褐色の色調を呈する。5は球形胴を示し，内外面ともナデ調整される。胎土はやや砂質を帯び，大砂粒を含む。器面の摩耗が激しい。6・7は埴で，いずれも口縁部を欠く。6は球形胴を呈



第145图 008(20~30)号竖穴住居跡出土土器

し、底部は平底となる。内外面ともナデ調整が施される。胎土は緻密で、雲母粒を多く含み、黄褐色の色調を呈する。部分的に黒斑がみられる。7は胴部が算盤玉状を呈するタイプで、平底の底部が小さく形成される。内面ナデ、外面ヘラケズリ後ナデ調整が施され、口縁部内面から胴部全面に赤彩が加えられる。胎土は緻密で砂粒の混入も少なく、丁寧な造りである。外面上半に黒斑が観察される。8は小形の鉢で、推定口径8.6cm、器高5.5cmを測る。胴部は球形を呈し、口縁部が緩く外反する。口縁部から胴部内面は横ナデ、胴部外面指ナデ、外面下端にはヘラケズリ後ナデ調整が施される。胎土は緻密で小砂粒を多く含み、赤褐色の色調を呈する。9は器台か高杯の脚部であろう。内湾気味に開き、端部が内側に折り返されたような痕跡が認められる。刷毛目調整後ナデが加えられる。10は杯のミニチュアであろう。底部が厚く残される。11～15は手捏ね土器である。全体に歪みが認められるが、ナデ調整は比較的丁寧である。底部もナデ調整である。16は土師器の甕で、推定口径15.2cm、器高19.5cmを測る。胴部上半に最大径を有し、口縁部はくの字状に外反する。口縁部丁寧な横ナデ、胴部内面ナデ、外面ヘラケズリ後ナデ調整が加えられる。胎土は緻密で砂粒を多く含む。色調は外面赤褐色、内面黒色である。17・18は壺の口縁部であろう。17は折り返し口縁、18には刷毛目調整痕が認められる。いずれもやや砂質の胎土を示し、黄褐色の色調を呈する。19～25は須恵器の長頸壺片である。胎土、調整等より19・20、21・22が各々同一個体となろう。19は口頸部片で、推定口径11.6cmを測る。口縁部で大きく開き、口唇部が平坦となる。口唇部下方には太めの凸帯が1条巡っている。内外面とも横ナデ調整で、頸部内側下方には成形時の強い絞りが認められる。また、胴部と頸部の接合痕が内側に明瞭に残る。胎土は緻密で黒色粒の混入が目立ち、灰白色の色調を呈す。頸部から胴部にかけて自然釉が付着する。20は丸味のある胴部を有し、底部も突出気味となる。高台は小さく、底面中央に凹線が1条巡る。胴部外面下端には回転ヘラケズリ調整が加えられ、見込み部には自然釉の溜まりがみられる。胎土等19と同様である。21は口径12.4cmを測る口縁部片で、大きく外反する素口縁である。内外面ともナデ調整で、胎土中の小砂粒の混入は少なく、灰白色を呈する。内外面に自然釉が付着するが、外面は熱が高かったためか、気泡状を呈している。22は胴部が直線的、底部も平坦となる。高台は断面三角形を呈する。全体にナデ調整されるが、胴部下端及び底部外面には回転ヘラケズリが加えられる。胎土等は21と同様である。23～25は口頸部及び頸部片である。23は頸部が長く、口縁部で大きく外反する。23～25には濃緑色の自然釉が残り、23の内面は気泡状となる。



第146図 グリッド出土土器

第3節 歴史時代

本遺跡から検出された歴史時代の遺構は、蔵骨器を利用した火葬墓2基のみである。

火葬墓（第147図，図版49）

1号火葬墓

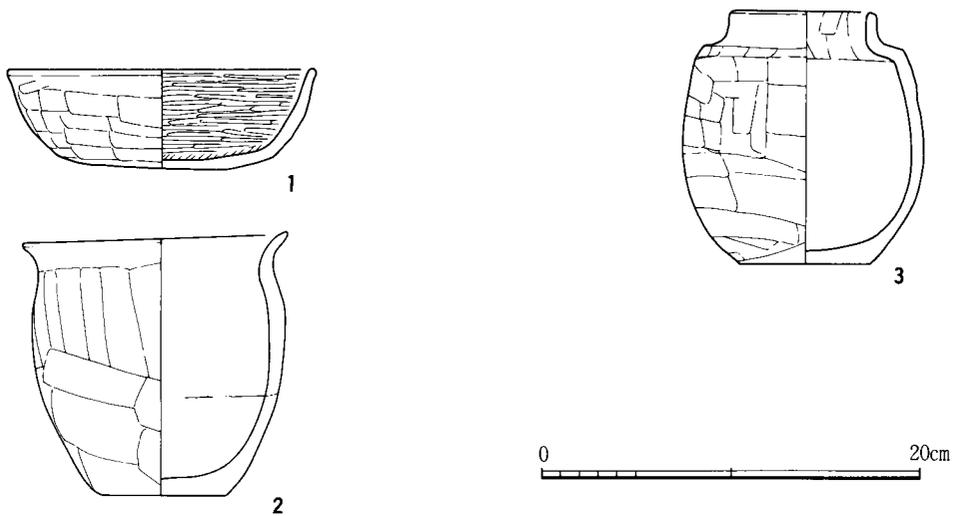
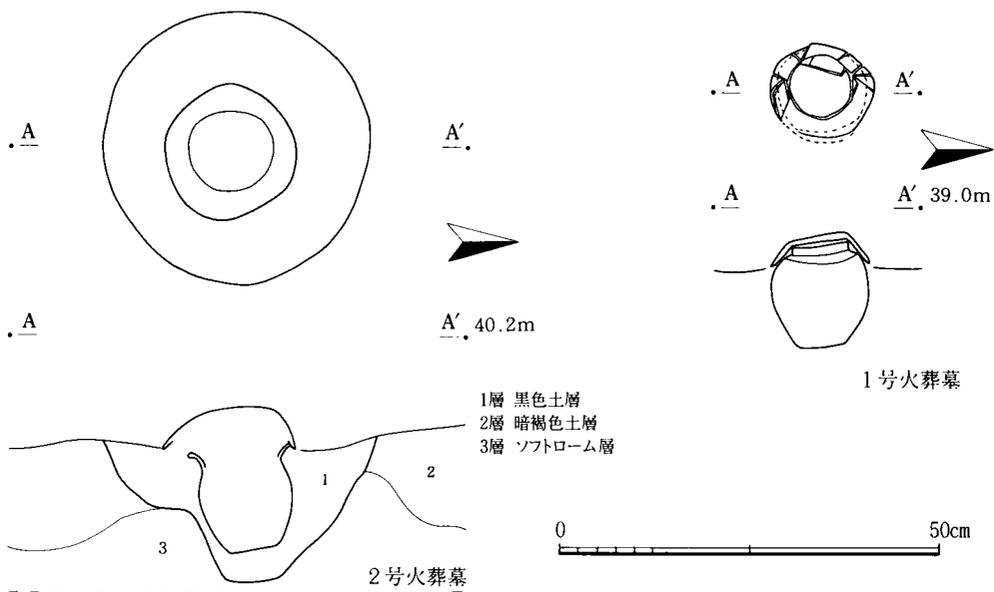
C3区，003号墳の東2m程に位置し，新时期テフラ面で確認された。倒位状態の土師器杯を蓋とし，小形の壺を身とする蔵骨器を埋葬施設としている。壺内部の人骨の遺存は認められず，蔵骨器に伴う土壌状の掘り込みも確認されなかった。

2号火葬墓

C4区，007号住居跡の南6m程に位置する。確認面は新时期テフラ面である。蔵骨器を内部に含む土壌が掘り込まれている。土壌は，径35cmの円形を呈し，確認面から20cmの深さを測る。壁・底面とも軟質で，土壌内には黒色土が充填されていた。蔵骨器は，倒位に伏せられた土師器の杯を蓋とし，小形の甕を身としている。甕の内部からは，人骨らしい骨片が2点検出されたが，年齢・性別等詳細は判別不能である。

出土土器（第147図，図版71）

1・2は2号火葬墓の蔵骨器である。1は完形の杯で，口径16.2cm，器高5.2cmを測る。全体に厚手の造りである。体部は若干内湾気味に開き，口縁部でやや外反する。底部は平底気味となり，体部の立ち上がりは不明瞭である。口縁部外面は丁寧な横ナデ，体部内面はミガキ，外面はヘラケズリ調整が施される。胎土はやや粗く，長石粒を主体とする小砂粒を多く含み，赤褐色の色調を呈する。外面は，被熱による器壁の剝離が顕著で，内面にはタール状の炭化物の付着が観察される。2は完形の小型甕である。口径13.9cm，器高13.6cmを測る。口縁部は短く外反し，胴部は上半に最大径を有する。口縁部内外面横ナデ，胴部内面丁寧なヘラナデ，外面ヘラケズリ調整が施される。胎土はやや粗く，長石等の砂粒を多く含む。色調は赤褐色を呈し，内外面に煤の付着が認められる。3は1号火葬墓の蔵骨器である。完形の小型壺で，特徴的な器形を示す。口径7.3cm，器高12.0cmを測る。口縁部は短く直立し，肩が水平状に開き，明瞭な稜を有する。胴部はやや丸味を呈し，ほぼ中位に最大径を持つ。口縁部外面から胴部内面は丁寧な横ナデ，胴部外面はヘラケズリ後弱いミガキが加えられる。底部には木葉痕が残り，再調整は認められない。胎土は緻密で砂粒の混入は少なく，橙褐色の色調を呈する。口縁部から肩にかけて部分的に炭化物の付着が観察される。1号火葬墓には蓋となる土師器の杯が出土しているが，残念ながら所在が不明なため詳細な様相は不明である。写真から見る限り，口径と底径の差が小さく，体部が直線的に開く形態である。8世紀代の所産であろう。



第147図 火葬墓及び出土土器

第4章 綱原屋敷跡遺跡

第1節 縄文時代

本遺跡から検出された縄文時代の遺構は土坑9基のみで、比較的散在とした分布状況を示している。

1. 土坑

101号土坑 (第150図)

調査区中央B2区に所在する。長軸1.9m、短軸1.0mを測り、平面形は、上端長楕円形、下端長方形を呈する。陥し穴となろう。壁はしっかりと掘り込みで、確認面からの深さは1.8mを測る。底面は平坦である。覆土は全体に軟質で、ローム粒・ロームブロック・炭化粒を若干含む。土層状況より自然堆積と考えられる。

遺物の出土はなかった。

102号土坑 (第150図)

B2区、101号土坑の西8m程に位置する。西側で203号土坑と重複するが、土層状況等より本遺構の方が古いことは明瞭である。長軸1.8m、短軸1.4mを測り、平面形はやや不整な長楕円形を呈する。101号土坑同様陥し穴となろう。壁は比較的良好に掘り込まれるが、崩落が激しい。確認面からの深さは1.6mで、底面は平坦である。覆土中のローム粒及びロームブロックの混入は全体的に多いが、特に下層は顕著である。

覆土中より、縄文時代早期から後期にかけての土器片が42点検出されたが、本土坑に伴うものではないようである。

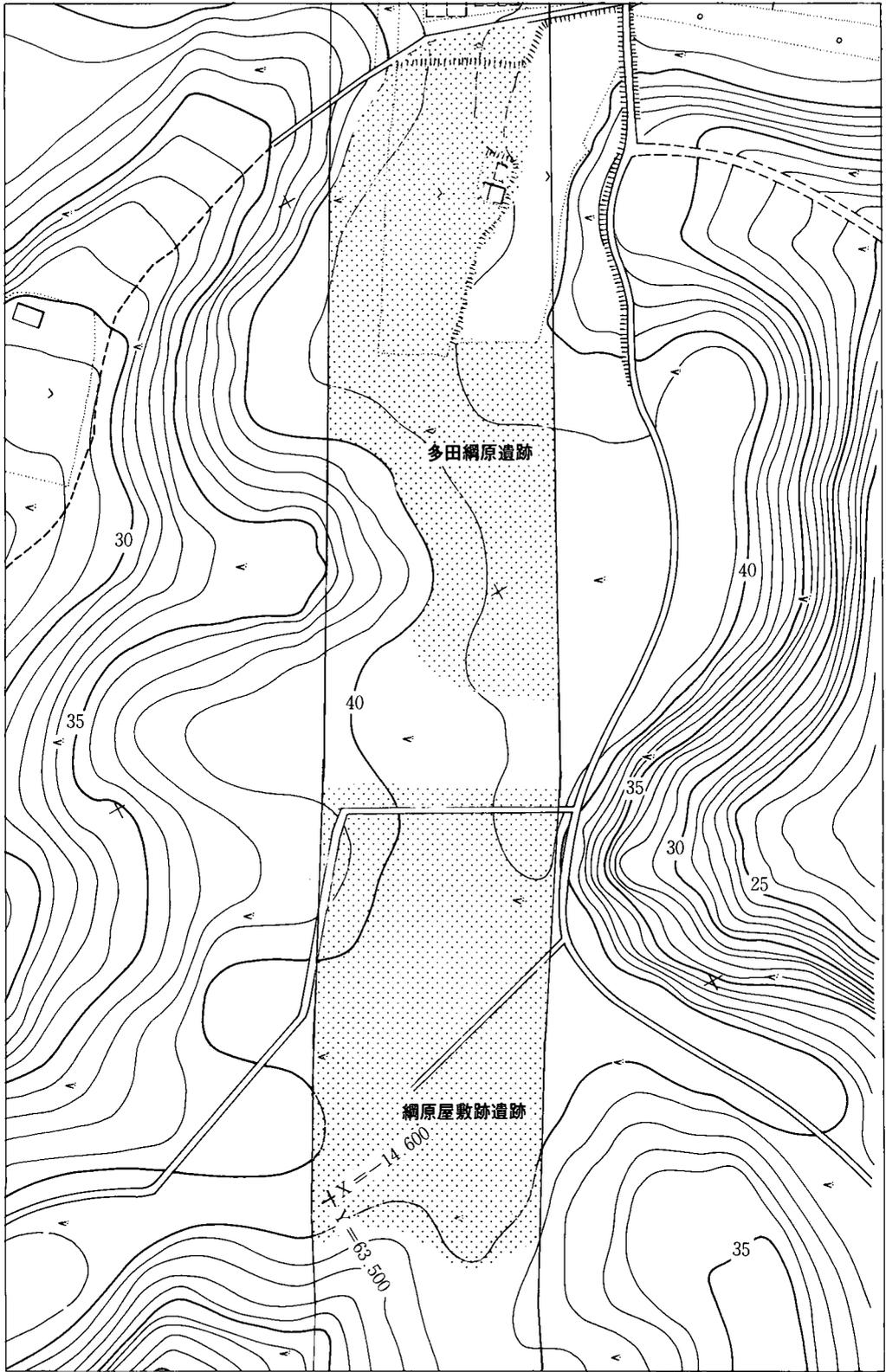
106号土坑 (第150図)

C2区ほぼ中央、101号土坑の北12m程に位置する。長軸1.3m、短軸0.8mを測り、楕円形のプランを呈する。壁は斜位に立ち上がり、壁面の凹凸が顕著である。底面は2段に掘り込まれ、最も深い部分で確認面から0.4mを測る。底面の掘り込みは、長軸0.7m、短軸0.4mである。覆土中にはローム粒を僅かに含む。

遺物の出土は少なく、覆土中より前期末～中期初頭および後期の土器片が4点検出されたのみである。

112号土坑 (第150図、図版73)

C2区、106号土坑の北2m程に所在する。旧石器時代の確認調査中に検出されたため東側の3/4程が攪乱されている。推定規模は、長軸1.2m、短軸0.9mを測り、楕円形プランを呈する。



第148図 綱原屋敷跡・多田綱原遺跡周辺地形図(1/1,500)



第149図 綱原屋敷跡遺跡遺構配置図(1/1,000)

壁は斜位に立ち上がり、確認面からの深さ0.4mを測る。底面は比較的堅緻で、凹凸が激しい。覆土中にローム粒及びロームブロックを比較的多く含んでおり、土層状況より埋め戻された可能性が高い。

底面に接して、縄文時代前期の深鉢・小形の鉢・浅鉢がほぼ完形で3個体検出された。完形ではなく、同一個体が離れた位置に遺存している状況と、覆土が埋め戻しということを考え合わせると、埋置段階で意図的に破損し、埋納された可能性が高いであろう。土墳墓となるのであろうか。

1 1 3号土坑 (第150図)

C 2区北西端に所在する。長軸1.5m、短軸0.8mを測り、楕円形のプランを呈する。壁は斜位に立ち上がり、確認面からの深さは0.2m前後である。底面はほぼ平坦で、比較的堅緻である。覆土は全体に軟質で、ローム粒・焼土粒・炭化粒を僅かに含む。

遺物の出土は少なく、前期後半の土器小片が3点検出されたにすぎない。

1 1 4号土坑 (第150図)

C 2区北西端、113号土坑の東側に隣接する。平面形は不整形円形を呈し、規模は、長径0.9m、短径0.8mを測る。壁は斜位に立ち上がり、確認面からの深さ0.1m程である。底面はほぼ平坦で、良好に踏み固められているようである。覆土中にはローム粒の混入が目立つ。

底面直上の北東壁下と南西壁下に分かれた状態で、前期の興津式土器の深鉢が1個体分検出された。また、北西壁直下から石匙が1点出土している。112号土壇同様土墳墓となろうか。

1 1 5号土坑 (第150図)

C 1区に所在し、105号土坑と重複する。遺構の切り合いより本土坑の方が古い時期の所産と考えられる。平面形は略円形を呈し、規模は、長径0.9m、短径0.8mを測る。壁は斜位に立ち上がり、確認面からの深さ0.3mである。底面はやや凹凸が目立ち、中央に向けて若干深くなる。

遺物の出土は少なく、前期の土器片が3点検出された程度である。

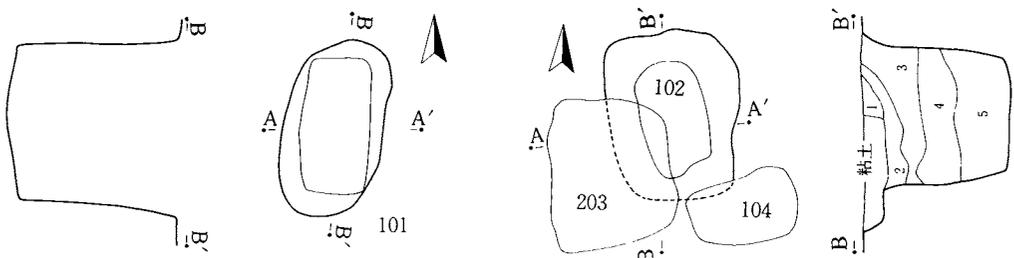
1 2 2号土坑 (第150図)

調査区南西側B 1区に所在するが、西側が調査区外に延びるため詳細は不明である。確認された部分から、平面形は隅丸方形に近く、1辺2.5m程となろう。壁は斜位に立ち上がり、確認面からの深さ0.9mを測る。断面形は掘り鉢状に近くなる。底面は小さく、比較的凹凸が目立つ。覆土中にローム粒及び炭化粒を僅かに含み、しまりは全体に良好である。

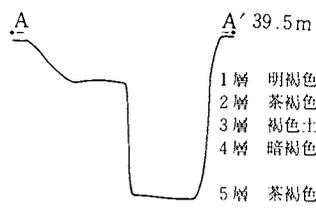
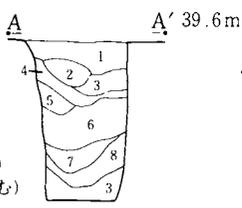
遺物の出土は比較的多く、早期から後期にかけての土器片が207点検出された。中期が全体の90%を占めている。その中では、無文が123点と主体的であり、他に五領ヶ台式土器が27点出土している。

1 2 3号土坑 (第150図)

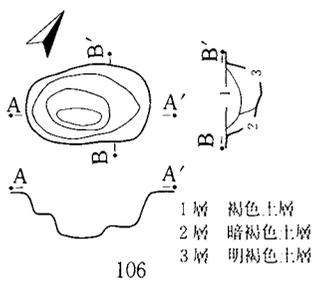
A 3区からB 3区にかけて所在する。平面形は不整形楕円形を呈し、規模は、長軸1.9m、短軸



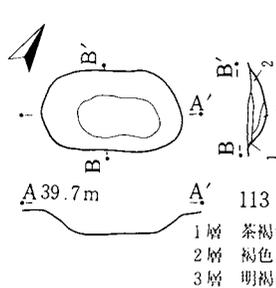
- 1層 褐色土層
- 2層 暗褐色土層
- 3層 褐色土層(ローム粒少し含む)
- 4層 茶褐色土層
- 5層 暗褐色土層(炭化粒少し含む)
- 6層 茶褐色土層(粒子粗く、ボソボソ)
- 7層 褐色土層(ロームブロック少し含む)
- 8層 暗褐色土層(ロームブロック少し含む)



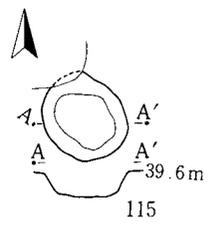
- 1層 明褐色土層(ローム粒多く含む)
- 2層 茶褐色土層(ローム粒含む)
- 3層 褐色土層(ロームブロック含む)
- 4層 暗褐色土層(ローム粒・ロームブロック含む)
- 5層 茶褐色土層(ロームブロック多く含む)



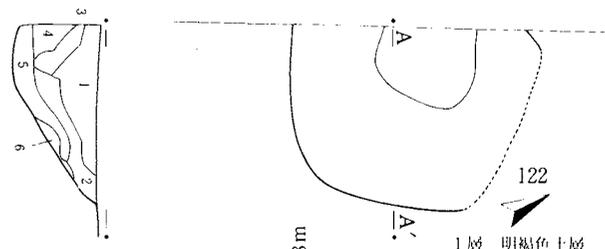
- 1層 褐色土層
- 2層 暗褐色土層
- 3層 明褐色土層



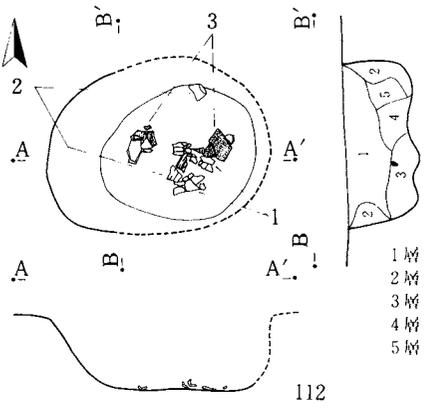
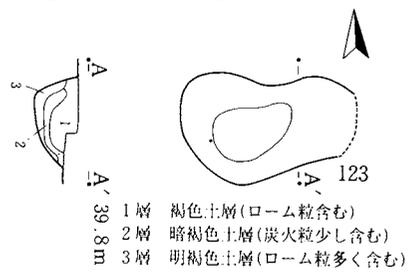
- 1層 茶褐色土層(ローム粒少し含む)
- 2層 褐色土層(焼土粒少し含む)
- 3層 明褐色土層(ローム粒・炭化粒少し含む)



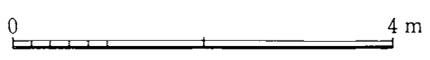
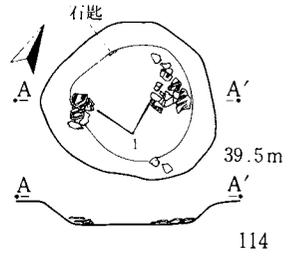
- 1層 褐色土層(ローム粒含む)
- 2層 暗褐色土層(炭火粒少し含む)
- 3層 明褐色土層(ローム粒多く含む)



- 1層 明褐色土層
- 2層 茶褐色土層
- 3層 褐色土層(ローム粒多く含む)
- 4層 暗褐色土層
- 5層 褐色土層
- 6層 黄褐色土層



- 1層 褐色土層(ロームブロック含む)
- 2層 黄褐色土層(ロームブロック主体)
- 3層 茶褐色土層(ローム粒・ロームブロック含む)
- 4層 暗褐色土層(ロームブロック含む)
- 5層 明褐色土層(ローム粒含む)



第150図 土坑

1.2mを測る。壁は斜位に立ち上がり、確認面からの深さは0.4～0.5mである。全体に掘り込みは不良で、壁・底面とも凹凸が顕著である。

遺物の出土はあまり多くないが、早期から後期にかけての土器片が14点程検出された。早期の土器片が多いが、遺構の時期を示すものではないようである。他に石鏃1点が出土している。

遺構出土遺物

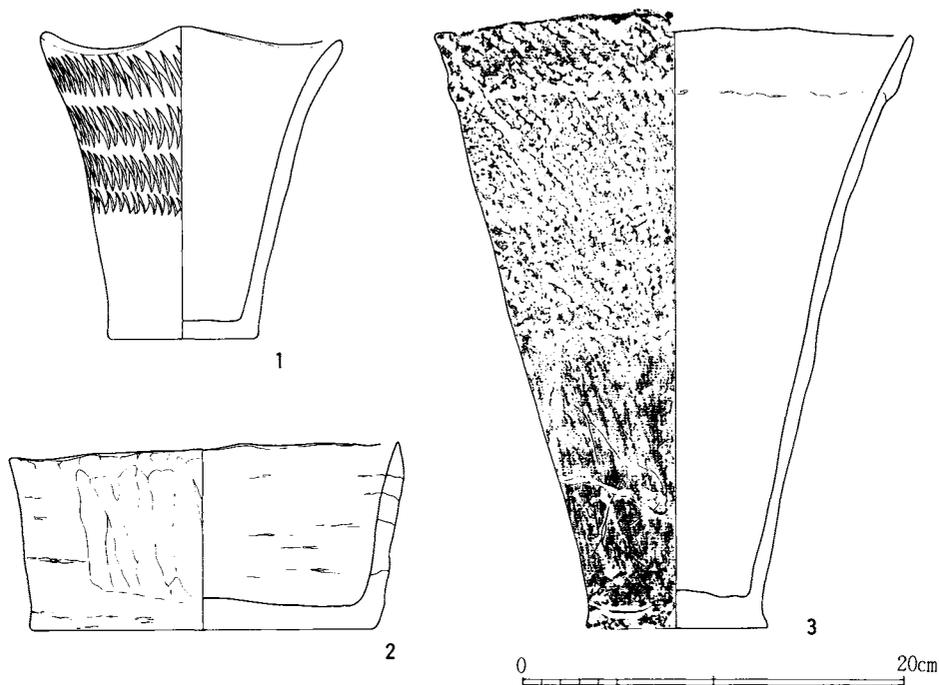
1 1 2号土壇出土土器（第151図，図版77）

1は緩やかに外反する4単位の波状口縁を呈し、口縁部下より胴部にかけて波状貝殻文が、密接してしかも深く4段に施文される。また上半部の約 $\frac{1}{2}$ 、底部のほぼ全周に二次的な被熱が認められる。波頂部での口径11.7cm，器高12.0cmを測る小形の深鉢形土器である。2は弱く外反するがほぼ直立気味の器形で、端部の断面形が刃状を呈する浅鉢形土器である。口縁端部の表裏にはこの刃状形をつまみ出した指頭様の痕跡が認められるが、これは連続的に親指と人差し指で表裏から同時につまみ出しながらずらしていったためか、上面観でやや不規則ながら緩やかな波状となっている。器表面の約 $\frac{1}{3}$ は、浅い横位もしくは斜位のナデが加えられながらも輪積痕を残しているが、それ以外では縦位の粗いナデが加えられ、輪積痕が消されている。底部の立ち上がり部分は弱く摘み出されている。裏面は粗い横位のナデがほぼ全面に認められる。底面は中心に向かって盛り上がっている。口径15.3cm，器高6.9cmを測る。3は口径と器高に比べ底径の小さい、細身で外反する器形の深鉢形土器である。輪積部で薄く折り返し口縁となり、器表面には端部から胴部の $\frac{1}{2}$ 強にかけて、2段の反撚の縄文が横位に施され、以下には縦位のミガキが加えられる。底部の立ち上がり部分は強く摘み出されている。また底部から胴部の約 $\frac{1}{2}$ にかけて、二次的な被熱が認められる。裏面はごく普通に器面調整が行われている。口径18.9cm，底径7.2cm，器高22.8cmを測る。

以上に記述した土器は、先に説明したように遺構埋没時の共伴例として捉えられ、状況が示唆する通り何らかの人為的な行為を想起させるものであるが、同時に土器型式の編年観にも好資料を提供している。すなわち1の波状貝殻文の土器は従来の編年観からいえば、その施文状態から浮島II式以降、興津I式までの範疇であると考えられるが、浮島III式以降の多くにみられる端部の刻み目、刷毛目状の単沈線等の施文帯を有しないことで、浮島II式が最も蓋然性が高い。2は輪積痕が認められるところから、広義の浮島式の範疇と考えられる。3は大木式の影響のもとに北・東関東を中心に分布する、所謂、前期後半の縄文系土器に属す土器である。本遺構の他に該期の土器群の共伴例として、勝田市三反田遺跡第1号土坑例が既に知られている。これは縄文系土器3個体（うち1例に横位の結節回転の認められる）と、主文様が鋸歯状文の貝殻腹縁による密で多段な波状貝殻文となり、口縁端部に半截竹管内側を用いた単沈線文の施文帯を有す浮島III式ないし興津I式1個体の共伴例である。

前期後半～中期初頭の縄文系土器群は、主文様が縄文という型式の表象する要素の乏しさを

ら、編年的位置付けが前期後半という中で確定していない。すなわち細分の進んでいる浮島式や興津式との関係や、出自を巡る大木式との関係が現段階では今一つ明らかではないのである。しかしながら近年の資料の増加に伴い、この土器群が先述の時間幅の中で、何段階かで変遷することが芳賀英一氏をはじめとする諸論考によって徐々に明らかにされつつある。本例のような遺構内一括出土例は廃棄の同時性を示し、該期の土器群研究を進めるにあたって好資料を提供するもので、仮に浮島II式まで遡るのであれば、確実な共伴例では最も古段階になろう。



第151図 112号土壙出土土器

114号土壙出土遺物（第152図、図版77）

1は薄い折り返し口縁で、端部上に刻目を付す。器形を推定復元すると、折り返し部分で緩く括れ、胴部にやや膨らみをもたせながら底部に次第に移行する。口径・底径に比して器高が高い細身の土器となろう。それぞれ21.9cm, 6.0cm, 36.5cmを測る。器表面の文様は端部下から4本1単位の櫛歯条線文を大略並行させて、幾何学的なモチーフを表出している。また鋭利な沈線文によって、条線文の幅を規定している部分も認められる。裏面は比較的平滑に調整されている。本例は興津式であるが、この櫛歯条線文の土器は型式組成のうえでは少数派で、従来より諸磯C式の条線文の影響が言及されている。2は赤茶色を呈するチャート製の縦型石匙で、縦長剝片を素材とする。表面の調整は全面にわたり施されるが、裏面は側縁部のみの調整で止まることで、断面形態は背の丸味を帯びた、いわばカマボコ状となる。ノッチ状の部位は特に

密な調整はされておらず、数回の剝離によってつまみ部は作出される。長さ4.7cm、幅1.1cm、厚さ0.5cm、重量3.09gを測る。関東地方の前期末葉から中期初頭には縦長石匙が横長石匙を凌駕するが、この時期の東北地方との交流関係を示唆するものであろうか。



第152図 114号土坑出土遺物

1 2 2号土坑出土土器 (第153図, 図版77・78)

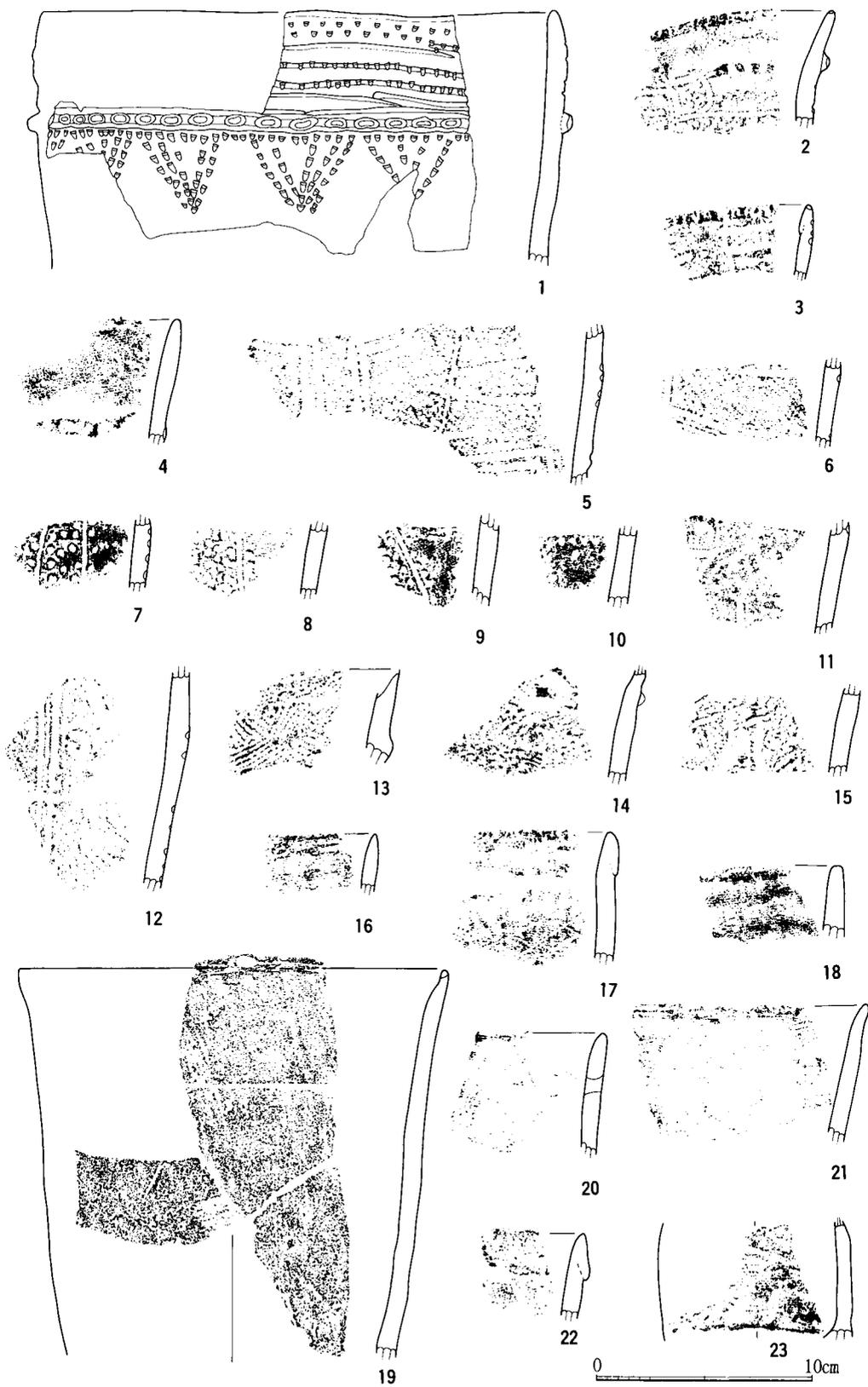
本遺構より出土した縄文式土器のうち時期の判別したものでは、五領ヶ台式等の中期初頭土器群が最も多く、150点を数える。この他に早期沈線文、条痕文、前期黒浜式、浮島式、中期加曾利E式、後期加曾利B式が微量出土している。ここでは今一つ積極的な根拠がないが他時期のものを混入と考えて、本遺構が帰属する時期として最も可能性の高い中期初頭土器群のうち、図示可能なものについて記述する。

1～12は主として竹管による沈線文と列点文，交互刺突文によって複合文様が描かれるものである。1は口縁部に半截竹管による横位の沈線文とこれに付随した列点文によって複合文様を描いているが，これは下端を紐線文様の隆起線によって区切られ文様帯を形成している。隆起線以下には，これに接して重三角形モチーフとした列点文の文様を横位に展開させると思われる。器形は口縁部がほぼ垂直に立ち上がり，胴部上半で緩やかに膨らむずん胴なものとなる。推定口径24.0cmを測る。2はやや幅狭な口縁部無文帯が凹線を連続的に付した横位の隆起線によって形成される。この切目に沈線で方形を呈す文様が描かれるが，これはあるいは通常は突起として付く単位文の可能性がある。以下には横位の沈線文と円形竹管による列点文が複合文様を描く。また口縁端部には刻み目が付される。3も口縁端部に刻み目が付され，内側に折り返される。口縁部には沈線文と列点文による複合文様が，文様帯を形成すると思われる。4は凹線が連続的に付された横位の隆起線が，口縁部無文帯を作出する。5～12は上記の複合文様が描かれる胴部破片である。5は曲率から考えるとかなり大形の土器となるようで，地文に縄文が施され沈線文と列点文や交互刺突文による複合文様や，沈線文による区画文が描かれる。胎土中に少量の細かな雲母粒，やや粗い石英・長石粒を含む。6と5は同一個体である。7～9は沈線文と列点文による複合文様に，密に刺突文が充填される。7・8の胎土中には粗い石英・長石粒が中量含まれる。10～12はおそらく同一個体になると思われ，胎土中にやや粗い砂粒を少量含む。13～15は横位の縄文が施文される。13は単節R L，無節Lが小単位で施文され，胎土中に粗い石英・長石粒を中量含む。14の口縁部下の括れ部に付く突起はおそらく単位文になると思われ，横位の結節回転が施される。17は折り返し口縁を呈し，以下に斜沈線文（一部は交差させる）を施文する。16・18～23は基本的に無文のものである。このうち19は端部上の1か所に凹線が付される。表面には文様になるかは不明ではあるが，竹管による刺突が数か所に認められ，裏面は横位方向に粗く削られている。推定口径23.7cmを計る。20には焼成後の穿孔が認められる。20・21は表裏とも平滑に仕上げられている。22は折り返し口縁を呈す。23はほぼ底部で，現状の推定最大径9.0cmを測る。

以上，説明を加えた土器群の大部分は，五領ヶ台II式の範疇に属すものと思われる。

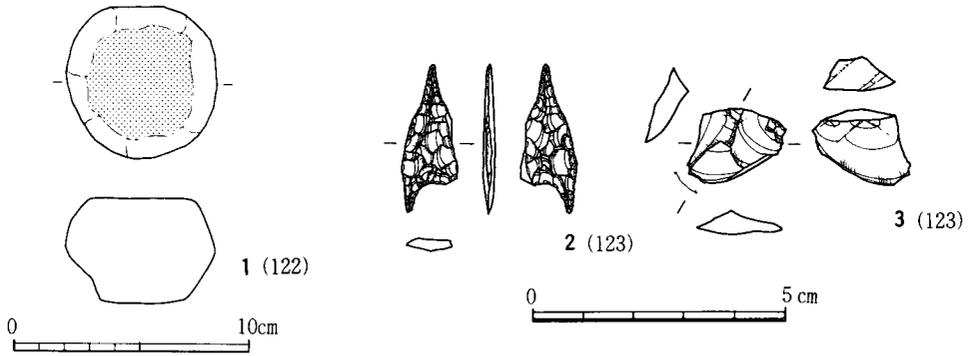
1 2 2・1 2 3号土坑出土石器（第154図，図版82）

1は礫岩製の磨石で，両面は光沢が出るほどよく研磨されている。側縁の全周は敲打痕と磨痕がともにみられ，面的に段階を踏んで行われているため全体の形状は多面体を呈す。長さ6.0cm，幅6.1cm，厚さ4.1cm，重量278.2gを測る。122号土坑出土。2は茶褐色を呈するチャート製の石鏃で，原礫面に近い部位の剥片を素材としているのが窺える。先端部はかなり鋭利に作出され，そのためか全体の形状は肩を張ったような感がある。長さ2.9cm，幅1.2cm，厚さ0.3cm，重量0.6gを測る。3は末端部に微細ではあるが，使用痕の認められる黒曜石製の剥片である。節理面を打面として作出された剥片であり，表面にみられる剥離痕の打点の方向や主要剥離面



第153图 122号土坑出土土器

にみられる打ち損じの打瘤烈痕から、この節理面を打面として剥片剥離を数回行っていることが窺える。3は覆土中出土ということで他と同一に縄文時代のものとしたが、先述した技法等から旧石器時代のものの混入である可能性も全く否定はできない。長さ1.5cm、幅2.0cm、厚さ0.7cm、重量1.14gを測る。以上は123号土坑出土。



第154図 122・123号土坑出土石器

2. グリッド出土遺物

土器 (第155～162図, 図版78～81)

本遺跡から出土した縄文土器は、早期撚糸文から晩期安行3 a式に至るもので、合計3,702点である。これらの内訳は、後期の土器(加曾利B式)が全体の約40%を占め、次いで前期末葉から中期初頭にかけての無文及び縄文の土器が約26%を占める。また、その他では早期沈線文系の土器が約15%を占め、それ以外のものは僅少である。

出土土器の大別は以下のとおりである。

- 第I群土器 早期の土器
- 第II群土器 前期の土器
- 第III群土器 前期末葉から中期初頭の土器
- 第IV群土器 中期の土器
- 第V群土器 後・晩期の土器

第I群土器 (1～82)

早期の土器は787点(21%)出土しており、撚糸文系土器(18点)、沈線文系土器(545点)、条痕文系土器(224点)が見られる。

第1類(1～9) 撚糸文系土器である。

1は口縁部破片で、やや節の大きな押捺の浅いまばらな縄文(LR)が斜位回転施文されて

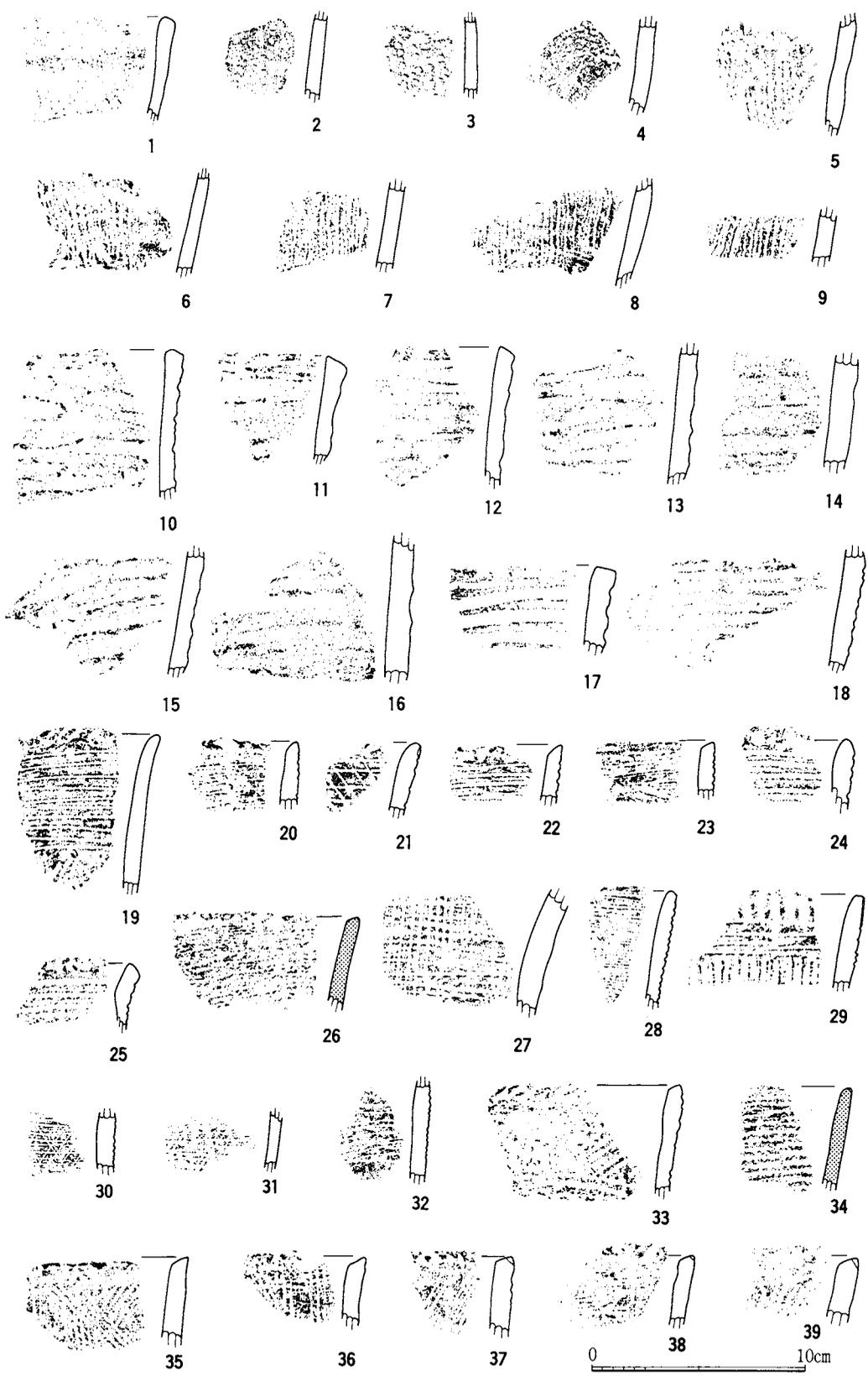
いる。2～4は1と同様に縄文が施文される胴部破片である。5～9は1～2mm間隔に押捺の深い燃糸文(R)が施文されている。これらは稲荷台式土器である。

第2類(10～77) 沈線文系土器を一括する。

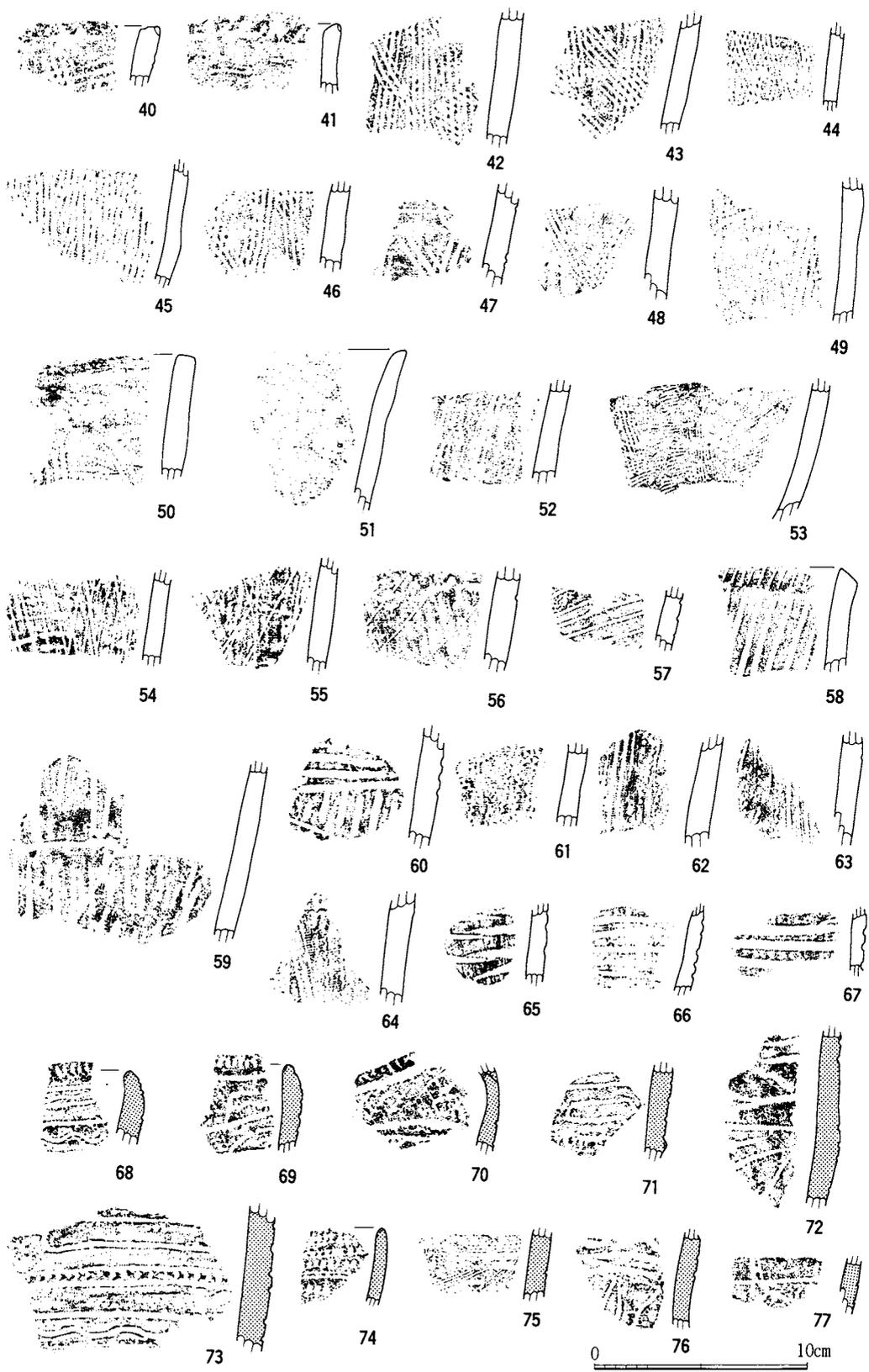
10～16は胎土に長石等を多量に含み、同一個体と思われるものである。口縁部は外そぎ状を呈し、口唇部に平坦面を持っている。外面は器面全体に横位の荒いナデが施され、太い凹線状を呈している。内面は丁寧なナデによる調整である。17・18は横位の太い沈線が多段に施文されるものである。19～25・27～32は細い沈線が施文されるものである。22・23等に見られるように口縁は内そぎ状を呈するものが多く、また口唇部やその端部に刻みが付くものもある。細沈線は横位、格子目によって文様が構成されている。29は太沈線と細沈線が併用される口縁部破片である。26・33・34は貝殻腹縁による文様を有するものである。33は横位の貝殻腹縁間に貝殻による山形区画を施し、斜沈線を充填している。26・34は微量の繊維を含む。35～53は貝殻条痕が施文されるものである。胎土に微量の繊維を含むものと繊維を含まないものがある。口縁は35～39のように内そぎ状のものが多く、口唇部に刻みを加えるものがある。条痕はやや荒く、縦方向のものが多いためである。これらの土器は三戸式土器であり、貝殻条痕文による土器群もいわゆる茅山式とは異なるもので、三戸式土器の一組成を成すものと考えられる。54～56は細い沈線が施されており、54・55は同一個体である。57は沈線間に貝殻腹縁文が認められる。58～60は縦方向に太い沈線が施されており、65～67は横方向に施文されている胴下部の破片である。61～64は貝殻腹縁文と細沈線が縦方向に施文されるもので、62～64は同一個体である。これらは田戸下層式土器である。68・69は同一個体である。口唇内側に刻み、口縁部は波状沈線による文様が施されている。70は波状口縁を呈し、条痕もしくは擦痕を地文として貝殻腹縁が施文されている。口唇内側に刻み、外側に押し引きによる刺突文もみられる。71・73は有節沈線・沈線や隆帯上に刻みが施されている。72・76・77は有節沈線によるものである。74は半截竹管による連続刺突文が多段に施されている。なお、68～77は繊維を微量に含んでいる。68～77は田戸上層式土器と思われる。

第3類(78～82) 条痕文を主文様とする土器を一括する。

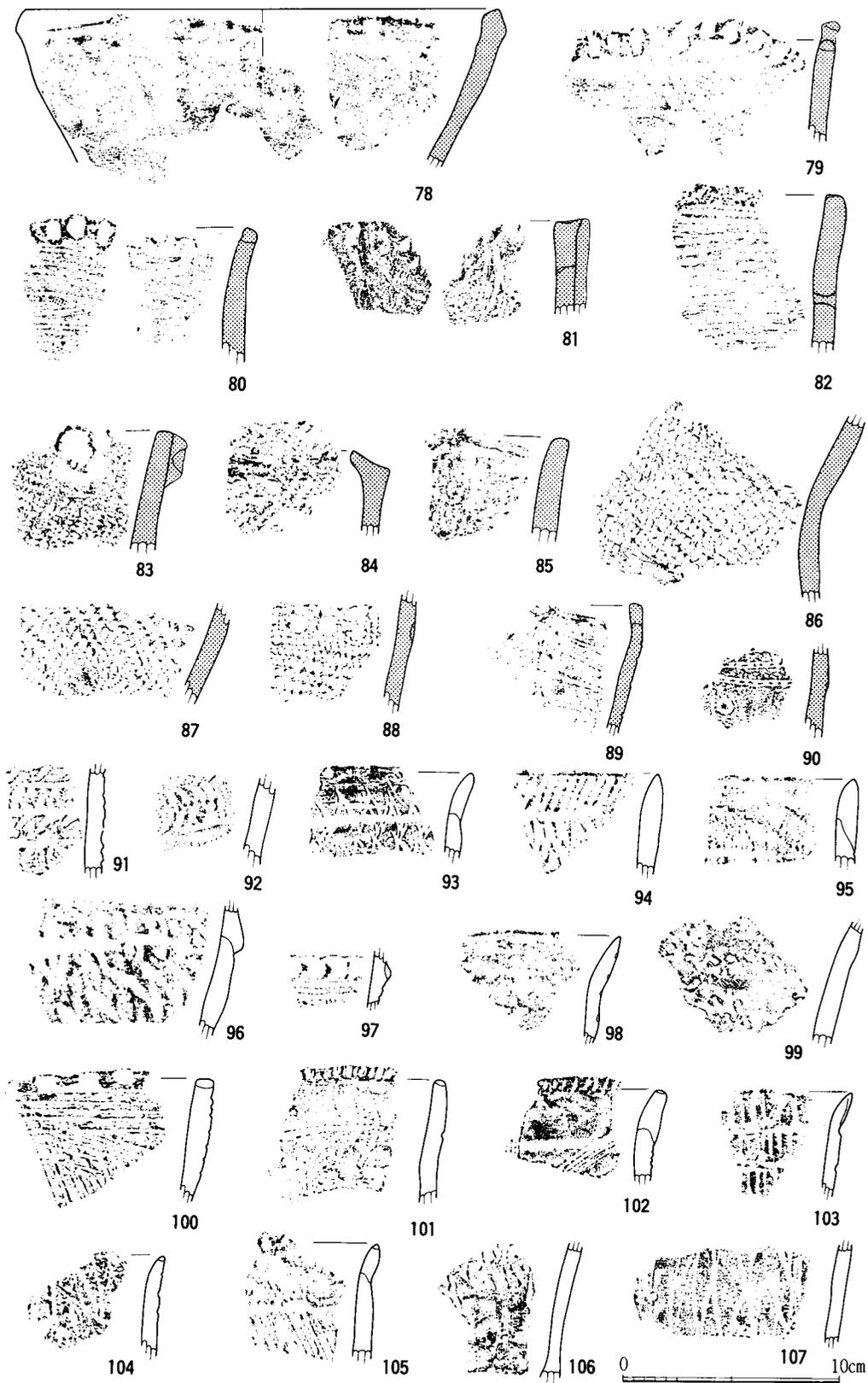
78は推定口径22cmを測り、口縁断面が楔形を呈する。内外面ともに細かい条痕が横位に施文されており、器面は成形時の凹凸が目立つ。79・80は同一個体で、内外面ともに横位の条痕が施文されている。81は山形の突起を持つ口縁部破片である。波頂部中央より隆帯が垂下し、口唇部の内外に互い違いに細い刻みが施されている。条痕は内外面とも一部にみられるのみである。82は口縁が外反し、焼成後の穿孔がみられる。口唇部に貝殻腹縁が施され、横位の条痕は外面のみである。一般に繊維の混入は少ない。これらの土器は81以外は型式的特徴に欠けるが、沈線文系の末期からいわゆる条痕文系の範疇に含まれるものである。



第155図 グリッド出土土器1)



第156図 グリッド出土土器(2)



第157図 グリッド出土土器(3)

第II群土器 (83~134)

前期の土器は393点(11%)出土している。胎土に繊維を含む土器(109点)、竹管文や貝殻による文様が施文されるもの(284点)、さらに十三菩提式系のものが少量ある。

第1類(83~89) 繊維を含み、縄文や沈線によって文様が構成される土器を一括する。

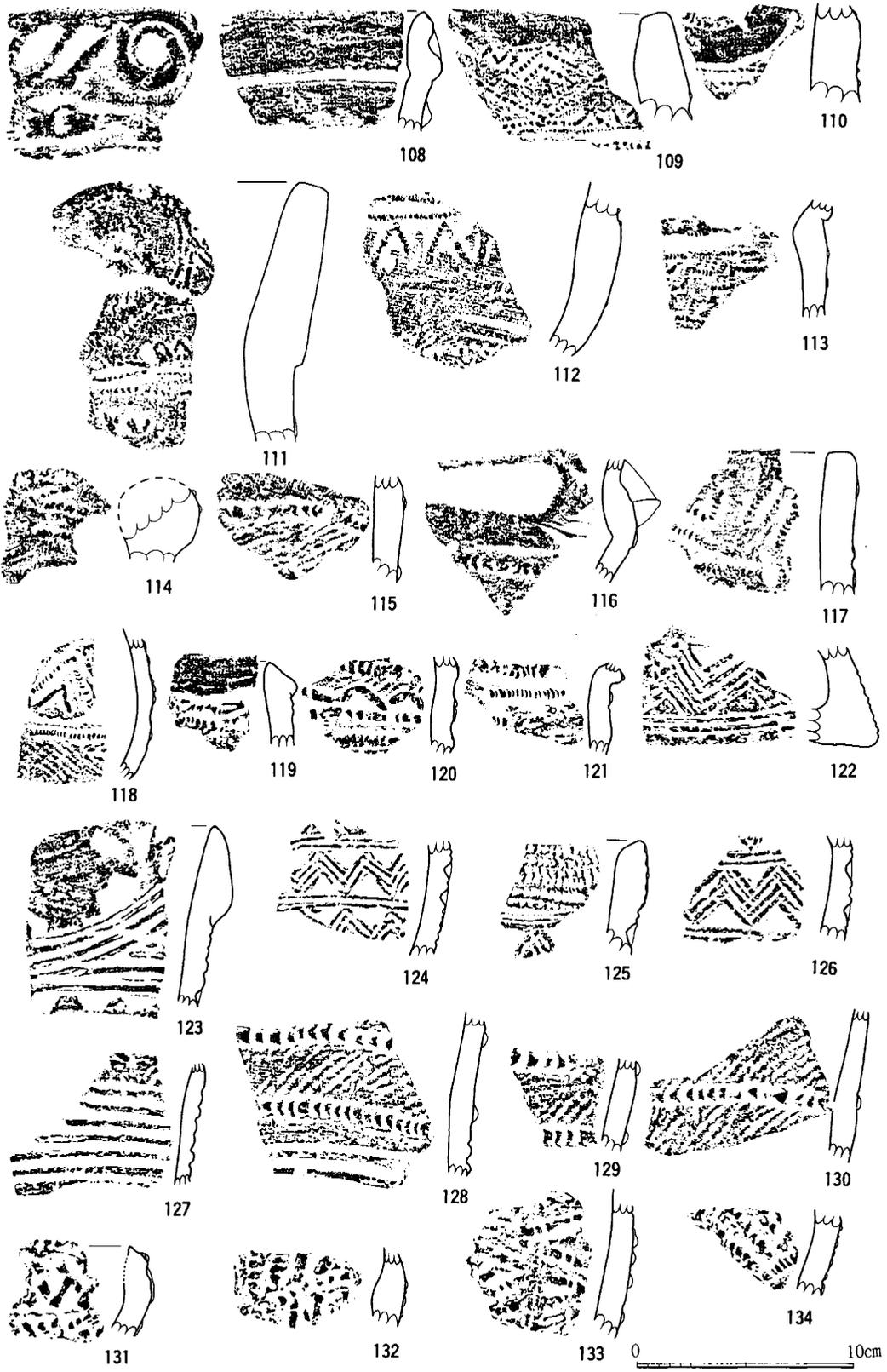
83~87は縄文のみが施文される土器である。83は波状口縁を呈するもので、波頂部に円形の瘤が付いている。84は口縁部がくの字状に内屈している。88は縄文を地文とし、棒状具を器面に対し鋭角に押し引いている。89は波頂部下に綾杉状の沈線が施文されている。黒浜式土器である。

第2類(90~107) 諸磯・浮島系土器を一括する。

90は竹管による円形刺突文と結節沈線文が施されている。91は沈線間に変形爪形文と短沈線が施されている。変形爪形文はかなりくずれており、波状貝殻文に近い。92~96には波状貝殻文が施されている。波状貝殻文は貝殻の種類や施文の方法によって文様効果が異なっているが、ほぼ平行方向に数段施文されている。94は口縁部にやや長めの刻みと波状貝殻文が施されている。106は底部近くの破片である。100~102・105は歯条線や沈線が施文されるもので、口唇部に刻み(101・102・105)や指頭押捺(100)が行なわれている。103は縦沈線と三角刺突を伴う平行沈線が施文されている。90は諸磯A式土器である。91は平行沈線による区画内に変形爪形文と短沈線が見られることから、浮島IIからIII式期であろう。その他は半截竹管による文様や変形爪形文・三角文が見られないことから浮島系土器の中でも新しい時期のものと思われる、興津式となろうか。

第3類(108~121・127~134) ソーメン状の粘土紐を貼り付けた浮線文が主文様となるものを一括する。

109~112は色調が黄褐色を呈し、同一個体と考えられる。波状口縁を呈し、頸部に括れを持つ深鉢である。口縁部文様としては非常に極めて細かい結節浮線文・浮線文による渦巻き文・重四角文・鋸歯状文が施されている。頸部文様は鋸歯状の浮線文がみられ、胴上部は平行する結節浮線文間に山形の結節浮線文が、更に下部では縄文が施されている。113は鋸歯状の結節浮線文が施される頸部破片である。114は口縁部の突起と思われる。115はやや幅の広い結節浮線文が二段にみられ、浅い押捺の縄文も施文されている。褐色を呈する。117は褐色を呈する口縁部破片である。118も極めて細かい結節浮線文や浮線文・浅い押捺の縄文が施されている。119・120は色調が黄褐色を呈し、同一個体と考えられる。小粒の長石を多量に含んでいる。120は縄文を地文として、やや幅の広い結節浮線文や浮線文を持つものである。127~130は同一個体と考えられる。淡褐色を呈し、胎土に雲母を含む。縄文を地文とし、109や120に比べて幅が広く、節の間隔も広い結節浮線文や彫りの深い平行沈線が施文されている。131~134は同一個体と考えられる。褐色を呈し、胎土に長石を多く含む。結節浮線文・浮線文は格子状や山形等複雑に



第158図 グリッド出土土器(4)

貼り付けられている。これらは結節浮線文や浮線文が文様の主体となるもので、十三菩提式土器である。108は貼付されている粘土紐が他に比べてかなり広く、細かい結節も施されていないため、上記の土器とは別に分類すべきであろうが1点のみの出土であることからここに含めておく。口縁と平行の貼付け隆帯上には半截竹管による刺突が施され、渦巻き文や斜めの貼付け隆帯上には刺突文は認められない。内面に1条の沈線が施文され、胎土に雲母を多く含んでいる。大木系の土器であろう。

第4類(122～126) 三角陰刻文や集合沈線が主文様となるものを一括する。

122・124・126は同一個体である。123・125も同じ文様を持っているので122等と同一個体の可能性がある。これらは平行な集合沈線によって文様帯を区画し、山形の集合沈線と三角形の陰刻文を交互に多段施文するものである。123は複合口縁で波状となるものである。山形の口縁部文様帯に集合沈線と三角陰刻文を施している。125も123と同様に複合口縁で波状となるものである。複合部には竹管による連続刺突文が6段認められ、集合沈線と陰刻文が施される。これらの三角陰刻文や集合沈線文による土器群は横浜市室ノ木遺跡第2群土器E・G類に好資料が報告されており、第3類と組成を成すものであるが、当地域においてはともに出土例が僅少である。

第Ⅲ群土器(135～184)

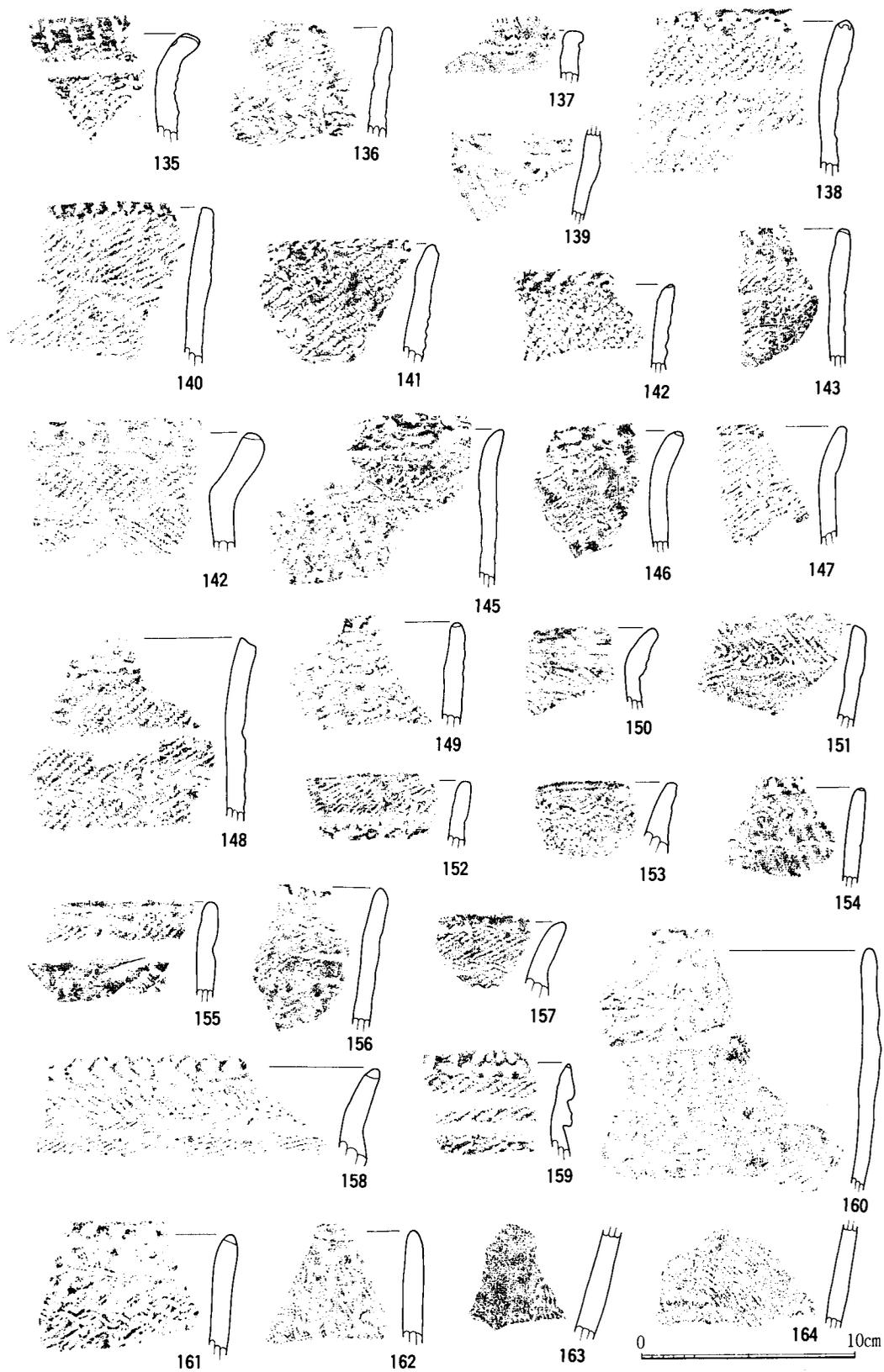
前期末葉から中期初頭にかけての土器は971点(26%)出土している。結節文や縄文のみの一群(489点)と口縁部に輪積痕跡を残すいわゆる複合口縁を持つ、無文の一群(455点)とがある。前者には、いわゆる粟島台式土器(109点)、横位のS字状結節文(378点)、縦位のS字状結節文(2点)がある。なお、五領ヶ台式土器が少量(27点)出土しているため、この群に含めて説明する。

第1類(135～164) 結節文や縄文が施文される土器を一括する。

口縁が外反する単純な器形の土器が多く、第2類土器にみられるような輪積痕跡を残すものや口唇部が小波状を呈するものがある。横位のS字状結節文は数段にみられるものが多く、縄文は明瞭に施文されるものとまばらに施文されるものがある。縄文のみの土器(120・140～142・151)は部分破片であるため結節文がみられない可能性もある。144・151・158では羽状縄文を構成している。口唇部には、縄文を施文するもの(135・140・141・143・154)、円形竹管を刺突するもの(140)、指頭や棒状具による押捺で小波状を呈するもの(142～146・149・160～163)等の種類がみられる。138は縄文原体の側面圧痕により口縁部に文様が施されている。163・164は同一個体のもので、縦回転施文の結節文・縄文が施されている。胎土中に長石を多く含んでいる。

第2類(165～178) 無文の土器を一括する。

165～169は口唇部の形態や器形に幾つかのバラエティーがある。器面はナデによる比較的丁



第159図 グリッド出土土器(5)

寧な調整で、169は縦方向の荒いナデが施されている。170～178は口縁部に輪積痕跡を明瞭に残し、口縁部を肥厚させるものである。器面はナデによる比較的丁寧調整のもの(170～172・174・176・178)とケズリ痕跡を残す荒い調整のもの(173・175・177)とがある。174では口唇部に刻み目が施されている。178は内面に段が付くものである。

第3類(179～184) 五領ヶ台式土器を一括する。

179は口縁部に2条の沈線が巡り、方形区画沈線と三角刺突文によって文様が構成される。また、口縁部と瘤状突起には縦の短沈線が施文されている。180～182は方形区画沈線に沿って三角形の交互刺突文や竹管による刺突文が施されており、区画内は無文である。183は頸部破片で、縦沈線を施された後に平行沈線や波状沈線が施文されている。184は数条の縦沈線と竹管による刺突が行なわれている。

第IV群土器(185～200)

阿玉台式土器及び加曾利E式土器は54点(1%)出土しているにすぎず、それぞれ30点弱である。

第1類(185～194) 阿玉台式土器を一括する。

185は沈線と刺突文がみられる口縁部破片である。186～189は有節沈線や沈線が施文されている。191～194は杵状隆帯や隆帯に沿って角押文・有節線文が施される土器である。

第2類(195～200) 加曾利E式土器を一括する。

195は口縁部に円形刺突が施文され、楕円形を呈する沈線内は縄文(RL)施文である。196は楕円形あるいは渦巻文を構成する口縁部破片である。197～199は縦位に磨消された無文帯を持つもので、197では無文帯の幅が広い。200は微隆起帯がみられる。加曾利E式土器でも新しい時期のものである。

第V群土器(201～222)

後・晩期の土器は、1497点(40%)と最もまとまって出土している。大半は加曾利B式や曾谷式で、堀之内式、安行式は少量である。

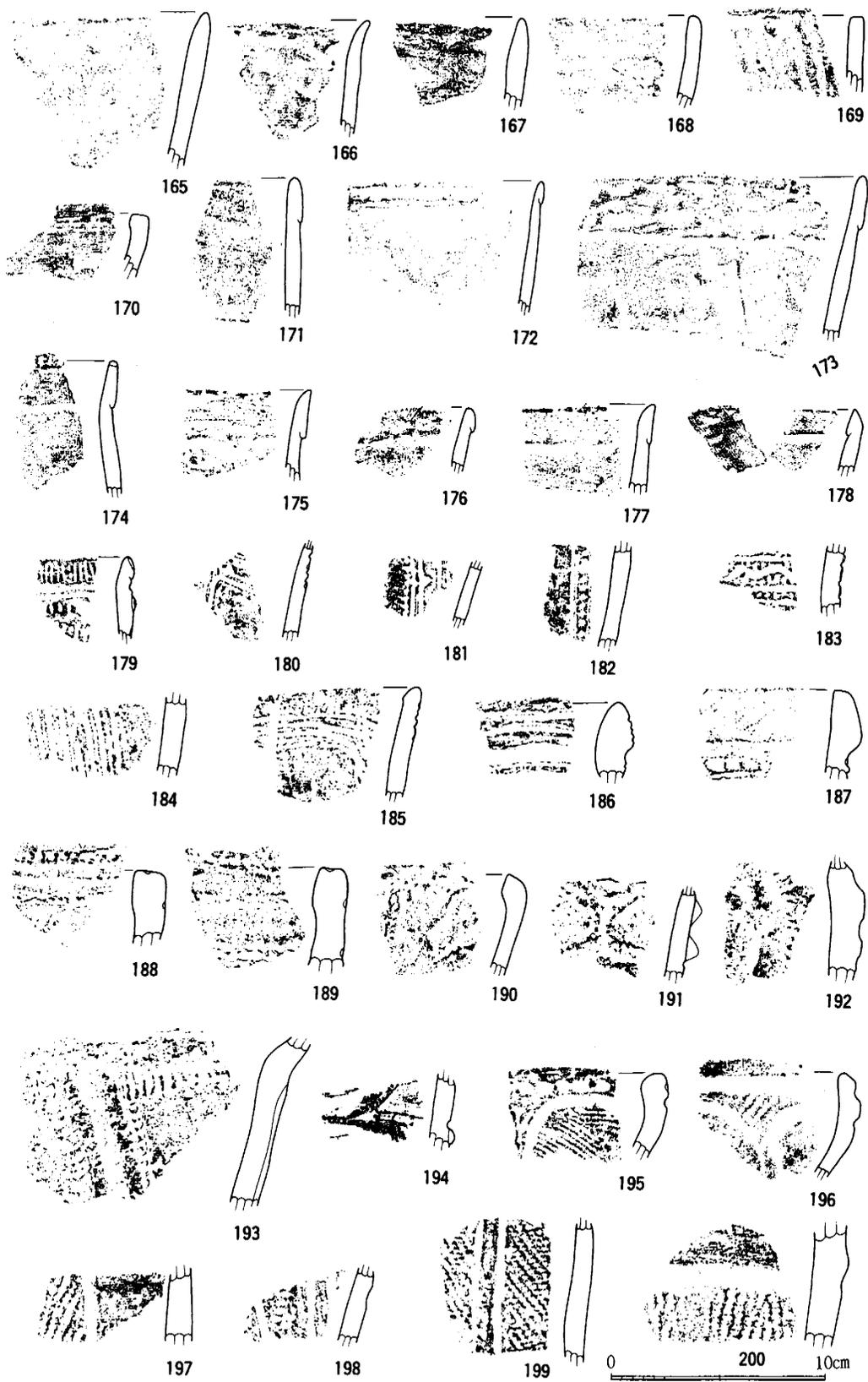
第1類(201・202) 堀之内式土器を一括する。

201・202は口縁部に山形の突起を持つ。201は数条を単位とした沈線により文様が構成されるもので、地文は認められない。202は口縁部に隆帯と沈線による杵状の文様を持ち、隆帯より下部は縄文を地文とした沈線による文様が施される。

第2類(203～219) 加曾利B式から曾谷式土器を一括する。

1種(203～211・216) 精製土器を一括する。

203・204は斜位や矢羽状の沈線により文様が施されるものである。205は縄文(RL)を地文として、平行沈線や曲線により文様が施される胴下部の破片である。206・207は同一個体である。口縁部に山形の突起を持ち、口縁直下と括れ部には二本の平行沈線間に角頭状の工具で片



第160図 グリッド出土土器(6)

側方向からの刻み目が施されている。また、胴上部の縄文帯及び胴下部のコンパス文もしくはメガネ文内部の縄文（LR）は充填施文によるものである。208・209は206・207に類似した土器で、口縁部に斜位の沈線と刻み目が認められる。210・211は、口縁部が丁寧に磨かれ、胴部にケズリ痕跡を残すものである。210は口唇部に斜位の短沈線が施文され、胴部に荒いケズリ痕跡を残す浅鉢である。216は瓢形を呈する深鉢で、推定口径16cmを測る。口縁直下には平行沈線間に刻み目が施され、やや幅の狭いコンパス文内部には縄文（LR）が充填施文されている。加曾利B 2式から曾谷式にかけての土器である。

2種（212～215・217・218）。粗製土器を一括する。

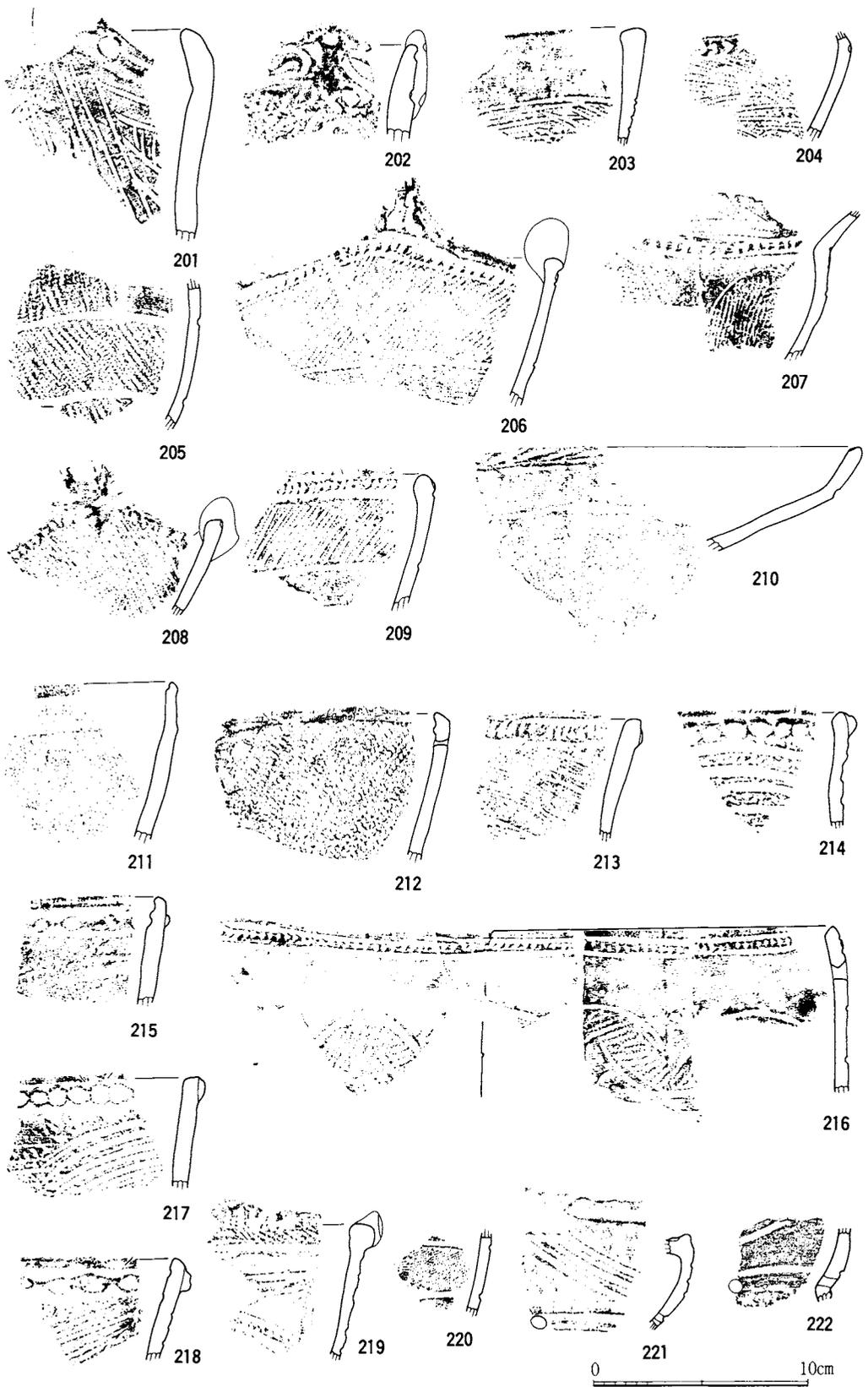
口縁部に紐線文を持たないものと持つものがある。212は前者で、内面に3条の沈線が施され、外面は全面に単節縄文がみられる。口縁部の穿孔は焼成前のものである。後者には紐線と紐線上の押捺文により、また胴部の意匠文によっても幾つかの種類が認められる。215は口唇部より若干下がった位置に紐線が付くものである。断面三角形の紐線上に指頭による押捺が一定間隔に施され、内面に2条の沈線が巡る。213はやや幅の広い紐線上に三日月形の爪形文が配され、以下条線が施文されるものである。214・218は断面三角形の紐線上に指頭による押捺が連続的に施され、214では縄文を地文として幅の広い沈線が、218では断面三角形の鋭い沈線がそれぞれみられる。218には内面に2条の沈線が巡る。217はやや幅の広い紐線上に指頭による押捺が施され、縄文を地文として条線が施文されている。

第3類（219～222） 安行式土器を一括する。

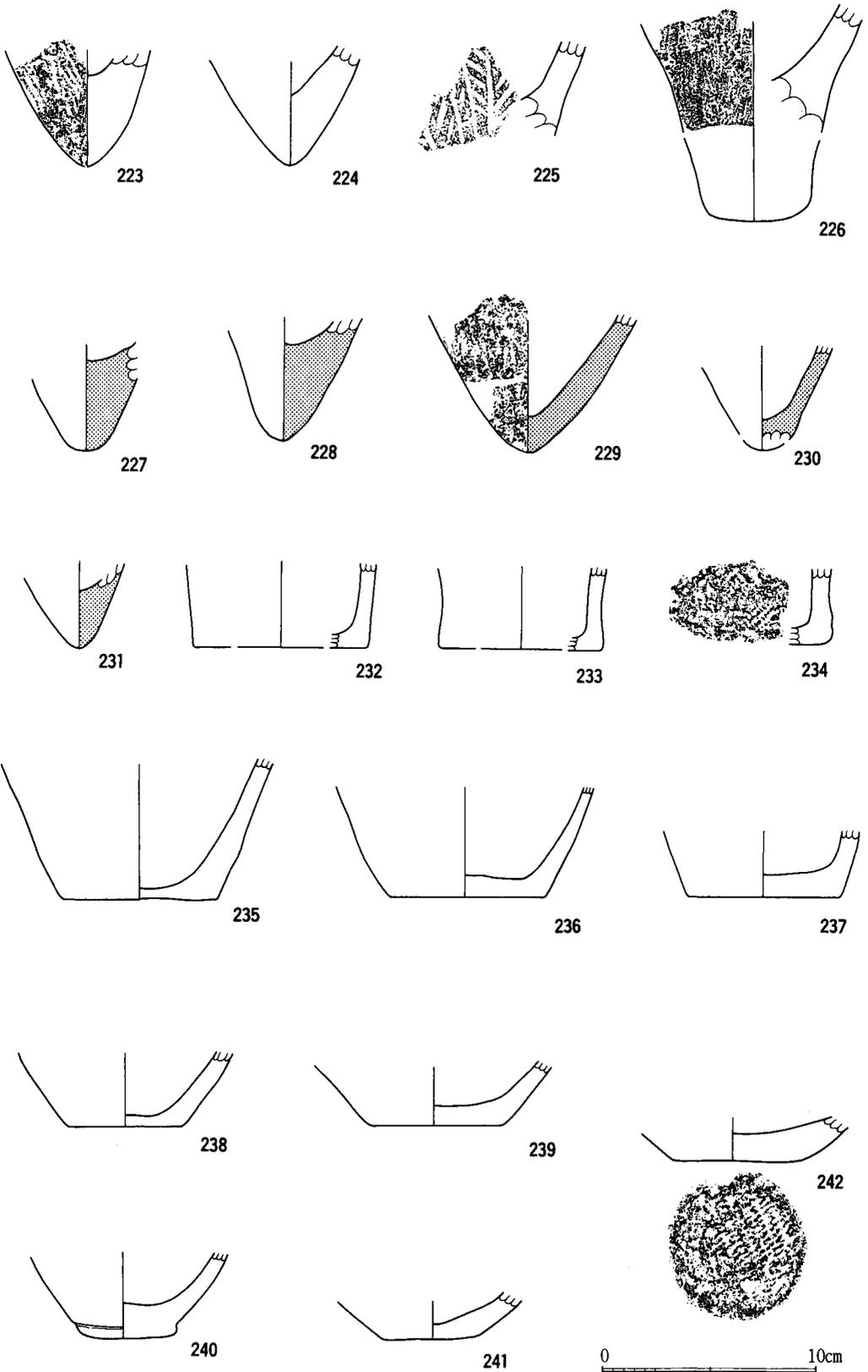
219は帯状縄文の深鉢で、口縁部の突起には沈線が扇状に、胴部には隆起帯上に刻み目が施されている。220は胴下部の破片で、メガネ状に画された沈線内に極めて撚りの細かい縄文（LR）がみられる。それぞれ安行2式、安行3a式である。221・222は強い屈曲部を持ち、3本単位の沈線が施文されている。褐色を呈し、内面は丁寧に磨かれている。胴下半部に焼成前の穿孔がみられる。221・222は類例・型式が不明の土器である。

底部（223～242）

223～230はいわゆる尖底部分で、227～231は繊維を含んでいる。223は条痕がみられる。225は縦位の矢羽状沈線が施されている。226はロート状を呈すると思われる。229は条痕文系土器の底部であるが、その他の繊維を少量含む土器は沈線文系に属する可能性が高いと思われる。232～234は端部が突出ぎみに若干外側張り出し、胴下部がほぼ直立するもので、234にはS字状結節文が施されている。235～242は底径に大小があるが、やや開きぎみの底部破片である。第V群土器に伴うものである。



第161図 グリッド出土土器(7)

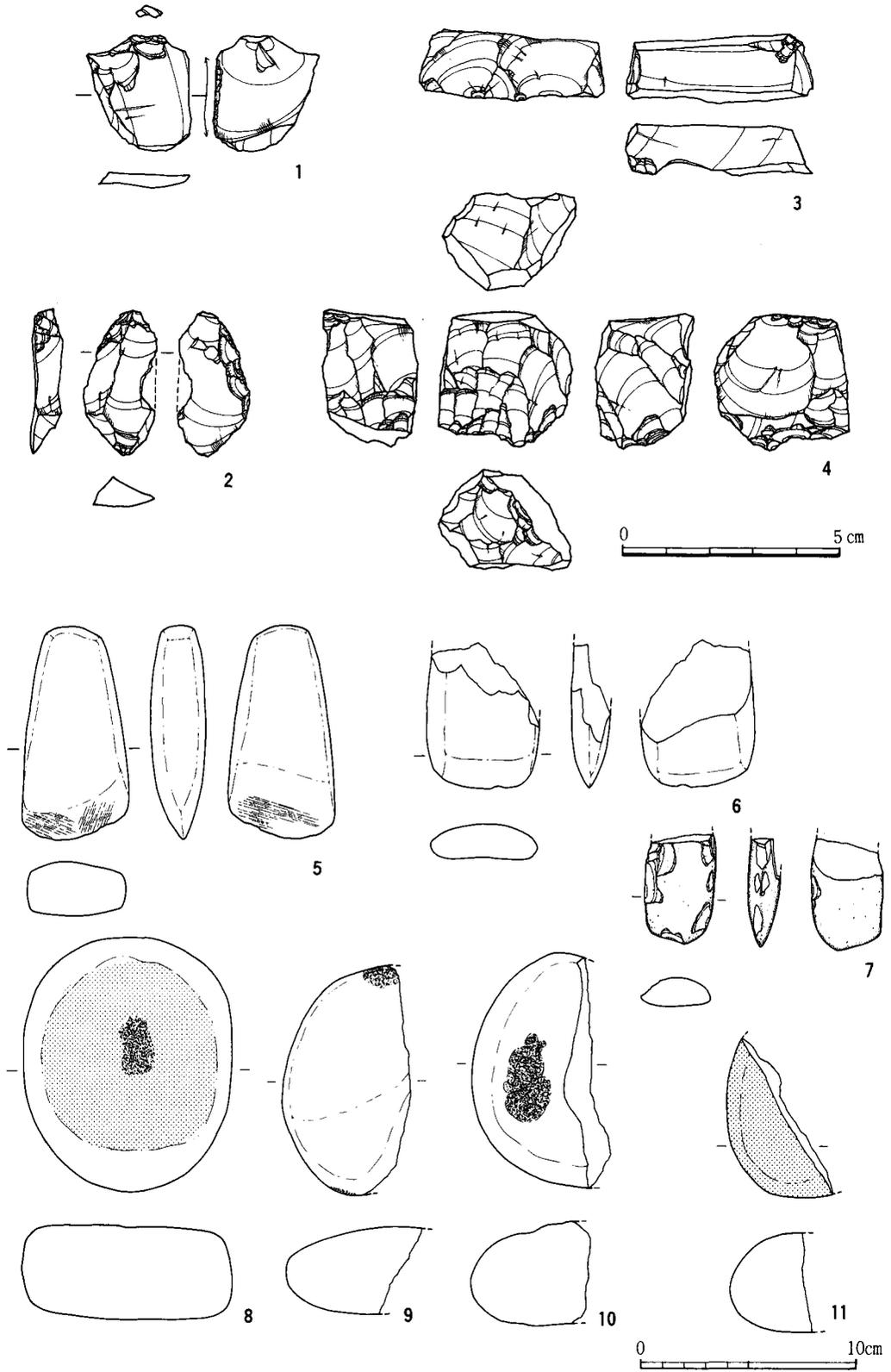


第162図 グリッド出土土器(8)

石器 (第163図, 図版82)

時期的に後世の遺構の覆土中に二次的に包含されたものを含め、グリッド出土の縄文時代石器について説明する。これら石器の帰属時期は、遺構出土のものが時期的に特徴的な石器であったり伴出土器によって前期後半～中期前半の可能性があるので対して、特徴に乏しく一部を除いて全く断定はできない。

1は使用痕の認められる黒曜石製の剥片で、末端部はヒンジフラクチャーとなる。おそらく同等の大きさの石核から作出された剥片であろう。剥片の片側縁に使用痕が見られる。長さ2.7cm, 幅2.5cm, 厚さ0.5cm, 重量2.67gを測る。2は黒曜石製の剥片の側縁部に調整が施されたものである。調整部位は主要剥離面側及び正面の一部のみであり、刃部作出のための調整と思われる。もう一方の側縁は破損しているため調整が施してあるかどうか不明である。長さ3.3cm, 幅1.7cm, 厚さ0.7cm, 重量2.94gを測る。3は黒曜石の石核。立方体の一面のみを剥片作取面とし、小型の剥片を作取しているのが窺える。頭部調整、打面調整は一切見られない。長さ1.7cm, 幅4.3cm, 厚さ1.2cm, 重量10.8gを測る。4も黒曜石の石核。立方体を呈し、上下端に打面を設定し剥片を作取している。実測図上面に見られる打面は打面再生された痕跡はみられないが、下面では打面再生を行い剥片を作出しているのがわかる。また上下両端からの剥片作出の際に、頭部調整が行われていると判断される。長さ3.1cm, 幅3.1, 厚さ2.3cm, 重量23.67gを測る。5は緑色を呈する蛇紋岩製の磨製石斧で、刃部は横位、斜位の摩擦によって作出され、斜刃となる。断面形状は角の取れた長方形を呈し、かなり面的に密に形状を整えている。長さ9.6cm, 幅5.0cm, 厚さ2.6cm, 重量236gを測る。前期末葉以降の帰属と考えられる。6は凝灰岩製の扁平礫を素材にした磨製石斧で、表裏ともに刃部が作出されている。刃部のみの残存で、欠損面には欠損時以外の剥離も認められるが、回数も少なく小規模のものであり、再利用の意図はないものと思われる。長さ(6.5cm), 幅5.2cm, 厚さ1.8cm, 重量(93.4g)を測る。7はホルンフェルス製の磨製石斧で、やはり扁平礫を素材にするものである。刃部作出の磨きは顕著ではなく、現礫の形状を利用し、刃部作出はいわば補助的に行われている程度である。側縁には成形時の剥離がみられ、基部が欠損しているため断言はできないが、基部にまで調整が行われていると思われる。長さ(5.0)cm, 幅3.2cm, 厚み1.5cm, 重量(32.1)gを測る。8～11は所謂、敲石・磨石類である。8は安山岩製のもので、両面は擦痕、側縁全周には敲打痕と擦痕がともにみられる。また両面の中央には敲打によるものと思われる凹みがみられる。長さ11.5cm, 幅9.6cm, 厚さ3.2cm, 重量848.0gを測る。9～11は欠損品である。9・10はともに砂岩製のもので、敲打痕がみられる。10の側縁には敲打痕と擦痕がともにみられる。11は安山岩製のもので、残存部全面にわたりよく研磨されている。

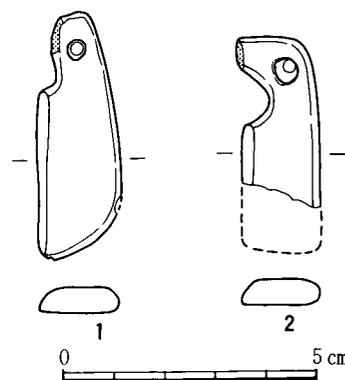


第163図 グリッド出土石器

石製品 (第164図, 図版82)

1は瑛状耳飾の半欠品を再利用した垂飾品で、薄緑色に黒色の縞の入った滑石製である。欠損部はやや丁寧さに欠けるが、周囲を含めて再度磨かれている(図示した網点部)。このため本来の瑛状耳飾の切れ込み部上方の孔径や軸長は不明であるが、縦長の細身の平面形であったと推測される。切れ込み部の長さは3.4cmを測り、片側に稜をもつため横断面形は角に丸味をもった台形を呈する。図の上部の表裏面からの穿孔は瑛状耳飾欠損後の補修孔であるのか、再利用後の垂飾用の穿孔であるのか、断定

できない。現存部の最大長5.0cm, 最大幅1.65cm, 最大厚0.5cm, 重量6.08gを測る。2も瑛状耳飾の半欠品を再利用した垂飾品で、黒色の滑石製である。欠損部はやや丁寧さに欠けるが、欠損面のみを再度磨いている(図示した網点部分)。このため本来の瑛状耳飾切れ込み部上方の孔の軸径は、不整ではあるが約1.1cmと推定できる。脚部を再利用後に欠損しているようで、この断面には磨きが認められない。本来の瑛状耳飾の平面形は、縦長の脚部が横に張ったものと考えられる。切れ込み部の横断面形はやはり片面に稜をもつため、1より緩いが角に丸味をもった台形を呈する。やはり上部に1と同様の穿孔が認められる。現存部の最大長3.4cm, 最大幅1.55cm, 最大厚0.5cm, 重量4.6gを測る。これら瑛状耳飾を再利用した垂飾品の類例として、千葉市バクチ穴遺跡33号址出土例が挙げられる。



第164図 グリッド出土石製品

第2節 古墳時代

本遺跡から検出された古墳時代の遺構は竪穴住居跡2軒のみである。調査区南西側の浅い小支谷を望む位置に所在する。

1. 竪穴住居跡

002号住居跡 (第165図, 図版74)

調査区南側, A1区に所在する。床面中央を501号掘立柱建物跡, 南東コーナー及び南壁を208・209号粘土敷土坑により攪乱される。平面形は正方形を呈し, 1辺6.1mを測る。カマドを通る主軸はN-28.5°-Wを指す。壁は斜位に立ち上がり, 確認面からの掘り込みは, 南西側に緩く傾斜する面に構築されるため, 北東コーナーで21cm, 南西側で10cm程を測る。床面は攪乱が激しく詳細は不明であるが, ハードローム上面に形成され, 比較的堅緻な状況である。床面積35.2m²を測る。支柱穴は対角線上に4本検出された。西側の2本は掘立柱建物, 南東側は粘土

敷土坑により大きく攪乱される。径40～50cm、深さ40～65cmを測り、略円形を呈する。柱穴間の心心距離は、北・西が3.5m、東が3.1m、南が3.9mである。北壁西側にも柱筋を揃えて深さ27cmのピットが掘り込まれる。壁柱穴となるのであろうか。周溝・貯蔵穴は検出されなかった。カマドは北壁中央に位置するが、燃烧部の焼土を確認したにすぎない。壁への掘り込みは小さく、床面からの深さもほとんどなかったようである。

遺物の出土は少ないが、ほぼ完形の杯が、カマド燃烧部上面(2)と東壁中央下(1)から検出された。

003号住居跡(第165図, 図版74)

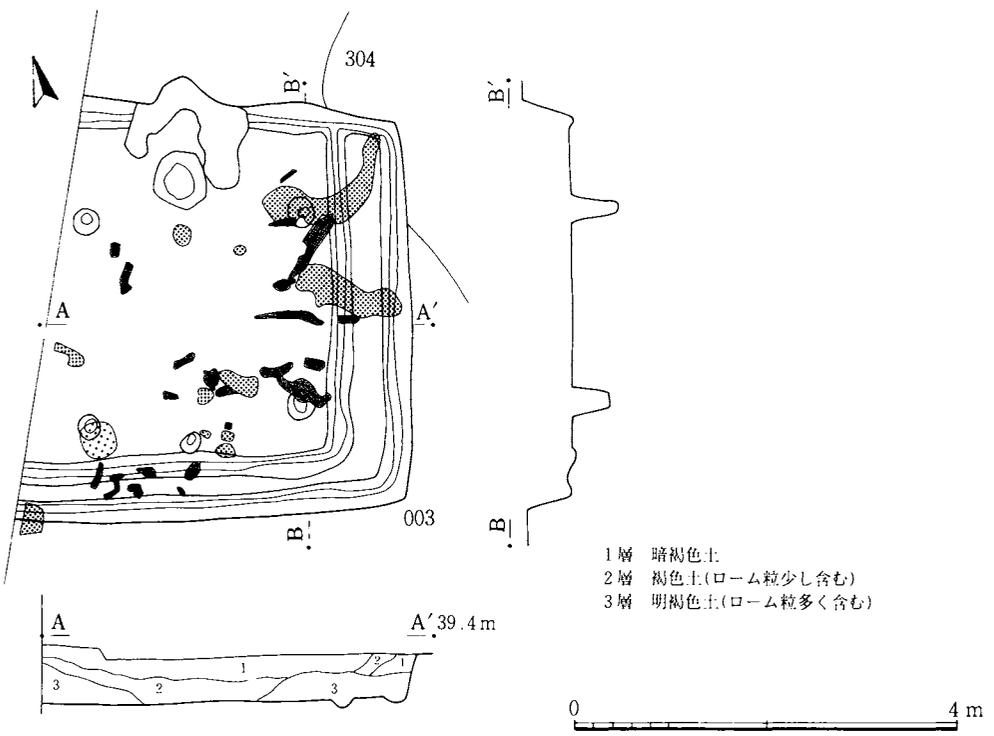
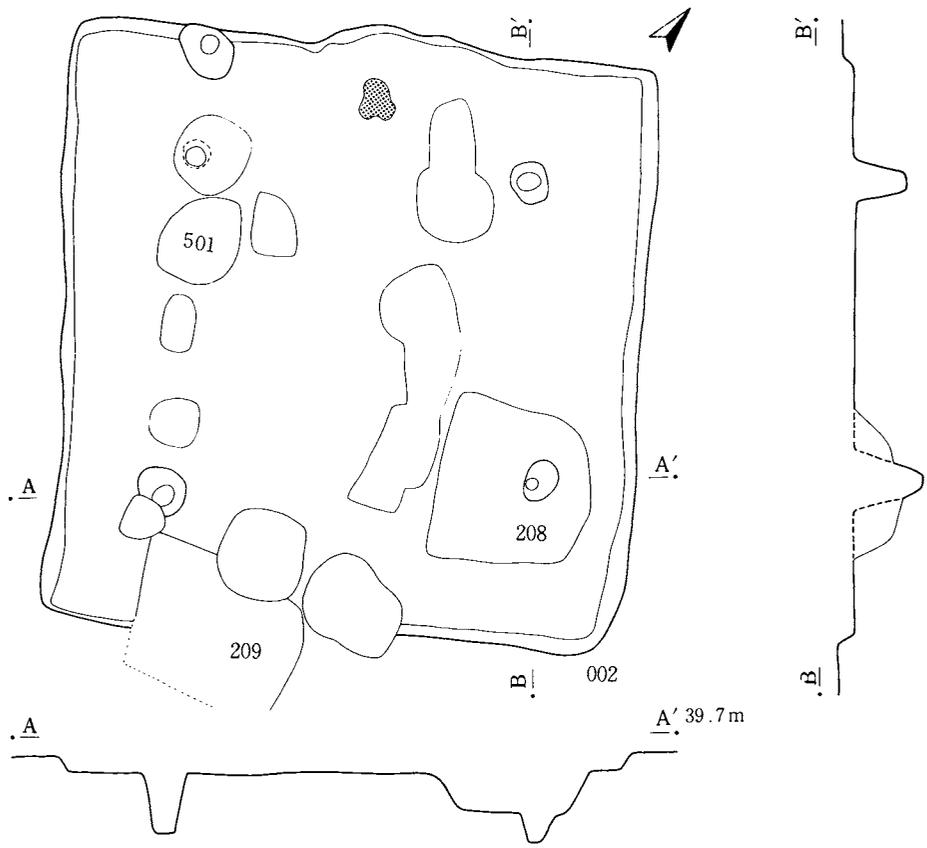
調査区南西端, A・B区にまたがって所在し, 北東コーナーを304号溝状遺構により若干攪乱される。また, 西端部は調査区域外となる。遺構の状況より, 外側に拡張した住居跡と考えられる。平面形は方形を呈し, 確認された東壁で, 1辺外側4.0m, 内側3.6mを測る。カマドを通る主軸方向はN-15°-Eを指す。壁はほぼ垂直に立ち上がり, 確認面からの深さは50cm前後である。床面はハードローム上面に形成され, 良好な状態である。特に主柱穴間はかなり踏み固められている。また, 外側の拡張した住居跡の床面は3cm程高くなっている。柱穴はほぼ対角線上に4本配置される。径25～30cmの略円形を呈し, 深さは北東49cm, 南東42cm, 南西32cm, 北西60cmと一定しない。心心間の長さは, 南北が2.0m, 東西が2.2mである。カマド対壁の内側周溝に接して長径24cmの主軸方向に長いピットが掘り込まれる。深さ33cmを測り, 壁側に傾斜する掘り方を有することから, 入口施設に伴うものと思われる。周溝は, 西側が調査区域外となるため全体は不明であるがカマド部分を除き全周するものと思われる。内側・外側とも深さ3cm程と浅い。住居内の覆土中にローム粒を多く含んでおり, 人為的に埋め戻された可能性が強い。カマドは北壁中央に位置する。天井部は崩落しているが遺存は比較的良好である。煙道部の壁への掘り込みは小さく, 焚口部が径60cmの略円形を呈する。床面への掘り込みは浅い。袖は砂質粘土で構築され, 燃烧部内に焼土が厚く堆積する。床面から10～20cm程浮いた状態で焼土及び炭化材が遺存している。東壁から南壁側に集中しており, 炭化材は中央に向けて放射状を示しているようである。この状況からすると, 棟に当たる部材と推定される。

遺物の出土はそれほど多くないが, 南壁直下から杯2点(3・6)と砥石, 内側周溝の北東コーナーから杯1点(5)が検出された。また, 7の甕はカマド内からの出土である。

出土遺物

002号住居跡(第166図1・2, 図版83)

1・2は土師器の杯である。1は口縁部を若干欠損するが口径12.4cm, 器高4.1cmを測る。口縁部は内傾し, 口縁下の稜は外側に突出する。内外面とも器面が摩耗しているため詳細な調整は不明であるが, 口縁部から体部内面はミガキ, 体部外面はヘラケズリ後ミガキが施されているようである。また, 内外面とも黒色処理されている可能性が強い。胎土は緻密で雲母小粒子

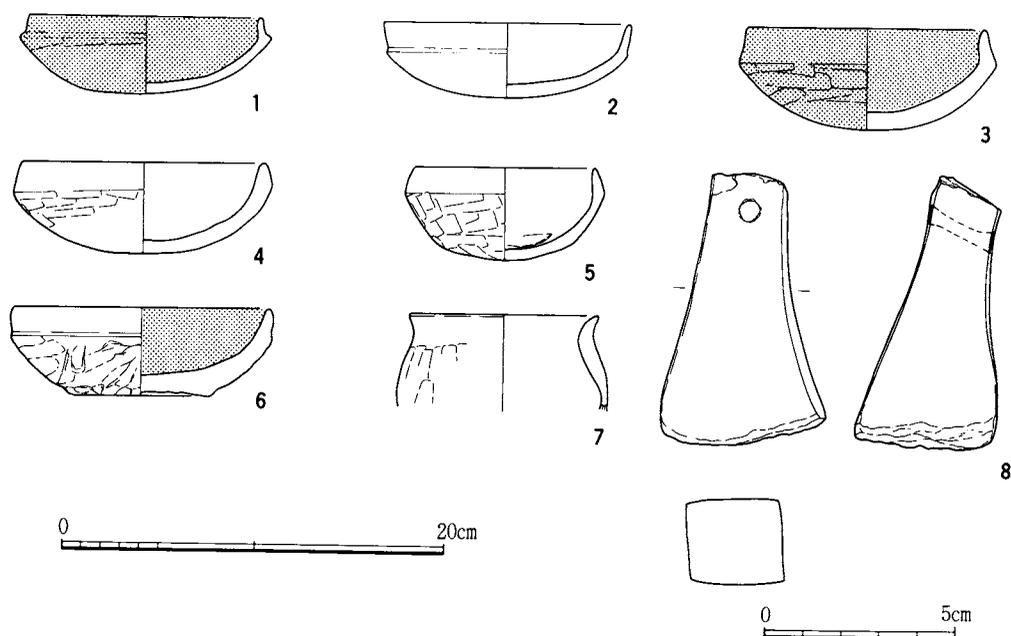


第165図 002・003号竖穴住居跡

を若干含み、橙褐色の色調を呈する。2は完形で、口径13.4cm、器高4.0cmを測る。口縁部が若干外傾し、口縁部の高さに比して体部が浅くなる。やはり器面が摩耗しているが、調整は1と同様である。胎土が緻密であり、1より雲母等の小粒子の混入が多くなる。

003号住居跡 (第166図3～8, 図版83)

3～6は土師器の杯であるが、それぞれ形態が異なる。3は非常に厚手の造りで、口径12.8cm、器高5.4cmを測る。内外面とも漆状の付着物が部分的に観察される。おそらく、内外面黒色処理の痕跡であろう。口縁部は外反気味に内傾し、体部は球形に近くなる。口縁部から体部内面には丁寧な横位のミガキ、胴部外面はヘラケズリ後粗いミガキが施される。胎土は緻密で雲母等の小砂粒を含む。4も厚手の造りで、全体に摩耗しているが特に口唇部が顕著である。口径13.0cm、器高4.8cmを測る。口縁下の稜は弱く、立ち上がりも短くなる。調整は1と同様で、胎土中に砂粒を多く含むようになる。特に赤色粒子の混入が目立つ。全体に被熱しているようである。5は完形で、口径9.8cm、器高4.9cmを測る小形品である。口縁部は直線的に内傾し、体部は半球形状を呈する。ただ、体部下端にはヘラケズリにより比較的明瞭な稜が形成されており、あるいは底部を意識したのかもしれない。口縁部から体部内面には横ナデ、体部外面は雑なヘラケズリで、粘土紐の巻き上げ痕が部分的に残る。胎土はやや粗く、比較的大粒の砂粒を含む。色調は赤褐色を呈し、底部外面に黒斑が認められる。他の杯に比べて体部内面の使用痕がほとんどみられない。6は全体の約1/2程の遺存でかなり粗雑な造りである。口縁部は内湾気



第166図 002・003号竪穴住居跡出土遺物

味にほぼ直立し、口縁下の稜は明瞭に形成される。口縁部から体部内面は比較的丁寧に横ナデされるが、体部外面はナデツケ様の粗い整形で器面の凹凸が激しい。底部は若干突出気味で、木葉痕が残る。胎土中に雲母・長石等の小砂粒を多く含み、内面のみ黒色処理されるようである。また、破損面に煤が付着していることから、本資料が破損後火を受けたことが考えられる。7は小形甕の小片である。口縁部は肥厚して緩く外反する。全体に摩耗しているが、胴部外面には縦位のヘラケズリが加えられる。胎土はやや砂質を帯び赤色粒子の混入が目立つ。黄褐色の色調を呈する。8は砂岩製の砥石である。上端が若干破損するがほぼ完形である。現存長7.0cmを測り、側面が丁寧に擦られている。上端部に径0.6cmの孔が穿たれる。

第3節 中世

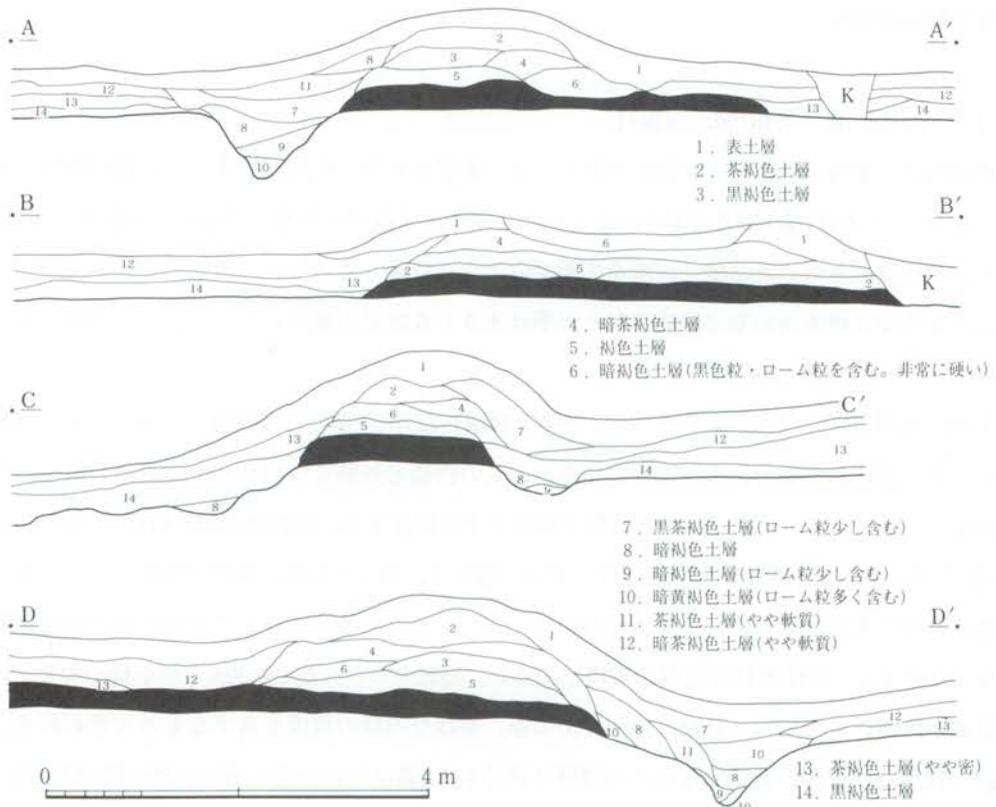
本遺跡において中世と考えられる遺構には土手・溝・掘立柱建物・土坑がある。この中で注目されるのは、方形に区画した土手である。調査当初は遺跡名にあるように屋敷として捉えていたが、調査の結果、掘立柱建物は存在するものの、屋敷に相当するような遺構の組み合わせは確認できなかった。むしろ、土手の配置からは、牧に付属する「捕込」の可能性が強い。また、第167図に示したように溝・掘立柱建物と粘土敷土坑は「捕込」に伴う施設と考えられる。以下で各遺構の説明をする。

1. 土手と溝（第167図，図版74）

本遺跡は、東西から谷が入り込んでおり、この地形を有効に利用して土手及び溝が構築されている。そのために、第149図で明らかなように北側を除く各辺は谷頭に平行する形態を呈する。また、北側は、さらに北に続く台地を切断するように位置している。

このような立地条件の基に形成された土手は大きく5区に区画されている。以下で便宜的にI区からV区に分けて説明する。

I区は南辺を除く3辺が方形を呈し、内側の面積1.725㎡を測る。北東隅には出入り口と思われる土手が途切れる部分が大きく存在するが、この内側と外側では40～50cmの段差があり、内側が高くなっている。北辺は長さ35m程で東の土手に接続する。基底面の幅3.6m、旧表土からの高さ1.0mを測り、外側がやや急斜面となる。盛土は、旧表土上面に褐色土を置き、その上に黒色土を積み上げ、さらに、ローム粒及びロームブロックを多く含む土で全体の形状を整えているようである。東側もほぼ同様の規模であるが、旧表土からの高さ0.8mとやや低くなる。西辺は調査区域外となるため詳細は不明であるが、やはり同様の規模を有するものと思われる。南辺はII区及びIII区の北辺となるため詳細は後述する。溝は北辺外側と南辺内側に検出された。北側の溝は、調査区内に関する限り土手に沿って検出されている。第167図で明らかなように、



第167図 牧関係遺構配置図及び土手断面図

土手が構築されている部分は外側の掘り方を有し、内側に隅丸長方形を基本形態とするピット列が掘り込まれている。深さは、外側の掘り方確認面より70～80cmの深さである。覆土中にはローム粒が多く含まれている。以上の状況より、本溝は土手の外側に設けられた柵となる可能性が強く、入り口となる北西側は掘り方の形状が異なることから、柵を構築しなかったかあるいは大きな木戸が作られたようである。II区は内部が6房に分割される。全体の形状はほぼ長方形を呈するが、西側半分の南辺が外側に張り出している。II区の外周部の規模は、北辺60m、東辺29m、西辺32m、南辺55mで、内側の面積1,500㎡を測る。西辺南端は南側の土手と接続せず、幅3m程の開口部が存在する。IV区からの入り口になるであろう。外周土手の外側には、入り口部分を除き溝が巡らされている。これは、この長方形の部分が他の区とは機能が異なる区域として意識されていたためか、あるいは、当初この区域のみが存在し、他の区が後に付け足されたことが予想される。C-C'の土層断面から、I区側の溝が埋め戻され、その上にさらに土手を築きなおしたような可能性が考えられ、後者の状況を想定することが妥当なようである。内部の6つの区画は、中央を横断する比較的幅広の土手から南北に2本の土手が直角に派生しており、南北の相対する房は基本的に同一面積となっている。また、派生する土手はII区の外周土手につながらず、各房が2～3mの出入り口で連続している。さらに、II d区とII a区も幅1.0m程の通路が設けられ、これによってII区内の6房は出入り口によってすべてつながるようにされている。各房の面積は、a：113㎡、b：97.5㎡、c：203㎡、d：195㎡、e：180㎡、f：232.5㎡を測る。ここで注目されるのは、第167図で明らかなように、II d区を除き粘土敷土坑が基本的に各房1基配置されている状況である。210号土坑以外は土手に接する位置にあり、後述するように各馬房に伴う水飲み場と考えられる。II c・II d区には掘立柱建物が設けられている。その配置より本牧に伴う施設と考えられるが、その性格については明確に判断することはできない。III区はII a区の西側に位置する。土手内側で、南北14m、東西13m、面積190㎡を測り、正方形に近い形状を呈する。南東隅で幅5mの出入り口を有し、南西方向外側から通じている。北側土手側には粘土敷土坑が1基配置されており、II区同様水飲み場と考えられる。IV区は、II d区の西側に所在する。1辺10mの正方形を基本としているが、南西側がやや不整となる。内側の面積137.5㎡を測る。西辺はやや高くなっているものの、他辺とは明らかに異なっており、おそらく、入り口として機能していたと思われる。この区で注目されるのは、III区側から延びる溝と、南側から延びる溝が土手の下に存在している点である。II d区の入り口部分が途切れており、前述したようにII区全体が他の区より先行する時期であるならば、溝を埋めた後に新たに付け加えた区画と考えられる。内部の施設としては、掘立柱建物1棟と粘土敷土坑2基が存在する。建物と土坑はお互い重複あるいは隣接しており、同時存在は考えられない。切り合いからみると、土坑が古く、建物が新しくなるようである。断定はできないが、この前後関係は、先述した本区の付け足しに伴って土坑から建物に変化していったことも

考えられよう。V区は調査区域外に存在するため、測量のみで内部の施設等は不明である。正方形プランを呈し、土手は1辺25m程を測る。内部の面積は土手内側の見かけで415m²となり、北西隅に出入り口を有する。

以上の様相をまとめると、溝で囲まれたII区は掘立柱建物と水飲み場と考えられる粘土敷土坑を有しており、I区とは明らかに機能が異なる区域として意識され、さらに、III・IV区はII区と同様の性格を持たせた区画として拡張された可能性が強いようである。

2. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、第167図で明らかなようにIIc区、II d区、IV区に配置される。時期を決定できるだけの遺物が出土していないため、明確な構築時期は不明であるが、土手にほぼ軸を揃えていることと、その配置から土手に伴う遺構として考えておく。

5 0 1号掘立柱建物跡（第168図）

002号住居跡の覆土中に掘り込まれ、南側で209号土坑と重複し、東側で208号土坑と接する。遺構状況より、002号住居跡が最も古く、本掘立柱建物跡が新しくなるようである。柱筋は不揃いであるが、基本的に3間×2間の南北棟である。規模は、桁行3間で4.0m、梁行2間で2.5mを測るが、等間とはなっていない。主軸方向はN-17°-Wを指す。柱穴の規模及び形態は一定していないが、東側の桁柱に沿って溝が部分的に確認される。おそらく、柱材の抜取りの際に掘り込まれたものであろう。

遺物の出土はなかった。

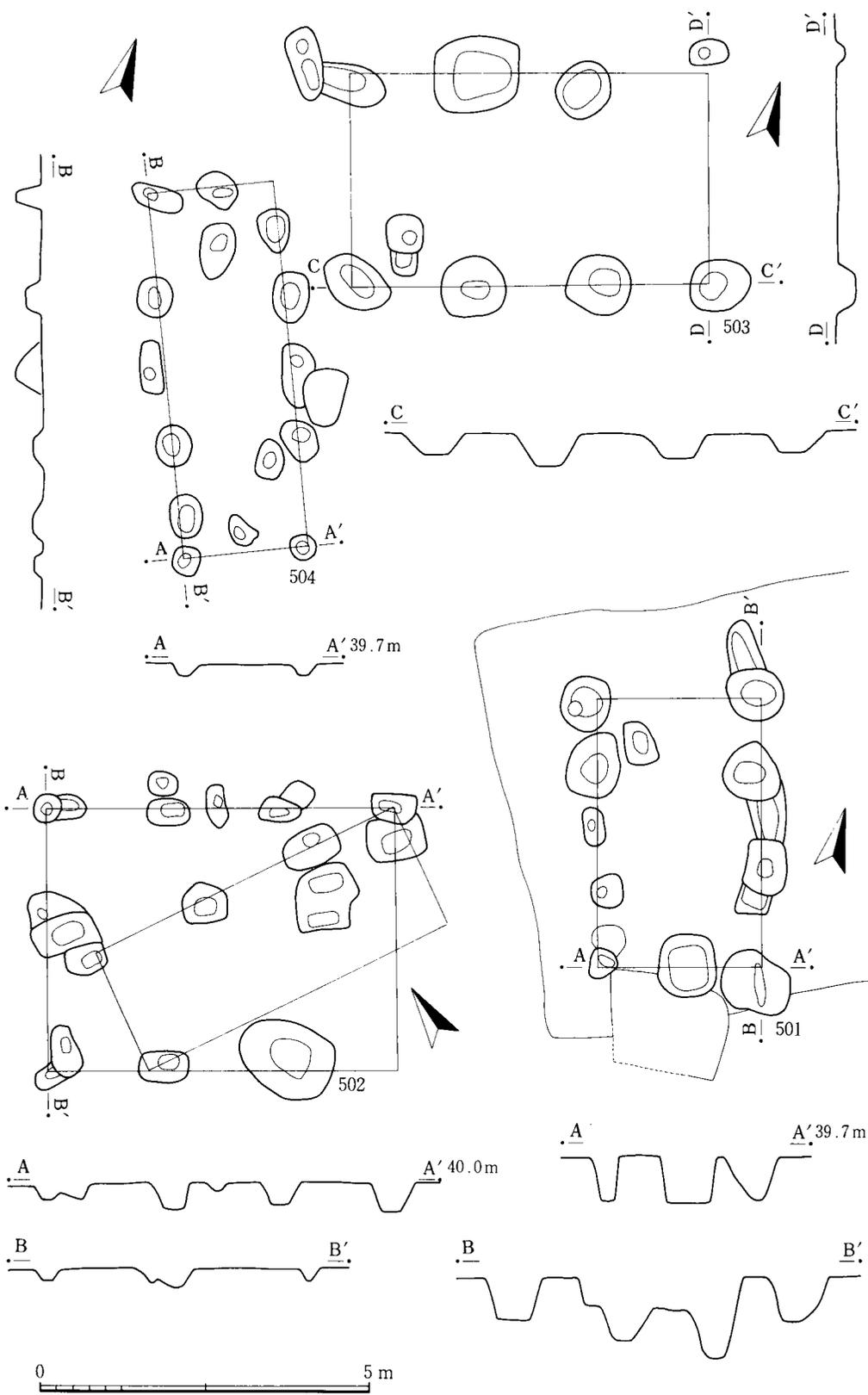
5 0 2号掘立柱建物跡（第168図、図版75）

IIc区の北側土手に接して構築される。柱穴の組合せから図のように2棟の重複を想定したが、その新旧関係は不明である。また、柱が不揃いであり、総柱となる可能性もある。ここでは、前者について説明する。外側の建物は、3間×2間の東西棟で、桁行5.4m、梁行3.9mを測る。柱間は、梁行が1.8m（6尺）、桁行が1.95m（6.5尺）等間である。柱穴の掘り方にはばらつきがあり、方形を基本とし、深さ20～40cmを測る。建て替えが行われたようである。主軸方向はN-58°-Wを指す。内側は3間×1間の東西棟と推定される。規模は、桁行5.0m、梁行1.9mで、柱間は一定していない。掘り方は方形を基本とし、深さ40cm前後を測る。主軸方向は、N-83°-Wを指す。

北西隅の柱抜取り穴と思われるピット内と柱穴確認面より土師質の杯が検出された。

5 0 3号掘立柱建物跡（第168図、図版75）

II d区の北側土手に接するように構築された建物で、後述する504号建物とともにL字形に配置される。3間×1間の東西棟で、規模は桁行5.5m、梁行3.2mを測る。柱間は、桁行が1.8～2.1mで、6尺ないし7尺となる。梁行は間の柱を有さず、約11尺とかなり広い。柱穴の掘り方に



第168图 501~504号掘立柱建物跡

はかなりばらつきが認められる。主軸方向は、N-107° -Wを指す。

遺構確認面から、502号建物と同様な土師質の杯が1点検出された。

5 0 4 号掘立柱建物跡 (第168図)

II d 区の西側土手に接し、503号掘立柱建物跡の西側に位置する。柱穴が不規則なため明確ではないが、基本的に3間×1間の南北棟になると思われる。規模は、桁行5.5m、梁行1.9mを測り、柱間は1.5~2.1mで、5尺から7尺と一定していない。503号掘立柱建物同様柱穴の掘り方にはばらつきが認められる。主軸方向は、N-22° -Wを指す。

遺物の出土はなかった。

出土遺物

5 0 2 号掘立柱建物跡 (第171図1~3, 図版83)

1~3は底部回転糸切り未調整の土師質杯である。1・2は $\frac{1}{2}$ 程の遺存で、底部が突出する特徴を有する。体部下半で強く腰が張り、直線的に口縁部に移行する。3は完形で、口径12.1cm、器高3.3cmを測る。口縁部で大きく肥厚する。いずれも胎土中に小砂粒を多く含み、ザラついた器表面を呈する。橙褐色の色調を呈する。

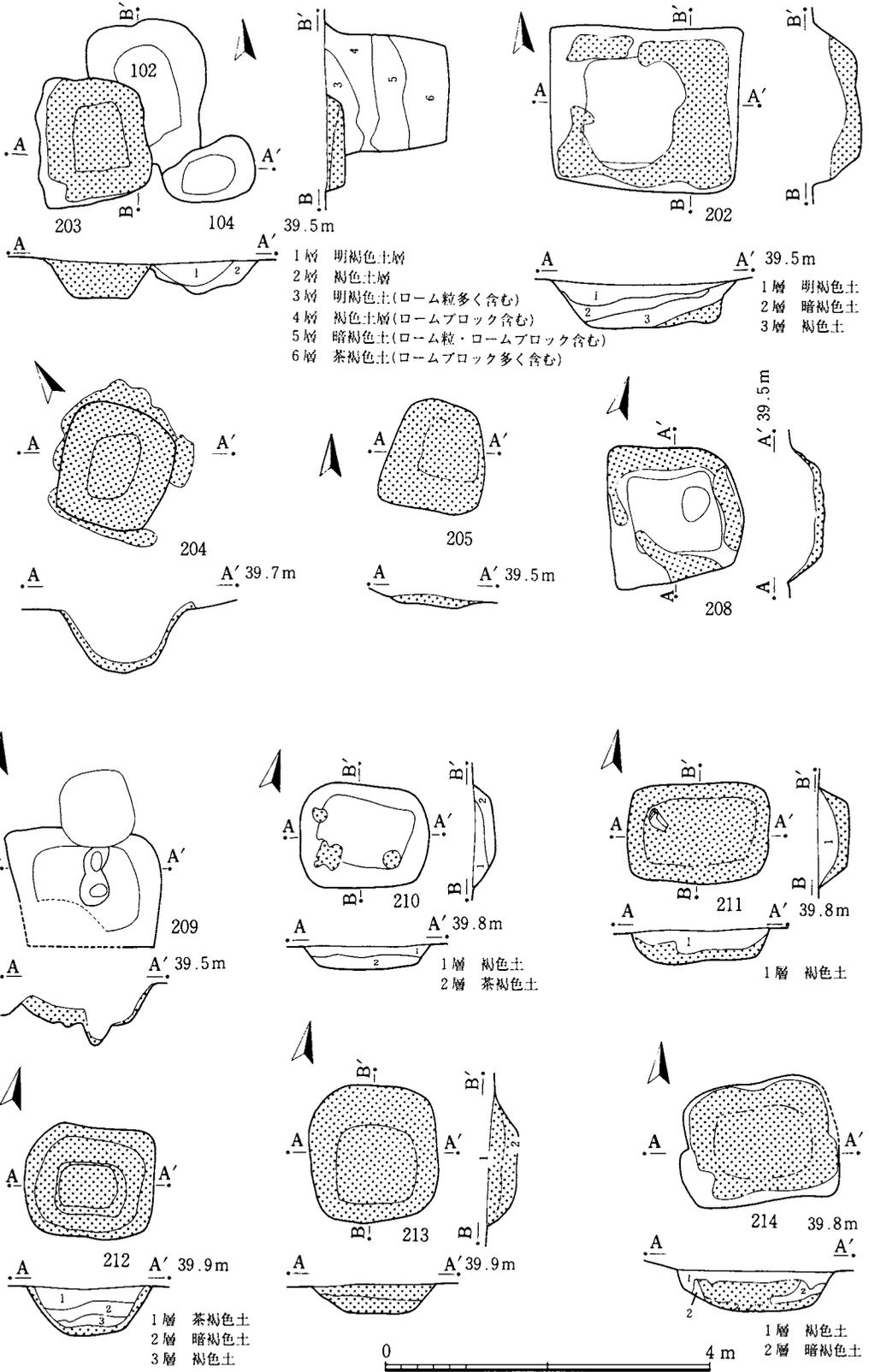
5 0 3 号掘立柱建物跡 (第171図4, 図版83)

4は推定口径11.6cm、器高3.5cmを測る土師質杯である。体部下半の腰が強く張り、口縁部は外反気味に丸く収められる。底部は回転糸切り未調整である。胎土中に小砂粒を多く含み、暗褐色の色調を呈する。

3. 土坑 (169・170図, 図版75・76)

本遺跡においては多くの土坑が検出されているが、ここでは、性格が比較的明瞭なものについて説明を加える。

多くの土坑の中で注目されるのは、第169図に示した粘土敷土坑である。方形プランを基調とし、側壁及び底面に粘土が貼付けられるのが一般的であるが、203・213号土坑のように覆土全体が粘土で構成されるものもみられる。202号土坑はIII区北側に位置する。粘土敷土坑の中では最も規模が大きいものである。203号土坑はII a 区に所在し、102号土坑と重複するが、本土坑の方が新しい所産と考えられる。204号土坑はIV区からII d 区への入り口、205号土坑はIII区の入りに所在する。土手に伴う溝と重複するかあるいはその延長線上に当たる。208・209号土坑はIV区入り口に位置し、501号掘立柱建物跡と重複する。前述したように、本土坑の方が古い時期の所産と考えられることから、本土坑の廃棄後、掘立柱建物が構築されたと想定されるがほとんど時間差は存在しないと思われる。210・211号土坑はII e 区、212号土坑はII f 区に配置されるが、211号土坑と212号土坑は区画する土手の両側に相対している。213・214号土坑も同様に区画土手の両側に所在している。



第169図 粘土敷土坑

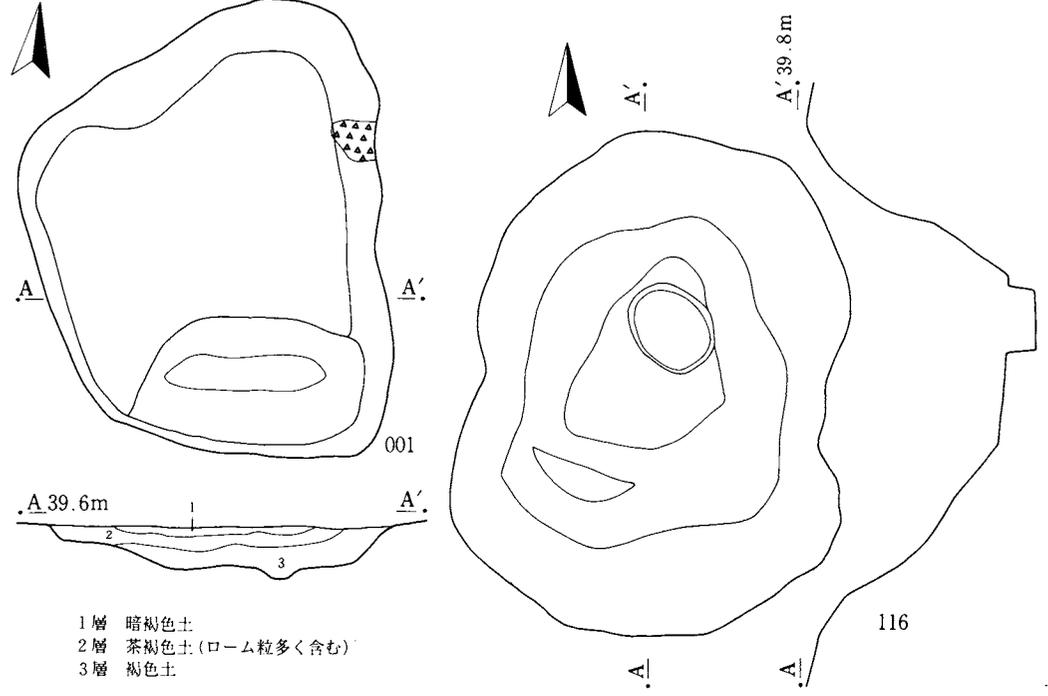
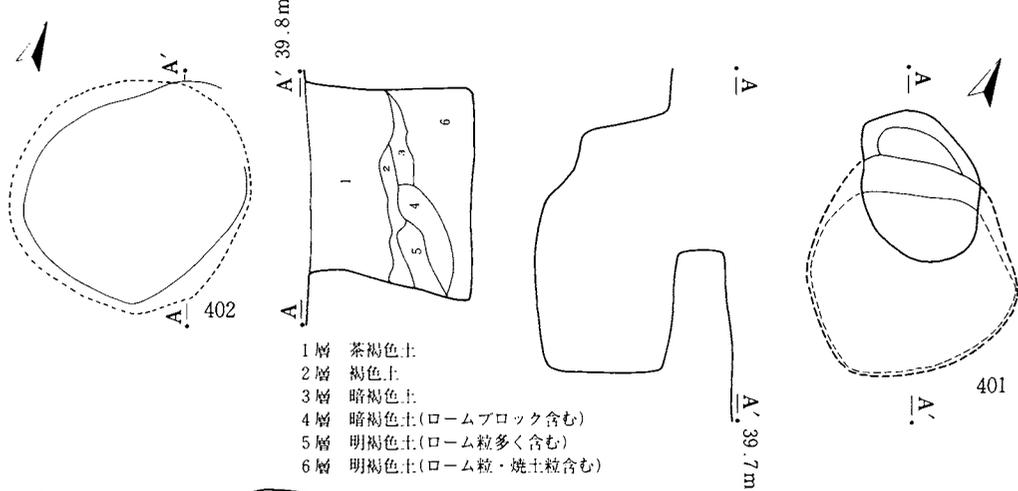
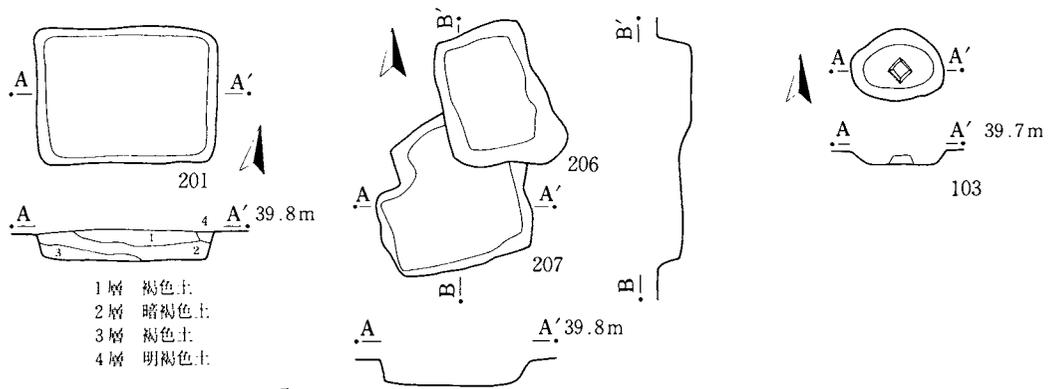
以上の状況から、この粘土敷土坑は各区に意識的に配置されたものと考えられることができよう。従来、この種の土坑については性格不明として扱われるのが一般的でしたが、本遺跡の性格及び遺構の配置からすると、本遺跡に限っては馬の水飲みを目的とした遺構と想定するのが最も妥当と思われる。もちろん、これらの土坑群は図でみる限り掘り込みが浅く水を貯めるには適当ではないようであるが、本来の遺構構築面はかなり上位にあると考えられ、それなりの深さは当然あったであろう。

201・206・207号土坑は方形プランを呈する。性格は不明であり、所属時期も明確ではない。201号土坑が土手の下から検出されていることからすると、土手よりは古い構築と考えられよう。103号土坑はII d区からII a区への入り口に位置するが、所属時期は不明である。1.0×0.7mの楕円形プランを呈し、確認面からの深さ15cmを測る。底面中央に接して五輪塔の火輪部が倒位で検出された。401・402号土坑は地下式土坑と思われる。401号土坑は209号土坑と重複するが、遺構状況より本土坑の方が新しいことは明瞭である。出入り口部は楕円形の竪坑を呈し、底面は小さなテラス状となる。主室部底面はテラス面より50cm程低く、確認面よりの深さは2.1mを測る。遺物の出土はほとんどなかった。402号土坑は、II f区、212号土坑の南50cm程に近接する。出入り口部が崩落し、主室部のみが残存したものと思われる。略楕円形を呈し、確認面からの深さ1.8mを測る。覆土中にローム粒及びロームブロックを多く含んでいるが、全体に軟質であることから、本土坑は、人為的に埋め戻されたのではなく、天井部の崩壊や自然の流入により埋まったものと考えたい。覆土中より、内耳鍋や杯が出土している。001・116号土坑は大形の竪穴状を呈する。001号土坑は、II a区とII b区を区画する土手の延長線上に位置する。長軸4.7m×短軸3.7mの不整形を呈し、確認面からの深さ40～50cmを測る。壁・底面とも凹凸が激しい。覆土中より内耳鍋・杯の小片が若干みられる。116号土坑はI区の南側土手に隣接する。長軸5.2m×短軸4.0mの略楕円形状を呈し、確認面より2.0mの深さを測る。底面には1.0×0.8mの楕円形のピットが掘り込まれる。底面からの深さは0.4mである。覆土中にローム粒及びロームブロックを多く含み、001号土坑と異なり、比較的硬質であることから、本土坑は意図的に埋め戻された可能性が強い。図示できるような遺物の出土はなかった。

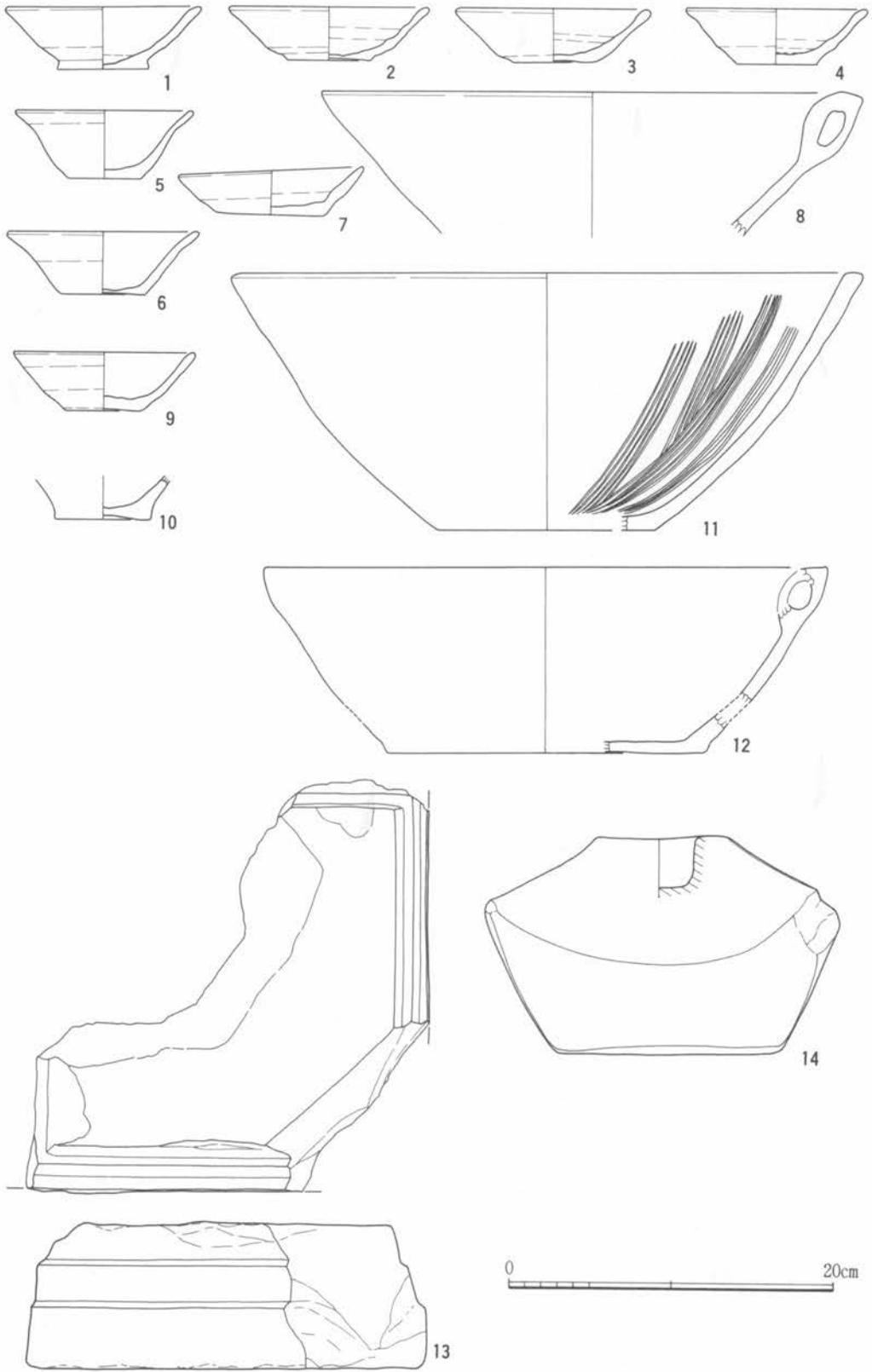
出土遺物

402号土坑（第171図5～8、図版83）

5～7は底部回転糸切り未調整の土師質杯である。5・6は同様の器形を呈し、体部が直線的に開き、上端部で大きく外反する。体部内外面とも丁寧な横ナデ調整で、ロクロ目はほとんど残らない。胎土中に小砂粒を多く含み、赤褐色の色調を呈する。内外面とも部分的に油煙状の付着物が認められる。6はほぼ完形で、口径11.8cm、器高4.0cmを測る。7は完形で、口径11.5cm、器高2.8cmを測る。全体に歪みが激しく、器面の荒れが著しい。内外面とも横ナデ調整で、底部の糸切り離しは回転が遅いため、静止に近くなる。胎土中に長石・石英粒を多く含み、暗



第170図 その他の土坑



第171図 掘立柱建物跡・土坑出土遺物 (502: 1~3, 503: 4, 402: 5~8)
 (001: 9~12, 211: 13, 103: 14)

褐色の色調を呈する。5・6に比して硬質の焼きとなっている。8は内耳鍋の小片で、遺存部では内耳が1個確認される。内外面とも丁寧なナデ調整で、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈するが、上半部が被熱により黒変し、部分的に煤が付着する。

001号土坑（第171図9～12，図版83）

9・10は回転糸切り未調整の土師質杯である。9は推定口径11.4cm，器高3.6cmを測る。体部は直線的に開き，口縁部でやや肥厚する。胎土中に小砂粒を多く含む。二次的に火を受けたようで器面の荒れが激しい。11は推定口径39.2cmを測る大形の土師質摺鉢である。内外面ともナデ調整で，全体に摩耗が激しいが，内面には5条1単位のおろし目が観察される。胎土はやや粗く，長石・石英の小砂粒を多く含み，黒褐色の色調を呈する。12は内外面とも丁寧にナデ調整される内耳鍋の小片である。胎土等11と同様である。

211号土坑（第171図13）

13は宝篋印塔の部材と思われるが，明確な部位は不明である。破損品のため詳細な法量は不明であるが，1辺27cm程を測るものと思われる。高さは，図の下側が欠損しており不明である。側面は丁寧に仕上げ調整される。砂岩製である。

103号土坑（第171図14）

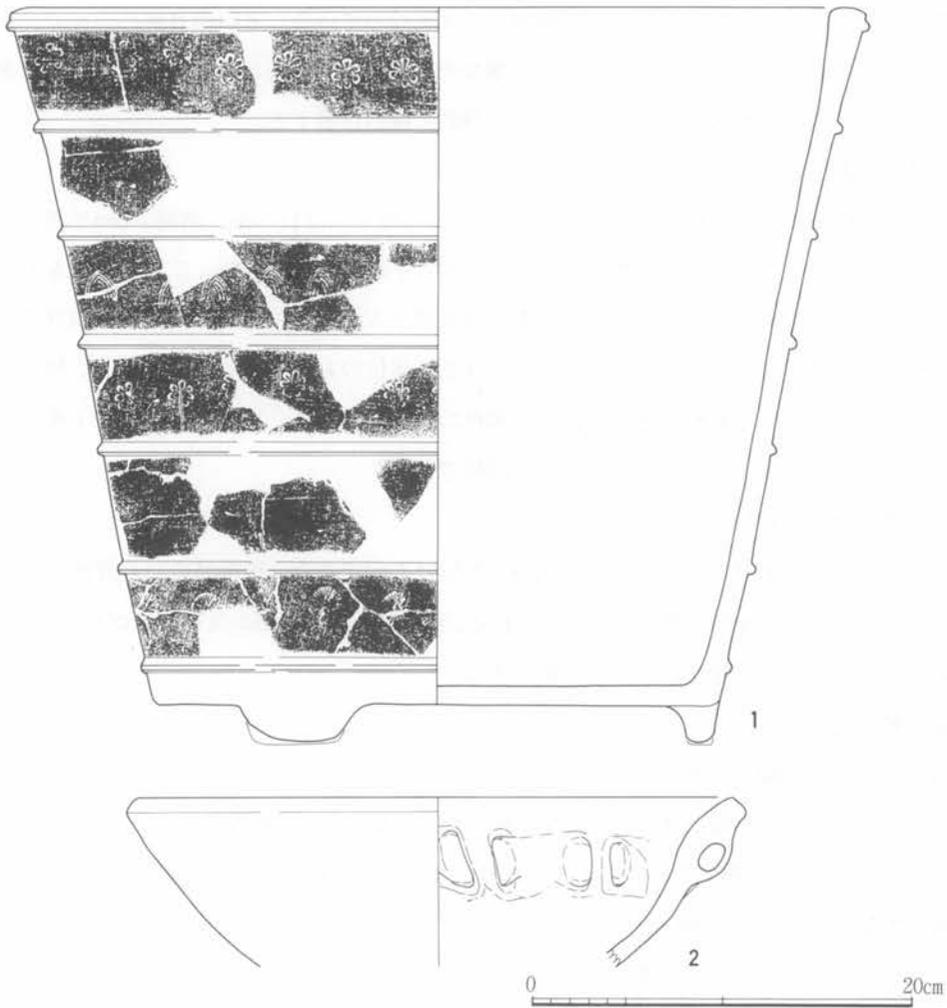
14は五輪塔の火輪部である。最大幅22.0cm，高さ13.4cmを測る。底面には対角線に沿って直線状の荒いノミ痕が明瞭に残るが，以外の面には丁寧な仕上げ調整が施される。上面には径4.5cm，深さ2.6cmを測る隅丸方形のほぞ穴が掘り込まれる。石材は13同様砂岩である。

溝出土土器（第172図，図版83）

1はII区北側の土手に伴う溝から出土した瓦質の火鉢で，小破片となっているがほぼ全体を推定できる。推定口径46.6cm，器高33.2cmと大型で，底部から直線的に胴部が開き，全体に筒状を呈する。体部は，口縁直下から底部にかけて断面台形の紐状突帯により6区に分割され，口縁部から2段目と5段目が無文となる以外は横列の印刻が認められる。1段目と4段目は印花文，3段目は回文，5段目は菊花文となるようである。脚部は3個付され，脚部底面がかなり消耗している。全体に丁寧なナデ調整で，器外面黒色，器肉は茶褐色を呈する。胎土はやや粗く，長石・雲母の小砂粒を多く含む。2は土師質の内耳土器で，破片であるが，2個の内耳が観察される。

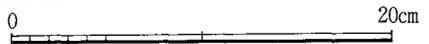
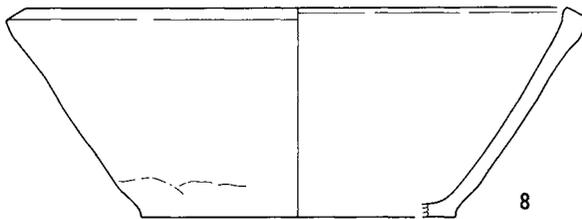
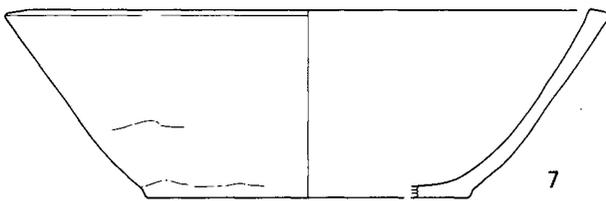
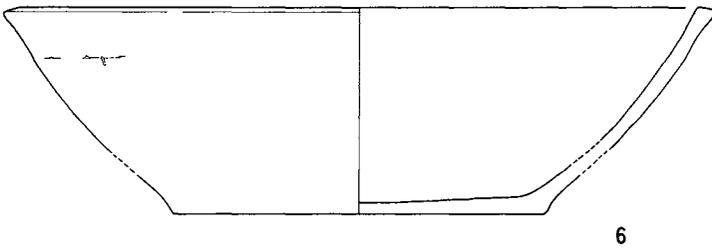
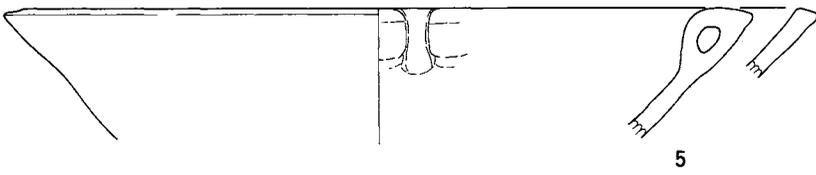
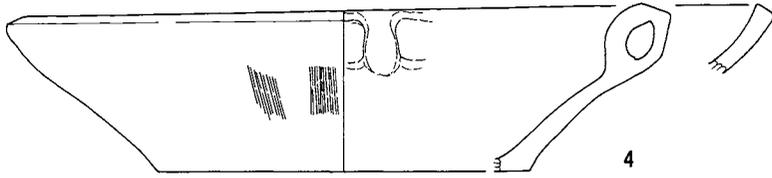
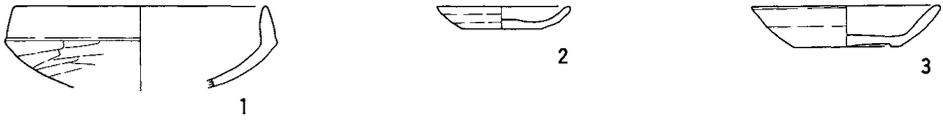
グリッド出土土器（第173図）

1は古墳時代後期の土師器杯で，推定口径13.2cmを測る。明瞭な段を有して口縁部がやや内傾する。口縁部から体部内面は丁寧にミガキ，体部外面はヘラケズリ調整される。胎土は緻密で砂粒の混入も少なく，暗褐色の色調を呈する。2は土師質の小皿で，口径7.0cm，器高1.2cmを測る。全体に丁寧にヨコナデ調整で，底部は回転糸切り未調整である。胎土は緻密であるが，長石を主体とする小砂粒を多く含み，ザラついた器面を呈する。3は鉄釉の皿で，口径9.8cm，

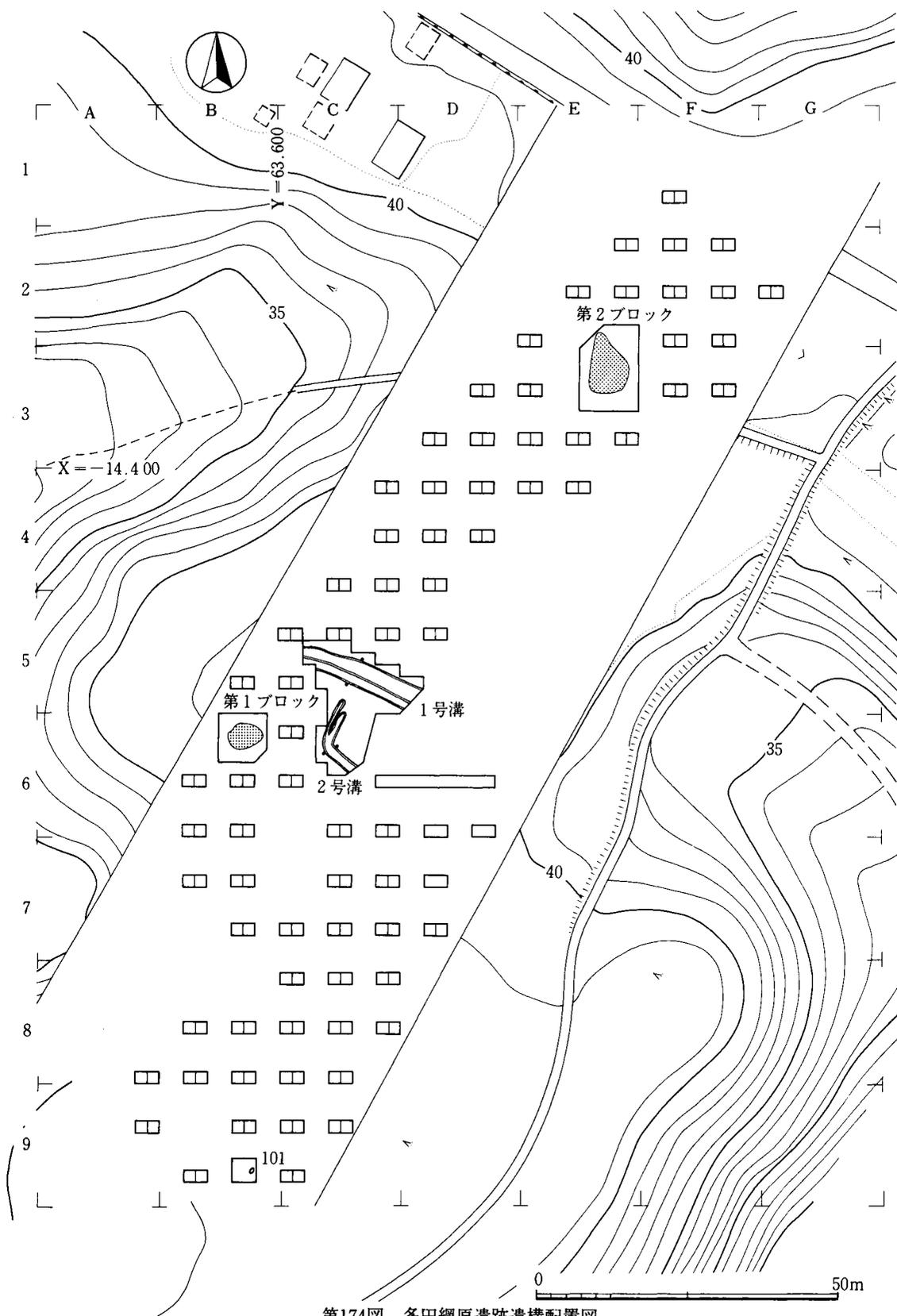


第172図 溝出土土器

器高2.2cmを測る。全体にヨコナデ調整され、底部はケズリ高台状を呈する。見込み部には重ね焼きの三叉トチン跡が残る。素地は灰褐色で、鉄釉は濃茶褐色の色調である。4～8は鉢形の土師質土器で、4・5には内耳がみられる。6～8には遺存していないが、おそらく内耳になると思われる。4は推定口径36.4cm，器高8.6cmを測る。全体にナデ調整されるが、外面には平行叩き目の痕跡が部分的に残る。胎土中に小砂粒を多く含み，黒褐色の色調を呈する。5～8もほぼ同様の調整・色調・胎土を呈するが，6の外面には炭化物の付着が観察され，8には二次的な被熱が認められる。



第173図 グリッド出土土器



第174図 多田網原遺跡遺構配置図

第5章 多田綱原遺跡

第1節 旧石器時代

概要 多田綱原遺跡からは遺物集中地点が2か所検出された。検出地点は調査区西端部の南西斜面に位置する第1ブロックと調査区の北側の西斜面に位置する第2ブロックである。第1ブロックと第2ブロックは約80m離れている。

第1ブロック・第2ブロックは、石器出土層準はVI層からVII層上部にかけて出土している。石器製作技術・石器組成等から同一段階の石器群と考えられるが、接合関係もなく明確には同一文化層であるとはいいいないので、とりあえず、第1ブロックと第2ブロックをVI層下部からVII層上部に生活面を持つ石器群として扱っておくことにする。

1. 層序区分 (第175図)

I層 表土層

II層 黒褐色土層。ローム粒を多く含む。

III~V層 黄褐色土層。いわゆるソフトローム層とハードローム層が対応する。VI層までソフト化されており、III・IV・V層の識別が困難である。

VI層 黄褐色土層。始良Tn火山灰を含む層である。

VII層 暗黄褐色土層。第2黒色帯に相当する層である。赤褐色のスコリアを少量含む。第2黒色帯の細分は困難である。

VIII層 黄褐色土層。立川ローム層の最下部にあたる。

IX層 暗黄褐色土層。武蔵野ローム層の最上部にあたる。やや粘性があり、軟らかい。

X層 黄褐色土層。クラックの発達がほとんどなく、スコリアの混入もほとんどみられない。

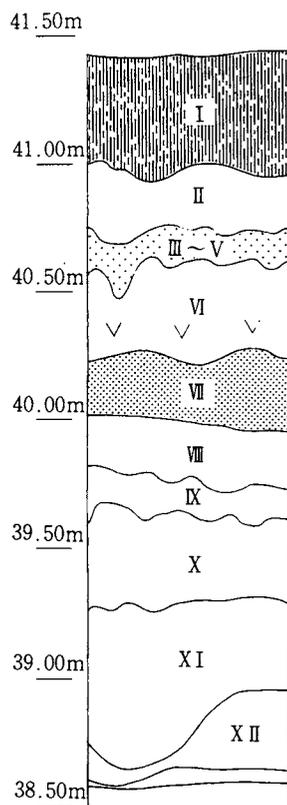
XI層 黄褐色土層。やや明るい色調のロームであり、堆積は非常に密で硬い。

XII層 黄褐色土層。やや暗っぽく、堆積は密で軟らかい。

XIII層 茶白色粘土層。堆積が密な粘土層である。常総粘土層に相当すると思われる。

2. 第1ブロック

a. 分布状況 (第176図, 図版84)



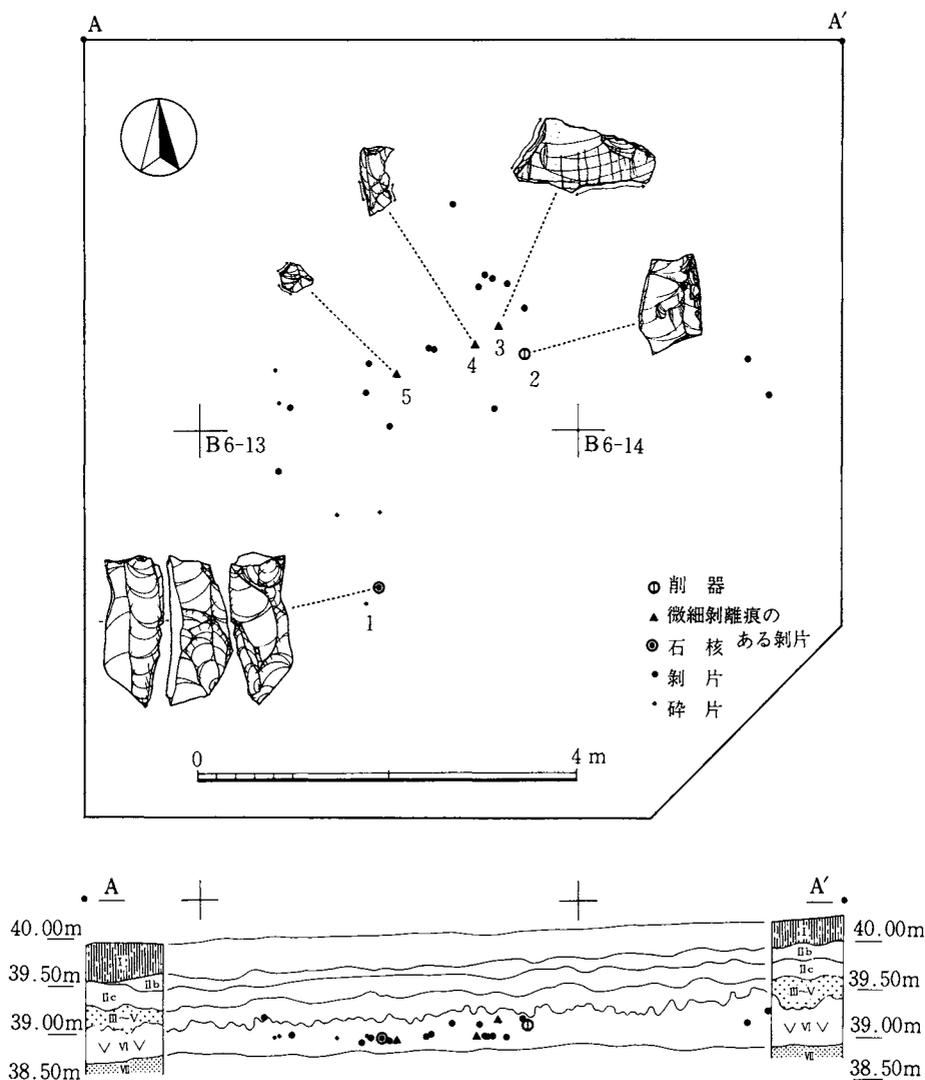
第175図 基本層序

石器の出土層位はVI層上部から下部にかけて出土しており、VI層下部に集中する。平面分布は5.4m×4.2mの範囲から26点の遺物を検出した。

b. 出土遺物 (第177図, 図版85)

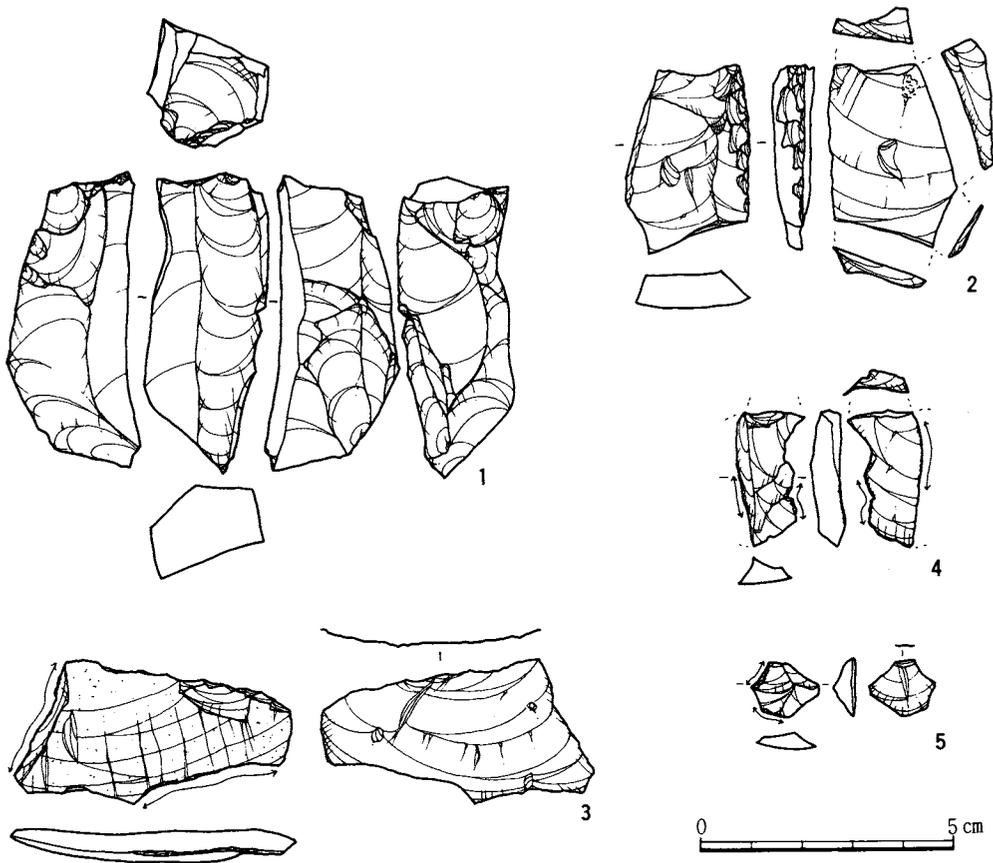
検出された石器の総数は26点である。器種組成は削器1点、微細剝離痕のある剝片3点、石核1点、剝片16点、碎片5点である。石材別にみると黒曜石が23点で81%とかなり高い組成を示す。第2ブロックからは黒曜石が1点も出土していないのに比べて対象的である。

1は石核である。両設打面で、打面調整をほとんど行わない石刃石核である。ただし、第1ブロックからは石刃が出土しておらず、単独の母岩である。この石核に対応すると思われる両設打面でほとんど打面調整を行わない石核・石刃は、第2ブロックから数点(第2ブロック2・3・12)出土しており、石刃製作技術からみても、第1ブロックと第2ブロックは同一段階の



第176図 第1ブロック器種別分布図

石器群と考えられる。2は削器である。幅広の剝片を素材として右側縁に比較的浅い面的な調整加工が行われている。3～5は微細剝離痕のある剝片である。



第177図 第1ブロック出土石器

第10表 第1ブロック石器組成表

母岩	器種	削器	微細剝離痕有剝片	石核	剝片	碎片	合計
チャート	1	0	0	1	0	0	1
頁岩	1	0	0	0	1	0	1
凝灰岩	1	0	0	0	1	0	1
黒曜石	1	0	2	0	10	4	16
黒曜石	2	1	0	0	3	0	4
黒曜石	3	0	1	0	1	1	3
合計		1	3	1	16	5	26

第11表 第1ブロック出土石器属性表

図版 番号	器 種	母岩	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号	図版 番号	器 種	母岩	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号
1	石核	チャート1	57.2×23.4×19.6	36.5	プレI0004	4	微細剝離痕のある剝片	黒曜石1	26.6×12.5×4.5	1.4	プレI0007
2	削器	黒曜石1	39.6×24.8×5.9	5.9	プレI0011	5	〃	黒曜石2	14.4×12.7×2.2	0.3	プレI0020
3	微細剝離痕のある剝片	黒曜石2	26.9×53.3×5.8	7.9	プレI0013						

c. 小結

第1ブロックは第2ブロックと比べて、石材・器種組成ともに大きく異なる。第1ブロックは、黒曜石がかなりの割合を占め、石刃石核があるものの、剝片の形状も不定形のもので占められ、石刃が検出されていないという特色がある。

3. 第2ブロック

a. 分布状況 (第178・179図, 図版84)

石器の出土層位はIII～V層からVII層上部にかけて出土しており、VI層下部に集中する。平面分布は9.2m×6.2mの範囲から45点の遺物を検出した。母岩別分布の傾向は、各母岩ごとに1～2mの小範囲に分布する傾向がある。

b. 出土遺物 (第180～183図, 図版85・86)

検出された石器の総数は45点である。器種組成はナイフ形石器1点、石核2点、楔形石器2点、剝片34点、碎片5点、礫片1点である。石材は安山岩が27点検出され約半数を占め、第1ブロックから多く検出された黒曜石は1点も検出されていない。

1はぶ厚い縦長の剝片を素材としたナイフ形石器である。急角度の調整加工が施され、稜上に調整加工が施されている。基部の形状は丸みを持つ。左上部の側縁に素材の縁辺を残している。2は両設打面の石核である。打面調整が行われていない石刃石核である。第1ブロックから出土している石核と同一の石刃生産技術による石核である。7は楔形石器である。礫を素材として、両極剝離によって生産された剝片を素材として、両極剝離を行っている。3～6, 8～16は剝片である。これらはいずれも、頭部調整は行われているが、打面調整がないという特徴がある。3・4は同一母岩の凝灰岩2で、両設打面から剝離された剝片である。3は末端部に石核の底面を残しており、2の石核と同じくらいの高さを持つ石核から生産された剝片であろう。5は末端部に微細剝離痕がみられるが、両極剝離によって生産された剝片である可能性もある。14～16は剝片と石核の接合資料である。14と15は礫面を削除するために剝離を行った剝片であろう。14を剝離した後に15+16の背面側の礫面の削除を行い、15を剝離して打面を作出している。その後、15の剝離によって作出した打面と下端部からの両設の打面から剝片を剝離している。おそらく、2の石核も16の石核のように礫面削除の後に平坦打面を作出して、両設打面による剝片生産を行ったものと思われる。17+18は両極剝離による楔形石器の製作工程を示す接合資料である。幅広の縦長剝片を素材として両極剝離を行った資料で、両極剝離によ

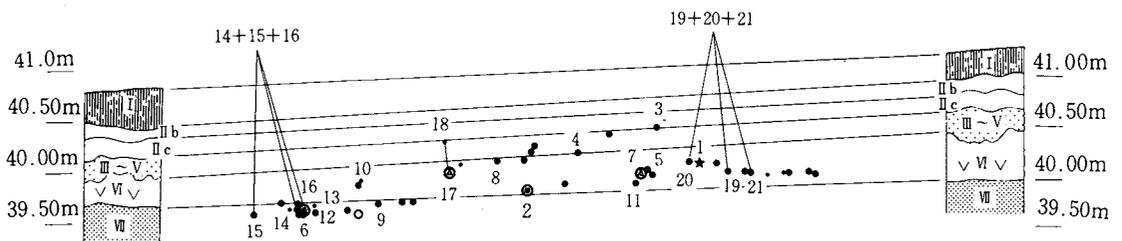
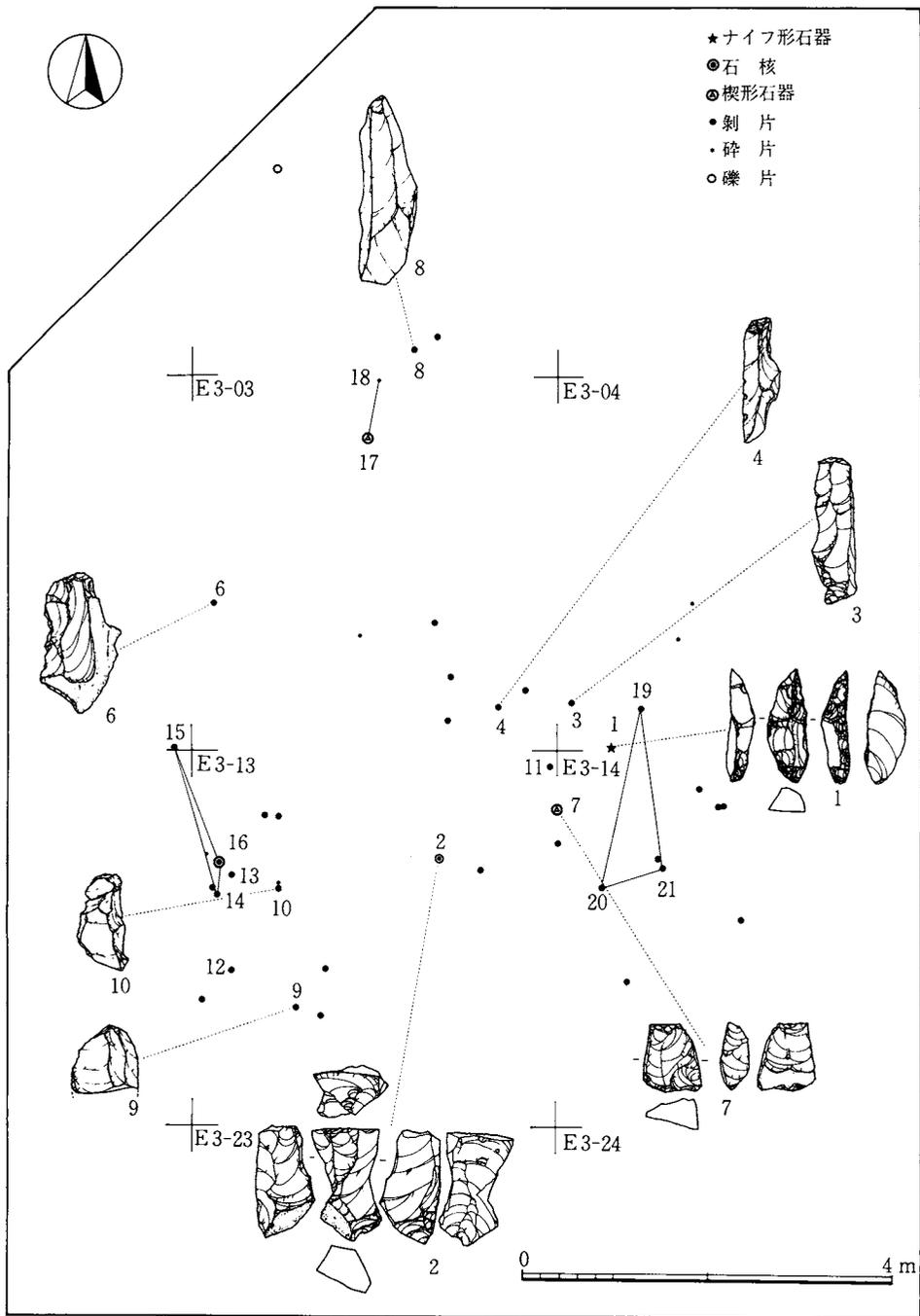
第12表 第2ブロック石器組成表

母岩	器種	ナイフ形石器	石核	楔形石器	剥片	碎片	礫片	合計
安山岩	1				7	1		8
安山岩	2				7	2		9
安山岩	3		1		2			3
安山岩	4				4			4
安山岩	5				1			1
安山岩	6				1			1
安山岩	7				1			1
凝灰質安山岩	1				2			2
凝灰質安山岩	2				1			1
頁岩	1			1				1
頁岩	2				1			1
頁岩	3				1			1
珪質頁岩	1	1						1
珪質頁岩	2				1			1
凝灰岩	1				2	1		3
凝灰岩	2				2			2
玉髓	1		1					1
玉髓	2			1		1		2
玉髓	3				1			1
玉髓	4						1	1
合計		1	2	2	34	5	1	45

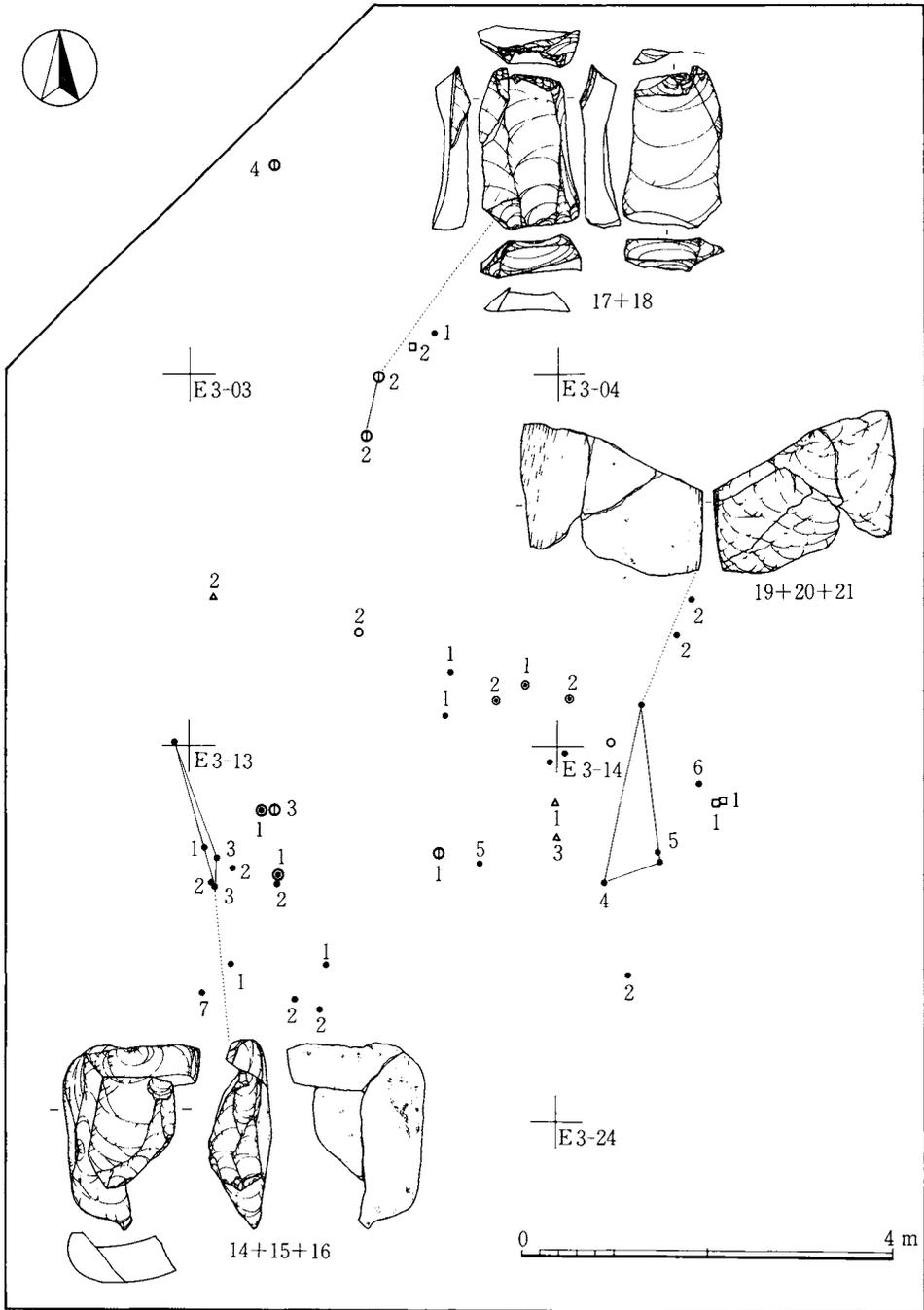
第13表 第2ブロック出土石器属性表

図版番号	器種	母岩	長×幅×厚(mm)	重量(g)	登録番号	図版番号	器種	母岩	長×幅×厚(mm)	重量(g)	登録番号
1	ナイフ形石器	珪質頁岩	44.3×16.5×10.2	6.0	プレII0023	12	剥片	安山岩	59.6×26.8×12.2	21.3	プレII0043
2	石核	玉髓	45.4×33.6×16.6	22.7	〃 0033	13	〃	〃	62.0×22.2×16.4	16.8	〃 0041
3	剥片	凝灰岩	57.6×18.4×6.5	6.2	〃 0001	14	〃	安山岩	73.4×28.4×20.8	20.7	〃 0048
4	〃	〃	49.3×14.3×9.8	4.3	〃 0003	15	〃	〃	45.2×19.5×12.8	7.1	〃 0046
5	〃	頁岩	62.2×19.4×6.8	8.2	〃 0027	16	石核	〃	43.8×30.6×23.2	45.6	〃 0040
6	〃	〃	54.8×34.3×10.0	10.6	〃 0045	17	楔形石器	玉髓	60.7×39.8×11.3	31.2	〃 0007
7	楔形石器	〃	26.8×23.0×11.4	7.3	〃 0026	18	剥片	〃	30.6×12.6×10.1	2.5	〃 0008
8	剥片	凝灰質安山岩	75.8×23.2×12.7	20.1	〃 0009	19	剥片	安山岩	49.8×33.4×27.2	35.6	〃 0016
9	〃	安山岩	25.8×26.8×5.7	4.8	〃 0050	20	〃	〃	31.3×28.2×14.4	17.6	〃 0028
10	〃	〃	37.4×19.2×6.2	3.1	〃 0034	21	〃	〃	49.9×40.5×19.5	36.1	〃 0020
11	〃	〃	46.5×20.8×5.8	5.3	〃 0025						

る加撃が二段階に分けられる。まず1段階は、強めの加撃によって素材の形状が大きく変わる段階で、上部部は18のような剥片が剥離され、下部部は下部部腹面側が大きく折れるようなかたちで剥離されている。次に、第2段階は、上下両端の打面をつぶすような剥離が行われる段階で、上下両端に微細な剥離痕が形成されている。この2段階の工程は、17と18の接合関係によって観察できる。第1段階によって18が剥離された後、第2段階の打面をつぶすような剥離が約5mm程度行われている。19+20+21は礫片の接合資料である。礫面に縦方向に研磨のようなものがあり、磨製礫の可能性もある。上部部からの加撃によって19・20・21が同時に折れている接合資料である。

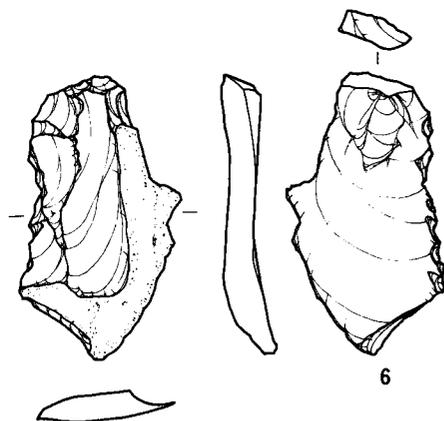
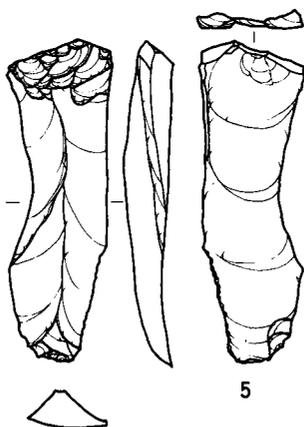
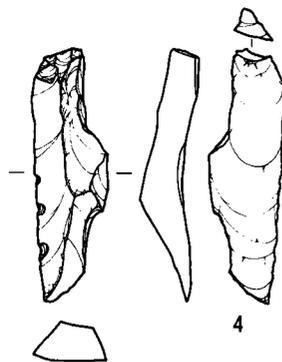
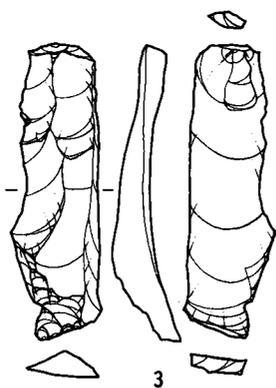
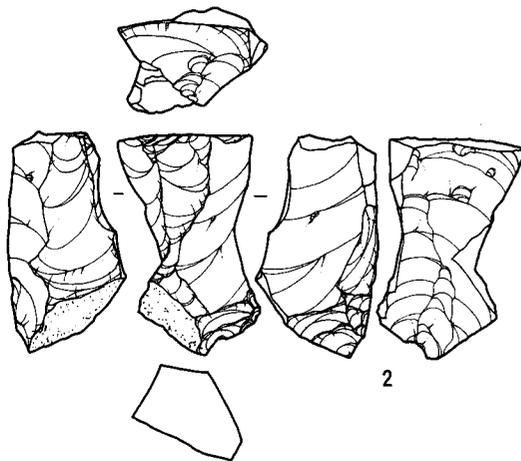
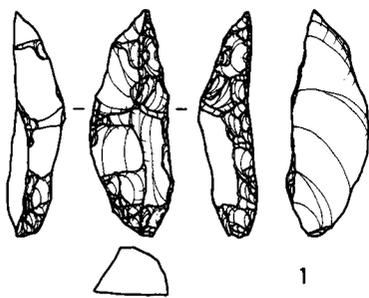


第178図 第2ブロック器種別分布図

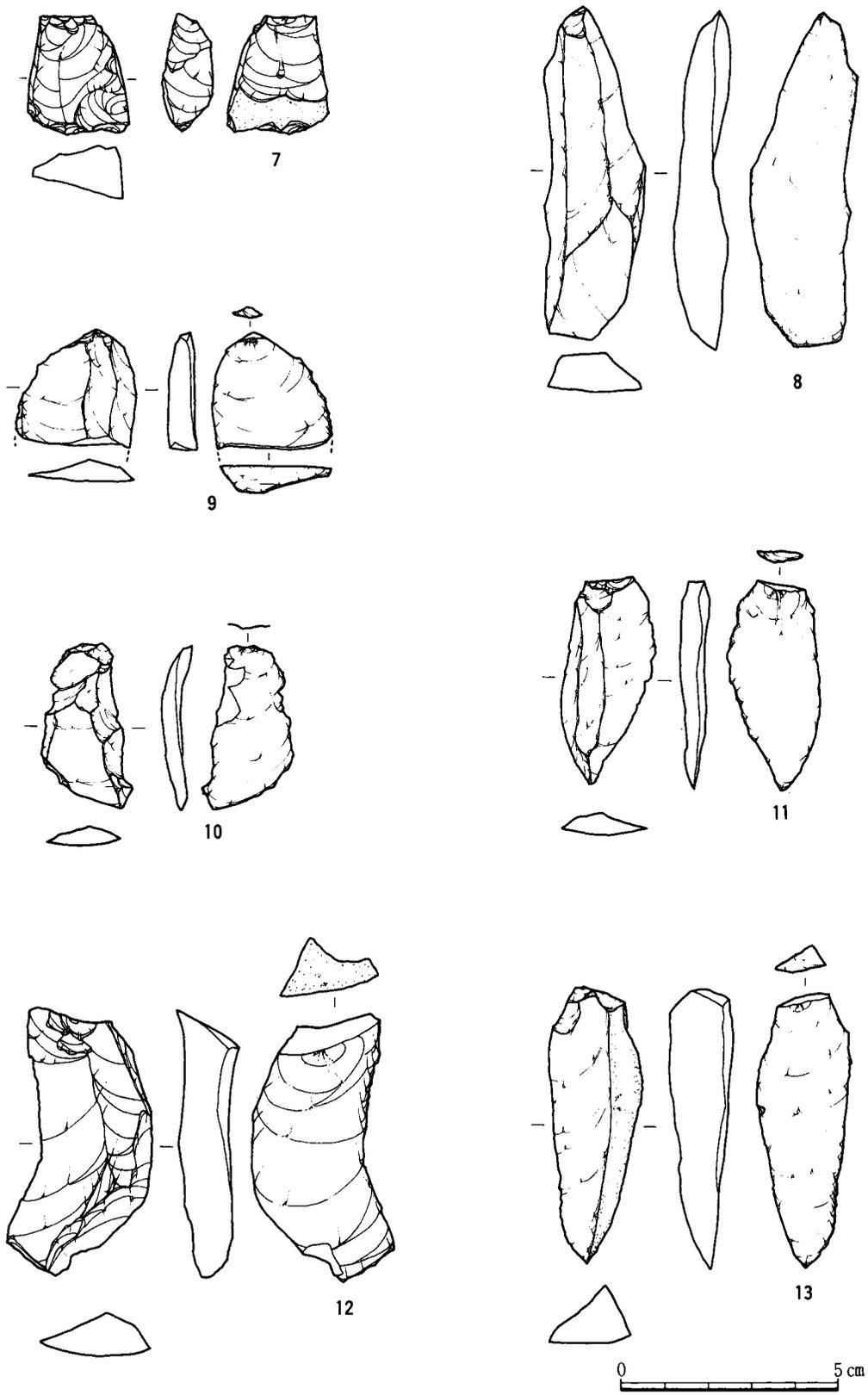


- | | | |
|-----------|--------------|-----------|
| ● 1 安山岩 1 | □ 1 凝灰質安山岩 1 | ⊙ 1 凝灰岩 1 |
| ● 2 安山岩 2 | □ 2 凝灰質安山岩 2 | ⊙ 2 凝灰岩 2 |
| ● 3 安山岩 3 | ▲ 1 頁岩 1 | ⊙ 1 玉髓 1 |
| ● 4 安山岩 4 | ▲ 2 頁岩 2 | ⊙ 2 玉髓 2 |
| ● 5 安山岩 5 | ▲ 3 頁岩 3 | ⊙ 3 玉髓 3 |
| ● 6 安山岩 6 | ○ 1 珪質頁岩 1 | ⊙ 4 玉髓 4 |
| ● 7 安山岩 7 | ○ 2 珪質頁岩 2 | |

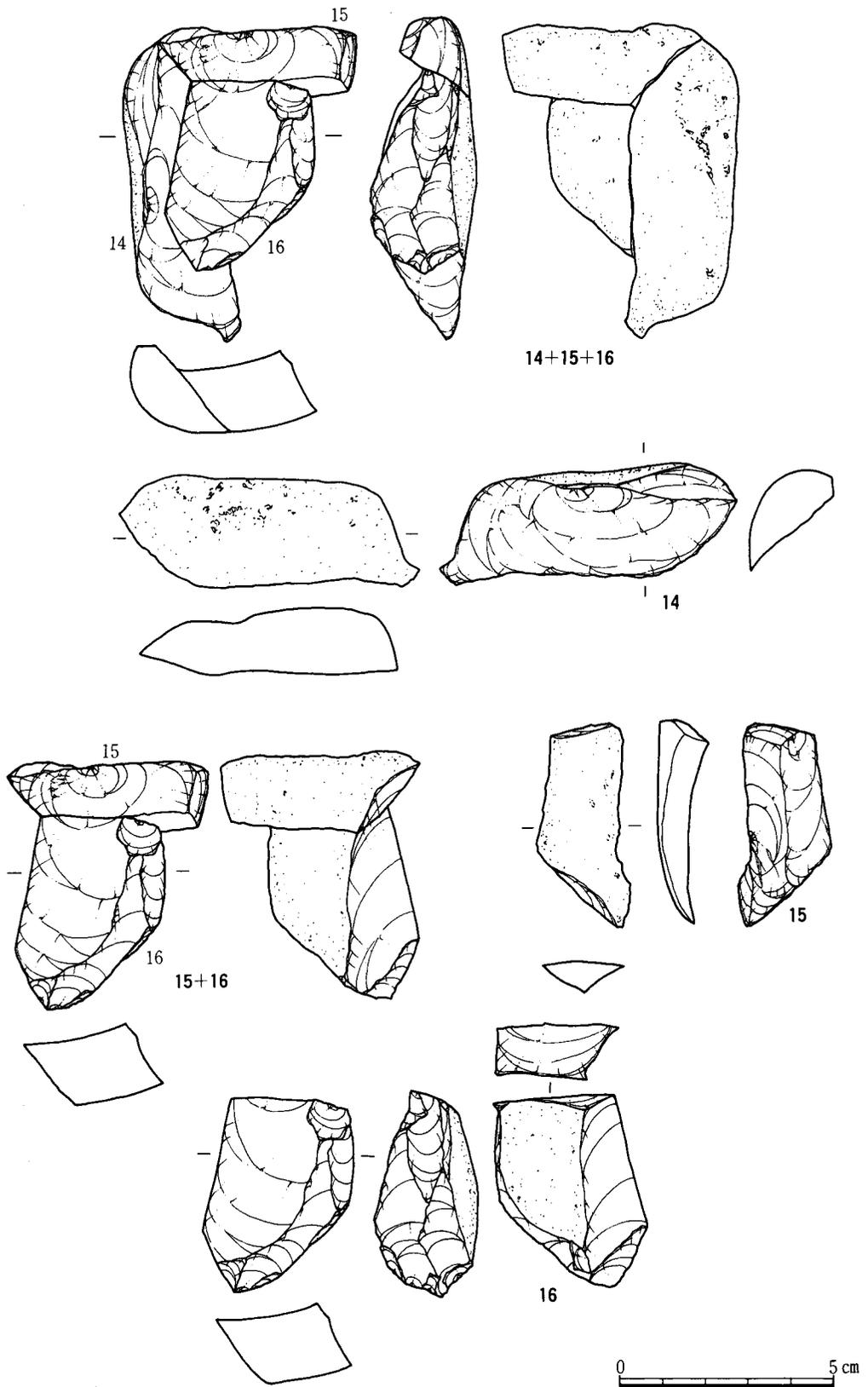
第179図 第2ブロック母岩別分布図



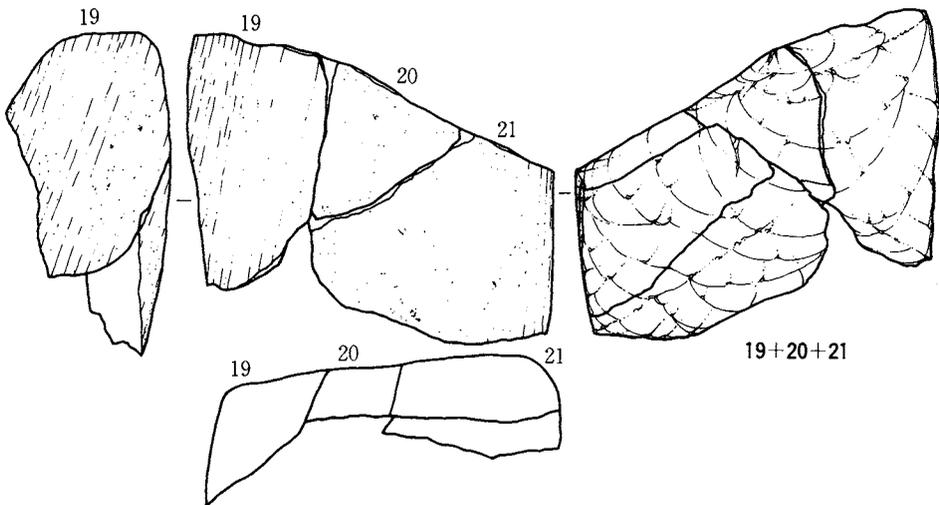
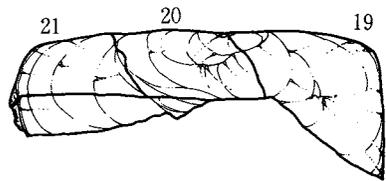
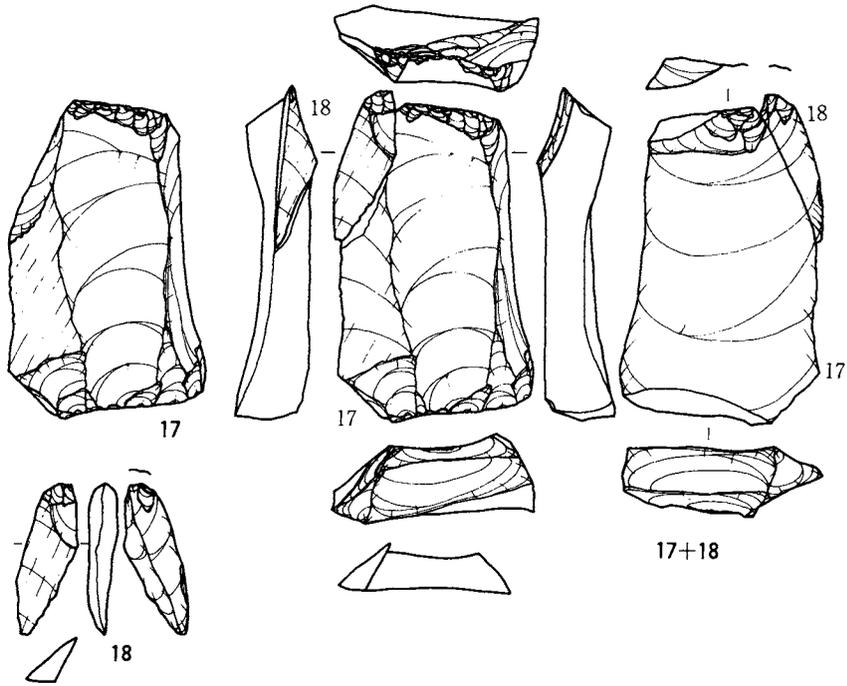
第180図 第2ブロック出土石器(1)



第181図 第2ブロック出土石器(2)



第182図 第2ブロック出土石器(3)



第183図 第2ブロック出土石器(4)

c. 小結

第2ブロックは石刃を主体に占める石器群である。その石刃の製作技術は、両設打面で、頭部調整が顕著で打面調整のないものを主体としたものであった。とくに、14・15・16の接合資料から、母岩から礫面を削除して石刃を生産する工程が観察された。また、ナイフ形石器は石刃ではない分厚い縦長剝片を素材として素材形状を大きく修正するナイフ形石器であった。器種組成においては、楔形石器が2点出土しており、小円礫を素材とするものと幅広の縦長剝片を素材とするものがあった。後者は、両極剝離においても2段階の剝離工程があることが観察された。

第2節 縄文時代

1. グリッド出土土器 (第184・185図, 図版87)

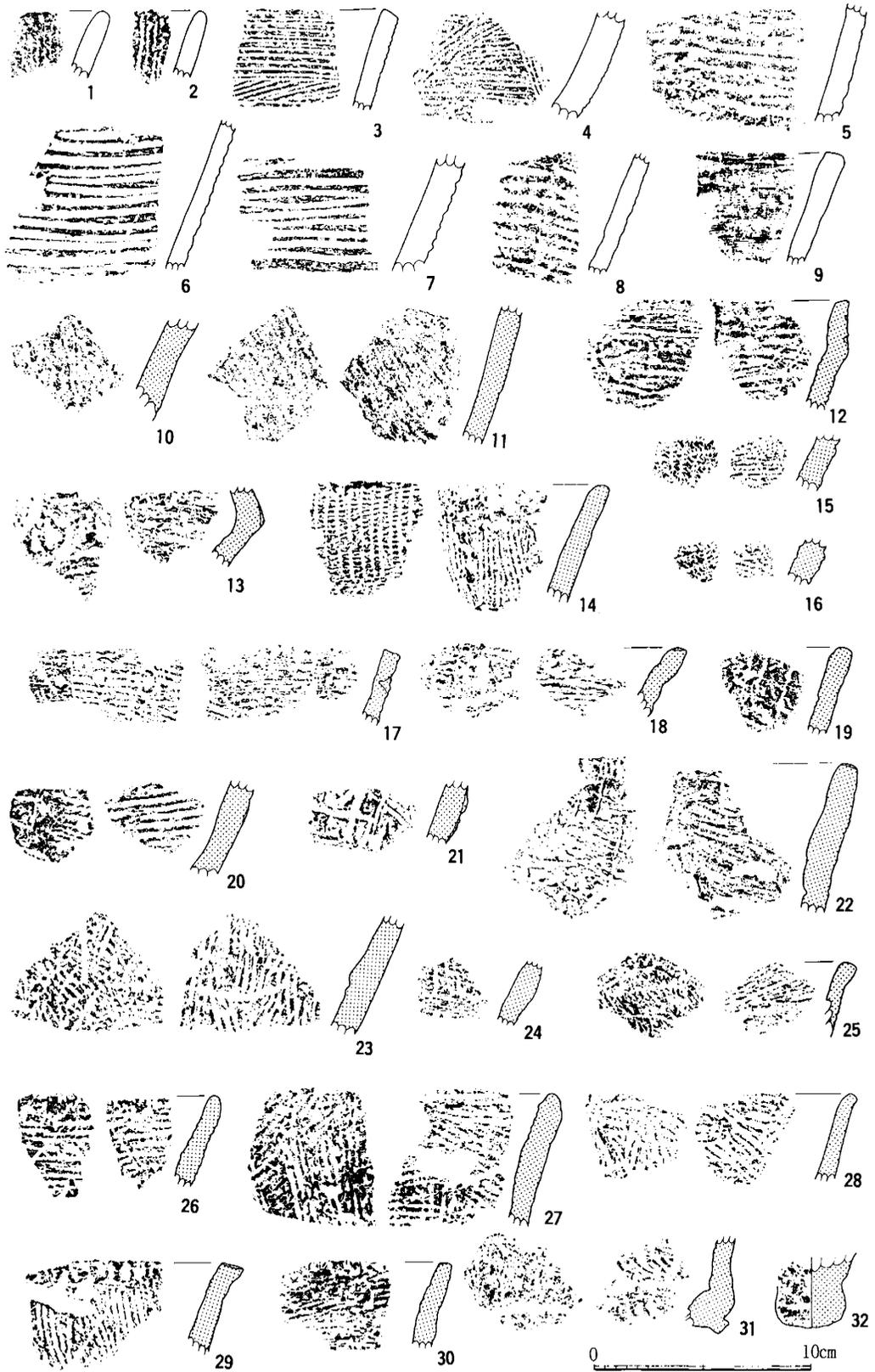
本遺跡より出土した縄文式土器は全て該期の遺構外出土である。総数は縄文時代より後世の遺構出土のものをこれに含めても、時期の判別されたもので僅かに120点余、少量の出土にとどまった。以下、主なものを大別毎の便宜的な分類に従って、説明していくこととする。

第I群土器 (1～32)

早期の土器を一括した。類別毎の点数は、燃糸文系土器(第1類)は図示した2点がすべて、沈線文系土器(第2類)は12点、条痕文系土器(第3類)は47点である。

第1類(1・2) 1・2ともに外反し、口縁端部の断面形が丸頭状を呈す。1は施文が浅く判別し難いが、口縁端部より絡条体回転文Rが縦位に施される。胎土中に黄白色砂粒を多く含み、焼成良好な土器である。2は無節縄文Lが縦位(回転方向は斜位)に施文され、胎土中に砂粒を多く含む。これらは夏島式あるいは稻荷台式であろう。

第2類(3～11) 3・4は数条を単位とする細沈線文によって、幾何学的な文様構成をとると思われる。3は口縁端部の断面形が外そぎ状を呈し、細沈線文数条による横位の沈線文帯と横位の細沈線文間に斜位の細沈線文を充填した帯状部が、交互に施文されると思われる。胎土中にやや粗い石英・長石粒を含み、焼成堅緻な土器である。4は細沈線文によって数条単位で重三角形区画を形成すると思われる、その内側を密に横位の細沈線で充填する。やはり胎土中にやや粗い石英・長石粒を多く含む。5～8は横位、略横位あるいは斜位に太沈線文が施されるもので、7を除き太沈線文は浅く施文される。また7は内外面とも器面が平滑に仕上げられているが、他は内面のみ平滑である。5・8の胎土中にはやや粗い石英・長石粒が多く含まれる。9は外反し、口縁端部の断面形が角頭状を呈す。内面はヘラ状工具による横位のナデ痕が認められ、胎土中には微砂粒を中量含む。以上、7については不確かであるが、沈線文系土器でも古手の範疇となろう。10・11は表面にごく浅い擦痕が、11は裏面にも繊細で明瞭な擦痕が認めら



第184図 グリッド出土土器(1)

れ、胎土中には繊維を少量含む。沈線文系でもより新しい範疇に含まれるだろう。

第3類(12~33) 本類の胎土中には繊維が含まれる。12は表裏に条痕文が施文される。刻み目の付された横位の低隆起線によって口縁部文様帯が区画されるが、地文条痕上に円形竹管による刺突文が充填される。口縁端部はやや内そぎ状で、刻み目が付される。13は口縁端部を欠くが、やはり刻みが横位に連続する屈曲部で口縁部文様帯が区画されよう。文様は沈線と細隆起線の組み合わせによる幾何学文的区画内を、円形竹管による刺突文が充填するものと思われる。これらは鶉ヶ島台式~茅山下層式の過渡期的な要素を持っていると考えられる。14~16は表面に絡条体圧痕文が密接して施文され、裏面には条痕文が施される。胎土中には繊維が多量に含まれ、またやや粗い石英・長石粒をはじめとする砂粒も多く含まれる。14の絡条体の長さは約4cmである。17は口縁端部の断面形が角頭状を呈す。表裏に条痕が施され、表面の端部下には貫通してはいないが、円孔文というべき突瘤状の刺突文が巡る。また刺突文以下には断続的な短沈線が巡ると思われる。胎土中に多量の繊維が含まれる。18~20・22~24は表面に鋸歯状の貝殻腹縁による刺突文が施されるもので、19・22を除き、地文に条痕文か擦痕文が施される。裏面は19を除き条痕文が施され、胎土中に多量の繊維が含まれる。25~30は表裏あるいは表裏のいずれかに条痕文が施されるものである。このうち29は口縁端部上に鋸歯状の貝殻腹縁による刺突文が連続的に刻まれ、同一工具による貝殻条痕文は端部以下から刷毛目状に施されている。いずれも相対的に繊維が多量に含まれている。31・32は本類に属する底部で、31は短脚付の上げ底の可能性があり、多量の繊維が含まれる。32はいびつながらも丸みをもった尖底である。以上は茅山上層式以降の条痕文系土器と思われる。

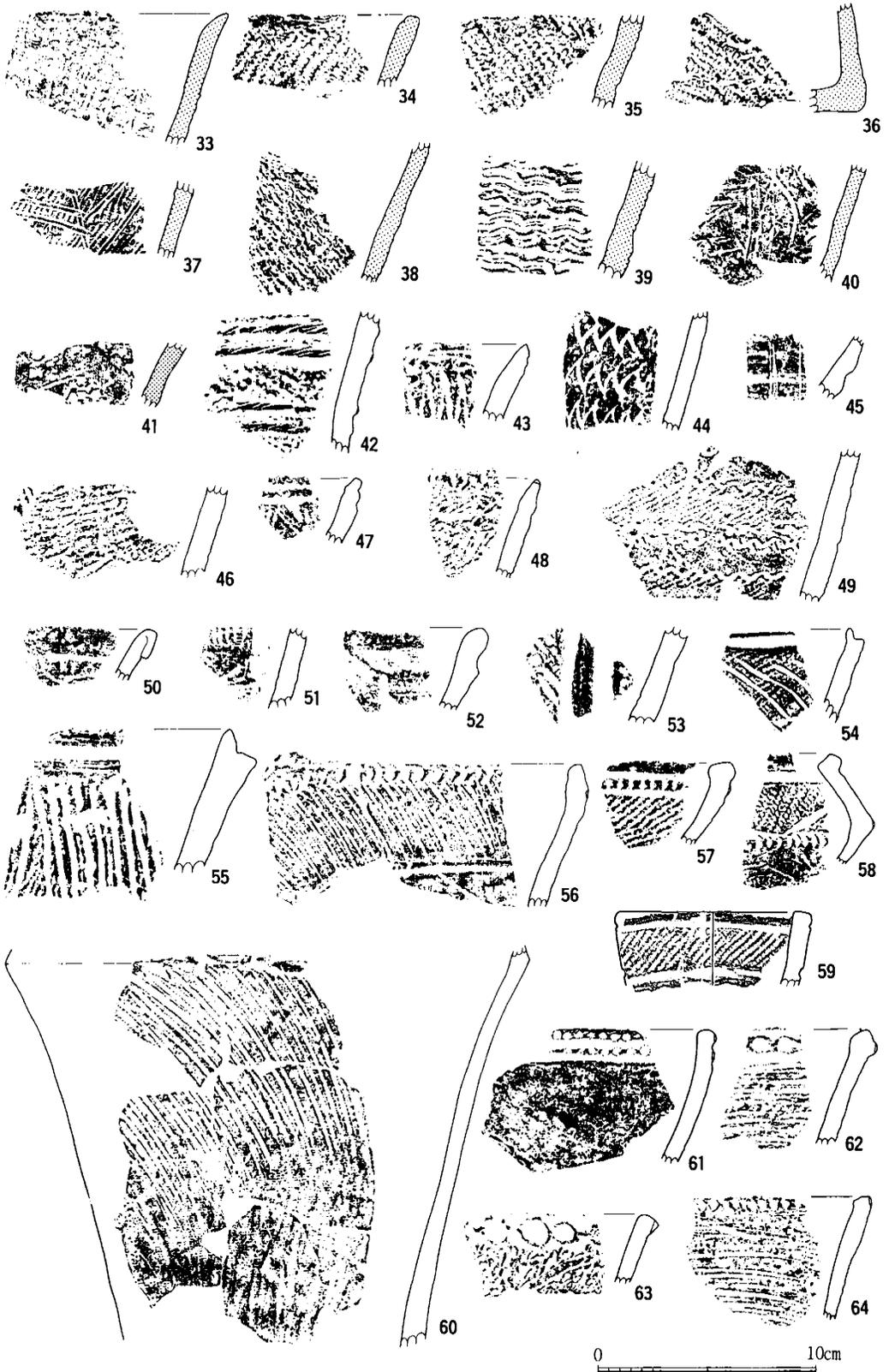
第II群土器 (33~49)

前期の土器を一括した。細別時期で以下に類別される。

第1類 (33~41) 中葉の黒浜式土器を本類としたが、総数は12点で、胎土中には繊維が含まれる。33~37は附加条や0段多条の単節縄文が施文される。37は地文の縄文上に半截竹管内側を使用した肋骨文が施される。38は鋸歯状の貝殻腹縁による刺突文が密に施される。39は楯歯状工具による波状沈線文が密接して横位に施されるもので、所謂植房式である。40は沈線文が浅く施され、41は半截竹管内側を用いた刺突列が区画文となるとと思われる。

第2類 (42~51) 後葉~末葉の諸磯式、浮島・興津式、縄文系土器群を本類とした。

42は諸磯b式で、地文の縄文上に細い粘土紐を貼付け、連続的に刻みを付した浮線文が施される。諸磯式はこの1点のみである。43~45・51は浮島・興津式で、総数は7点。43・44は波状貝殻文が施されるが、43は鋸歯状貝殻腹縁による。45はおそらく輪積部での折り返しが段になると思われ、これに直交して2条1単位の沈線が引かれる。51は鋸歯状文貝殻腹縁による刺突文が密に施される。46~50は浮島~興津式に併行すると思われる縄文系の土器で、総数11点を数える。このうち47は口縁部に縄の側面圧痕による幾何学的な文様帯が形成されるようで、そ



第185図 グリッド出土土器(2)

の一部に鋸歯状の貝殻腹縁刺突文を模した半截竹管の連続刺突文が見られる。また48の端部上には縄の側面圧痕が、等間隔に直交して施されよう。48・49は結節部回転が横位に施される。50は端部上に無節Lが回転施文される。

第III群土器 (52・53)

中期の土器であるが加曾利E式が2点出土で、53は無文部が沈線で作出されるE II～III式。

第IV群土器 (54～64)

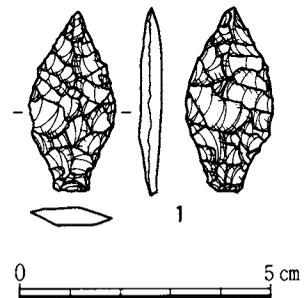
後期の土器を一括するが、堀之内式を第1類、加曾利B式を第2類とする。

第1類 (54・55) 図示した2点がすべてで、堀之内I式である。無文の端部下に強く沈線が引かれ、以下に沈線文を基調に文様が描かれると思われる。

第2類 (56～64) 総数31点を数え、加曾利B III式である。56は端部に突起を有し、刺突列が巡る。以下に単方向の斜沈線帯が形成される。57は口縁部の縄文帯上端に刺突列が巡る。58は内屈する口縁部に、弧線文を伴う縄文帯が形成されよう。59は口縁部に沈線で区画される縄文帯が形成される。推定口径8.9cmの小型の土器である。60は口縁部以下に短方向の斜沈線が施される。推定最大径は24.3cm。61は端部に細い紐線文が2条巡る。62・63は端部に紐線文が施され、以下に地文縄文に横位、あるいは斜位に沈線が重ねられる。64は端部に刺突列が巡り、以下に横位の沈線文が連続的に施される。

2. グリッド出土石器 (第186図, 図版85)

1は縄文時代の石鏃である。時期は供伴の土器も出土していないので明確にはいえないが、おそらく縄文時代早期の石鏃と思われる。基部に作り出しを持つ形状である。調整加工は奥まで入る押圧剝離を全面に行っている。珪質頁岩製で、長さ34.5mm、幅18.1mm、厚さ6.2mm、重量3.6gである。



第186図 表採資料

第3節 その他の遺構

101号土坑 (第187図, 図版84)

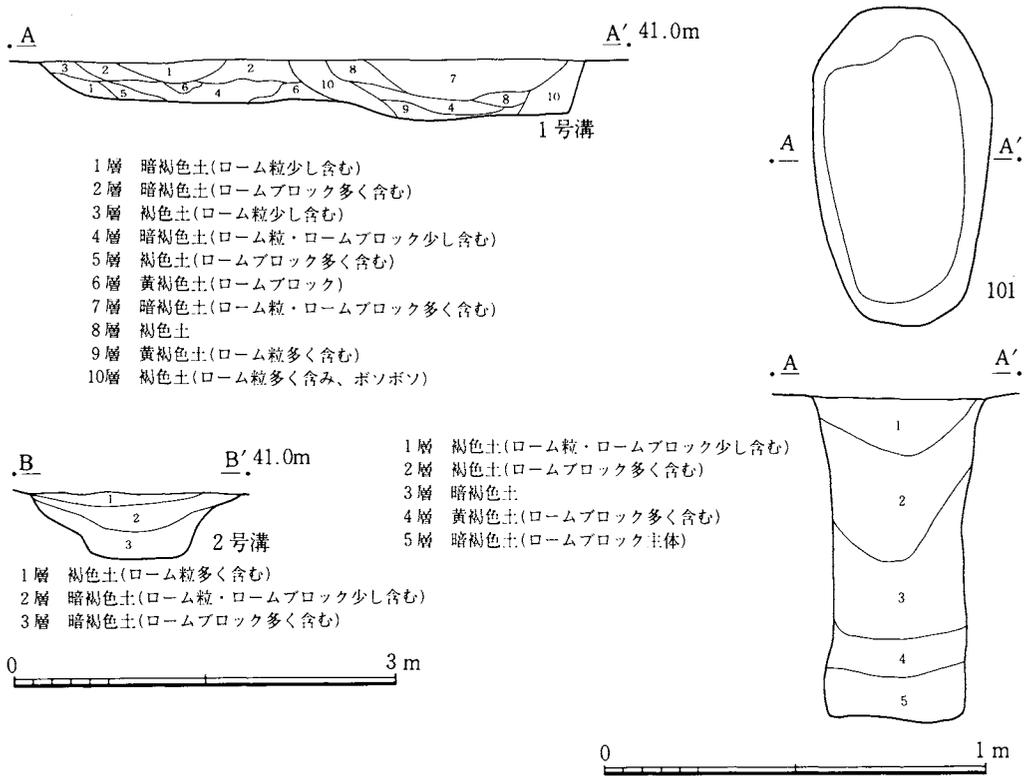
調査区南端B9区に所在する。長軸1.6m、短軸0.9mの楕円形を呈し、確認面からの深さ1.6mを測る。壁・底面ともしっかりした掘り込みである。覆土中にロームブロックを多く含んでおり、埋め戻された可能性が強い。遺物の出土がないため遺構の性格は不明であるが、形態からみると、縄文時代の陥し穴状を示している。

1・2号溝 (第174・187図)

1号溝は、調査区中央を東西に横断しており、あたかも南北に延びる台地を切断しているよ

うな感がある。拡張した範囲内では、長さ20m、幅4mを測る。北側に拡張されており、覆土中にはロームブロックを多く含む。遺物の出土がなく、性格は不明であるが、台地を切断することと、比較的幅広く掘られていることから、前章で記載した綱原屋敷跡遺跡の「牧」に関連する可能性が強い。

2号溝は1号溝と平行するが、端部で1号溝側に屈曲する。出土遺物はなく、性格は不明である。



第187図 1・2号溝土層断面図, 101号土坑

参考文献 (五十音順)

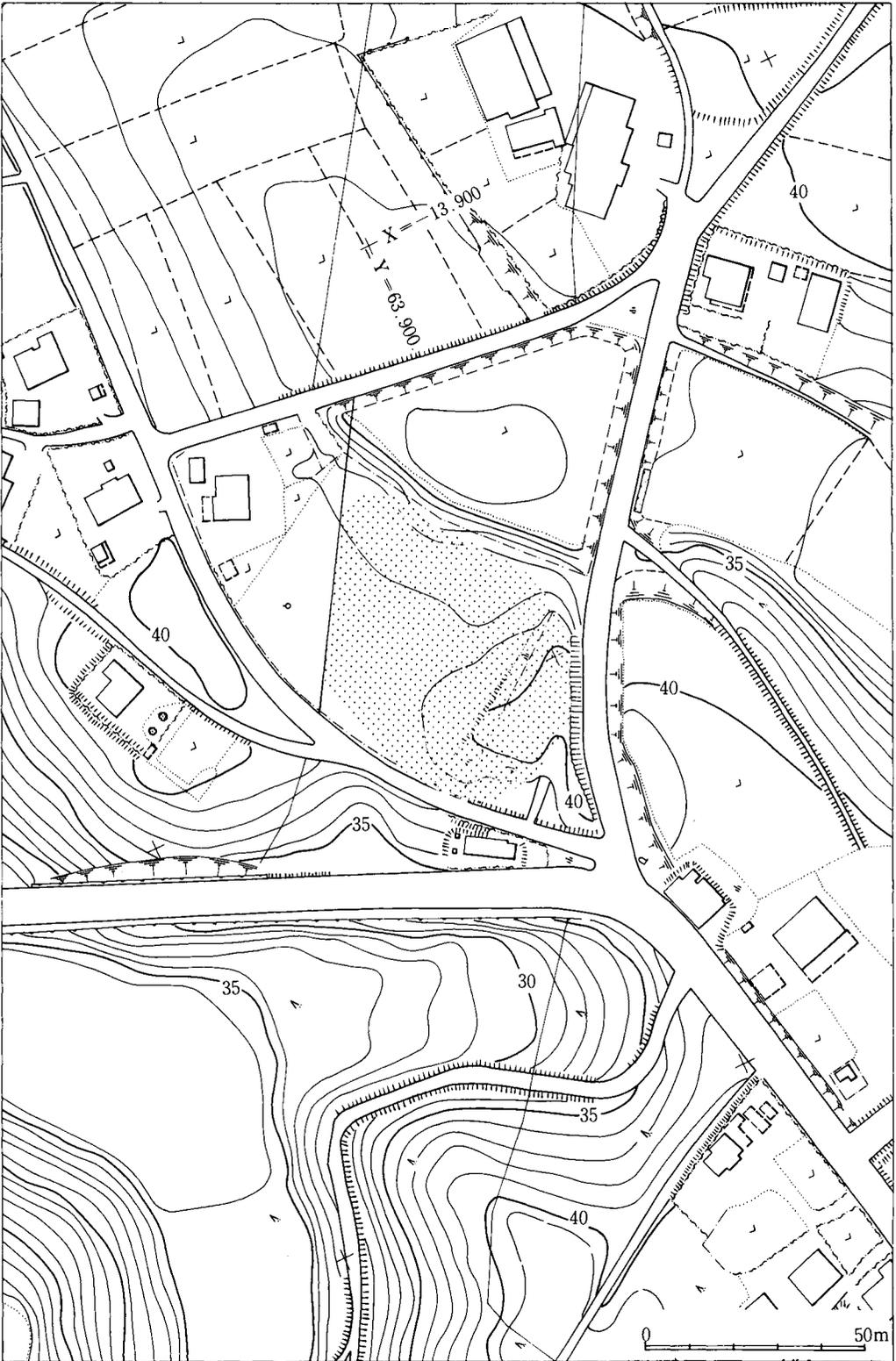
安藤文一 「粟島台式土器の設定—東関東における縄文前期終末の一様相—」『房総文化第14号』房総文化研究所 1977

石橋宏克 a 「第II篇 中山遺跡(Na30)」『東関東自動車道文化財調査報告書IV』(財)千葉県文化財センター 1988

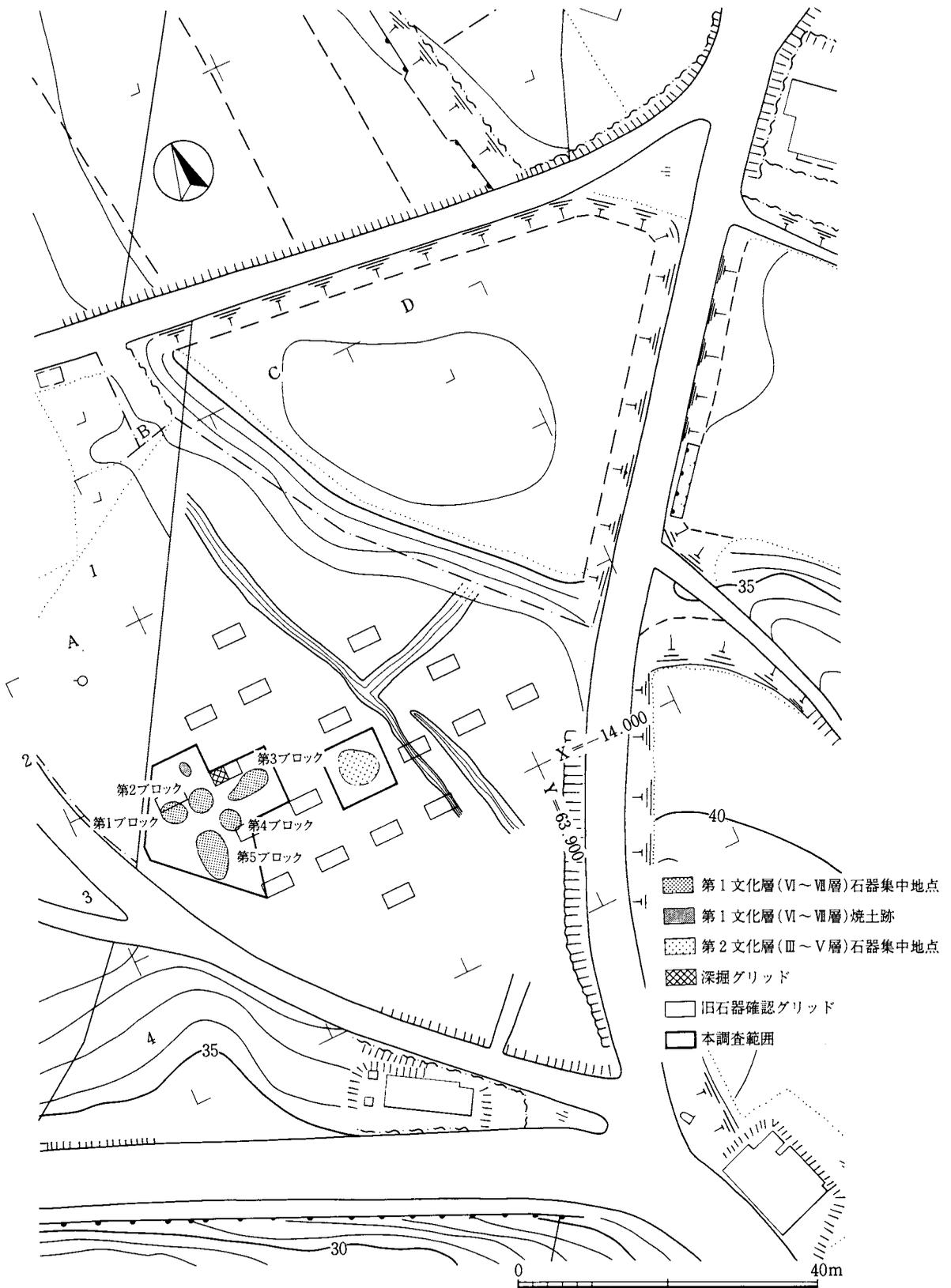
石橋宏克 b 「第III篇 東野遺跡(Na34)」『東関東自動車道文化財調査報告書IV』(財)千葉県文化財センター 1988

江森正義・岡田茂弘・篠遠喜彦 「千葉県香取郡下小野町貝塚発掘報告」『考古学雑誌第36巻第2号』日本考古学会 1950

- 大原正義・宮城孝之他 『佐倉市向原遺跡』(財)千葉県文化財センター 1989
- 小川静夫他 『獅子穴VI遺跡発掘調査報告』 富里村教育委員会 1977
- 落合章雄 「第2篇 芝山遺跡」『八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡』(財)千葉県文化財センター 1989
- 上守秀明 「第3章 根之神台遺跡・中内遺跡」『北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書III』(財)千葉県文化財センター 1990
- 住谷光男他 『三反田遺跡(一次・二次)』 三反田遺跡調査団 1978
- 田村 隆 『佐倉市タルカ作遺跡』(財)千葉県文化財センター 1985
- 西村正衛 『石器時代における利根川下流域の研究—貝塚を中心に—』 早稲田大学出版部 1984
- 芳賀英一 「大木5式土器と東部関東との関係」『古代第80号』 早稲田大学考古学会 1985
- 山内清男 「2 装飾としての回転縄文」『日本先史土器の縄文』 先史考古学会 1979



第188図 出口遺跡地形図



第189図 出口遺跡遺構配置図

第6章 出口遺跡

第1節 旧石器時代

概要 佐原市出口遺跡からは2つの文化層が検出された。第1文化層は、AT下位のVI層下部からVII層（第2黒色帯）中部にかけて出土しており、VII層（第2黒色帯）上部に生活面を持つ石器群であると思われる。楔形石器を主体とする石器群が5ブロック検出され、焼土跡1基が伴っている。石器の出土総点数は3,182点である。第2文化層は、ソフトローム層（III層）下部からハードローム（IV～V層）の上部にかけて出土しており、IV層下部に生活面を持つ石器群であると思われる。ナイフ形石器を伴う石器群で、礫を主体とする石器群である。石器の出土総点数は15点である。各文化層に帰属するブロック・遺構は以下のとおりである。

第1文化層 第1～第5ブロック、焼土跡

第2文化層 第6ブロック

1. 層序区分（第190図，図版90）

I層 表土層

II層 黒褐色土層。ローム粒を多く含む。

III層 黄褐色土層。いわゆるソフトローム層である。IV層までソフト化されている。

IV～V層 黄褐色土層。いわゆるハードローム層である。IV層とV層の識別が困難である。V層は第1黒色帯に相当する。

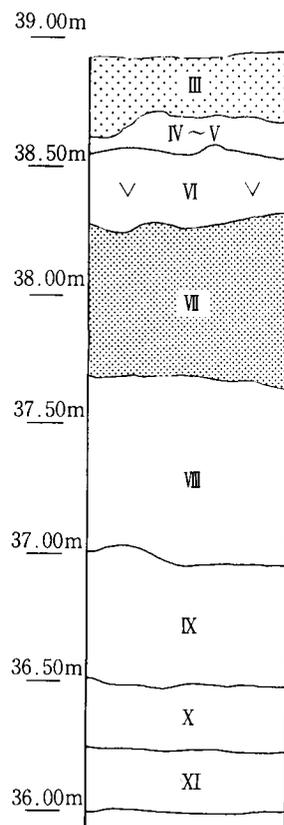
VI層 明黄褐色土層。始良Tn火山灰を含む層である。石器産出層準はVI層下部～VII層から出土している。

VII層 褐色土層。第2黒色帯に相当する層である。赤褐色のスコリアを多く含む、黒色スコリアを少量含む。第2黒色帯の細分は困難である。

VIII層 褐色土層。立川ローム層の最下部にあたる。わずかに粘性がある。VIII層とIX層の境の識別は困難である。

IX層 暗褐色土層。武蔵野ローム層の最上部にあたる。スコリアはほとんど含まない。

X層 明黄褐色土層。VI層の明黄褐色よりも茶褐色に近い色調である。粘性なく、かなり硬質。おそらく東京パミスを含む層と思われる。



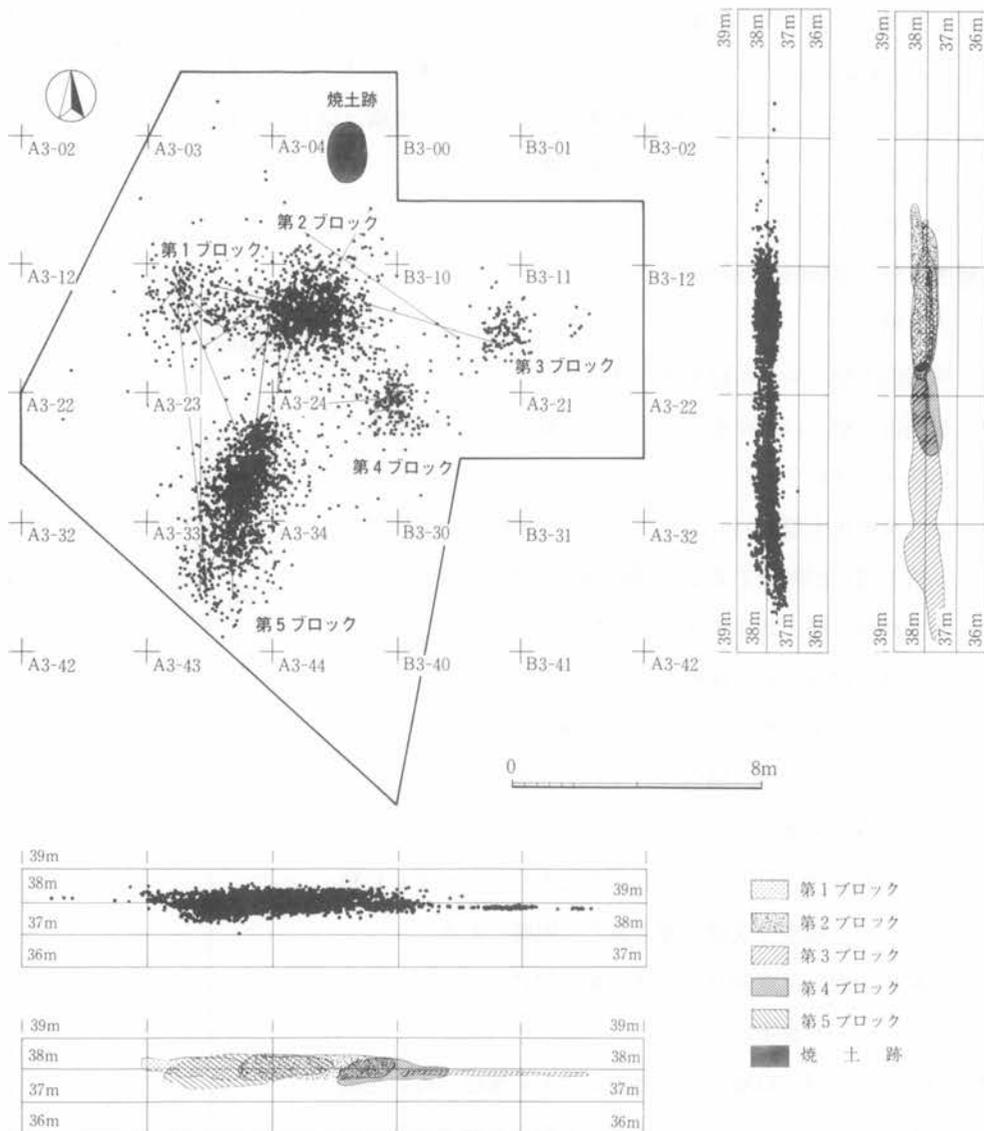
第190図 基本層序(B3-00)

XI層 灰褐色粘土層。粘性が強い。常総粘土層に相当すると思われる。

2. 第1文化層

(1) 概要 (第191図, 図版88, 第14~16表)

第1文化層から出土した石器の総点数は、3,182点である。石器組成とブロック別器種組成・石材組成は第14~16表のとおりである。これらの組成から第1文化層の特徴を概観してみる。まず器種組成では楔形石器181点, 楔形石器調整剥片1,844点で両極剥離による楔形石器に関連する資料が63%を占め圧倒的に多い。そのほかに, 両極剥離によるものである可能性のあるものがあり, 両極剥離による石器の割合は石器群全体の9割以上になるものと思われる。ブロッ



第191図 第1文化層遺物出土状況(全体図) [1/240]

ク別の出土点数では第2ブロック・第5ブロックが1,000点以上でこの二つのブロックだけで81%を占める。出土状況(第189・191図)では、ノッチ状に南側に入る緩斜面に立地し、約20m×20mの範囲に密集している。五つの石器集中箇所が近接し、ブロック間で緊密に接合している。第2ブロックの北側にはVII層上部から焼土跡が検出されている。垂直分布においても石器群全体で標高37.5m～38.5mの範囲に分布し、ブロック別にみるとVI層下部からVII層中部にかけて30cm～70cmの幅に密集し、VII層(第2黒色帯)の上部に遺物が集中する。

第14表 第1文化層石器組成

器種	石 材									
	安山岩	チャート	凝灰岩	凝灰質安山岩	玉 髓	頁 岩	硬砂岩	メノウ	砂 岩	合 計
楔形石器Ⅰ類	16	37	10	6	10	6	0	0	7	92
楔形石器Ⅱ類	9	35	15	0	7	3	0	1	0	70
楔形石器Ⅲ類	1	15	2	0	0	1	0	0	0	19
敲 石	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2
石 核	1	10	1	0	0	0	0	0	0	12
剥 片	128	155	129	74	21	35	4	2	14	562
碎 片	122	178	129	61	40	33	2	1	11	567
楔形石器調整剥片	130	819	425	206	163	32	28	3	38	1,844
礫	0	9	5	0	0	0	0	0	0	14
合 計	398	1,259	716	347	241	110	34	7	70	3,182

第15表 第1文化層ブロック別器種組成表

ブロック	器 種									
	楔形石器Ⅰ類	楔形石器Ⅱ類	楔形石器Ⅲ類	敲 石	石 核	剥 片	碎 片	楔形石器調整剥片	礫	合 計
第1ブロック	9	7	0	0	2	44	47	131	2	242
第2ブロック	34	19	6	0	5	167	193	644	6	1,074
第3ブロック	1	0	1	0	0	22	18	89	1	132
第4ブロック	13	4	0	0	1	51	34	92	0	195
第5ブロック	33	40	12	1	4	275	272	879	4	1,520
ブロック外	2	0	0	1	0	3	3	9	1	19
合 計	92	70	19	2	12	562	567	1,844	14	3,182

第16表 第1文化層ブロック別石材組成表

ブロック	石 材									
	安山岩	チャート	凝灰岩	凝灰質安山岩	玉 髓	頁 岩	硬砂岩	メノウ	砂 岩	合 計
第1ブロック	18	133	50	9	9	11	4	0	8	242
第2ブロック	142	365	222	140	119	51	10	4	21	1,074
第3ブロック	13	46	29	18	18	4	4	0	0	132
第4ブロック	34	87	37	11	9	10	4	0	3	195
第5ブロック	191	615	377	167	85	34	11	3	37	1,520
ブロック外	0	13	1	2	1	0	1	0	1	19
合 計	398	1,259	716	347	241	110	34	7	70	3,182

(2) 石器分類基準 (第192図)

第1文化層から出土した石器の分類基準を以下のように設定した。楔形石器の分類は阿部朝衛によって詳細に行われており (阿部1979), 本稿では阿部氏の分類基準に従った。

楔形石器 複数回の両極剥離によって剥離された2ヶ1対の刃部 (刃部とは両極剥離によって剥離面が形成された部位) をもつものをいう。楔形石器を以下三類に分類した。

楔形石器Ⅰ類 2ヶ1対の刃部を有し, 素材の面を大きく残すもの。

楔形石器Ⅱ類 2ヶ1対の刃部を有するが, 側辺と平行し, 刃部2側辺からの剥離によって全面がおおわれたもの。

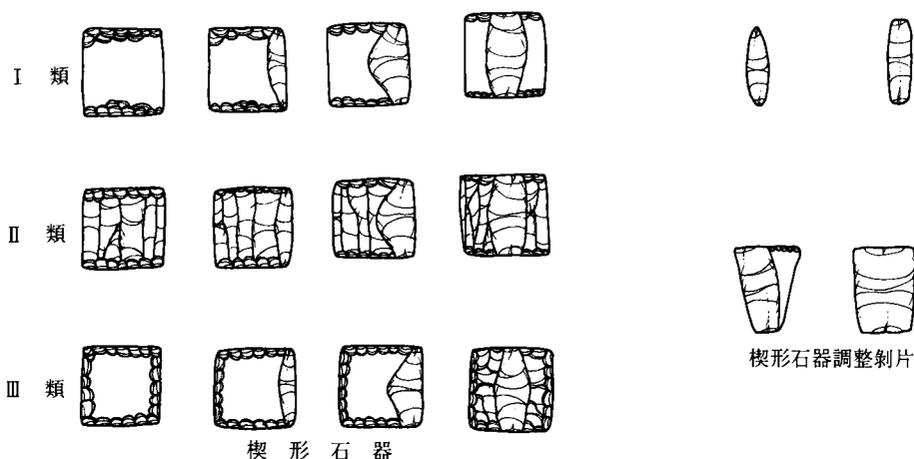
楔形石器Ⅲ類 Ⅰ類 (まれにⅡ類が認められる) を90°回転し, Ⅰ・Ⅱ類の両側辺を刃部としたもの。したがってⅢ類の初期のものは, 4ヶ2対の刃部を有する。

楔形石器調整剥片 複数回の両極剥離によって剥離された2ヶ1対の刃部を持たないものをいう。

剥片 明確には両極剥離痕が認められないものをいい, 加工を行って石器になりうる大きさのものをいう。

碎片 明確には両極剥離痕が認められないものをいい, 加工を行って石器にならないものをいう。

石核 明確には両極剥離を行わないで剥片を剥離した残核をいう。



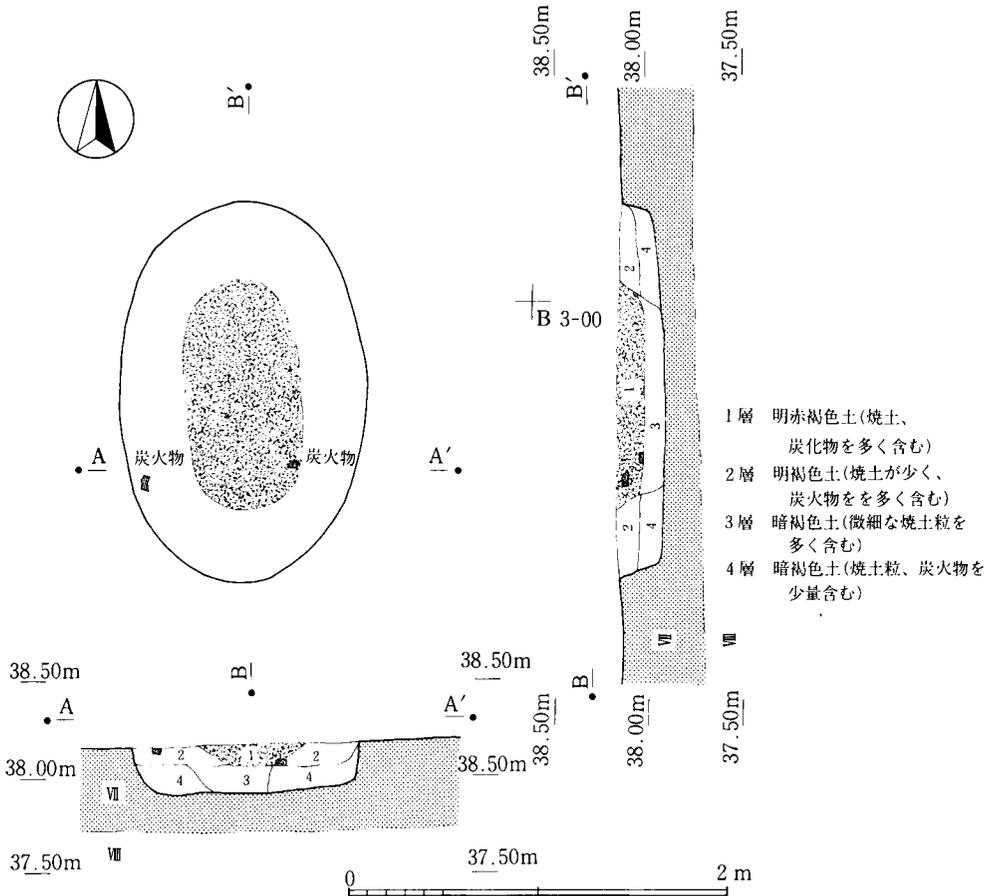
第192図 石器分類模式図

(3) 焼土跡 (第193図, 図版88)

VII層上部に検出面をもつ焼土跡である。1.3m×1.9mの楕円形の平面プランをもつ。1層が焼土・炭化物をもっとも多く含み, 層厚は約15cmである。焼土は径約4mm, 炭化物は径約2mm前後である。出土遺物は, 長さ10cm前後の大形の炭化物2点が1層と2層から出土している。焼

土内とその周辺からも石器は検出されていない。焼土の形成された生活面は、焼土が検出された周辺のVII層の平均的な層厚が約70cmであり、焼土検出面のVII層の層厚が約50cmであることから、まず、VII層上部に生活面があると考えて良さそうである。

焼土跡は、石器の集中地点から少し離れた場所から検出され、石器の出土層位と同一層準であることから同一の生活面に形成された生活の場所と考えられる。可能性として、住居跡の炉、あるいは、厨房施設等が考えられるが積極的根拠はない。

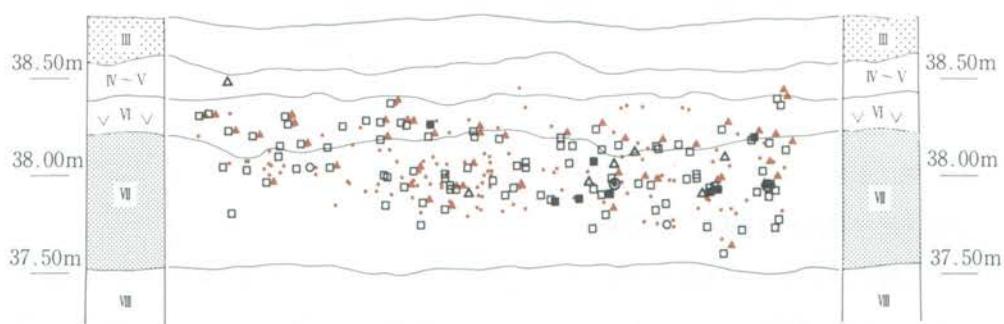
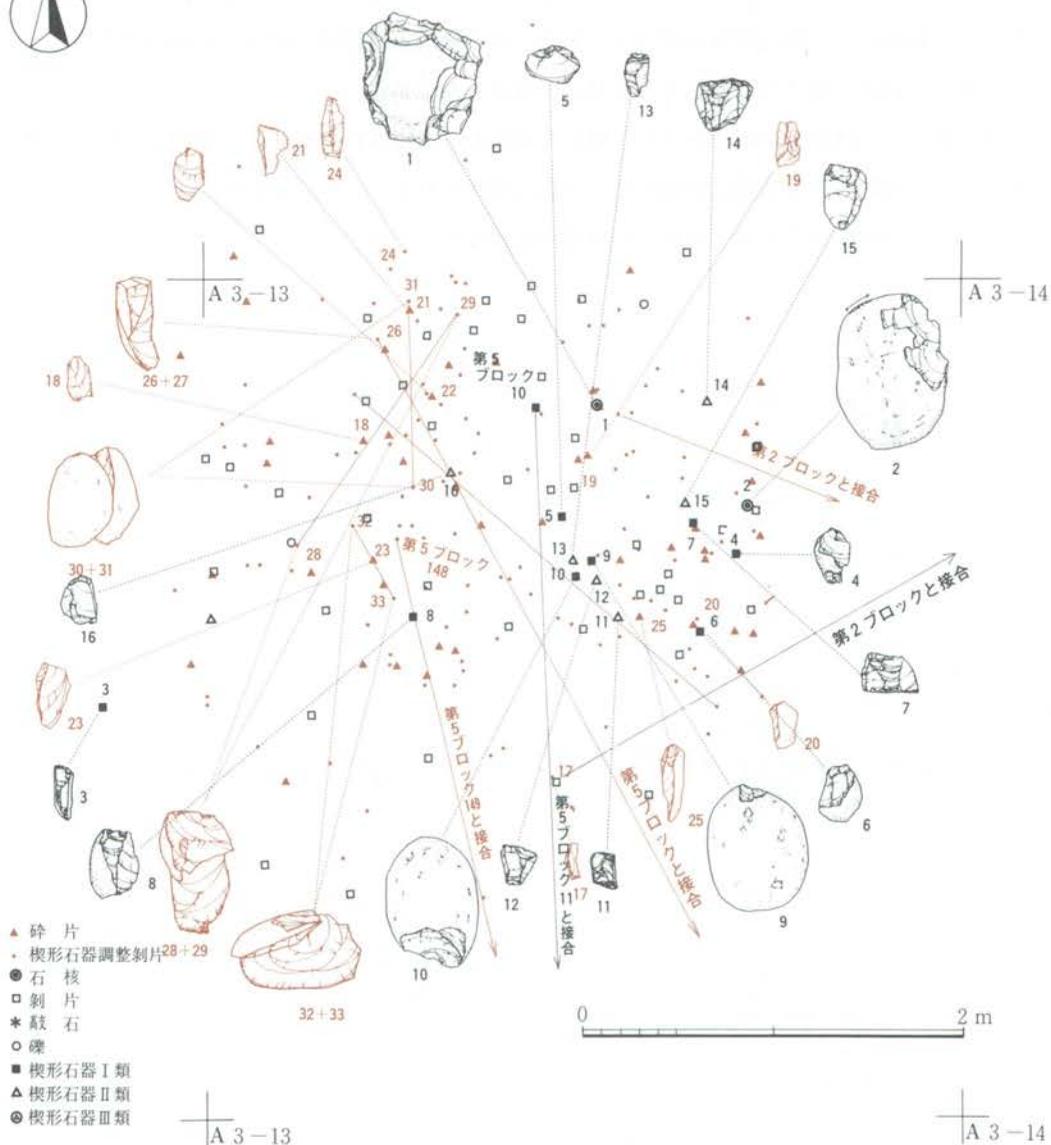


第193図 第1文化層焼土跡

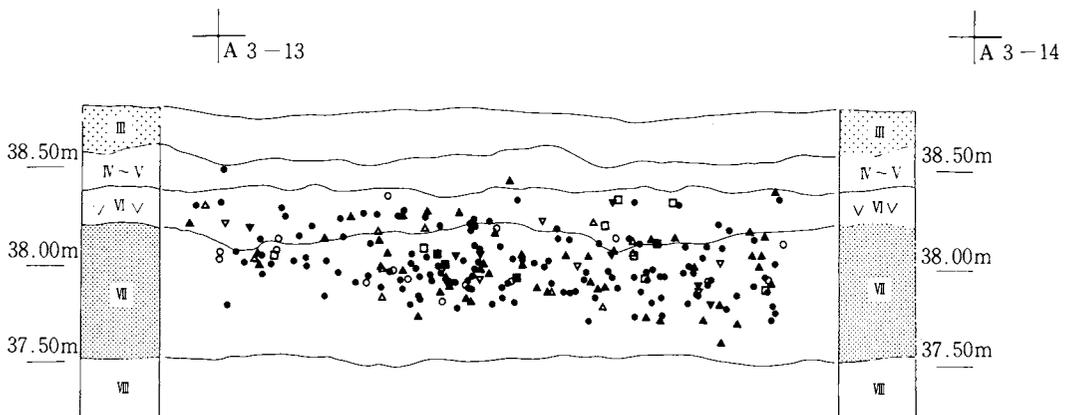
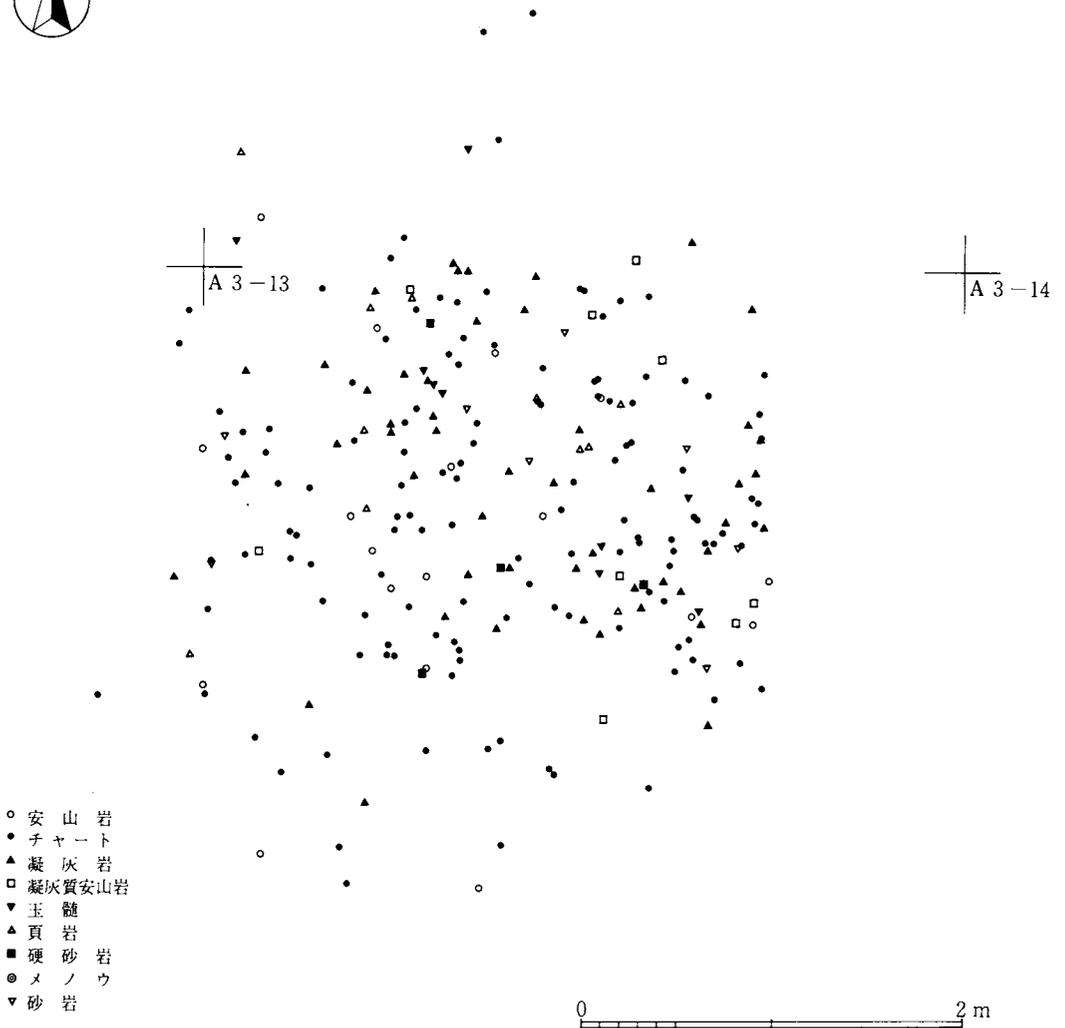
(4) 第1ブロック

a. 分布状況 (第194・195図, 図版89)

石器の出土層位はVI層からVII層の中部にかけて出土しており、VII層上部に集中する。平面分布は、3.4m×4.8mの範囲から242点出土した。ブロック間接合は、第2ブロックと2母岩、第3ブロックと2母岩、第5ブロックと3母岩が接合関係にある。第5ブロックと接合する資料は、約10m離れて接合している。



第194図 第1ブロック(第1文化層)器種別分布図



第195図 第1ブロック(第1文化層)石材別分布図

b. 出土遺物（第196～198図，図版91）

検出された石器の総数は242点である。器種組成は，楔形石器Ⅰ類9点，楔形石器Ⅱ類7点，石核2点，剥片44点，碎片47点，楔形石器調整剥片131点，礫2点である。石材組成は，チャートが圧倒的に多く133点，その次に凝灰岩50点である。

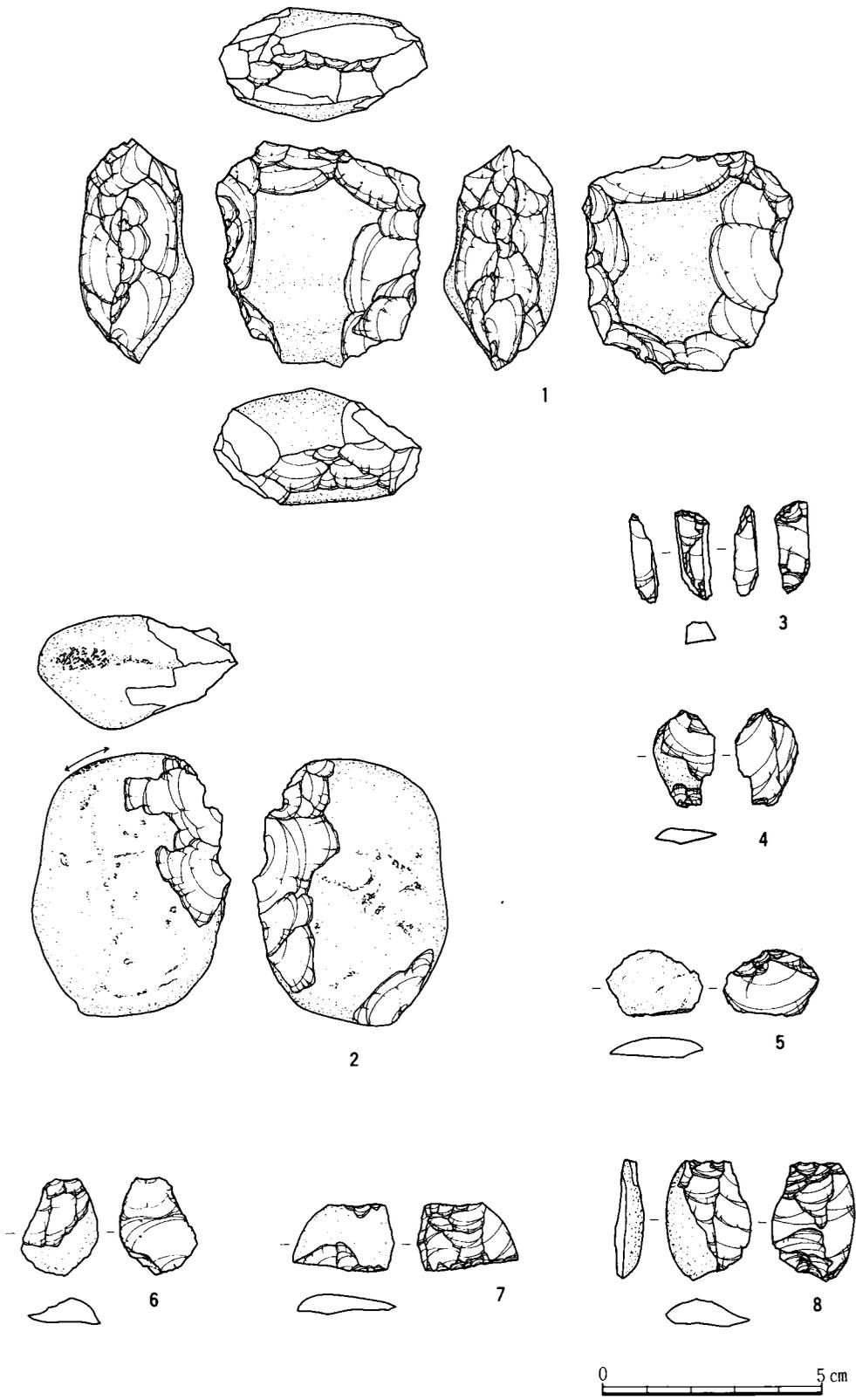
1・2は石核である。1は円礫を素材として，両面から全周に小形の横長剥片を剥離している。2は楕円形の礫を素材として，一側縁に両面から交互剥離を行っている。1・2の石核は，打面部がつぶれておらず，交互剥離によって剥片を剥離していることから，両極剥離によるものではないことが観察される。3～10は，楔形石器Ⅰ類である。3～6は縁辺に微細な両極剥離痕があり，7・8は両極剥離痕が中間部まで入り込んでいる。11～16は楔形石器Ⅱ類である。12～15は平面形状が逆三角形で，末端部が点状になっている。17～33は楔形石器調整剥片及び碎片である。17～25は細長の形状をもつものである。24の右側縁には微細剥離痕が認められる。26～33は接合資料である。いずれも，礫面をもち打面調整も行われていない。

第17表 第1ブロック（第1文化層）石器組成表

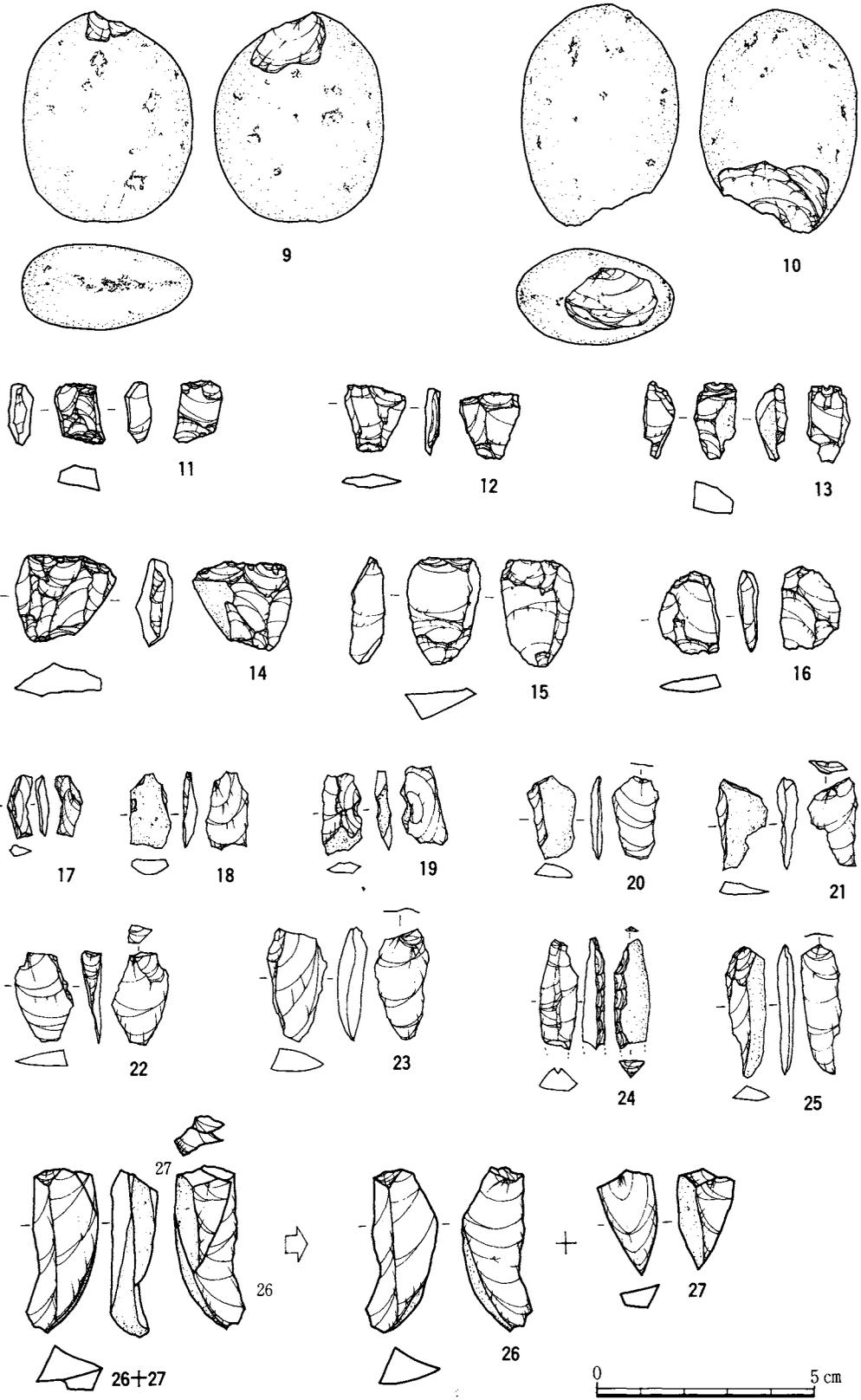
器種	石 材								合 計
	安山岩	チャート	凝灰岩	凝灰質安山岩	玉 髓	頁 岩	硬砂岩	砂 岩	
楔形石器Ⅰ類	0	4	3	0	0	1	0	1	9
楔形石器Ⅱ類	1	3	0	0	2	1	0	0	7
石 核	0	2	0	0	0	0	0	0	2
剥 片	4	19	16	1	0	2	2	0	44
碎 片	8	22	7	2	2	5	0	1	47
楔形石器調整剥片	5	81	24	6	5	2	2	6	131
礫	0	2	0	0	0	0	0	0	2
合 計	18	133	50	9	9	11	4	8	242

第18表 第1ブロック（第1文化層）石器属性表

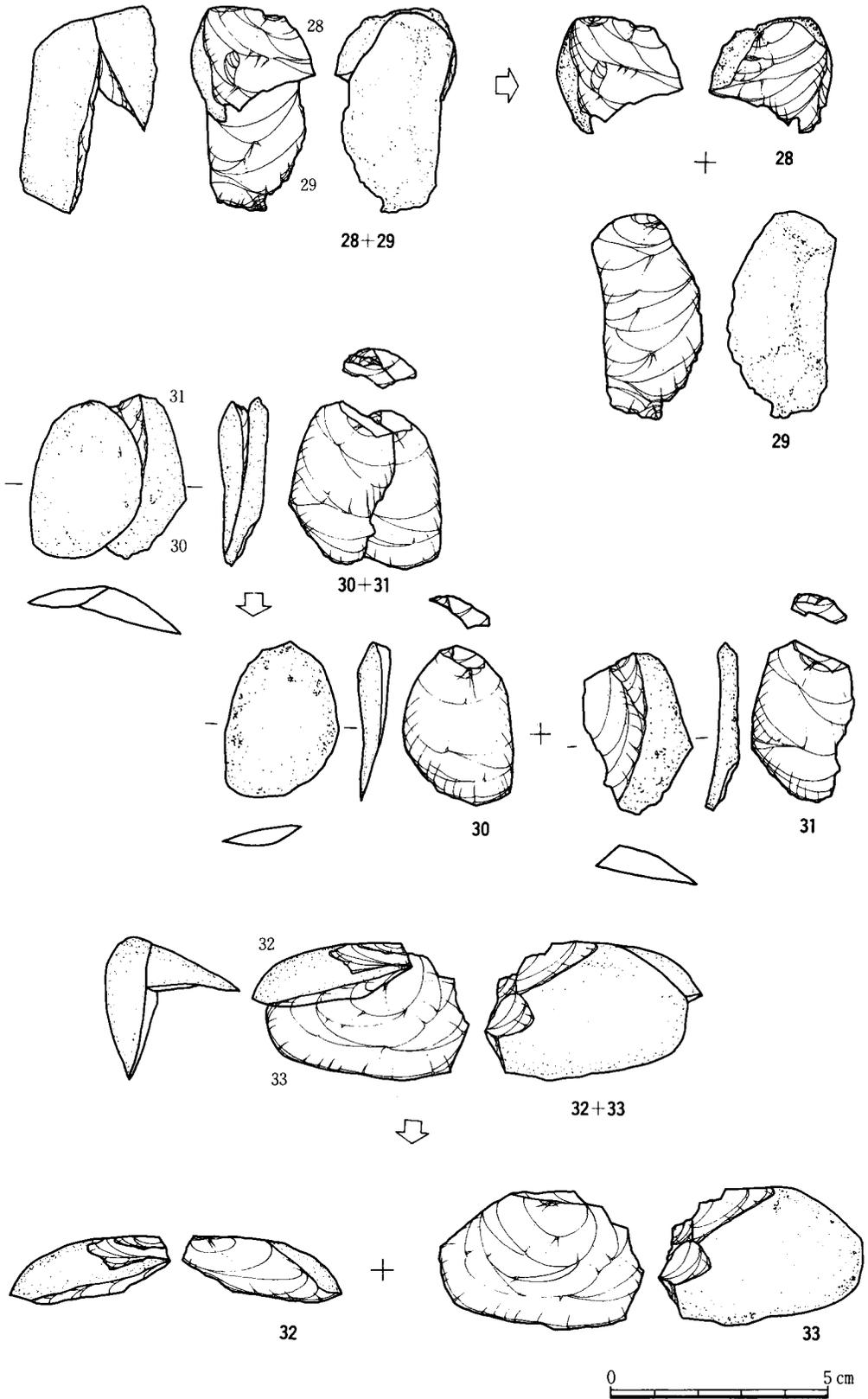
図版番号	器 種	石 材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号	図版番号	器 種	石 材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号
1	石 核	チャート	49.3×48.4×25.1	73.1	1 2 4 7	18	碎 片	頁 岩	17.3×9.8×2.8	0.4	0 5 7 7
2	〃	〃	57.8×40.6×25.0	76.6	1 2 6 3	19	〃	〃	18.0×9.8×3.2	0.4	2 6 8 6
3	楔形石器Ⅰ類	〃	20.5×6.6×5.3	1.0	0 1 6 3	20	〃	安山岩	18.5×10.9×3.0	0.6	1 7 2 9
4	〃	砂 岩	21.5×13.8×4.7	1.2	0 5 6 4	21	〃	頁 岩	19.6×13.3×3.8	0.7	0 5 7 8
5	〃	チャート	21.5×15.6×5.2	1.6	1 7 1 7	22	〃	玉 髓	20.2×12.8×5.0	0.7	1 7 0 5
6	〃	凝灰岩	21.9×15.6×6.9	2.2	1 7 3 0	23	〃	安山岩	24.0×13.8×5.6	1.4	0 1 6 1
7	〃	チャート	22.2×15.1×5.6	1.9	1 7 2 8	24	楔形石器調整剥片	チャート	24.5×8.9×5.1	1.0	1 7 0 2
8	〃	〃	26.4×19.0×5.6	2.8	0 3 1 2	25	碎 片	凝灰岩	29.0×9.2×3.6	0.7	0 5 6 1
9	〃	凝灰岩	48.2×39.1×18.2	51.1	1 7 1 6	26	楔形石器調整剥片	安山岩	30.8×15.5×5.2	3.6	1 3 4 9
10	〃	〃	52.0×36.3×21.2	51.8	0 9 9 7	27	〃	〃	24.0×11.6×5.9	1.8	0 4 2 6
11	楔形石器Ⅱ類	頁 岩	13.8×10.0×5.6	0.9	0 5 6 2	28	〃	チャート	30.0×27.5×13.4	9.6	0 3 9 7
12	〃	玉 髓	15.0×14.3×3.7	0.8	0 8 5 4	29	〃	〃	45.2×25.4×15.8	20.8	1 3 5 7
13	〃	チャート	17.4×8.8×7.1	1.1	1 2 5 2	30	〃	凝灰岩	34.5×22.5×8.0	5.6	0 3 0 4
14	〃	〃	23.5×19.9×7.6	3.6	0 7 6 3	31	〃	凝灰質安山岩	36.3×27.0×9.4	10.2	1 0 0 4
15	〃	玉 髓	24.3×17.5×7.2	3.1	1 7 2 7	32	〃	安山岩	40.3×21.3×12.0	9.8	1 7 0 9
16	〃	安山岩	25.7×16.0×2.0	0.8	1 7 0 7	33	〃	〃	47.9×31.6×12.6	20.1	1 7 1 0
17	楔形石器調整剥片	チャート	15.0×5.0×3.0	0.4	1 8 8 7						



第196図 第1文化層第1ブロック出土石器1)



第197図 第1文化層第1ブロック出土石器(2)



第198図 第1文化層第1ブロック出土石器(3)

c. 小結

1・2のような石核から剥離された小形の剥片を素材とした楔形石器（3・11・12・15・16）が作出されたものが存在すると思われるが、両面に礫面をもつものが多いことから、多くの楔形石器が円礫を素材として両極剥離を行ったと思われる。

(5)第2ブロック

a. 分布状況（第199・200図，図版89）

石器の出土層位はVI層からVII層中部にかけて出土しており，VII層上部に集中する。平面分布は3.8m×4.8mの範囲から1,074点がかなり密集して出土した。第1文化層から検出されたブロックの内でもっとも密集したブロックである。ブロック間接合は，第1ブロックと接合するものが2母岩，第5ブロックと接合するものが3母岩ある。

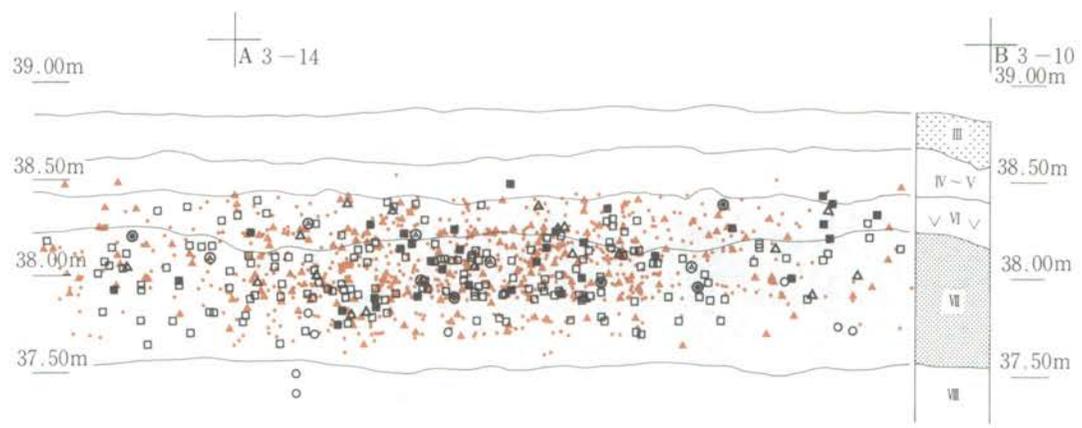
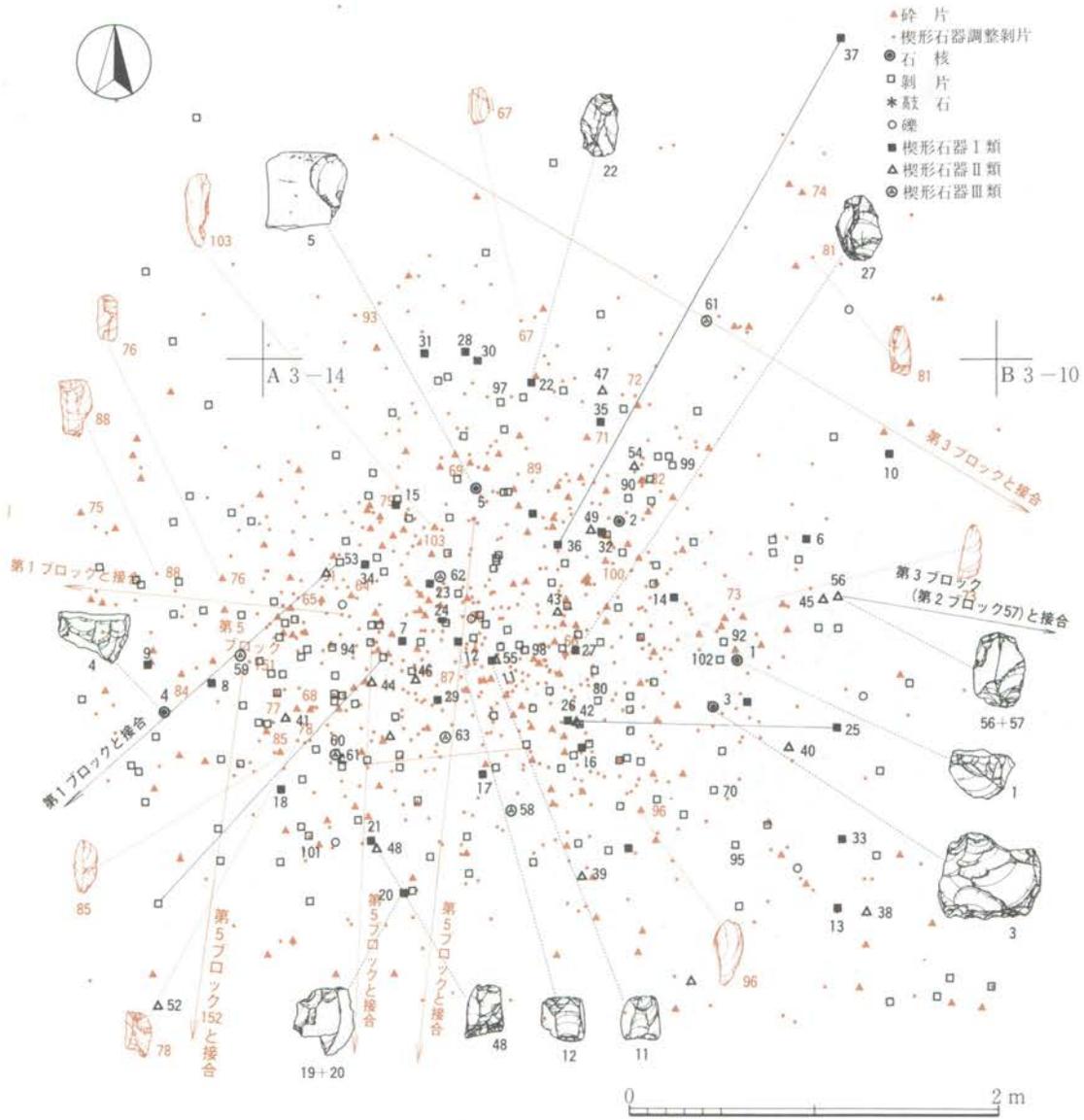
b. 出土遺物（第201～206図，図版92・93）

検出された石器の総数は1,074点である。器種組成は楔形石器I類34点，楔形石器II類19点，楔形石器III類6点，石核5点，剥片167点，碎片193点，楔形石器調整剥片644点，礫6点である。碎片と楔形石器調整剥片の占める割合が圧倒的に多い。石材では，チャート・凝灰岩・安山岩の順に多いが，他のブロックに比べて凝灰質安山岩と玉髓の占める割合が高いという特徴がある。

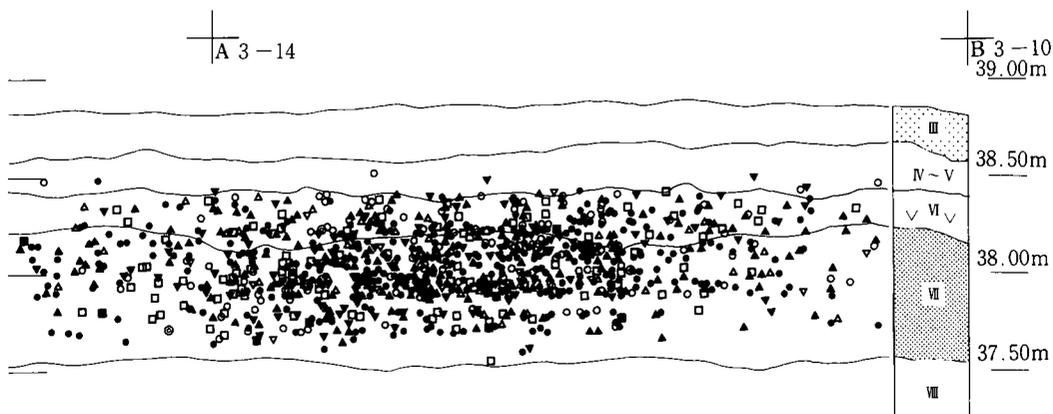
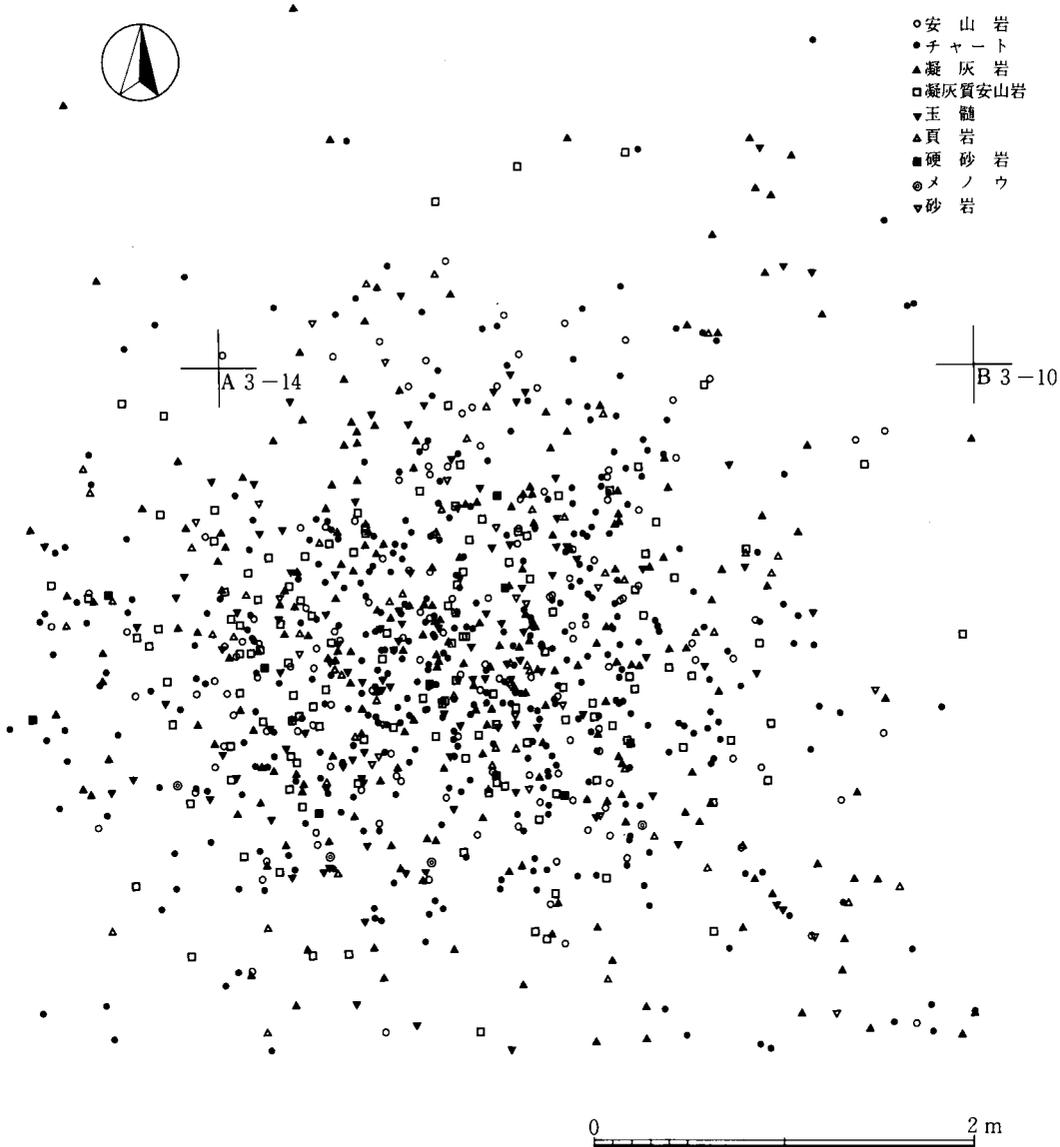
1～5は石核である。1・4は分割礫を素材として，分割面を打面として小形の剥片を剥離している。2は円礫を素材としてチョッピングツール状に剥片を剥離している。3・5は円礫を素材として上下両端から剥片を剥離しており，両極剥離によるものの可能性が高い。6～18，20～37は楔形石器I類である。自然面を両面に残すものは25・26・34であり，これらの素材は円礫であろう。その他のほとんどのものが，片面に自然面を大きく残すもので，円礫素材，あるいは2・3・5のような石核から剥離された背面が自然面である剥片を素材としたものであろう。19+20の接合資料は楔形石器I類であるが，両極剥離によって19の楔形石器調整剥片が

第19表 第2ブロック（第1文化層）石器組成表

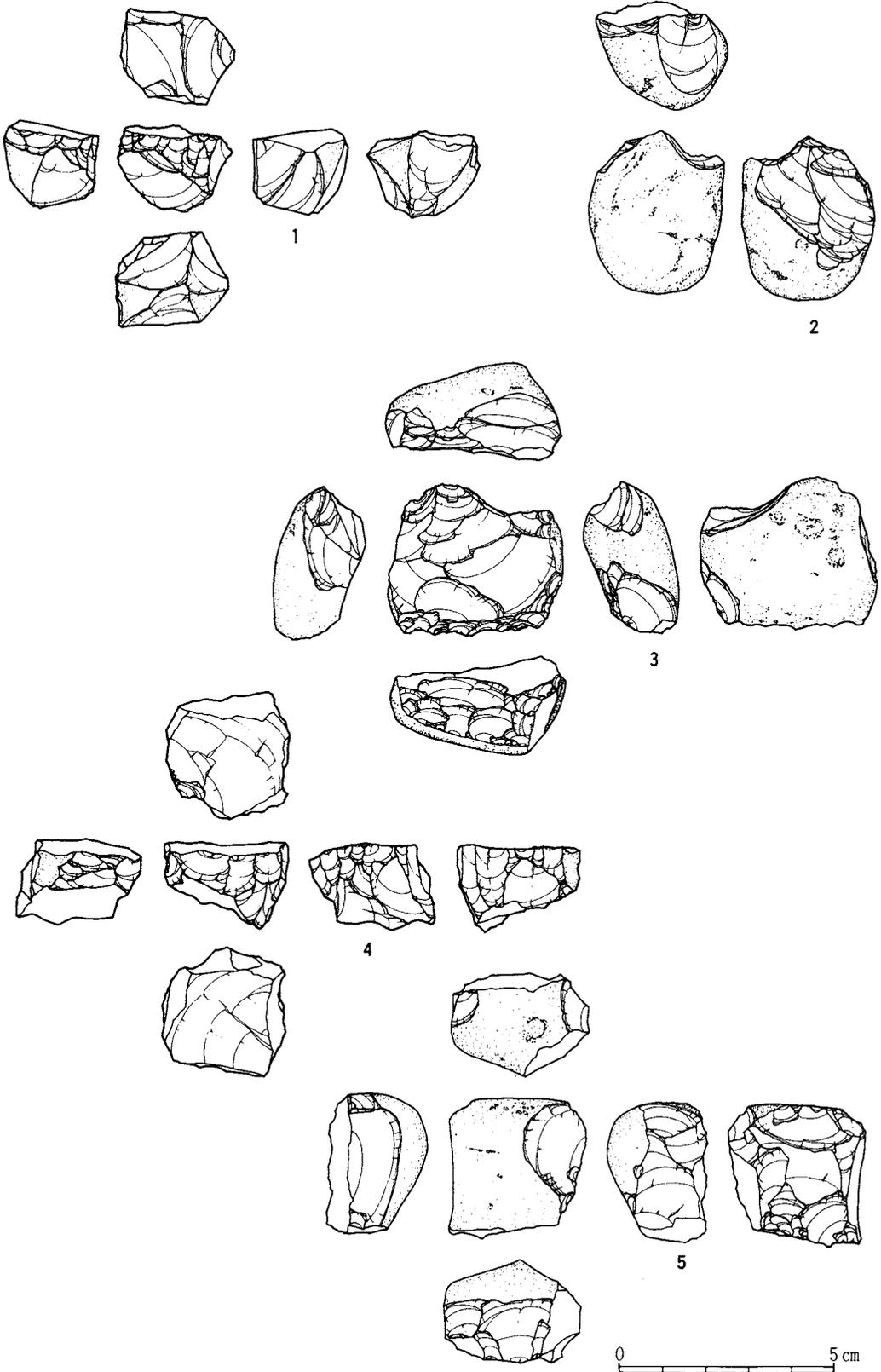
石 材 器 種	石 材									
	安山岩	チャート	凝灰岩	凝灰質 安山岩	玉 髓	頁 岩	硬砂岩	メノウ	砂 岩	合 計
楔形石器I類	6	12	3	3	6	2	0	0	2	34
楔形石器II類	3	6	4	0	4	2	0	0	0	19
楔形石器III類	1	4	0	0	0	1	0	0	0	6
石 核	0	5	0	0	0	0	0	0	0	5
剥 片	37	37	36	29	8	14	2	2	2	167
碎 片	44	43	38	28	21	17	0	0	2	193
楔形石器調整剥片	51	254	139	80	80	15	8	2	15	644
礫	0	4	2	0	0	0	0	0	0	6
合 計	142	362	222	140	119	51	10	4	21	1,074



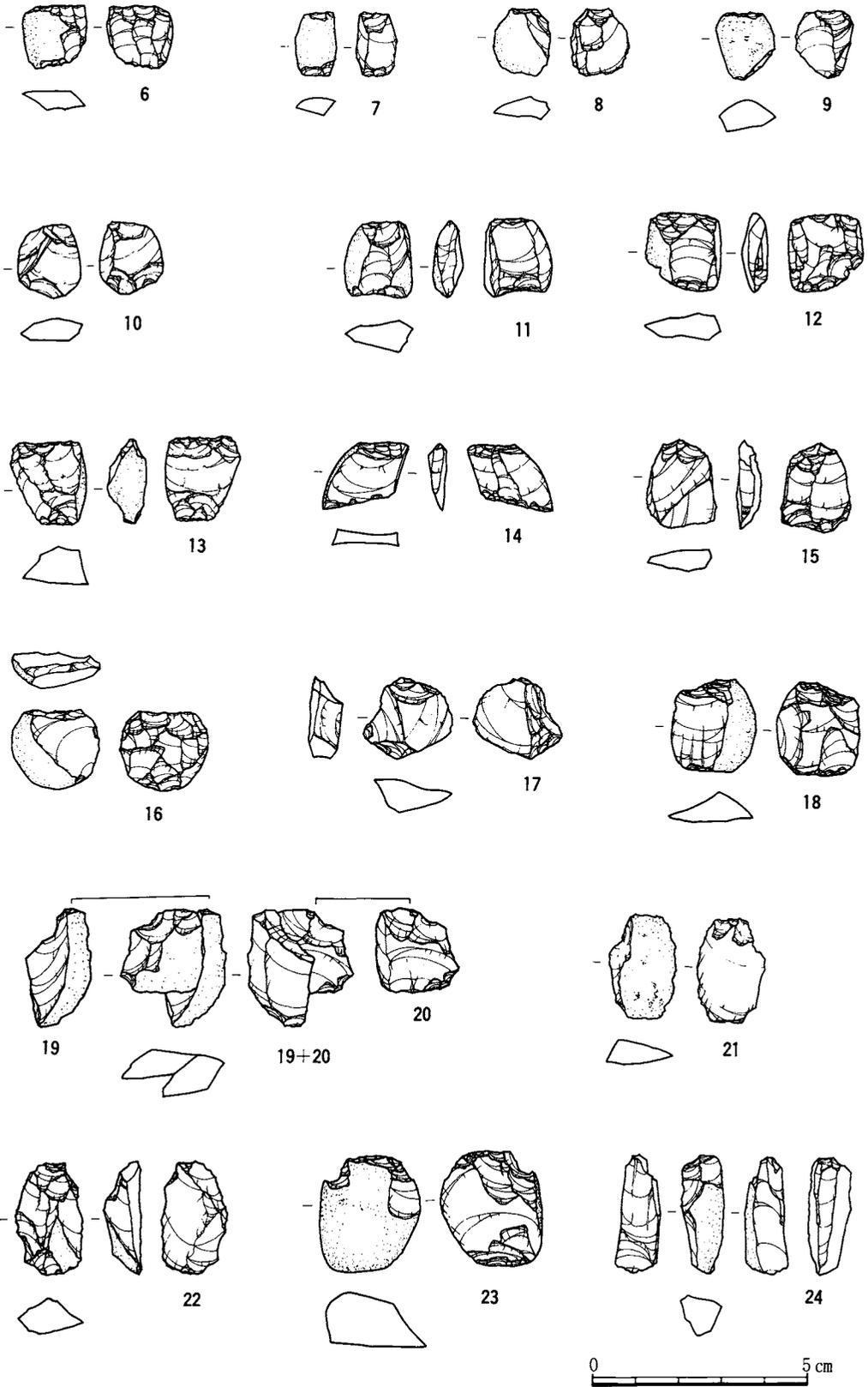
第199図 第2ブロック(第1文化層)器種別分布図



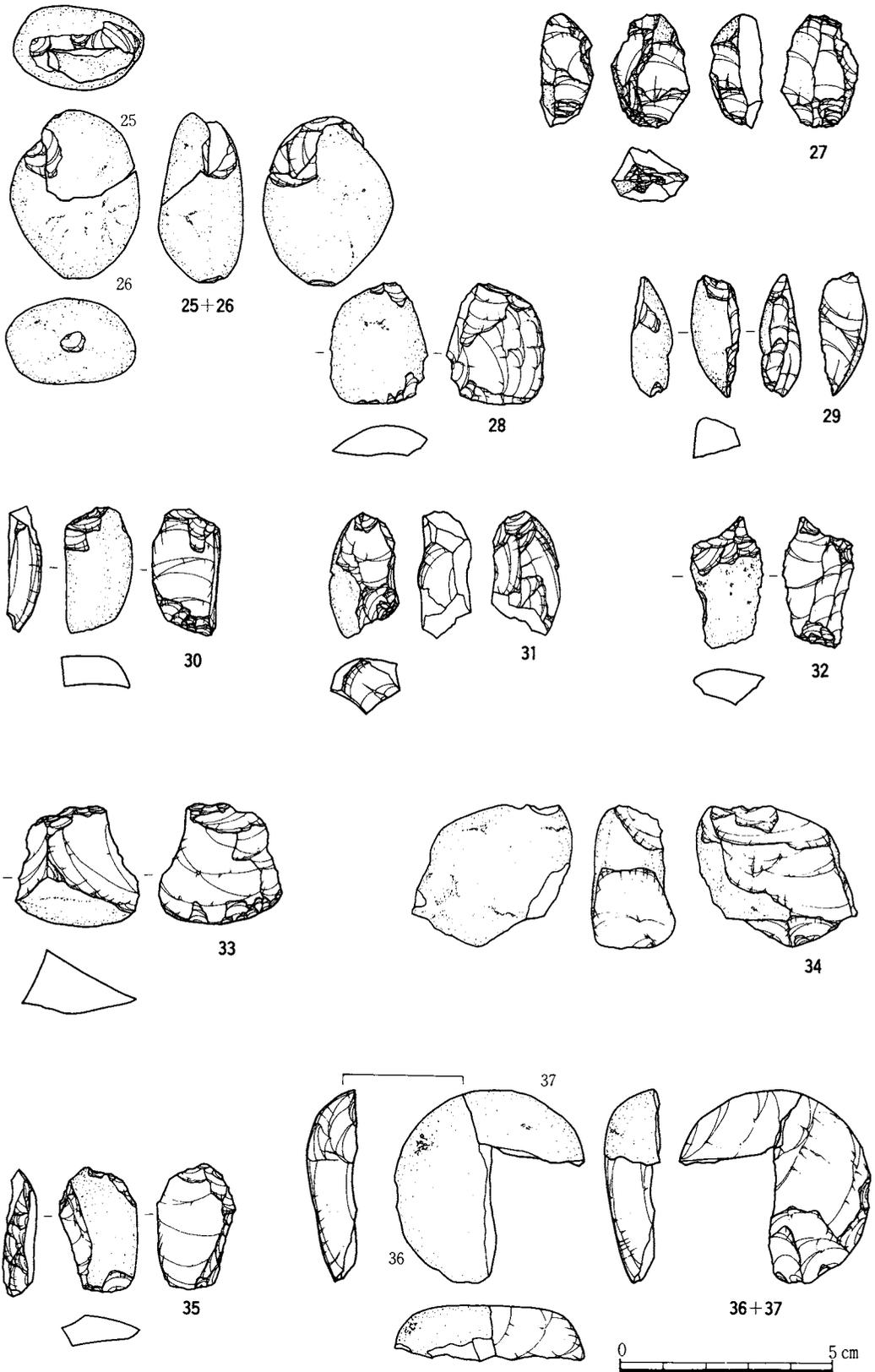
第200図 第2ブロック(第1文化層)石材別分布図



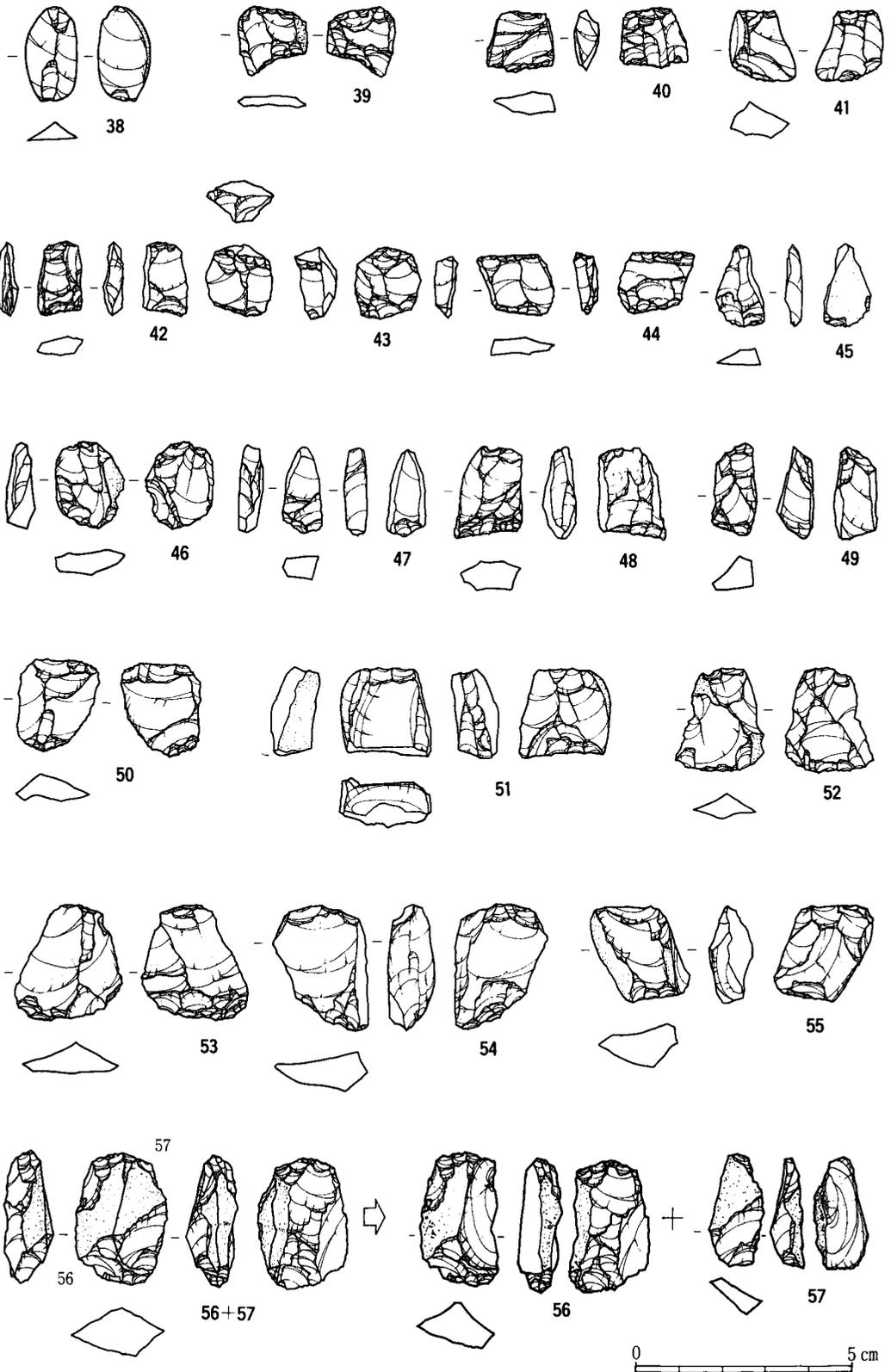
第201図 第1文化層第2ブロック出土石器(1)



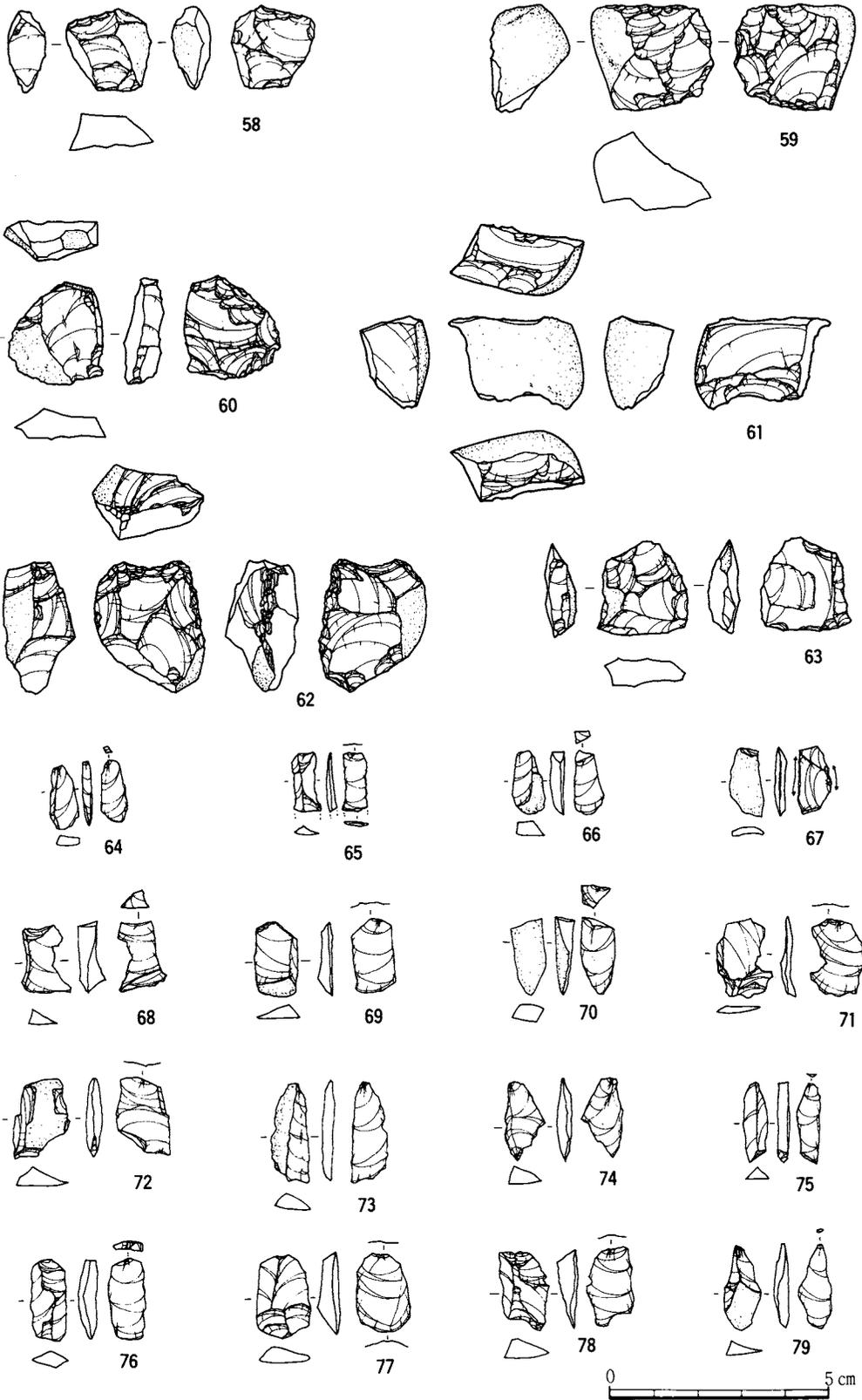
第202図 第1文化層第2ブロック出土石器(2)



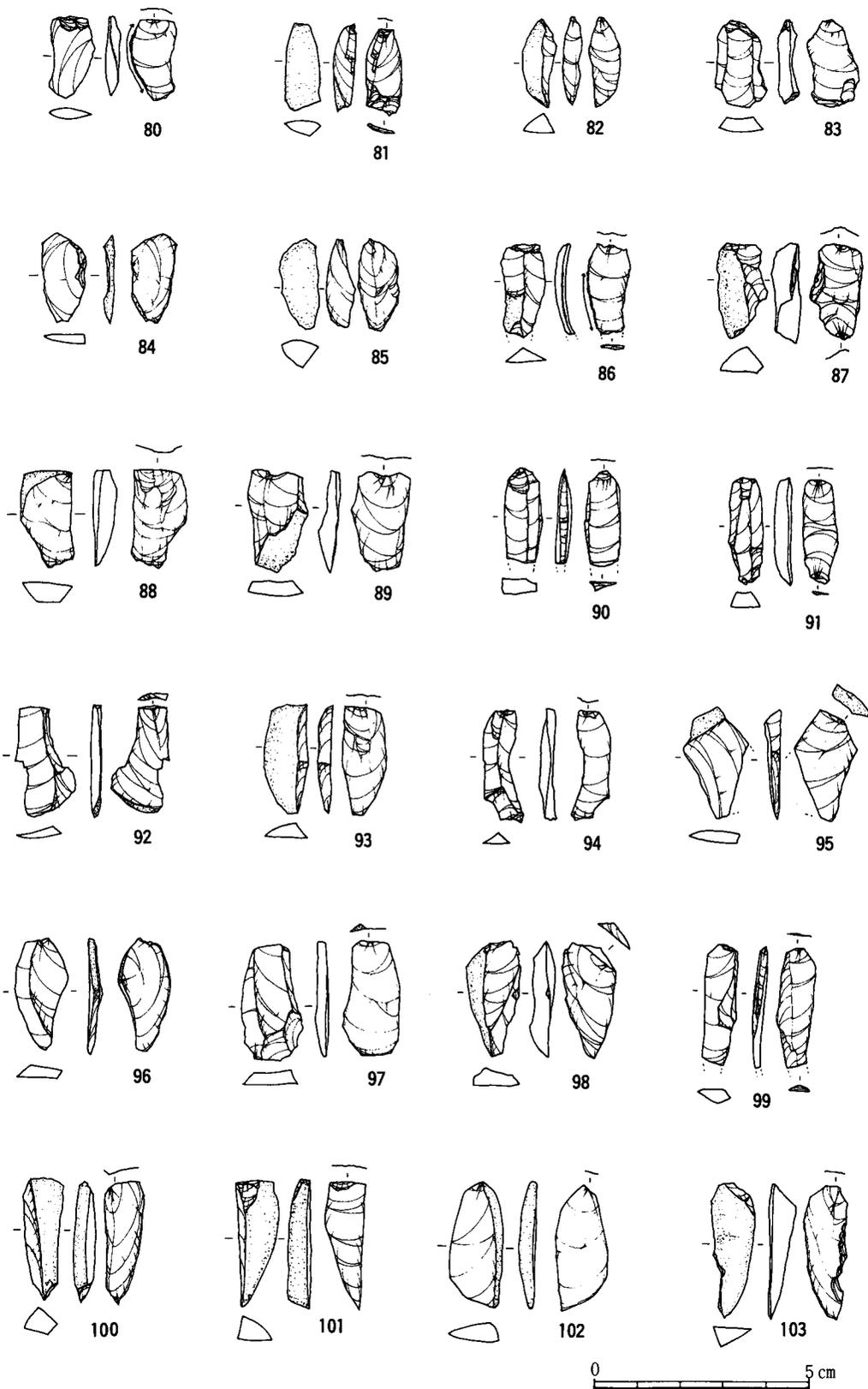
第203図 第1文化層第2ブロック出土石器(3)



第204図 第1文化層第2ブロック出土石器(4)



第205図 第1文化層第2ブロック出土石器(5)



第206図 第1文化層第2ブロック出土石器(6)

剥離され後にも、20は両極剥離によって約1cmほど剥離されている。38~56は楔形石器II類である。折断面状の剥離痕を有するものは45・47・49・51・54は断面形が四角形になる。56+57は楔形石器II類と楔形石器調整剥片の接合資料である。円礫を素材として、両極剥離を行って

第20表 第2ブロック(第1文化層)石器属性表

図版番号	器種	石材	長×幅×厚(mm)	重量(g)	登録番号	図版番号	器種	石材	長×幅×厚(mm)	重量(g)	登録番号
1	石核	チャート	29.8×23.4×19.0	11.4	0088	53	楔形石器II類	凝灰岩	25.3×24.9×7.1	3.7	0382
2	〃	〃	36.8×32.0×24.4	36.4	1429	54	〃	チャート	30.8×20.0×11.2	5.7	0821
3	〃	〃	42.3×38.7×12.4	32.6	1830	55	〃	〃	26.9×17.6×9.8	3.8	0883
4	〃	〃	28.8×27.0×19.9	14.9	0372	56	〃	玉髓	28.5×19.5×9.4	5.1	2232
5	〃	〃	32.6×32.6×21.0	28.0	1915	57	楔形石器調整剥片	〃	25.0×14.0×6.7	1.8	0089
6	楔形石器I類	頁岩	15.0×14.3×6.3	1.3	1328	58	楔形石器III類	安山岩	20.9×19.3×8.3	3.1	0857
7	〃	チャート	15.2×9.4×4.2	0.6	1903	59	〃	チャート	32.0×30.4×19.1	11.6	0771
8	〃	玉髓	16.0×13.3×4.9	1.2	1366	60	〃	〃	24.6×22.5×8.7	4.2	0269
9	〃	チャート	16.3×14.8×7.7	1.5	1725	61	〃	〃	28.9×20.2×15.0	11.3	1299
10	〃	凝灰質安山岩	17.0×15.7×5.7	1.2	0271	62	〃	頁岩	29.5×23.6×15.9	10.0	0351
11	〃	〃	17.2×16.3×6.4	1.8	1798	63	〃	チャート	21.3×19.8×6.7	3.3	1405
12	〃	安山岩	18.0×17.8×5.6	2.3	0801	64	楔形石器調整剥片	凝灰質安山岩	12.0×5.0×3.0	0.4	2700
13	〃	〃	18.5×16.9×9.0	3.2	0075	65	〃	安山岩	12.0×5.0×3.0	0.4	2874
14	〃	凝灰質安山岩	19.0×13.6×4.2	1.1	0829	66	砕片	玉髓	14.5×7.4×3.2	0.3	2712
15	〃	安山岩	19.9×16.5×5.3	2.0	0267	67	楔形石器調整剥片	チャート	15.0×7.4×2.0	0.2	0792
16	〃	チャート	21.0×17.7×7.7	2.7	1945	68	砕片	凝灰岩	15.1×11.1×4.6	0.6	0555
17	〃	安山岩	21.0×19.6×8.2	2.6	0649	69	〃	〃	16.6×9.9×4.8	0.7	1849
18	〃	凝灰岩	20.8×19.5×8.4	2.5	0369	70	剥片	〃	17.0×7.8×5.4	0.6	1822
19	楔形石器調整剥片	玉髓	27.4×16.9×7.2	2.5	1296	71	砕片	〃	17.2×13.1×2.5	0.4	0641
20	楔形石器I類	〃	22.0×20.5×9.4	3.5	2736	72	楔形石器調整剥片	チャート	17.3×13.1×4.0	0.9	0642
21	〃	〃	23.4×15.7×6.3	2.5	2738	73	〃	〃	17.6×15.4×5.0	1.5	1867
22	〃	〃	25.3×15.0×7.5	2.9	0111	74	砕片	凝灰岩	17.8×9.6×3.8	0.6	0585
23	〃	頁岩	25.6×23.8×12.5	8.7	0354	75	〃	〃	18.1×5.4×3.8	0.3	0568
24	〃	安山岩	26.3×10.0×10.1	2.7	1905	76	〃	玉髓	18.6×8.4×5.0	0.8	0615
25	〃	チャート	23.7×22.8×8.6	4.4	0232	77	〃	安山岩	18.8×13.4×6.3	1.5	2693
26	〃	〃	37.7×30.1×19.6	24.0	0617	78	楔形石器調整剥片	チャート	18.9×13.4×5.0	0.7	1747
27	〃	玉髓	26.4×17.5×12.7	5.5	0332	79	砕片	凝灰岩	18.9×8.4×4.0	0.3	0971
28	〃	安山岩	27.3×23.3×6.2	4.9	1015	80	剥片	凝灰質安山岩	19.3×10.7×3.0	0.5	1941
29	〃	チャート	28.2×11.0×8.6	3.3	0536	81	楔形石器調整剥片	玉髓	20.1×18.9×5.7	1.0	0277
30	〃	〃	28.8×16.3×7.1	4.4	0291	82	砕片	チャート	20.2×7.6×4.2	0.6	0273
31	〃	砂岩	28.9×16.8×11.9	6.7	0582	83	〃	凝灰岩	20.3×12.1×4.6	0.8	0513
32	〃	玉髓	30.0×17.0×9.0	4.0	0607	84	〃	安山岩	20.8×1.4×3.5	0.7	1365
33	〃	凝灰岩	28.9×28.0×14.5	9.1	0515	85	楔形石器調整剥片	チャート	20.8×9.4×7.4	1.3	0556
34	〃	チャート	42.3×28.9×19.5	25.1	2783	86	〃	凝灰岩	21.2×10.5×3.3	0.7	1788
35	〃	凝灰岩	29.0×18.2×7.0	3.7	1302	87	〃	チャート	22.1×13.0×6.3	1.6	2873
36	〃	チャート	43.5×23.6×12.7	15.1	0815	88	〃	安山岩	22.5×12.9×6.3	1.8	1267
37	〃	〃	32.6×17.8×12.8	5.9	0104	89	〃	玉髓	23.0×14.6×5.1	1.4	2705
38	楔形石器II類	凝灰岩	12.5×2.7×4.8	1.3	1331	90	剥片	チャート	23.5×23.4×11.6	10.2	0603
39	〃	安山岩	16.3×15.4×2.8	0.8	0252	91	楔形石器調整剥片	凝灰岩	24.2×8.3×3.6	0.8	1778
40	〃	〃	15.8×14.0×5.7	1.3	0645	92	剥片	安山岩	24.4×13.9×2.8	0.8	1933
41	〃	チャート	16.5×4.7×6.9	1.8	1370	93	楔形石器調整剥片	砂岩	25.0×10.4×3.9	1.1	0209
42	〃	凝灰岩	16.9×10.2×4.0	0.8	0246	94	剥片	安山岩	25.2×8.4×2.3	0.6	2859
43	〃	玉髓	15.6×15.3×9.6	2.3	0119	95	〃	頁岩	25.3×15.6×4.3	1.1	2750
44	〃	安山岩	17.5×14.2×5.4	1.5	0129	96	砕片	安山岩	25.5×12.3×2.2	0.8	0842
45	〃	チャート	18.7×11.2×3.7	0.8	1871	97	剥片	〃	26.3×14.0×3.6	1.6	1384
46	〃	頁岩	19.5×16.8×6.2	1.7	0127	98	〃	〃	26.8×13.5×5.0	1.4	2716
47	〃	チャート	19.5×9.4×5.8	1.4	1855	99	〃	凝灰岩	27.5×8.1×3.0	0.5	0604
48	〃	頁岩	21.0×14.8×7.3	2.6	2737	100	砕片	安山岩	28.1×9.1×6.5	1.6	0093
49	〃	玉髓	21.0×12.0×8.0	1.9	0817	101	剥片	〃	28.5×10.4×6.8	1.8	1755
50	〃	〃	22.6×17.8×6.7	2.6	2724	102	〃	凝灰質安山岩	28.6×13.2×5.4	1.8	1326
51	〃	凝灰岩	21.4×20.1×9.9	4.5	1750	103	楔形石器調整剥片	チャート	30.6×10.6×6.0	1.4	1292
52	〃	チャート	23.4×20.8×8.6	2.8	1454						

いる過程で57の楔形石器調整剥片が剥離されて、その後縁辺部に微細な両極剥離痕が形成されている資料である。58～63は楔形石器Ⅲ類である。59・62は円礫を素材としている。側面からの両極剥離によって4ヶ2対の刃部を有するが、側面からの両極剥離によって形成される剥離痕はいずれも微細な剥離痕である。61は三面が裁断面を有する。64～103は細長の形状をした碎片・楔形石器調整剥片・剥片である。微細剥離痕をもつものは、67・80・86・103である。末端部が折れているものは65・81・86・95・99である。

c. 小結

第2ブロックから検出された楔形石器Ⅲ類を観察すると側面からの両極剥離痕はそれほど行われていないことが観察され、両極剥離がほとんど主軸方向（同一方向）からの両極剥離によるものと考えられる。

細長の形状をもつ碎片・楔形石器調整剥片・剥片に微細剥離痕が残されているものがあり、これを目的的に剥離して使用した可能性があり、楔形石器を石核としてとらえることが出来るかも知れない。

(6)第3ブロック

a. 分布状況（第207・208図，図版89）

石器の出土層位はⅦ層上部に集中する。平面分布は、3.3m×6.5mの範囲から132点出土した。ブロック間接合は、第2ブロックと2母岩が接合する。

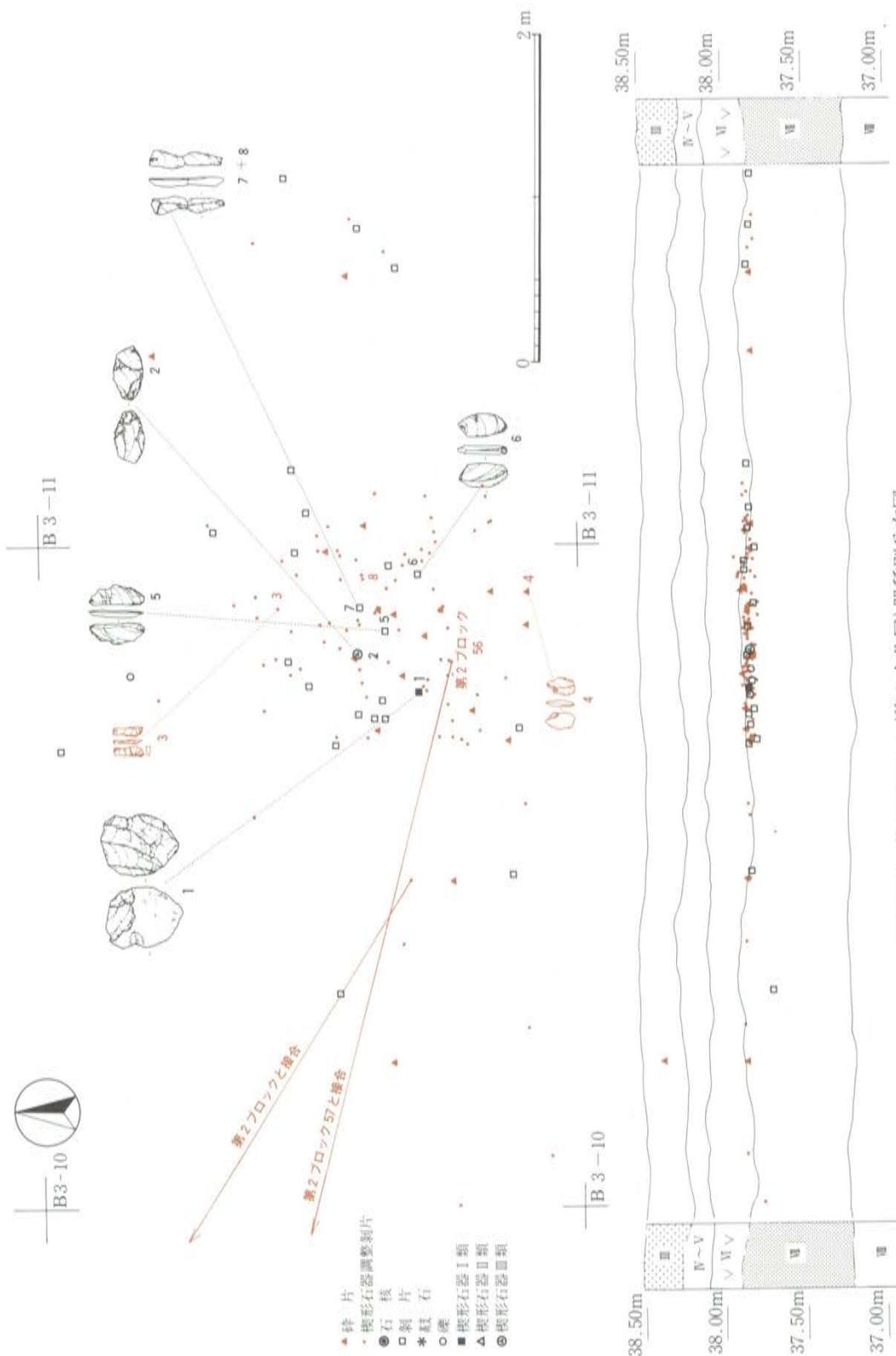
b. 出土遺物（第209図，図版93）

検出された石器は総数132点である。器種組成は、楔形石器Ⅰ類1点，楔形石器Ⅲ類1点，剥片22点，碎片18点，楔形石器調整剥片89点，礫1点である。

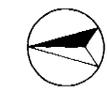
1は楔形石器Ⅰ類である。円礫を素材としている。2は楔形石器Ⅲ類である。側面からの両極剥離痕は微細な剥離痕が形成されている。3～8は細長の形状をした碎片・楔形石器調整剥片・剥片である。微細剥離痕は残されていない。

第21表 第3ブロック（第1文化層）石器組成表

器種	石 材							
	安山岩	チャート	凝灰岩	凝灰質安山岩	玉 髓	頁 岩	硬砂岩	合 計
楔形石器Ⅰ類	0	0	0	1	0	0	0	1
楔形石器Ⅲ類	0	1	0	0	0	0	0	1
剥 片	5	7	4	2	1	3	0	22
碎 片	3	6	4	2	1	1	1	18
楔形石器調整剥片	5	31	21	13	16	0	3	89
礫	0	1	0	0	0	0	0	1
合 計	13	46	29	18	18	4	4	132



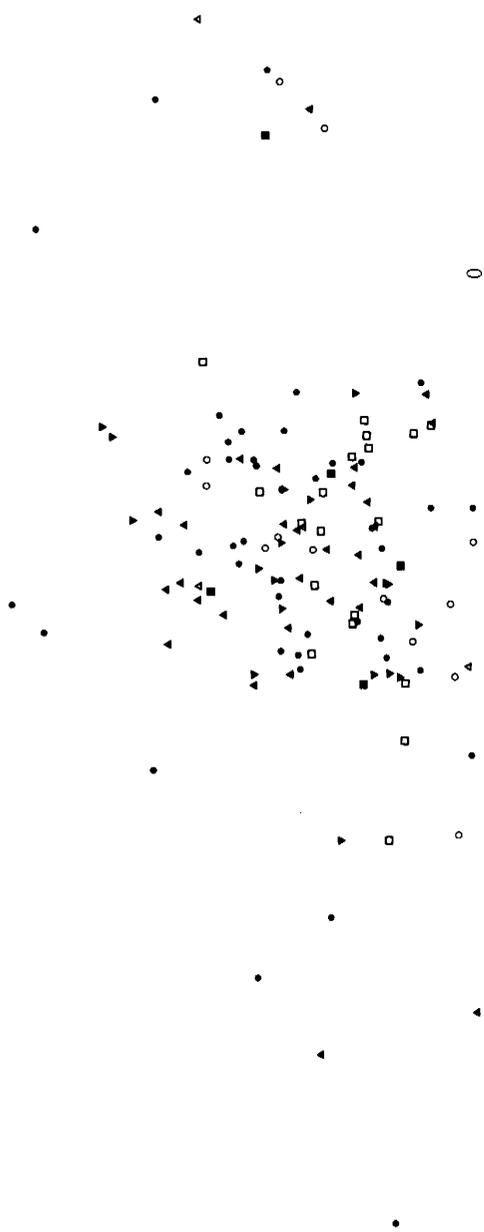
第207図 第3ブロック(第1文化層)器種別分布図



B 3 - 10

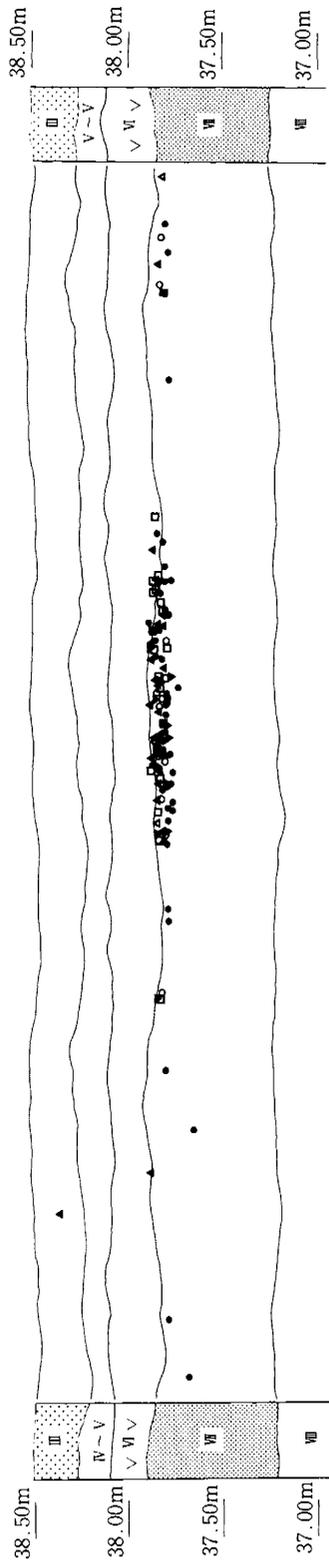
B 3 - 11

- 安山岩
- チャート
- ▲凝灰岩
- 凝灰質安山岩
- ▼玉髓
- △頁岩
- 砂岩
- ◎メノウ
- ▽砂岩

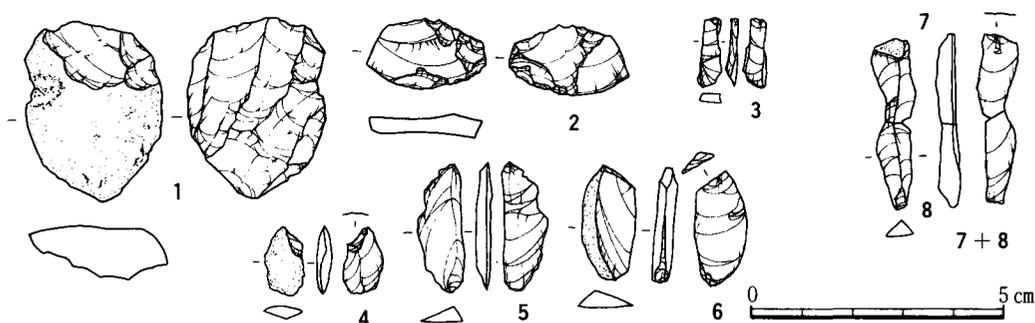


B 3 - 10

B 3 - 11



第208図 第3ブロック(第1文化層)石材別分布図



第209図 第1文化層第3ブロック出土石器

第22表 第3ブロック（第1文化層）石器属性表

図版 番号	器 種	石 材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号	図版 番号	器 種	石 材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号
1	楔形石器Ⅰ類	凝灰質安山岩	36.0×27.4×12.2	10.6	2 2 4 0	5	剥 片	安山岩	25.5×9.3×4.4	0.9	2 2 5 5
2	楔形石器Ⅲ類	チャート	23.6×4.2×4.8	1.4	2 2 5 3	6	〃	凝灰岩	23.1×11.2×4.8	1.2	2 2 5 9
3	楔形石器調整剥片	凝灰岩	9.0×6.0×3.0	0.4	2 3 0 0	7	〃	〃	33.9×7.9×3.8	1.0	2 2 7 9
4	碎 片	チャート	13.9×8.2×2.8	0.2	2 2 2 9	8	楔形石器調整剥片	玉 髓	6.0×3.0×3.0	0.4	2 2 7 8

c. 小結

第3ブロックの出土点数は5ブロック中もっとも少ない。出土層位はⅦ層上部に集中しており他のブロックほど分散していない。第3ブロックの出土集中地点と焼土の検出面がⅦ層の上部にあることから第1文化層の生活面はⅦ層の上部ととらえて良さそうである。

(7) 第4ブロック

a. 分布状況（第210・211図，図版89）

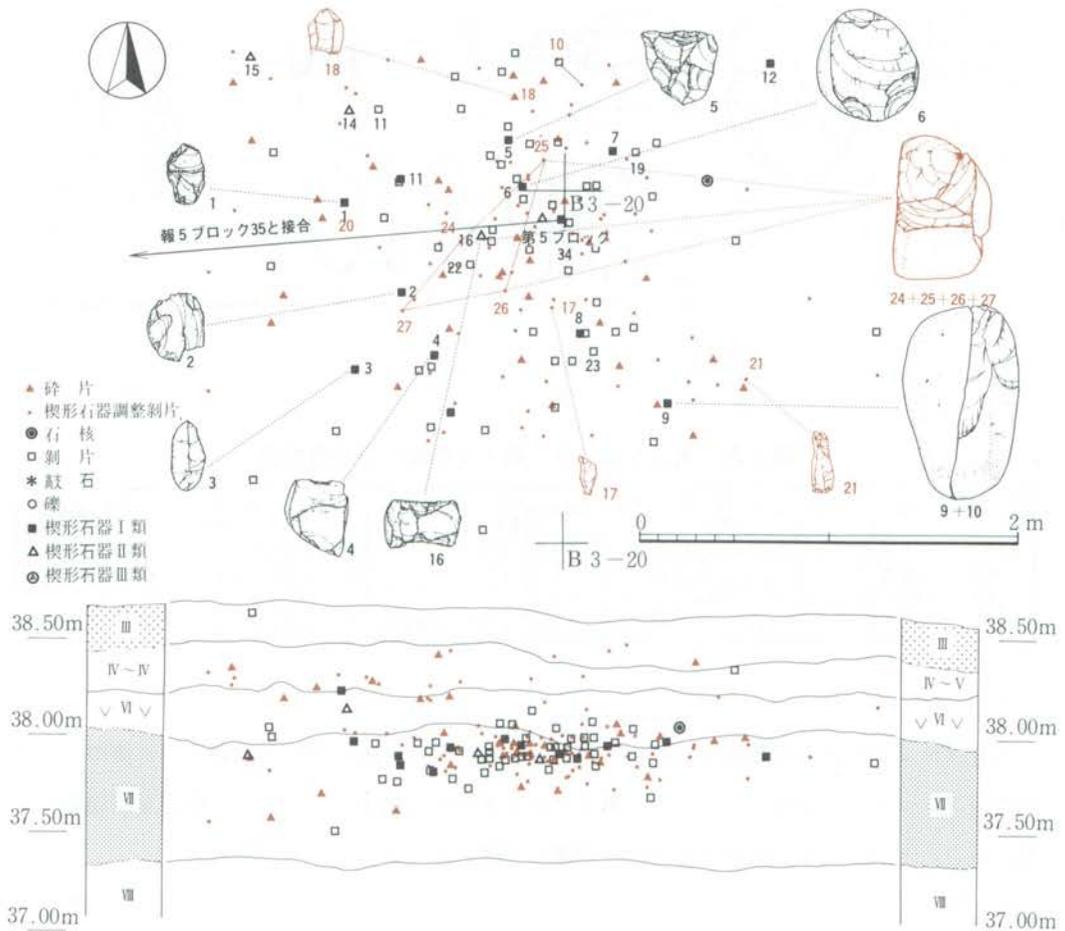
石器の出土層位はⅥ層下部からⅦ層の中部にかけて出土しておりⅦ層の上部に集中する。平面分布は2.6m×3.9mの小範囲に比較的密集して195点出土した。ブロック間接合は、第5ブロックと1母岩が接合する。

b. 出土遺物（第212・213図，図版94）

検出された石器の総数は195点である。器種組成は、楔形石器Ⅰ類13点，楔形石器Ⅱ類4点，

第23表 第4ブロック（第1文化層）石器組成表

器 種	石 材								合 計
	安山岩	チャート	凝灰岩	凝灰質 安山岩	玉 髓	頁 岩	硬砂岩	砂 岩	
楔形石器Ⅰ類	2	6	1	0	2	0	0	2	13
楔形石器Ⅱ類	1	3	0	0	0	0	0	0	4
石 核	0	0	1	0	0	0	0	0	1
剥 片	17	17	9	3	0	5	0	0	51
碎 片	8	10	8	3	3	1	0	1	34
楔形石器調整剥片	6	51	18	5	4	4	4	0	92
合 計	34	87	38	11	9	10	4	3	195



第210図 第4ブロック(第1文化層)器種別分布図

石核1点、剥片51点、碎片34点、楔形石器調整剥片92点である。

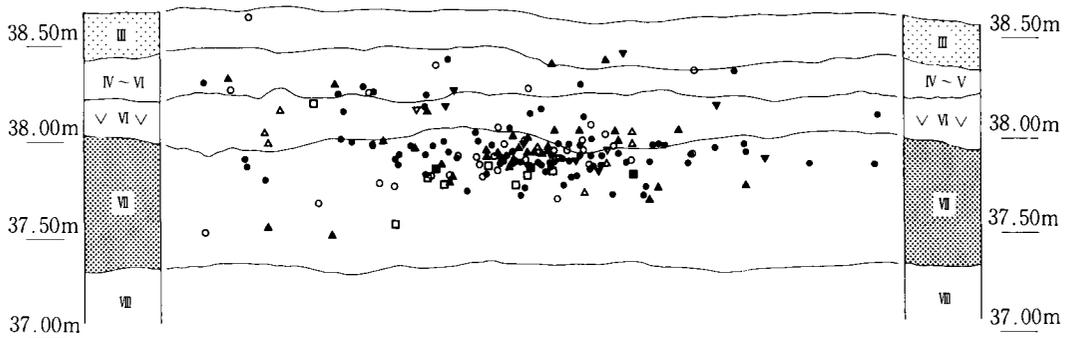
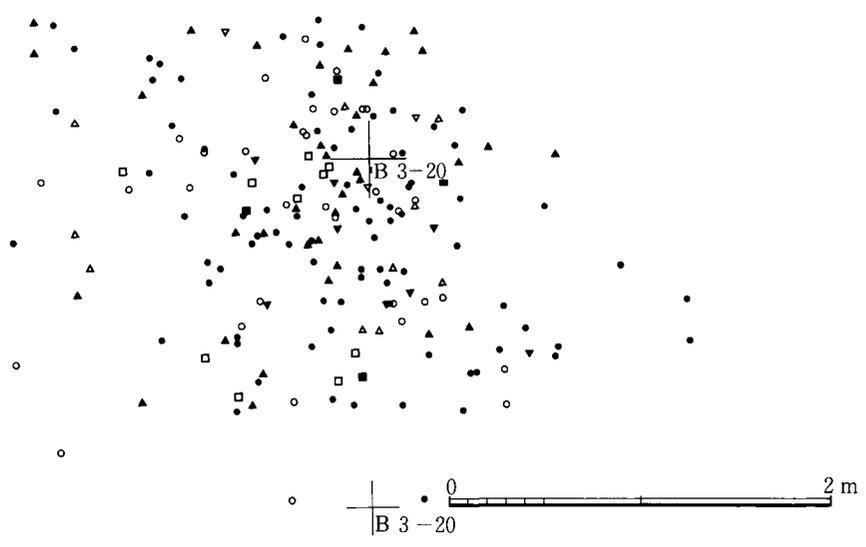
1～9・11・12は楔形石器Ⅰ類である。1・2は横長剥片を素材としている。3・6～12は円礫を素材としている。8～12は敲石の可能性もある。13～16は楔形石器Ⅱ類である。15・16はおそらく円礫素材のものと思われる。17～23は細長の形状をした碎片・楔形石器調整剥片・剥片である。末端部が折れているものは18である。24～27は円礫を素材として四つ以上に分割された資料である。

c. 小結

小範囲にコンパクトにまとまって出土している。比較的大きな円礫を素材として両極剝離を行っている資料(8～12・24～27)が多く、分割に近いかたちの剝離が行われているが、その後の剝離は行われていない。敲石の可能性もある。



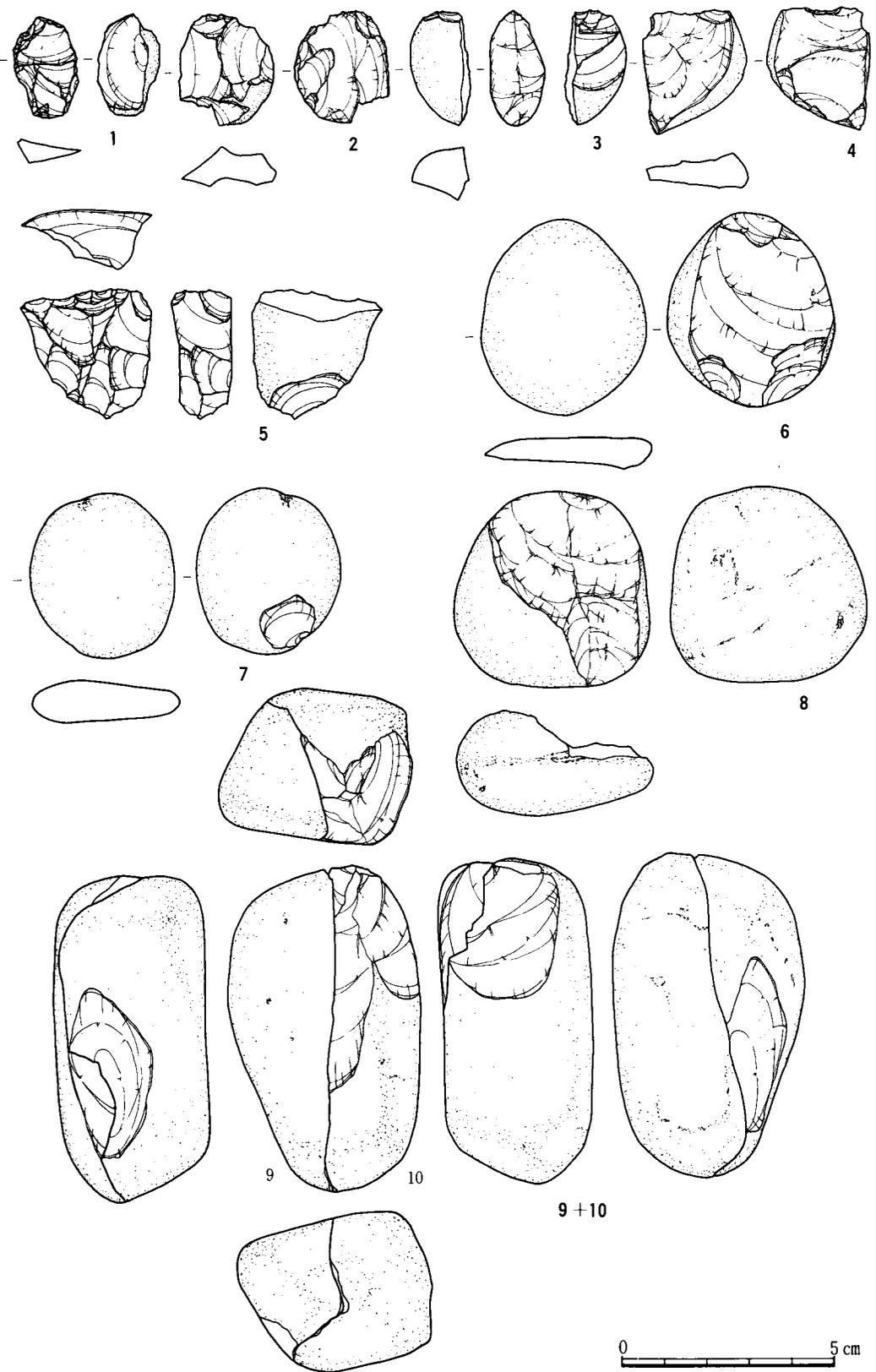
- 安山岩
- チャート
- ▲ 凝灰岩
- 凝灰質安山岩
- ▼ 玉髓
- △ 頁岩
- 硬砂岩
- ◎ メノウ
- ▽ 砂岩



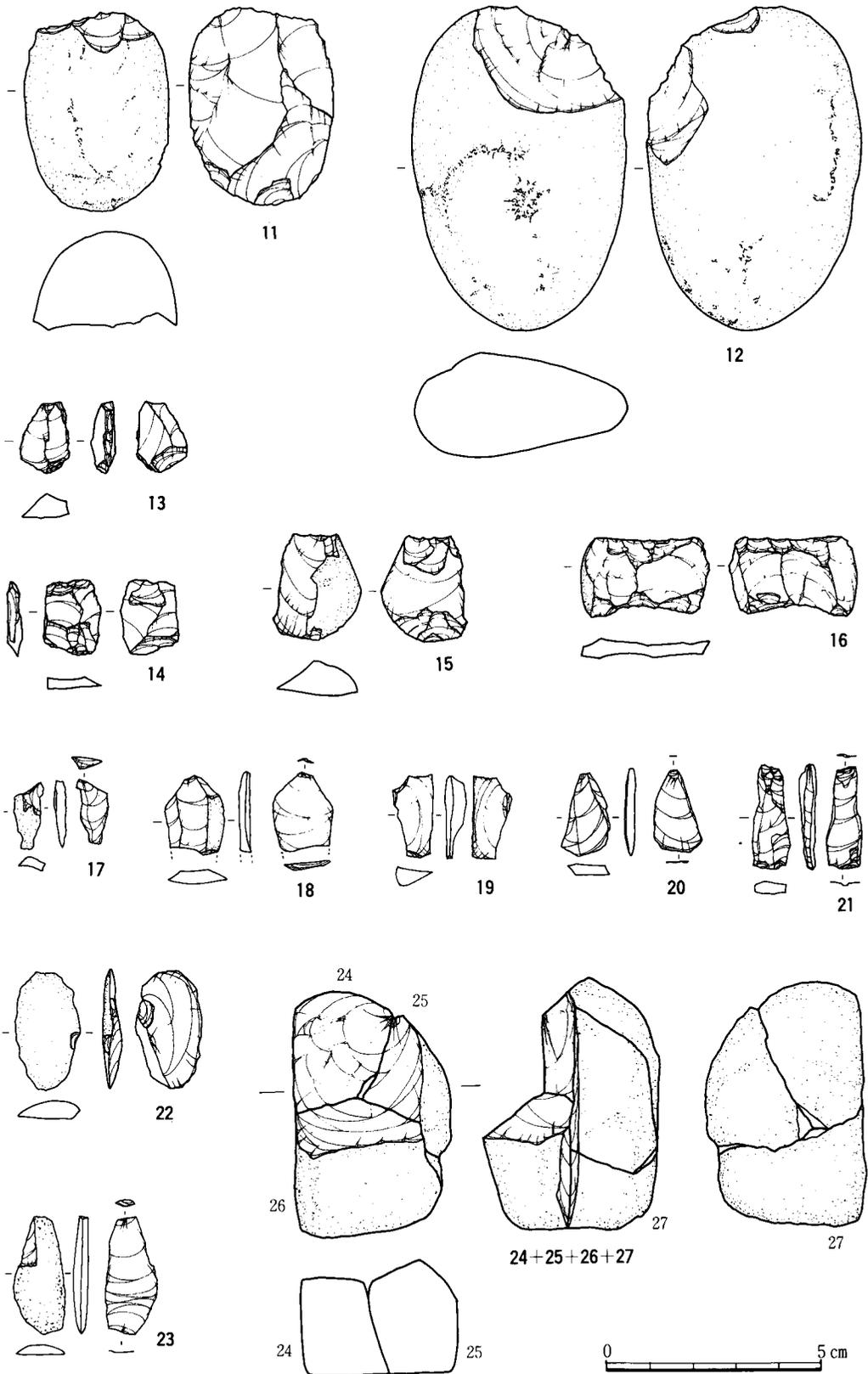
第211図 第4ブロック(第1文化層)石材別分布図

第24表 第4ブロック(第1文化層)石器属性表

図版番号	器種	石材	長×幅×厚(mm)	重量(g)	登録番号	図版番号	器種	石材	長×幅×厚(mm)	重量(g)	登録番号
1	楔形石器I類	チャート	24.0×15.0×4.6	1.6	0509	15	楔形石器II類	チャート	22.0×13.5×11.3	4.4	1825
2	"	"	25.7×22.7×9.2	5.2	2205	16	"	安山岩	30.1×18.3×4.8	3.4	2201
3	"	"	26.5×14.3×13.2	6.0	1700	17	楔形石器調整剝片	チャート	12.0×6.0×3.0	0.4	2468
4	"	安山岩	29.1×24.4×8.4	6.5	2459	18	砕片	凝灰岩	17.8×14.5×2.3	0.8	1335
5	"	"	30.7×29.3×14.6	11.4	1440	19	剝片	頁岩	19.4×9.6×5.8	0.7	1343
6	"	凝灰岩	45.4×40.0×7.8	17.7	1696	20	砕片	安山岩	21.3×12.7×3.4	1.0	3019
7	"	砂岩	37.4×34.4×10.3	19.4	1445	21	楔形石器調整剝片	チャート	24.0×8.4×4.8	0.8	2173
8	"	玉髓	49.0×47.8×22.8	53.1	2178	22	剝片	"	27.1×6.0×5.0	1.7	2840
9	"	チャート	72.2×34.4×23.9	65.1	1678	23	"	安山岩	27.0×12.0×4.3	1.5	1671
10	楔形石器調整剝片	"	74.5×40.1×22.1	104.5	1878	24	楔形石器調整剝片	チャート	38.3×32.5×21.0	30.1	1664
11	楔形石器I類	"	46.2×33.7×20.0	34.5	1877	25	"	"	32.0×20.8×19.4	20.3	0884
12	"	玉髓	75.6×50.9×23.5	118.0	2211	26	"	"	34.3×31.5×23.3	27.7	2184
13	楔形石器II類	チャート	17.0×11.6×5.3	1.0	2473	27	"	"	34.1×23.1×18.6	25.1	2206
14	"	"	17.4×13.1×4.2	1.1	0844						



第212図 第1文化層第4ブロック出土石器(1)



第213図 第1文化層第4ブロック出土石器(2)

(8) 第5ブロック

a. 分布状況 (第214・215図, 図版89)

石器の出土層位はIV～V層からVII層にかけて出土しており, VII層の上部に集中する。平面分布は, 5.2m×7.3mの南北に細長く, 比較的広い範囲から1,520点がかなり密集して出土した。第1文化層から出土したブロックのうちでもっとも広い範囲から出土しており, 出土点数も第1文化層の出土石器の48%を占める。ブロック間接合は, 第1ブロックと3母岩, 第2ブロックと2母岩, 第4ブロックと1母岩が接合する。

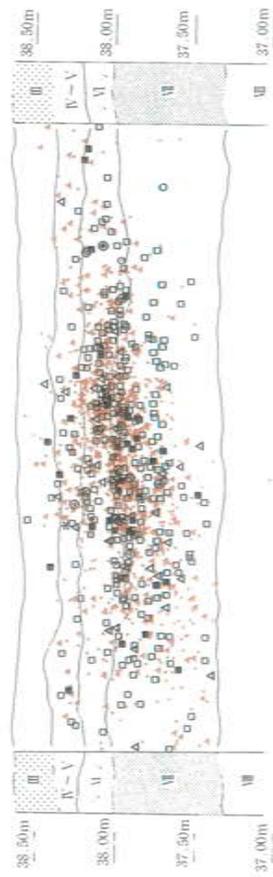
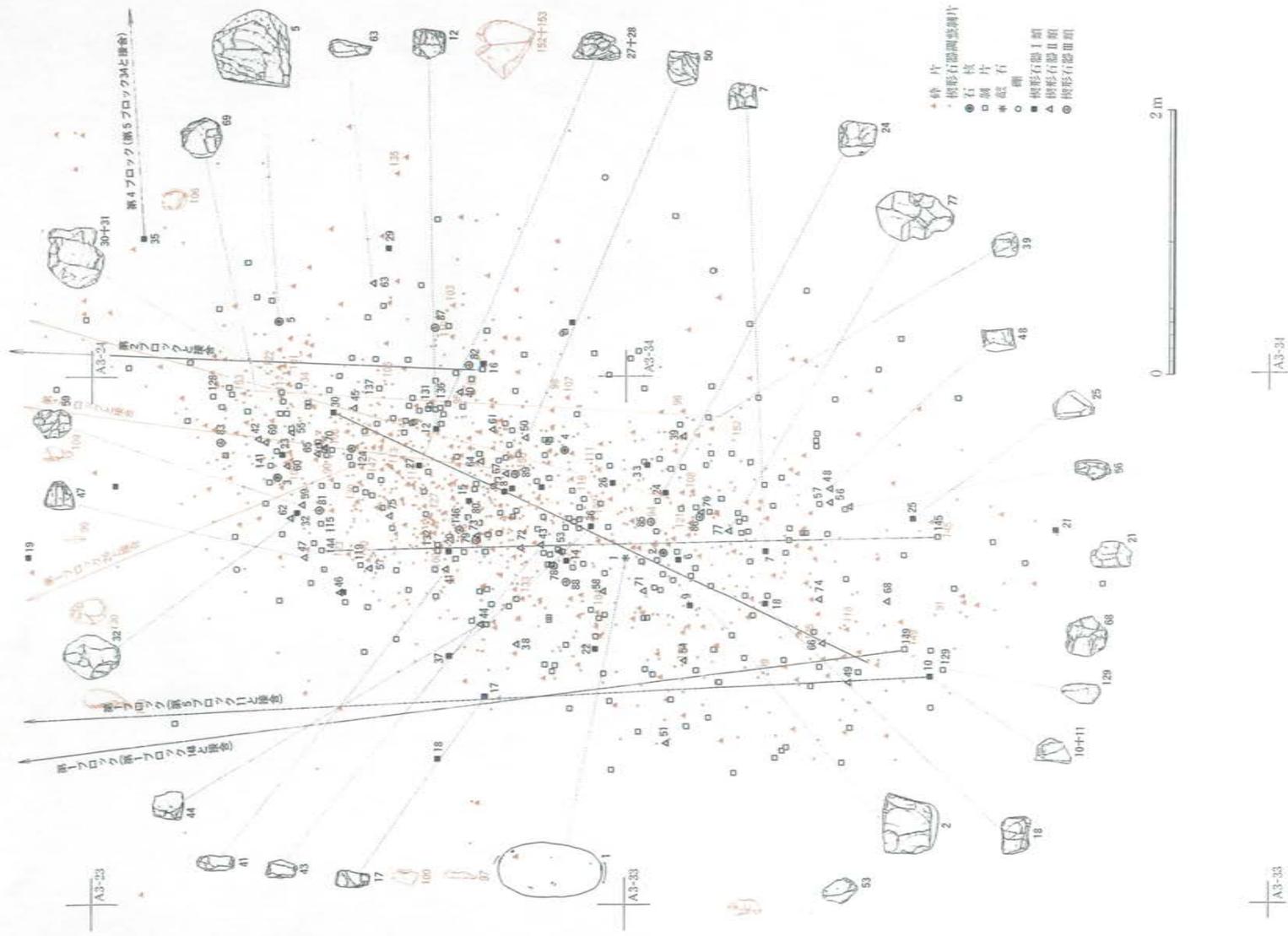
b. 出土遺物 (第216～222図, 図版94～96)

検出された石器の総点数は1,520点である。器種組成は, 楔形石器I類33点, 楔形石器II類40点, 楔形石器III類12点, 敲石1点, 石核4点, 剥片275点, 碎片272点, 楔形石器調整剥片879点, 礫4点である。石材では, チャートと凝灰岩の占める割合が高い。

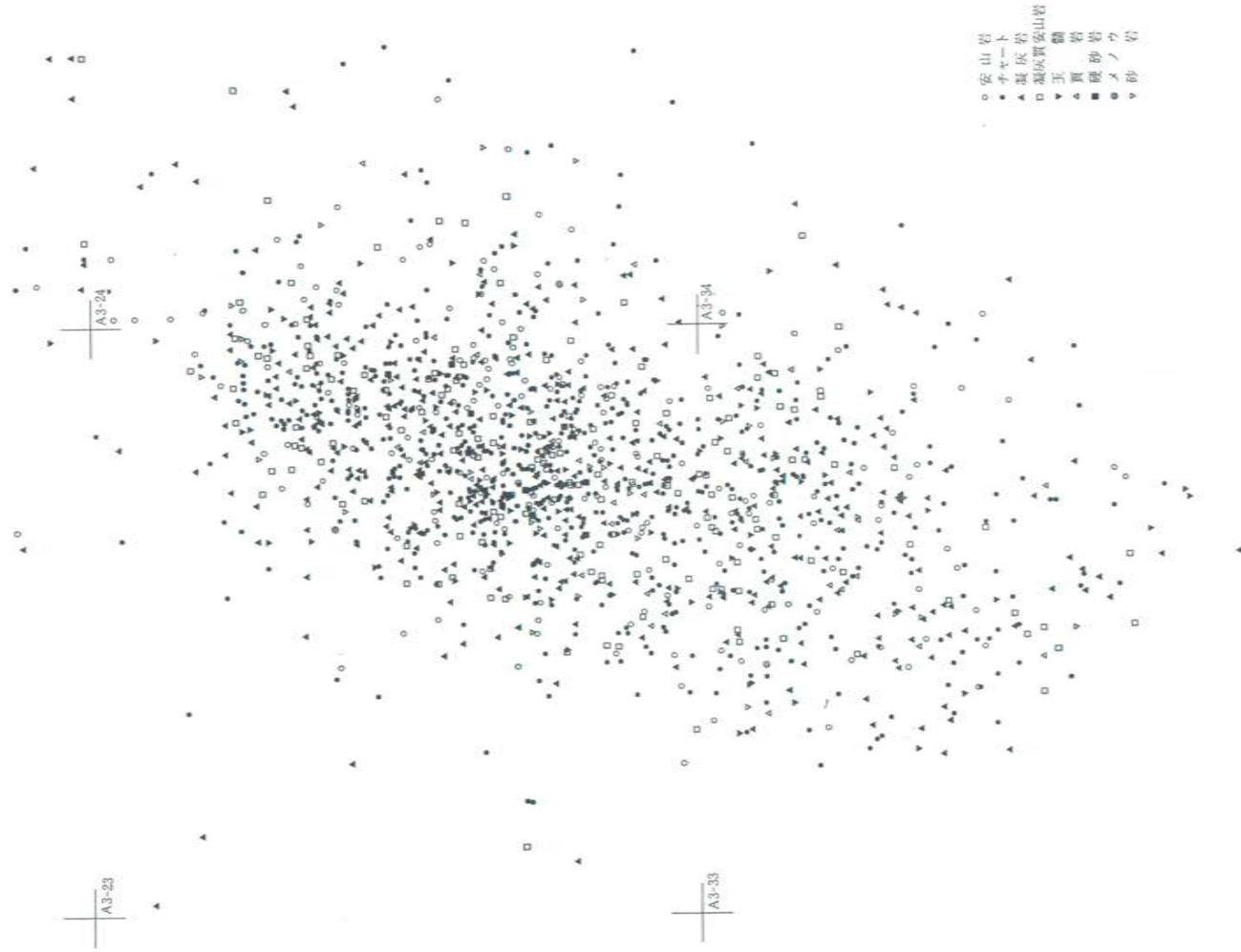
1は敲石である。上下両端部に敲打痕がある。2～5は石核である。2～4は分割礫を素材として分割面を打面として, 小形の剥片を剥離している。5は円礫を素材として打面を90°転移しながら剥片を剥離している。6～27・29・30・32～37は楔形石器I類である。両面に自然面のあるものは, 18・24・36・37であり, これらは円礫を素材としたものと思われる。剥片を素材としているものは, 23・26・32・33・34・35がある。裁断面を有するものは, 12・17・18・22・23・25・26・27・28・29であり比較的多く出土している。38～77は楔形石器II類である。細長の直方体に近い形状のもの(41・43・46・48・56・60～63)がまとまって出土している。78～89は楔形石器III類である。いずれも, 側面からの両極剥離痕は微細剥離痕が形成される程度の剥離である。87は両面に自然面があることから円礫を素材にしたものと思われる。90～143は細長の形状をした碎片・楔形石器調整剥片・剥片である。微細剥離痕のあるものは, 100・106・109・130・140である。末端部の折れているものは93・103・113・136・138, 頭部の折れているものは124, 頭部と末端部がともに折れているものは93である。144～153は接合資料である。144+

第25表 第5ブロック (第1文化層) 石器組成表

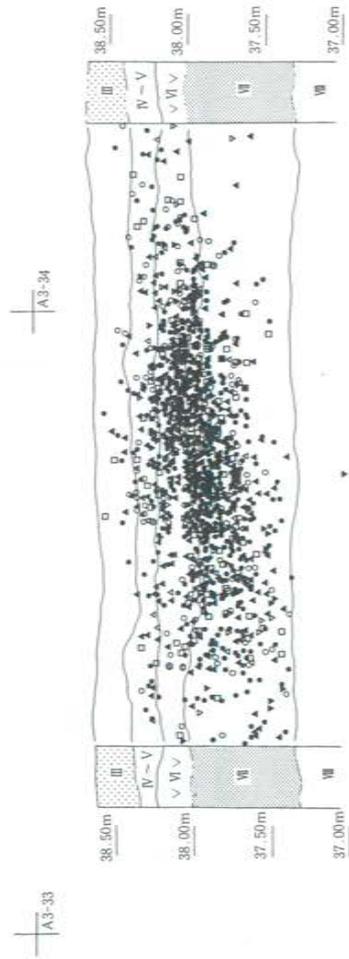
器種	石 材									
	安山岩	チャート	凝灰岩	凝灰質 安山岩	玉 髓	頁 岩	硬砂岩	メノウ	砂 岩	合 計
楔形石器I類	8	14	3	2	1	3	0	0	2	33
楔形石器II類	4	23	11	0	1	0	0	1	0	40
楔形石器III類	0	10	2	0	0	0	0	0	0	12
敲石	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
石核	1	3	0	0	0	0	0	0	0	4
剥片	65	72	64	39	12	11	0	0	12	275
碎片	49	96	72	25	13	9	0	1	7	272
楔形石器調整剥片	63	396	222	101	58	11	11	1	16	879
礫	0	1	3	0	0	0	0	0	0	4
合 計	191	613	377	161	85	34	11	3	37	1,520



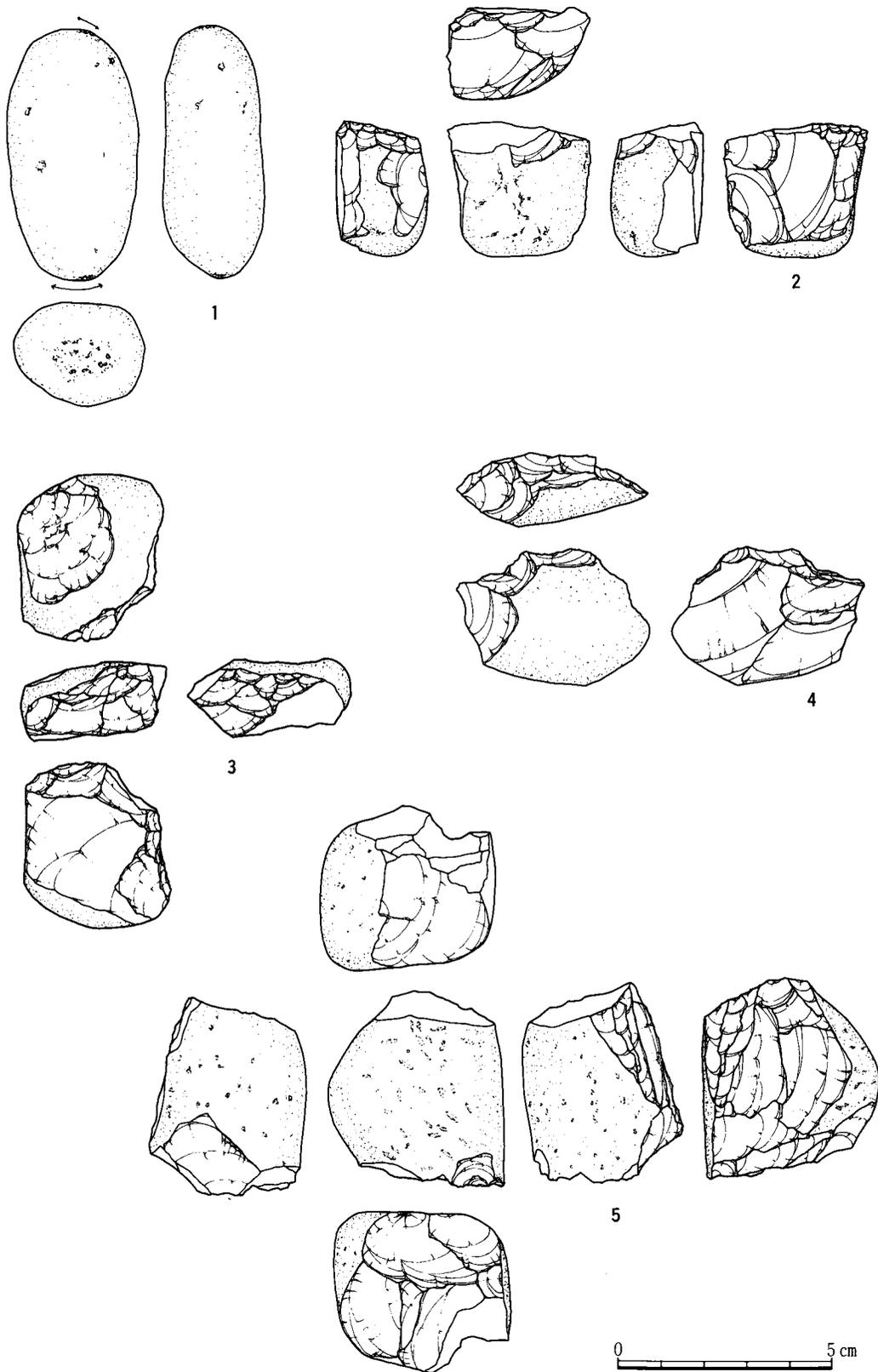
第214図 第5ブロック(第1文化層)器種別分布図



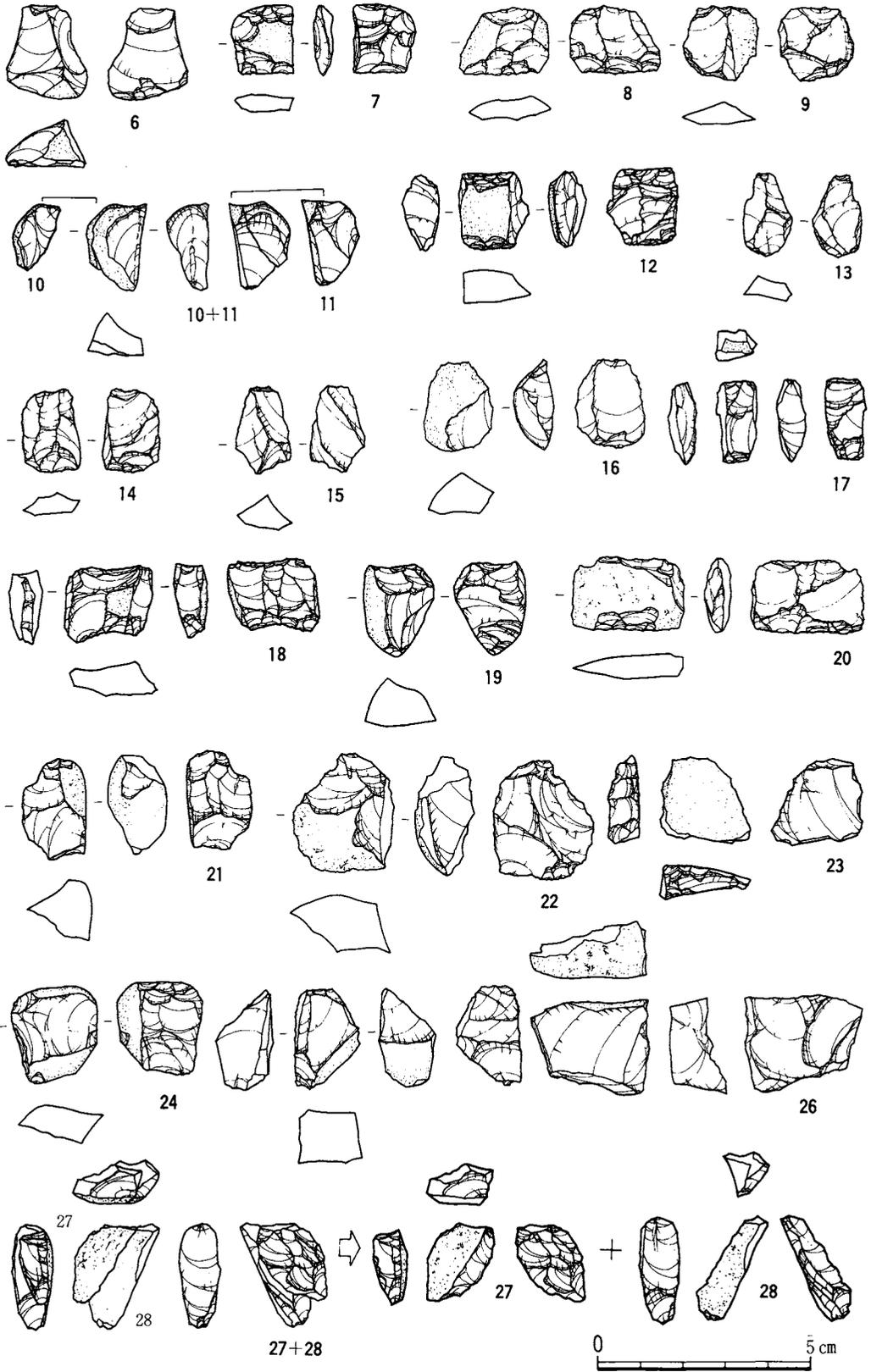
- 安山岩
- チュート
- ▲ 凝灰岩
- 凝灰質安山岩
- ▽ 珪 礫
- ▲ 頁 岩
- 硬砂岩
- スノウ
- ▽ 砂 岩



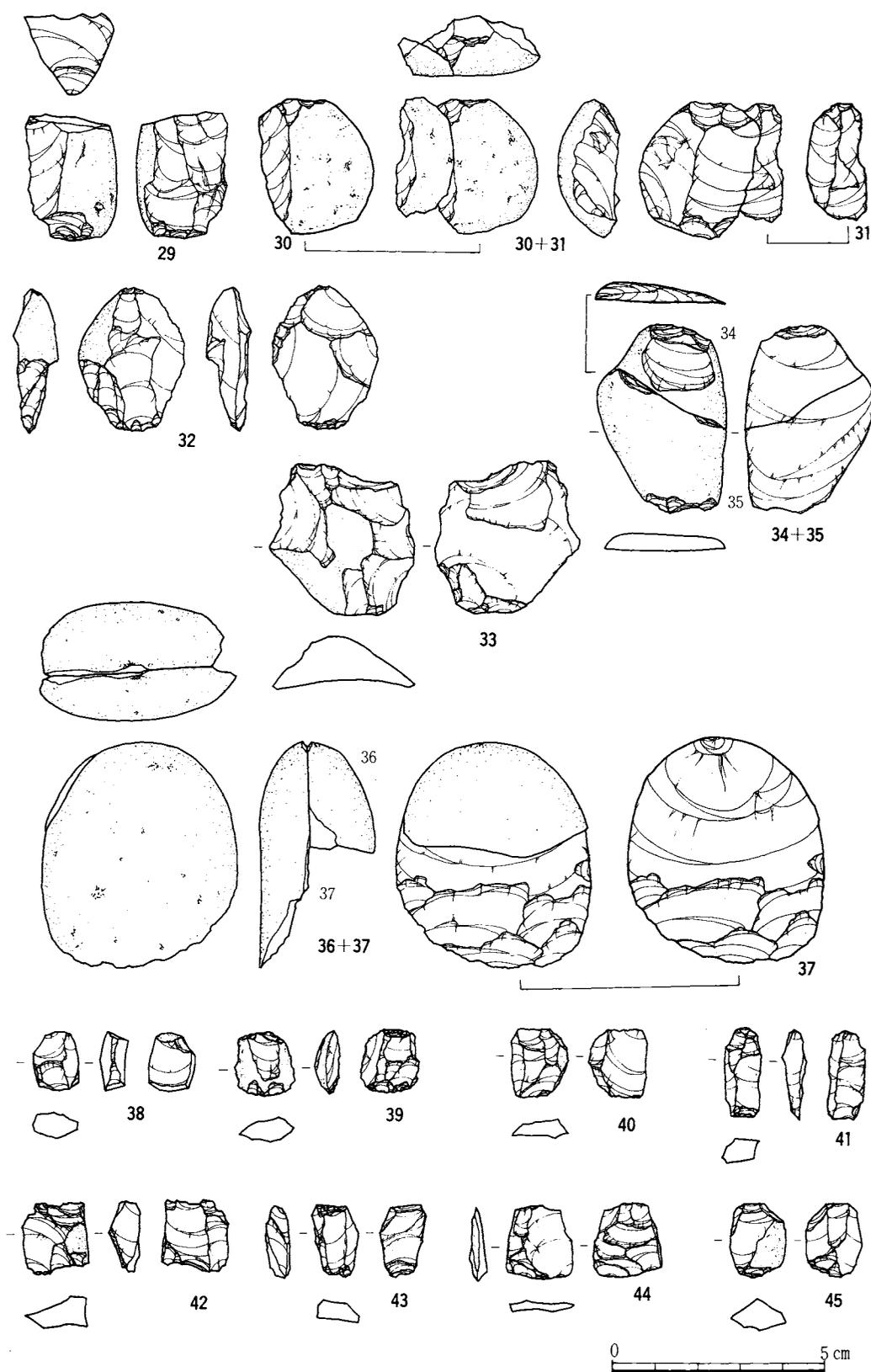
第215図 第5ブロック(第1文化層)石材別分布図



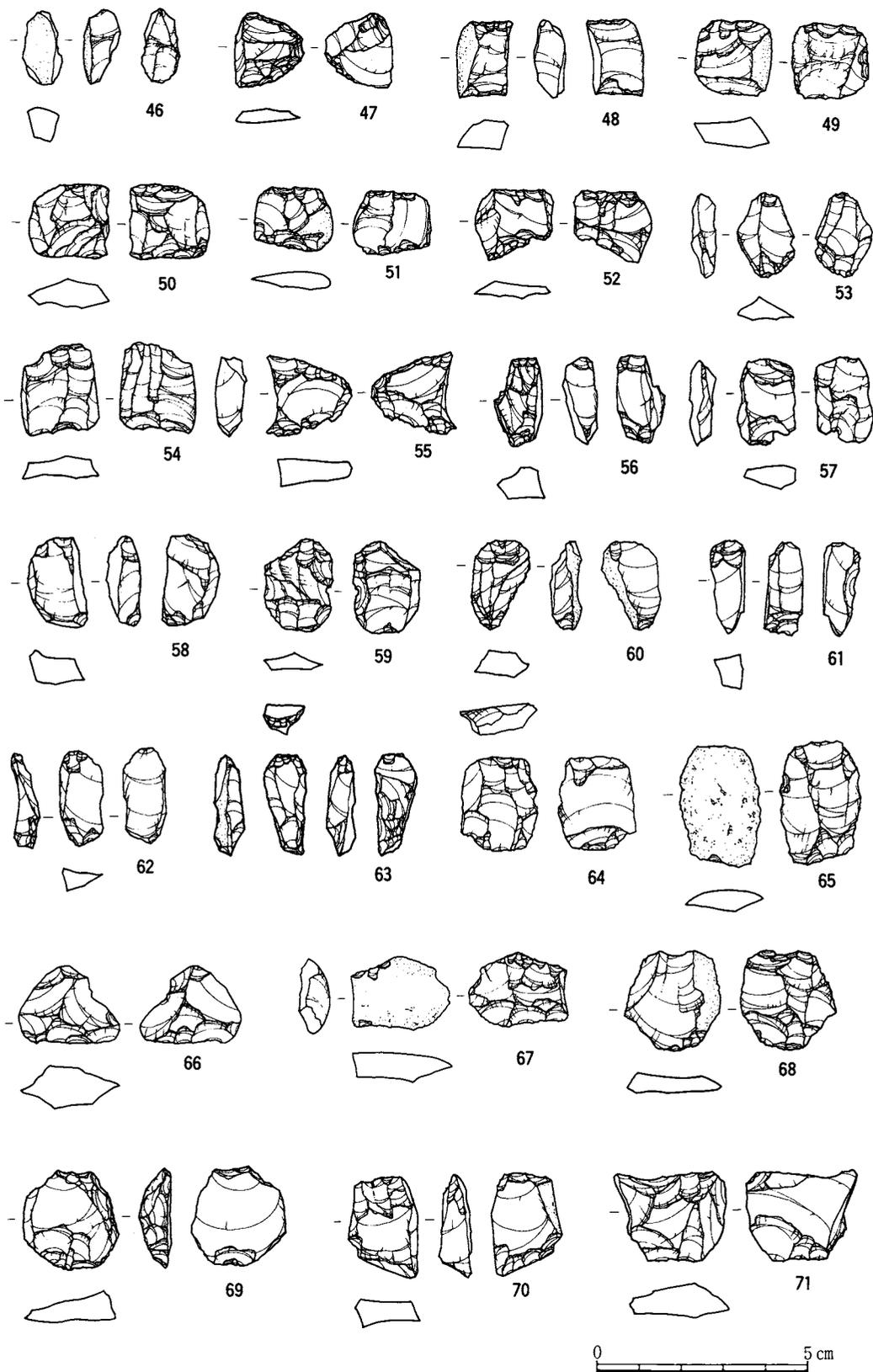
第216図 第1文化層第5ブロック出土石器(1)



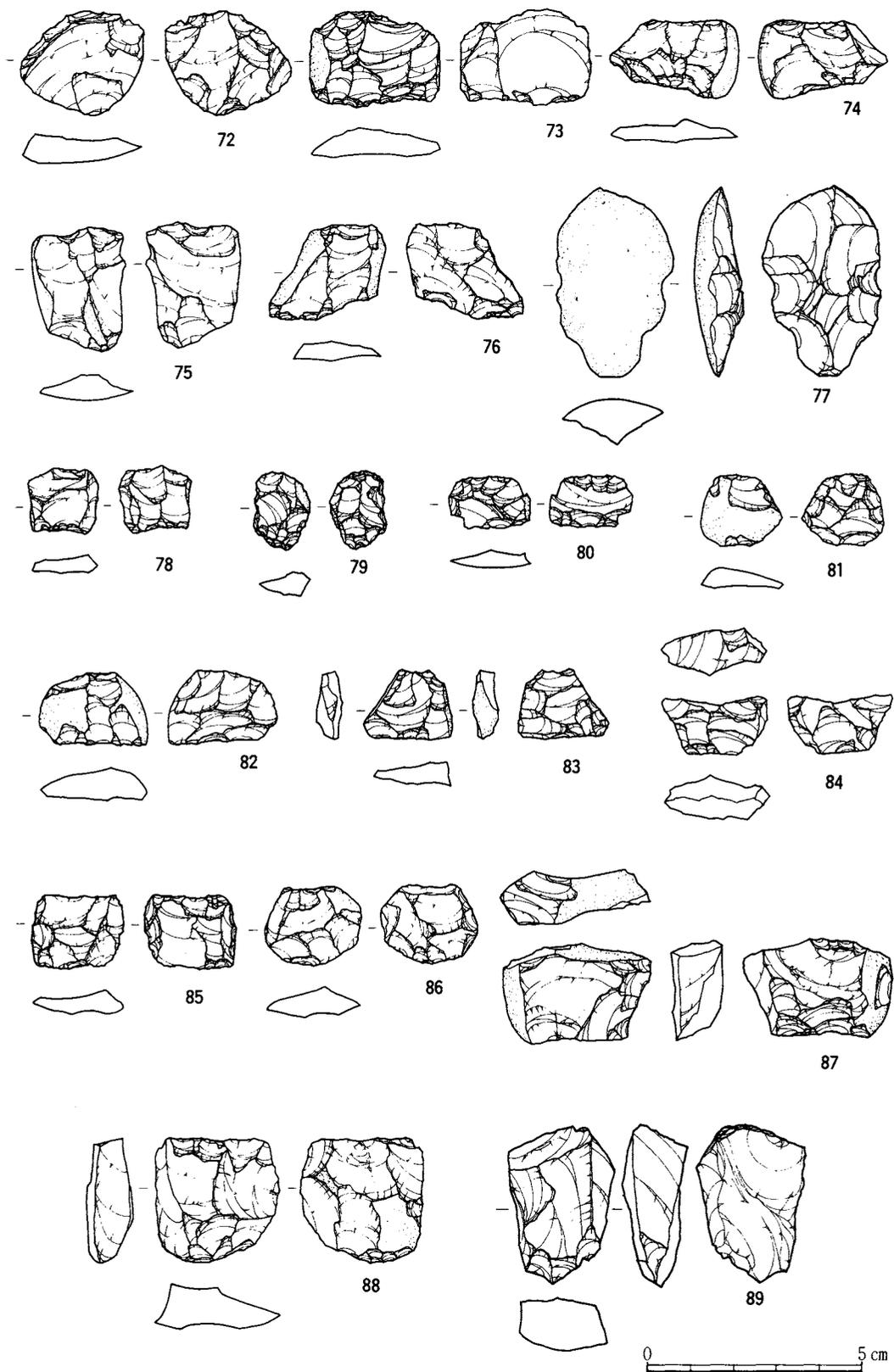
第217図 第1文化層第5ブロック出土石器(2)



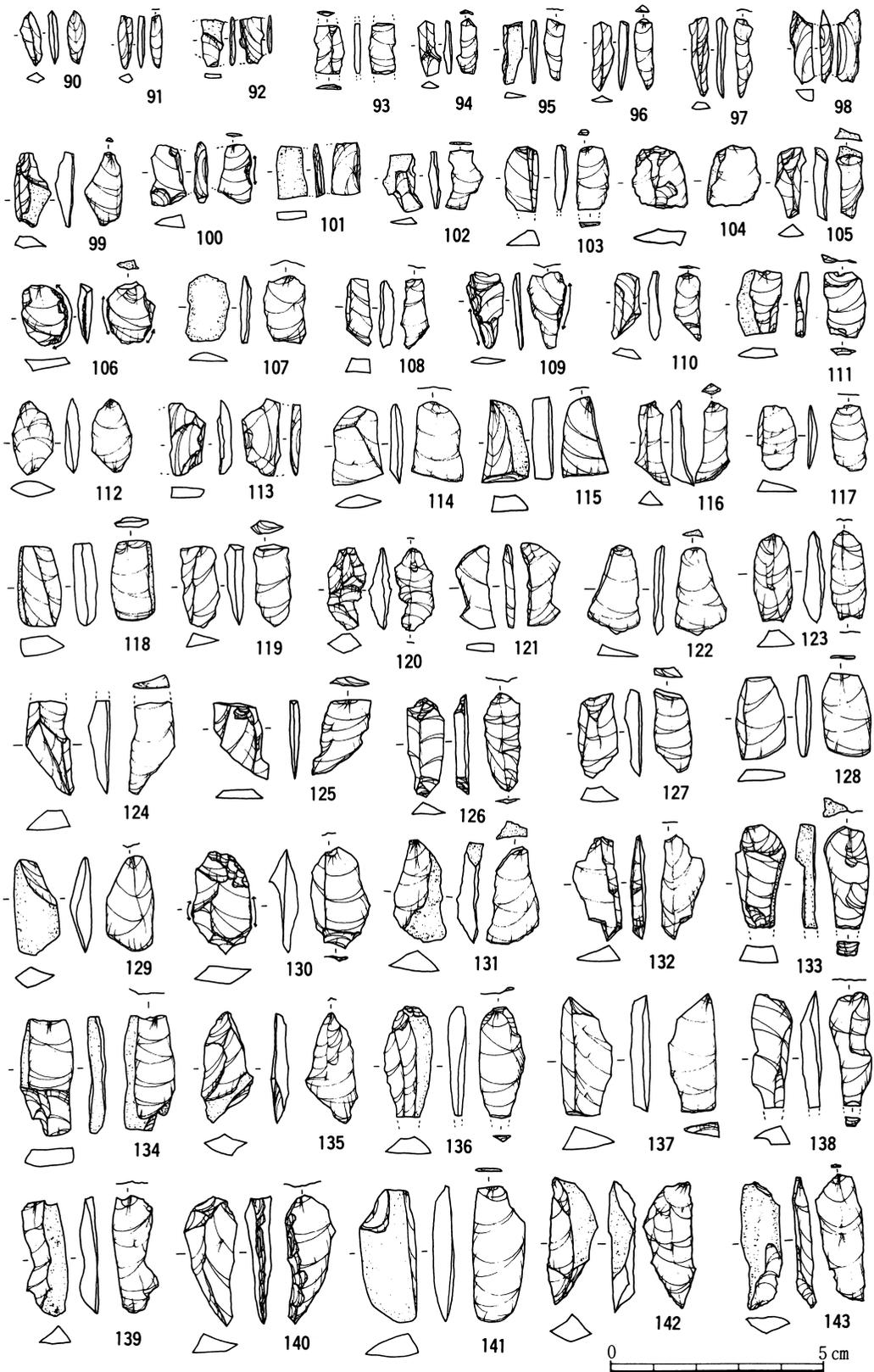
第218図 第1文化層第5ブロック出土石器(3)



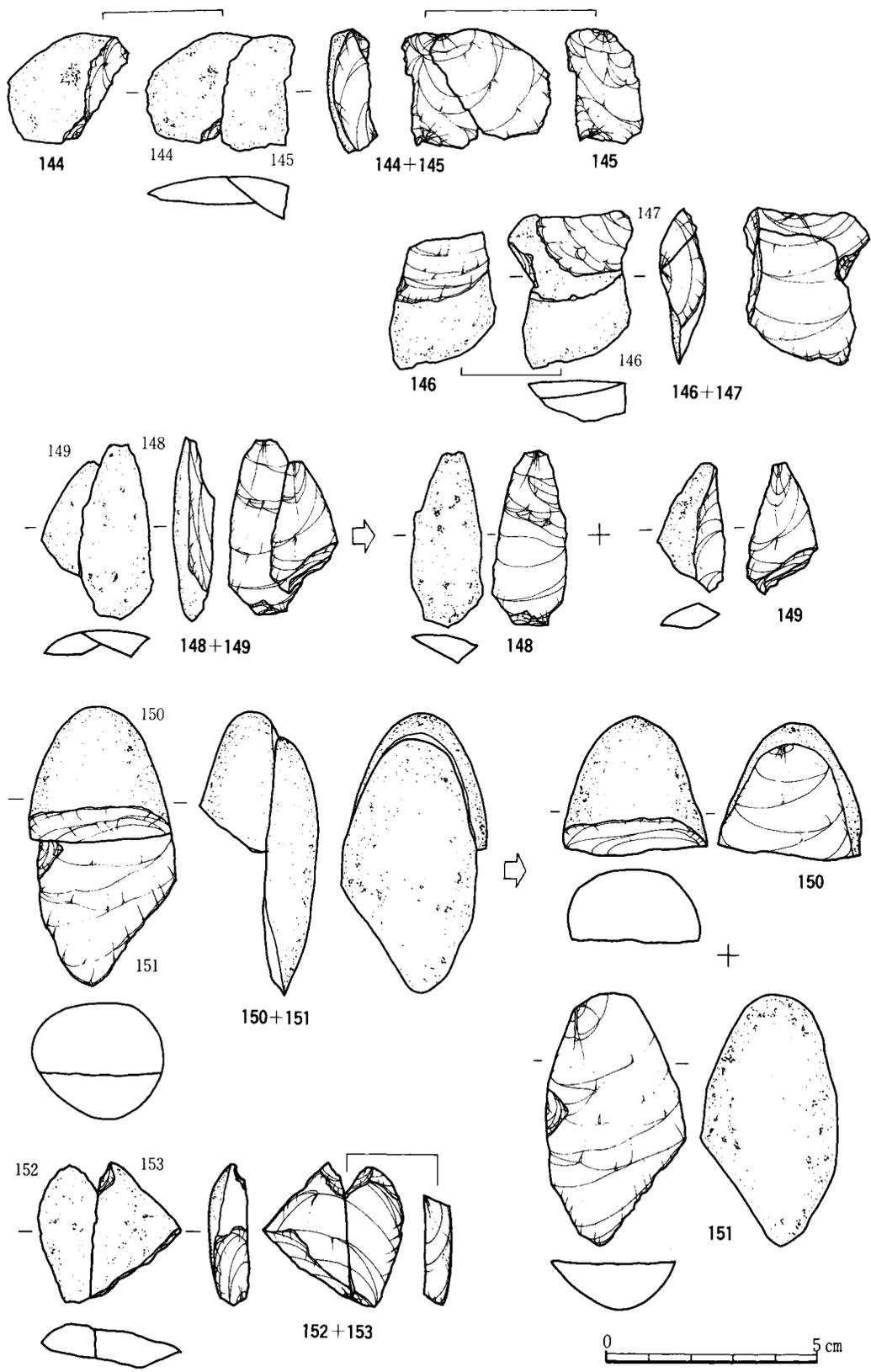
第219図 第1文化層第5ブロック出土石器(4)



第220図 第1文化層第5ブロック出土石器(5)



第221図 第1文化層第5ブロック出土石器(6)



第222図 第1文化層第5ブロック出土石器(7)

145, 148+149, 152+153は両極剝離によって剝離された資料である。150+151は敲石として機能している時に分割された資料であろう。

c. 小結

楔形石器が85点出土しており、形態的にみてまとまりがある。楔形石器II類のなかに細長い

第26表 第5ブロック(第1文化層)石器属性表

図版 番号	器 種	石 材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号	図版 番号	器 種	石 材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号
1	敲石	安山岩	22.0×18.2×4.4	1.5	0017	61	楔形石器II類	凝灰岩	21.5×10.8×6.1	1.8	1618
2	石核	チャート	33.0×30.2×21.0	32.1	1534	62	"	"	22.1×10.3×10.2	1.1	1218
3	"	"	37.5×35.5×15.4	28.8	1225	63	"	チャート	23.7×10.3×6.3	1.5	0052
4	"	"	46.0×30.9×16.8	20.4	1625	64	"	凝灰岩	22.0×18.2×6.0	2.8	2017
5	"	安山岩	43.6×41.4×33.2	89.4	1030	65	"	チャート	29.5×19.2×6.2	5.2	1107
6	楔形石器I類	凝灰質安山岩	8.0×7.0×6.0	0.6	1501	66	"	凝灰岩	22.6×19.3×9.8	3.8	1525
7	"	砂岩	14.7×6.1×5.1	1.4	1503	67	"	チャート	23.5×17.4×7.4	3.1	2022
8	"	凝灰質安山岩	16.2×11.4×4.5	1.0	2543	68	"	"	23.2×23.2×5.6	2.8	3098
9	"	安山岩	17.5×17.4×6.1	2.0	2929	69	"	凝灰岩	22.8×21.5×7.4	3.7	0036
10	"	頁岩	16.5×8.3×2.7	0.4	3097	70	"	チャート	23.7×16.8×7.5	3.6	1188
11	"	"	20.7×11.7×6.1	1.9	2671	71	"	安山岩	26.4×20.5×8.0	4.8	2138
12	"	安山岩	17.8×16.3×8.8	3.2	0425	72	"	凝灰岩	31.1×25.2×7.0	5.0	2403
13	"	チャート	19.6×11.7×5.8	1.1	2051	73	"	安山岩	30.6×22.9×6.6	5.0	0690
14	"	安山岩	19.0×13.4×5.3	1.5	2418	74	"	凝灰岩	29.8×18.6×5.4	2.6	2944
15	"	チャート	19.9×12.6×9.4	1.8	2794	75	"	"	28.5×22.1×7.3	4.5	1999
16	"	"	20.3×16.2×9.4	3.0	1977	76	"	"	31.9×20.8×5.0	2.7	2972
17	"	"	18.4×9.4×7.0	1.6	0458	77	"	安山岩	43.8×28.1×11.2	11.3	0007
18	"	頁岩	20.7×16.7×7.8	3.4	2998	78	楔形石器III類	チャート	16.5×14.8×5.8	1.3	2519
19	"	安山岩	21.1×16.2×10.6	4.0	0754	79	"	"	18.1×14.0×6.0	1.4	0453
20	"	"	26.5×16.9×5.6	3.3	2064	80	"	"	18.9×12.1×5.3	1.3	0692
21	"	玉髓	23.1×15.6×12.9	4.8	3244	81	"	"	18.6×17.4×5.4	1.7	1967
22	"	チャート	28.7×28.6×12.6	8.4	2629	82	"	"	25.0×16.8×8.3	3.8	1976
23	"	"	24.8×20.0×7.4	2.9	1178	83	"	"	20.8×15.6×5.3	2.0	1145
24	"	安山岩	21.8×20.8×10.0	5.1	2917	84	"	凝灰岩	24.5×12.9×9.7	2.5	1192
25	"	チャート	23.0×14.4×13.3	5.0	2154	85	"	チャート	21.4×12.1×5.9	2.4	2918
26	"	"	27.5×22.7×11.2	8.1	2527	86	"	凝灰岩	23.2×19.3×8.7	3.3	2150
27	"	"	26.6×16.6×8.5	3.8	0446	87	"	チャート	35.2×22.7×12.1	10.8	0732
28	楔形石器調整剥片	"	26.8×11.4×7.2	1.5	1239	88	"	"	29.8×29.6×10.8	9.5	2420
29	楔形石器I類	"	29.1×20.8×19.0	135.0	0735	89	"	"	36.2×24.5×12.2	11.2	2405
30	"	"	32.3×20.8×13.6	12.5	1079	90	楔形石器調整剥片	凝灰岩	5.0×2.0×2.0	0.1	2342
31	楔形石器調整剥片	"	28.1×15.4×7.3	2.6	3238	91	"	"	8.0×3.0×2.0	0.1	3201
32	楔形石器I類	安山岩	32.4×25.4×10.5	6.2	0031	92	"	チャート	6.0×3.0×2.0	0.2	2354
33	"	砂岩	38.3×34.1×10.8	12.1	2113	93	"	凝灰質安山岩	8.0×3.0×2.0	0.3	1978
34	"	"	30.8×18.8×5.0	3.3	2189	94	"	チャート	9.0×3.0×2.0	0.3	2621
35	"	チャート	40.2×25.2×4.6	5.0	0659	95	"	安山岩	12.0×5.0×3.0	0.4	2012
36	"	凝灰岩	43.2×30.0×15.7	19.7	1511	96	"	凝灰質安山岩	13.0×4.0×2.0	0.3	2158
37	"	"	54.0×46.5×11.0	31.5	2050	97	"	安山岩	13.0×3.0×2.0	0.2	2802
38	楔形石器II類	"	13.4×10.5×7.0	1.1	1546	98	"	凝灰岩	14.0×6.0×3.0	0.4	2407
39	"	チャート	14.9×13.6×5.5	1.2	0014	99	"	凝灰質安山岩	8.0×5.0×3.0	0.4	3083
40	"	"	16.4×15.9×4.7	1.1	1612	100	"	チャート	9.0×6.0×3.0	0.4	2379
41	"	"	14.0×8.0×4.0	0.6	2994	101	碎片	凝灰岩	12.4×6.9×3.2	0.3	2061
42	"	"	16.6×15.8×7.0	2.0	1061	102	楔形石器調整剥片	"	13.0×8.0×3.0	0.4	2104
43	"	"	17.0×10.5×5.9	1.2	2911	103	碎片	チャート	15.3×7.8×3.1	0.5	0731
44	"	"	17.2×15.8×1.1	1.1	2959	104	楔形石器調整剥片	"	15.2×12.8×3.6	0.7	2925
45	"	"	17.2×13.4×7.3	1.8	1588	105	"	"	14.0×5.0×3.0	0.4	1979
46	"	玉髓	17.4×10.4×8.6	1.6	2789	106	碎片	"	14.5×11.0×3.4	0.5	0710
47	"	メノウ	17.7×16.3×3.2	0.9	0438	107	"	凝灰岩	15.3×9.8×2.0	0.3	2108
48	"	チャート	17.8×14.2×7.2	2.0	3240	108	"	玉髓	15.8×6.5×4.0	0.5	0480
49	"	"	18.1×18.0×7.5	3.2	3262	109	楔形石器調整剥片	チャート	16.0×8.0×6.0	0.6	1965
50	"	安山岩	18.8×17.2×9.0	3.4	2966	110	"	"	16.0×5.0×4.0	0.3	1614
51	"	チャート	18.9×14.9×4.3	1.3	2634	111	"	頁岩	16.3×15.8×2.5	0.5	0718
52	"	"	19.6×16.3×4.3	1.3	1473	112	碎片	凝灰岩	16.6×9.6×2.8	0.5	0498
53	"	"	19.6×13.4×5.9	1.2	2059	113	"	"	17.1×9.0×3.2	0.6	1095
54	"	"	20.0×18.1×5.2	2.4	2450	114	"	凝灰質安山岩	18.4×12.2×2.8	0.6	1214
55	"	"	20.0×8.4×7.2	2.1	1074	115	剥片	凝灰岩	18.6×11.9×4.4	1.1	3113
56	"	"	20.4×11.3×7.8	1.9	3107	116	碎片	チャート	18.8×8.7×3.1	0.3	0467
57	"	"	20.9×13.9×6.0	1.6	0933	117	"	"	18.8×15.2×2.7	0.4	1202
58	"	"	21.2×13.4×7.6	2.7	2137	118	楔形石器調整剥片	凝灰質安山岩	18.9×10.3×5.3	1.2	1526
59	"	凝灰岩	21.3×11.1×4.8	1.6	1120	119	剥片	安山岩	19.0×8.8×4.6	0.7	2557
60	"	チャート	21.4×13.3×7.6	1.7	1116	120	楔形石器調整剥片	チャート	19.1×9.3×5.4	0.7	0451

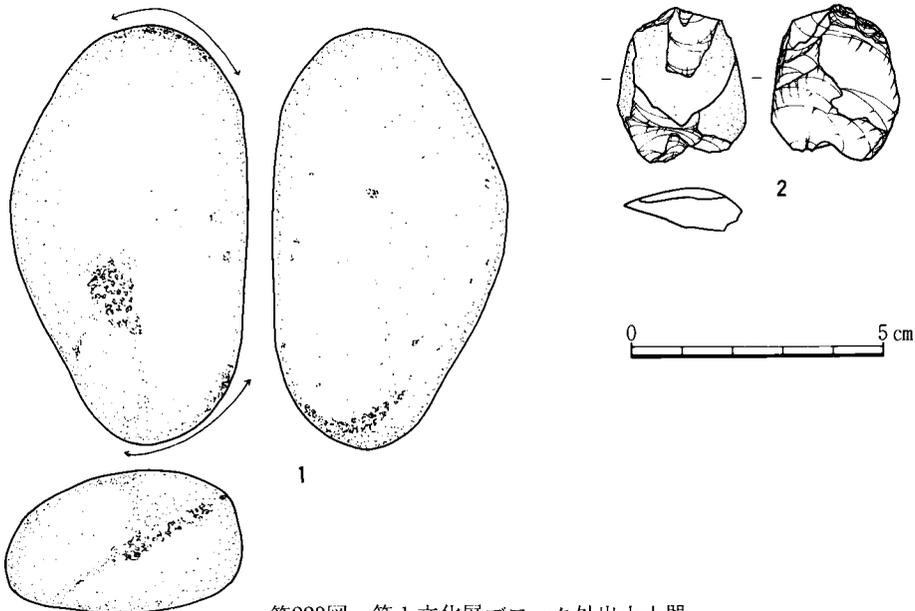
図版番号	器種	石材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号	図版番号	器種	石材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号
121	砕片	凝灰岩	19.3×8.4×4.5	0.4	0482	138	剥片	凝灰岩	26.7×9.9×6.7	1.3	2821
122	"	"	20.2×12.3×2.3	0.4	1160	139	楔形石器調整剥片	チャート	27.2×10.1×4.4	1.0	2345
123	"	"	20.8×9.0×5.7	1.1	1993	140	砕片	"	30.2×13.2×4.2	2.8	2565
124	剥片	"	21.0×10.6×4.8	0.9	1191	141	剥片	凝灰質安山岩	31.0×13.6×5.4	2.3	1177
125	砕片	砂岩	21.2×10.8×2.2	0.3	2814	142	砕片	チャート	29.5×12.4×7.9	2.2	0504
126	楔形石器調整剥片	チャート	22.0×9.0×4.3	0.7	2533	143	楔形石器調整剥片	"	29.2×16.4×4.3	1.3	0427
127	"	凝灰岩	18.6×9.2×3.8	0.8	2370	144	剥片	"	28.6×27.5×9.4	6.5	1966
128	剥片	"	19.5×11.4×3.2	0.7	2788	145	"	"	27.2×18.5×8.8	5.2	3248
129	"	凝灰質安山岩	22.4×11.0×4.1	0.9	3249	146	楔形石器調整剥片	玉髓	38.7×26.8×9.1	7.4	2551
130	楔形石器調整剥片	チャート	23.4×14.3×6.3	1.2	0696	147	"	"	30.5×20.7×6.7	4.2	2572
131	剥片	安山岩	23.6×12.3×5.6	1.4	2078	148	"	チャート	40.6×19.4×8.1	5.7	2775
132	"	凝灰岩	23.6×10.4×3.8	0.7	1558	149	"	"	30.7×15.6×7.8	2.8	3210
133	楔形石器調整剥片	チャート	23.8×11.4×5.4	1.4	3235	150	"	安山岩	33.0×29.4×19.0	22.5	0915
134	"	凝灰岩	26.2×11.2×4.1	1.4	1066	151	"	"	57.9×33.0×12.2	23.0	1744
135	砕片	安山岩	25.3×12.6×4.0	0.9	0738	152	"	玉髓	31.5×15.1×7.0	4.1	0925
136	剥片	"	25.5×11.3×4.4	1.1	0744	153	"	チャート	28.1×21.3×9.3	6.1	1155
137	"	"	27.3×11.9×5.4	1.8	1592						

直方体のものがまとまって出土している。楔形石器Ⅲ類は隅丸方形の平面形状を呈し、側面からの両極剥離痕は微細なものが多い。細長の形状をした碎片・楔形石器調整剥片・剥片が多数出土しているが、出土点数のわりには、微細剥離痕や折れ面を有するものが少ないという特徴がある。

(9) ブロック外出土の石器 (第223図, 図版93)

石器の出土層位はⅥ層からⅦ層の中部にかけて出土している。ブロック外からは楔形石器Ⅰ類1点, 敲石1点, 剥片3点, 碎片3点, 楔形石器調整剥片9点, 礫1点が出土している。

1は敲石である上下両端に敲打痕がある。2は楔形石器Ⅰ類である。円礫を素材にしたものと思われる。



第223図 第1文化層ブロック外出土石器

第27表 ブロック外（第1文化層）石器組成表

器種	石 材		凝灰質 安山岩	玉 髓	硬砂岩	砂 岩	合 計
	チャート	凝灰岩					
楔形石器 I 類	1	0	0	1	0	0	2
敲 石	1	0	0	0	0	0	1
剥 片	3	0	0	0	0	0	3
碎 片	1	0	1	0	1	0	3
楔形石器調整剥片	6	1	1	0	0	1	9
礫	1	0	0	0	0	0	1
合 計	13	1	2	1	1	1	19

第28表 ブロック外（第1文化層）石器属性表

図版 番号	器 種	石 材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号	図版 番号	器 種	石 材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号	
1	敲	石	チャート	81.3×47.3×27.5	138.8	2 8 4 4	2	楔形石器 I 類	チャート	31.5×24.8×13.0	7.5	2 2 1 2

3. 第2文化層

(1) 概要

第2文化層は、石器の集中箇所が、調査区の中央部で地形的には平坦な場所から1箇所（第6ブロック）検出され、総計15点の石器が出土した。IV層下部に生活面をもつ石器群であると思われる。

(2) 第6ブロック

a. 分布状況（第224図、図版90）

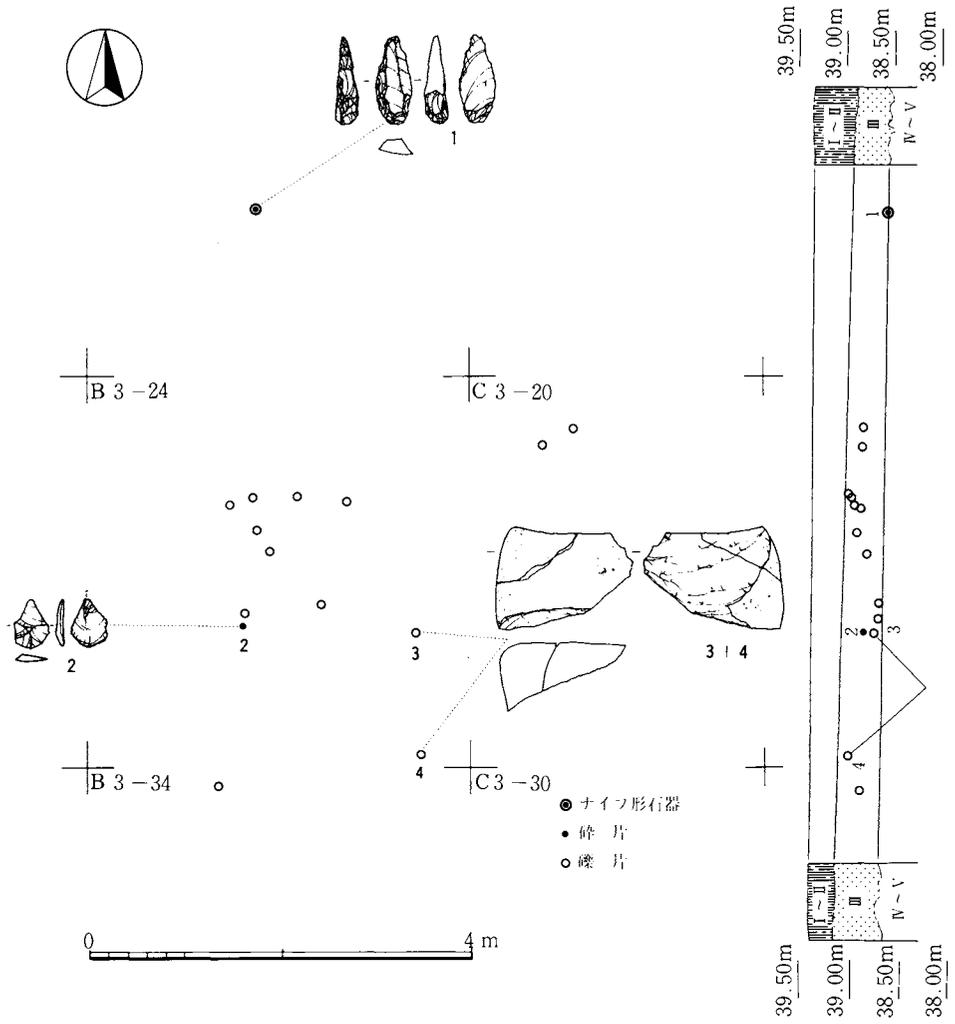
石器の出土層位は、ソフトローム（III層）下部からハードローム（IV～V層）の上部にかけて出土している。平面分布は、4.6m×6.4mの範囲から15点出土した。礫片が13点出土しており、礫群としてとらえられよう。

b. 出土石器（第225図、図版97）

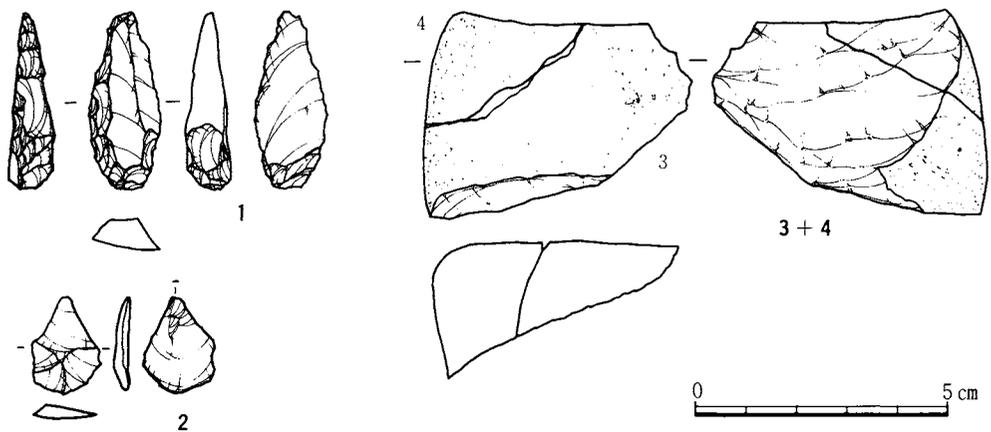
検出された石器の総数は15点である。器種組成は、ナイフ形石器1点、碎片1点、礫片13点である。大半が礫片で占められている。礫片は全て赤化しており、火熱を受けた礫と思われる。石材は、礫片がチャートと石英ハン岩で構成される。1はナイフ形石器である。やや厚めの縦長剥片を素材として、急角度で粗い調整加工を一側縁と基部に施している。基部の調整加工は打瘤を除去するかたちで腹面にも及んでいる。2は碎片である。点状の打面をもつ。3+4は礫片の接合資料である。

第29表 第6ブロック（第2文化層）石器組成表

器 種	石 材		石 英 ハン岩	合 計
	チャート	頁 岩		
ナイフ形石器	1	0	0	1
碎 片	0	1	0	1
礫 片	6	0	7	13
合 計	7	1	7	15



第224図 第6ブロック(第2文化層)器種別分布図



第225図 第2文化層第6ブロック出土石器

第30表 第6ブロック（第2文化層）石器属性表

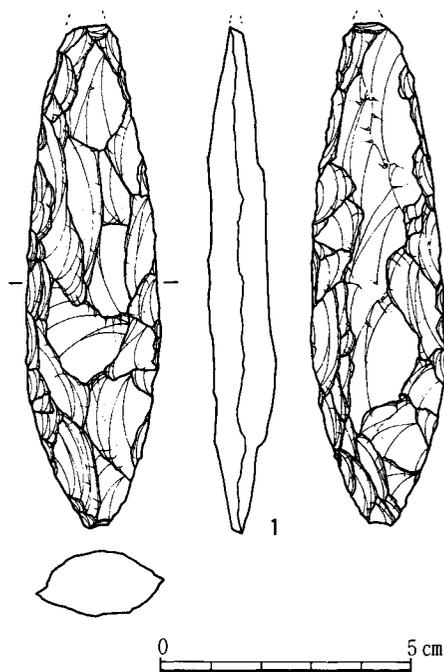
図版 番号	器 種	石 材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号	図版 番号	器 種	石 材	長×幅×厚 (mm)	重量 (g)	登録番号	
1	ナイフ形石器	チャート	34.2×14.2×8.6	4.1	B3-0009	3	礫	片	石英ハン岩	59.8×46.7×33.6	70.1	B3-0014
2	砕 片	チャート	18.6×14.4×2.8	0.5	B3-0002	4	//	//	//	32.9×22.4×17.8	16.9	B3-0015

c. 小結

第2文化層の石器群は、出土点数が少ないものの、礫群とナイフ形石器が伴っていることと出土層位がハードロームの上部に及んでいることから、IV層下部に生活面をもつ石器群であると思われる。

4. 表採資料（第226図、図版97）

1は槍先形尖頭器である。ふ厚い大形の剝片を素材として、両面からやや粗い調整加工を施している。先端部は折れている。安山岩製で、長さ97.7mm、幅26.2mm、厚さ12.8mm、重量36.9gである。



第226図 表採資料

出口遺跡・毛内遺跡における土壌試料鉱物分析

川崎地質株式会社

1 試料

試料は、出口遺跡B3-00グリッドの深掘区と毛内遺跡の2地点で採取された火山灰試料である。土層図とサンプル箇所は第227図に示しておいた。

2 分析方法

試料は30から50gを採取し、超音波洗浄器で分散後、粗粒物と細粒物（コロイド）は除去した。プレパラートは封入剤としてレークサイドセメントのn-ブチルアルコール溶液を使用し、全鉱物・軽鉱物・重鉱物のプレパラートをそれぞれ作成した。

3 分析結果

鉍物組織を示すブロックダイアグラムは第227図の通りである。以下、出口遺跡の土壌サンプルの特徴を簡単に述べる。

Ⅲ層：重鉍物・軽鉍物はほぼ半数ずつ含まれ、火山ガラスが全体の約30%を占める。重鉍物は斜方輝石と不透明鉍物が多い。ガラスの屈折率は1.499-1.501である。

Ⅳ～Ⅴ層：重鉍物が全体の34%を占め、火山ガラスが多く半数近くを占める。重鉍物は斜方輝石・不透明鉍物が多い。ガラスの屈折率は1.499-1.501である。

Ⅵ層：火山ガラスが非常に多く、重鉍物は斜方輝石・単斜輝石が多い。火山ガラスの屈折率は1.498-1.500である。

Ⅶ（上）層：重鉍物・軽鉍物がほぼ半数ずつ含まれ、火山ガラスの全体の約30%を占める。重鉍物は斜方輝石・かんらん石が多い。ガラスの屈折率は1.499-1.500である。

Ⅶ（下）層：重鉍物が多く、火山ガラスは全体の約10%を占める。重鉍物は斜方輝石・かんらん石が多い。ガラスの屈折率は1.498-1.500である。

Ⅷ層：重鉍物・石英が多く、火山ガラスは少ない。重鉍物は、かんらん石・斜方輝石が多い。ガラスの屈折率は1.499-1.500である。

Ⅸ層：重鉍物・石英が多く、火山ガラスは少ない。斜方輝石・不透明鉍物が多く、ガラスの屈折率は1.500である。

4 考察

本地域は全体に鉍物組成では火山ガラス・重鉍物が多く、出口遺跡では下部にやや石英・長石が多く、Ⅵ層より上位で、火山ガラスが急激な増加を示す。毛内遺跡においても、同様にⅥ層より上位で、火山ガラスが多い。

重鉍物組成では、斜方輝石・かんらん石が多く含まれ、Ⅵ層を境にして、その上位で斜方輝石が多く、その下位でかんらん石が多い。全体に不透明鉍物は上位へ増加する傾向を示す。

火山ガラスの屈折率はいずれもほぼ同様の値を示し、1.498-1.500であり、ガラスの形状も平板状のことが多い。

(1) 分析結果の関東ローム層における位置づけ

分析結果から、重鉍物組成において、かんらん石・斜方輝石（シソ輝石）の多いこと、石英・長石の量が少なく、出口遺跡・毛内遺跡においてもいずれもⅥ層を境にして火山ガラスの多いことなどから、両遺跡の分析試料の採取層準は、ともに立川ローム層である。

(2) 出口遺跡・毛内遺跡の対比

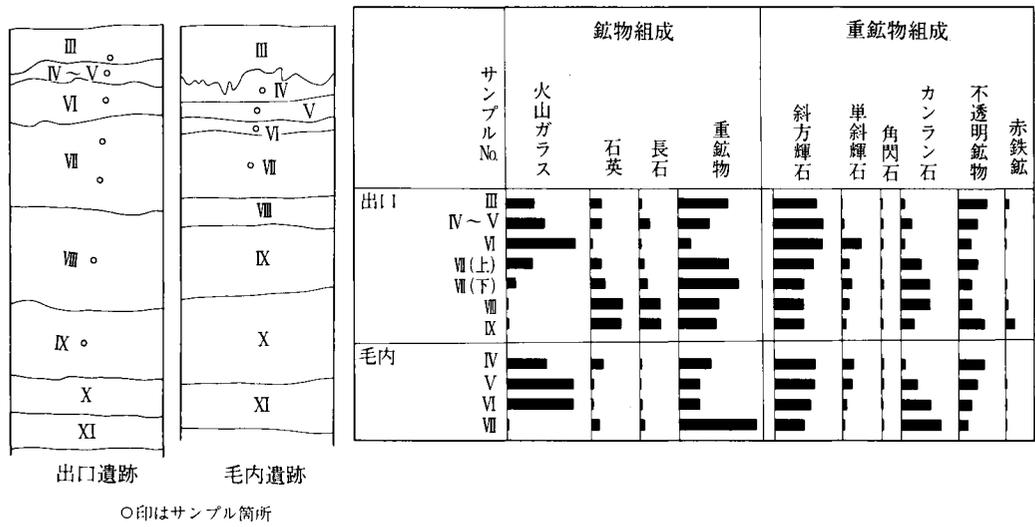
第227図の鉍物組成を示すダイアグラムからもわかるように、出口遺跡Ⅵ層・毛内遺跡Ⅵ層を境にしてその鉍物組成が大きく変化している。Ⅵ層より下位では、重鉍物が多く、そのうち、かんらん石が多い。一方、Ⅵ層以上では、火山ガラス・斜方輝石が多い傾向がみ

られる。しかも、出口遺跡VI層・毛内遺跡VI層はいずれも、鉱物組成・火山ガラスの屈折率においてきわめて類似している。このようなことから、出口遺跡VI層・毛内遺跡VI層は同一の火山灰層であると考えられ、このVI層をもって両遺跡を上位層・下位層として対比できる。

(3) 両遺跡のVI層について

両遺跡におけるVI層では鉱物組成において斜方輝石が卓越しており、立川ローム層の一般的鉱物組成とは異なっている。

VI層はその鉱物組成において、斜方輝石・単斜輝石が多く、安山岩質である。立川ローム層形成時における日本の広域テフラで安山岩質な鉱物組成のもつものとして始良 Tn 火山灰があり、西南日本各地でその報告がなされている有効な示標テフラである。そして、このVI層は重鉱物において、始良 Tn 火山灰と類似し、火山ガラス屈折率が1.498-1.500、その形状が平板状で始良 Tn 火山灰と一致している。したがって、このVI層は始良 Tn 火山灰 (2.1-2.2万年前) に対比される可能性が極めて強いといえる。



第227図 鉱物組成を示すブロックダイヤグラム

第2節 その他の遺構

旧石器以外の遺構はほとんどなく、溝状遺構が検出されたのみである。幅1~2mと比較的広く掘り込まれており、状態としては良好であるが、伴出する遺物がなく性格・時期等は不明である。

トータルステーションを用いた整理過程

佐原市出口遺跡の旧石器時代第1文化層の整理において、トータルステーションを用いた。その整理過程は、第228図のトータルステーションを用いた整理過程に図示しておいた。

出口遺跡旧石器時代第1文化層では、約20m×20mの範囲に、3,182点の石器が検出され、5か所のブロックから石器がかなり密集して検出された。また、発掘調査時の石器の取り上げ方法において、第1文化層から検出された石器に通し番号をつけるものであった。つまり、遺物番号が0001から3262までのもの（欠番を含む）であった。そのようなことから、平面分布図及び垂直分布図等を作成するにあたりきわめて作業効率の悪い状況であった。そこで、コンピューターを用いたシステムであるトータルステーションを用いて、整理作業の効率化をはかった。第228図はその作業の流れである。以下それを(1)～(3)の作業過程に分けて段階別に説明する。

(1) 現場作業からXYZ座標（3次元座標）ファイル作成までの過程

出口遺跡の場合、現場での遺物取り上げ作業は、平板を用いて平面図を作成し、遺物台帳に標高を記録するものであった。

① 平板で作成した平面図をもとにして、デジタイタイザー（MUTOH drafter cx3000を使用した）を用いてXY座標（平面座標）及び遺物番号を入力した。[この作業は、調査補助員が1日に入力できる遺物点数は約1,000点である。]

② 遺物台帳に記録してあるZ座標（標高）を手入力した。[この作業も、調査補助員が1日に入力できる遺物点数は約1,000点ある。]

①②の作業によってXYZ座標（3次元座標）ファイルが作成される。

なお、(1)の作業過程において、現場作業の段階で、光波測距儀を用いてXYZ座標（3次元座標）ファイルを作成することも可能である。

(2) データベースを用いたデータ処理過程

データベース（R：BASE PRO VERSION:2.12を使用した）を用いて①属性入力 ②データ検索・編集 ③属性表・組成表の作成を行った。

① 属性入力作業においては、遺物番号・XYZ座標・器種・長さ・幅・厚さ・重量・石材・ブロック・接合関係・図版番号・仮図版番号の各属性を入力した。遺物番号・XYZ座標の属性入力は(1)の作業過程でファイルが作成されているので、データベースにファイルを転送するだけである。

② データ検索・編集作業においては、遺物出土状況からXYZ座標（3次元座標）をもとにして各遺物を各ブロックに振り分けたり、各属性の組成や平均値を見たりした。

③ 属性表・組成表の作成作業においては、石器組成・TOOL台帳・器種別組成表・石材別組成表・長幅厚分布図ファイル等の作成を行った。

これらの①②③の作業を行い、データベースによって属性に応じた図面を作成するため

のファイル(DXFファイル:AutoCad ADE-3EX 対応の図面変換ファイル)を作成した。

(3) CAD (図面化ソフト) を用いた図面化作業過程

CAD (AutoCad ADE-3EX を使用した) を用いて①属性別図面作成 ②図面の複合化
③図面の拡大・縮尺を行った。

① データベースによって作成された属性に応じた図面化作成のためのDXFファイルによって各属性別に図面を作成した。

図面作成できるものは、基本的に属性は幾通りも組み合わせることができ、遺物ドットのマークの種類・大きさも自由に変換したり、遺物番号を出力したり、出力しないこともできる。具体的には、ブロックごとに器種別・石材別に平面図・垂直分布図を作成したり、接合関係にあるものだけの遺物ドットを出力したり、遺物図版に掲載した遺物のドット及び図版番号を出力したり、第229図の器種別長・幅・厚分布図等を作成した。

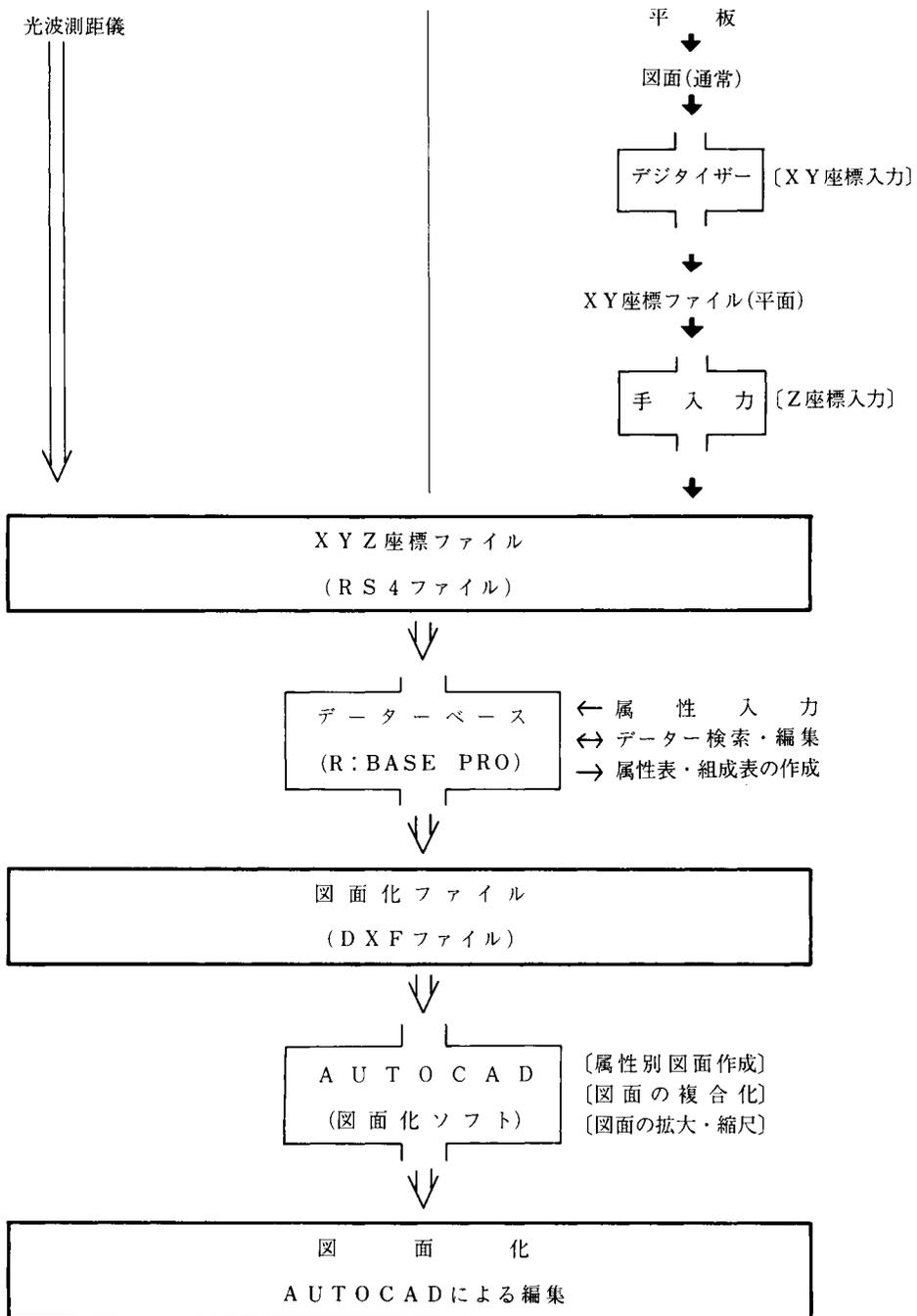
② ①で作成した図面をいくつかの画層に分けて選択して図面を重ね合わせる作業を行った。これらは、ちょうどトレシング・ペーパーを何枚も重ねて描く作業に似ている。

③ 作成された図面を画面上あるいは用紙に出力する時に、縮尺を自由に選択して出力することができる。なお、セラミックペンを使用してトレシング・ペーパーに出力するとそのまま図版に使用することもできる。第191, 229図の図版はその実践例である。ただし、器種別・石材別分布図は遺物ドットのマークが粗くなるため、出力したものを原図にして、インレタを貼った。この作業は、インレタを機械的に貼る作業であり、通常の分布図作成作業に比べてはるかに作業効率の良いものであった。

このように(1)(2)(3)の作業過程によるものがトータルステーションを用いた整理過程である。

最後に、若干の課題と問題点を指摘しておく。コンピューターを用いたこのようなトータルステーションを用いた整理過程は、明確な使用目的を持って計画的に使用しない限りはただの計算機あるいはお絵描き機に終わってしまい、労力と時間の浪費になることは目に見えている。今回、現場作業で作成された図面をもとにしてトータルステーションを用いて報告書作成までの作業を行ったが、当センターではトータルステーションという使いようによっては有効に使用できる機器が揃っているが、これらの機器を用いての報告書作成までの作業過程の実践的積み上げは、ほとんど行われていないのが現状である。出口遺跡では、旧石器の資料を用いて、その実践を行ったわけであるが、今後このような実践を一つのステップとしてコンピューターを用いた旧石器をはじめとするいろいろな資料の整理作業の積み重ねを行う必要があるだろう。その場合、明確な使用目的を持って計画的に行わなければならないことは言うまでもないことである。

トータルステーションを用いた整理の流れ



第228図 トータルステーションを用いた整理過程

終章 調査の成果

第1節 佐原市出口遺跡第1文化層出土の楔形石器について

佐原市出口遺跡からは2つの文化層が検出された。そのうち、第1文化層は、VII層（第2黒色帯）上部に生活面を持つ石器群で、楔形石器を主体とし、出土点数が3,182点と多量の石器が出土した。ここでは、出口遺跡第1文化層の特徴を整理して、出口遺跡と関連する石器群と比較検討する。次に、出口遺跡の石器群の位置付けと問題点を抽出し、下総台地のこの段階の石器群のあり方を考察することにする。

1. 佐原市出口遺跡第1文化層の特徴

(1) 石器組成

第1文化層の石器組成はきわめて単純な石器組成となっている。それは、楔形石器・敲石・石核・剥片・碎片・楔形石器調整剥片・礫で構成されており、2次加工の施されている石器は楔形石器以外まったく出土しておらず、楔形石器の生産・消費に関係する資料といえよう。出土点数3,182点のうち、楔形石器は181点（I類92点、II類70点、III類19点）で多量出土している。また、両極剥離の痕跡を残し、楔形石器から剥離されたと思われる楔形石器調整剥片が1,844点ときわめて多量に出土している。これに、おそらく両極剥離によると思われる碎片が567点出土しており、これを含めると、2,411点で全石器群の約8割を占める。

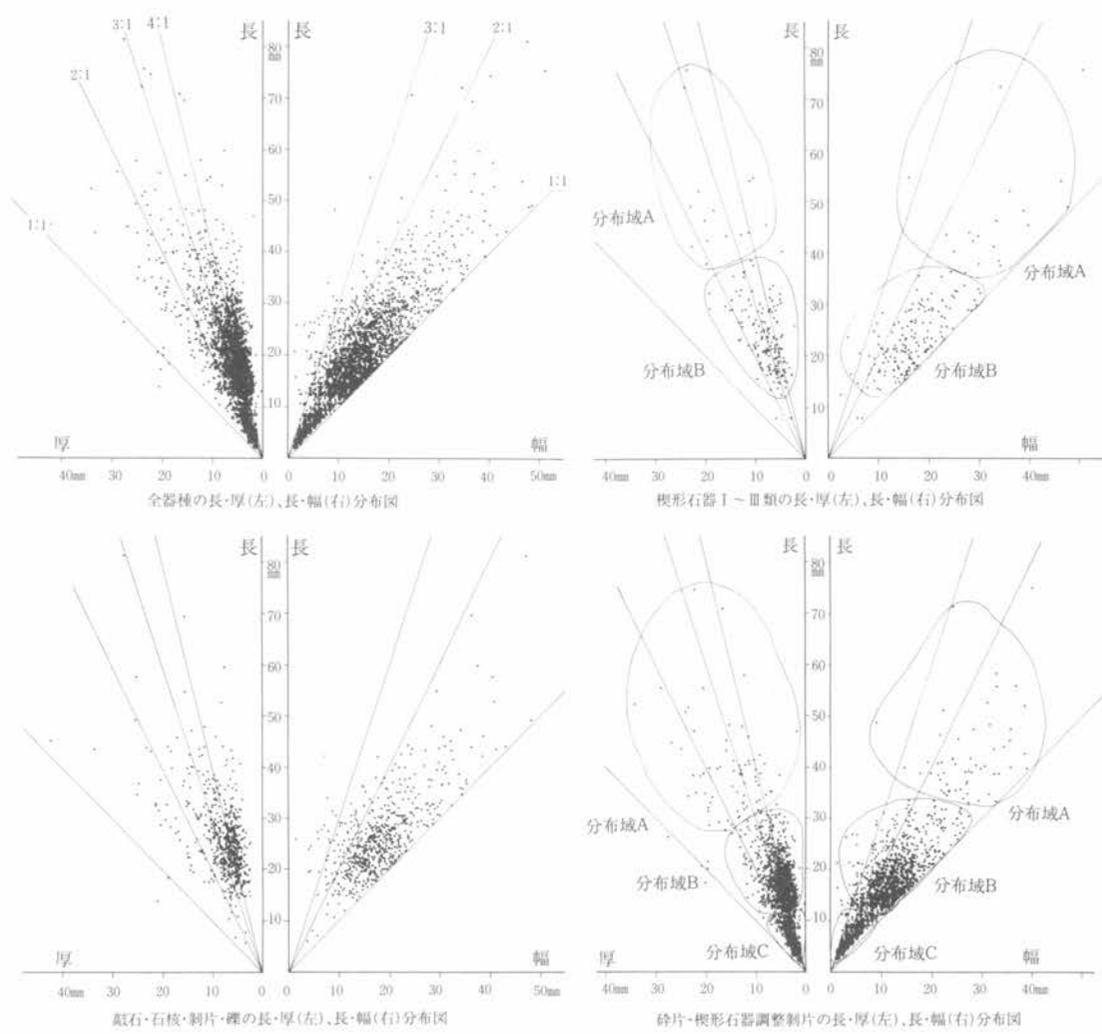
(2) 石器のサイズと形態（第229・230図）

石器のサイズは器種別長・幅・厚分布図（第229図）、器種別長・幅・厚平均値グラフ（第230図）からうかがわれる（長さを器体最大長とし、幅を器体最大長に直交する最大幅として測定した）。まず、石器群全体のサイズについては、全器種の長・幅・厚分布図から分かるように大きいものでも80mm程度の大きさでほとんどのものが2mm～40mmの大きさをもつもので占められ、また、長・幅・厚の平均は、それぞれ16.49mm・10.73mm・4.96mmであり、石器群全体のサイズがかなり小型であることが特色としてあげられる。

器種別に石器のサイズと形態をみていくと、楔形石器の長・幅・厚分布図から、分布範囲が2分されることが分かる。それは、長さ35mm以上・幅30mm以上・厚さ20mm以上の大型品（これを楔形石器分布域Aとする）と、長さ20mm～30mm・幅20mm前後・厚さ5mm～15mmの小型品（これを楔形石器分布域Bとする）とである。前者は後述する楔形石器製作過程A類（礫素材の楔形石器製作過程）の楔形石器I類に対応し、後者は楔形石器製作過程C類（剥片素材の小型角柱状の楔形石器製作過程）の小型角柱状の楔形石器II類に対応する。

この楔形石器の長・幅・厚の分布傾向に対応して碎片・楔形石器調整剥片の長・幅・厚分布

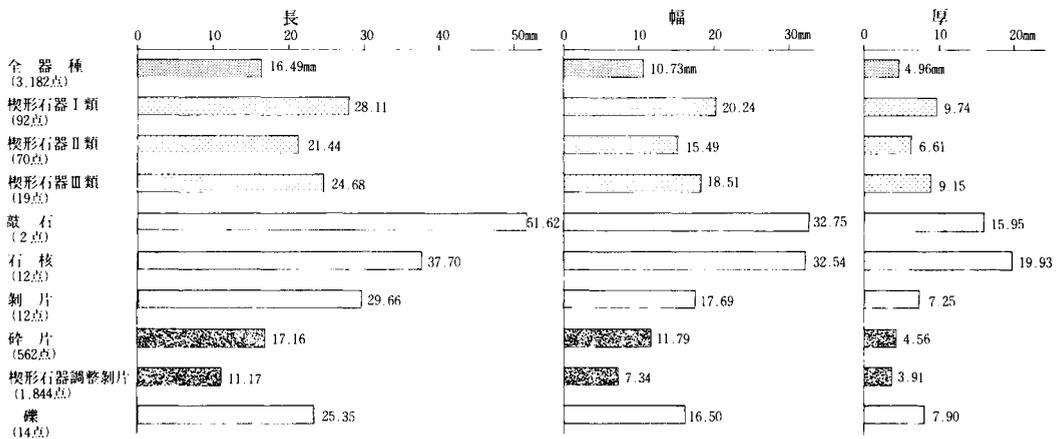
図の分布傾向は3分される。それは、長さ30mm以上・幅25mm以上・厚さ15mm以上の大型品（これを碎片・楔形石器調整剥片分布域Aとする）と、長さ15mm～25mm・幅15mm前後・厚さ5mm～10mmの小型品（これを碎片・楔形石器調整剥片分布域Bとする）と、長さ10mm以下・幅10mm以下・厚さ5mm以下の小型品（これを碎片・楔形石器調整剥片分布域Cとする）である。これを楔形石器の分布域と比較すると、楔形石器分布域Aと碎片・楔形石器調整剥片分布域Aとが対応し、楔形石器分布域Bと碎片・楔形石器調整剥片分布域Bとが対応する。それぞれ、楔形石器の分布域よりも碎片・楔形石器調整剥片分布域の方が5mm程度小さいことがうかがわれ、楔形石器分布域Aのものから剥離されたものが碎片・楔形石器調整剥片分布域Aのものであり、楔形石器分布域Bのものから剥離されたものが碎片・楔形石器調整剥片分布域Bのものであると推測される。碎片・楔形石器調整剥片分布域Cのものについては、楔形石器から剥離された微細な碎



第229図 第1文化層器種別長・幅・厚分布図

片と対応するものであろう。

敲石・石核・剥片・礫の長・幅・厚の傾向からうかがわれることは、礫の長・幅・厚の平均値が楔形石器Ⅰ類・Ⅲ類の長・幅・厚の平均値とほとんどかわらないことから楔形石器Ⅰ類・Ⅲ類が礫を素材として礫の形状をそれほど変えずに両極剥離を行ったことがうかがわれる。それに比べて、楔形石器Ⅱ類は礫の長・幅・厚の平均値よりもそれぞれ3mm程度小さいことから、礫の形状を大きく変えていることがうかがわれる。石核の長・幅・厚の平均値は楔形石器よりも10mm前後大きく、剥片よりも8mm前後大きいことから石核から剥離された剥片を素材として楔形石器があることがうかがわれよう。



第230図 第1文化層長・幅・厚平均値グラフ

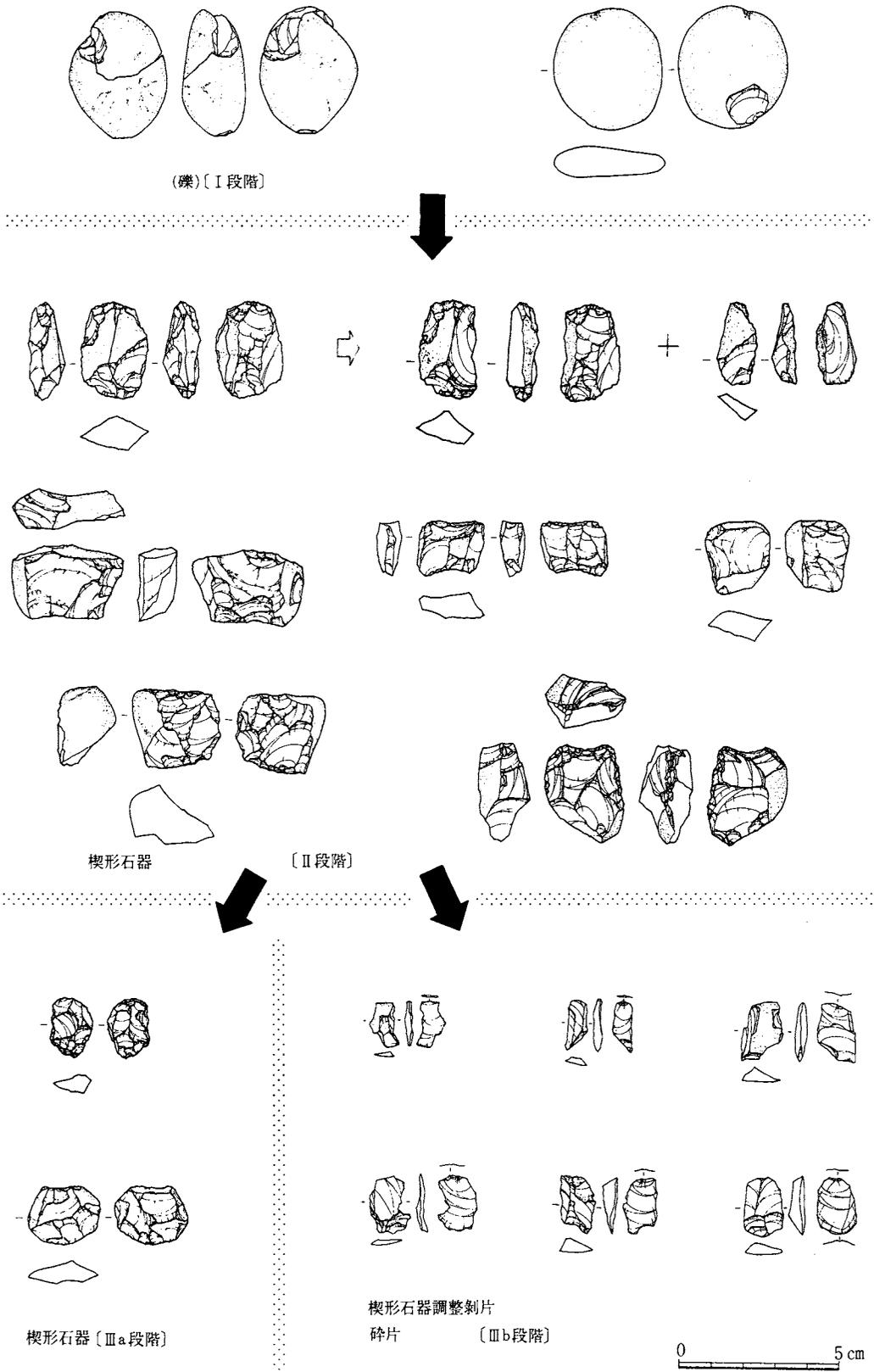
(3) 楔形石器の製作過程 (第231～233図)

佐原市出口遺跡における楔形石器の製作過程を、素材の選択・楔形石器の形態・楔形石器から剥離される剥片・碎片の形状によって次の三つに分類した。

楔形石器製作過程A類 円礫を素材として(I段階)、素材を大きく変えないで両極剥離を行い表裏に礫面を残す段階、この段階の楔形石器は楔形石器Ⅰ・Ⅲ類のものが多い(Ⅱ段階)、Ⅱ段階で剥離された剥片を素材として両極剥離を行う段階(Ⅲa段階)、Ⅱ段階で剥離された剥片をその後剥離しないもの(Ⅲb段階)。Ⅲb段階の剥片は不定形の形状のものが多い。

楔形石器製作過程B類 円礫を分割、あるいは、一般的剥離によって剥離された核片を素材として(I段階)、両極剥離を行うもので、素材面を残すものも多く、楔形石器Ⅰ・Ⅲ類のものを多く生産する(Ⅱ段階)。Ⅱ段階から剥離される剥片は幅広の形状のものが多い。これを素材として両極剥離を行う段階(Ⅲa類)、加工を施さないもの(Ⅲb段階)。

楔形石器製作過程C類 両極剥離によって剥離された剥片・楔形石器を素材として両極剥



第231図 楔形石器製作過程A類

離を行うもので、刃部2側辺からの剝離によって全面がおおわれ楔形石器Ⅱ類が形成される。そのうち、小型角柱状の形状を呈するものが主体を占める(I段階)。I段階から剝離された剝片の形状は、細長の形状を呈するものが多く、微細剝離痕が残されているものが多くみられ、これを目的的に剝離して使用した可能性があり、I段階の小型角柱状の楔形石器Ⅱ類を石核としてとらえることができるかも知れない。

(4) 細長の形状を呈する碎片・楔形石器調整剝片について

細長の形状を呈する碎片・楔形石器調整剝片・剝片は、機能として二通り考えられる。

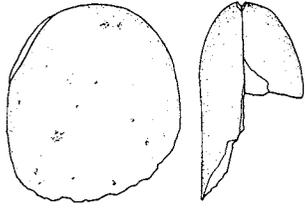
- ① 楔形石器を目的的石器、あるいは、使用によって形成された石器としてとらえ、細長の碎片・楔形石器調整剝片を二次的に出来た石屑としてとらえる考え方。
- ② 細長の碎片・楔形石器調整剝片を目的剝片とするもので、楔形石器を石核としてとらえる考え方。

以上の二つの考え方を、楔形石器製作過程A～C類の石器によって検討してみることにする。

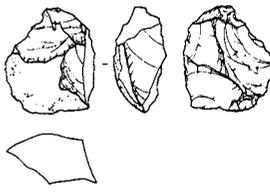
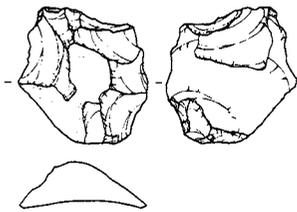
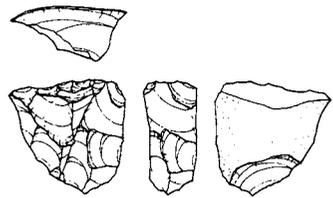
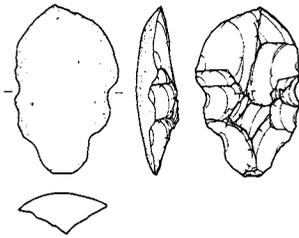
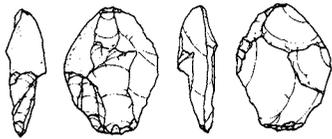
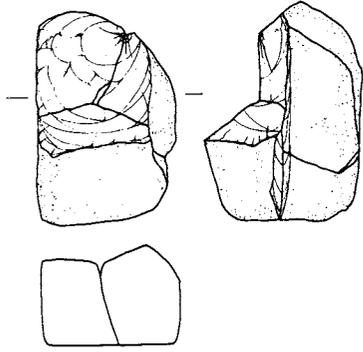
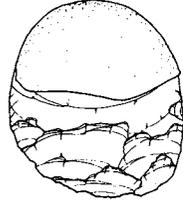
まず、楔形石器製作過程A・B類によって剝離された碎片・楔形石器調整剝片は、不定形で、幅広のものが多く微細剝離痕のあるものが少ない、また楔形石器の縁辺部は多数の微細剝離痕があるものが多い。このことから、楔形石器の微細剝離痕を使用によるものととらえ、楔形石器製作過程A・B類による石器は、①の機能が主体的にはたらいたと想定される。次に、楔形石器製作過程C類によって剝離された碎片・楔形石器調整剝片は形状が細長の形状を呈し、微細剝離痕があるものが多く、楔形石器は縁辺部に微細剝離痕が少ない。このことから、楔形石器製作過程C類による石器は、②の機能が主体的にはたらいたと想定される。しかしながら、この機能の対応関係は、明確に分かれるものではないことも付記しておく。

以上のように、出口遺跡から出土した細長の形状を呈する碎片・楔形石器調整剝片を目的剝片として想定したが、どのような機能が想定されるのであろうか。田村は佐倉市大林第41ブロックから佐原市出口遺跡と同様の楔形石器の生産・消費に関連する資料が多量に検出され、そこで貴重な考察をされている。それは、「楔形石器の生産は、楔形石器自体の生産過程であると同時に、小石刃とも言える細小剝片の組織的生産の過程でもある、という二重性によって規定されている。細小剝片の多くが、細石刃と同様の機能の荷担者であった可能性が高く、また、楔形石器自体が、単に楔としての機能的枠組みを離脱し、刃器や削器としての種々の機能を帯びていたのであろう」(田村 1989)という考察であった。

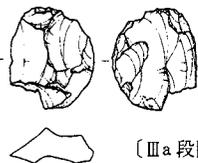
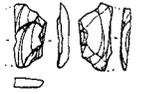
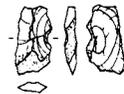
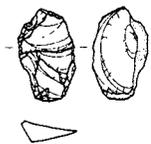
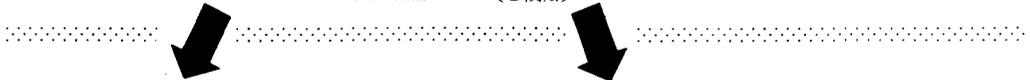
出口遺跡出土の細長の形状を呈する碎片・楔形石器調整剝片を実測図に掲示した115点を観察してみることにする。部位別にみると、完形100点、頭部折れ3点、末端部折れ11点、頭部・末端部折れ1点である。完形のもの占める割合が87%できわめて高いことが観察される。また、微細剝離痕のあるものは、全て片側縁に認められ9点あるが、きわめて少ない割合を示す(8%)。この結果を、細石器と比較してみると、出口遺跡出土の細長の形状を呈する碎片・楔形石



〔Ⅰ段階〕



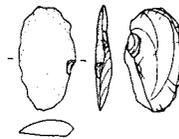
楔形石器 〔Ⅱ段階〕



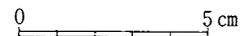
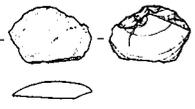
〔Ⅲa 段階〕
楔形石器



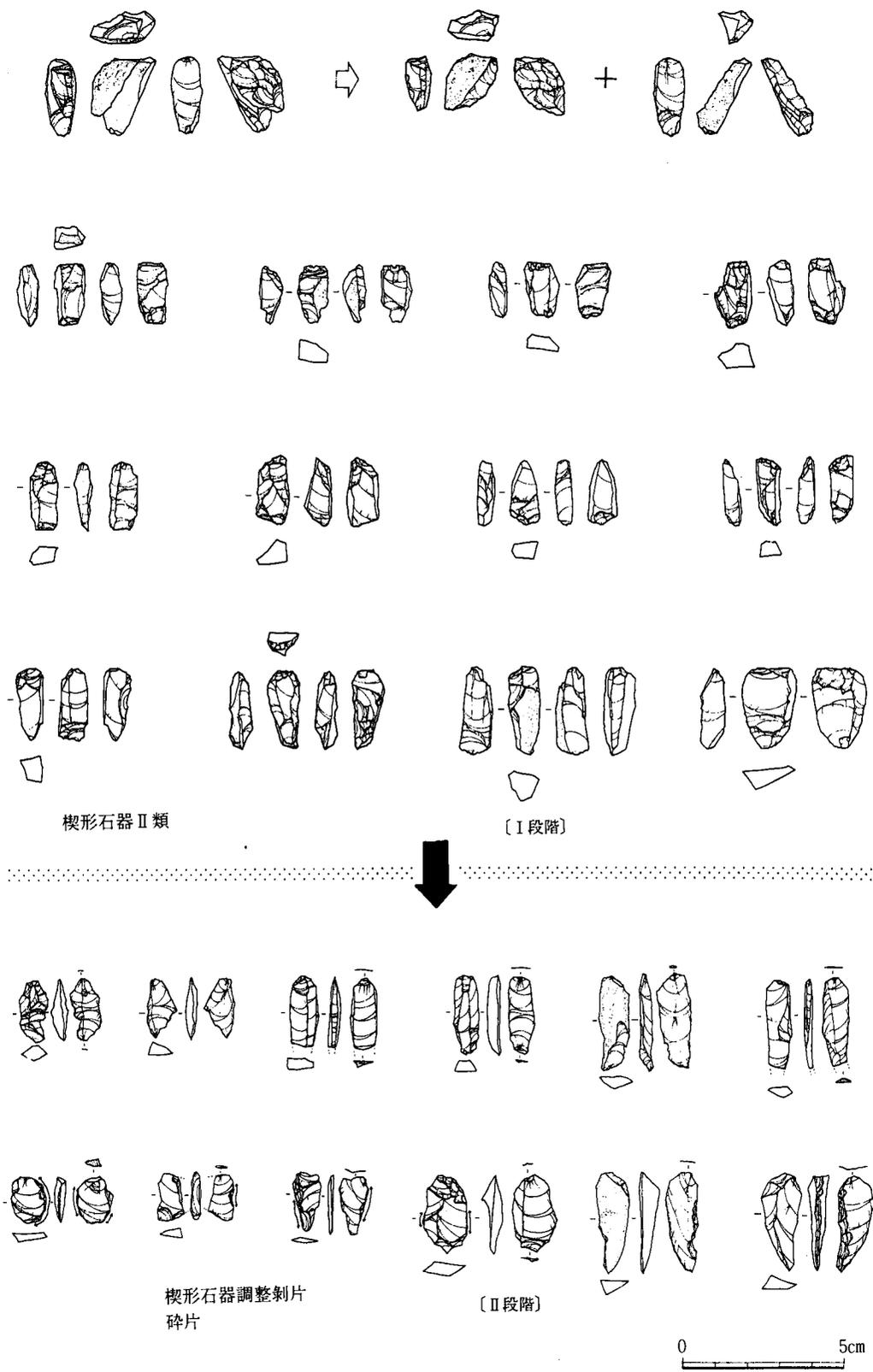
楔形石器調整剥片
碎片



〔Ⅲb 段階〕



第232圖 楔形石器製作過程B類



第233図 楔形石器製作過程C類

器調整剥片は完形品の割合が高く、微細剥離痕のあるものが少ないということが言える。しかしながら、微細剥離痕のあるものがあること・楔形石器製作過程C類によって細長の形状を呈する剥片が多量に生産されていることを加味すると細石刃のように細長の形状を呈する剥片を並列して植刃した可能性が高いと言えよう。

2. 佐原市出口遺跡と楔形石器・小型石刃を多産する石器群

(1) 楔形石器を多産する石器群の特徴

南関東地方において楔形石器を多産する石器群は、現在のところ下総台地の北部地方にしか検出されていない。しかも、出土状況・石器製作技術はきわめて特徴のあるものとなっている。ここでは、楔形石器を多産する石器群の特色をまとめて出口遺跡と比較してみることにする。楔形石器を多産する石器群の報告事例は以下の通りである（第235図）。

横芝町遠山天ノ作遺跡（奥田・高橋 1986, 新田 1988）

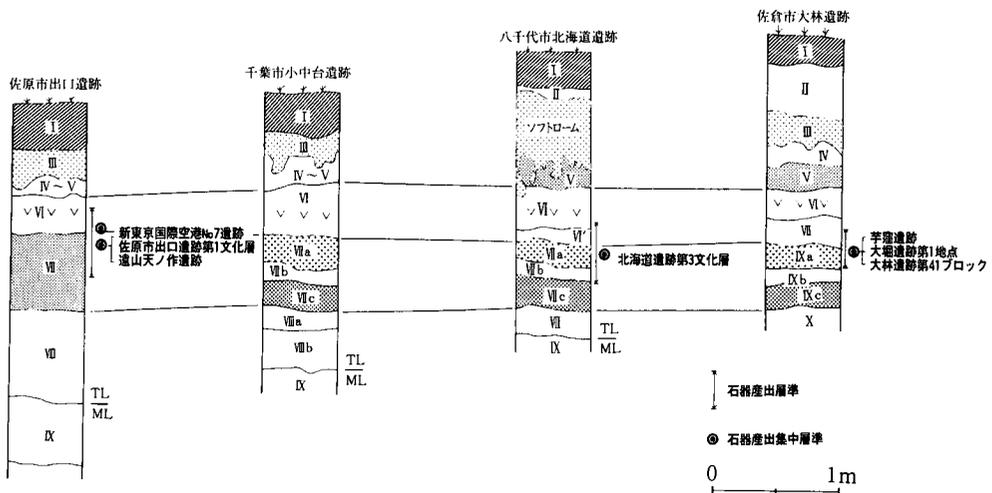
佐倉市芋窪遺跡（野口・田村 1989）

佐倉市大堀遺跡第1地点（野口・田村 1989）

佐倉市大林遺跡第41ブロック（田村 1989）

佐原市出口遺跡第1文化層を含めると5石器群が同じ段階の石器群としてとらえられる。これらの石器群の層序対比（第234図）、石器組成（第31表）、出土状況表（第32表）、石器実測図（第235図）をもとにして特徴を抽出することにする。

- ① 出土層位は、下総台地は地域によって層序区分名が若干異なっているが、第2黒色帯の上部に石器産出層準がある。
- ② 石器組成は、楔形石器を主体とし、二次加工の施されている石器がきわめて少なく単純な石器組成を示し、剥片・碎片は両極剥離によって剥離されたものが大半を占める。



第234図 楔形石器・小型石刃を多産する石器群の層序対比

第31表 楔形石器・小型石刃を多産する石器群の石器組成

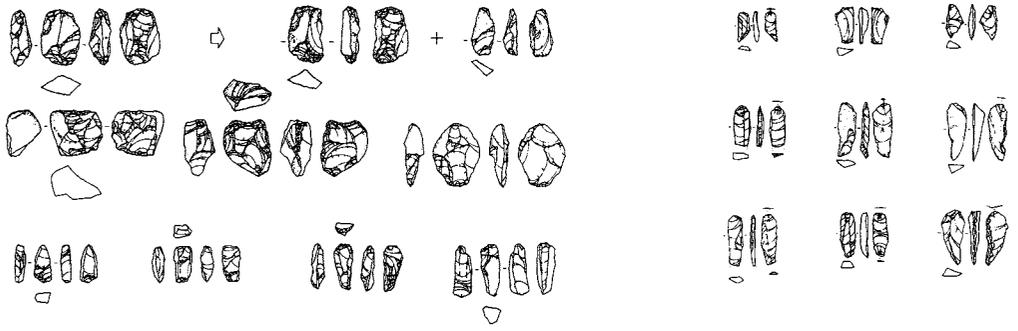
遺跡名	石器 (I類)(II類)(III類)	ナイフ 形石器	削器	敲石	石錐	台石	剝片	碎片	石核	礫	合計
							(U・R)	(<契形石器調整剝片)			
佐原市出口遺跡第1文化層	181 (92)(70)(19)	0	0	2	0	0	562	2,411 (1,844)	12	14	3,182
横芝町遠山天ノ作遺跡	129 (86)(30)(13)	3	1	6	0	7	6	904	4	22	1,082
佐倉市芋窪遺跡	48	1	9	0	0	0	793 (19)	179 (102)	14	11	1,055
佐倉市大堀遺跡第1地点	13	1	0	1	0	0	64 (10)	66 (48)	2	3	150
佐倉市大林遺跡第41ブロック	27	1	3	0	1	0	236 (42)	211	19	7	505
八千代市北海道遺跡第3文化層	20	29	4	9	0	0	722 (11)	356	13	15	1,168
新東京国際空港No7遺跡A地点 第6石器群	0	2	0	0	0	0	54 (9)	39	7	0	102

※石器組成は基本的に報告書・論文に従ったが、器種認定等で筆者と異なるものがあつたので若干石器組成が異なるものもある。

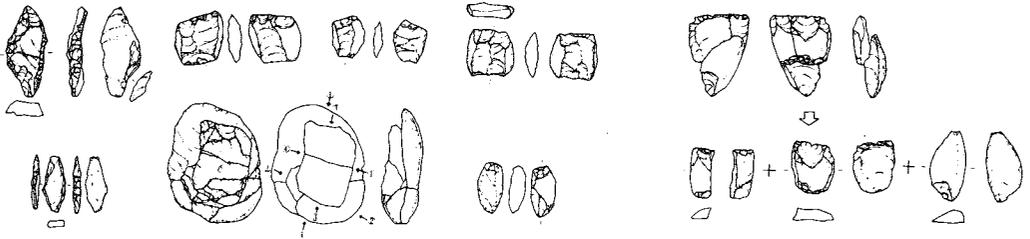
- ③ 出土状況は、出土点数が他の石器群に比べて際だって多いことがあげられる。また出土範囲も直径20mから45mの範囲に少ないブロック数で形成され、その結果、1ブロックあたりの出土平均点数もきわめて多く、1ブロックあたりの平均規模も直径3mから5m程度の小規模で形成されている。
- ④ 楔形石器の製作技術については、田村の指摘している遠山技法が原則的に行われている。それは、「(1)偏平な小円礫を台石上に立位に固定し、これを石槌で加撃して2～3枚に削ぎ落とす、(2)分割された楕円形の小円礫を横に寝せて立て、この一側縁を加撃することによって楔形石器と共に多量の細石片を生産する、という工程が原則的にとられている。この手法をとることによって、通常の方法ではとても不可能な、小円礫からの組織的な石器製作が可能となっている。」(田村 1989) というものである。

第32表 楔形石器を多産する石器群の出土状況表

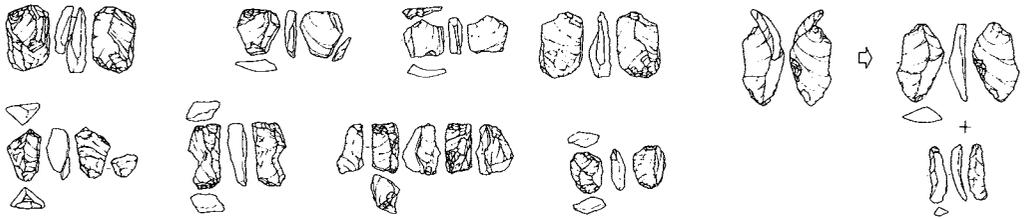
遺跡名	出土状況		ブロック数 (集中地点数)	1ブロック あたりの 平均点数	1ブロック あたりの 平均規模
	出土点数	規模			
佐原市出口遺跡第1文化層	3,182	20m×20m	5	636	3m×3m
横芝町遠山天ノ作遺跡	1,082	45m×(14m)	4	271	4m×4m
佐倉市芋窪遺跡	1,055	28m×20m	5	211	8m×8m
佐倉市大堀遺跡第1地点	150	14m×10m	2	75	5m×5m
佐倉市大林遺跡第41ブロック	505	45m×45m	16	32	5m×5m



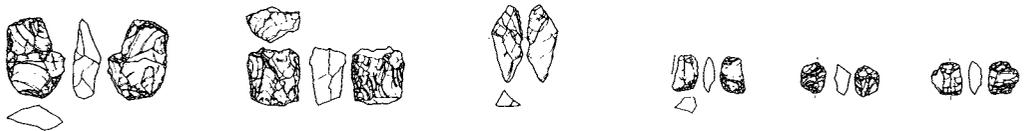
佐原市出口遺跡第1文化層



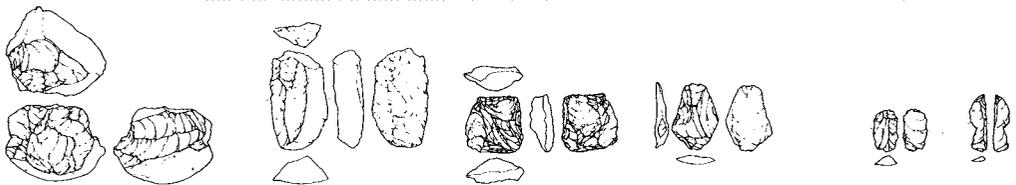
横芝町遠山天ノ作遺跡



佐原市芋窪遺跡



佐倉市大堀遺跡第1地点



佐倉市大林遺跡第41ブロック

0 5cm

第235図 楔形石器を多産する石器群

以上のような点が、楔形石器を多産する石器群の特徴としてあげられる。出口遺跡では、楔形石器製作過程をA～C類に分類した。田村の言う「遠山技法」とは微細なところで異なるが、原則的には同様の技法の範疇に入るので、出口遺跡の石器群は「遠山技法」によるものとして位置づけられよう。

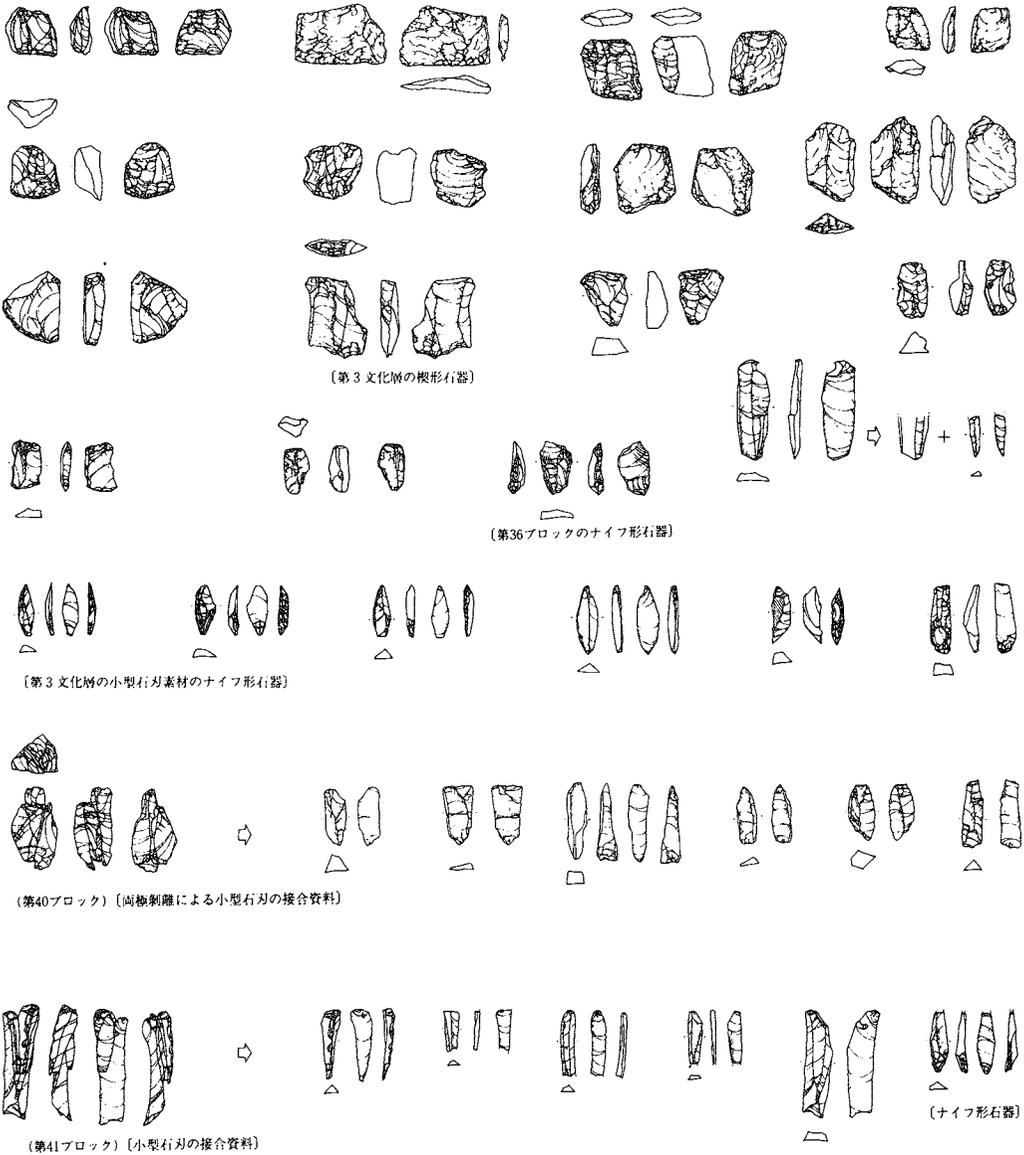
なお、横芝町遠山天ノ作遺跡については、以前、筆者が遠山天ノ作遺跡の再検討をした（新田 1988）が、そこでは、楔形石器の機能を被加工物と敲石の間において両極剥離によって使用したものとしてのみ位置づけたが、今回、出口遺跡の分析を通して遠山天ノ作遺跡をもう一度検討した結果出口遺跡と同様に楔形石器自体の使用以外に細小剥片も目的的に剥離した可能性が高いことが観察された。楔形石器の製作技術は楔形石器製作過程A類のものが主体を占め、楔形石器製作過程C類のものが少ない。楔形石器以外では、ナイフ形石器が3点出土しているがそのうち1点は黒曜石製で刃部をほとんど残さないナイフ形石器で、類例はほとんどなく、北海道遺跡第3文化層の楔形石器を主体とする第36ブロックから同様なナイフ形石器が1点検出されている程度である。

(2) 楔形石器・小型石刃を多産する石器群

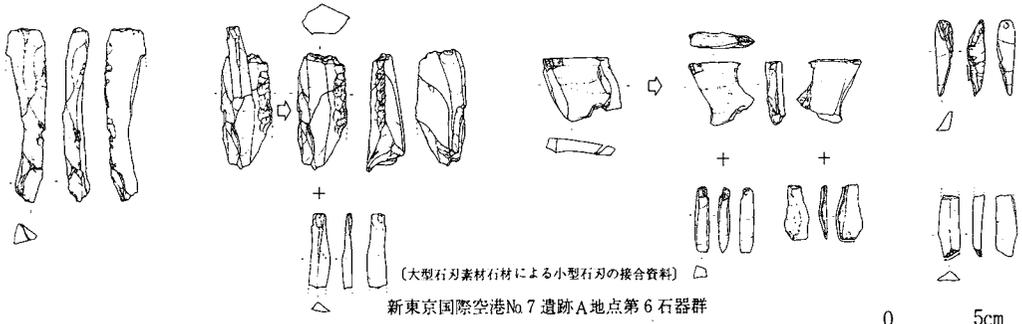
楔形石器を多産する石器群は、楔形石器を主体とする単純な石器組成であった。そのために、他の石器群と比較する上で、楔形石器を組成に含み、楔形石器以外の石器組成を持つ石器群との比較検討が必要になろう。そこで、楔形石器を組成に含み、楔形石器以外の石器組成を持つ石器群を取り上げて、出口遺跡をはじめとする「遠山技法」による石器群と比較検討することにする。

① 八千代市北海道遺跡第3文化層（第236図）

石器の出土層位は、VI層からVIIa層にかけて出土しており石器産出集中層準は第2黒色帯の上部のVIIa層に集中する（第234図）。石器は1,168点出土している。石器組成は、楔形石器20点、ナイフ形石器29点、削器4点、敲石9点、剥片722点、碎片356点、石核13点、礫15点である（第31表）。以前、筆者がこの石器群を再検討した（新田 1990）際に石器群の評価と位置づけを行ったが、その中で、「両極剥離が顕著に行われている。楔形石器の占める割合が高い。その中には、小型石刃に類似するような形態の縦長のものが存在する。」（新田 1990）と指摘した。具体的に言うと第40ブロックの両極剥離による小型石刃状の剥片の接合資料がもっとも良好な資料であるが、これは出口遺跡の楔形石器製作過程C類の製作過程ときわめてよく似ている。この第40ブロックから約2m離れたところの第41ブロックから小型石刃が6点接合しており、そのうち1点は調整加工が施されナイフ形石器が作成されている。接合されたもっとも長い小型石刃の末端部に微細剥離痕が形成されていることから、これを、両極剥離によって剥離されたものと判断され、接合資料の他の5点も両極剥離によって生産されたものである可能性がある。また、その他の小型石刃・小型石刃素材のナイフ形石器の中にも両極剥離によるものと思われる



八千代市北海道遺跡第3文化層



(大型石刃素材石材による小型石刃の接合資料)
新東京国際空港No.7遺跡A地点第6石器群

第236図 楔形石器・小型石刃を多産する石器群

るものが多く含まれている。また、多量の楔形石器のうち、小型石刃を剝離したと思われる剝離痕が残っている。このように、出口遺跡の楔形石器製作過程C類に類似した剝離によって小型石刃が確実に剝離されていることから、北海道遺跡第3文化層の石器群を出口遺跡をはじめとする楔形石器を多産する石器群と同じ段階の石器群として位置づけられると思われる。

② 新東京国際空港No.7遺跡A地点第6石器群（第236図）

石器の出土層位は、VI層下部からVII層（第2黒色帯）上部にかけて出土しており、石器産出集中層準はVI層の最下部あるいはVII層の最上部に集中する。北海道遺跡第3文化層の石器群のように小型石刃を多産するが、大型の石刃を石核として用いて、小型のスポール状の石刃を剝離している点で異なる。これを筆者は「大型石刃素材石核による小型石刃生産技術」を持つ石器群として位置づけるが、下総台地で特徴的に検出されており、現在のところこの石器群の報告事例として佐倉市向原遺跡第6地点（大原 1989）、大網白里町沓掛貝塚（橋本 1987）、芝山町芝山西ノ台遺跡（田村・橋本 1984）があり、それと未報告の遺跡が数遺跡あるのを含めるとかなりの遺跡数になる。

新東京国際空港No.7遺跡A地点第6石器群（以下空港No.7遺跡と略称する）の石器出土点数は102点で、石器組成は、ナイフ形石器2点、剝片54点、碎片39点、石核7点である。大型の石刃を搬入して、それをそのまま刃器として使用したり、ナイフ形石器に加工したりするが、大半のものは大型の石刃を素材として小型の石刃を生産している。

「大型石刃素材石核による小型石刃生産技術」は、いくつかの生産過程がみられる。

①大型石刃の打面、あるいは、末端部を打点としてスポール状の細長の小型石刃を剝離していく。最終的には両極剝離によって小型石刃を剝離するもの。おそらく、初期の小型石刃を剝離する段階においても、両極剝離を用いている可能性が高いと思われる。

②大型石刃を短軸方向に折断して打面を作出して、その後、①と同様の剝離を加えるもの。

以上の2つに生産過程に大別されるが、生産過程①・②ともに最終的には両極剝離によって小型石刃を生産する点で北海道遺跡第3文化層の小型石刃の生産技術と類似する点が注目され、出口遺跡から出土している両極剝離による細長の剝片との関連が想起されよう。

3. 佐原市出口遺跡の位置づけと問題点

(1) 石刃・石刃素材石器の小型化について

VII層（第2黒色帯の上部）からVI層にかけて石刃・石刃素材石器（石刃を素材として二次加工をした石器で、主にナイフ形石器が対応する）が小型化する傾向がある。また、1つの母岩から石刃・石刃素材石器を多産する資料が多くなる。これらの傾向は、VI層下部出土の八千代市権現後遺跡第4文化層とVI層上部出土の流山市若葉台遺跡第6ブロックから出土した石刃素材石器であるナイフ形石器に顕著にあらわれている。それは、小型で素材の形状に対する二次加工が素材形状保持的なものであり、「石刃の生産段階において、製品の形状にできるだけ近い

ものにし、二次加工をできるだけ少なくして、より生産性を高めようとしたことが想定される。このことは、一つの母岩から生産される製品の量が多くなっていることからもうかがえる。](新田 1989) というような特徴があげられる。

VII層（第2黒色帯上部）においてもこれらの傾向が興り始めていることがうかがわれる。

北海道遺跡第3文化層においても、一つの母岩から小型石刃を量産する資料（第40・41ブロックの接合資料）が検出されている。小型石刃を素材としたナイフ形石器も数点出土しており、そのナイフ形石器は素材形状を保持的なものであった。しかも、小型石刃の生産技術において両極剥離が多用されていることが観察され、礫素材の楔形石器も数点検出されていた。

空港No.7遺跡においては、「大型石刃素材石核による小型石刃生産技術」が主体を占め、一つの母岩から多くの小型石刃が生産されていることが観察された。この「大型石刃素材石核による小型石刃生産技術」においても、両極剥離が多用されていた。しかも、これと同様の生産技術をもつ石器群がVII層（第2黒色帯上部）からVI層にかけて数例検出されている。

上述の北海道遺跡第3文化層や空港No.7遺跡の石器群は、出口遺跡と同様に、小型石刃を組織的に量産していることから、小型石刃が植刃として機能していた可能性が高い。

出口遺跡からは、小円礫を素材として用いて両極剥離を多用して組織的に石器製作を行う「遠山技法」によって、小型石刃様の細長剥片がきわめて多量に生産されていた。これと同様の石器群も、数例検出されている。

(2) 石材（素材）獲得方法

次に、(1)で検討した石器群の石材（素材）獲得方法について検討することにする。これらの石器群の石材（素材）の獲得方法は、それぞれ特色のあるものである。

空港No.7遺跡では、珪質頁岩の大型石刃を搬入品として遺跡に持ち込み、それを素材として小型石刃を生産していた。大型石刃の生産に関する剥片・碎片が遺跡内では検出されていない。また、頁岩・珪質頁岩の石核、あるいは、分割剥片は出土していない。おそらく石材原産地近傍において生産されたものを大型石刃のかたちで運んできてそれを素材としているものと思われる。このような大型石刃が搬入品として持ち込まれるという傾向は、VII層からVI層にかけて出土する頁岩・珪質頁岩にもみられ、北海道遺跡第3文化層においても同様な傾向がある。大型石刃というかたちで運ぶという意義については、大型石刃を持ち運んでいる際に大型石刃自体が刃器という製品で、おそらく刃器として使用していたことが想定される。このことは、大型石刃のほとんどのものに微細剥離痕があることから推察される。また、石材原産地から遠くはなれた下総台地に携帯して持ち込むには重くてかさばらない方が運び易いことが推察される。そして、このようにして持ち込まれた大型石刃は、組織的に究極まで消費するあり方が、「大型石刃素材石核による小型石刃生産技術」といえよう。

それでは、出口遺跡の場合はどうであろうか。遠山天ノ作遺跡の報告書では、原石である円

礫は「下総台地の段丘砂礫層に含まれる円礫の可能性が大である。」(奥田・高橋 1986)と記載されているが、筆者も千葉市土気の段丘砂礫層から出口遺跡から出土したものと同様の石材が含まれることを確認している。出口遺跡において全ての石材が下総台地の段丘砂礫層から獲得されたとはいいい難いが、ほとんどのものが下総台地の段丘砂礫層のものを用いたと思われる。このように、出口遺跡の石材獲得方法は、空港No.7遺跡とは対比的に、他の時期にはほとんど用いられなかった在地の石材である小円礫を用いるものであった。

(3) 技術の選択的適応

空港No.7遺跡では、大型石刃を素材として持ち込んで小型石刃を多量に生産していた。このことは、おそらく、VII層(第2黒色帯上部)から興り始めていた石刃・石刃素材石器の小型化と下総台地に良質な石材産地がないという地域性に応じて、小型石刃を生産したことが推察される。石材原産地近傍では大型石刃を生産し、石材原産地から遠く離れた下総台地においては大型石刃を素材として小型石刃を生産するというあり方は、この段階の旧石器時代人の持っている技術を選択的に適応させていることのひとつの表出方法と評価できよう。

これとは対比的に、出口遺跡では在地の小円礫を用いて組織的に小型石刃様の細長剝片を多量に生産している。このことは、以下のような要因が絡み合って発生した石器群であると評価される。それは、①VII層から興り始めた石刃・石刃素材石器の小型化 ②在地で獲得可能な小円礫の選択することによる石材獲得の容易化 ③両極剝離による小型石刃生産の普及 等の要因が絡み合って、小円礫を素材として両極剝離によって細長の剝片を組織的に剝離する「遠山技法」が発達したと推定する。このようなあり方も、在地の石材と結びついた技術の選択的適応と評価されよう。

4. まとめ

出口遺跡出土の石器の特徴を整理して、それと関連する石器群と比較検討して、出口遺跡の石器群の位置づけと問題点を考察した。それらをもう一度まとめてみると次のようになる。

- ① 出口遺跡の石器群は、小円礫を素材として両極剝離によって細長の剝片を組織的に剝離する「遠山技法」による石器群としてとらえられる。同様の石器群として、横芝町遠山天ノ作遺跡、佐倉市芋窪遺跡、佐倉市大堀遺跡第1地点、佐倉市大林遺跡第41ブロックがあげられる。
- ② 出口遺跡の楔形石器製作過程は、楔形石器自体の生産過程であると同時に細長の剝片を組織的に生産するという二重性を持っていると規定される。また、この細長の形状をした剝片の機能として細石刃のように並列して植刃した可能性が高い。
- ③ 出口遺跡のように両極技法を多用して細長の小型石刃様の剝片を多量に生産する石器群と関連する石器群として、北海道遺跡第3文化層のように楔形石器を多産して両極剝離によって小型石刃を生産する石器群や空港No.7遺跡のように「大型石刃素材石核による小型石刃生産技術」において両極剝離を用いる石器群があり、剝片生産技術に共通する点が多い。また、これ

らの石器群から検出される細長の小型石刃は、石刃・石刃素材石器が小型化していることと、組織的に規格化された細長の小型石刃を量産することから、組み合わせ石器であると想定され、出口遺跡の細長の剥片と同様に、植刃として機能していた可能性が高い。

④ 出口遺跡の石器群を、VII層から興り始めた石刃・石刃素材石器の小型化、在地で獲得可能な小円礫の選択、両極剥離による小型石刃生産の普及等の要因が絡み合って発達した石器群として位置づけることが出来る。

引用・参考文献（五十音順）

- 麻生 優・織笠 昭・犬塚俊雄 「千葉県鎌ヶ谷市東林跡遺跡の調査」『日本考古学協会第50回総会研究発表要旨』
1984
- 阿部朝衛 「ピエス・エスキュー（楔形石器）」『聖山』 東北大学文学部考古学研究会考古学資料集別冊2 1979
- 大原正義 「先土器時代」『佐倉市向原遺跡』（財）千葉県文化財センター 1989
- 奥田正彦・高橋博文 「遠山天ノ作遺跡」『主要地方道成田松尾線III』（財）千葉県文化財センター 1986
- 小菅将夫・新田浩三 「下総台地のIX層～VII層の様相」『石器文化研究1』 石器文化研究会 1989
- 田村 隆・橋本勝雄 「山武郡芝山町芝山西ノ台遺跡」『房総考古学ライブラリー1 先土器時代』（財）千葉県文化財センター 1984
- 田村 隆 「若葉台遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V』（財）千葉県文化財センター 1986
- 田村 隆 「佐倉市大林遺跡」『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1』（財）千葉県文化財センター
1989
- 田村 隆 「収束」『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1』（財）千葉県文化財センター 1989
- 田村 隆 「野見塚遺跡の先土器時代－コア・リダクションと狩猟・採集戦略－」『北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書III』（財）千葉県文化財センター 1990
- 西口 徹 「No.7遺跡」『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書IV』（財）千葉県文化財センター 1984
- 新田浩三 「新東京国際空港No.7遺跡A地点第6石器群について」『竹篋』第3号 北総たけべらの会 1987
- 新田浩三 「遠山天ノ作遺跡の再検討」『竹篋』第5号 北総たけべらの会 1988
- 新田浩三 「石刃と石刃素材石器の関係」『竹篋』第6号 北総たけべらの会 1989
- 新田浩三 「北海道遺跡VII層」『石器文化研究2』 石器文化研究会 1990
- 野口行雄・田村 隆 「佐倉市芋窪遺跡」『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1』（財）千葉県文化財センター 1989
- 野口行雄・田村 隆 「佐倉市大堀遺跡」『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1』（財）千葉県文化財センター 1989
- 橋本勝雄 「旧石器時代」『八千代市権現後遺跡』（財）千葉県文化財センター 1984
- 橋本勝雄 『八千代市北海道遺跡』（財）千葉県文化財センター 1985
- 橋本勝雄 「旧石器時代」『沓掛貝塚』（財）千葉県文化財センター 1987
- 橋本勝雄 「北海道遺跡VII層 コメント」『石器文化研究2』 石器文化研究会 1990

第2節 大稻塚遺跡の石鏃製作技術について

本遺跡からは、9点の石鏃、2点の石鏃未成品が検出されている。内石鏃3点、石鏃未成品2点は石英班晶が入る白色流紋岩で、それと共に12点の同石材による楔形石器が検出された。また004号土坑からはこの石材による石鏃製作を抽出するに適した接合資料が得られ、流紋岩製の石鏃製作の場であることを推定した。ここでは、あらためて遺構及びグリッド出土全般の流紋岩石材石器に着目して、本遺跡における石鏃製作システムについて纏め、他遺跡との関連について若干の考察を行ってみたい。

本遺跡の石鏃製作を製作工程的に列挙すると、

I. 石鏃の素材作出過程では、原石は握り拳大の円礫（円礫a）と5、6cm程の楕円礫（楕円礫b）である。この原石より、概ね3通りの手法の剥片剥離が想定される。A. 原石を限定せず自然面打面で、各種の剥片を作出するもので、原石の表皮を剥ぐように、或は原石を輪切りに切断するような一般的な剥離工程（工程A）で、各種の剥片がみられる。B. 楕円礫bを原石として、その長軸方向から直接的に両極剥離を用いて、原石を裁断するような剥離工程（工程B）で、この工程からは礫皮面を残置した楔形石器が生産される。この種の楔形石器から石鏃を生産した具体的な資料は得られなかったが、形態的には石鏃の素材としての資格を充分備えるものとして積極的に評価しておく。C. 円礫aを原石として、広い自然面打面を持ち、原石を分割するように剥片剥離して部厚い横長剥片が生産され、更に、この剥片を横位に切断して、角柱状の楔形石器のブランクを作出して、これに両極剥離を適用して楔形石器を得る剥片剥離工程（工程C）で、004号土坑の接合資料がこの工程にあたる。

II. 石鏃の調整加工では、工程A・B・Cで得られた素材を全て石鏃にするのではなく、素材の中から石鏃の形態に適するものを選択して調整加工することが一般的であったと思われ、このような選択的素材使用を想定するとき、工程B・Cにおける楔形石器自体を石鏃の素材にする工程の技術基盤のあることが理解される。具体的には、両極剥離を多用することにより、長軸の長さを余り減じることなく、縦断面形が凸レンズ状を呈し、中央部に最大厚を持つという楔形石器の形態を生産させることになり、この素材形態を本遺跡における石鏃の形態に合致させるという企図（合目的な素材としての企図）が、効率的な石鏃製作システムを生み出している要因になっている、と評価できる。この楔形石器を素材として、その一端を尖らせるようにして平面形状を二等辺三角形に仕上げる。一般的に石鏃製作における難点となるのは厚みをバランスよく減じる調整加工であると思われ、両極剥離により厚みのある程度凸レンズ状に仕上げることは製作上の失敗を減らすという点でも効率的である。この調整加工による石鏃は、概して小型の二等辺三角形に近い形状を基調とし、最大厚を器体中心部に持つものであり、楔形石器という素材から先端部を尖がらせ、器体修正的な調整加工だけで石鏃が生産されている

ことが理解される。

流紋岩製石材による石鏃製作工程を概略したが、これらは部分的な接合資料を基に製作工程的に概念化したものであり、欠落部分があるという資料的制約は受けるが、004号土坑で検出された楔形石器と石鏃未成品の接合資料から復元された工程Cの意義は大きい。これまで種々の機能が想定されてきた楔形石器という器種に資料分析により一定の機能が与えられた。つまり、楔形石器がそれ自体に利器、或は石核として機能するのではなく、石鏃製作の中で素材として機能するということである。本遺跡で把握された楔形石器の性格は、もとより楔形石器のその他の機能面を否定するものではないが、石鏃製作跡的な場で楔形石器が共伴するような状況を呈する遺跡では、楔形石器は石鏃の素材である蓋然性が高いと思われる。

本遺跡の石鏃製作の時期については、土器との共伴関係は不明であるが、縄文土器の大半が早期後半の鶴ヶ島台期のものであり、これらの石器製作もこの時期の所産であると推定される。千葉県下において、石鏃と楔形石器の伴出する遺跡は多く、縄文時代の早期以降各時期に渡って存在するような様相を呈している。しかし石鏃製作跡的な検出例は希少で、安易に具体的な関係を考察するまでには至っていない。その中で佐倉市向原遺跡の例は注目される。中期前半の石鏃製作の場と時期認定されており時期的には一致しないが、三か所の石器集中地点で石鏃と楔形石器が共伴している。石鏃未成品に楔形石器を素材としていると思われるものが含まれることや、楔形石器に先端を尖らせるような調整加工が看取されるなど、その一部は本遺跡の石鏃製作と同様の製作技術を有していると考えられる。時期を違えて同種の石鏃製作技術が存在するという事は、楔形石器の検出が房総地域で一般的であることを考え併せると、ある一時期の特殊な技術として捉えるより、現段階では、少ない石材で効率的に製品を生産できるという楔形石器の持つ石器製作上の性格に着目して、各時期に渡って少なからず存在する石鏃製作技術として評価しておきたい。下総地域における石材獲得の規制（在地で石器の素材に適した石材が殆どなく、他地域から石材を搬入してこななければならないという規制）もこうした石鏃製作技術の発達した一要因と考えられる。

第3節 毛内遺跡の成果

毛内遺跡においては、総数32,000点以上にのぼる量の縄文土器が検出された。そのほとんどは遺構外から検出されており、14軒の住居跡と36基の土坑からは極めて少ない量の土器しか検出されていない。これらの土器片については、整理作業の段階での分類に基づき、グリッド出土土器の項で述べた「類」に帰属させ、類毎の出土位置と数量を把握することに努めた。しかし、32,000点のうちには多量の小片や帰属時期の判然としない無文の土器片が含まれ、実際に分類できた数量は約13,000点である。その内容については後述するが、主体となるのは第Ⅲ群

および第IV群土器として扱った縄文時代前期後半の浮島式系土器群と、それに続く中期初頭の土器群であり、双方を合わせた全体の中の比率は約72%に及ぶ。また、耳飾等の土製品をはじめ、石片等を多く出土する住居跡が特徴的に存在していることも注目できる。特に土製耳飾は、総数50点とまとまった出土が見られた。これらは、それぞれの分布を見ることなど、毛内遺跡を総合的に分析することではじめて毛内遺跡集落の包括する特徴や問題点を提示できるものと思われる。ここではまず、本遺跡の主体的な時期である縄文時代前期後半の浮島式系土器群から、それに連続する前期末及び中期初頭の土器群にみられる文様要素等を整理した後、主に遺跡内における遺物分布の分析をとおして本遺跡に見られる集落としての特徴をまとめておくことにする。

1. 毛内遺跡における縄文土器の様相（前期後半から中期初頭を中心として）

既に述べてきたように、本遺跡における主体時期は縄文時代前期後半から中期初頭にあたる。型的には浮島Ⅰ～Ⅲ式、興津式、粟島台式、下小野式、五領ヶ台式である。五領ヶ台式を除き、全て東関東系土器群として称せられるものであり、粟島台式のように型式そのものが一般に認知されないような土器群も含めたが、その標識遺跡は下小野式を含めて、本遺跡とは極めて隣接した地域に存在するものである。ここでは、それらの型式設定や併行期に関する問題について改めて検討する余地もないが、前期後半のいわゆる東関東系土器群について本遺跡出土の当該期土器と照らし合わせながら整理しておきたいと思う。

浮島式と興津式を総称した浮島式系土器群は、霞ヶ浦沿岸を中心に行った西村正衛氏の一連の調査、研究によってその存在が明らかにされたものである。浮島式土器は、茨城県稲敷郡貝ヶ窪貝塚を標識としており、一般に西村氏が行った分類の第一群土器をⅠ式に、同じく第二群をⅡ式に、第二群の後続土器群をⅢ式にそれぞれ比定されている。ここに西村氏による一連の研究結果から、それぞれに特徴的な文様要素の内容を書き出しておくことにする。なお、西村氏の記述以外にも、当該型式に見られる要素や一部他遺跡で見られた要素も加えておく。

浮島Ⅰ式…①多様な平行沈線文が描かれ、地文には(a)無文地、(b)撚糸文、(c)貝殻文がある。②刺突文の施された低隆帯がある。③連続爪形文（記載には幅6mm前後の変形爪形文とあるがⅡ式の幅広の変形爪形文と区別するため、ここでは連続爪形文と呼称する）。これも(a)無文地と少ないながら(b)撚糸文地とがあり、(a)には平行沈線文や貝殻文が併用される。④拙劣な波状貝殻文が施される。④は⑤輪積痕上に施されるものもある。⑥無文土器。

浮島Ⅱ式…①幅広の変形爪形文土器。②熟練した波状貝殻文。②には③輪積痕を残すものや④凹凸文が施されるものがある。⑤無文土器で、やはり③や④が見られる。④を伴う⑥平行沈線の土器が少ないながら見られる。

浮島Ⅲ式…①三角文の土器。②口唇下に縦位・斜位の刻み目状沈線。③深く豪放な波状貝殻

文および、ずらしながら施された貝殻文。鎌ヶ谷市五本松遺跡では三角文と横位に④集合沈線文が併用されているものが見られる。⑤口縁部に輪積痕を残すものがある。

興津式…①諸磯式的爪形文(幅の狭い連続爪形文)。②半截竹管によるC字形の爪形文(刺突文)。③平行沈線の集合。④口唇下の縦位刻み目状沈線。⑤貝殻文と沈線文による意匠文。⑥平行沈線による意匠文。⑦櫛歯状工具による条線文の土器。⑧輪積痕上等に無造作な沈線文。⑨無文土器。

興津式と共存…①口唇部から縄文が施されるもの、ないし②押圧縄文が見られるもの。

以上が浮島式から興津式に見られる文様の要素である。興津式と共存関係にあるとされた縄文の土器を除き、すべてに貝殻文の存在が見られ、浮島式系土器が別名貝殻文系土器群と呼ばれる特徴をよく表している。因に、興津式と共存関係にある土器の特徴は、安藤文一氏によって型式設定が提示された粟島台式土器のそれと一致している。

このように浮島式系土器群の文様要素を一瞥しただけでも各要素は二型式にまたがる場合も多く、浮島式土器の認識や内容を正しく理解させることを遠ざけている一因となっている。ここでは浮島式土器を整理しておくという観点で、各型式の特徴的な文様要素に伴う本遺跡グリッド出土土器の口縁部断面を集成した(第237・238図)。

浮島I式の特徴である平行沈線文の土器は、口縁部が緩く外反するか、直線的に開くものが一般的である。口唇部断面は、平坦か、やや丸みを持つものの違いはあるが、基本的に(a)器壁に対して直角に近い形となる。同じくI式の連続爪形文の土器は、出土数が少なかったが、口縁部形態は平行沈線のものと同様である。II式の変形爪形文の土器は、やはり(a)タイプのもが見られるが、(b)口唇部の外側が斜めに遡がれたようになるものが存在する。この(b)タイプは凹凸文を有する土器中にも多く見られる。I式からII式に至る文様は、平行沈線から連続爪形文、変形爪形文と系統的にも連続すると考えられ、口唇部の形態も外側が遡がれることにより、III式の三角文を有する土器に多く見られる(c)尖がりぎみの口唇部へと発展することが考えられる。しかし、II式的な貝殻波状文の土器の口縁部とは共通性を見い出せず、文様系統の違いが口縁部にも現れたものと言えるだろう。刺突文の土器についても、口縁部はむしろ内湾するものであり、外見上似たような印象を受ける凹凸文の土器とも明らかに異なる。また、口唇下部に縦位の刻み目状沈線が施されるのは三角文を有する土器において一般的となる。この刻み目状沈線と貝殻文を有する土器では、(c)および(d)口唇部まで器厚が一定しており、器形的に緩く外反するものがある。そして、少ないが(e)口唇部の内側が斜めに遡がれたようになるものがある。次の興津式の区画貝殻文の土器では、(d)と、その発展タイプである(f)口唇部がやや肥厚して外屈するものが主体的である。(d)タイプは第IV群の口唇上に縄文が回転施文されている土器中にも多く見られる。同じく第IV群中でも、細い原体の縄文が施されるものや無文の土器中には、折り返し口縁などとともに口唇部が再び尖がるものが顕著である。

これらをまとめると、時間的には文様と共に(a)→(b)→(c)→?(e)→?(d)→(f)が一応考えられるが、このラインに乗らなかったII式的貝殻文の発生の契期についてはなお不明のままである。少なくとも平行沈線の土器は、前型式である黒浜式の新段階から諸磯式と同時、あるいはやや遅れて浮島式に引き継がれているが、黒浜式にも見られた貝殻文は、大宮台地等で比較的古い段階に見られており、直接的な連続は今のところ考えられない。

毛内遺跡第III群土器

第1類…全て浮島I式の①多様な平行沈線文に比定されるが、第74図131は、興津式⑥の意匠文と見ることもでき、当類から除かれる可能性がある。地文的には(a)～(c)のすべてを有するが、第68図7の貝殻文は、胴下半部に整然と施されており、上半部が平行沈線を主体に文様帯的に構成されているのとは対照的な感がある。また、第73図120のように口唇端部に刻み目を有するものが存在している。

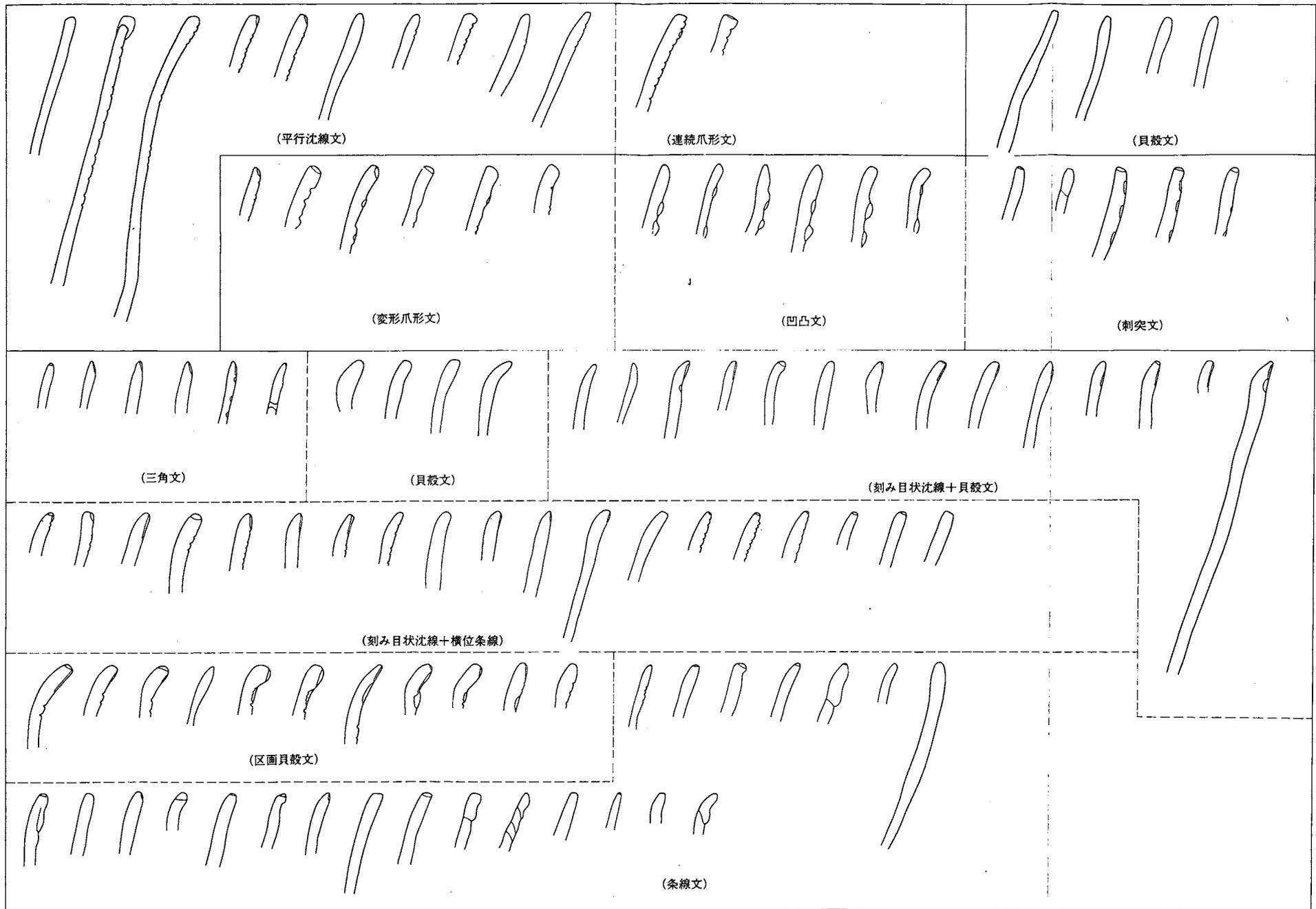
第2類…やはり浮島I式の③連続爪形文の土器である。第74図136や137には刺突文の施された低隆帯が巡らされるほか、平行沈線文の併用や、貝ヶ窪貝塚では少ないとされた地文に擦糸文を有するものの存在も目立つ。

第3類…浮島II式の①変形爪形文土器である。施文工具は太目の多載竹管と貝殻腹縁によるものがある。平行沈線を併用するものも多く、また貝殻文の併用も見られる。変形爪形文を有する土器の口唇部には、第74図154、第75図155、156のように特徴的な刻み目を有するものが存在する。

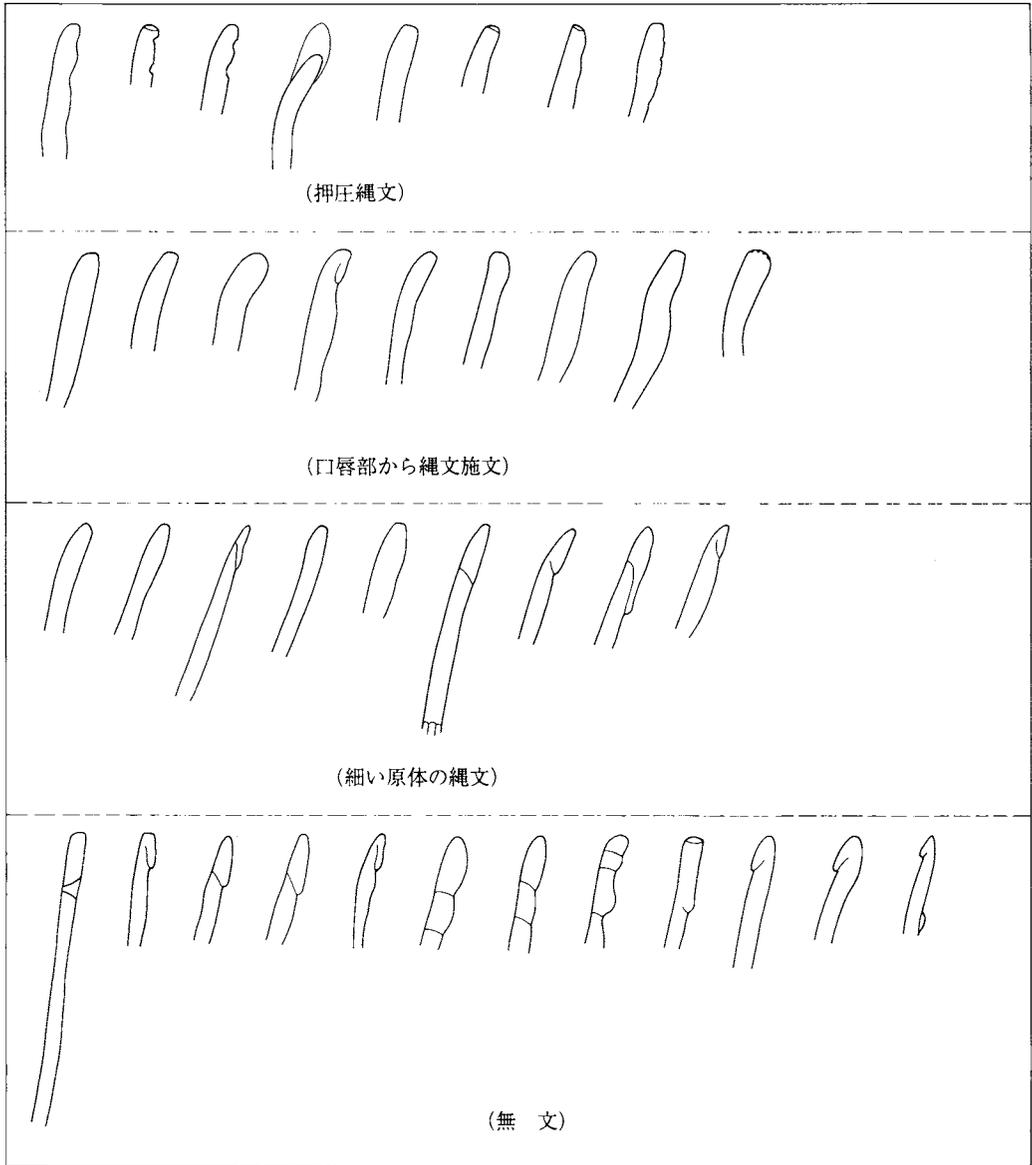
第4類…貝殻文は浮島I式から興津式の全てに見られる文様要素である。本文中では貝殻腹縁の放射肋の有無により細別したが、これによる時間的な前後関係は認められない。口縁部片については前述のように、断面形態によりある程度の比定が可能となるが、胴部片では整った波状文を浮島I及びII式に、ずらしぎみに施されたものをIII式以降とすることができよう。但し、第69図10のように比較的整った貝殻文を有しながらも口縁部付近に見られる特徴から興津式に比定できる例外的なものも存在する。

第5類…本類は一括して刺突文の施されるものとしたが、第76図210～218は明らかに凹凸文と呼べるもので、浮島II式を中心として見られる文様要素である。第76図199および203、204の刺突文は横位に整然としており、興津式に見られる幅の狭い連続爪形文状のものに類似するが、施文具である竹管はやや太く、203の刺突文下部に平行沈線が加えられることから浮島II式に比定できるのではなかろうか。200、201も類例に乏しいが、やはり平行沈線の併用が見られ、同様の時期のものと思われる。208、209の円形刺突文は類例に乏しく小片であり、現時点では判然としないものである。

第6類…本類は浮島III式に特徴的に見られるものである。唯一、第76図219の三角文は器面を切り取るようないわゆる彫刻的手法が採られる。これは十三菩提式や五領ヶ台式に多く見られ



第237図 第三群土器文様要素別口縁断面 (1/3)



第238図 第Ⅳ群土器文様要素別口縁断面 (1/3)

る手法であり、あるいは時期的にやや後出するものかもしれない。また、口縁部片は少なかったものの、第78図277～281に見られる断面形はすべて口唇が尖がりぎみとなる。

第7類…本類に見られる結節平行沈線や連続刺突文の幅はどれも比較的狭く、横位に整然と施されることから、すべて興津式に比定できるものと思われる。

第8類…口唇下の縦位刻み目状沈線（条線帯）は、浮島Ⅲ式以降に多用される文様要素であるが、口唇部に巡る条線帯には次のような違いが認められる。条線帯に用いられる条線の間隔が比較的広いもの、逆に狭いもの、また条線の幅が太いもの、細いもの、条線が縦位に施され

るもの、斜位に施されるものなどがある。口縁部の断面形では外反するものが多く、口唇部は尖がるものと丸みを帯びるか角頭に近く器厚が一定しているものなどがある。これらのうち口唇部が尖がる第77図249、258が浮島Ⅲ式に比定できると思われるほかはすべて興津式の範疇に収まるものと思われる。

第9類…本類は全て興津式の特徴を表しているものである。口縁部の断面形では、口唇部付近が肥厚ぎみに外反するものが多く見られる。

第10類…本類は第1類土器に見られた地文として捉えられるため、浮島Ⅰ式に多く見られる特徴とすることができよう。

第11類…本類の条線文を主体とする土器はほとんどが興津式に比定できるものである。条線文の種類は、櫛歯状工具による多条線、半截竹管状工具による平行沈線を集合させるもの、あるいは粗雑な沈線とに大別される。櫛歯状工具によるものでは横位主体の文様構成が採られるものが多く、口唇下の刻み目状沈線を特徴的に併せ持つ。平行沈線を集合させたようなものでは、第80図345、347～349、354等のように鋸歯状等のいわゆる意匠文の構成がとられている。粗雑な感じのする沈線は第81図365～368のように輪積痕を残した器面上に施されるものが多い。また、第80図346には輪積痕を残さないものの、このような内湾する器形のもが興津貝塚において（輪積痕を残して）出土していることが報告されている。

第12類…本類は破片ということもあって口唇下の刻み目状沈線以下に文様が認められないものであるが、刻み目状沈線や口縁部の断面形態において第8類土器と共通する点が多く、やはり浮島Ⅲ式ないし、興津式に比定されるものである。

毛内遺跡第Ⅳ群土器

第1類…縄文原体の押圧痕文が施されているものが本類である。圧痕文のみが単独で見られるものもある。圧痕文だけの方向では、第82図390が斜位、393が縦位も加わるが、横位が主体的である。縄文の回転施文を伴うものでは、その回転方向はほぼ横位に限られる。本類は安藤氏により、前期末の土器群として提示された粟島台式土器の様相を備えるものである。

第2類…ほとんど縄文のみ施文されたものを本類としたが、口唇部付近の観察では次のような点が認められる。断面形では、興津式に共通するようにやや肥厚して外屈ぎみとなるもの（第82図395～407、412、第83図420等）と、器壁が比較的薄く、尖がりぎみの口唇を持ち、緩く外反するもの、ないし逆に緩く内湾するもの（第82図408～411、417、第83図423、424、426～432等）が見られる。前者は口唇部にも縄文が回転施文されるものが多く、縄文原体は後者よりも太目である。また、403～405の口唇上は縄文ではなく細い竹管による連続爪形状文が施されており、市川市国分旧東練兵場貝塚で出土している口縁部に縄文を併せ持つ貝殻文区画の興津式土器と共に、興津式といわゆる粟島台式の要素が融合されたものとも言えるかもしれない。さらに後者では、緩く内湾する器形のもが存在することから、五領ヶ台式土器への連絡を考える

必要がある。その他のものでも従来下小野式の特徴とされている折り返し口縁や、綾絡文の存在が顕著である。

第3類…本類中折り返し口縁を有するものはいわゆる下小野式以降に、また口縁部に輪積痕のみを数段有するものは浮島Ⅲ式あたりから見られる。器形的には、第83図434のように直立ぎみに開くものを浮島ⅠあるいはⅡ式に、口唇部付近で外屈する435～437を興津式付近に位置づけられるものと思われる。

以上が毛内遺跡における縄文時代前期後半から中期初頭に至る土器群の概要である。本遺跡出土の第Ⅳ群土器については、前期末から中期初頭に位置づけておいた。土器の時間的な尺度としてはそれで間違いはないものの、前期あるいは中期文化それぞれの終末、発生を考えようとするなら近い将来、第Ⅳ群土器をそれぞれの時期へ帰属させることがやはり必要であろう。今は漠然と、しかも直感的なものの言い方しかできないが、巨視的に見た胴部縄文施文方向の違い（前期＝横位・中期＝縦位）あたりが重要な鍵を握っていると思われる。

2. 毛内遺跡の集落について（遺物分布を中心として）

それでは次に、主に遺物分布の傾向から毛内遺跡集落全体について考えられる点を整理しておくことにする。まず、縄文土器の分布から見てゆくことにする。

A. 縄文土器の分布について（第65～67図）

第Ⅰ群期（早期）においては、出土量が相対的に少ないということもあって、目だった特徴は形成されない。調査区北西の浅い谷（以下・谷部と記す）に至る斜面の東側と西側に位置する114、115号土坑及び120号土坑という該期のものと思われる遺構の近辺、あるいは谷部に流れたと思われる土器の出土が見られる程度である。

第Ⅱ群期（前期中葉黒浜式）でははじめて土器片の集中地点が現れる。黒浜式土器は谷部のみ集中して見られ、台地上からの出土は散漫である。また、遺構中からのものとしても、台地平坦面上で調査区の南側に位置する106号土坑と110号土坑の2か所にわずかな土器の出土が見られたのみで、そのほか調査区東側の台地縁辺付近からの出土も極めて少ない。谷部から検出された土器は明らかに廃棄によるものと思われるが、出土総数約1,800点という数量は決して少ないものではなく、立地的に本遺跡の集落と重ならないまでも、該期の集落が付近に存在する可能性は大きいと言えよう。黒浜式土器の出土率は全体の約15%であるが、内容的には黒浜式の新段階に見られる沈線による区画文や、肋骨文等の出土比率が少ないことから（黒浜式土器の要素別推定存続期間表参照）、本遺跡の浮島式～中期初頭に至る集落とは立地の点を含めて連続するものとは考えられない。なお、同表に使用した段階の設定はあくまで時間的な目安で、型式細分に直接結び付ける意思はないことをお断りする。

本遺跡の主体を成す第Ⅲ群期では、第Ⅱ群期同様谷部から検出された明らかに廃棄的な土器

第33表 第II群（黒浜式）土器の要素別推定存続期間と毛内遺跡における出土数

類	施文要素	古段階	中段階	新段階	出土数・比率%
第1類	縄文等の地文のみ施文	—————	—————	—————	1,245・ 80.3
第2類	縄文等の地文上に連続爪形文	—————	—————	—————	52・ 3.3
第3類	半截竹管状工具の刺突文	—————	—————	—————	41・ 2.6
第4類	縄文等の地文上に平行沈線文	—————	—————	—————	94・ 6.1
第5類	無文地に平行沈線文	—————	—————	—————	36・ 2.3
第6類	口縁部に隆帯を施文	—————	—————	—————	7・ 0.5
第7類	連続爪形文区画の磨消縄文	—————	—————	—————	5・ 0.3
第8類	平行沈線文の要所に円形刺突文	—————	—————	—————	12・ 0.8
第9類	貝殻文施文	—————	—————(大宮台地)	—————	40・ 2.6
※	平行沈線の集合または条線文	—————	—————	—————	18・ 1.2

※は、図示でき得る個体がなく、掲載できなかった。また、無文のものは段階別に特定できないが、291点出土している。

に加え、集落の居住域付近からも多くの土器片が集中して検出されている。この居住域付近に残された土器には、3とおりの意義づけが与えられよう。それは、①残そうという明確な意思を伴わない遺棄によるもの、②単純な廃棄によるもの、③廃棄には違いないが、何らかの規制等の条件が伴うものの三つである。谷部から検出された土器群を単純な廃棄によるものと考えると、もうひとつの土器片集中地点である居住区域から検出された土器群は当然それとは区別されるべきものであろう。ここから主体的に検出されている土器は、時期的に第III群期とそれに続く第IV群期に限られる。すなわち、それは本遺跡の集落の存続期間であり、時期的に連続する第VI群期以降の土器量が急激に減少することと、浮島式に併行する諸磯式系土器の出土率が極めて低いことから、毛内遺跡の集落が在地の土器を中心とした地域性の強い、言い換えれば時間的にも空間的にも他とは隔たりのある閉鎖的な集団であるとのイメージが浮かぶ。とはいえ、まとまった出土のある土製耳飾や石片等の在り方からは、当集落が他集落と全く交流を持たなかったとは言い切れず、独立、あるいは他から突出した存在感があるものの、石器等の生産活動が経済基盤のうちの高い割合を占めていたことも十分予想される。

B. 石器等の分布について（第52・53図）

石器は、器種から石鏃、石材からチャート、安山岩、焼礫について分布図を作成した。これは、言い換えると製品と材料という関係にもなる。各分布を比較すると、焼礫を除き第III群土器と同様台地上の居住区域からまとまって検出されていることがわかる。焼礫は谷部からもまとまった検出があるが、焼礫のみを当該期のものから除くことは困難であり、石鏃、チャート、安山岩との分布の違いは各石器（石材）の機能性によるところが大きいと思われる。石鏃は出土総数81点を数え、材質的にはチャート6点、安山岩58点、凝灰質安山岩3点、黒耀石10点、頁岩4点と安山岩の比率が高いのが特徴であるが、安山岩製石鏃はグリッドからの出土が多く、各住居跡毎の石材組成においてはそれほどの違いは認められない。

石鏃という「製品」がまとまって出土しているのは001, 002, 003, 008号住の4軒であるが、最も北に位置する002号住以外はすべてチャート及び安山岩の「石器材料」もまとまって出土している。すなわち①「製品」と②「材料」の両方がまとまっている。逆にチャートあるいは安山岩の「石器材料」のみを多く出土したのは006, 013号住などがある。また、003, 008号の両跡に至っては焼礫もまとまっており、石器の分布の面からも際立った存在となっている。これら住居跡の配置は、①・②両方を有する001, 003, 008号住が南北に並び、①のみの002号住はその延長上の北側に位置する。②主体の006, 013号住は逆に003号住を挟んでそれぞれ西、東に位置しており、003, 008号住を中心に何らかの規制があったかもしれない。

C. 土製耳飾について

次に土製耳飾について述べておきたい。当遺跡から出土した総数56点の土製品のうち、耳飾として捉えられるのは50点である。残り6点のうち、小孔が穿たれ垂飾品として使用されたであろう1点（第64図56）と勾玉（第64図54）を除いては、粘土が単に捻られただけのもの等性格は不明のままである。

土製耳飾は形態的に大別すると、A：丸形のものやB：角形のものがある。いずれも破損品がほとんどで、完形のは003号住出土の1点のみである。50点中、丸形は40点、角形は10点を数える。角形のものについては全体の形態を推測し得るものが6点ほどしか出土しておらず、形態的な分類が不可能であるが、肩部が比較的張るもの（第63図28, 29）と、丸くなで肩状を呈するもの（第63図27）との違いが観察できる。一方、丸形のは平面的には①孔径よりも切れ目が長く鍵穴状を呈するものと、②切れ目よりも孔径が長く環状を呈するものの2点がある。①はさらに、(a)孔の位置が中心付近にあるものと、(b)孔の位置が中心より上位にあるものが見られる。文様的には無文のものがほとんどであるが、側面あるいは表面に細かな刺突を施したもの（第62図1, 第64図35, 36）や、やはり側面に刻み目を加えたもの（第63図10, 第64図38）などが見られる。これら耳飾の大きさは、破損品が故ほとんど推定値であるが、幅だけに限ってみると、最小が角形に属する第64図32の約2.7cmで、最大はやはり丸形の第63図10の約6.3cmということになるが、これは両極端であって、通常は4cm前後から5cm前後のものが多く、約40点を数える。また、遺存率については100%（完形）が前述のように1点、接合しないが全体の70～80%が遺存するもの2点、半欠品（40～50%遺存）が25点、小片（25%以下）24点で、半欠品と小片はほぼ同数となっている。次に出土位置について見てみると（第61図土製品分布図参照）、住居跡群の存在する台地平坦面上からが圧倒的に多く、溝出土というやや曖昧な出土状況のものも含めてその数は45点である。このほかに、調査区北西部の浅い谷に向かう斜面上が4点、谷部からのもの3点を数え、土製耳飾の破損が偶然か故意かは不明としても、少なくとも単純な廃棄による出土状態が主体とは思えない。更に詳細に観察すると、台地上からの出土耳飾は住居跡に極めて隣接した状態でまとまって検出されていることに気づく。すな

わち、003号住覆土から検出された6点と、008号住周辺の隣接グリッドから検出された8点、および006号住隣接グリッドから検出された5点である。このほかに、003号住の覆土以外に1点、004号住付近から2点、007号住付近から2点(うち1点は009号住にも隣接)、010号住覆土から1点の出土を見ている。ここで注目できるのは、石片等を含めた出土遺物の在り方から本遺跡において核となる存在であろうことが確実視された003号住と008号住でやはり際立った特徴が見られることである。では、003号住と008号住について耳飾の出土状態から簡単な対比を行ってみよう。003号住では覆土外の隣接グリッドからも1点だけ出土を見るが、覆土中から検出された6点の耳飾と、性格不明土製品を併せて8点の土製品が出土している。このように覆土中からまとまった量の土製品が出土しているのは本跡だけである。耳飾の形態はすべて丸形に属し、完形または半欠が4点、小片が2点である。これに対して008号住では覆土中からの出土はなく、すべて隣接するグリッドからの出土であるが、これを敢えて008号住の落ち込みを意識した廃棄であると考えたことにすると、008号住周囲から出土した8点は5点が角形に属し、形態的に003号住出土のそれとは相反する。耳飾の遺存度では、半欠が3点、小片が5点で比較対象の数量が少ないという難点があるが、この点でも一応逆転する結果となっている。いずれにしても、003号住と008号住は出土遺物等から本遺跡の中心的存在であるということには変わらないが、耳飾の在り方から見れば異なった性格を有するものとの推測がなされる。

土製(塊状)耳飾については縄文時代前期後半を主体として見られる特殊な遺物であることが一般に言えるものと思われるが、本遺跡のようにこれだけの量がまとまった例は多いとは言えない。今は時間的余裕もなく、他遺跡出土の資料を多く検討することもできないが、一般にはやはり欠損品としての出土が非常に目立つ。半欠品の多さは、その欠損部位が構造上最も欠損し易いという物理的な理由から装着時の欠損と、逆に、欠損し易いことは同時に意識的に破壊し易いものでもあるということをも物語っている。ここではもちろん、両者についていずれかという断定はできないが、少なくとも縄文時代前期後半の祭祀的、あるいは精神的な側面と結びつく遺物ということが言えるであろう。

以上のことから、ある程度毛内遺跡についてのイメージが浮かび上がる。それは全て推測の域を出ないものの、毛内遺跡集落が有する性格、あるいは問題点で考えられるものは次のとおりである。

①石器製作跡としての明瞭な痕跡は確認されていないが、仮に出土した全ての石片等が廃棄に因るものとしても、多量に検出された石片等は、石器製作と強く係わりのあるものであろう。②土製耳飾がまとまった量で出土していることと、それらのほとんどが破損した状態で出土していることから、祭祀的なことと強く関係する集団であった可能性が高い。③各住居跡から検出された縄文土器の組成に大きな隔たりを認めないことから、時期的には浮島期後半から前期最終末を主体とする比較的短い時期に存続した集落と考えられる。④貝塚を伴っておらず、嘗

て西村氏が唱えたいいわゆる内湾性漁労文化とは異なり、経済的な依存は、採集や石器の製作、あるいは土製耳飾等の製作に占められた可能性がある。⑤石器の製作、あるいは祭祀的行為は、003号住ないし008号住という中心的な、いわば首長のもとで行われた可能性が強い。

⑥浮島期後半から中期初頭にかけては、大規模な集落跡が少なく、当遺跡においても総数14軒の当該期住居の検出があるが、同時存在はかなり絞られるものと思われる。縄文時代においては、いずれの時期も絶対的な存続の幅が確認されていないが、少なくとも前型式期の黒浜式や後型式の阿玉台式期ほどの安定性がなかったことは容易に推し量れるであろう。いわゆる世紀末的な不安定さの中で、人々の生活が宗教的な行為と深く関係していたことも考えられないことではないと思われる。

参考文献（五十音順）

- 新井和之 「黒浜式土器」 『縄文文化の研究3』 雄山閣出版 1982
- 安藤文一 「粟島台式の設定－東関東における縄文前期終末の一様相－」『房総文化第14号』 房総文化研究所 1977
- 今村啓爾 「諸磯式土器」 『縄文文化の研究3』 雄山閣出版 1982
- 江森正義・岡田茂弘・篠遠喜彦 「千葉縣香取郡下小野貝塚発掘報告」『考古學雑誌第36巻第3号』 日本考古學會 1950
- 岡田光広 『関宿町飯塚貝塚』 (財)千葉県文化財センター 1989
- 川崎純徳他 『遠原貝塚の研究(本編I)』 勝田文化研究会 1980
- 川崎純徳 「浮島期に於ける集落形態とその構造－特に石岡市外山遺跡を中心として－」『婆良岐考古第6号』 婆良岐考古同人会 1984
- 設楽博巳 『西の台(第2次)』 船橋市遺跡調査会 1985
- 白石浩之 『細田遺跡』 神奈川県埋蔵文化財調査報告23 神奈川県教育委員会 1981
- 鈴木敏昭 『足利遺跡』 久喜市教育委員会 1980
- 清藤一順・古内茂 『飯山満東遺跡』 房総考古資料刊行会 1975
- 谷口康浩・原田昌幸他 『藤の台遺跡III』 藤の台遺跡調査会 1980
- 寺門義範 『茨城県所作貝塚発掘調査報告書』 霞ヶ浦文化研究会 1975
- 西川博孝・和田哲 『古和田台遺跡』 船橋市教育委員会 1973
- 西村正衛 「茨城県稲敷郡貝ヶ窪貝塚」『早稲田大学教育学部学術研究15』 早稲田大学教育学部 1966
- 西村正衛 『石器時代における利根川下流域の研究』 早稲田大学出版部 1984
- 橋本勝雄 「五本松遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書IX』 (財)千葉県文化財センター 1989
- 村田一二・下津谷達男 『野田市北前貝塚』 野田市郷土博物館 1979
- (財)茨城県教育財団 「外山遺跡」『石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』1982

第4節 綱原遺跡の成果

綱原遺跡からは、5基の円墳とともにほぼ同時期と考えられる祭祀遺構及び2軒の竪穴住居が検出された。ここでは、綱原遺跡における古墳群の年代と旧表土面に存在する祭祀遺構との関連から古墳と祭祀との関係に触れてみたい。

1. 古墳群の年代

本古墳群において時期が判断できる古墳は、大型の円墳である001・002・005号墳である。時期を比定する資料には、主体部から出土する遺物群と、002・005号墳の旧表土上面から出土した遺物群が挙げられる。以下で、土器・石製模造品に分けて説明し、各古墳の年代を考えてみる。

土器 004号墳を除く各古墳で出土している。001号墳と005号墳では、周溝及び盛土中から土師器が検出されている。杯はいずれも半球形を呈し、赤彩が加えられている。他に小形の壺や大形の壺等が認められる。遺物のセットからみて、古墳に伴う土器群と考えられよう。時期を判断する資料は杯と壺である。半球形を呈する杯は和泉式の特徴を有している。また、大型の壺は折り返し口縁で、ほぼ中位に最大径を持つ球形胴を示している。005号墳40のように胴部内面をヘラケズリするものも含まれており、和泉式でも古い様相を持った壺である。旧表土面から土器群を出土する古墳は002・005号墳である。002号墳は高杯と手捏ね土器を主体とする。完形となるものがなく明確な時期は不明であるが、平底を呈する小形の赤彩杯と、円形の透かしを施した器台、刷毛目調整を加えた鉢の存在から、001号墳よりやや古い段階のものと考えられる。005号墳の旧表土面からは非常に多量の土器群が出土している。高杯・壺・埴・甕を主体としており、杯は含まれない。この土器群は、限定された器種構成でありながらかなりのバラエティーが存在している。ただ、和泉式の古い段階に主体がありそうである。

以上から、本古墳群は4世紀末から5世紀前半の比較的短い期間に築造されたことが想定され、あえて新旧関係を呈示するならば、古い方から順に002→001→005号墳となろう。

石製模造品 本遺跡から検出された石製模造品は、002・005号墳の旧表土上面である。器種としては剣形品・有孔円板・白玉がほとんどで、刀子の破損品が1点のみみられる。この内、時期決定の有効な資料は白玉と剣形品である。白玉は、側面に稜を有する古手のタイプが含まれ、第140図の法量分布図に示したように佐原市山之辺手ひろがり3号墳ときわめて類似する。この古墳は4世紀末に比定されるようであり、005号墳の旧表土上面の白玉もほぼ同時期と考えられる。また、剣形品は身部中央に鐔を表したタイプが多く、やはり古手の所産である。ただ、005号墳では扁平となる新しい様相も含まれており、その観点からすれば、002号墳から005号墳への変遷が考えられよう。

このようにみても、本古墳群は4世紀末から5世紀前半にかけての築造であり、主体と

なる002号墳と005号墳では、前者から後者へと順次築造されたことが窺える。この状況は旧表土面での石製模造品にも反映しており、002号墳では剣形品と有孔円板で構成されていたものが、005号墳では白玉が加わり、しかも多量に使用されるという現象がみられる。後述する祭祀が妥当であるならば、まさに祭祀形態の変化を如実に示しているであろう。

2. 古墳と祭祀

前述したように、4世紀末から5世紀前半段階に構築された3基の古墳のうち、002号墳と005号墳では旧表土面から石製模造品を含む遺物群が一括して廃棄されていた。問題となる点は、この遺物群の性格である。可能性として、竪穴住居跡・石器製作跡・祭祀遺構が考えられよう。この遺物群と古墳の土層断面を比較すると、古墳の旧表土が落ち窪んだ様子は窺えず、旧表土上面から遺物が出土している状況から竪穴住居とすることは困難である。また、遺物群の中に石製模造品の未製品や剝片が含まれていることから、石器製作跡の可能性もあるが、竪穴住居と同じ状況で掘り込みはなかったものと考えられる。さらに、時期的にやや新しくなるが、木更津市マミヤク遺跡の1号祭祀遺構では、祭祀遺物とともに滑石の未製品や剝片が混在していた。報告者は、「……祭祀執行の場においても、応急的に白玉などの増産が図られたものと解することができようか。」と述べている（小沢 1989）。本遺構においてもまさにこの状況が当てはまり、未製品などの存在から石器製作跡とすることは避けたい。となると、2基の古墳の旧表土面から出土した遺物群は祭祀に伴うものと理解するのが最も妥当と考える。古墳の平面プランにおける祭祀の位置は2基とも旧表土南端にあり、両者に共通したものとして注目される。

それでは、この祭祀遺物群は何を意味するのであろうか。同様な類例がほとんどないため結論づけることはできないが、旧表土上面からまとまって出土している点と、石製模造品が剣・円板・白玉で構成される点に重要な意味が存在しているようである。5世紀前半の古墳では、これら以外に農工具の模造品が含まれるのが通有であり、しかも、主体部からの出土例がほとんどである。本古墳では005号墳の中に刀子の破損品が1点認められるが、きわめて客体的存在である。古墳から出土する石製模造品の性格については多くの研究者によって検討されており、最近では、白石太一郎氏によって新しい見解が出されている。白石氏は、小出義治氏らによって示された古墳時代中期における「葬と祭の分離」（小出 1966）を批判し、「……むしろこの段階になると滑石製農工具の副葬とは別に、あるいはそれにかわって、一般の神まつりに用いられるようになっていた剣、有孔円板、勾玉などの模造品が古墳における祭祀にも用いられることが少なくなかったと考えられるのである。したがって、この段階になってはじめて神まつりと葬送儀礼が分離したと考えることはできない。」と述べ、「こうした神まつりの司祭者であった首長に対する葬送儀礼と、神に対するまつりは、古墳時代の初めから本来全く別個のものであったろう」とまとめている（白石 1985）。これは、古墳の主体部及び墳頂部から出土する

ものと祭祀遺跡から出土するものとの比較であり、本遺跡の場合、旧表土上面から出土しているため単純に当てはめることはできないが、本古墳群における石製模造品の構成からみると、司祭者たる首長（被葬者）に対する一種の儀礼と考えられる。それはおそらく、首長の墓地選定に当たり、墓域に対する地鎮的な行為が剣・玉・円板の石製模造品を使用して行われたものと思われる。

引用・参考文献（五十音順）

- 小沢 洋他 『第5章 古墳時代中期』「小浜遺跡群II マミヤク遺跡」 君津郡市考古資料刊行会 1989
- 小出義治 「祭祀」『日本考古学』V 古墳時代下 河出書房 1966
- 白石太一郎 「神まつりと古墳の祭祀—古墳出土の石製模造品を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 1985

第5節 綱原屋敷跡遺跡における中世牧について

綱原屋敷跡遺跡は、遺跡名が示すような屋敷の跡ではなく、中世の牧に付属する「捕込」遺構であることが想定された。

本遺跡が位置する下総には、古代から近世にかけて多くの牧が所在することが知られている。古代では、高津馬牧・大結馬牧・木嶋馬牧・長洲馬牧・浮嶋牛牧の5馬牛牧が官牧として『延喜式』に記されている。また、江戸時代には、小金牧・佐倉牧と呼ばれた広大な牧が設けられていた。古代の官牧の比定地については諸説があり、不明な部分が多いが、少なくとも本遺跡はこのいずれにも含まれていないようである。さらに、佐倉牧のうち、矢作牧と油田牧が本遺跡に近いが、現存する馬土手の範囲からは外れるようである。中世の牧については史料等が乏しく、詳細は不明である。

上記のいずれにも相当しない本牧はいかなる背景で成立し展開したのであろうか。この点で重要な鍵を握っているのが中世の『香取文書』である。本牧が立地する字「綱原」は、「旧大彌宜家文書」應保二年六月三日付大中臣実房讓状などという「葛原牧内織幡村」の域内に含まれていたと考えられる。「綱原」については、以下の史料に記載が認められる。

1162（応保二）年関白左大臣（藤原基実）家政所下文

「可任国司序宣，停止大彌宜真房非道妨，令宮司中臣助重知行当社四至内織服・小野・綱原三箇村事」

1226（嘉禄二）年関白前太政大臣（藤原家実）家政所下文

「可早任代代政所下文已下之証文等，以中臣助道為神主職，令寮掌当社領大槻郷内壱所小野・織錦・綱原三箇村事」

これらの史料から、綱原が小野・織幡にともなって現れる場合が多く、小野・織幡が「葛原



第239図 網原牧関係地名位置図

牧内」という冠称が付されていること、現存していない「葛原」という地名が「綱原」に通じられると思われること等からも、「綱原」が「葛原牧」に含まれる可能性が強い。「綱原」が「葛原牧」の一部を構成しているとするならば、本遺跡にみられる「捕込」は、「葛原牧」の中心的な施設と考えられよう。この葛原（綱原）村は、1299（正安元）年の多田有時所務和与状によると、同年に神主実秀と大彌宜実胤との間で「葛原村所務以下」について和与を行っている事実から明らかのように、領主支配の単位として把握されており、以後14世紀に至るまで大彌宜家相伝の私領として継承されるのである。本遺跡が牧の遺構であるという傍証には地名も考えられる。第237図に示したように、本遺跡の東側の小支谷内には、「馬洗」という小字が残っている。また、丁子地区には「東隠井」・「西隠井」という香取神宮の十二神井の内の二神井がある。この神井は、香取神宮の祭神である経津主大神が唐の国から得た馬千頭を隠したところと伝えられている。

このように、大彌宜家による開発にともなって成立した「葛原牧」には、当然香取神宮との強い関係が想定されよう。現在廃絶しているが、旧暦一月七日には香取神宮で白馬祭が行われていた。この白馬祭は、別名青馬祭・白馬節会・青馬節会と呼ばれている。白馬節会は「あおうませちえ」と読み、正月七日に行われる天皇の行事として知られている。本遺跡の「葛原牧」に付属する「捕込」では、おそらくこの節会に供する白馬（葦毛の馬）の選別が行われていた可能性が想定される。大宮司とともに社務を統括する重要な立場にあった大彌宜家の私領として開発された背景には、このような状況も十分考えられるのではなかろうか。

写真図版



大稻塚・棒木台遺跡調査前全景



大稻塚遺跡確認調査状況



棒木台遺跡確認調査状況

図版2 大稲塚遺跡



本調査区全景（一部）



002号炉穴



006号炉穴



005号炉穴



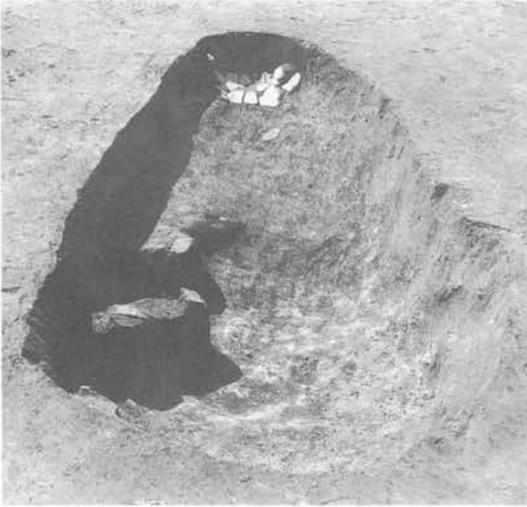
010号炉穴



007号炉穴



021号炉穴



022号炉穴



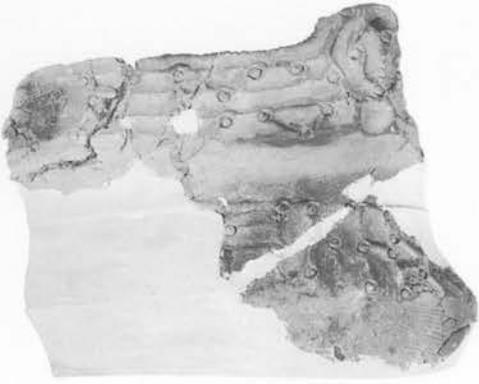
024号炉穴



025号炉穴



004号土坑



1 (002)



15 (021)



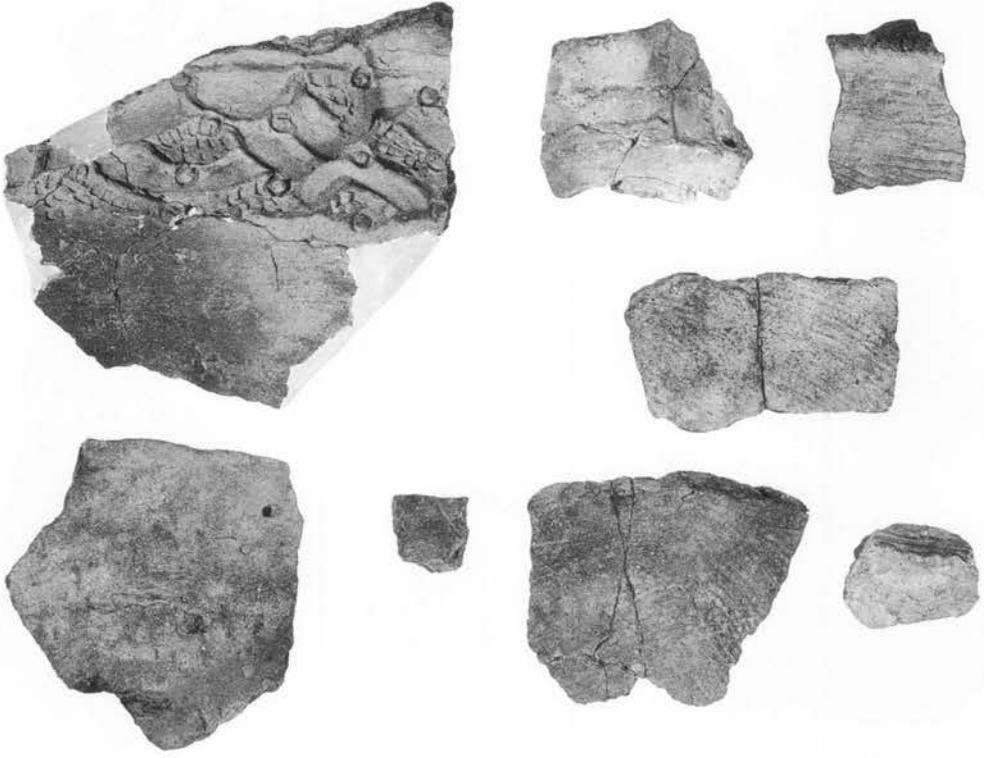
16 (021)



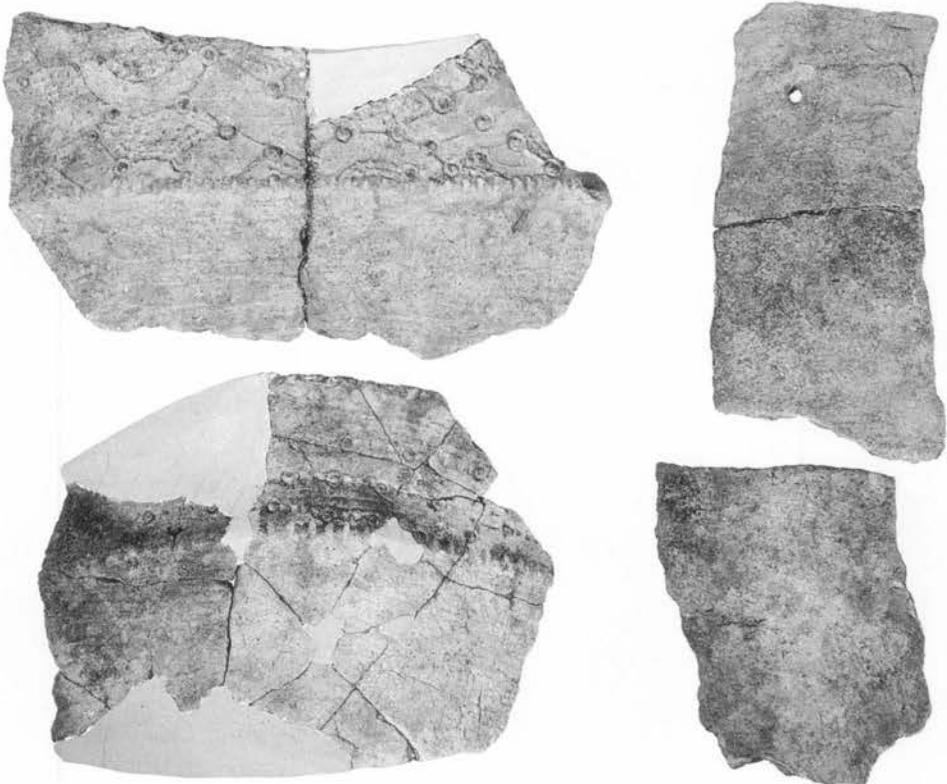
38 (024)



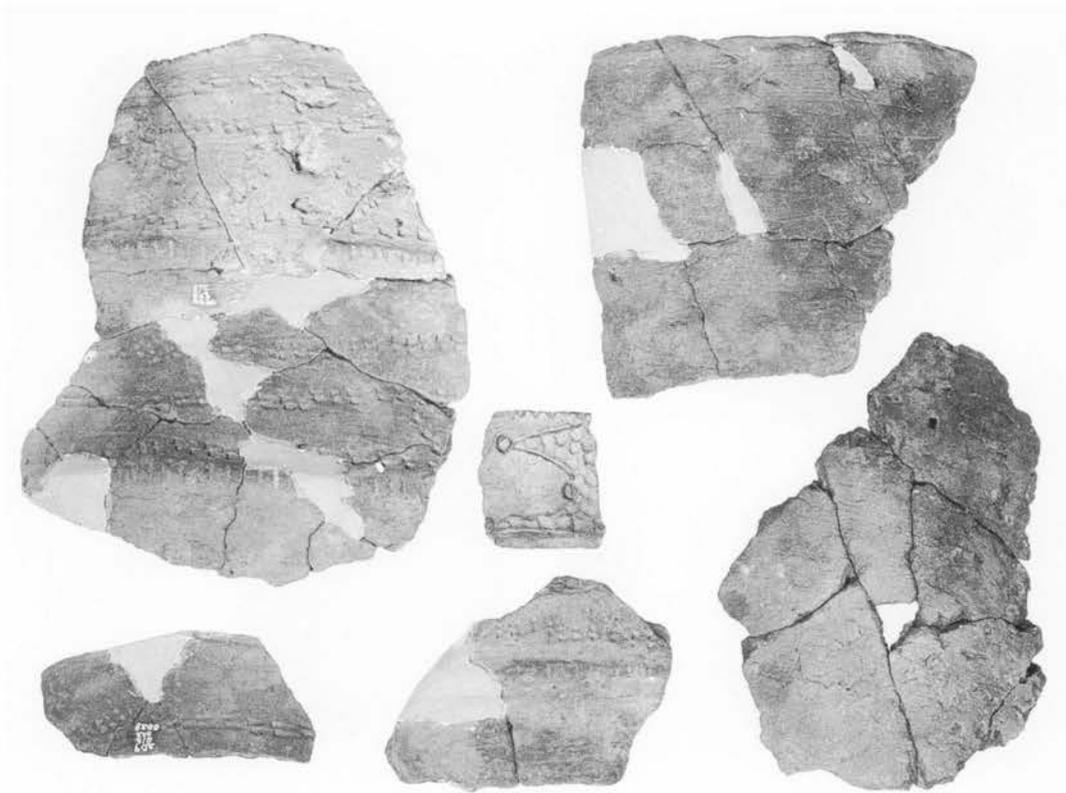
61 (033)



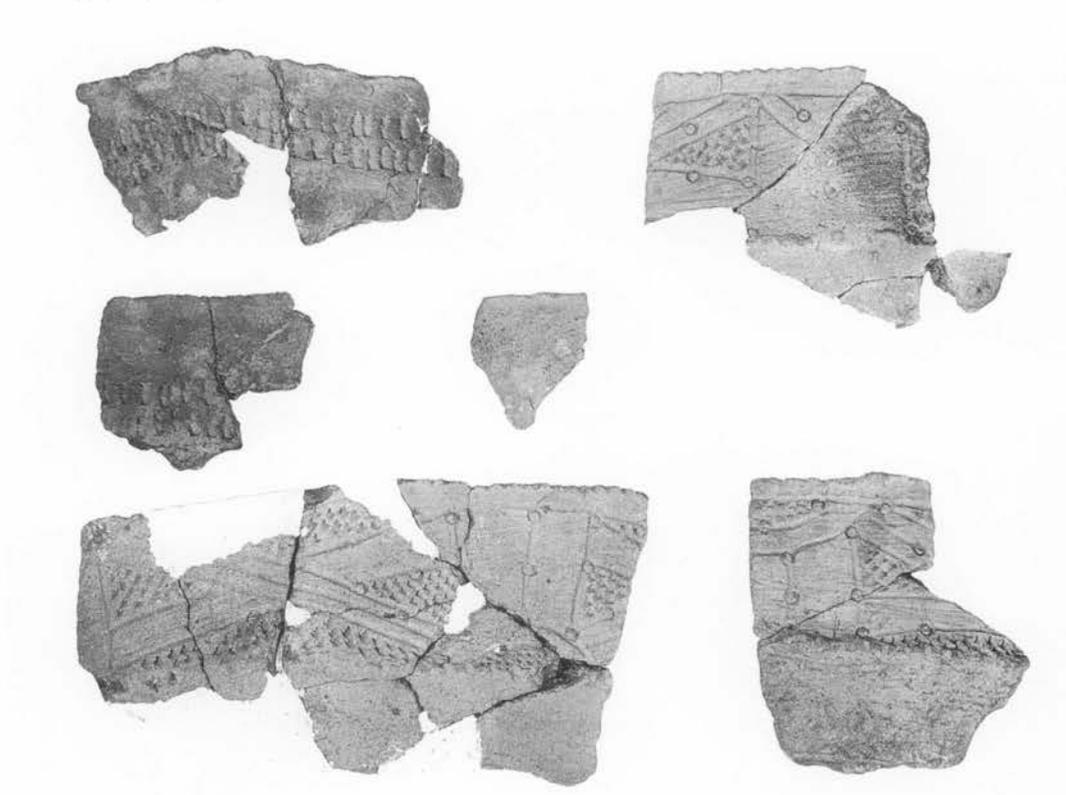
002・004・009・010・021号炉穴出土土器



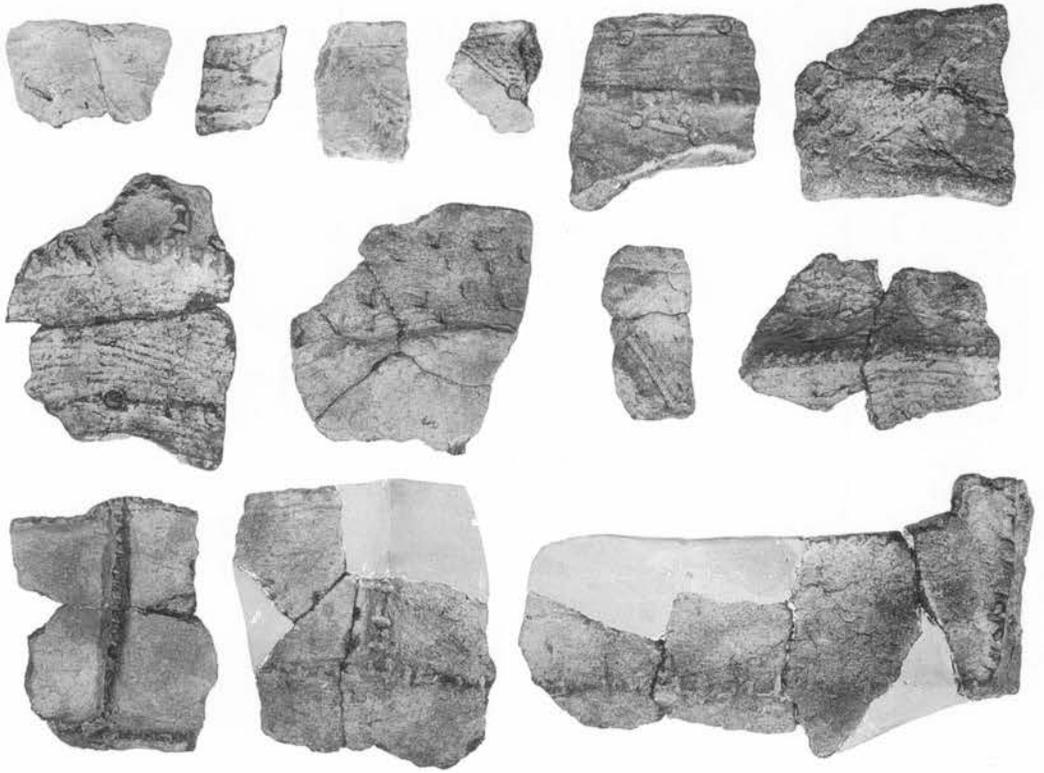
006号炉穴出土土器



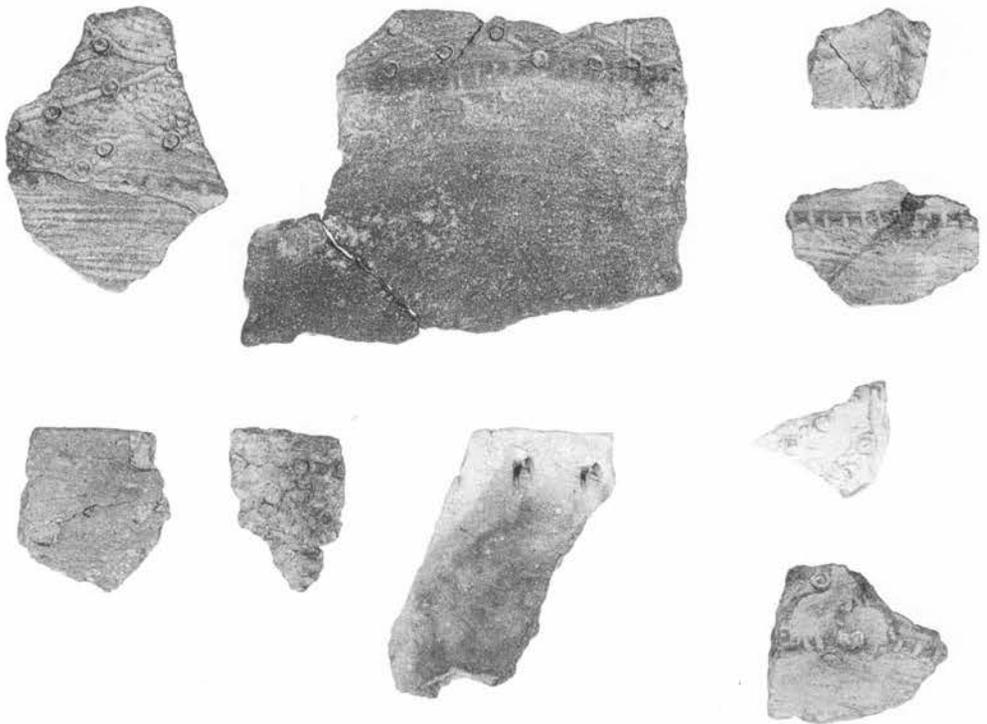
022号炉穴出土土器



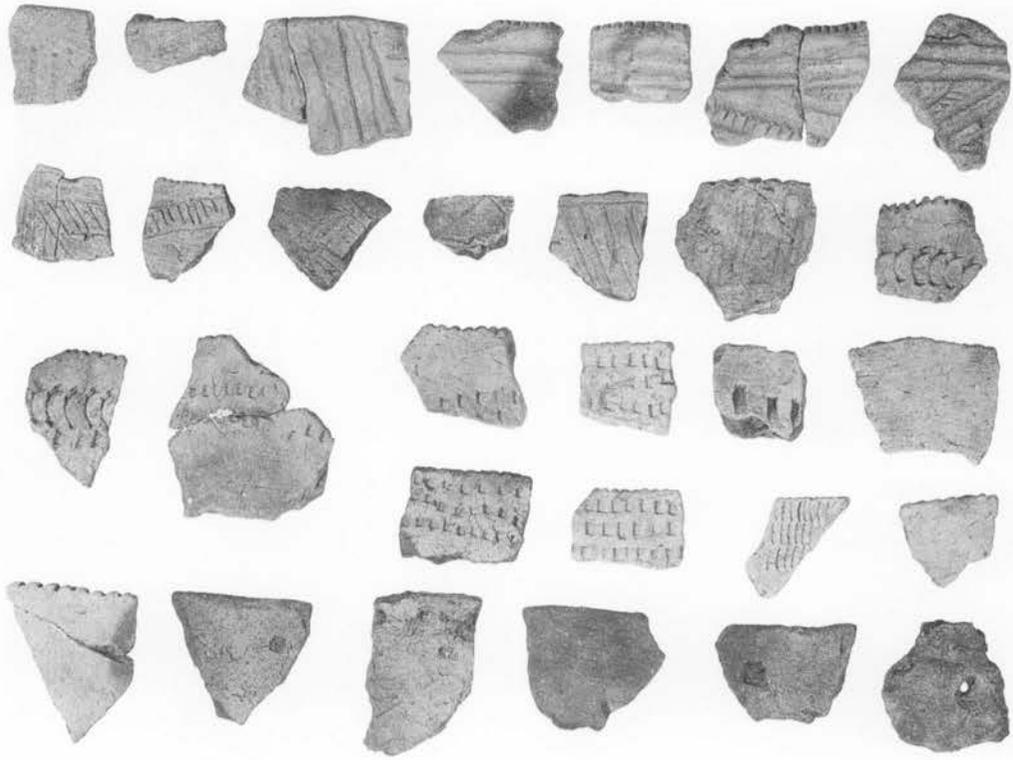
023号炉穴出土土器



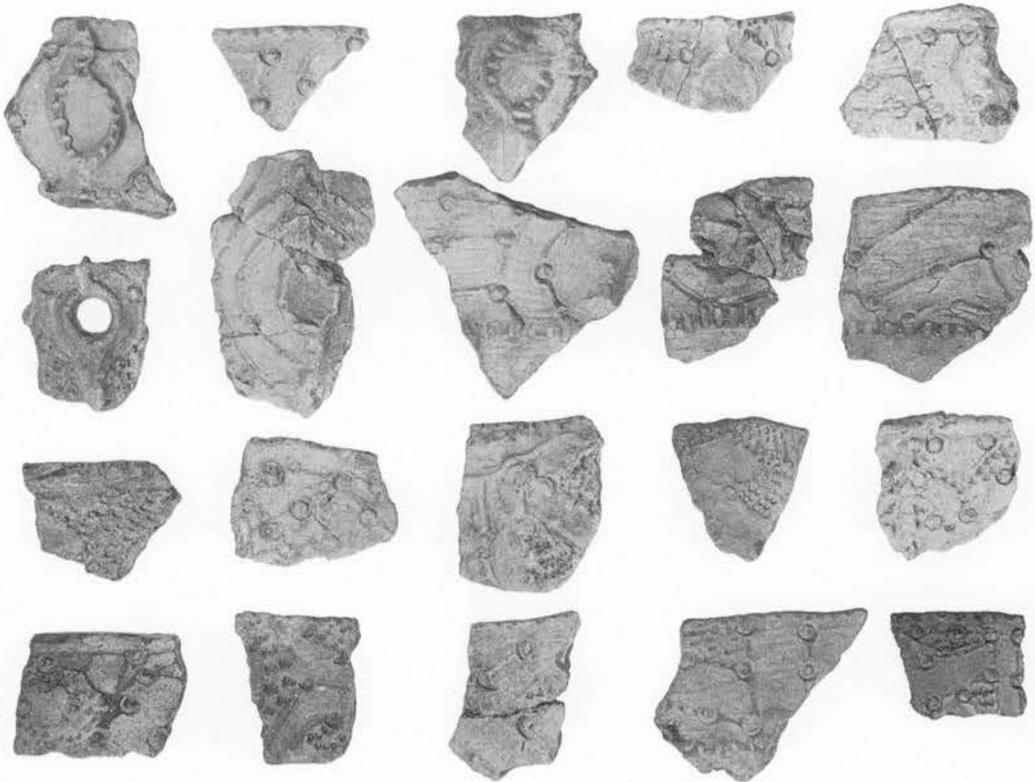
033号炉穴出土土器



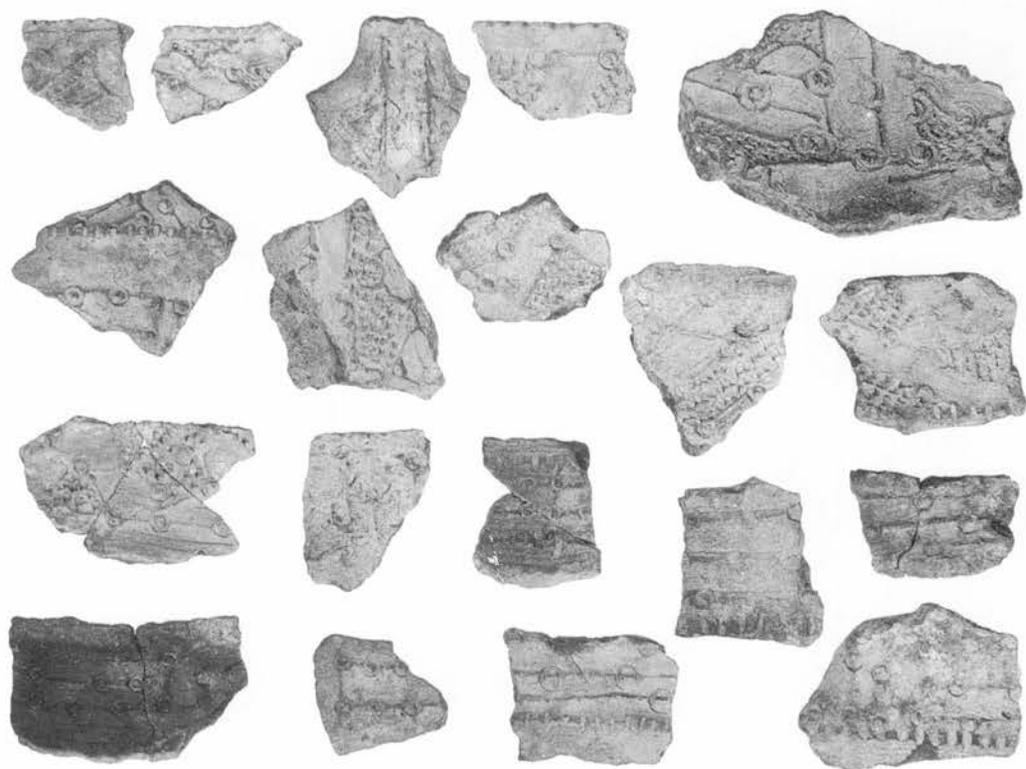
025・030~032・035号炉穴, 042号溝出土土器



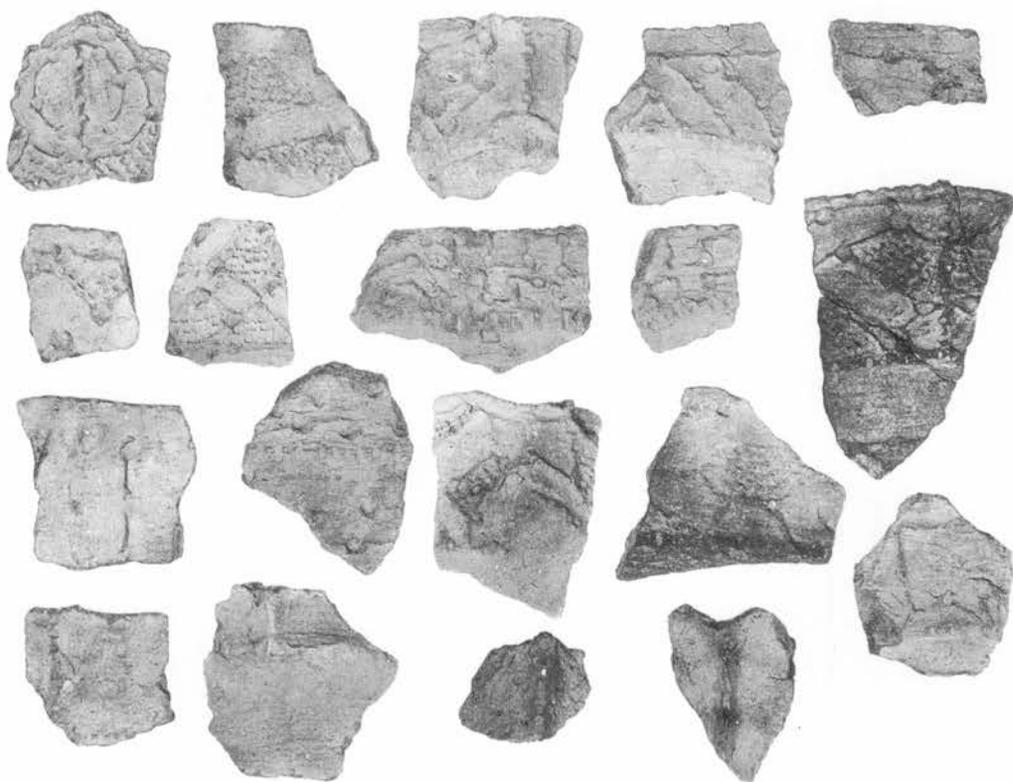
グリッド出土土器 (1) (第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群土器)



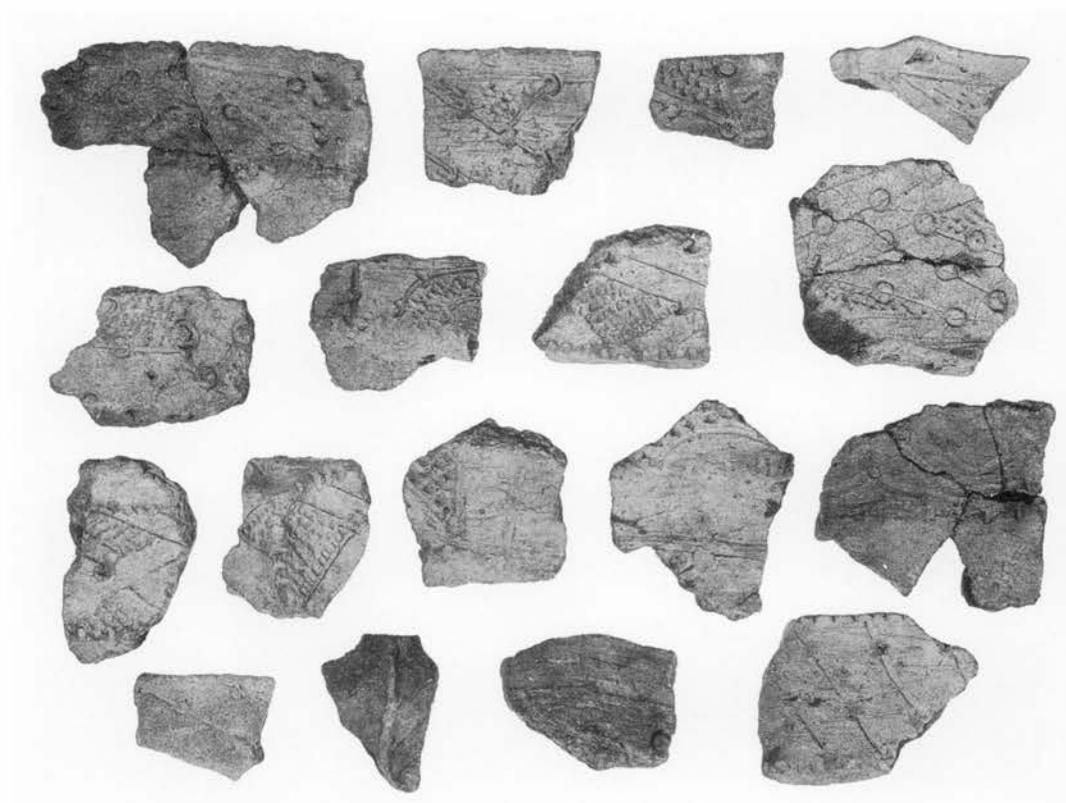
グリッド出土土器 (2) (第Ⅲ群土器)



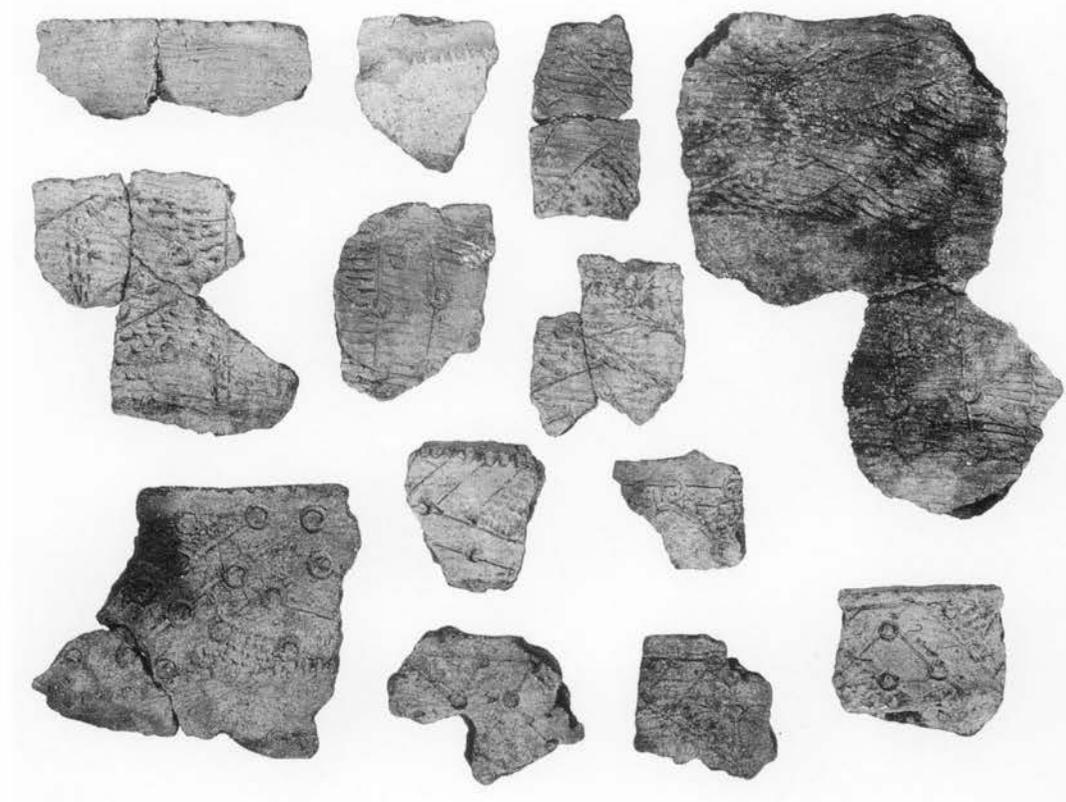
グリッド出土土器 (3) (第Ⅲ群土器)



グリッド出土土器 (4) (第Ⅲ群土器)



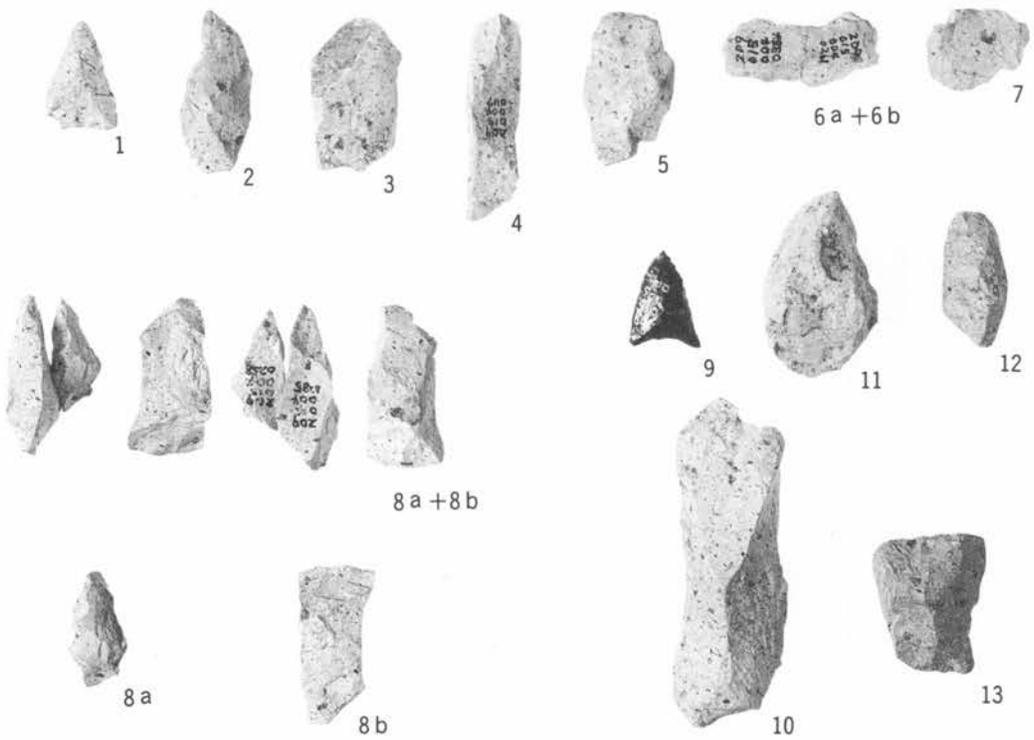
グリッド出土土器（5）（第Ⅲ群土器）



グリッド出土土器（6）（第Ⅲ群土器）

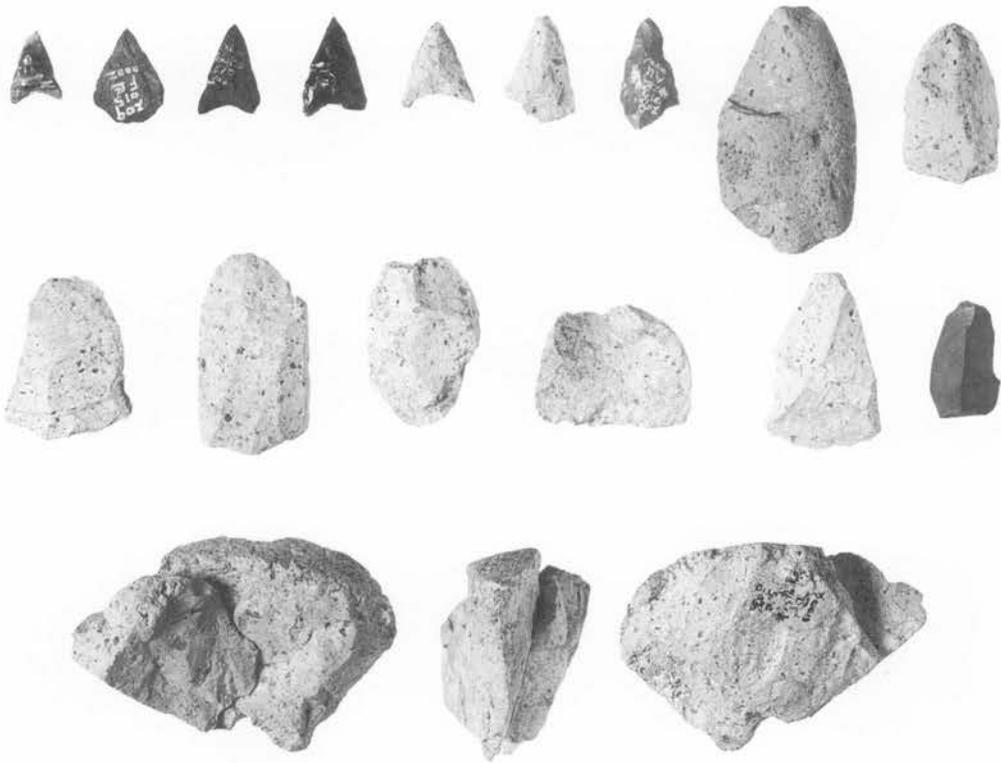


グリッド出土土器 (7) (第III群土器)

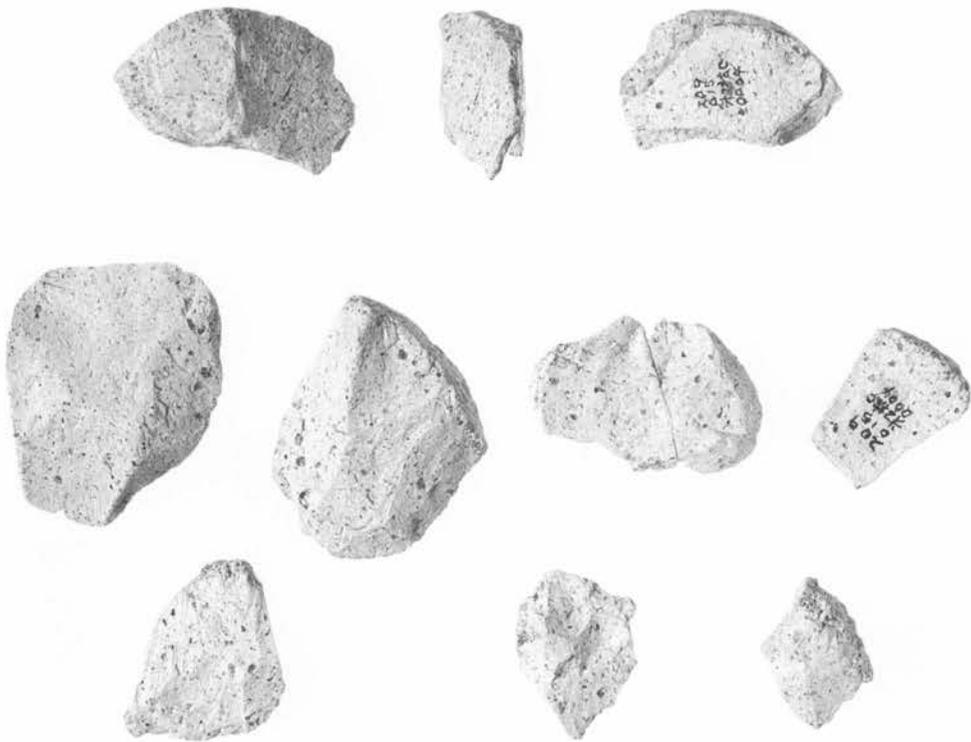


004号土坑, 006・008・033号炉穴, 041号溝出土石器

図版12 大稲塚遺跡



グリッド出土石器 (1)



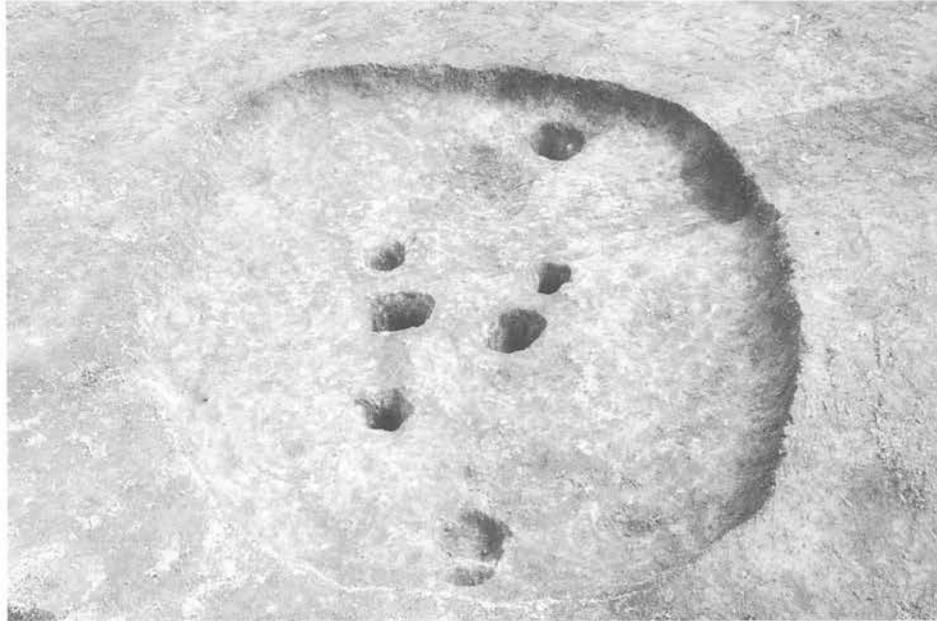
グリッド出土石器 (2)



毛内遺跡全景



001号竪穴住居跡遺物出土状況

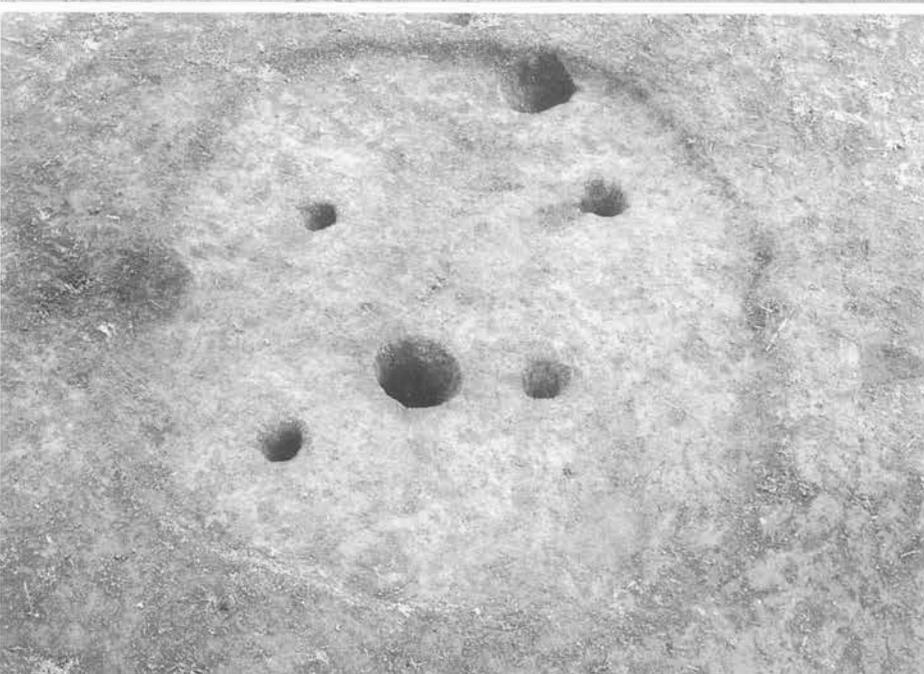


001号竪穴住居跡

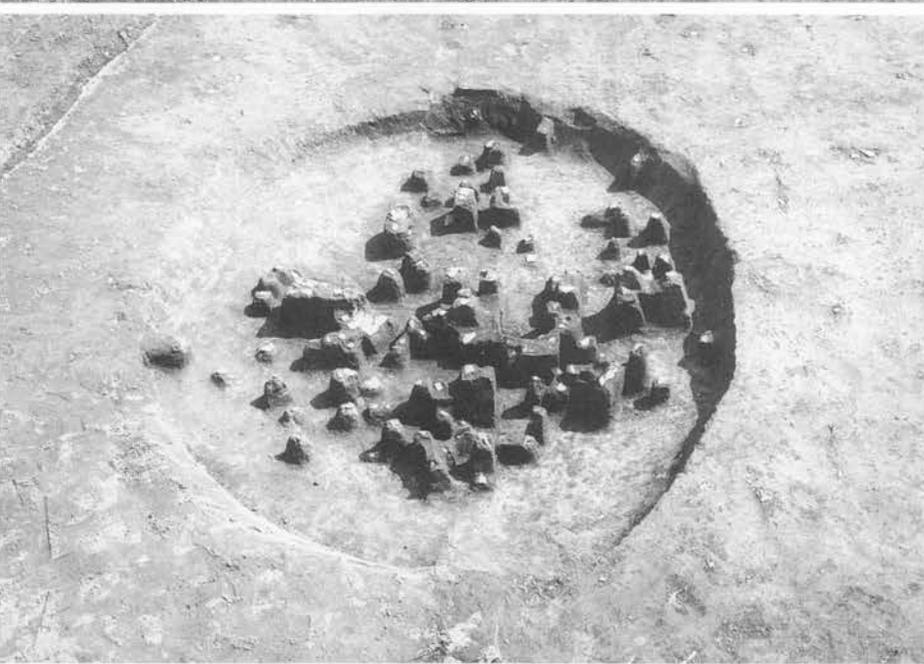
図版14 毛内遺跡



002号竪穴住居跡遺物出土状況



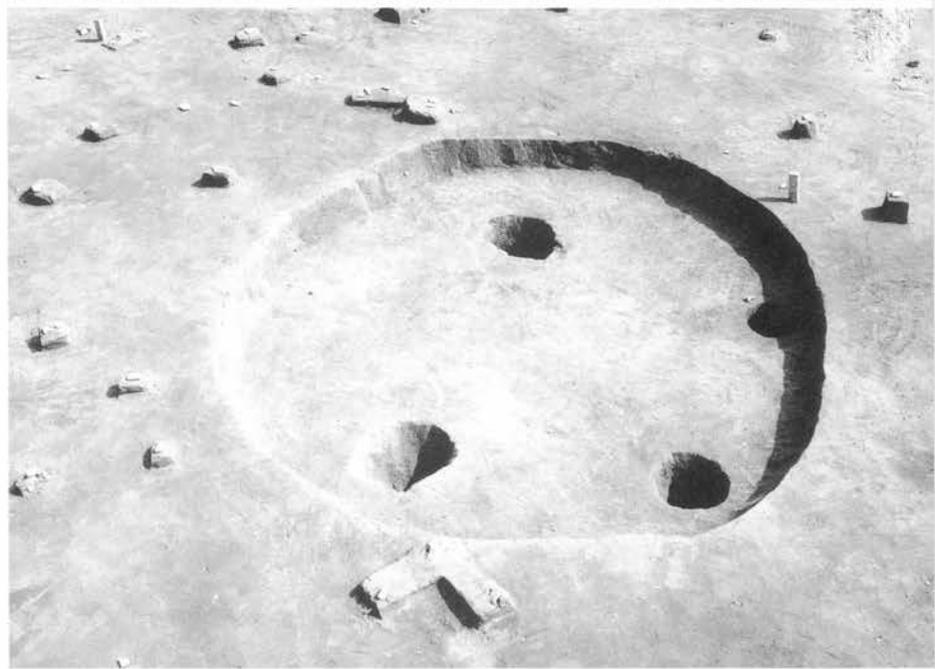
002号竪穴住居跡



003号竪穴住居跡遺物出土状況



004号竖穴住居跡



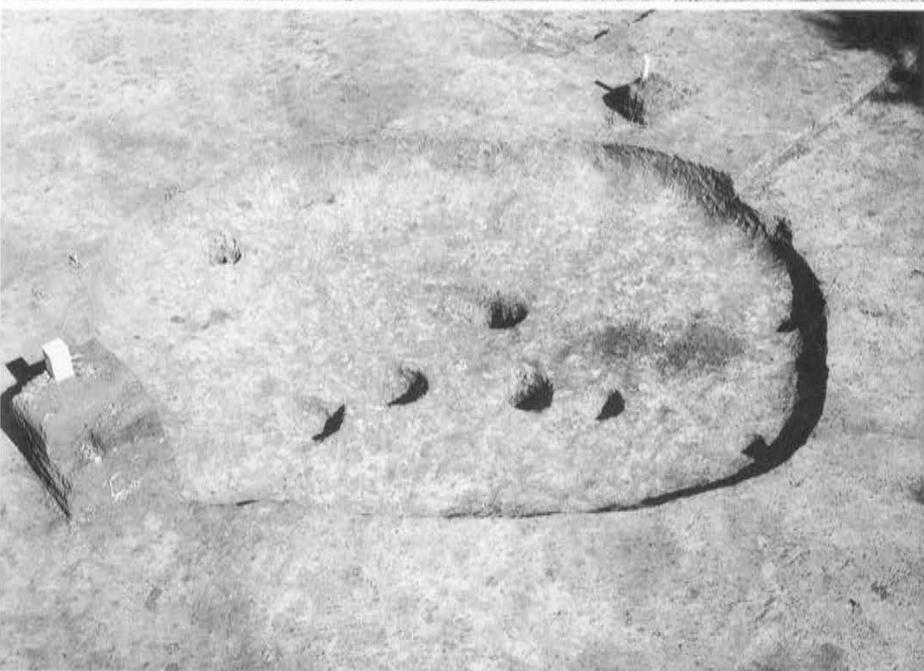
005号竖穴住居跡



006号竖穴住居跡



007号竪穴住居跡



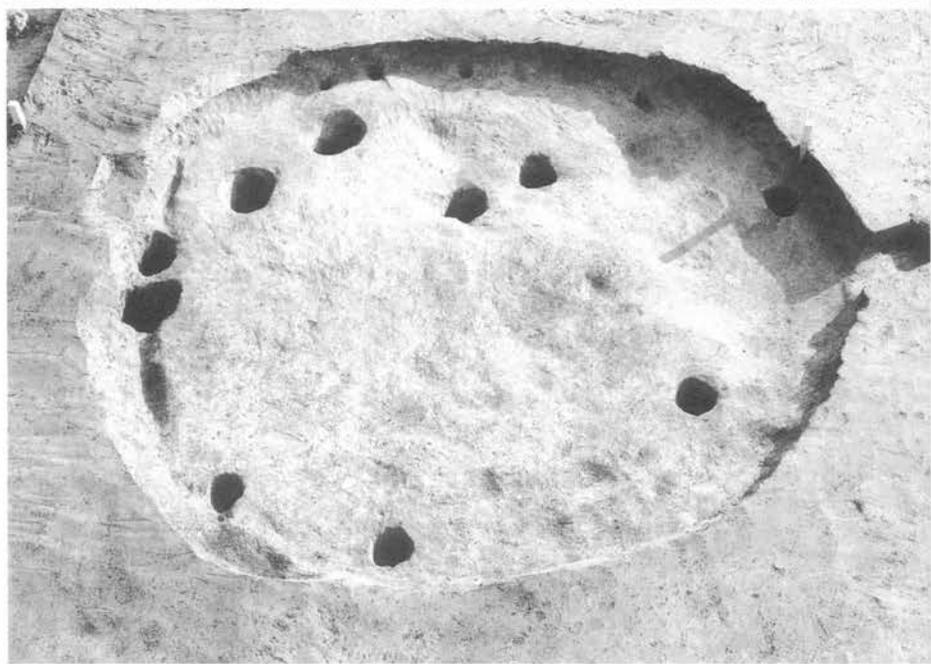
008号竪穴住居跡



009号竪穴住居跡



010号竪穴住居跡



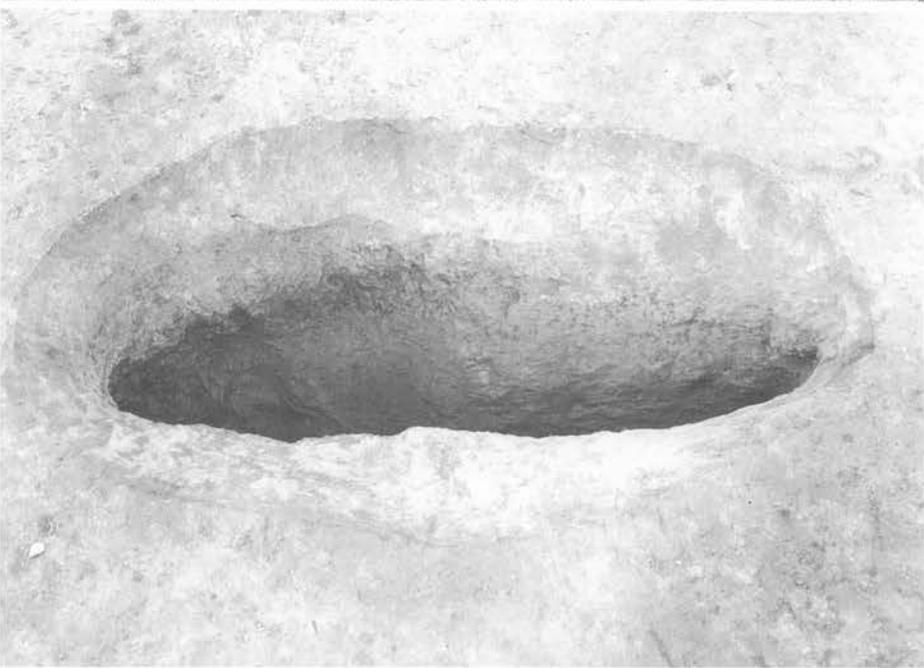
011号竪穴住居跡



013号竪穴住居跡



014号竖穴住居跡



105号土坑



125号土坑



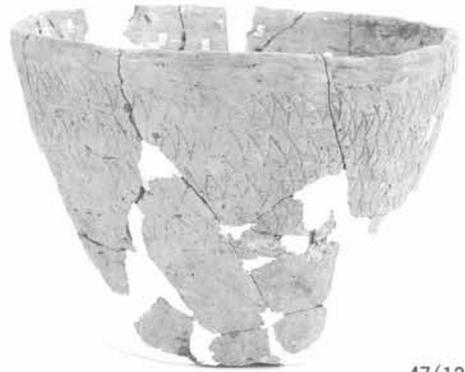
1 (001)



29(003)



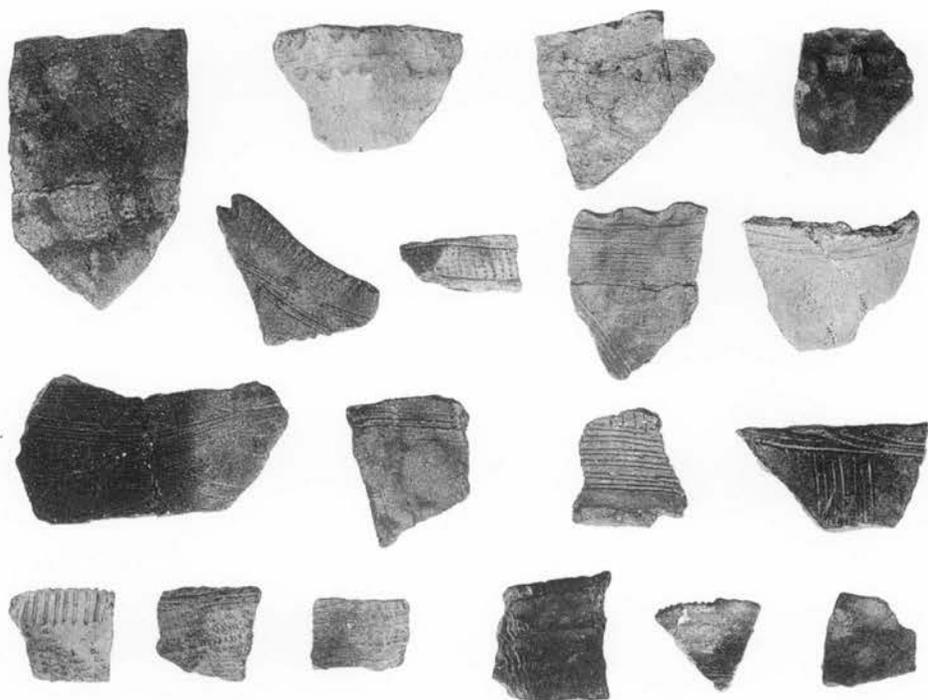
124(008)



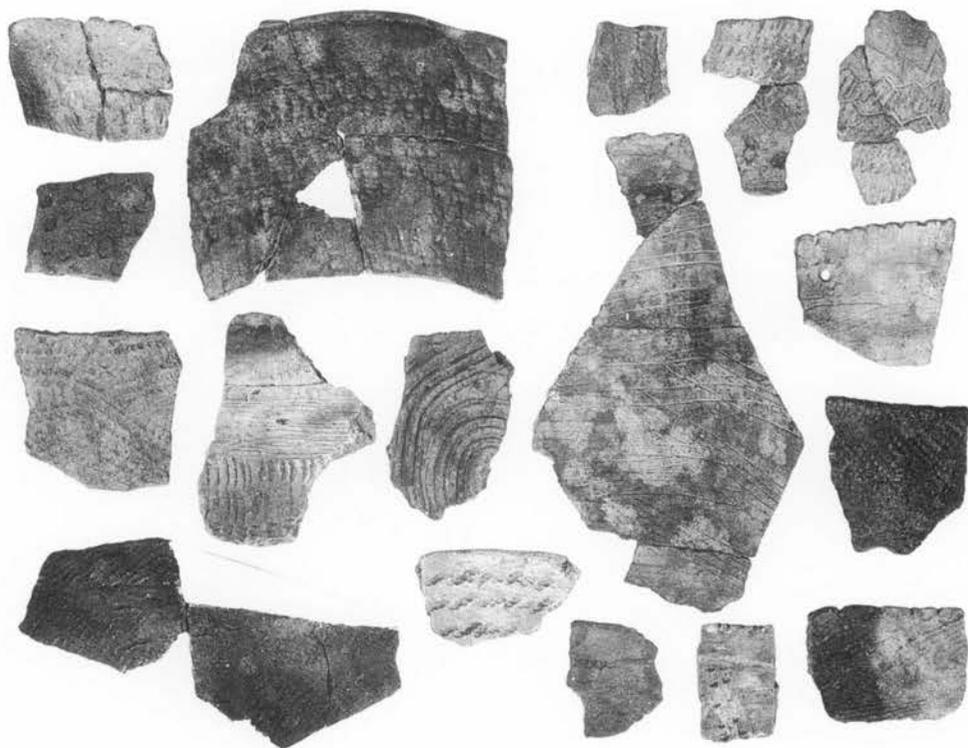
47(125)



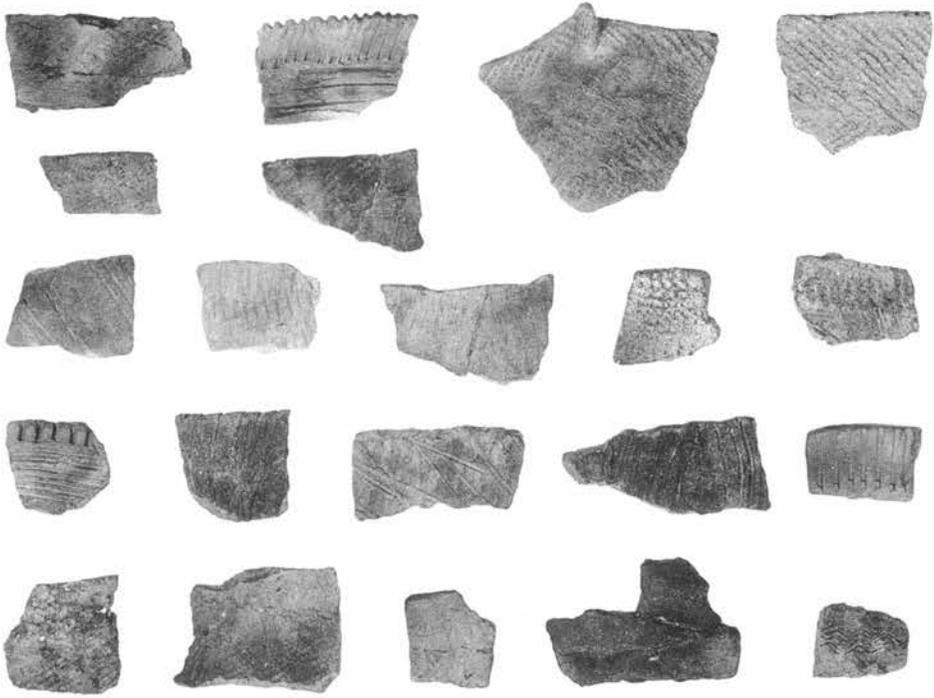
53(128)



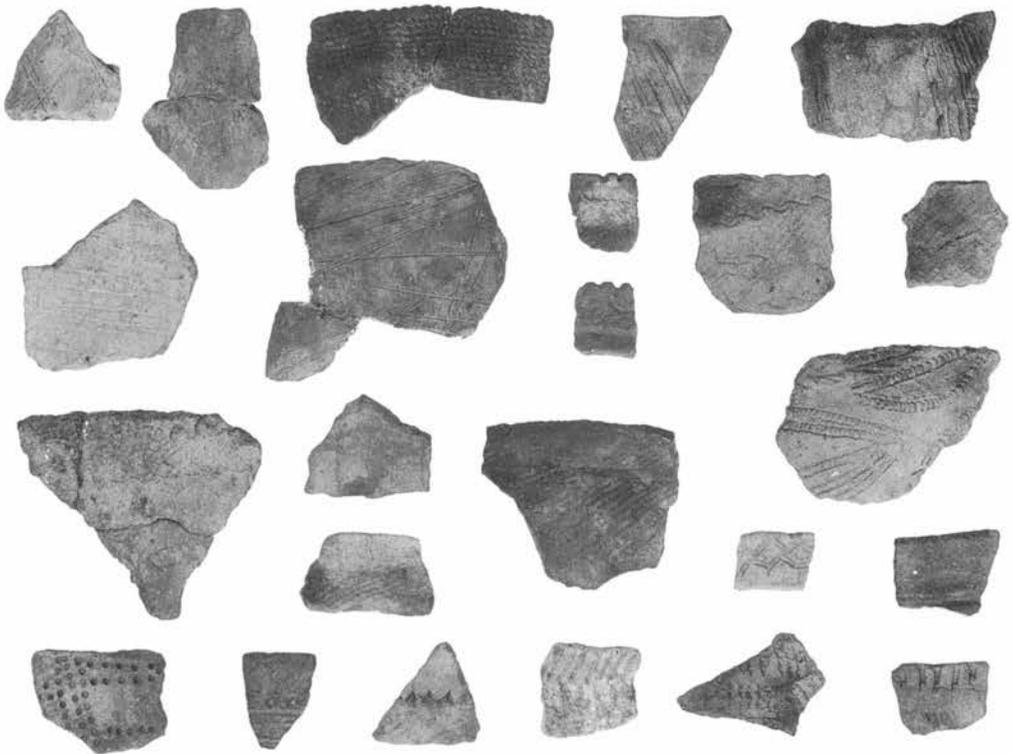
001・002号竪穴住居跡出土土器



003号竪穴住居跡出土土器

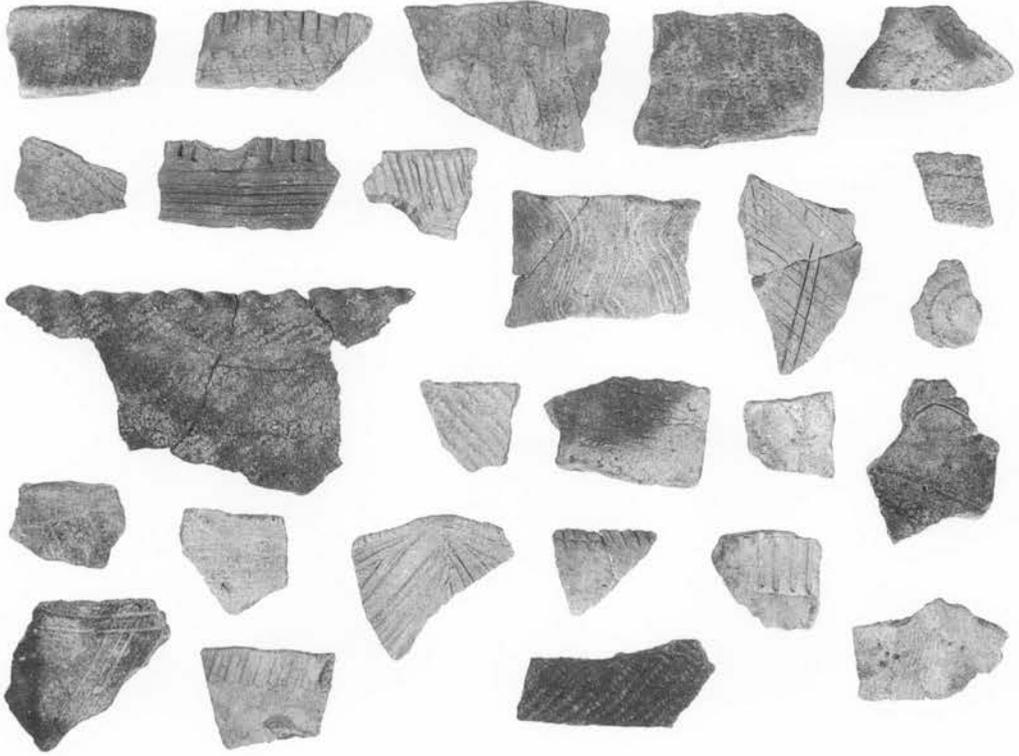


004・005号竪穴住居跡出土土器

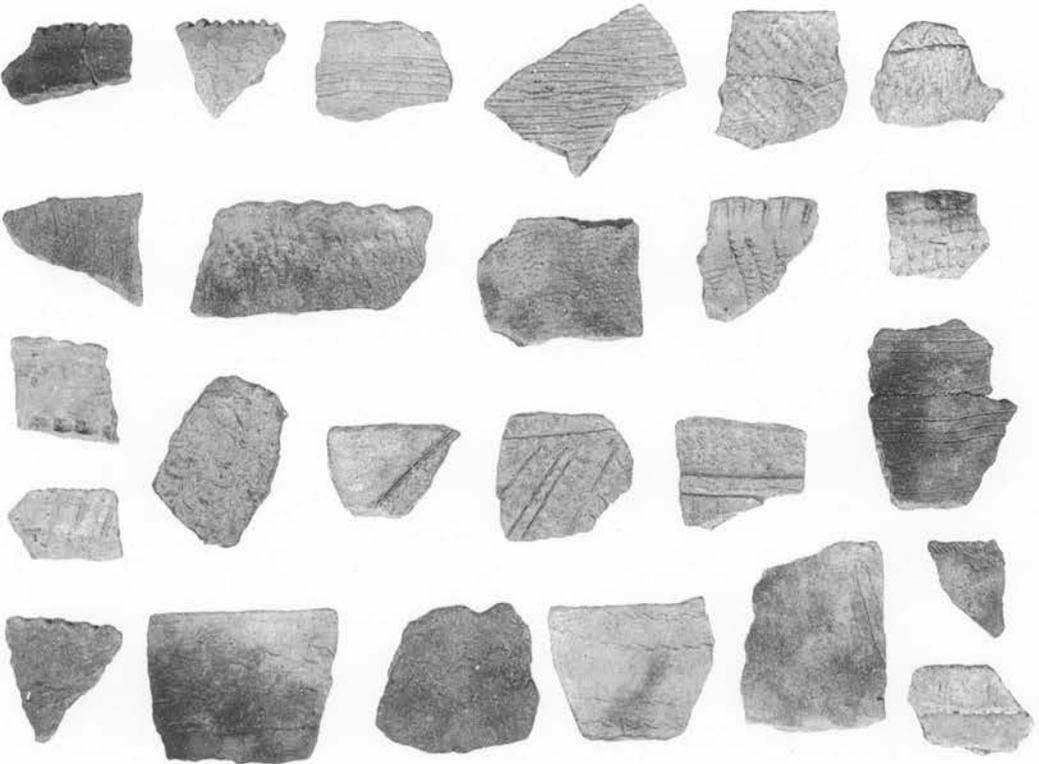


006・007号竪穴住居跡出土土器

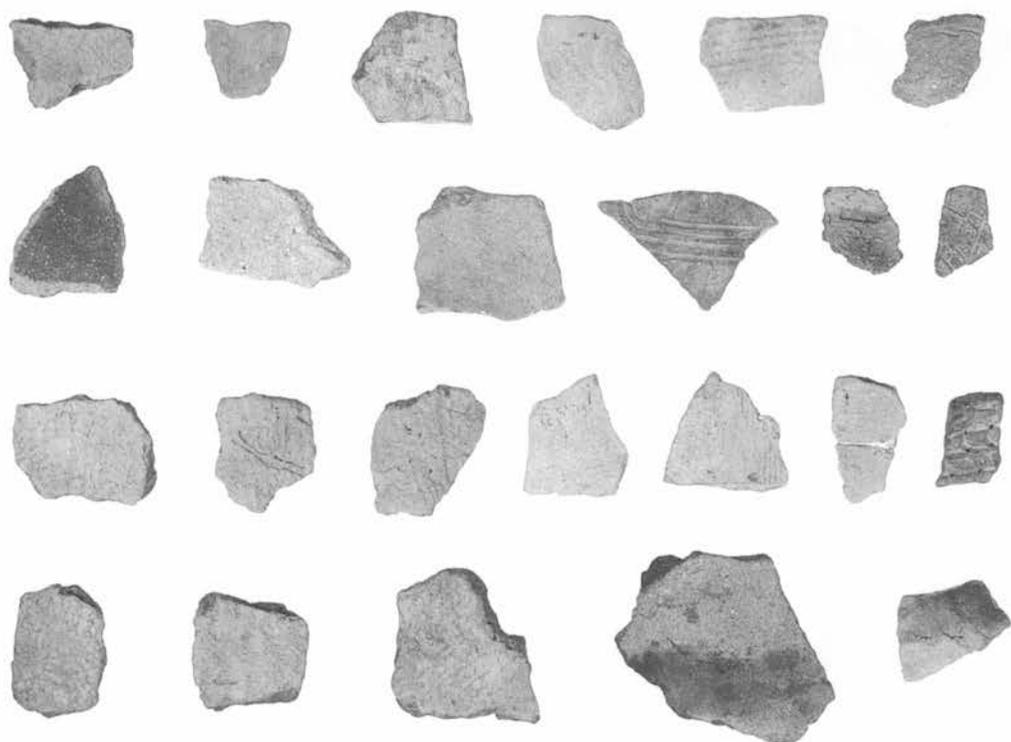
图版22 毛内遺跡



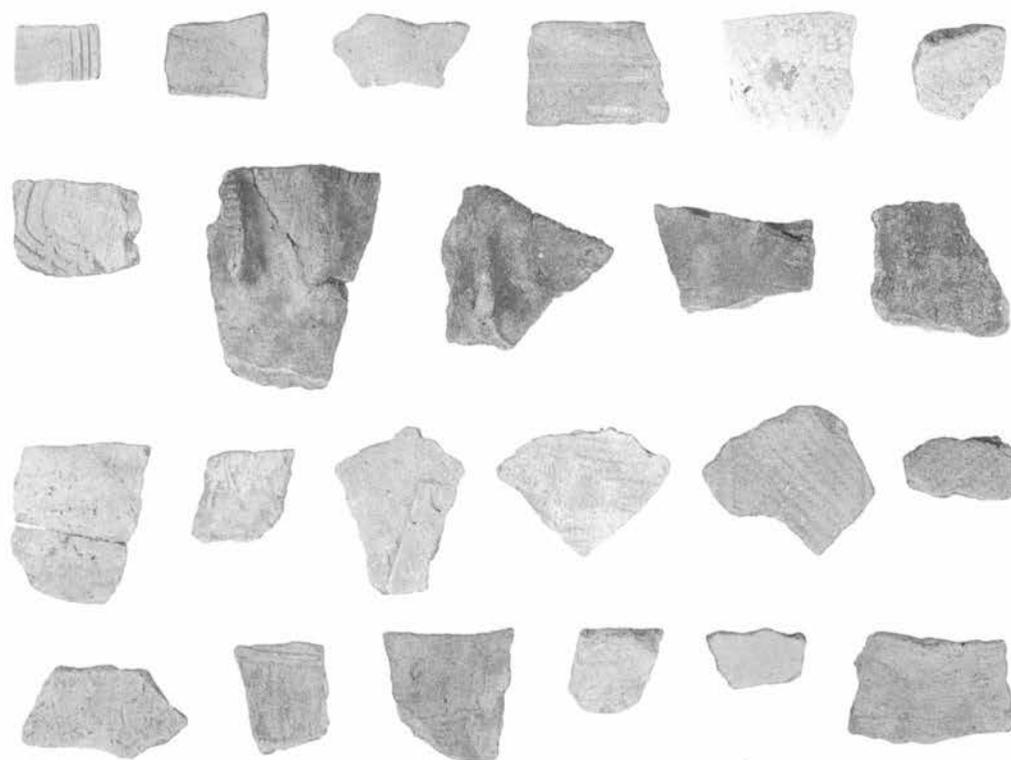
008~010号竪穴住居跡出土土器



013・014号竪穴住居跡出土土器

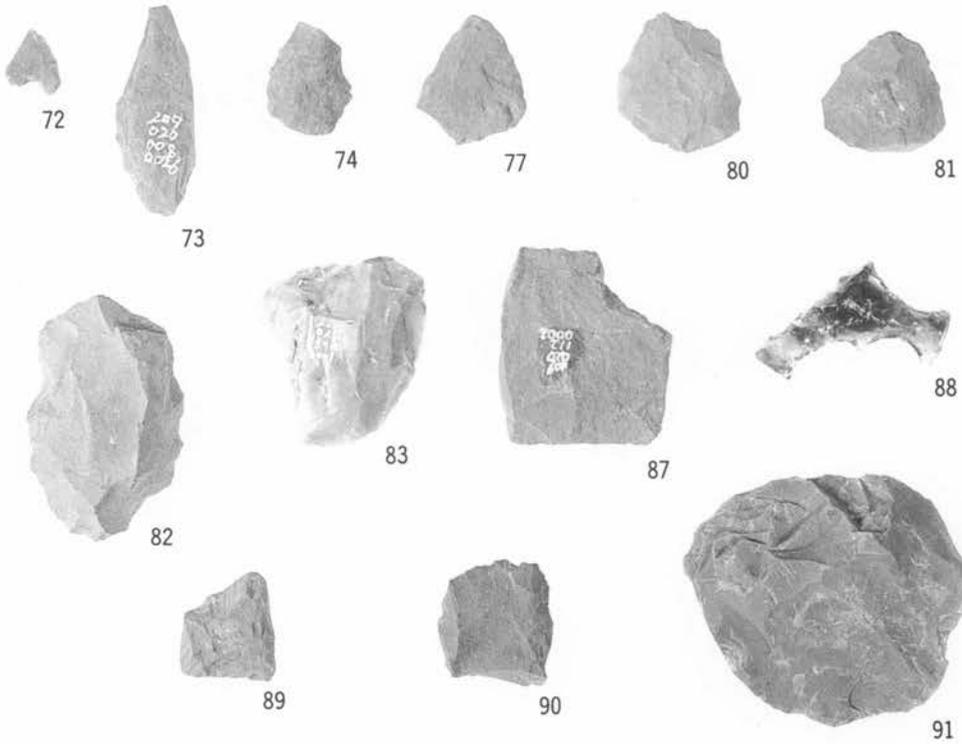
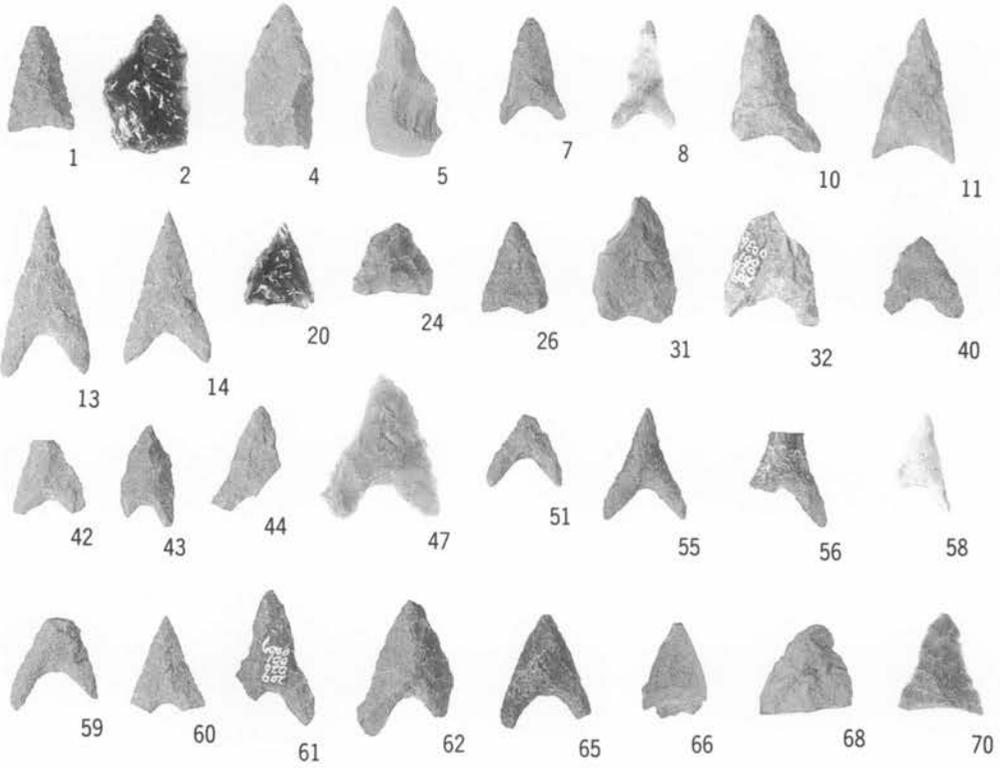


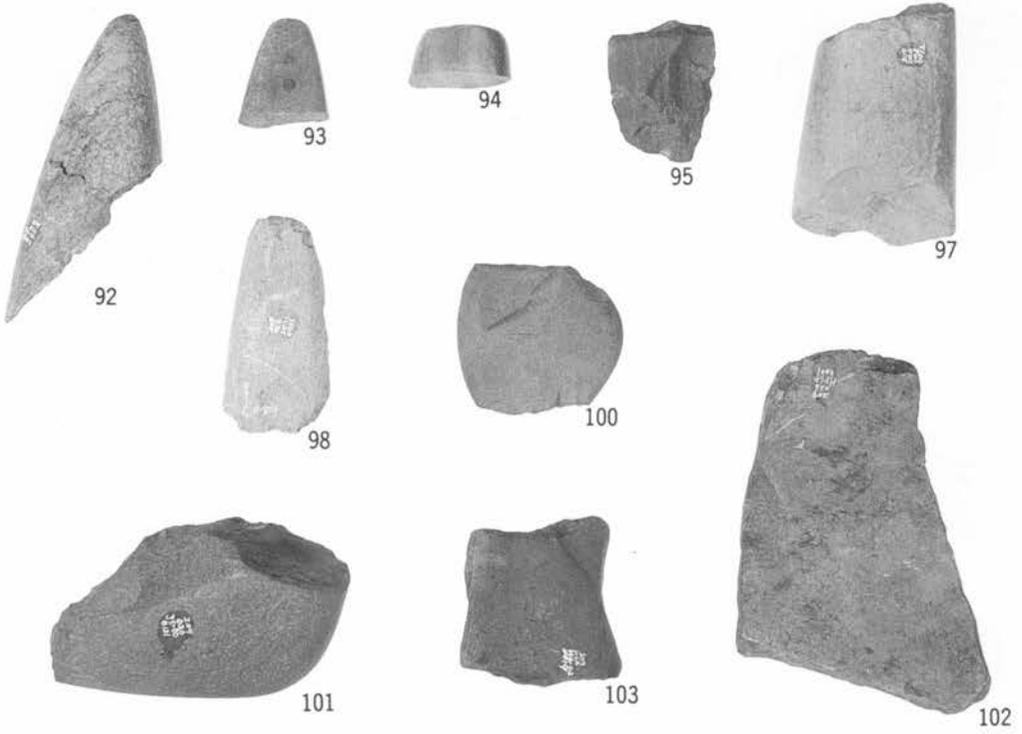
101~111号土坑出土土器



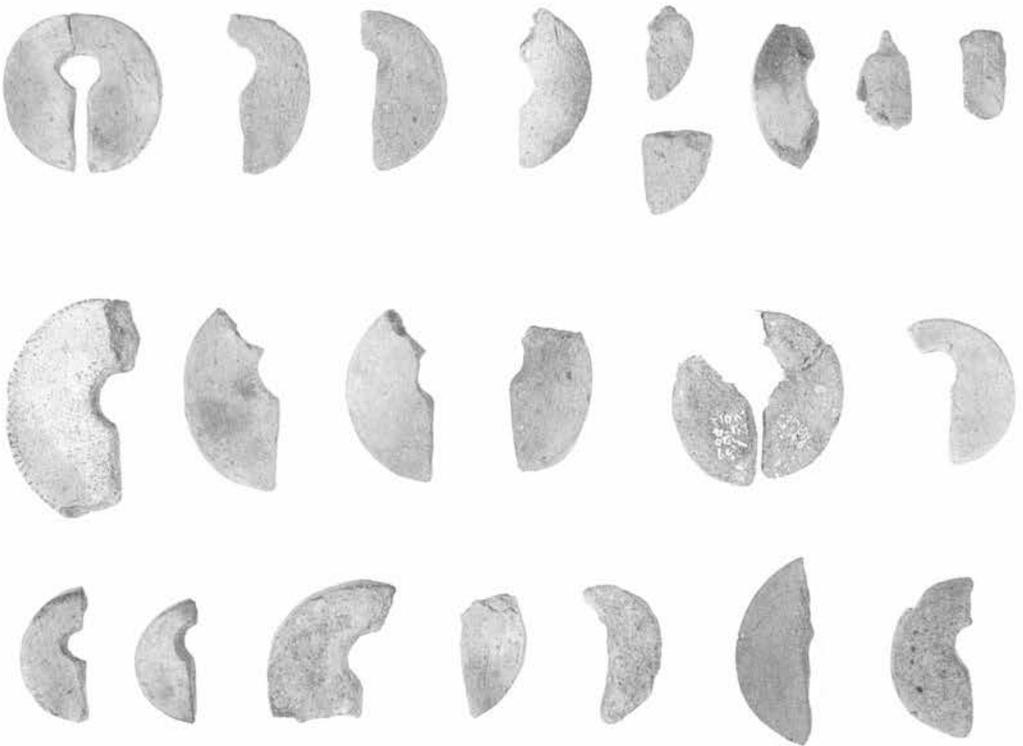
112~133号土坑出土土器

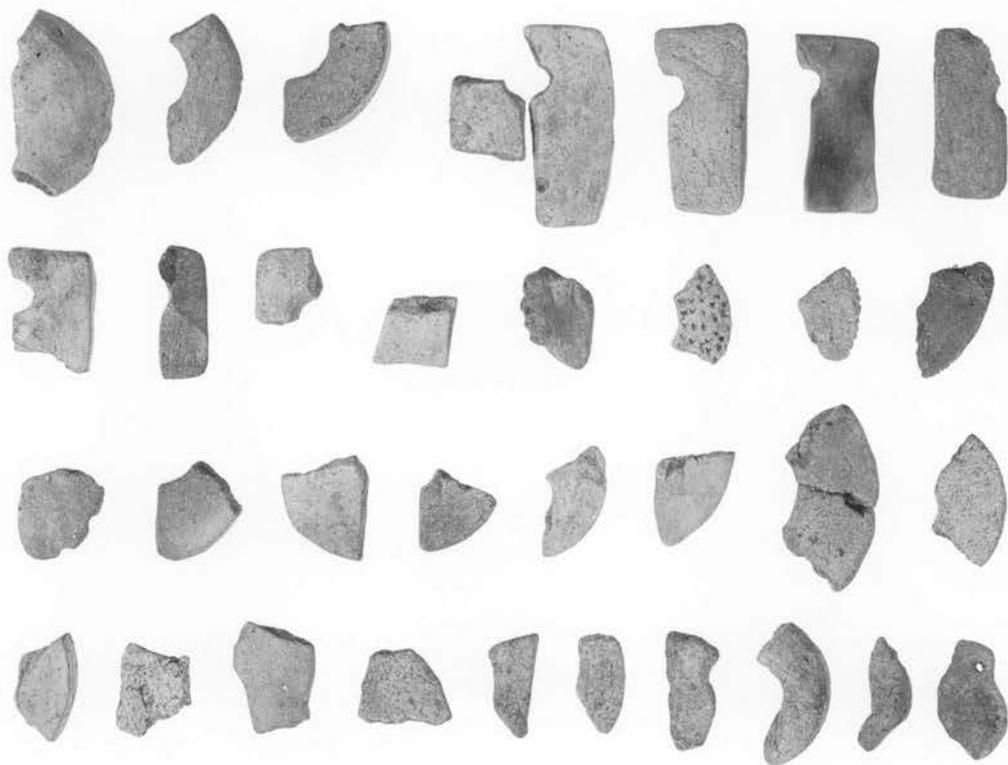
図版24 毛内遺跡



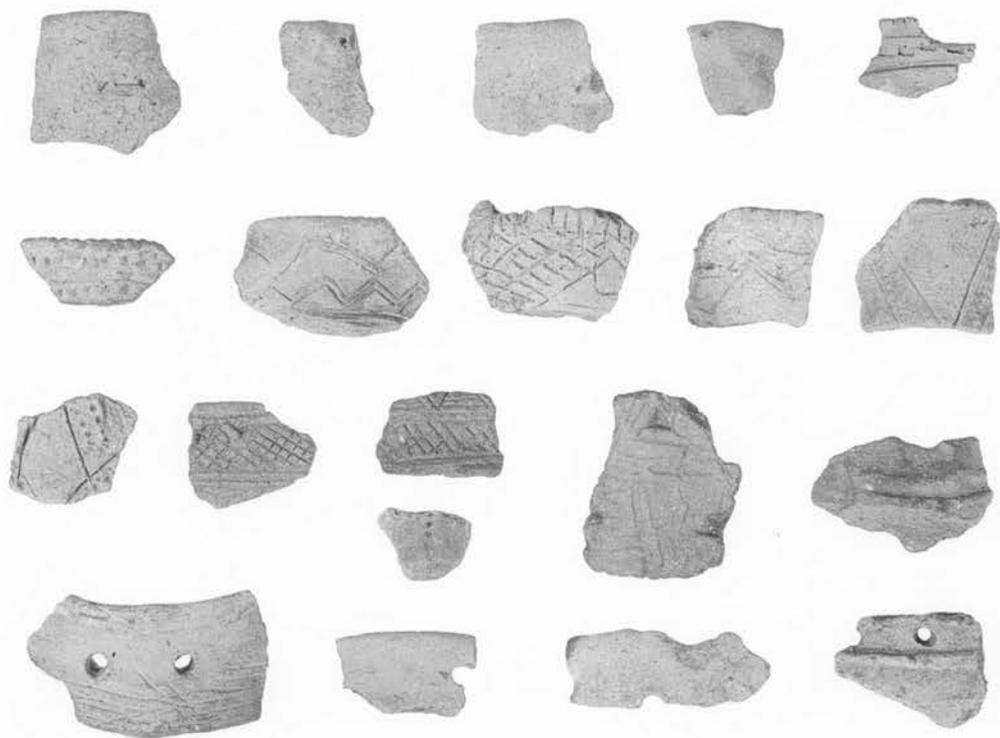


石器 (2)





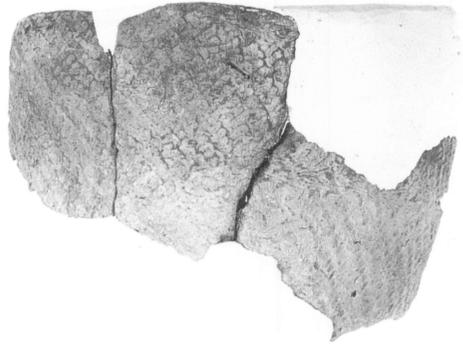
グリッド出土土製品 (24~56)



グリッド出土ミニチュア土器



1



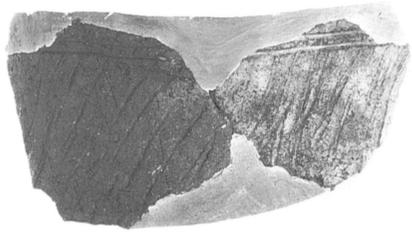
2



3



7



5



8



6



10



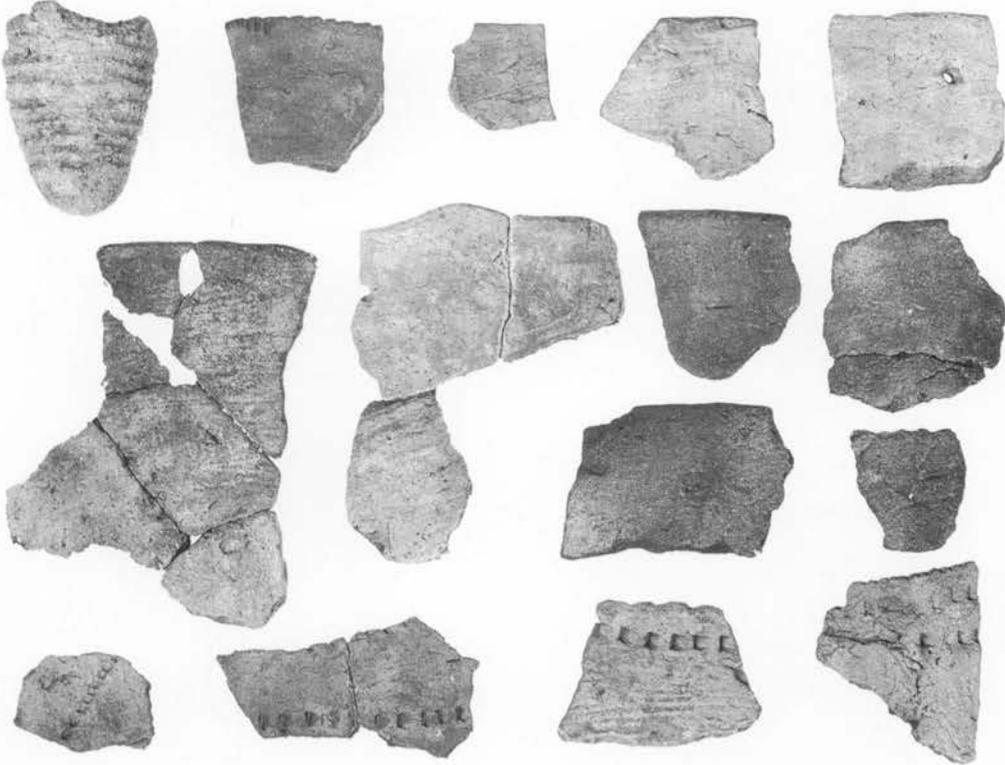
11

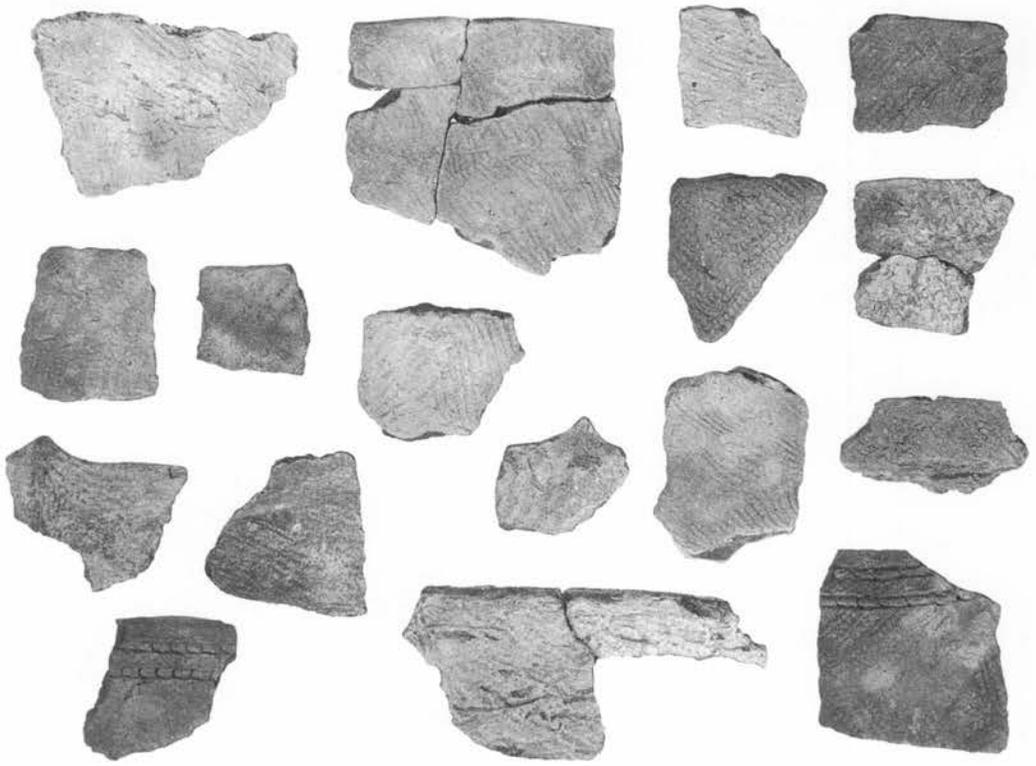


12

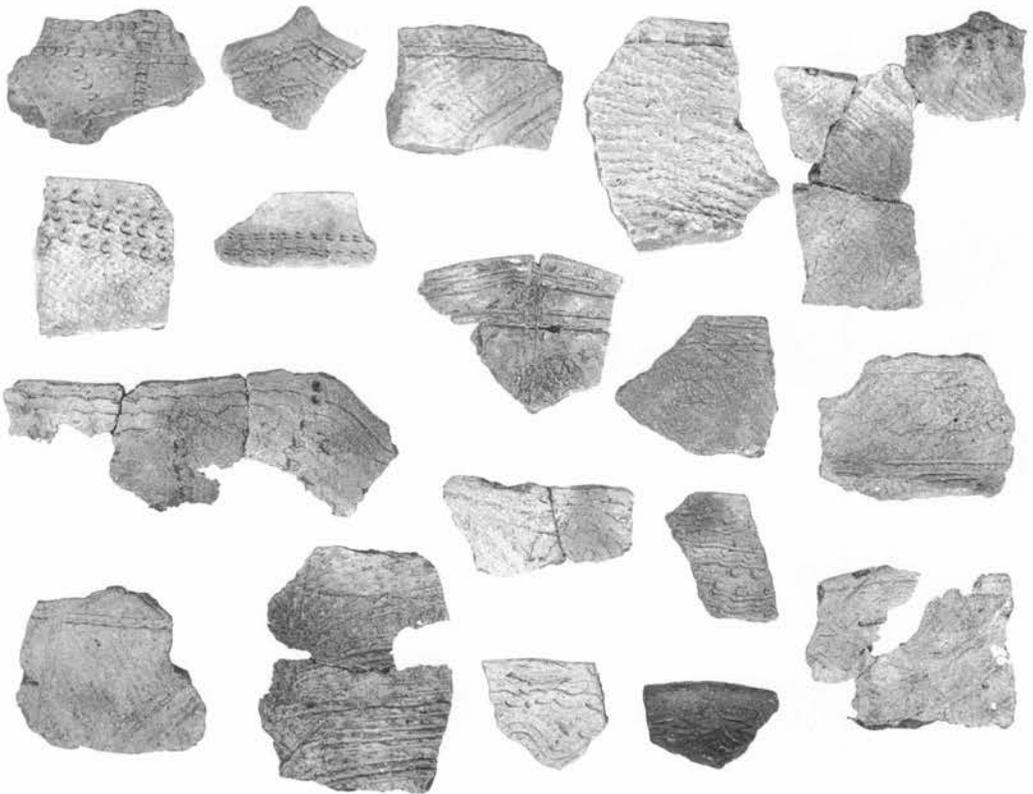


13

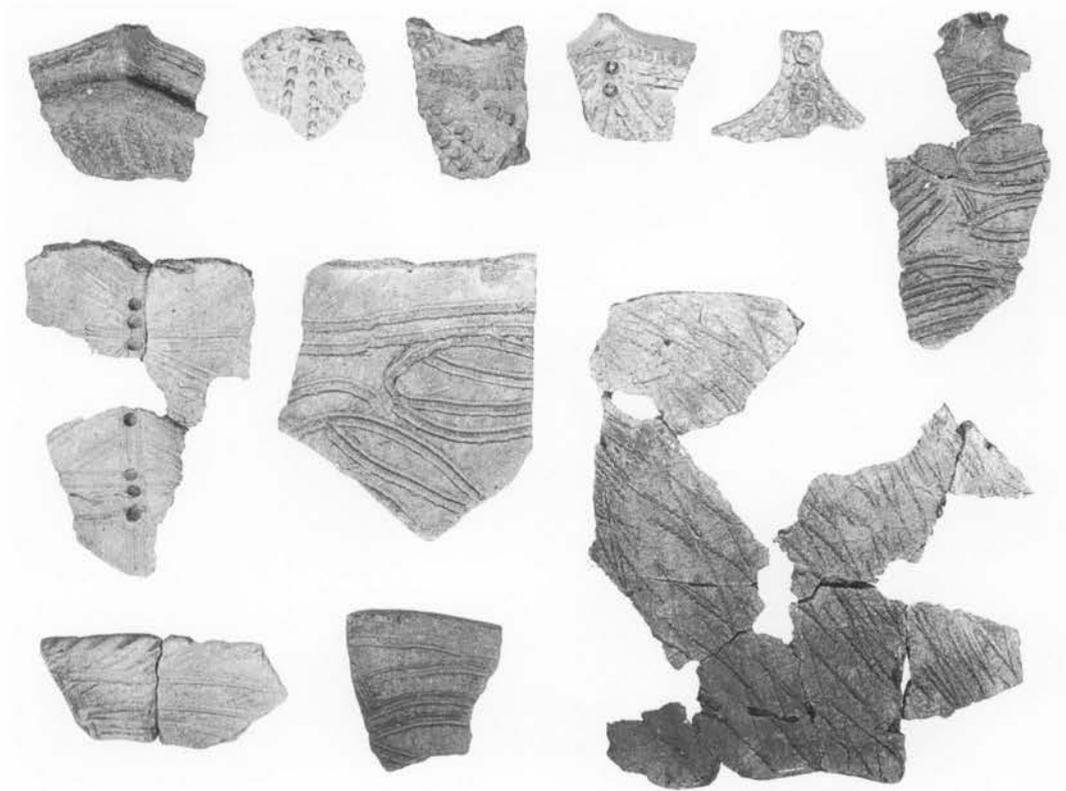




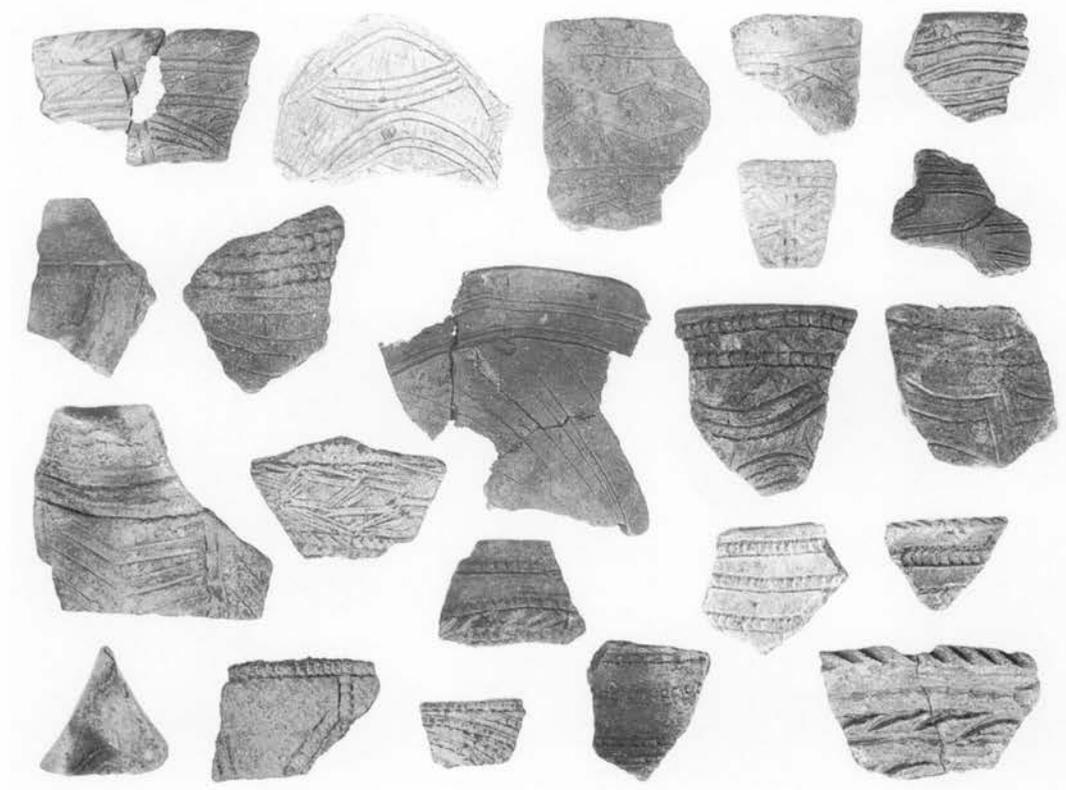
グリッド出土土器（3）（第I・II群土器）



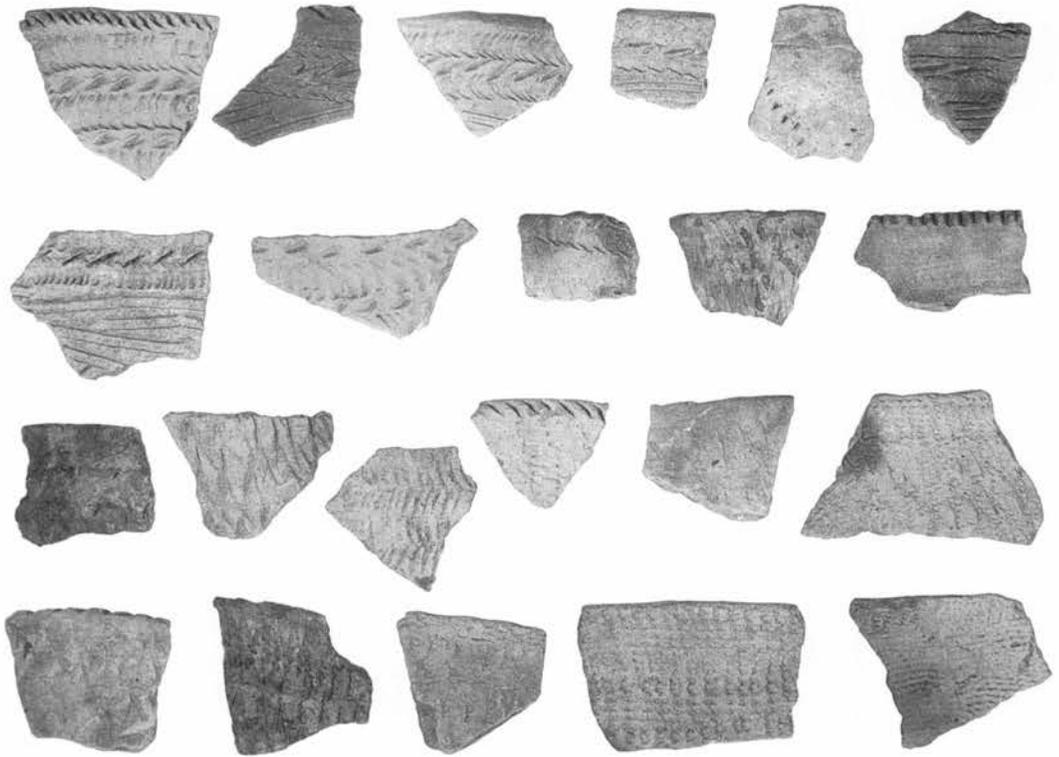
グリッド出土土器（4）（第II群土器）



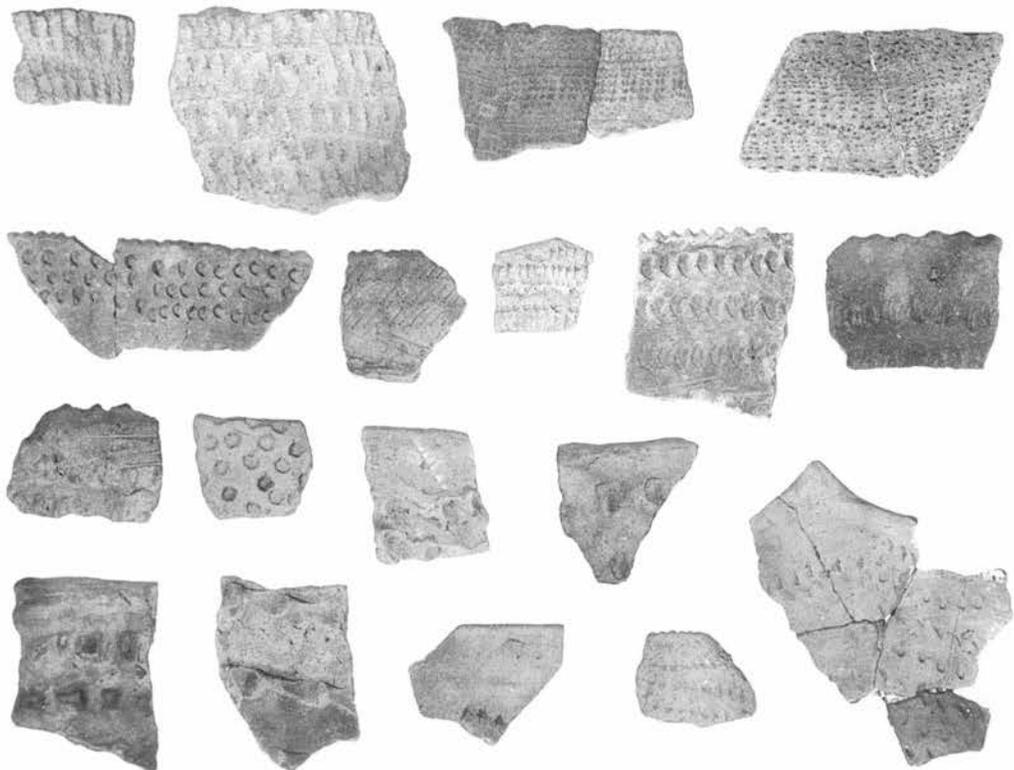
グリッド出土土器 (5) (第II・III群土器)



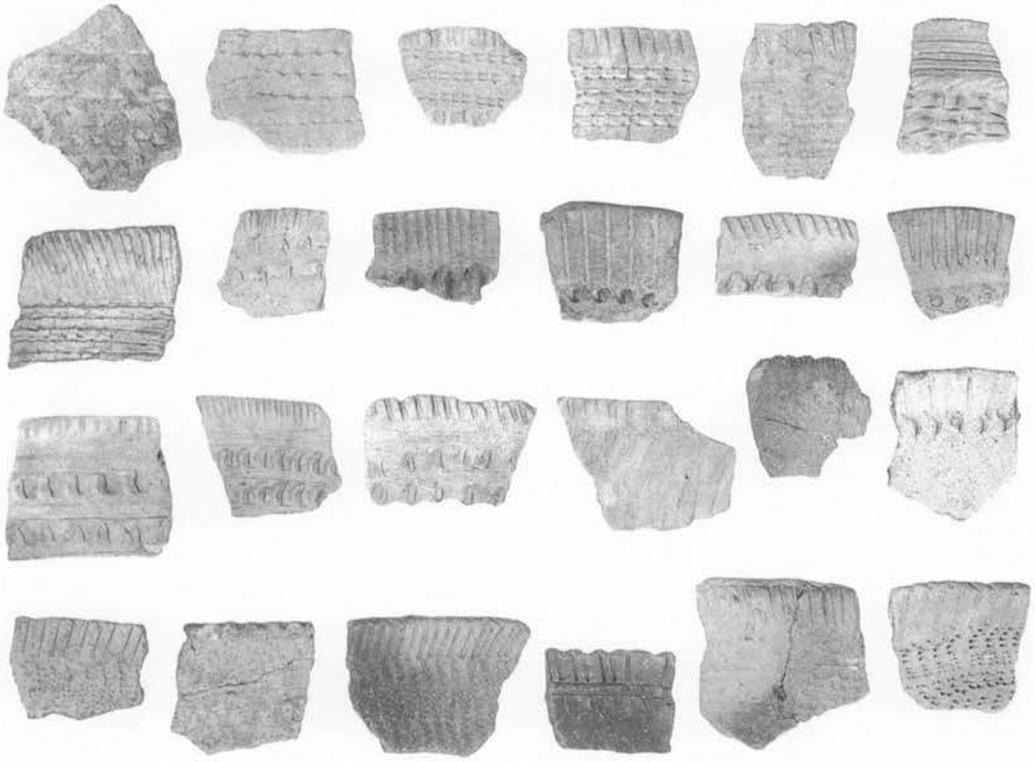
グリッド出土土器 (6) (第III群土器)



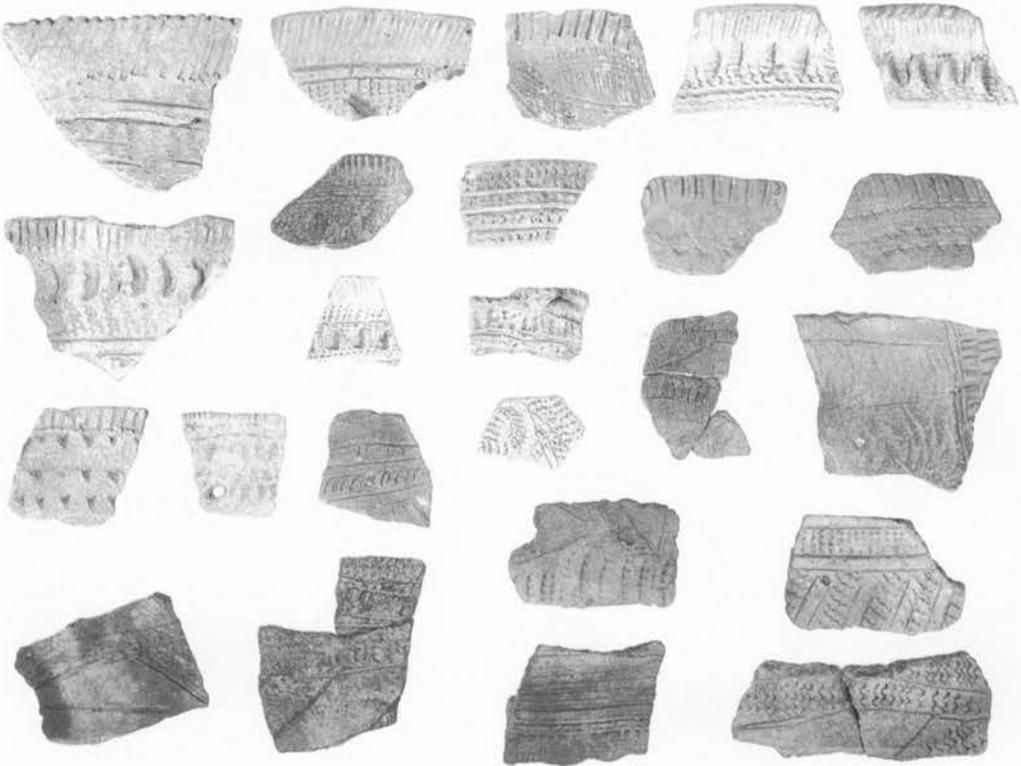
グリッド出土土器 (7) (第Ⅲ群土器)



グリッド出土土器 (8) (第Ⅲ群土器)



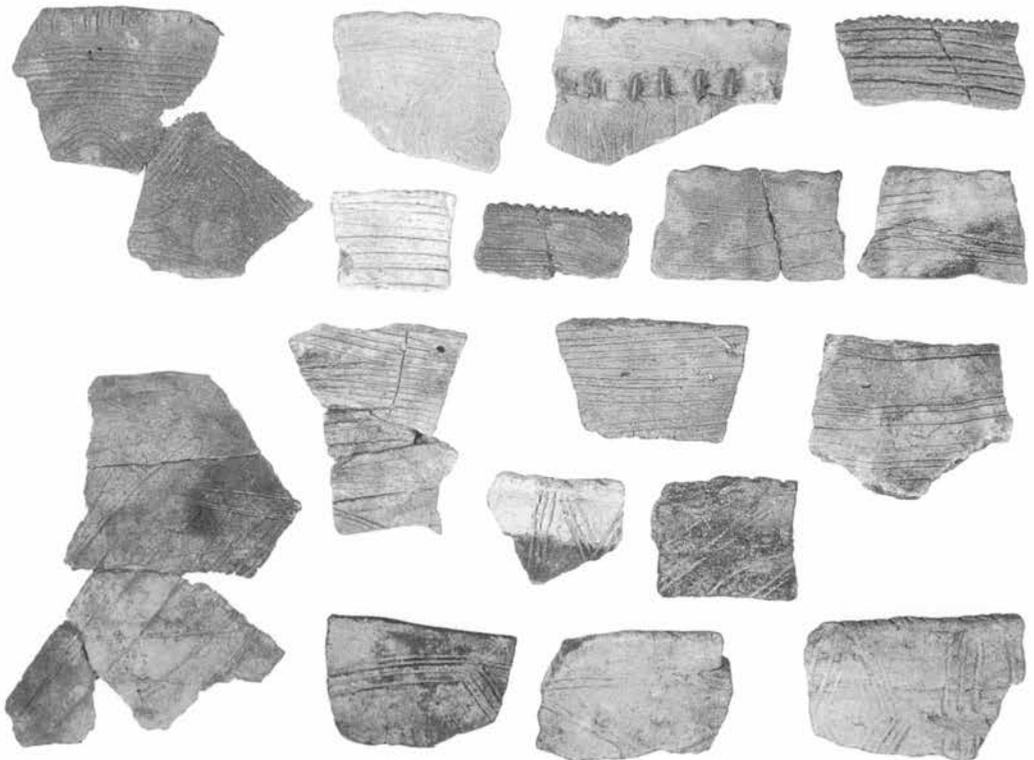
グリッド出土土器 (9) (第Ⅲ群土器)



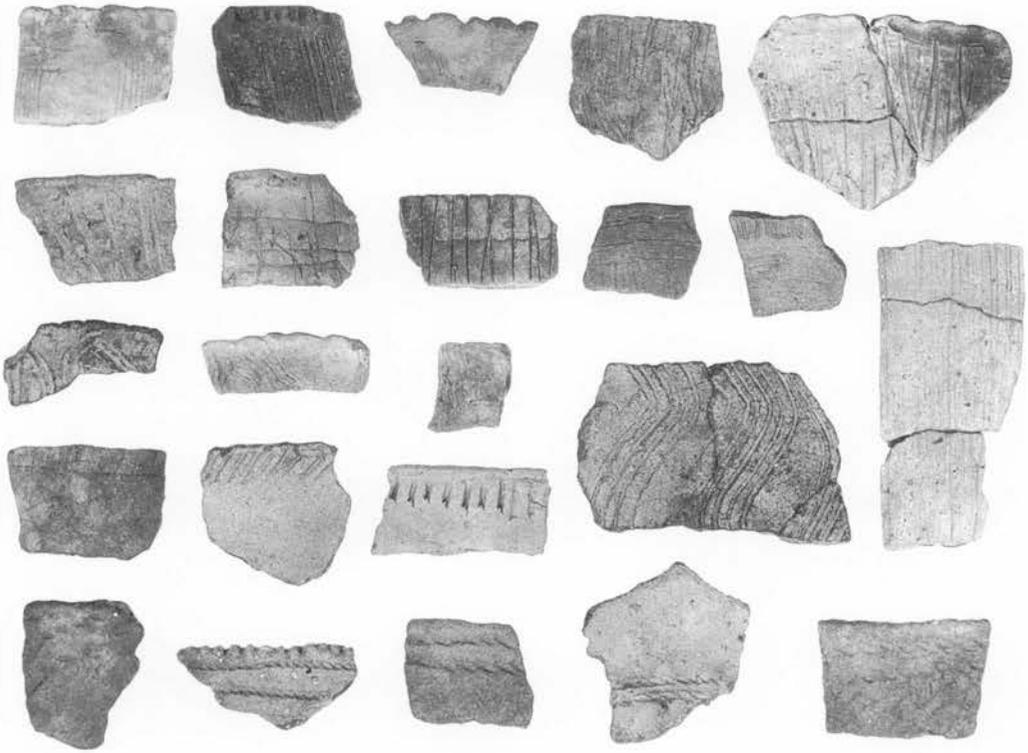
グリッド出土土器 (10) (第Ⅲ群土器)



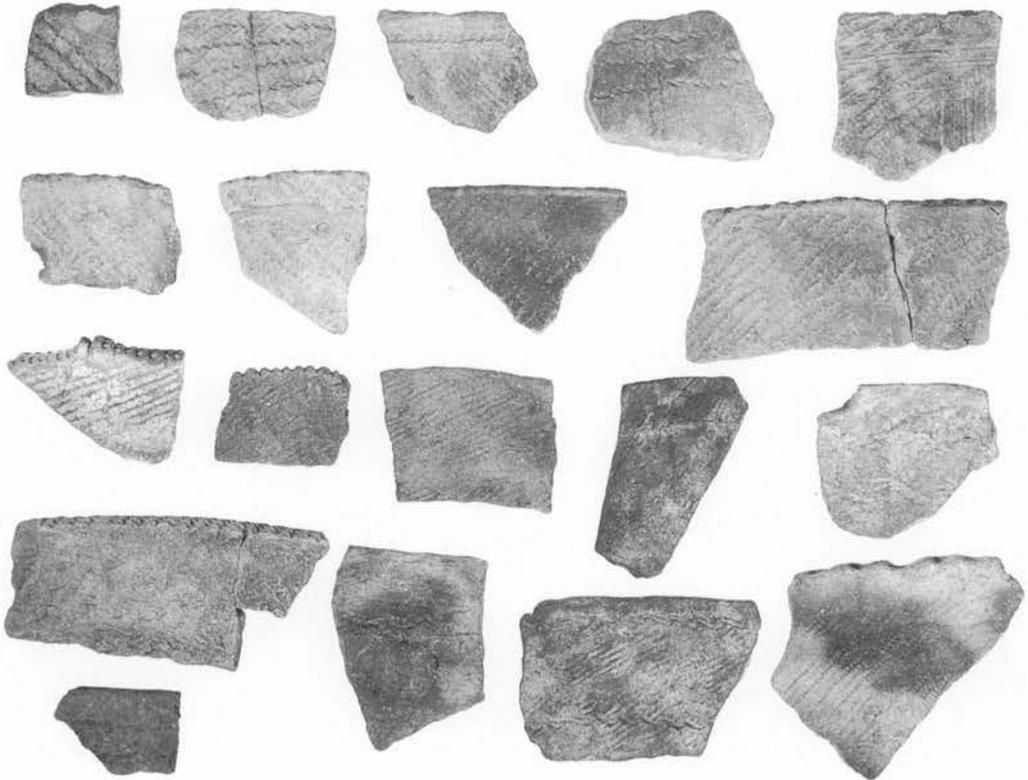
グリッド出土土器 (11) (第Ⅲ群土器)



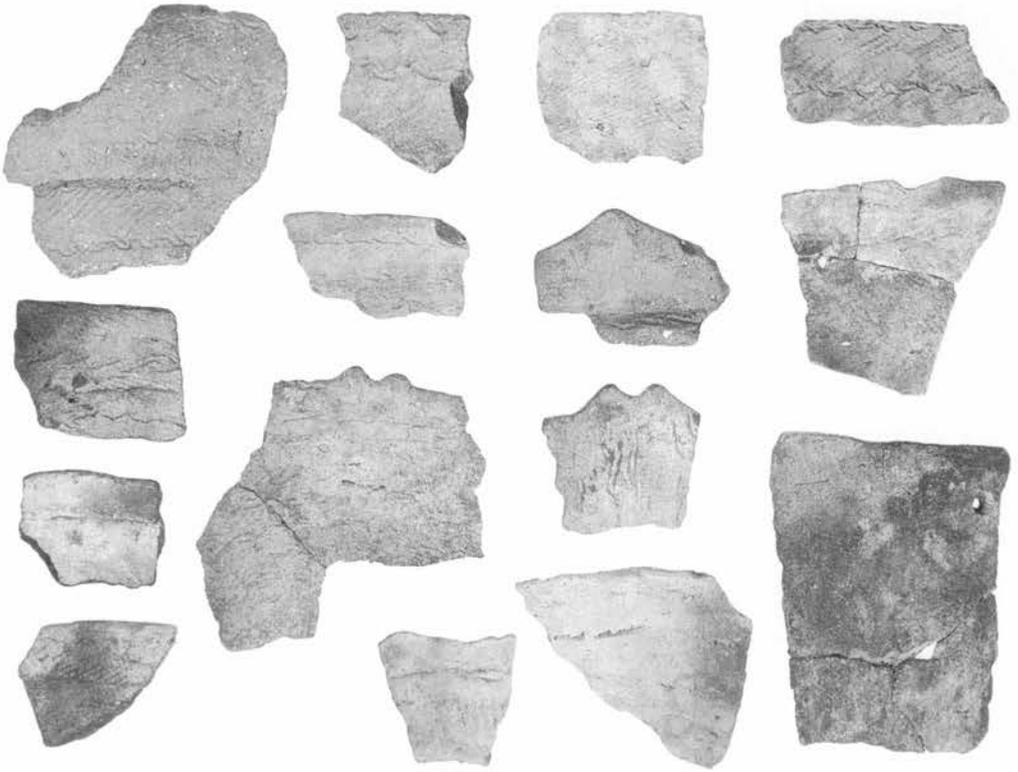
グリッド出土土器 (12) (第Ⅲ群土器)



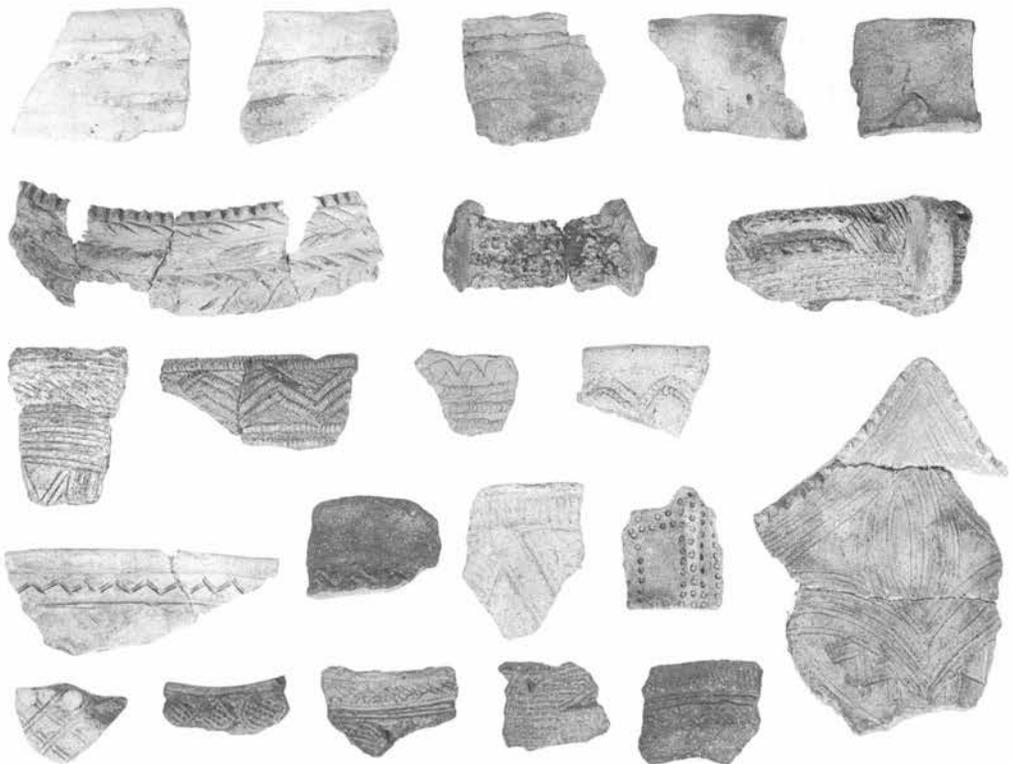
グリッド出土土器 (13) (第Ⅲ・Ⅳ群土器)



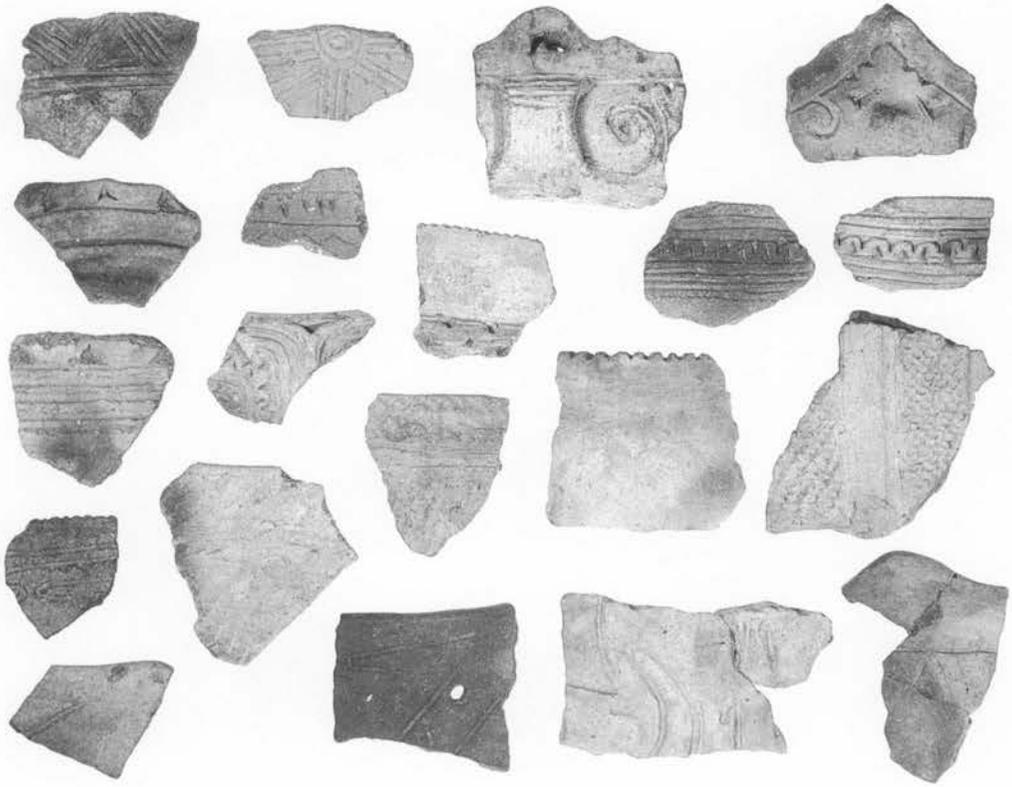
グリッド出土土器 (14) (第Ⅳ群土器)



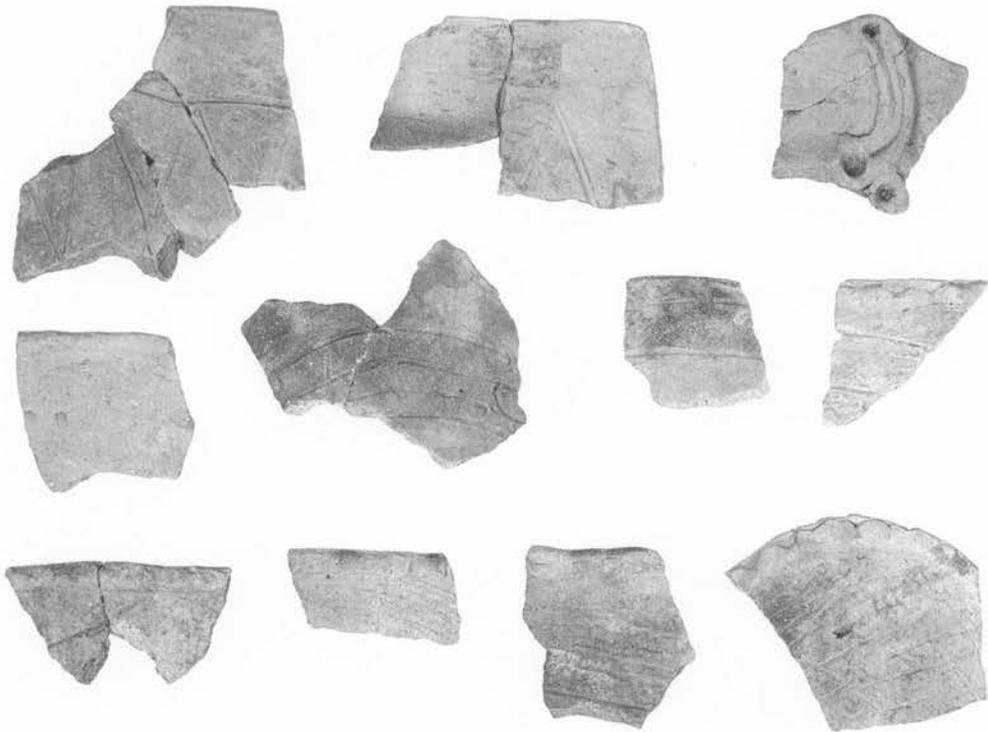
グリッド出土土器 (15) (第IV群土器)



グリッド出土土器 (16) (第IV・V・VI群土器)



グリッド出土土器 (17) (第Ⅵ・Ⅶ群土器)



グリッド出土土器 (18) (第Ⅶ群土器)



網原遺跡遠景



網原遺跡調査後全景



001号竪穴状遺構
FP 1～3号炉穴



103号炉穴



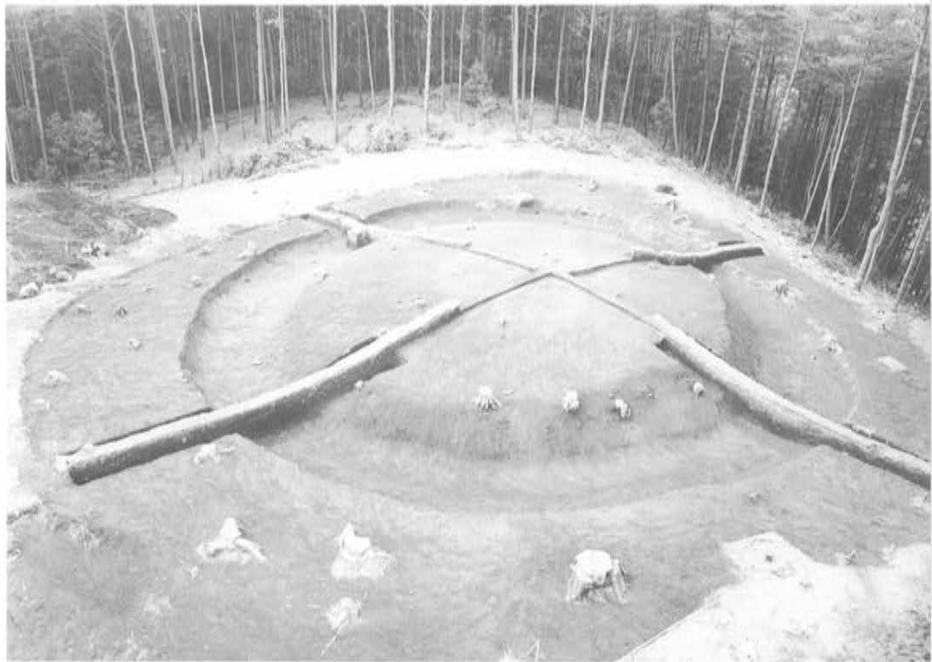
009号竖穴状遺構



102号土坑



001号墳調査前全景



001号墳全景



001号墳墳丘断面



002号墳調査前全景



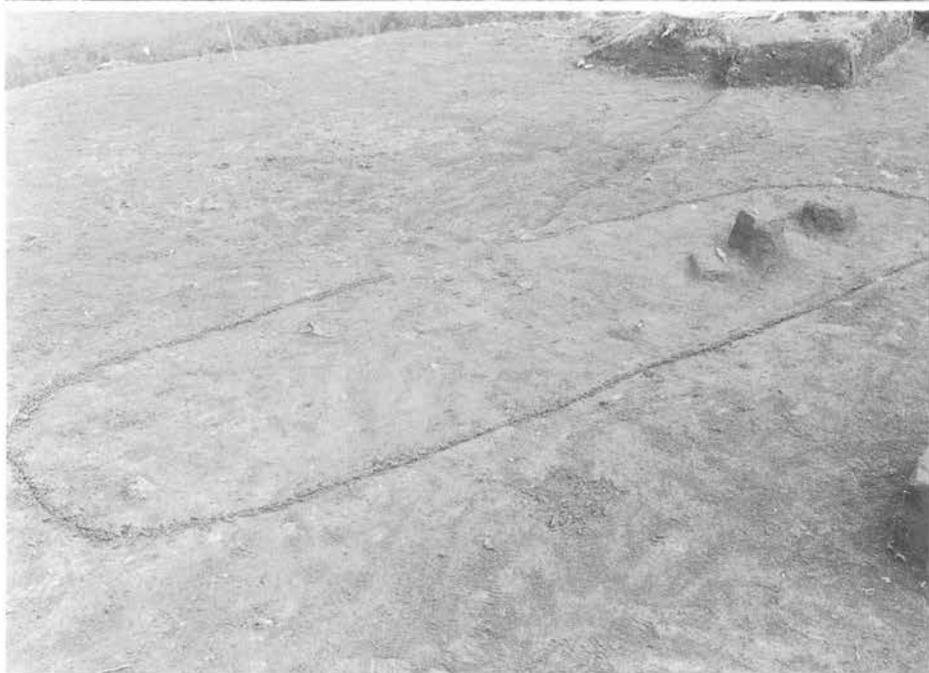
002号墳全景



002号墳旧表土面状況



002号墳墳丘断面



002号墳第1主体部



002号墳第2主体部
遺物出土状況



002号墳第2主体部
遺物出土状況



002号墳旧表土上面
遺物出土状況



003号墳全景



003号墳主体部



002・004号墳近景



004号墳全景



005号墳調査前全景



005号墳全景



005号墳旧表土面状況



005号墳墳丘断面



005号墳主体部検出状況



005号墳第1主体部 (上)
第2主体部 (下)



005号墳第2主体部遺物出土状況



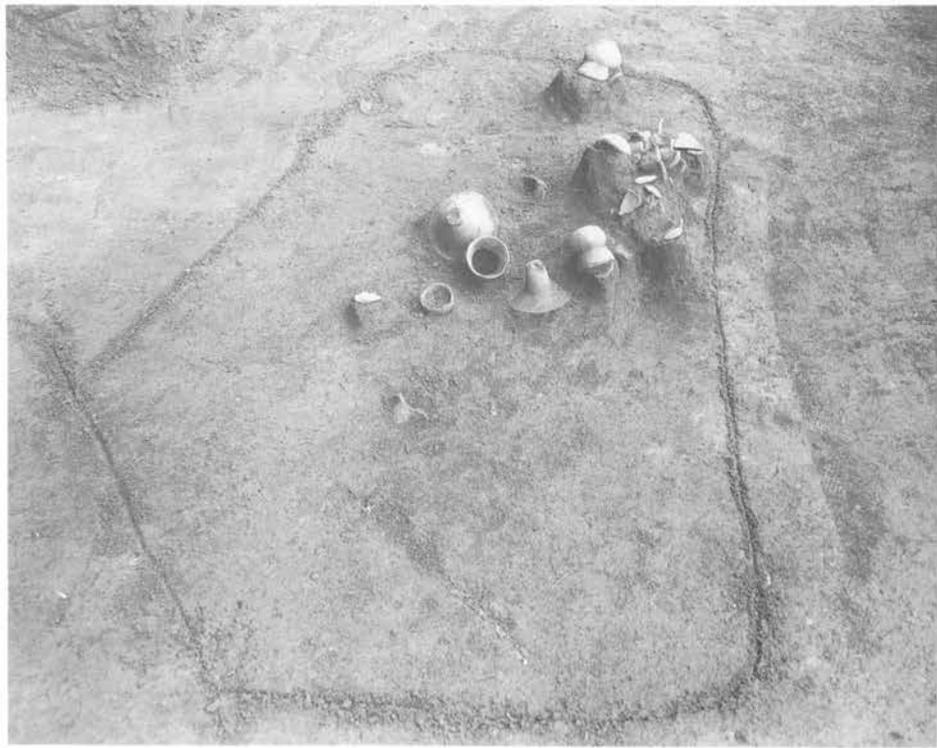
005号墳旧表土上面遺物出土状況



005号墳旧表土上面遺物出土状況
(拡大)



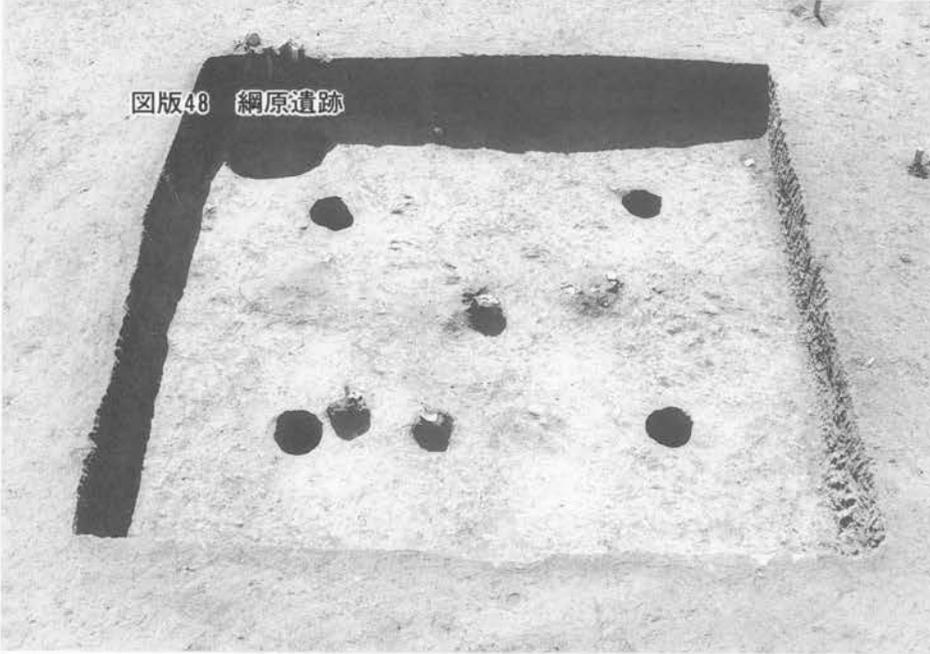
005号墳旧表土上面遺物
出土状況（拡大）



005号墳旧表土面土坑と
遺物出土状況



005号墳旧表土面土坑



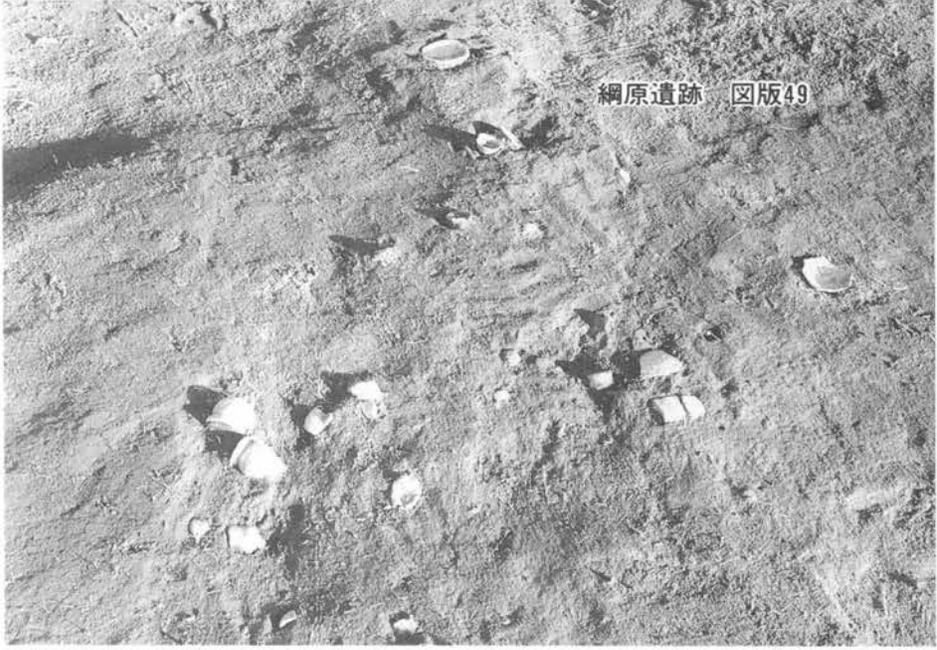
007号竪穴住居跡



008号竪穴住居跡遺物出土状況



008号竪穴住居跡



D 4 区祭祀遺構遺物出土状況



1 号火葬墓



2 号火葬墓



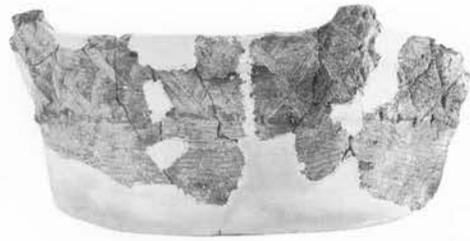
1 (FP 1)



3 (101)



30 (103)



32 (104)



38 (009)



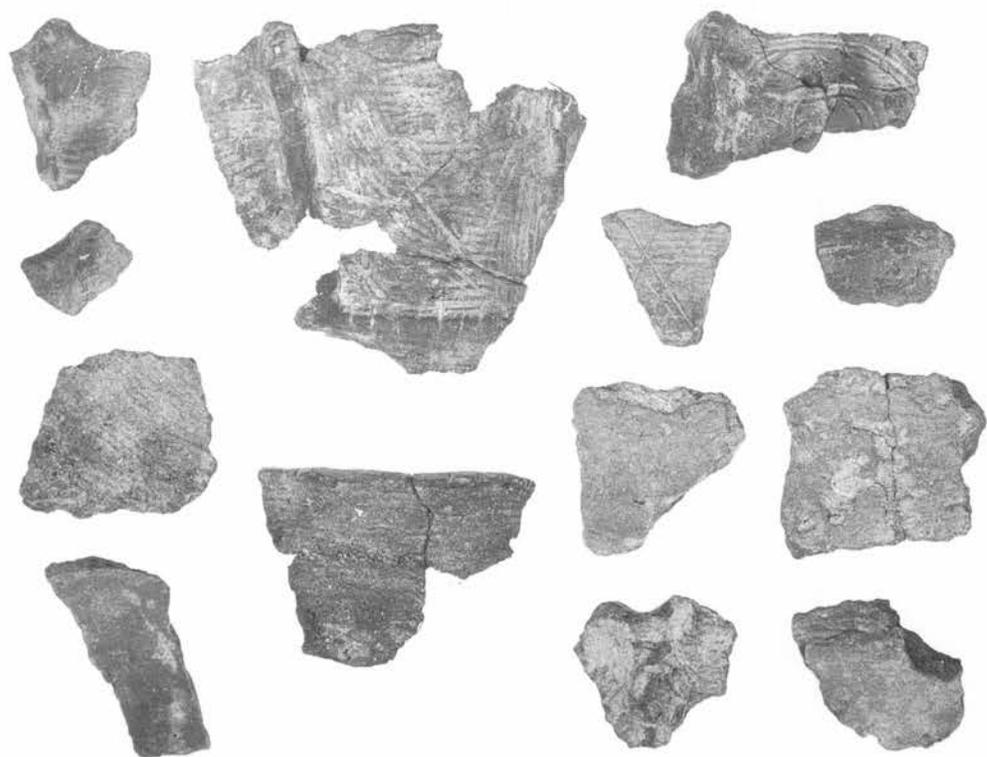
134



135



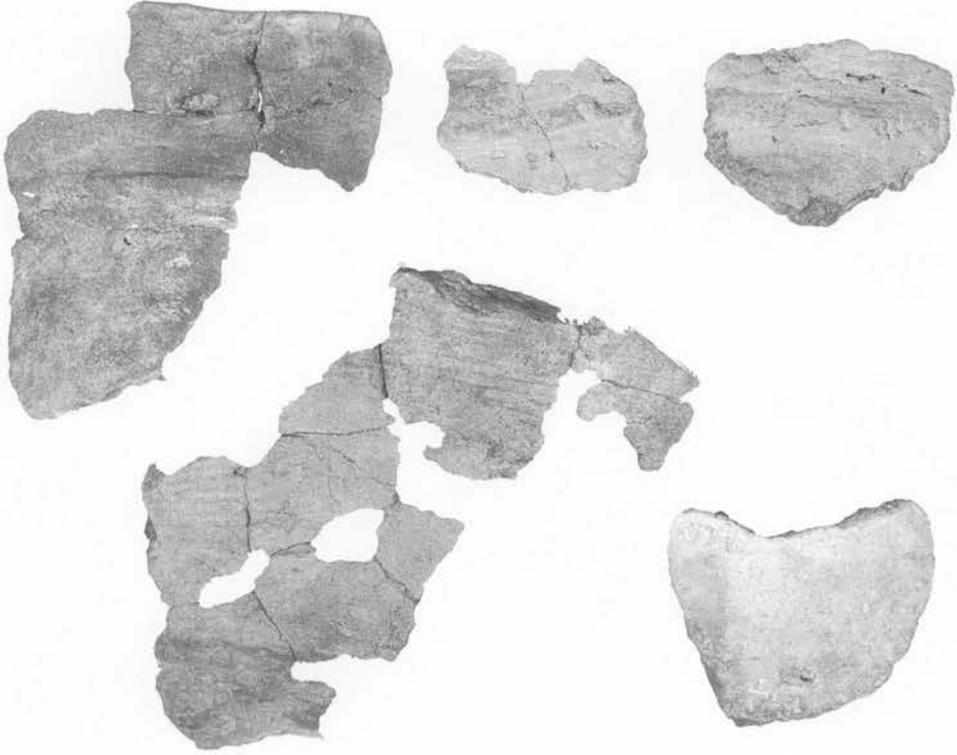
136



101・102号炉穴出土土器



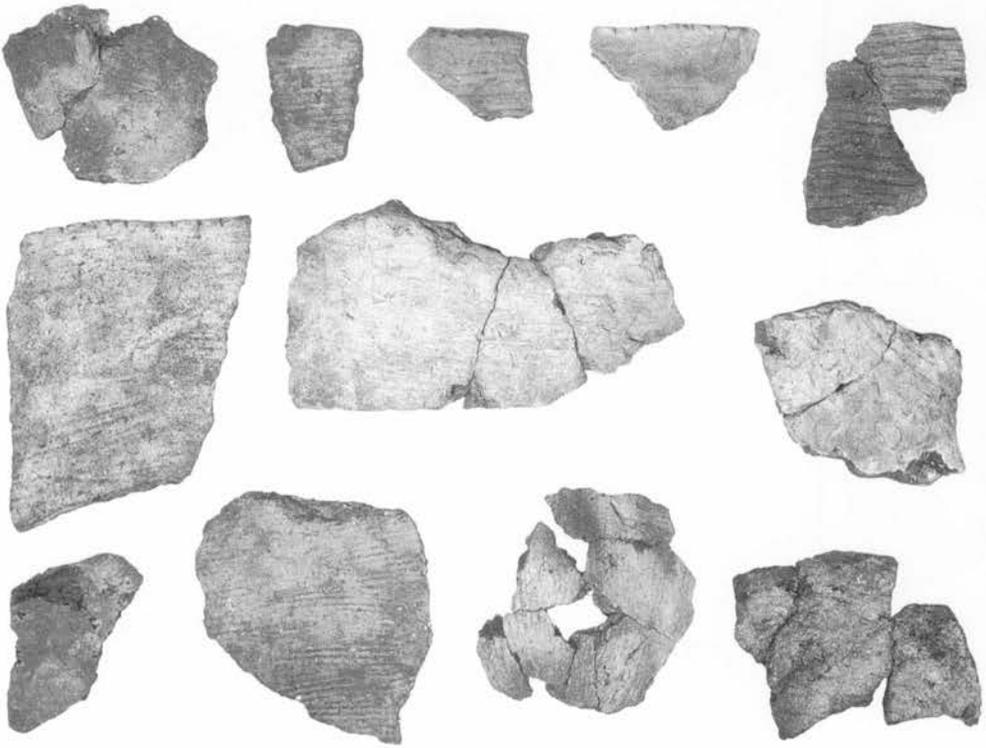
103号炉穴出土土器



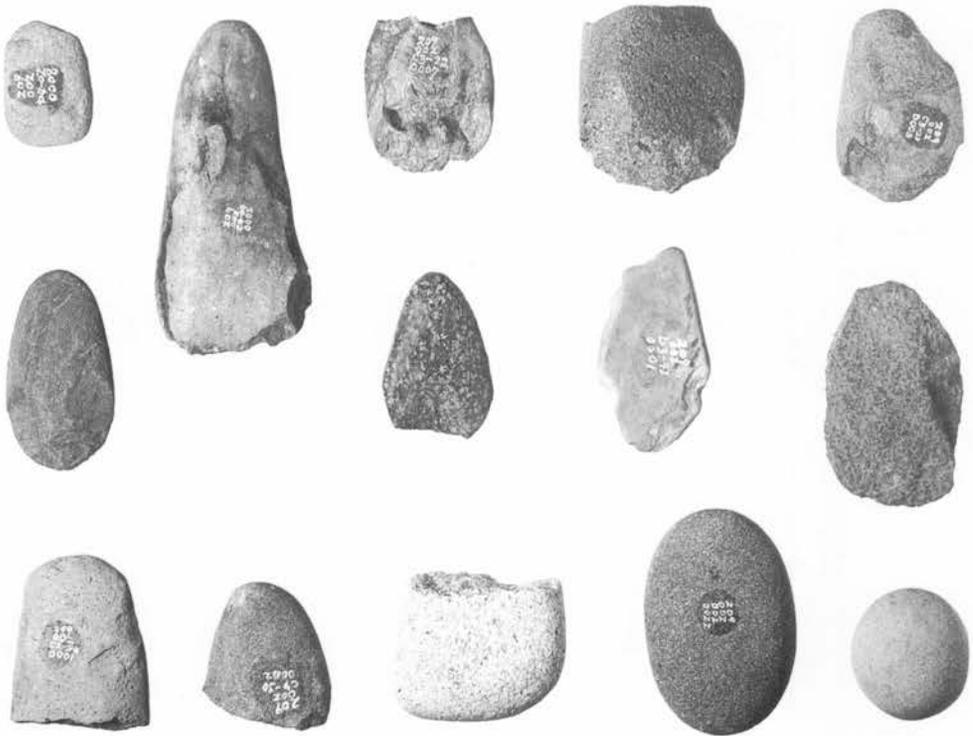
104号炉穴出土土器



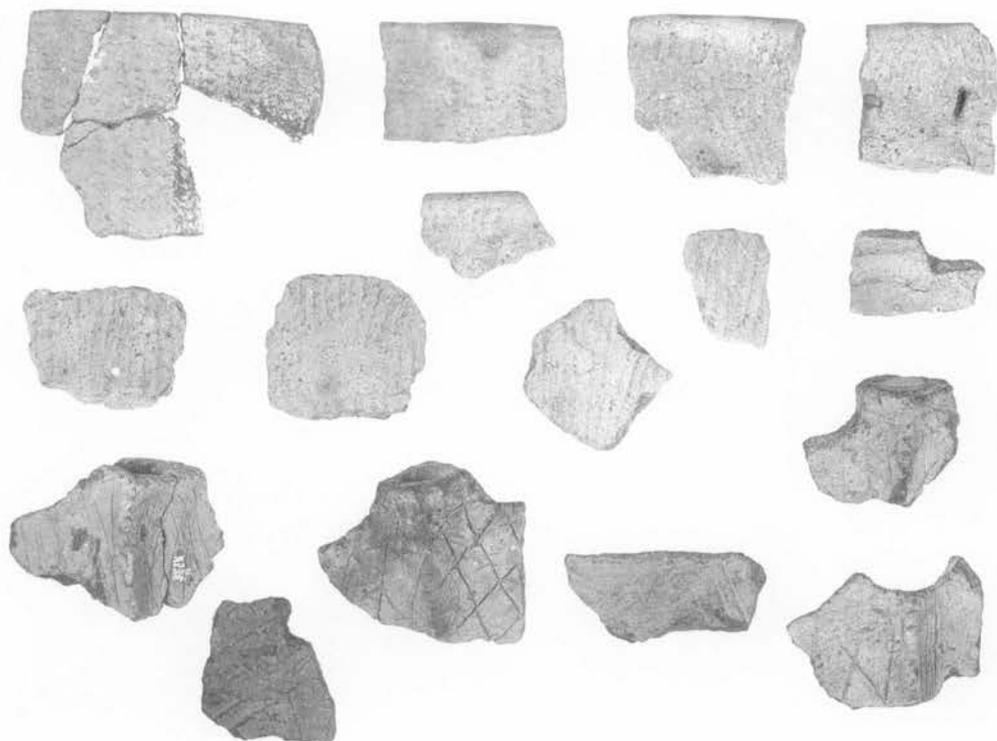
009号竖穴状遺構出土土器 (1)



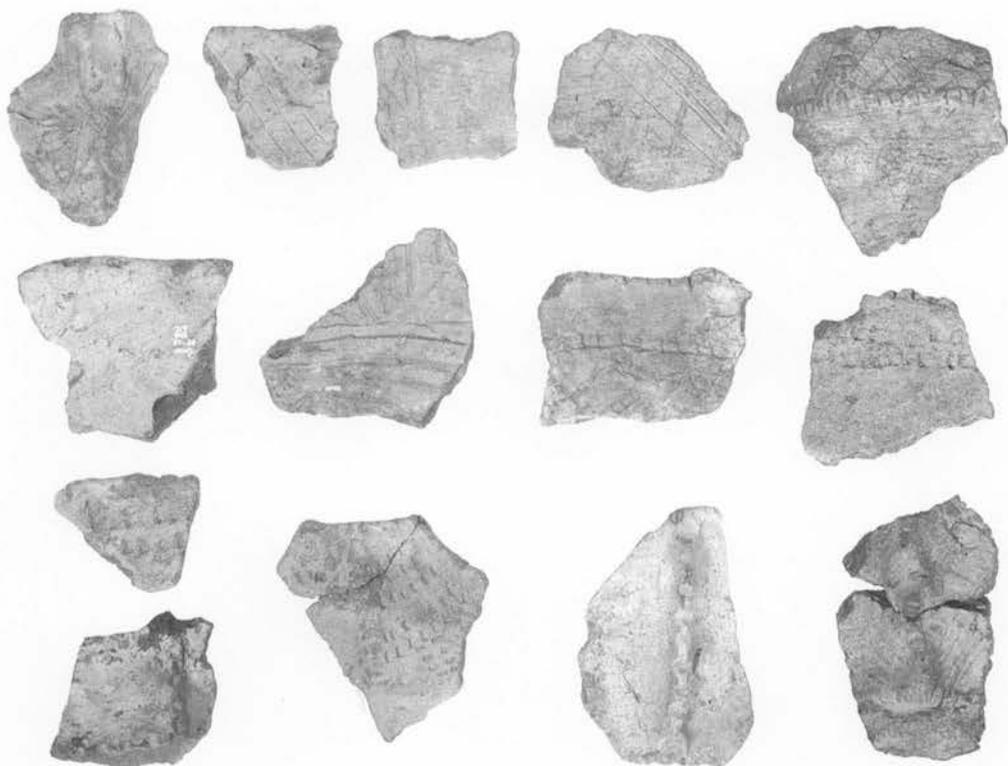
009号竪穴状遺構出土土器（2）



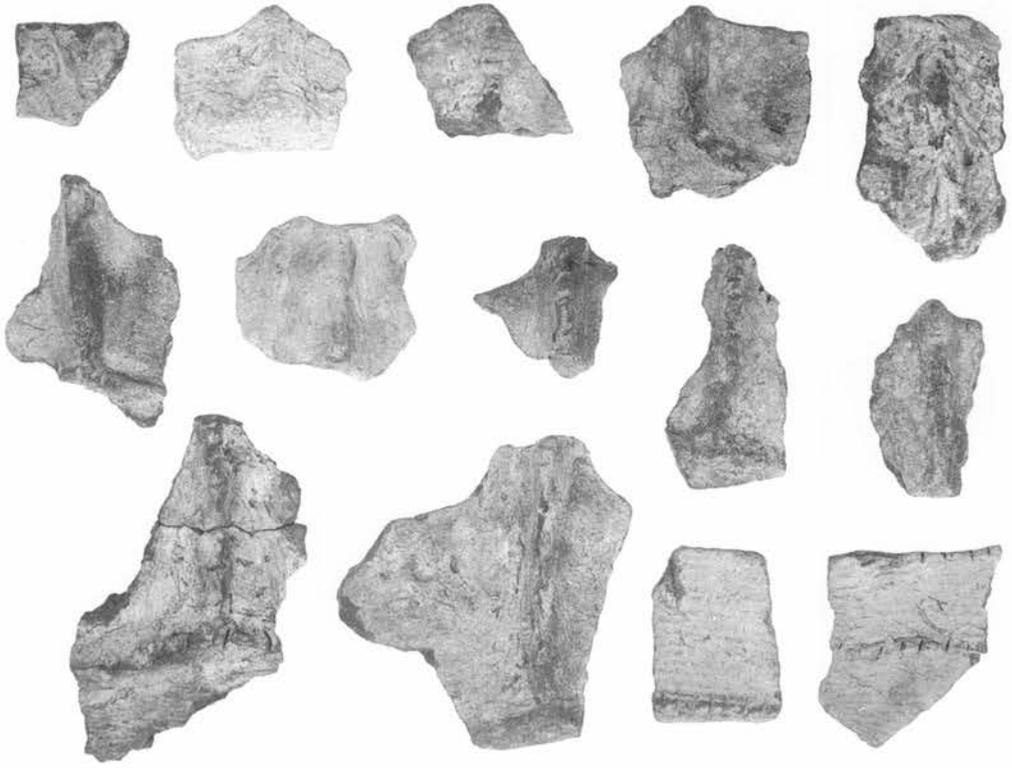
グリッド出土石器



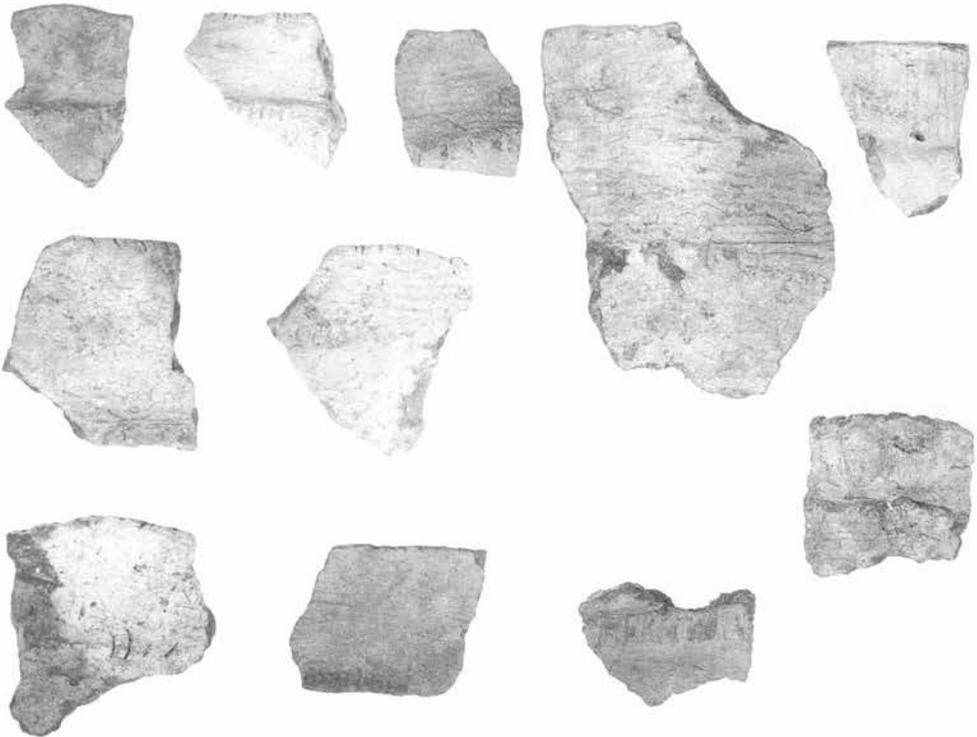
グリッド出土土器（1）（第I群土器）



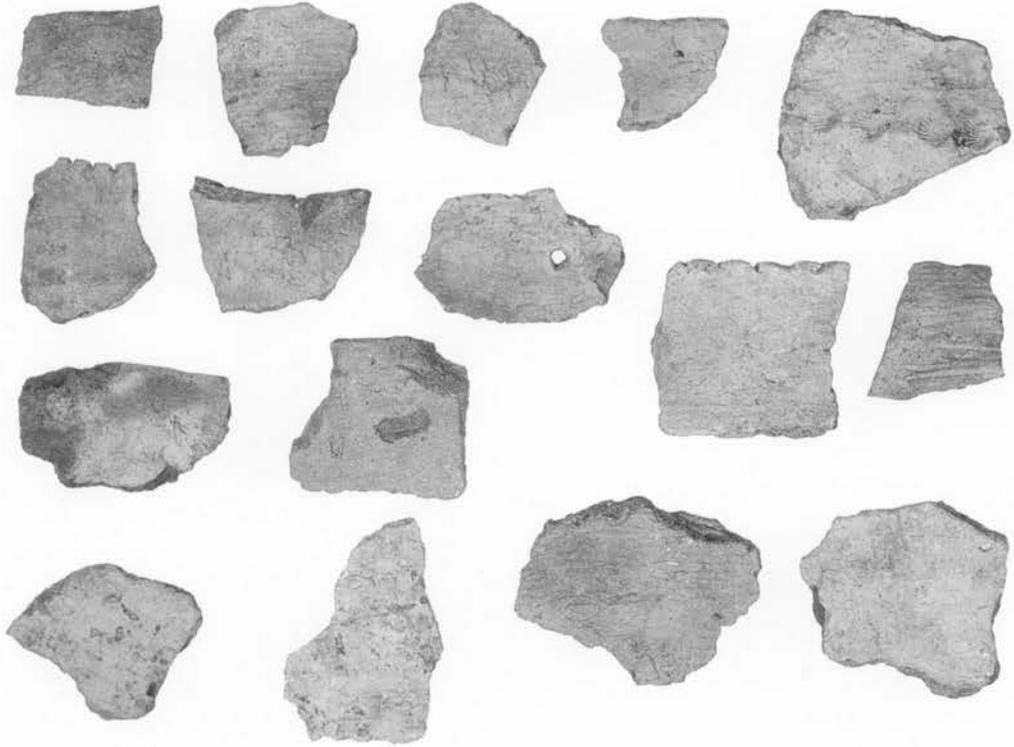
グリッド出土土器（2）（第I群土器）



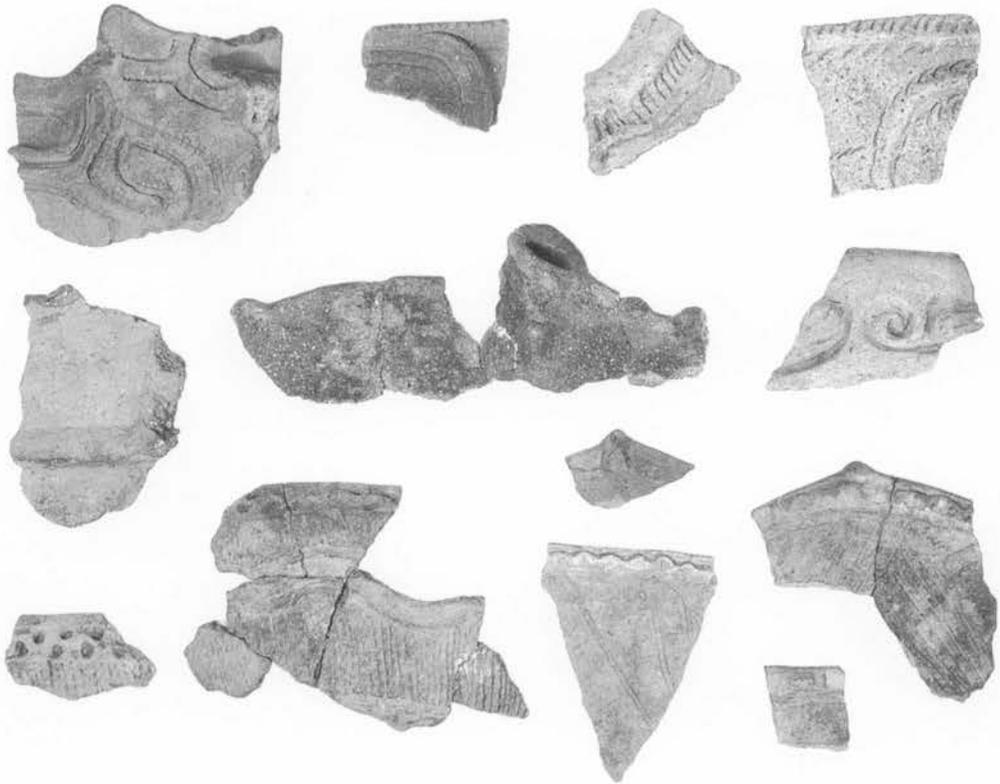
グリッド出土土器 (3) (第I群土器)



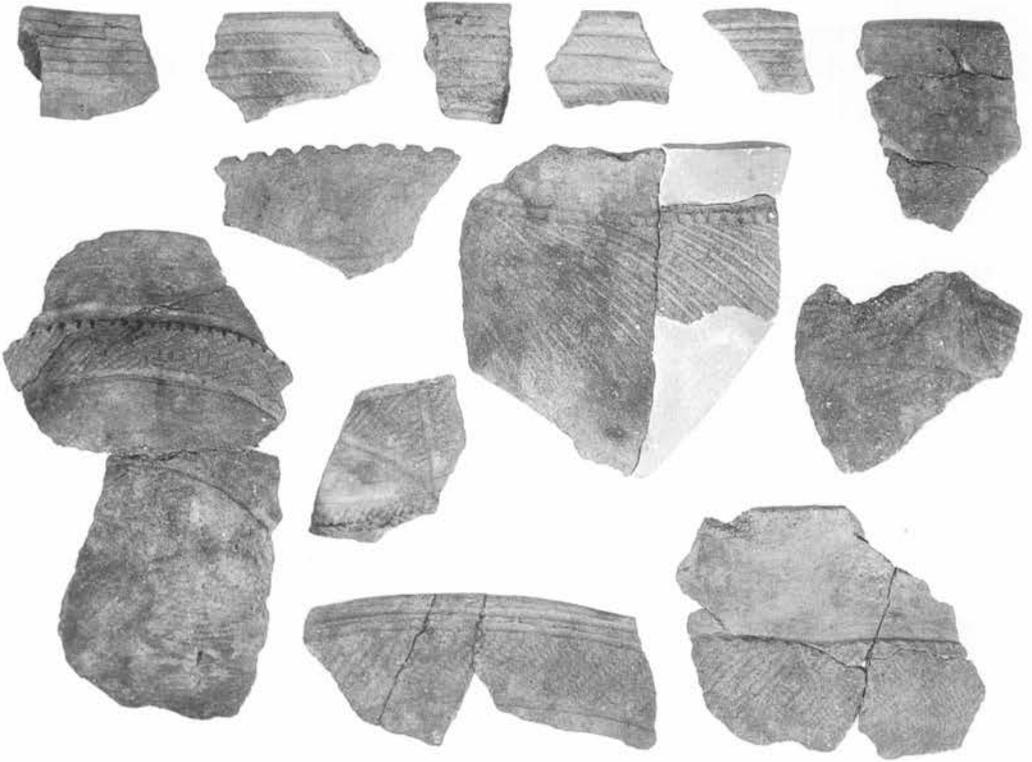
グリッド出土土器 (4) (第I群土器)



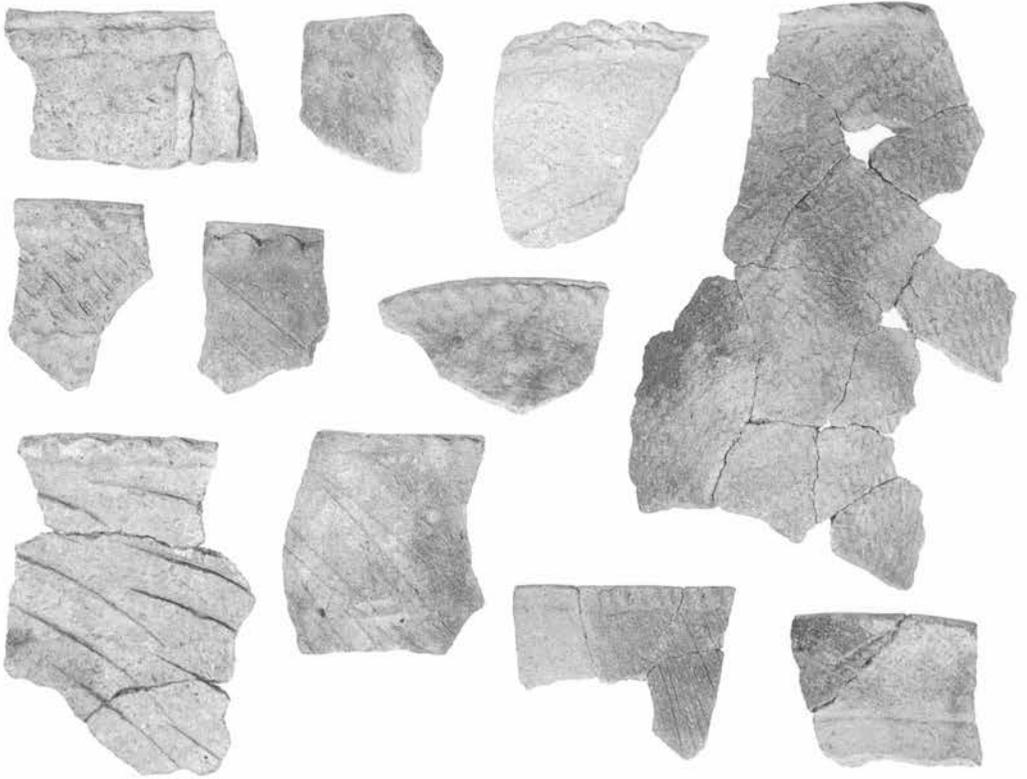
グリッド出土土器（5）（第I群土器）



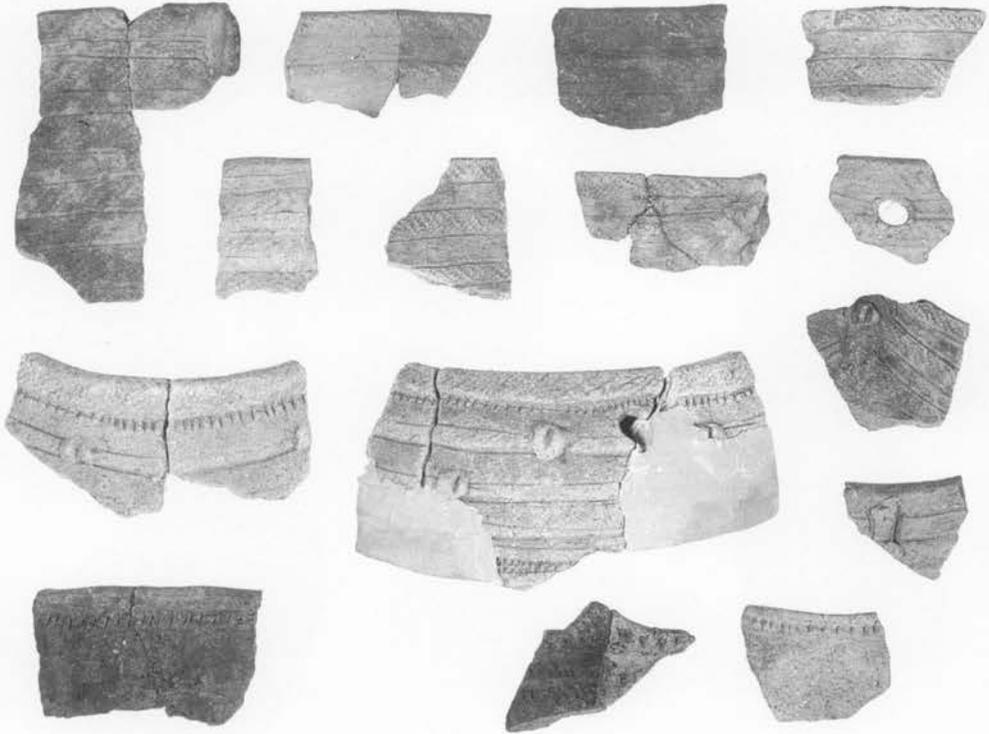
グリッド出土土器（6）（第II・III群土器）



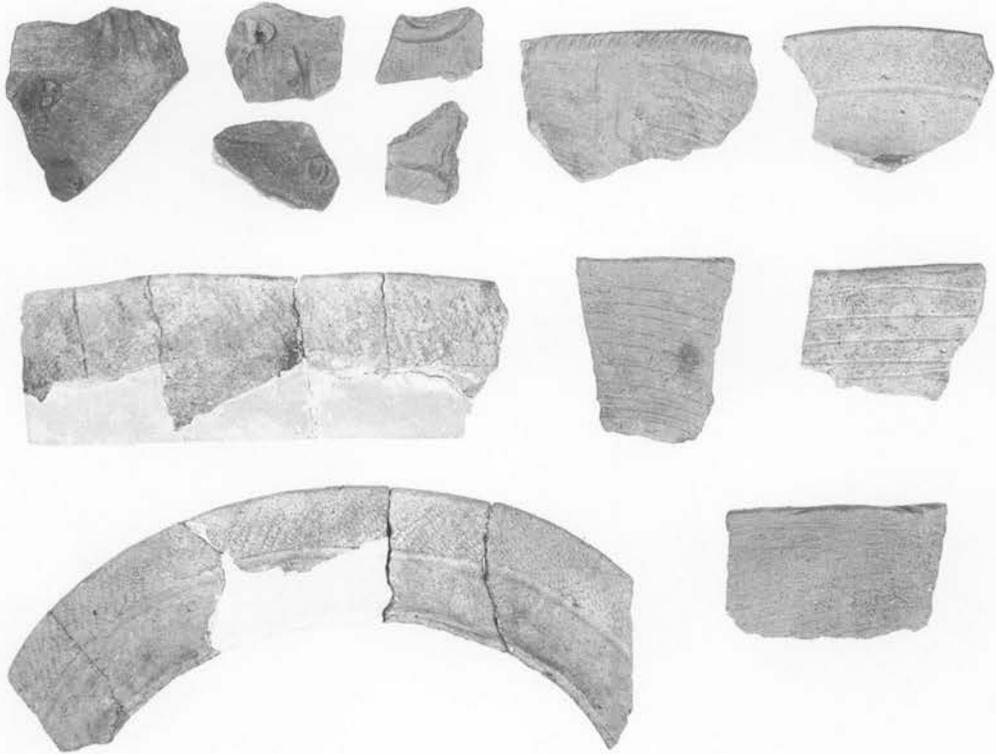
グリッド出土土器 (7) (第Ⅲ群土器)



グリッド出土土器 (8) (第Ⅲ群土器)



グリッド出土土器 (9) (第Ⅲ群土器)



グリッド出土土器 (10) (第Ⅳ群土器)



1



6



9



11



12



16



17



20



24



39



40



41



42



43



44



45



46



47



49



57



58



60



61



62



63



64



67



65



66



68



70



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82



92



93



99



101



95



96



97



98



103



104



106



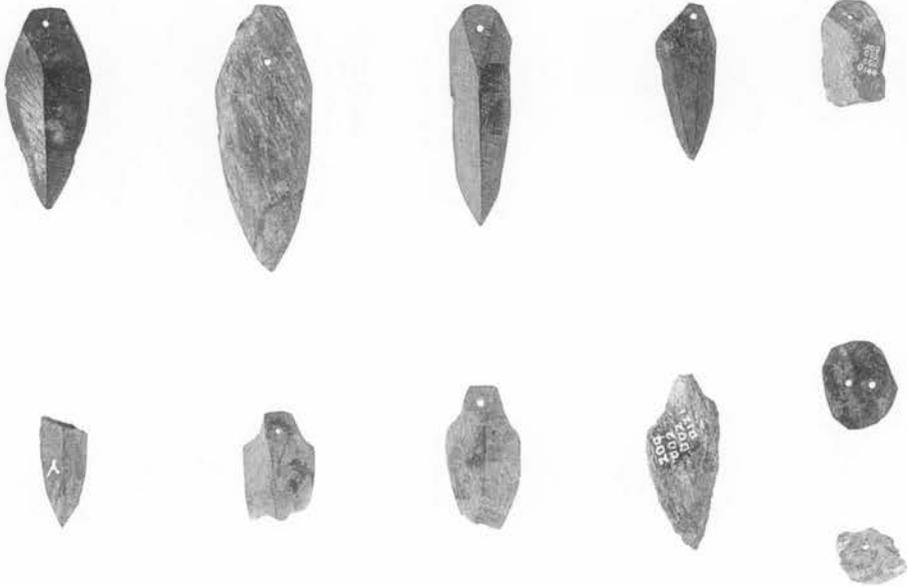
107



鉄鏃



鉄鏃・刀子



002号墳旧表土上面出土石製模造品



005号墳旧表土上面出土石製模造品



1



3



4



10



11



12



14



15



16



18



19



5



6



7



8



18



19



20



21



22



1



3



2





網原屋敷跡遺跡全景



網原屋敷跡遺跡調査後全景



112号土壇



114号土壇



002号竪穴住居跡



003号竪穴住居跡



301号溝



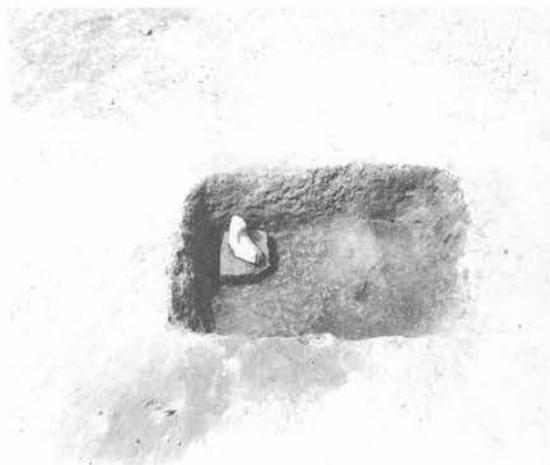
502号掘立柱建物跡



503号掘立柱建物跡



103号土坑



211号粘土敷土坑



202号粘土敷土坑



204号粘土敷土坑



212号粘土敷土坑



001号土坑



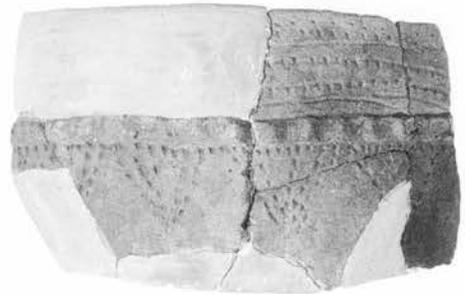
1 (112)



3 (112)



2 (112)



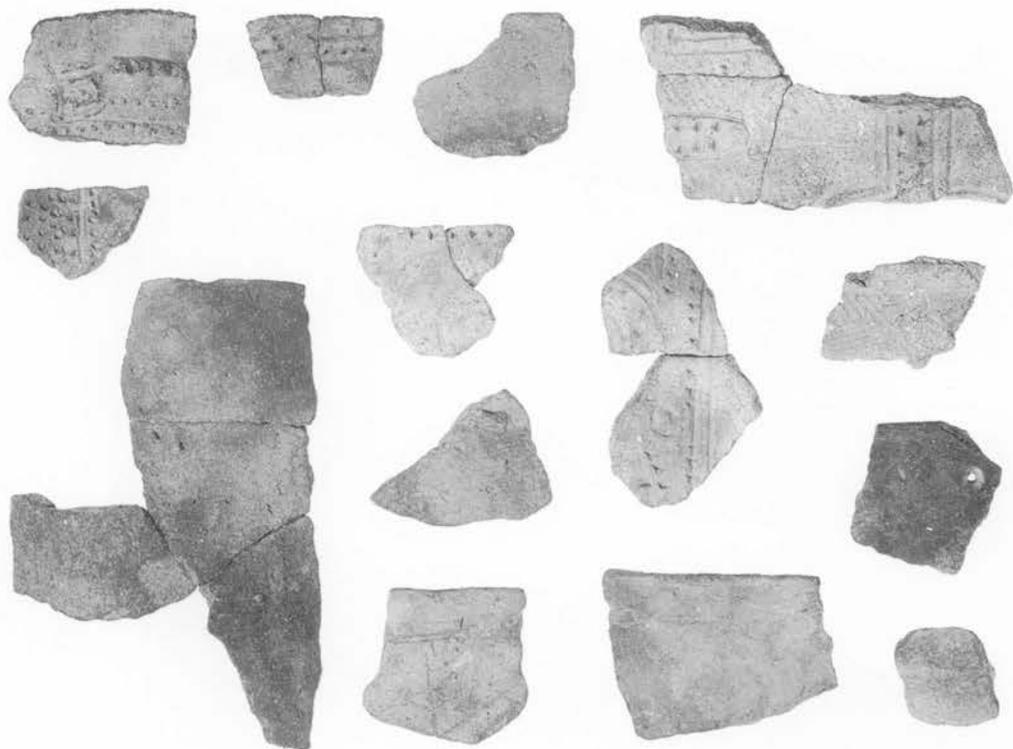
1(122)



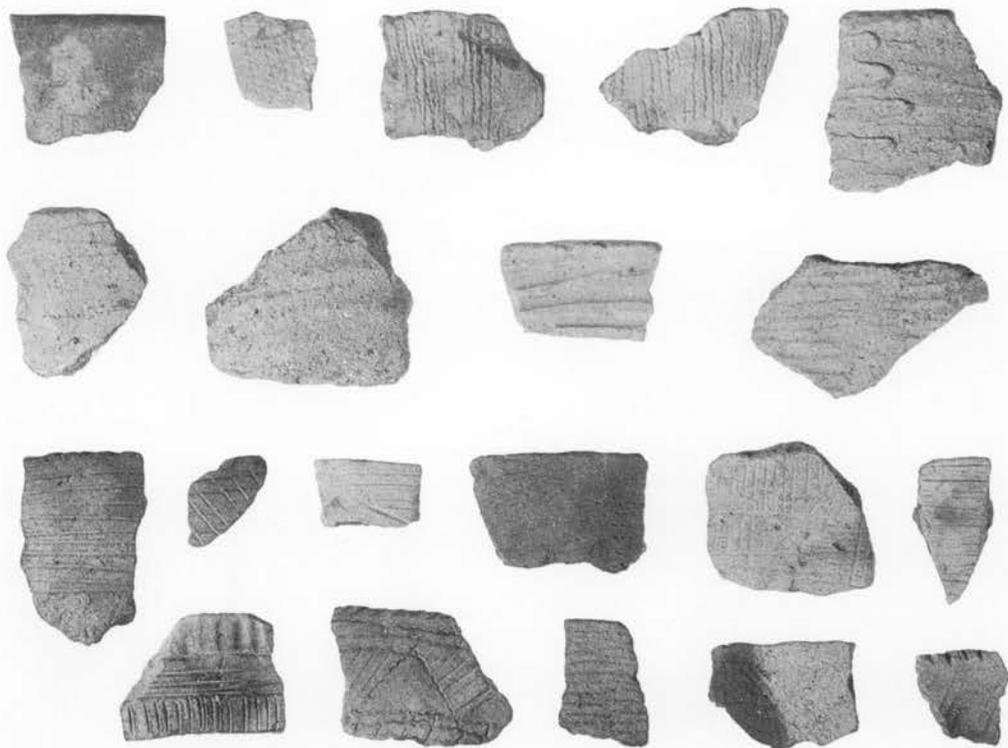
1 (114)



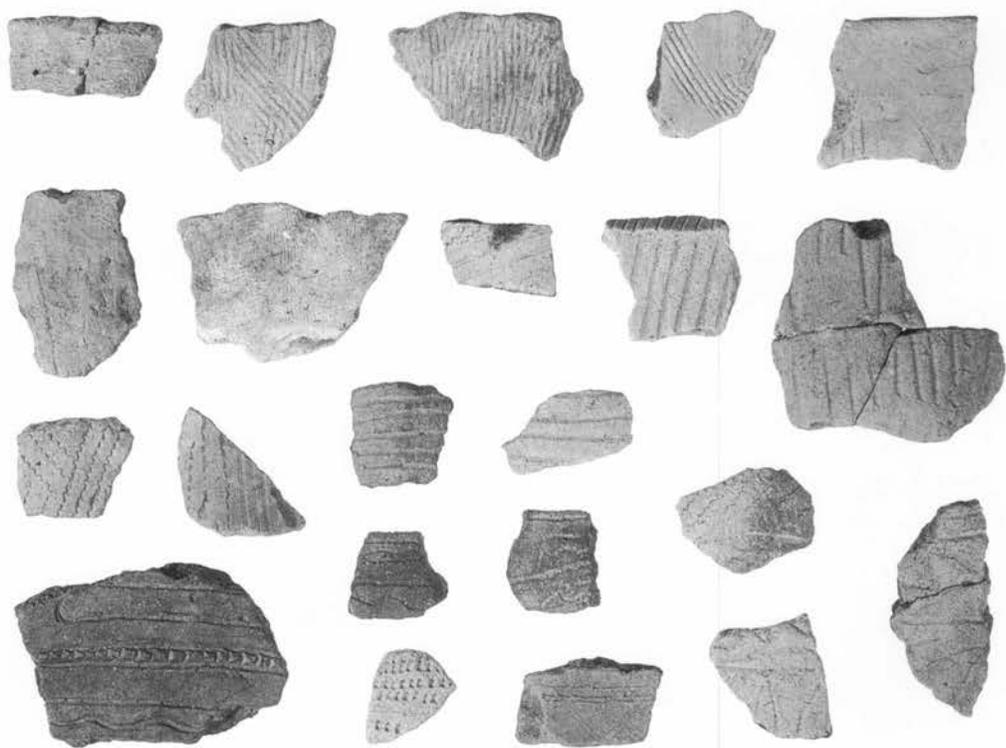
2 (114)



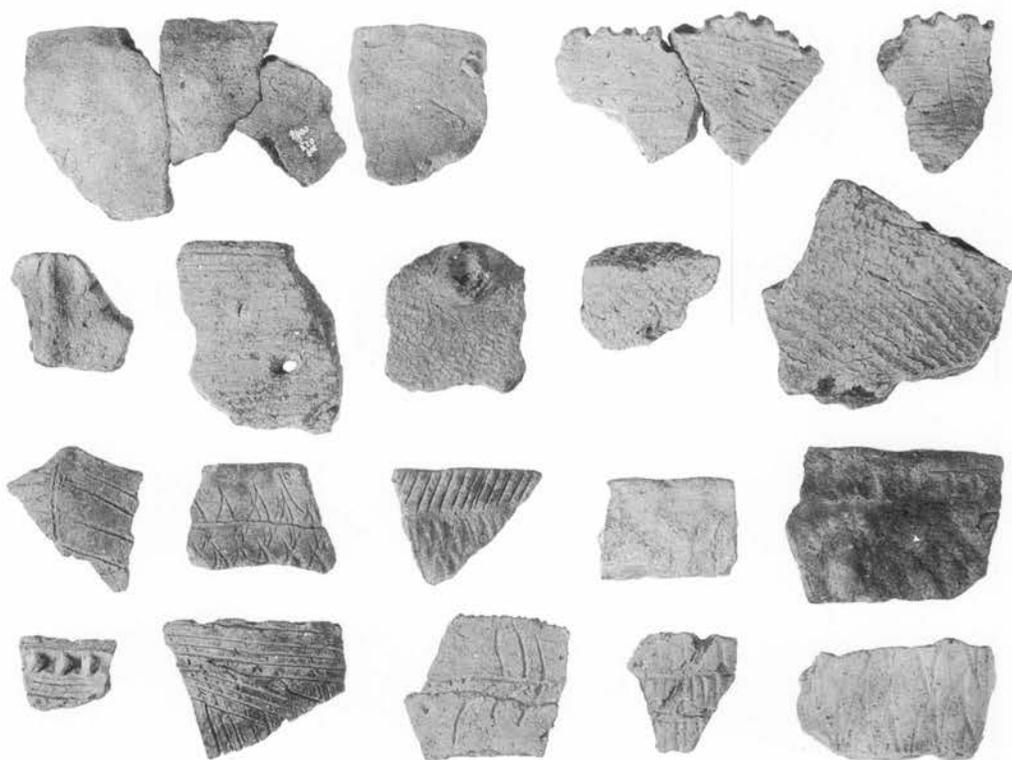
122号土坑出土土器



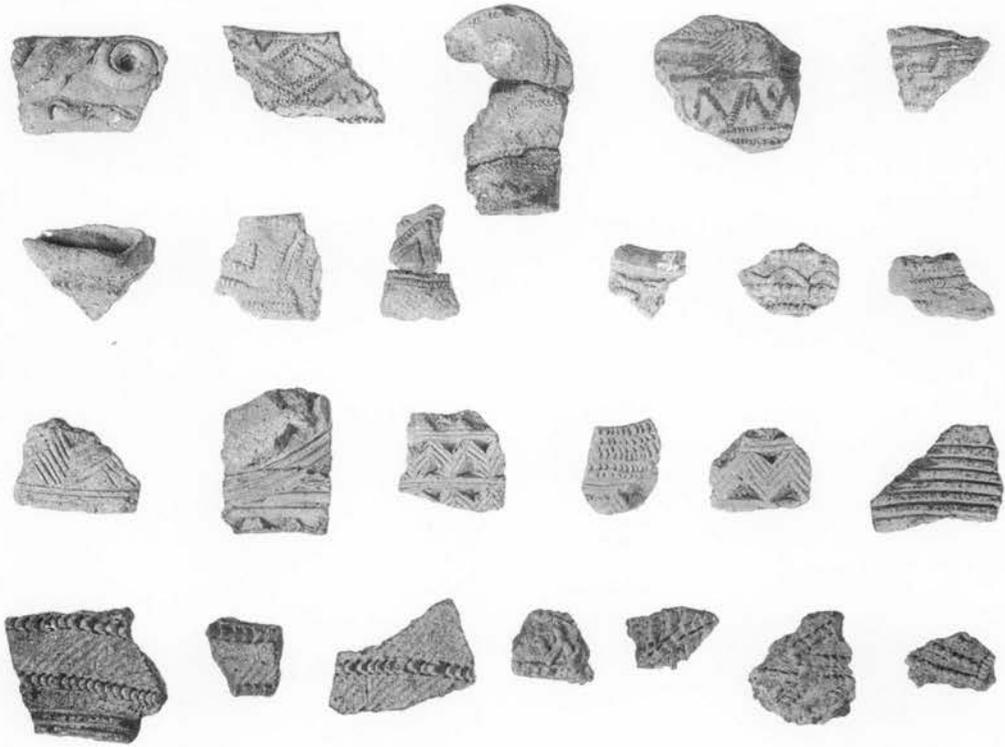
グリッド出土土器 (1) (第I群土器)



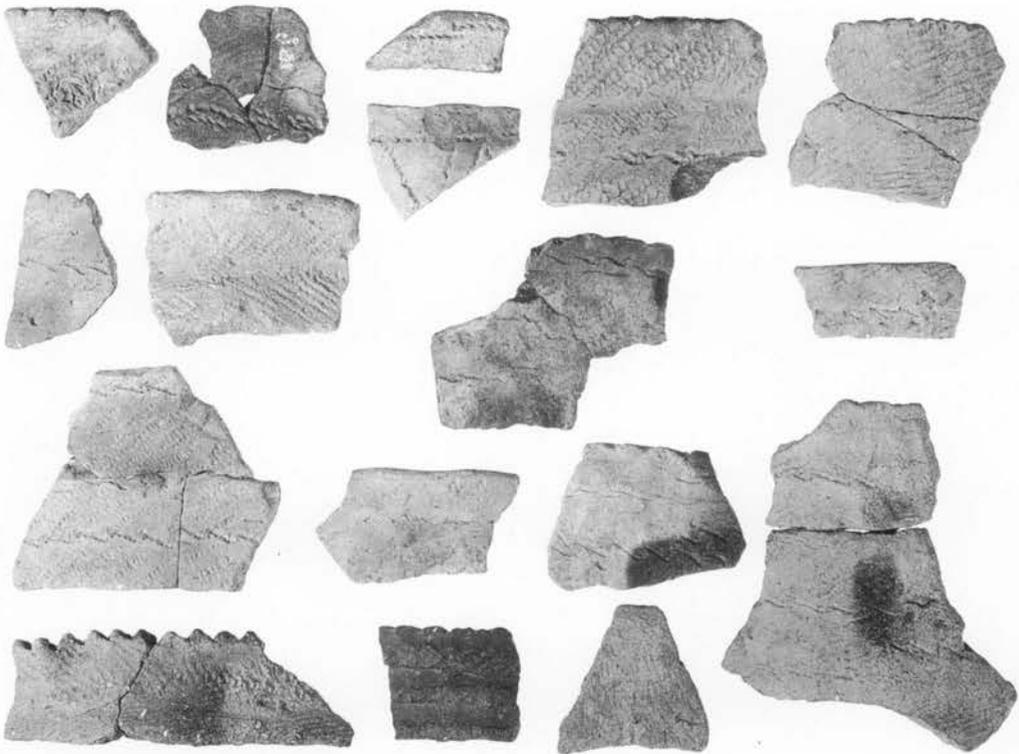
グリッド出土土器 (2) (第I群土器)



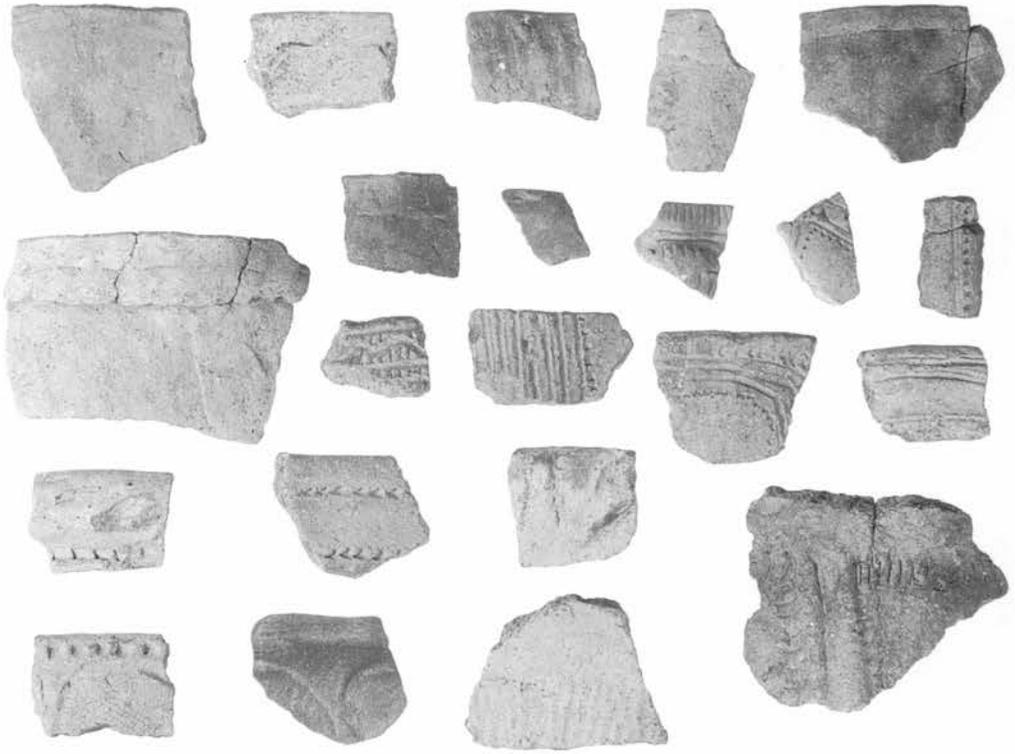
グリッド出土土器 (3) (第I・II群土器)



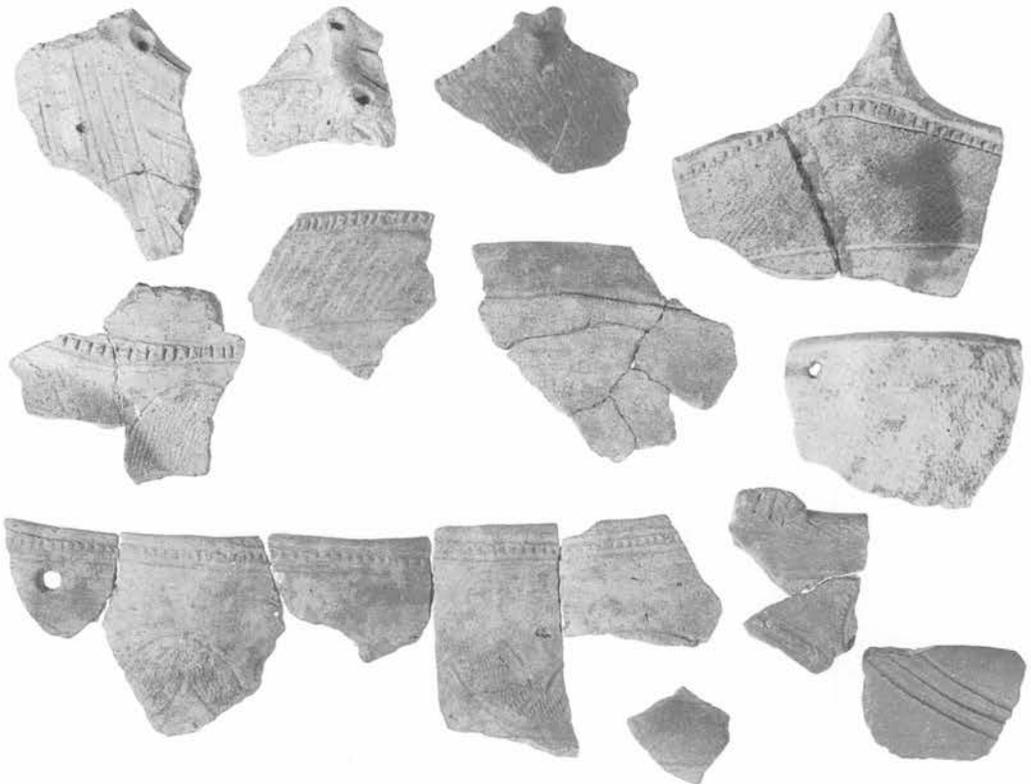
グリッド出土土器（4）（第Ⅱ群土器）



グリッド出土土器（5）（第Ⅲ群土器）

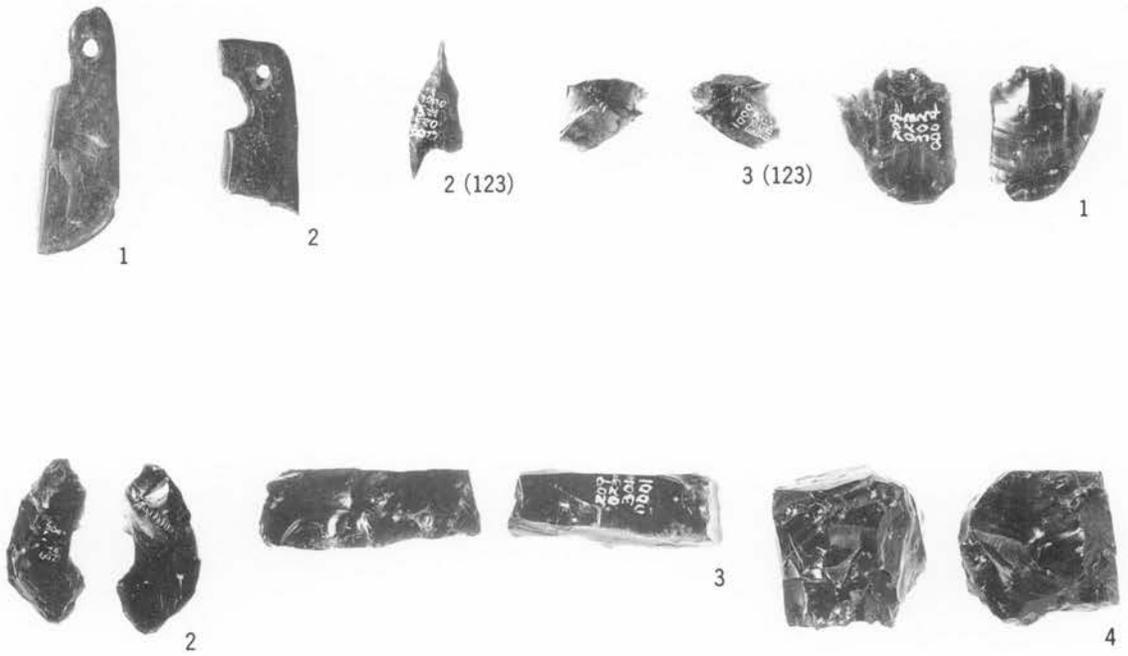


グリッド出土土器（6）（第Ⅲ・Ⅳ群土器）

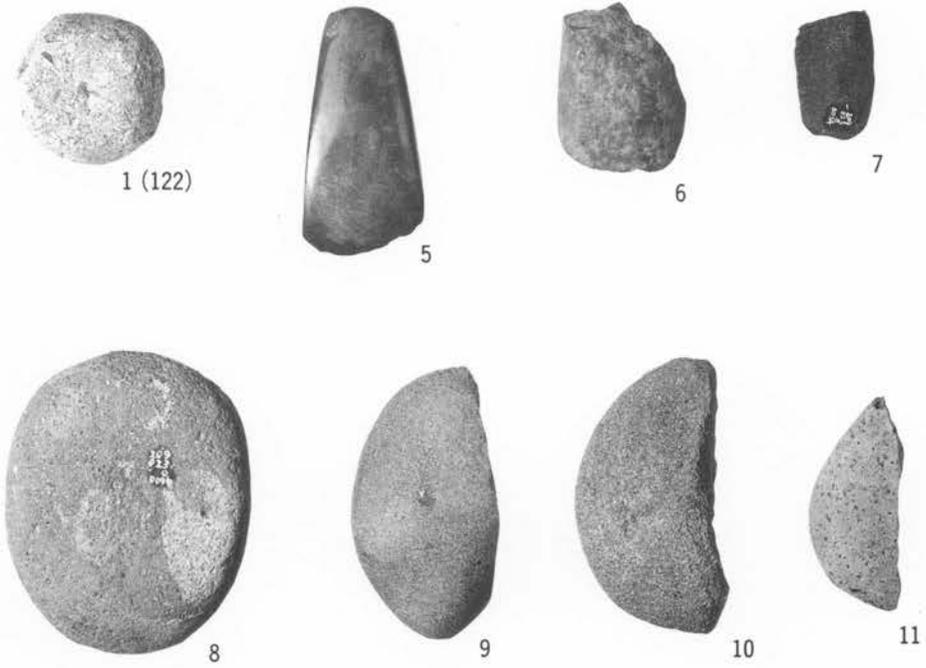


グリッド出土土器（7）（第Ⅴ群土器）

図版82 網原屋敷跡遺跡



土坑・グリッド出土石製品・石器 (1)



土坑・グリッド出土石器 (2)



1 (002)



2 (002)



3 (003)



4 (003)



5 (003)



6 (003)



3 (502)



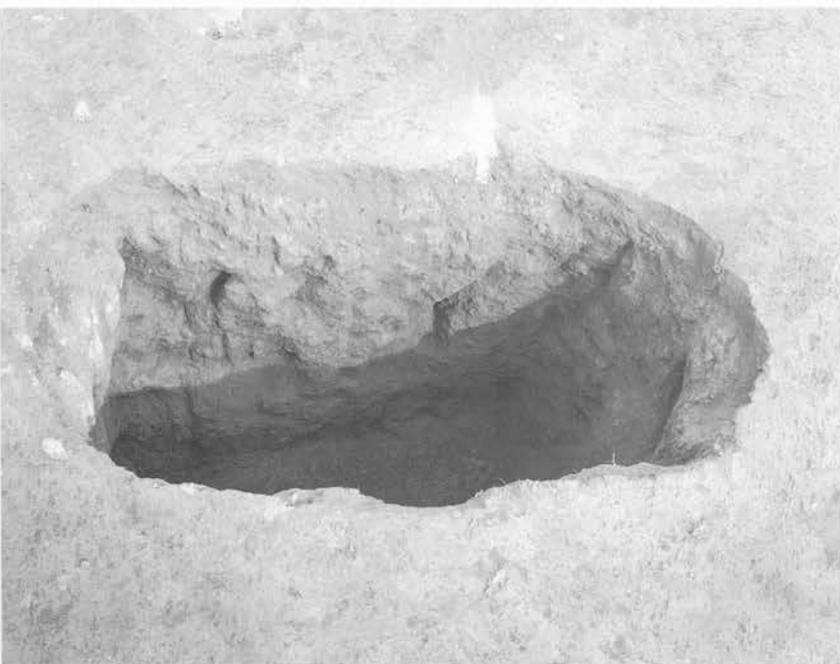
1 (溝)



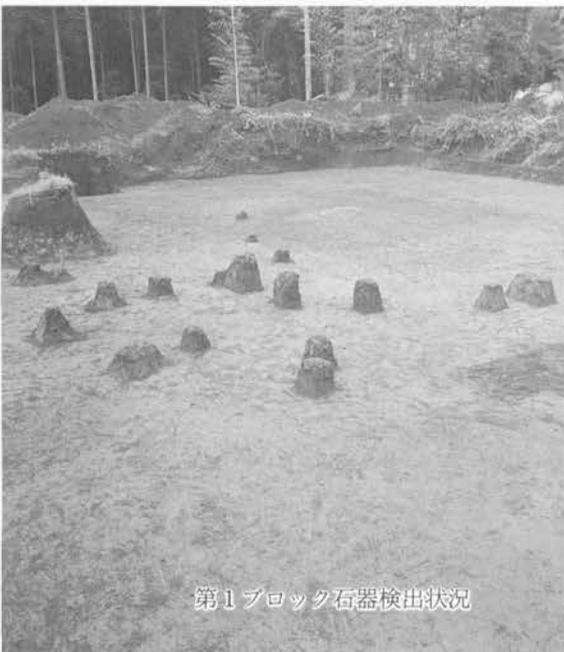
7 (402)



多田綱原遺跡調査前全景



101号土坑



第1ブロック石器検出状況



第2ブロック石器検出状況



表採資料



2



3



4



5

第1ブロック出土石器



1



2



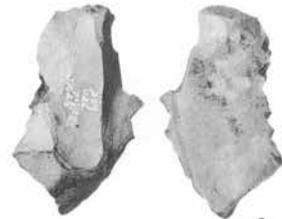
3



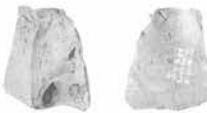
4



5



6



7



8



9



10



11

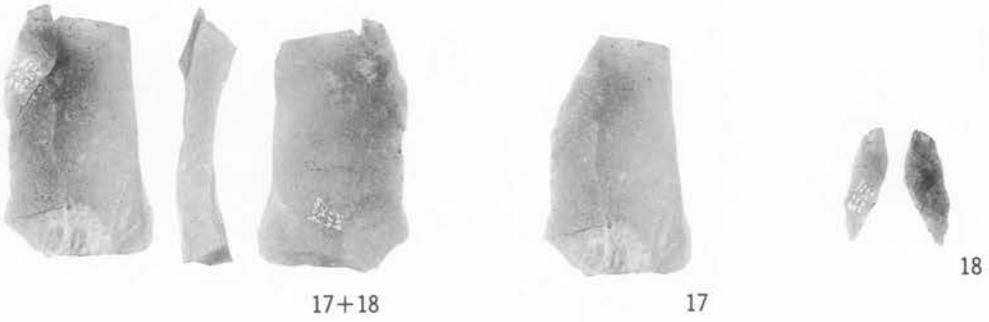
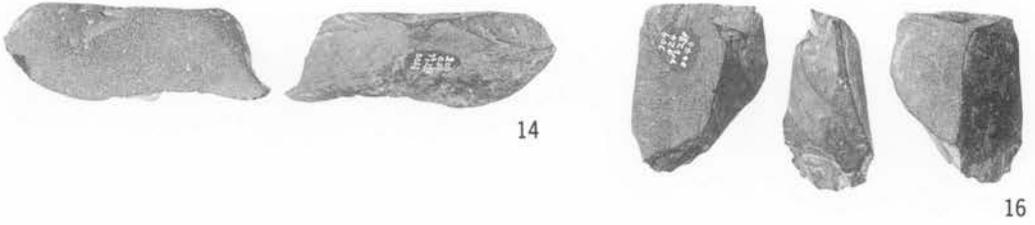
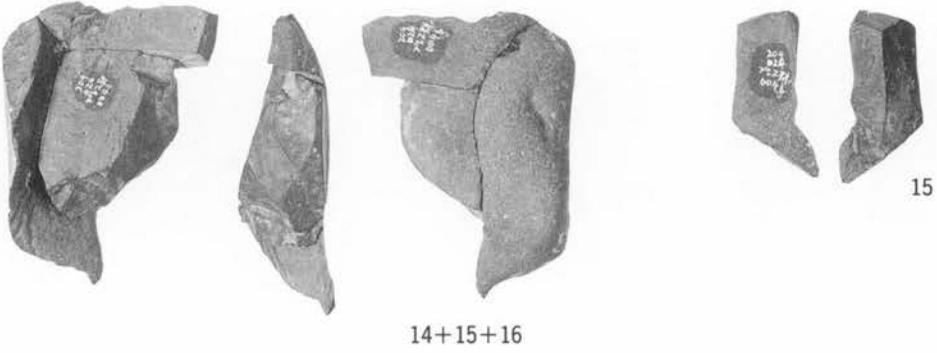


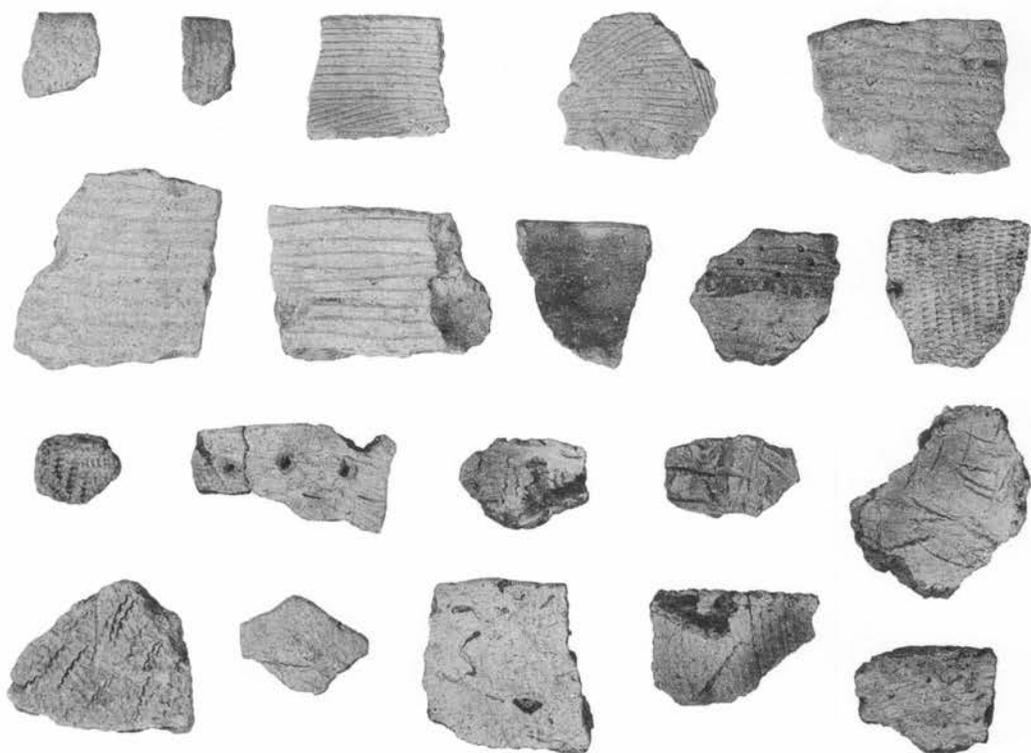
12



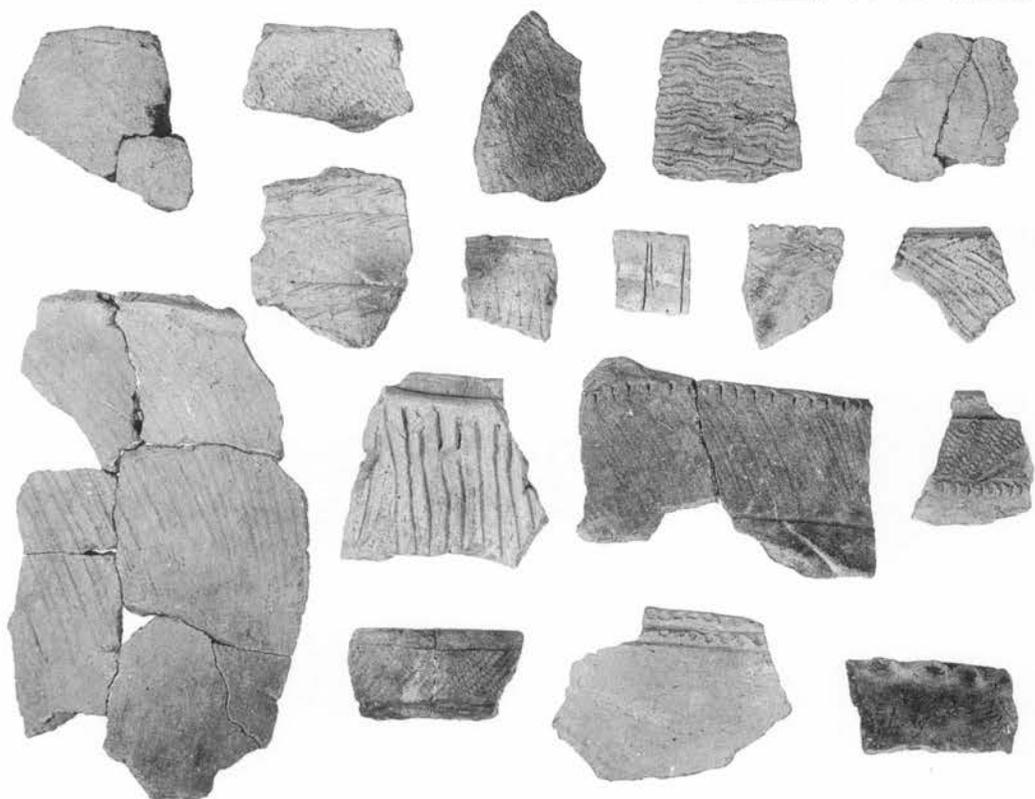
13

第2ブロック出土石器(1)





グリッド出土土器 (1) (第I群土器)



グリッド出土土器 (2) (第II・III・IV群土器)



出口遺跡調査前全景



第1文化層石器出土状況
(東から)



第1文化層焼土跡



第1文化層焼土跡土層断面



第1文化層第1・2・4ブロック石器出土状況（東から）



第1文化層第2ブロック石器出土状況（南から）



第1文化層第3・4・5ブロック石器出土状況（西から）

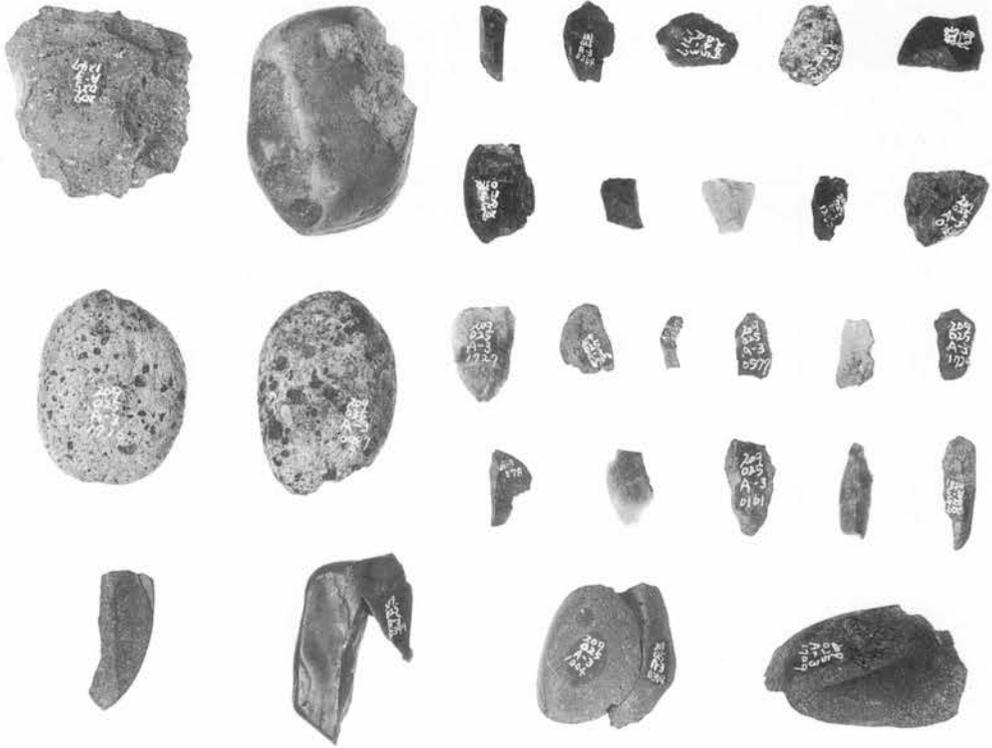
図版90 出口遺跡



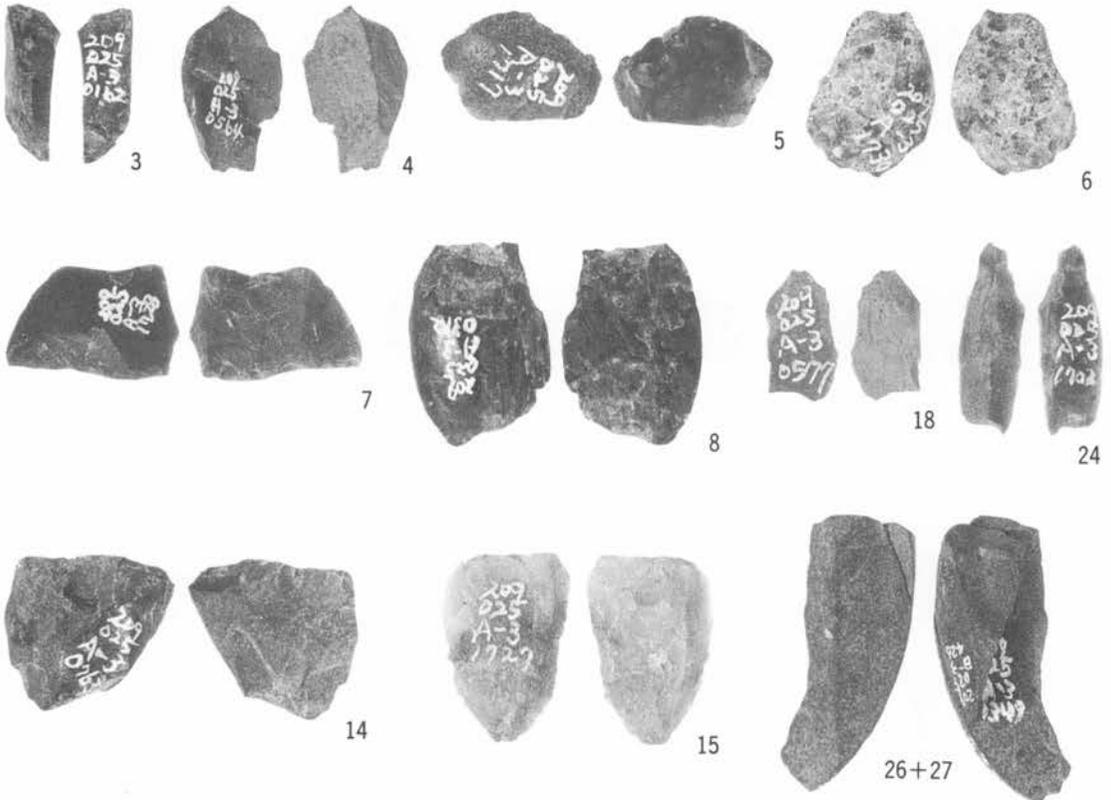
第2文化層石器出土状況（南から）



深掘り土層断面



第1ブロック出土石器 (1~33)



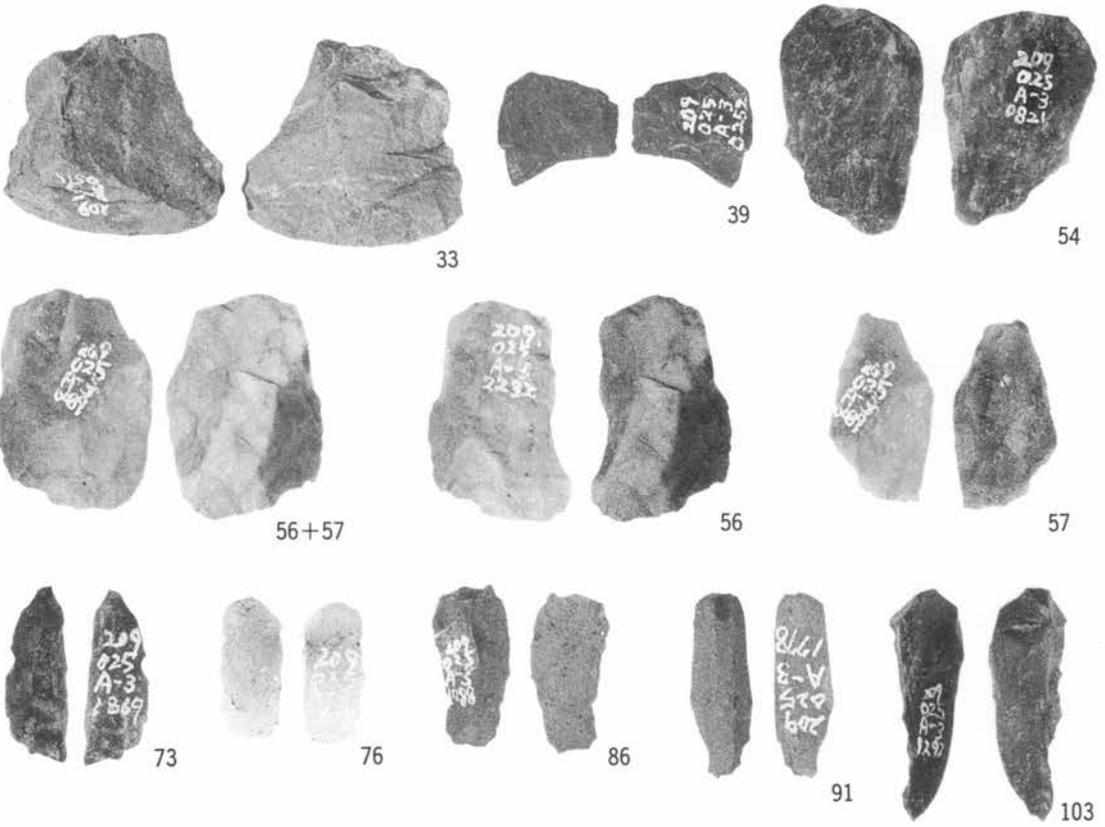
第1ブロック出土石器(1/1)



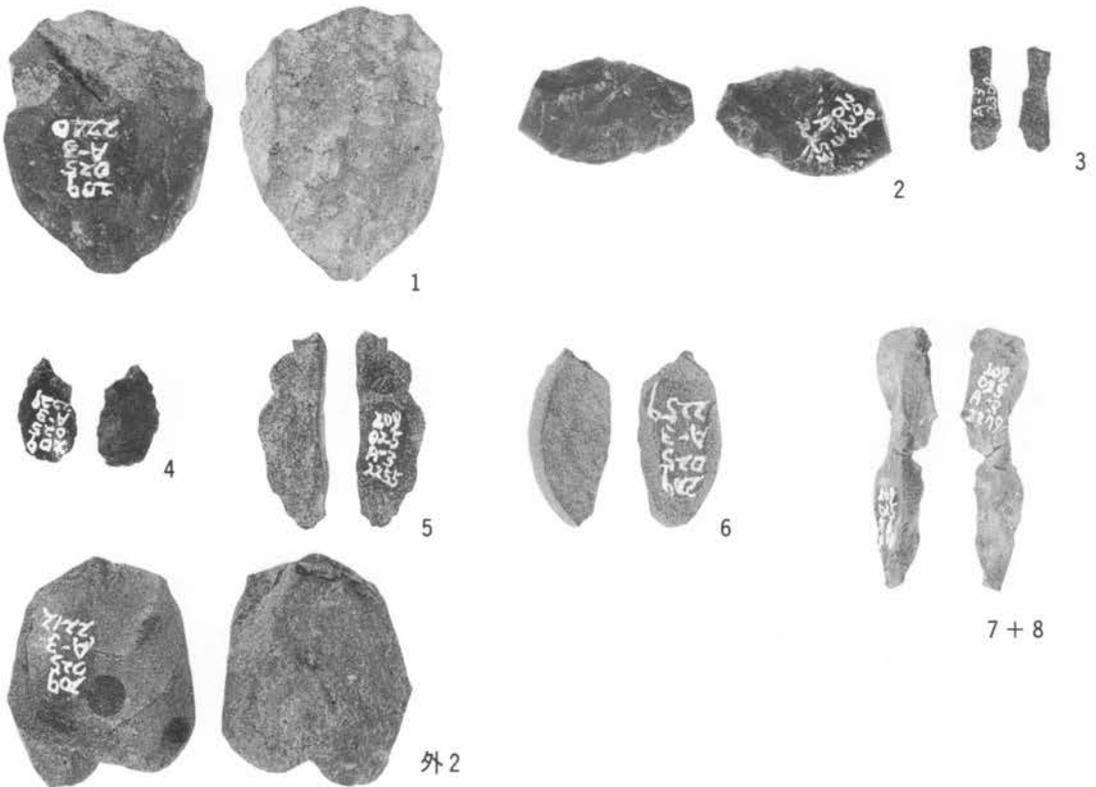
第2ブロック出土石器 (1~37)



第2ブロック出土石器 (38~103)



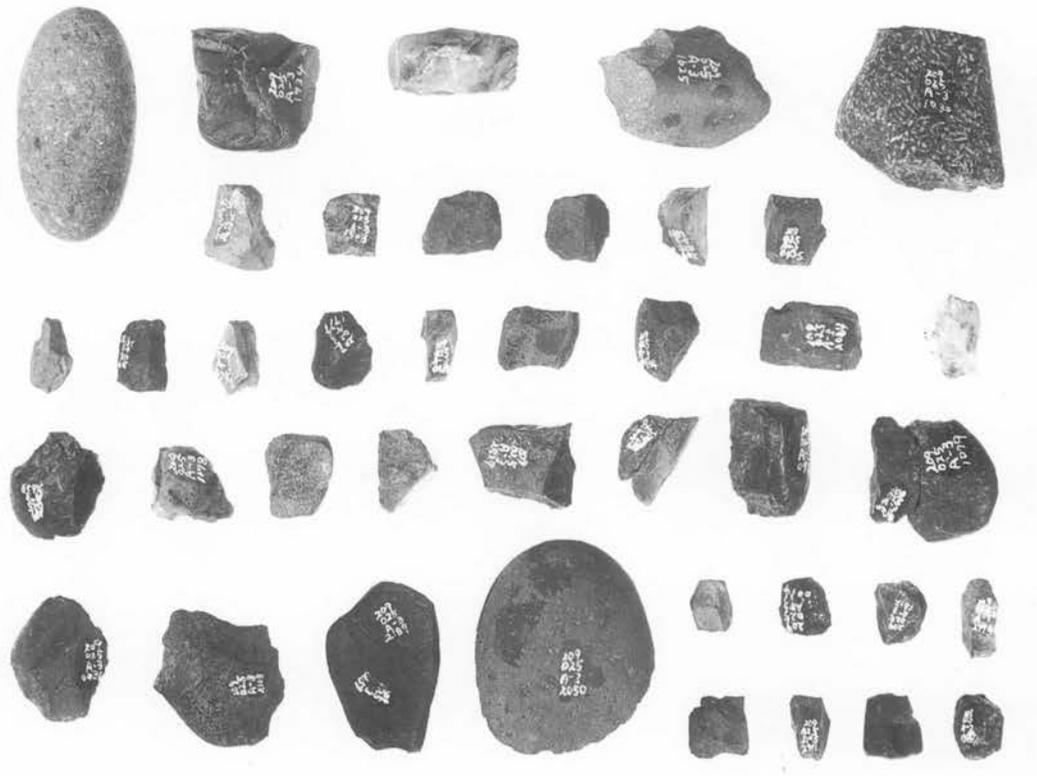
第2ブロック出土石器(1/1)



第3ブロック・ブロック外出土石器(1/1)



第4ブロック出土石器（1～27）



第5ブロック出土石器（1～45）

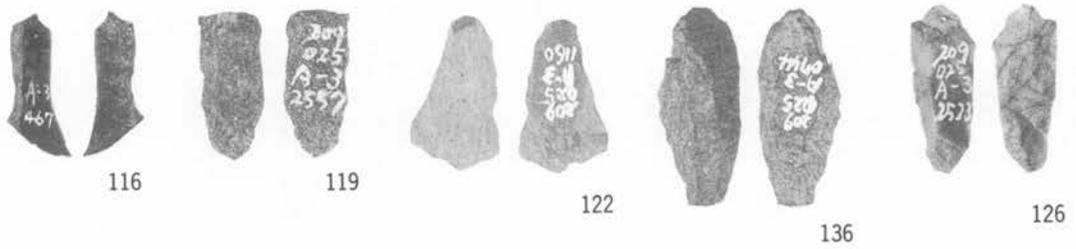
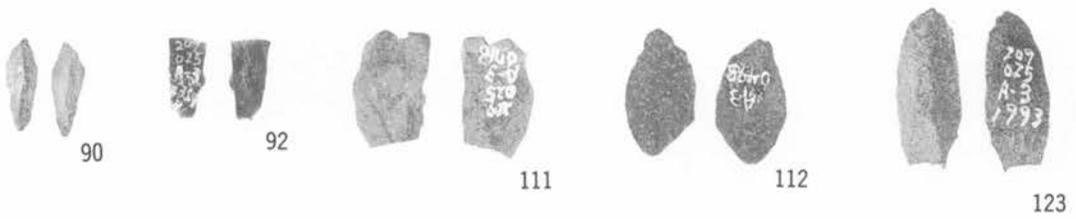


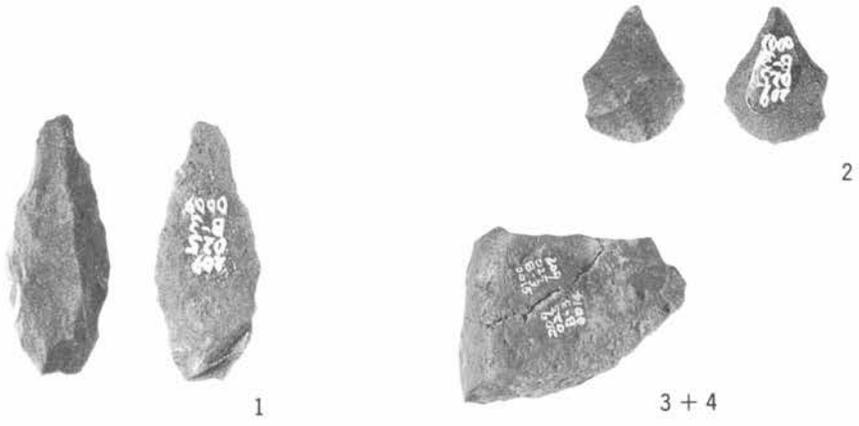
第5ブロック出土石器 (46~89)



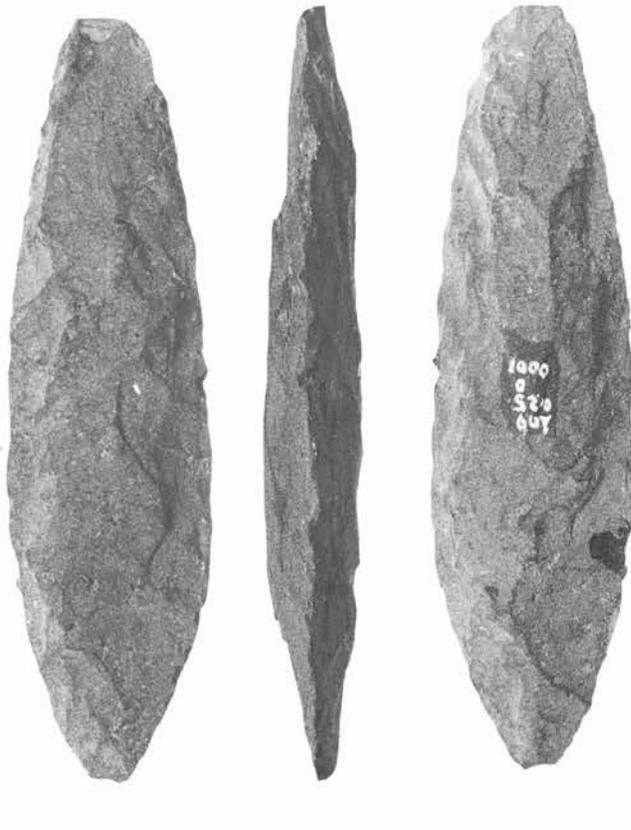
第5ブロック出土石器 (90~151)

図版96 出口遺跡





第6ブロック出土石器(1/1)



表採資料(1/1)

千葉県文化財センター調査報告第191集

東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VI(佐原地区3)

平成3年3月25日 印刷

平成3年3月30日 発行

発行 日本道路公団東京第一建設局
東京都港区虎ノ門1-18-1 03(3502)7431

編集 財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡無番地 0434(22)8811

印刷 株式会社 太陽堂印刷所
千葉市末広1-4-27 0472(22)1121
